改訂版

古の日本(倭)の歴史

第3部

弥生時代後期(V期) 50-300年

大己貴の国

(玉牆の内つ国、近畿政権、「見る銅鐸」の国、国都:伊勢遺跡)

2世紀初頭～2世紀末(倭国大乱終結)

邪馬台国(ニギハヤヒ(孝霊天皇)建国)

(ヤマト国、虚空見つ倭の国、国都:纒向遺跡)

2世紀末(倭国大乱終結)～4世紀初頭(崇神即位)

卑弥呼～台与

藤田泰太郎

第3部　概略

1

第3部　弥生時代後期・邪馬台国

1.　弥生時代後期（Ⅴ期）（50年～200年）

a. 邪馬台(ヤマト)国成立前史

『古事記』と『日本書紀』の内容としては、創作された物語である神話部分（神代）と史実に基づいて記されたという天皇の時代（人代）とに分けることができる。『日本書紀』には、「イザナギ・イザナミ時代に3国（浦安（うらやす）の国、細戈の千足る国（くわしほこのちだるくに）、磯輪上の秀真国（しわかみのほつまくに））があり、大国主（大己貴）は「玉牆の内つ国」（美称、大己貴の国（近畿政権））を建て、饒速日命（ニギハヤヒ）は「虚空見つ日本（倭）国」（邪馬台国（ヤマト国にあたる！）を建てた」とある。また、『記紀』の皇統譜と高麗が編纂した『三国史記』「新羅本記」の新羅王家系図との間には、不思議な一致がみられる。『日本書記』の紀年を、宝賀・貝田推論の崇神即位AD315年、神武～崇神10代（一代、4半世紀、海部氏勘注系図と比較し10代）として考証したところ、神武天皇からの人代の始まる時期は1世紀半ばとなった。『三国史記』「新羅本記」の新羅王家系図から類推される天孫降臨の時代は1世紀半ばと推察され、両者とも弥生時代後期の始めと一致する。文献的には後期は、『後漢書』「東夷伝」によれば、「57年、倭の奴国王が後漢の光武帝に使いを送り金印を賜る」との事積から始まる。また、「107年、倭国王師升が朝貢し、生口160人を献上した」とある。さらに、「桓帝・霊帝の治世の間（146 – 189年）、倭国は大いに乱れ、互いに攻め合い、何年も主がいなかった。卑弥呼という名の一人の女子が有り、鬼神道を用いてよく衆を妖しく惑わした。ここに於いて共に王に立てた。」とある。『魏志倭人伝』には、「女王国ではもともと男子を王としていたが70～80年を経て倭国が相争う状況となった。争乱は長く続いたが、邪馬台国の一人の女子を王とすることで国中が服した。名を卑弥呼という。」とある。

大国主は、弥生時代中期後半には出雲古国を中心し西日本全域にわたる、玉、銅と鉄の青銅器を祭器とする国々のネットワークを構築していた。紀元前後に伽耶出自の素戔嗚尊（スサノオ、須佐乃袁）が筑紫さらに出雲に侵攻し、出雲古国を滅ぼした（八岐大蛇退治に当たる？）。この時、銅鐸「聞く銅鐸」などの祭器の大量埋納があった（加茂岩倉・荒神谷遺跡）。スサノオに敗れた大国主はこのネットワークの拠点を出雲より近江に遷す。（アメノホヒとスサノオは出雲王朝を建てるが、この王朝の支配権は大国主系の出雲人に移り、その後4世紀半ばまで連綿と繁栄した。）スサノオは筑紫に戻り伊都国を拠点にして、北九州と中国地方西部を支配したと思われる。帥升（スイショウ）はスサノオの後継者か。

紀元前1世紀の近江には大国主のネットワークを構成する支国として浦安の国があった。紀元1世紀末頃には、近江を核とし近畿・東海一円を束ねる大己貴の国（玉牆の内つ国（たまがきのうちつくに））が建てられた。玉牆の内つ国は、『魏志倭人伝』に「もともと男子を王としていたが70～80年を経て倭国が相争う状況となった」とある「男子を王とする国」で、その国都は近江の伊勢遺跡と考えられ、巨大な「見る銅鐸」を祭器にしたと思われる。玉牆の内つ国は2世紀末まで続くが倭国大乱での大国主の敗退により瓦解した。この瓦解により多数の「見る銅鐸」が三上山麓の大岩山中腹に埋納された。

前漢の楽浪郡の設置に伴い、紀元前2世紀始めの頃には、伽耶（任那の前身）、筑紫、出雲と但馬・丹波を覆う、広大な経済ネットワークが成立していた。『三国史記』「新羅本紀」や『三国遺事』によれば、倭人の瓠公（ここう）が新羅の3王統（朴氏、昔氏と金氏）の全ての始祖伝説に関わったとされる。新羅の始祖王は、朴氏の赫居世居西干（ヒョッコセコソガン、BC57-AD4）である。第2代南海次次雄（スサング、AD4-24年）の倭人の娘婿が

2

第4代脱解王である。脱解王の二代前が南海次次雄（スサング）で、天孫（瓊瓊杵と火明）の二代前がスサノオである。南海次次雄がスサノオに当たると考えると、赫居世居西干が伊邪那岐（イザナギ）に当たる。朴氏の起源地は伽耶の伊西国とされる。伊西は古来イソと発音され、伊都イトとも訛る。従って、紀元前後にスサノオが筑紫に侵攻することにより、伊西国に因んで伊都国が建てられたか。スサノオの孫（天孫）、すなわち、天之忍穂耳命の子が、邇邇藝（ニニギ）と火明（ホアカリ、天火明、彦火明）に当たる。二人は倭人の兄弟で、ニニギが金官国初代首露王(42-199年)に当たり、ホアカリは倭の多婆那国（丹後を含む丹波？）で生まれた新羅王第4代脱解尼師今（脱解王、57-80年）に当たる。さらに、第8代阿達羅尼師今（154-184年）の御代、王子の延烏郎（天日槍（アメノヒボコ）か）が来倭、その時期（157年）はちょうど倭国大乱（146-189年）の真最中である。尚、神功皇后はアメノヒボコの6世孫で、アメノヒボコが倭国大乱の頃来倭したと考えると系図上妥当である。また、後漢「中平」（184-190年）と紀年銘の鉄剣が和珥（和邇）氏にわたる。卑弥呼は大国主の血筋を引く和邇氏の巫女で倭国大乱を鎮めた。尚、倭国大乱の前に、スサノオ（あるいはその子孫）が支配する伊都国が奴国を圧倒したと思われ、奴国の嫡流の和邇氏は丹後（あるいは若狭）から近江に遷ったと思われる。

『海部氏勘注系図』によると、ホアカリの3世孫の倭宿禰が大和進出を果たしたとある。天皇系図と勘注系図を比較すると、天皇系図の第4代懿徳天皇から第9代開化天皇までの系図とホアカリの3世孫倭宿禰から10世孫乎縫命まで（2代挿入）の系図がお互いに対応付けられる。従って、ホアカリは世代的に天皇系図の第1代神武天皇に当たる。皇統の系譜で日向三代が作為的に挿入されたと思われるので、ニニギが神武に当たる。ニニギの兄のホアカリ（彦火明）は新羅王家第4代脱解王で、第8代阿達羅尼師今の皇子（アメノヒボコ、第9代）は第6代孝安天皇の御代に来倭したことになる。孝安天皇の同母兄に和邇氏祖の天足彦国押人命がいる。

b. 倭面土（ヤマト）国の東遷と邪馬台（ヤマト）国（虚空見つ倭国（そらみつやまとのくに））の成立

紀元前後にスサノオが筑紫に侵攻して伊都国を建てた。スサノオはユダヤ系倭人と思われ、伊都国を倭面土（ヤマト、ヘブライ語か）国とも呼称した。このヤマト国はスサノオの後裔の饒速日（ニギハヤヒ）により石見から三次経由（スサノオルート）で吉備に遷った。さらに、2世紀半ばのニギハヤヒの東征（ヤマト国の東遷）により、近畿・中国・四国と中部地方西部を巻き込む倭国大乱が起った。この争いは「南朝鮮との鉄・銅・玉の交易により力を蓄えた、玉牆の内つ国を構成する近畿と中部地方西部の国々」と「吉備を中心とする瀬戸内海沿岸の国々」との間の大規模な内乱である。前者は大国主が率い少彦名（スクナビコナ）が加勢し、後者はニギハヤヒが瀬戸内海勢力をまとめ、天日槍（アメノヒボコ）と三島神が加勢した。アメノヒボコは、新羅より来倭して伯耆・因幡を侵し、但馬に達した。その後、当時吉備勢力の支配下にあったと思われる播磨を南下し、新たな日本海から瀬戸内に至る「鉄の道」を構築し、淡路島の五斗長垣内遺跡を中心に、鉄製の武器をニギハヤヒに供給した。また、新羅王家からのアメノヒボコの将来物（珠、比礼や鏡など）をニギハヤヒに預けた。

ニギハヤヒとアメノヒボコは瀬戸内海を東征し、摂津から大和川添いを遡り、桜井を拠点に大和と葛城を平定したと思われる。この大和侵攻では和邇氏も協働したと考える。その後、北上（木津川・宇治川を経由か）し、近江に侵攻した。ニギハヤヒと大国主は、近江湖南の伊勢遺跡にいたと思われる和邇氏の巫女で大国主の血筋の卑弥呼を共立し、纏向遺跡に遷した。ここに大和を核とし中国・四国・近畿に広がる倭面土（ヤマト）国ならぬ邪馬台（ヤマト）国が成立した。『日本書記』で、ニギハヤヒが称した「虚空見つ倭国」がこの邪馬台国に当たる。倭国大乱での敗退の結果、大国主は近江湖南より伊吹山を仰ぎ見る湖東・湖北に後退したが、近江東北部・美濃・尾張を中心とする玉牆の内つ国（大己貴の国）の後継国、狗奴国を建てた。スクナビコナはこの大乱で敗死したと思われる。大和を掌握したニギハヤヒは第7代孝霊天皇と同一人格と

第3部　概略

3

思われ、卑弥呼は孝霊天皇の養女となり、倭迹迹日百襲姫命と呼ばれるようになったと考える。また、ニギハヤヒは物部氏の祖であり、古来からの武器・武具庫である石上神宮を造営した。アメノヒボコは大乱の後、近江を経由して最終的に但馬に落ち着いた。

2．邪馬台国（2世紀末～3世紀末）

邪馬台国の実権はニギハヤヒ（孝霊天皇か）が握り、卑弥呼（倭迹迹日百襲姫命）が巫女として大型の銅鏡を用いた祭祀を執り行った。孝元天皇（孝霊天皇皇子で卑弥呼の異母弟）が実際の政務を担当した。『魏志倭人伝』に帯方郡から邪馬台国への旅程が記されている。筑紫の不弥国までのルートは確定している。「倭人伝」の編者・陳寿は、邪馬台（やまと）国が九州南方の台湾沖に位置すると誤解していたため、九州から南方に向かうを東方に向かうと正すと水行20日で投馬国（出雲国（出雲王朝、出雲東部が中心））に着く。次の水行10日で若狭（小浜湾）に着く。その後、小浜市神宮寺の「お水送り」のルートを取って琵琶湖経由で宇治川・木津川を経て、大和・纒向に向かう。このルートが水上交通が一般的であった当時としては一番蓋然性がある。本ルートは和邇氏が大和に進出したルートと思われる。

邪馬台国の都の纒向（遺跡）は、後世の藤原京に匹敵する広がりを見せる。この遺跡は、玉牆の内つ国（大己貴の国）の都で交通の要衝であった伊勢遺跡に比肩しうる要衝の地に位置する。従って、纒向は邪馬台国時代の政治の中核であるのみならず、当時の経済拠点の一つでもあった。（大和は辰砂（水銀朱）の産地）その証しは、各地から運び込まれた外来系土器の量の多さに示される。（外来系土器の出土数は全体の15～30%に達する。）また、大和では産しない染料として使われる紅花が出土する。尚、ニギハヤヒが率いる吉備勢力が邪馬台国成立に重要な役割を果たしたことは次のことから推察出来る。吉備型甕が発展した庄内式土器（纒向の卑弥呼の時代の標識土器、九州北部まで拡散）が纒向遺跡から出土すること、吉備の楯築や宮山の弥生墳丘墓から出土する特殊基台が纒向遺跡の古墳から出土すること、さらにこれらの弥生墳丘墓から出土する弧帯文石（毛糸の束をねじったような弧帯文様が刻まれた石）の文様が纒向遺跡から出土する弧文円板のものに酷似していることなどが上げられる。また、「孝霊伝承」と云われる孝霊天皇とその皇子（吉備津彦）を主人公とした一群の伝承があり、吉備国から南北に延ばした線上に沿って分布している。尚、倭迹迹日百襲姫命は吉備津彦の同母姉とされている。さらに、天羽々斬剣（布都御魂剣、十握剣）（スサノオが八岐大蛇を退治した剣）は吉備の石上布都魂神社にあったが、ニギハヤヒの東征で携行され、後に物部氏の総氏神の石上神宮に遷され、布都斯魂剣と呼ばれ祀られている。

邪馬台国は、狭義の邪馬台国と広義の邪馬台国とに分けられる。狭義の邪馬台国はニギハヤヒの建てた虚空見つ倭国で、瀬戸内海沿岸諸国、因幡、但馬、丹後、播磨、摂津、山城、若狭、近江（湖南・湖西）、大和および紀伊を含む。大国主は、狗奴国（近江（湖東・湖北）から美濃さらに

4

東山道、東海道や北陸道に広がり、大和、葛城や紀伊にも残存勢力）を建てる。尚、広義の邪馬台国は、狭義の邪馬台国と任那・伊都国連合とから成る。任那・伊都国連合とは任那（伽耶諸国）と伊都国を中心とする九州北部諸国とを併せて成立していた国家連合である。（任那は対馬に起こり、南朝鮮の倭人居住域を領した。）狭義の邪馬台国が成立後、ニギハヤヒ勢力は中・四国全域を支配下におき、さらに任那・伊都国連合を勢力下においた。伊都国は穴門を支配し、瀬戸内海への出入りを監視していた。邪馬台国は、伊都国に一大率を常駐させ、北部九州と南朝鮮の行政・外交的を支配していた。

大国主の玉牆の内つ国では、巨大な「見る銅鐸」を祭器にしていた。近江の伊勢遺跡の近くの三上山の山麓の大岩山古墳群（野洲市）から24個の大型銅鐸が出土した。これらは2世紀末の邪馬台国建国時、すなわち倭国大乱の終焉時に、近江湖南にニギハヤヒ勢力が侵入し、伊勢遺跡が解体されたときに埋納されたと思われる。邪馬台国は銅鐸に代わって、銅鏡を祭器にした。2世紀前半までの漢鏡(内行花文鏡など)の出土数が、九州に圧倒的に多いのに対し、2世紀後半からは九州で減少し、九州より東での出土数と分布域が急速に増大する。また、卑弥呼は魏と交流する前の3世紀初め、公孫氏から独占的に入手した画文帯神獣鏡を支配下の首長に分配したが、その分布は畿内に集中していた。北部九州の玄界灘沿岸や、狗奴国に属すると想定される濃尾平野にはほとんど分布していない。卑弥呼、魏に使い（難升米・都市牛利ら）をおくった。魏は卑弥呼に「親魏倭王」の金印綬を授けた。銅鏡（三角縁神獣鏡か）100枚を賜り、威信材として邪馬台国を構成する国々に配布した。その後、この鏡を倭国内で生産するようになり、邪馬台国を継ぐ崇神王朝（ヤマト王権）が安定するにつれ、三角縁神獣鏡の分布範囲は列島全域に飛躍的に拡大した。

邪馬台国の中核の大和では箸墓古墳に至る前方後円墳の発展がみられた。前方後円墳には、三角縁神獣鏡が副葬されることが多い。一方、狗奴国では近江北部を発祥の地と思われる前方後方墳が広がった。また、S字甕が近江東北部をふくむ狗奴国全域に広がっている。最近（2016年）、滋賀県の彦根市で纒向遺跡に次ぐ規模の邪馬台国時代の稲部遺跡が発掘された。稲部遺跡が狗奴国の都である可能性がある。

3．邪馬台国の終焉

『魏志倭人伝』に「卑弥呼が死去すると塚がつくられ、100人が殉葬された」とある。卑弥呼（倭迹迹日百襲姫命）が死去したのは249年の若干前と『梁書』は伝える。宮内庁が箸墓に倭迹迹日百襲姫が葬られたとしているように、卑弥呼が箸墓古墳に埋葬されたのであろう。『魏志倭人伝』には「男王（開化天王か）が立つが国中は不服で、交々相誅殺し、千余人が亡くなった。卑弥呼の宗女の臺（台）与を女王とすると国が収まる」とある。台与は、大国主系の狗奴国の近江の豊郷の出身と思われ、日子（彦）坐王（開化天皇皇子）の妃となった息長水依姫であろう。台与は掖邪狗らを魏に送る。また、台与は西晋(晋)に使いを送る（266年）。

第3部　概略

5

崇神東征（神武東征譚の主要部分）は、開化天皇の御代にあったと思われる。すなわち、吉野から宇陀に侵攻し大和へ侵入するところが要となる。崇神東征は、大彦が物部氏と結託して崇神天皇が率いる任那・伊都国勢力を大和に引き入れるクーデターであったと思われる。崇神軍は南朝鮮（半島南部）と北九州を束ねる任那・伊都国連合からの東征軍であり、中臣氏、大伴氏や久米氏、さらに隼人を同伴していた。崇神軍は大国主の子孫であるナガスネヒコ軍と激突する。この闘いで、物部氏を率いるウマシマジ（ニギハヤヒ（孝霊天皇）の子）がナガスネヒコを裏切り謀殺する。このため、ナガスネヒコ軍は一気に崩れ、崇神は大和侵入に成功する。崇神軍は　和邇氏を取り込み、大和の大国主勢力を一掃し、さらに葛城に向かい、賀茂氏を山城に追い落し、高倉下（ニギハヤヒの子の天香久山）を尾張に行かせた。また、出雲勢力を挟撃するため、ウマシマジを石見に派遣し物部神社を創建し、また天香久山を越後に行かせ弥彦神社を建てた。鎮魂祭は、皇居のほか、物部氏ゆかりの石上神宮、物部神社、弥彦神社で執り行われるが、この鎮魂祭は崇神東征で敗北した大国主を中心とする出雲勢力の鎮魂を図ったものであろう。この出雲の国譲り（葦原中国平定）で、最も功績のあった神は、中臣氏の祭神の建御雷で、それに続くのが物部氏の祭神の経津主神とされ、それぞれ鹿島神社と香取神社の軍神となっている。建御雷は、春日大社の祭神ともされ、飛鳥時代に権勢を振るった藤原氏（中臣氏の後継氏族）の出雲の国譲りでの活躍を顕示する目的で創作されたものであろう。

この崇神東征により、邪馬台国は終焉を迎え、ヤマト王権の崇神王朝（三輪王朝）が始まる。しかし、崇神東征の前から瀬戸内海勢力の崇神天皇らと日本海勢力を束ねる日子坐王との間に政権抗争があり、垂仁朝に瀬戸内海勢力が政権をほぼ掌握したと思われる。狗奴国は、景行朝の折最後の砦の伊吹山で日本武尊を敗死させたが、成務朝に滅びたと推察する。狗奴国の滅亡はヤマト王権が倭国全域を平定したことを意味する。『日本書紀』によれば、成務天皇は「国群に造長（国造のこと）を立て」たという。つまり、成務天皇の御代に列島の地域行政組織に「国」と「県」が設置されたのであり、国土統治の観点での大きな治績である。

倭国大乱および邪馬台国と狗奴国に関わる遺跡

－邪馬台国関連－

＜大和＞

・纒向遺跡（桜井市）（弥生時代末期から古墳時代前期にかけての集落遺跡、唐古・鍵遺跡の約10倍の規模、前方後円墳発祥の地、邪馬台国の中心地、卑弥呼の墓とされる箸墓古墳、掘立柱建物林立）

＜近江＞

・伊勢遺跡（守山市）（後期の国内最大級遺跡、巨大祭祀空間、遺跡終焉とともに邪馬台国が誕生）

・大岩山古墳群（野洲市）（大岩山中腹から24個の大型銅鐸出土、弥生時代後期の倭国大乱時に埋納か）

＜淡路・阿波＞

・五斗長垣内遺跡（淡路市）（弥生時代後期の国内最大規模の鉄器製造群落遺跡、鉄器製造施設跡が23棟、矢尻、鉄片、鑿（たがね）、切断された鉄細片など出土、倭国大乱・邪馬台国の時期に重なり、ニギハヤヒ勢力の軍事施設）

・舟木遺跡（淡路市舟木）（大型の鉄　器工房跡を確認。鉄製品57点と工房を含む竪穴建物跡4棟が出土。南西約6キロにある国内最大級の鉄器生産集落。

・矢野遺跡（徳島市）（銅鐸が集落の中心から出土、最新式の大型銅鐸、鉄鏃、砂鉄入り瓶の出土）

＜出雲・伯耆＞

・妻木晩田遺跡（大山町・米子市）（弥生後期の古代出雲の中心地．墳丘墓（四隅突出型墳丘墓含む）、高地性集落．鉄器（農工具・武器）、破鏡等出土）

・西谷墳墓群（出雲市)(四隅突出型墳丘墓、水銀朱や弥生式土が出土、出雲地方に「王」が存在、碧玉製管玉、ガラス小玉とコバルトブルーのガラス製勾玉、鉄剣、土器のなかには吉備の特殊器台・特殊壺や北陸地方の土器に似ているもの出土）

・青谷上寺地遺跡（鳥取市）（倭国大乱時の殺傷痕のある多数の人骨、邪馬台国初頭に消滅）

＜吉備＞

・楯築遺跡（倉敷市）（2世紀後半～3世紀前半の首長の双方中円墳、特殊器台・特殊壺の破片、鉄剣・首飾・ガラス玉・小管玉出土、日本最大級の弥生墳丘墓、弧帯文石と呼ばれる神石の伝世（弧帯文は纒向遺跡の弧文円板と共通）

－狗奴国関連－

＜近江・美濃＞

・稲部いなべ遺跡（彦根市）（纒向遺跡に次ぐ規模の大型建物跡、大規模鍛冶工房跡と大量の鉄関連遺物出土）

・荒尾南遺跡（大垣市）（弥生時代後期から古墳時代初期が盛期、銅鏃、儀杖などの威儀具、首長層の住まう遺跡、大型船が描かれた土器、土笛出土）

・林・藤島遺跡（福井市泉田町）（3世紀の翡翠の最先端工場、2000点の鉄器と1100点の鉄の工具、鍛冶（かじ）の跡が出土）

縄文時代前・中期

縄文時代後期

弥生時代早期

弥生時代前期

中国の古代史

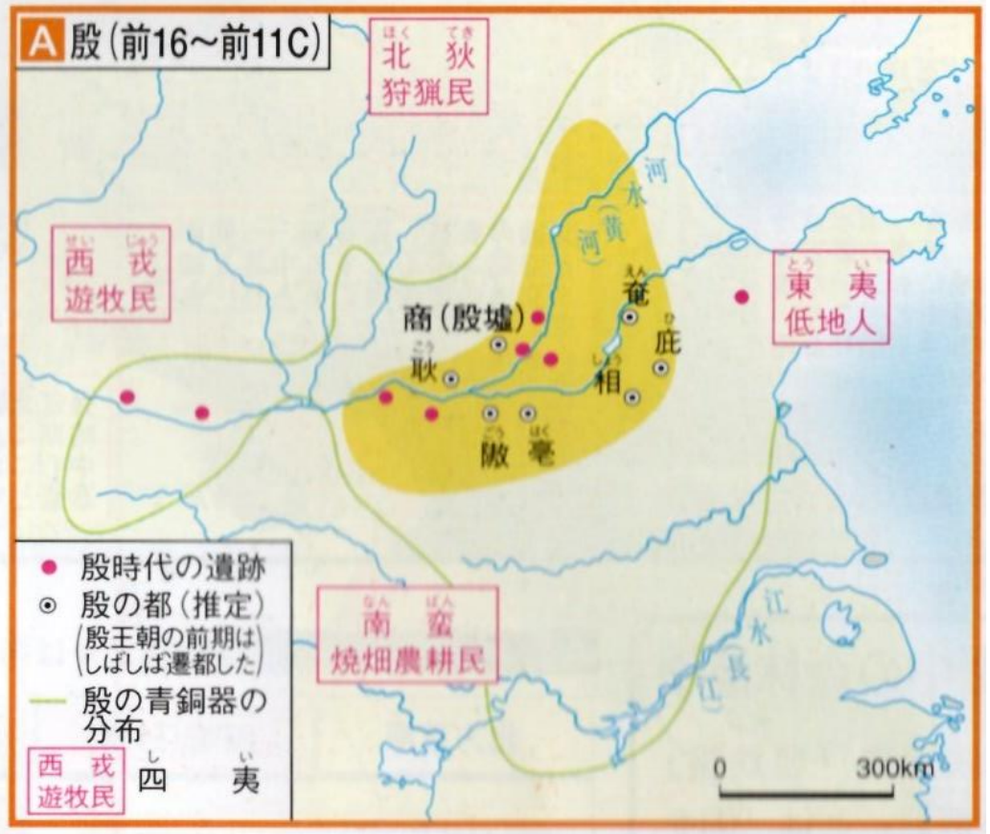
古代中国の変遷

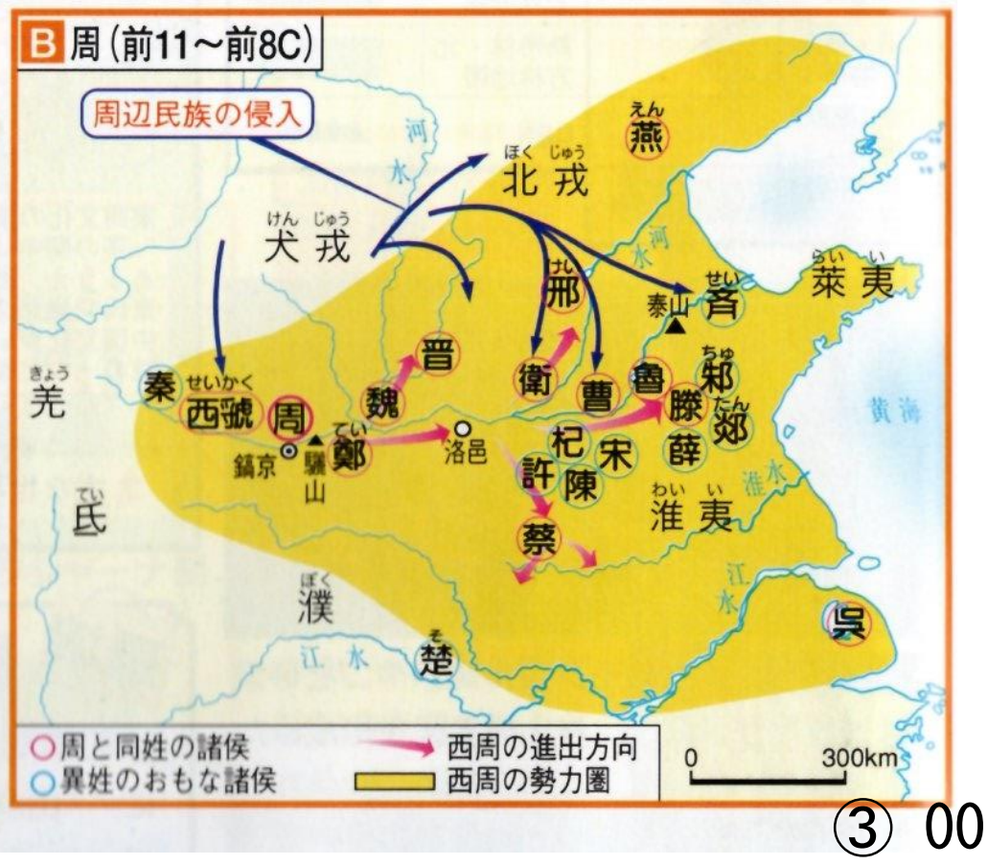
新石器時代	前5000ころ	仰韶（彩陶）文化（～前3000ころ）
		○黄河流域（河南省など）
		新石器文化はじまる
	前3000ころ	竜山（黒陶）文化（～前1500ころ）
殷（商）	前1600ころ	殷王朝の成立　神権政治
		○青銅器の使用
		○黄河～長江流域
	前1400ころ	殷（商）が殷墟（現 河南省安陽県小屯村）へ遷都
		○殷が再びさかんになる
		○甲骨文字（卜辞）
西周	前1027ころ	殷が滅び，周王朝がはじまる（西周）
		都―鎬京（～前770）
		○周の封建制度
	前 841	王が貴族に追放され，共伯和が執政
	前 827	周王朝復興
	前 771	犬戎の侵入により西周が滅亡
	前 770	洛邑に遷都→東周（～前256）

（最新世界史図説　タペストリー、帝国書林）

藤田

1 殷・周時代の変化





春秋の五覇

斉の桓公（前651，初の覇者　宰相管仲）
晋の文公（前632）
楚の荘王
呉の夫差（または闔閭）
越の勾践

呉・越を除いて宋の襄公・秦の穆公とする説あり

春秋戦国 群雄割拠時代

春秋

前552ころ	孔子が魯国に生まれる（～前479） ○諸子百家　学術思想の発達
前453	晋の韓・魏・趙三氏が晋を三分し自立
前403	韓・魏・趙が諸侯となる →戦国時代（～前221）

戦国の七雄

韓・魏・趙・楚・燕・斉・秦

戦国

	○このころ，鉄製農具・牛耕はじまる
前333	蘇秦が秦を除く六国の同盟に成功する（合従策）
前311	秦の宰相となった張儀が他国との同盟（連衡策）により合従策を破る
前221	秦が中国統一を実現

（最新世界史図説　タペストリー、帝国書林）

春秋・戦国時代 / 秦

国内の主要事項		対外関係	
前8C	秦が成立		
623	秦の穆公が西方で覇を唱える		
359	秦の孝公に登用された商鞅(法家)が**変法をはじめる** **郡県制**・什伍の制(隣保制)を実施		
350	**秦が咸陽に遷都**		
249	呂不韋が秦の宰相となる	256	秦が東周を滅ぼす
	始皇帝(位前221～210)		
221	中国をはじめて統一　都:咸陽 **皇帝**の称号を創始,阿房宮造営 **郡県制**を全国で実施	221	斉を滅ぼす
		215	蒙恬が匈奴を討伐 →**万里の長城**の修築を開始
220	天下巡幸を行う(～210,計5回)	214	南海郡など3郡を設置
213～212	**焚書・坑儒**(宰相李斯の建言)		
209	**陳勝・呉広の乱**(～208)→農民反乱		
206	秦が滅亡→垓下の戦い(202)→**前漢が成立**		

秦

2 秦の対外政策と衰退

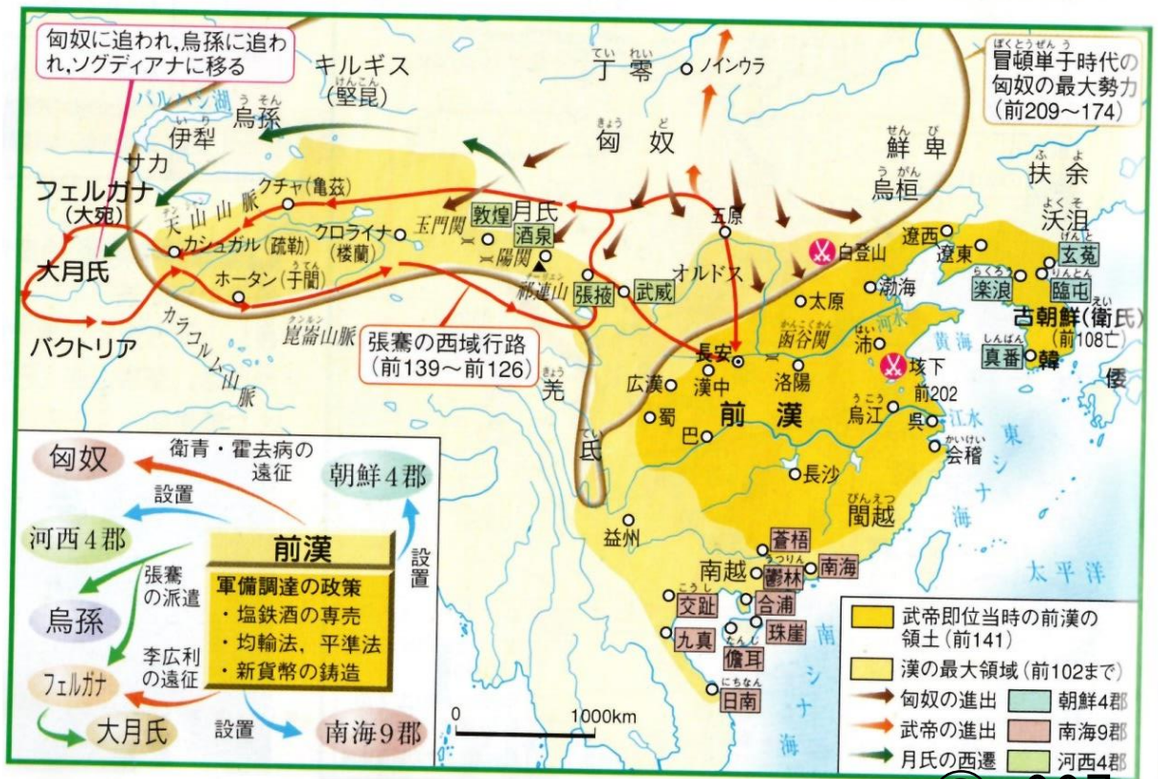
漢の変遷

国内の主要事項		対外関係	
紀元前			
	劉邦(高祖) 位前202～前195		
202	垓下の戦い(項羽を破る) →前漢の成立　都:長安	200	白登山の戦い →**匈奴**の**冒頓単于**に敗北
196	**郡国制**を実施 →郡県制と封建制を併用		
154	呉楚七国の乱→諸侯王の反乱を鎮圧		
	武帝　位前141～前87		
	○中央集権制が確立(実質的に郡県制)	139	**張騫**を**大月氏**に派遣
136	**儒学**を官学とする(**董仲舒**の献策で**五経博士**を設置)	129	**衛青**を匈奴討伐に派遣
		121	**霍去病**を匈奴討伐に派遣 →**敦煌郡**など**河西4郡**を設置
134	**郷挙里選**を実施→**豪族**の台頭		
119	**塩・鉄・酒の専売制**　五銖銭(銅銭)鋳造	111	南越を滅ぼす →**南海郡など9郡**を設置
115	**均輸法**を実施	108	**古朝鮮(衛氏)**を滅ぼす →楽浪郡など**朝鮮4郡**を設置
110	**平準法**を実施		
97	**司馬遷**が『**史記**』(紀伝体)を完成	104	**李広利**を**フェルガナ(大宛)**に派遣→**汗血馬**を獲得
		54	匈奴が東西に分裂、東匈奴は前漢に服属
7	限田法を発布←大土地所有者の反発で実施されず	33	**王昭君**が東匈奴の呼韓邪単于に降嫁

前

漢

2 前漢の対外政策



(最新世界史図説　タペストリー、帝国書林)

新

王莽　位8～23

後8　前漢滅亡→**王莽**が**新**建国　○匈奴の征討に失敗
（周の社会を理想とした復古主義を強行→農民・豪族が不満）
18　**赤眉の乱**（農民反乱　～27）

後漢

光武帝（劉秀）位25～57

25　**後漢**建国　都:洛陽
27　赤眉の乱（18～）を鎮圧
57　倭（日本）の奴国王の使者に「漢委奴国王」印を授ける

105　宦官の**蔡倫**が**製紙法**を改良し，紙を和帝に献上
166　**党錮の禁**（166・169）→官僚（党人）が宦官に敗北
184　**黄巾の乱→太平道**の**張角**が指導した農民反乱
208　**赤壁の戦い**→天下三分の形勢が決まる
220　後漢が滅亡→魏が成立
91　**班超**が**西域都護**に任命される　西域都護府をクチャ（亀茲）に設置
97　班超が部下の**甘英**を大秦国（ローマ帝国）に派遣
166　**大秦国王安敦**の使者が日南に到着

（最新世界史図説　タペストリー、帝国書林）

中国史書と倭

書　名	撰　者	記　事	備　考
漢書地理志	班固（後漢，32～92）	紀元前後の小国家群立	
後漢書東夷伝	范曄（宋，398～445）	57，107の奴国・倭国の遣使	漢委奴国王印
魏志倭人伝	陳寿（晋，233～297）	3世紀前の邪馬台国，卑弥呼	女王，連合国家
晋書倭人伝	房玄齢（唐，578～648）	413の倭の遣使	
宋書倭国伝	沈約（梁，441～513）	421～478の倭五王の遣使	倭王武上表文
南斉書倭国伝	蕭子顕（梁，487～537）	479の倭王武の遣使	
梁書倭伝	姚思廉（唐，？～637）	502の倭王武の遣使	
隋書倭国伝	魏徴（唐，580～643）	600～614の遣隋使	厩戸王（聖徳太子）が派遣

（いっきに学び直す日本史　古代・中世・近世　教養編、安藤）

4 後漢の対外政策

A 三国時代（3C前半）

朝鮮史

藤田

燕

燕（えん、紀元前1100年頃 - 紀元前222年）は、中国に周代、春秋時代、戦国時代にわたって存在した国。春秋十二列国の一つ、また戦国七雄の一つ。河北省北部、現在の北京を中心とする土地を支配した。首都は薊（けい）で、現在の北京にあたる。燕都・薊城の遺蹟は北京市房山区に所在する。

燕の建国

燕の始祖は周建国の元勲である召公奭である。しかし周代初期の燕についてはわからないことが多い。召公の一族ははじめ、山東半島の「奄」に封じられたが、成王の時、現在の北京近辺に移った。このため国名を燕（えん）といった（奄＝燕、エンと読む）。またこの時、現地にあった韓侯国が入れ替わりに現在の陝西省に移った。燕に残った韓の旧住民は多く「韓氏」を名乗った。西周時代、燕の東方に「箕侯」という都市国家があり、燕の属国であったが、春秋時代を待たずに北方遊牧民に滅ぼされ、燕に亡命した住民が多かったらしい。春秋時代以降、燕の士大夫層に「韓」や「箕」を氏とする者がみられる。

春秋時代

春秋時代の燕については、史書に記述が極めて乏しい。北方の山戎に攻められた際、当時の君主・荘公は隣国の覇者・斉の桓公に援軍を乞い、山戎軍を撃退したことがあった（紀元前664年/紀元前663年）。この戦いの後、桓公は、一部自領を切り取って燕に授けたという。

戦国時代

戦国時代に入り、紀元前334年の段階で『史記』蘇秦列伝によると「東に朝鮮・遼東、北に林胡・楼煩、西に雲中・九原、南に呼沱・易水がある」といわれており、すでに広大な領域を支配していたことがわかる。紀元前323年に王（左飛）を名乗るようになった。第2代の王の噲は宰相の子之を盲信し、堯舜に倣うと言って禅譲を行い、これにより国内は騒乱状態となった（紀元前315年）。翌年ここに斉（田斉）が付けこみ、兵を出して侵攻し、全土を併合したため一時的に滅亡状態となった。紀元前313年、公子職が子之を倒して、斉軍も撤退したので、公子職は即位して昭王となった。

燕の勃興

昭王（前586年 - 574年）は、一時とはいえ燕を亡国に追い込んだ斉を深く憎み、いつか復讐したいと願っていた。しかし当時の斉は秦と並んで最強国であり、燕の国力では非常に難しい問題であった。昭王は人材を集めることを願い、どうしたら人材が来てくれるかを郭隗に尋ねた。郭隗は「死んだ馬の骨を買う」の故事を喩えとして話し「まず私を優遇してください。さすれば郭隗程度でもあのようにしてくれるのだから、もっと優れた人物はもっと優遇してくれるに違いないと思って人材が集まってきます。」と答えた。郭隗の言う通りに、燕には名将楽毅・蘇秦の弟蘇代など、続々と人材が集まってきた。また、時期は不明であるが、昭王は不老不死の仙人を求めて東方の海上に人を派遣したという。これらの人材を使い、昭王は燕の改革・再建を進めた。

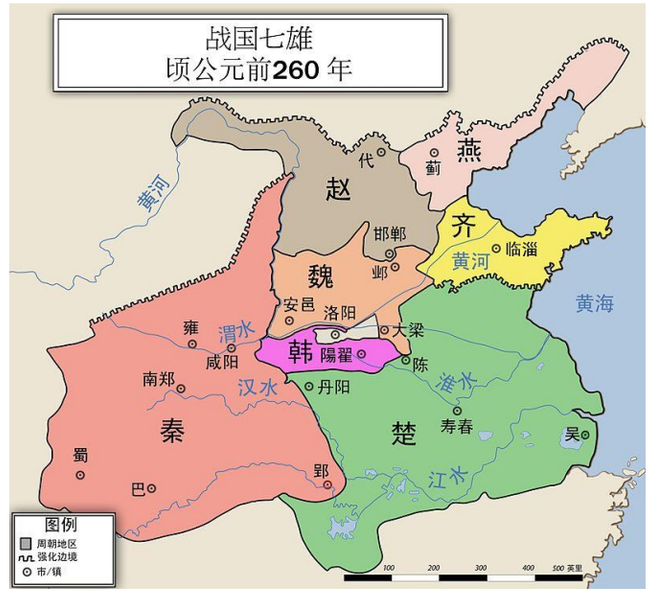
この頃、将軍の秦開を派遣して、北方遊牧民族の東胡を討った。新領土に郡県制をしき、上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東の5郡を設置し、『魏略』によると秦開に造陽から襄平までの東西二千里にわたる「燕の長城」を築かせたという。秦開はさらに満潘汗（平安北道博川）に至って朝鮮との境を定めた。考古学的にはこの5郡の地が燕に編入されたのは、これより約200年ほど前のことであることが判明しており、歴史書が語る年代はあくまで郡県制施行年代や長城建設年代であって、それを領土獲得年代と誤って記述してしまったものと考えられる。

燕の極盛

十分に力をつけた燕は、斉包囲網を形成し、紀元前285年/紀元前284年に楽毅率いる5ヶ国連合軍50万が斉軍20万を撃破し、更に楽毅は斉の首都臨淄を陥落させ、莒（きょ）と即墨を除く斉の都市を尽く占領した（この頃、燕は「朝鮮」を更に討って朝鮮半島北部も領有した。また、南部の「真番」を略属させ、所々に要塞を築き官吏を派遣して治めていた）。以後約5年間、燕は現在の河北省・遼寧省のみならず朝鮮半島と山東半島のほとんどを併合していたことになり、『山海経』の「鉅燕」（巨大なる燕）、『史記』の「全燕」（完全なる燕）とはこの時の燕の状態をさすとの説もある。一躍、表舞台に躍り出たと思われた燕だが、昭王が死に、子の恵王が即位すると楽毅を疑って趙に走らせてしまった。紀元前279年、占領していた斉は楽毅がいなくなると田単によって取り返され、山東半島の領土は失った（しかし昭王の置いた5郡と朝鮮半島はなお保持していた）。

燕の滅亡

その後は秦が圧倒的に強勢となるが、秦との国境を接していない燕はその圧力を感じることなく、むしろ隣接する斉や趙の圧力に対抗するために秦と結ぶこともあった。ところが、紀元前228年に燕と秦の間の緩衝国的な役割を果たしていた趙が秦によって滅ぼされると、燕は直接秦の圧力を感じることになった。この状況を覆そうと太子丹は、秦王政に対して荊軻という刺客を送ったが失敗した。激怒した秦王政に燕は攻められて、首都は陥落した（紀元前226年）。燕王喜は遼東に逃れたが、紀元前222年に秦の将軍の王賁に攻められて王が捕虜となり、燕は滅んだ。督亢の地（燕の本土）は秦の広陽郡となり、昭王が置いた5郡と合わせて秦の統治下では6郡となった。朝鮮半島の燕の諸要塞は「上郭」と「下郭」の2ヶ所にまとめられたが、遼東郡に属することになり、前代と同様、官吏を派遣して治められた。（Wikipedia抜粋）



（Wikipedia）

弥生時代中期

衛氏朝鮮（えいしちょうせん 紀元前195年？ - 紀元前108年）は、その実在について論争のない朝鮮半島の最初の国家である。中国の燕に出自を持つ中国人亡命者である衛満（『史記』及び『漢書』には名のみ「満」と記す。姓を姓を「衛」と記すのは『三国志』以降）が今の朝鮮半島北部に立てたとされる。

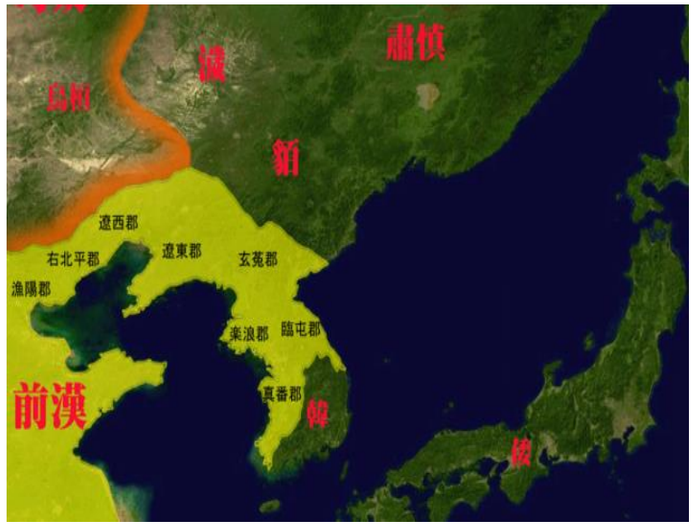
前史　朝鮮半島では、中国から朝鮮半島西岸を経由して日本列島へ到る交易路沿いに、華僑商人の寄港地が都市へと成長していく現象がみられた。（戦国時代）、紀元前334年の段階で燕はすでに「朝鮮」（朝鮮半島北部）に隣接していた。紀元前284年、燕は自国内に郡制を設け上谷から遼東までを5郡とし、東胡を防ぐためその北に東西二千里の長城を築いたが、『史記』によれば、この頃（燕の全盛期）、朝鮮は燕の配下に入っていた（朝鮮と真番（朝鮮半島南部）を「略属」させ、要地には砦を築き官吏を駐在させた）。また、中国商人の権益を保護していた。秦代（燕が秦に滅ぼされて後）は秦の属領となり、燕の時代に築かれた朝鮮・真番の砦は二つだけ残して廃されたが、遼東郡の保護下にあった。秦末（紀元前209年）、陳勝呉広の乱が起こると中国全土は大混乱となり、燕国は韓広を王として再び独立を成し遂げた。紀元前206年、秦が滅ぶと、天下の覇権を握った項羽によって臧荼が燕王に立てられ韓広は遼東王に左遷された。ここで燕は遼河を挟んで東西二つの国に分かれたことになる。その年の内に臧荼は韓広を攻め遼東を併合して燕全体の王となった。

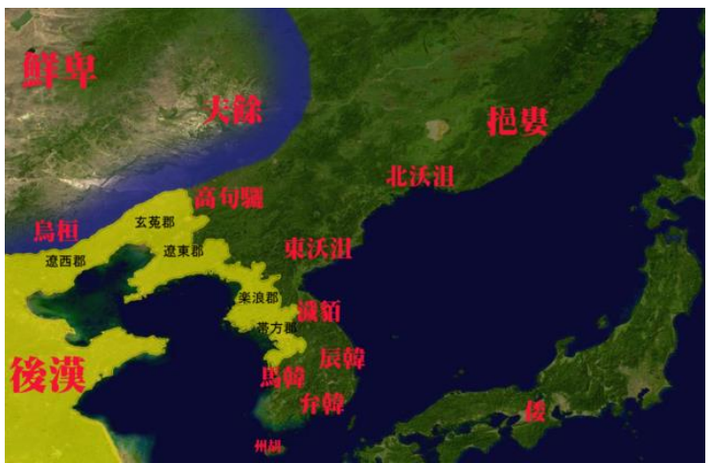
建国　『史記』によれば、前漢の高祖の時代の紀元前202年、燕王臧荼は反乱を起こして処刑され、代わって盧綰を燕王に封じたが、紀元前197年に盧綰が漢に背いて匈奴に亡命すると、劉建を形式的な燕王に封じたが実態は遼東郡を含む燕の旧領を直轄化した。その際、燕人の衛満（『史記』及び『漢書』には名のみ「満」と記す。姓を「衛」と記すのは2世紀頃に書かれた王符の『潜夫論』以降）も亡命し、清川江を南にこえ、千人余りの徒党と共に朝鮮に入り、中国人（燕・斉の亡命者）と原住民の連合政権を樹立、王険城（平壌）を首都として王位に就いた。

全盛　漢の遼東大守は皇帝の裁可を得てこの政権を承認したため、衛満は自分の支配地域と漢との交易を独占することになり、財物と兵器を蓄えて強大化した。その勢力圏は平安北道を除く朝鮮半島のほぼ全域と中国東北地方を含み、数千里四方に及んだ。

滅亡　三伝して孫の衛右渠に至る。右渠は漢の意のままにはならなかったため武帝は朝鮮を帰服させようとし（実は匈奴を牽制するためともいう）、紀元前109年-紀元前108年、遠征を行い、衛氏朝鮮は滅ぼされた。その故地には楽浪郡、真番郡、臨屯郡、玄菟郡の漢四郡が置かれ漢の領土となった。
(Wikipedia抜粋)

Ja.Wikipedia抜粋





Ja.Wikipedia抜粋

朝鮮の歴史

櫛目文土器時代 無文土器時代			
韓	辰国 三韓	古朝鮮	檀君朝鮮 箕子朝鮮 衛氏朝鮮
原三国	辰韓	弁韓	馬韓	濊貊	沃沮	漢四郡	
三国	新羅	任那	百済	高句麗			

楽浪郡（らくろうぐん）は、漢朝によって設置され、紀元前108年から西暦313年まで存在した、朝鮮半島北部の郡（地方行政機構、植民地との見方も存在する。真番郡、臨屯郡、玄菟郡と共に漢四郡と称される。東方における中華文明の出先機関であり、朝鮮や日本の中華文明受容に大きな役割を果たした。楽浪郡の住民は王氏が多く韓氏これに次ぎ、この二氏でかなりの率を占めていた。

成立　前108年（元封3年）、朝鮮半島西部にあった衛氏朝鮮を滅ぼした漢朝により設置されたのが始まりである。郡治所は朝鮮県（衛氏朝鮮の王険城、今の平壌）に置かれ、郡の南部には南部都尉が置かれていた。

拡大　前82年（始元5年）には真番・臨屯が廃止され、臨屯郡北部の6県と玄菟郡の1県が楽浪郡に編入された。これを嶺東七県（日本海側）といい嶺東7県を管轄する軍事組織として東部都尉が置かれた。玄菟郡はその後段階的に縮小移転している。この結果、楽浪郡は25県を抱え、この拡大した楽浪郡を創業期の楽浪郡に対して歴史学では「大楽浪郡」ともいう。『漢書』地理志によるとその戸数は6万2,812戸、口数は40万6,748人あった。平壌郊外の貞柏洞364号墳で発見された「楽浪郡初元四年県別戸口簿」によると、25県の初元4年（紀元前45年）の戸数は4万3251戸、人口は28万0361人であった。

混乱　王莽による新朝が成立すると楽浪郡は楽鮮郡と改称され、諸県も名称変更された。その後の新末後漢初の混乱期に、土着漢人の王朝が反乱を起こして一時的な独立国家を樹立したこともあったが、後漢光武帝が中国統一事業の過程で30年には楽浪郡を接収している。その年（30年）のうちに後漢は嶺東7県を廃止して、原住民の穢人を県侯に任命して独立させている。

帯方郡の分割　後漢末期の混乱期になると、遼東地方で台頭した公孫氏が楽浪郡にも勢力を伸ばしその支配下に収めた。3世紀初頭には公孫氏の2代目、公孫康が郡南部の荒地を分離して再開発し、帯方郡を設置している。ただし、名目上は楽浪郡から帯方郡を分置したといっても、実際には帯方郡のほうが大きく楽浪郡はそれに比べて主役の座を譲った格好になった。

末期　三国時代には魏が238年に楽浪・帯方郡を接収し、翌年（一説には同年）倭女王卑弥呼も帯方郡を通じて魏と通交した。265年魏に代わった晋が引き続き支配したが、八王の乱以後は衰退の一途を辿り、313年には高句麗に滅ぼされ、後に高句麗は楽浪郡の跡地に遷都した。楽浪・帯方の土着漢人達は高句麗・百済の支配下に入り、これらの王国に中華文明を伝える役割を果たした。

楽浪郡の考古　楽浪郡治は衛氏朝鮮国の都「王険」改め「朝鮮県」を郡治とし、現在の平壌市付近の大同江北岸（現在の平壌市街）に郡治が所在したと考えられている。平壌市街一帯には楽浪漢墓と呼ばれる当時の墳墓が残り、その数は2,000以上と言われる。楽浪漢墓の多くは郡の下級役人たちのもので、墓制は前期の木槨墓から後期の塼室墓に移行している。その多くは植民地時代に日本の考古学者によって発掘された。腐朽消滅していない漢代の木槨墓が初めて学術的に発掘され、大型の木馬など、大量の木製品、漆器が出土した。特に年号・製造部署が刻された漆器が重要で、前漢始元2年から後漢永平14年に至る長期間の遺品が出土している。殆どが四川省で制作された漆器である。その中で、南井里第116号古墳から出土した「漆絵人物画像文筐」は特に有名である。他にも銅鏡や官印、玉器、土器、漢銭などが出土した。

日本の壱岐市の原の辻遺跡では楽浪郡の文物と一緒に弥生時代の出雲の土器が出土しており、これは、楽浪郡と壱岐、出雲の間の交流を示す。姫原西遺跡や西谷墳墓群がある出雲平野には、強大な国があったと思われ、出雲が楽浪郡と深い関係を持ちながら、山陰を支配していた可能性がある。

(Wikipedia抜粋)

Zh.Wikipedia抜粋

真番郡

沿革

前108年（元封3年）、衛氏朝鮮を滅ぼした漢朝により幽州刺史部の下に設置され、15県からなり、郡治が置かれた霅県の位置は長安を去ること7,640里という。管轄する領域の範囲は諸説があって確定していない。前82年（始元5年）に真番郡は廃止された。

所在地論争

在北説・在南説・非在説があり、在北説はのちの玄菟郡に該当するという説。この3つの中ではすでに在南説に軍配が上がっているが、在南説の中でも細かく分かれ、慶尚道とする説、忠清道を中心とする韓国西部という説、慶尚道と全羅道を含む韓国南部とする説などがある。

韓国西部説

楊守敬、内藤湖南、稲葉岩吉などが唱えた、今の忠清道方面にあったとの説。古くは、上記の在北説と対立する「在南説」といえばこれをさした。市村瓚次郎は「真＝辰で、番の発音は邦に近いので真番とは辰邦であり、辰邦すなわち「辰国」のことである」と考えた。これを踏まえた今西龍は「シン」（新・真など）のつく古地名を拾って今の錦江流域に「辰国」があったと推測、真番郡は忠清道・全羅道の範囲に相当し、「霅県」も錦江流域に置かれたとした。この説は高校の世界史の歴史地図帳でも長年にわたって採用されていたことから、日本における通説となっていると見られる。この説では、上述の東南説と反対に、慶尚道方面は漢帝国の郡に併合されなかったことになる。

(Wikipedia抜粋)

帯方郡

公孫氏による創設　後漢の末、中平6年（189年）に中国東北部の遼東太守となった公孫度は、勢力を拡大して自立を強め、後漢の放棄した朝鮮半島へ進出、現在の平壌付近から漢城北方にかけての一帯にあった楽浪郡を支配下に置いた。その後を継いだ嫡子・公孫康は、建安9年（204年）楽浪郡18城の南半、屯有県（現・黄海北道黄州か）以南を割くとともに南方の土着勢力韓・濊族を討ち、併せて帯方郡として「是より後、倭・韓遂に帯方に属す」]という朝鮮半島南半の統治体制を築く。郡治とは、その周囲の数十県（城）の軍事・政治・経済を束ねる一大機構であり、個々の県治よりもひときわ大きな城塞都市であった。公孫康はほどなく魏の曹操に恭順し、その推薦によって後漢の献帝から左将軍・襄平侯に任ぜられ、帯方郡も後漢の郡として追認された。

公孫康の死後、その子・が幼いために公孫康の実弟・公孫恭が後を継ぎ、後漢の献帝から禅譲を受けた魏朝の文帝（曹操の子・曹丕）により、車騎将軍・襄平侯に封じられた。しかし、太和2年（228年）成長した公孫康の子の公孫淵は叔父・恭の位を奪い取り、魏の曹叡（明帝）からの承認も取りつけて揚烈将軍・遼東太守に任ぜられる。公孫淵は、祖父以上に自立志向が強く、魏朝の仇敵である呉の孫権との同盟を画策し、最終的には、魏から受けた大司馬・楽浪公の地位を不足とし、景初元年（237年）反旗を翻して独立を宣言。遼東の襄平城で燕王を自称するにいたる。帯方郡も楽浪郡もそのまま燕に属した。

翌年（238年）魏の太尉・司馬懿の率いる四万の兵によって襄平城を囲まれ、長期の兵糧責めにあって公孫淵とその子・修は滅びる。これまで帯方郡は「後漢–魏–燕」と、形式的にはその所属に変遷があったが、実質的は一貫して公孫氏の領有下にあり、韓や倭といった東夷からの朝貢は公孫氏が受け取っていたと思われる。

魏の直轄経営　襄平城の攻城戦の最中であろうか、魏は劉昕と鮮于嗣をそれぞれ帯方太守、楽浪太守に任じ、両者を密かに海路で、山東半島から黄海を越えて朝鮮半島に派遣。帯方郡と楽浪郡の2郡を掌握させた。帯方郡はこれにより魏の直轄地となる。太守・劉昕は、周辺の東濊・韓族の首長に邑君あるいは邑長の印綬を賜与し、魏との冊封関係を改めて結び直した。邪馬台国・卑弥呼も、景初2年（238年。『魏志倭人伝』の記述は誤りで、景初3年が正しいとする説もある）6月に、この新生・帯方郡の地へ、朝貢使の難升米を派遣したわけである。このとき太守は劉夏であったが、彼は郡の官吏を付けて後漢の都・洛陽まで難升米の一行を送らせた。

正始元年（240年）にさらに異動があり、新太守となった弓遵は、魏の詔書・金印紫綬を配下の梯儁に持たせて卑弥呼のもとへ送った。ところがこの弓遵は、同6年（245年）に嶺東へ遠征して東濊を討った後、それまで帯方郡が所管していた辰韓八国を楽浪郡へ編入することになり、その決定を現地に伝えた際、通訳が誤訳を犯して臣智激韓を激怒させ郡内の韓族が帯方郡の崎離営を襲った。これを弓遵と楽浪太守の劉茂が兵を興して討ち、魏軍は韓族を滅亡させたが弓遵は戦死した。

同8年（247年）弓遵から引き継いだ太守・王頎は、倭の使者から邪馬台国と狗奴国との交戦の報告を受け、自ら上洛して官の決裁を仰ぐが、魏朝から邪馬台国へ援軍が送られることはなく、魏の少帝の詔書と黄幢を携えた塞曹掾史（外交官、軍使、軍司令副官など諸説あり）の張政が派遣されるに留まった。

ここまでの帯方郡の動きは『三国志』からつぶさに知れる。歴代太守の記録を見ると、戦死した弓遵の例を除き、外交官としての非軍事的活動が主であることに気づく。また、その頻繁な人事異動には（8年間で4人の太守）、帯方郡の軍閥化を防ぎ第2の公孫氏を生まぬようにするための魏の基本方針と推測される

帯方郡の滅亡　泰始元年（265年）に魏の重臣であった司馬炎（懿の孫、後の晋の武帝）が魏の曹奐（元帝）から禅譲を受けて晋朝（西晋）を興すが、その新しい王朝の繁栄も長くは続かず、永康元年（300年）身内の八王の乱ですっかり混迷状態に陥った。この時代、帯方郡に属する県は、帯方・列口・南新・長岑、提奚、含資、海冥の7県であった（『晋書地理志』）。

建興元年（313年）遼東へ進出した高句麗が南下して楽浪郡を占領すると、朝鮮半島南半に孤立した帯方郡は晋の手を離れ情報も途絶した。元の帯方郡や楽浪郡南部に残された漢人の政権や都市は、東晋を奉じて5世紀初頭までの存続が確認されているが、5世紀前半には百済によって征服され、5世紀後半に入ると南下した高句麗が百済を駆逐して支配下へ置いた。

(Wikipedia抜粋)

高句麗

高句麗（こうくり、紀元前37年 - 668年。高句麗語：高句麗）は、いまの中国東北部南部から朝鮮北中部にあったツングース系民族の国家であり、最盛期は満洲南部から朝鮮半島の大部分を領土とした。隋、唐を始めとする中国からの侵攻を度々撃退したが、最終的には唐・新羅の遠征軍により滅ぼされた。後述の王氏高麗との区別による理由から「こうくり」と読むが、百済・新羅の「くだら」・「しらぎ」に対応する日本語での古名は「こま」である。

国名　高句麗という固有名詞の起源は、漢帝国が設置した玄菟郡の高句驪県に由来する。高句麗は別名を貊（はく）と言う。小河に住んでいるために小水貊と呼ばれる別種が居る。良い弓を産出する。いわゆる「貊弓」である。3世紀における「高句麗・夫余」の2国と沃沮・東濊の2部族は、すべて前漢代の「濊貊」の後裔である。日本では「高麗」と書いても「貊（狛）」と書いても「こま」と読む。

歴史　紀元前1世紀中頃から漢の玄菟郡・高句麗県に付属していた支配地域は出費が嵩むため放棄され始め、替わって濊貊系に属する濊族の夫余や貊族の高句麗などを冊封する間接支配へ切り替えられた。高句麗を形成した濊貊系民族とは、中朝国境をはさむ山岳地帯で農耕を主とし、その他に狩猟・牧畜を生業としていた民族とみられる。『魏書』と『三国史記』によれば、高句麗は紀元前37年に夫余の王族である朱蒙（チュモン）により建てられたという。

卒本城時代　朱蒙が建国したという卒本の地は、現在の遼寧省本渓市桓仁満族自治県（吉林省との省境近くの鴨緑江の少し北）であり、都城の卒本城は五女山山城に比定されている。紀元2年、後漢の光武帝の下へ使者を送って朝貢した際、それまでの高句麗候から王へ冊封されている。しかし、3年には、第2代の瑠璃明王が隣国に在った夫余の兵を避けるため鴨緑江岸の丸都城（丸都山城、尉那巌城。現在の中国吉林省集安市近郊。かつての玄菟郡配下の高句麗県）の山城へ遷都したと伝えられる。高句麗の本拠地が実質的に丸都城へ移った時期は、2世紀末から3世紀初めと見られている。

丸都城時代　その後、山を下りて平地の国内城に王宮を構えたが、山城の丸都城と平城の国内城とは一体のものである。高句麗は次第に四方に勢力を伸ばし特に東南方面へ拡張したが、第8代の伯固（新大王）の時代には遼東へも数度寇掠を働いている。しかし、それにより遼東で割拠していた公孫氏の不興を買い侵攻を招くことになる。197年に第9代の故国川王が死んだ後、王位継承をめぐって発岐と延優（後の10代山上王）との間に争いが起こり、卒本に拠った発岐は公孫度を頼って延優と対立したが、丸都城に拠った延優が王となって発岐の勢力を併呑した。219年、高句麗の政情不安に付け込んだ遼東太守の公孫康が高句麗へ侵攻し、高句麗は敗退して村々が焼かれた。

高句麗は以前から魏に朝貢を行って臣属しており、司馬懿による公孫氏の平定にも兵数千人を遣わしていたが、魏が公孫氏を平定して国境を接すると、242年に西安平で寇掠を働き魏の将軍毌丘倹による侵攻を招いた。244年に1回目の侵攻が行われ、東川王（位宮）は2万の兵を率いて迎え撃ったが連戦連敗し、丸都城を落とされ千人が斬首された。毌は将兵の墳墓破壊を禁じ捕虜と首都を返還したが高句麗は服属せず、翌245年に再び魏軍の侵攻を招いた。魏軍は南北の2方向から侵攻して高句麗を大いに打ち破り全土の村々を落とすと、東川王は南沃租へ逃げたが更に追撃を受け北方にある粛慎との境いまで逃れた。この戦いにより3千人が捕えられて斬首され、従属させていた東濊も高句麗を離れ魏に服属した。その後も遼東半島への進出を目指し、西晋の八王の乱・五胡の進入などの混乱に乗じて312年に楽浪郡を占拠し、この地にいた漢人を登用することで技術的、制度的な発展も遂げた。しかし、遼西に前燕を建国した鮮卑慕容部の慕容皝に都を落され、臣従した。355年には前燕から〈征東将軍・営州刺史・楽浪公・高句麗王〉に冊封されている。前燕が前秦に滅ぼされると引き続いて前秦に臣従し、372年には僧侶・仏典・仏像などが伝わった。この間、371年には百済の攻撃に王が戦死する危機に直面する。391年に即位した19代好太王は後燕と戦って遼東に勢力を伸ばし、南に百済を討って一時は首都漢城（現ソウル特別市）のすぐ傍まで迫り、百済王を臣従させた。4世紀末になると倭が朝鮮半島へ進出を始め、391年に倭が百済□□新羅を破り臣民とした。393年に倭が新羅の都を包囲したのをはじめ、たびたび倭が新羅に攻め込む様子が記録されている。百済はいったん高句麗に従属したが、397年、阿シン王の王子腆支を人質として倭に送って国交を結び、399年に倭に服属した。倭の攻撃を受けた新羅は高句麗に救援を求めると、好太王は新羅救援軍の派遣を決定、400年に高句麗軍が新羅へ軍を進めると新羅の都にいた倭軍は任那・加羅へ退き、高句麗軍はこれを追撃した。これにより新羅は朝貢国となった。402年、新羅もまた倭に奈忽王の子未斯欣を人質に送って属国となった。404年、高句麗領帯方界まで攻め込んだ倭軍を高句麗軍が撃退した。405年、倭の人質となっていた百済王子の腆支が、倭の護衛により帰国し百済王に即位した。5世紀、長寿王の時代には朝鮮半島の大部分から遼河以東まで勢力圏を拡大し、当初高句麗系の高雲を天王に戴く北燕と親善関係を結んだ。この時代には領域を南方にも拡げ、平壌城に遷都した。

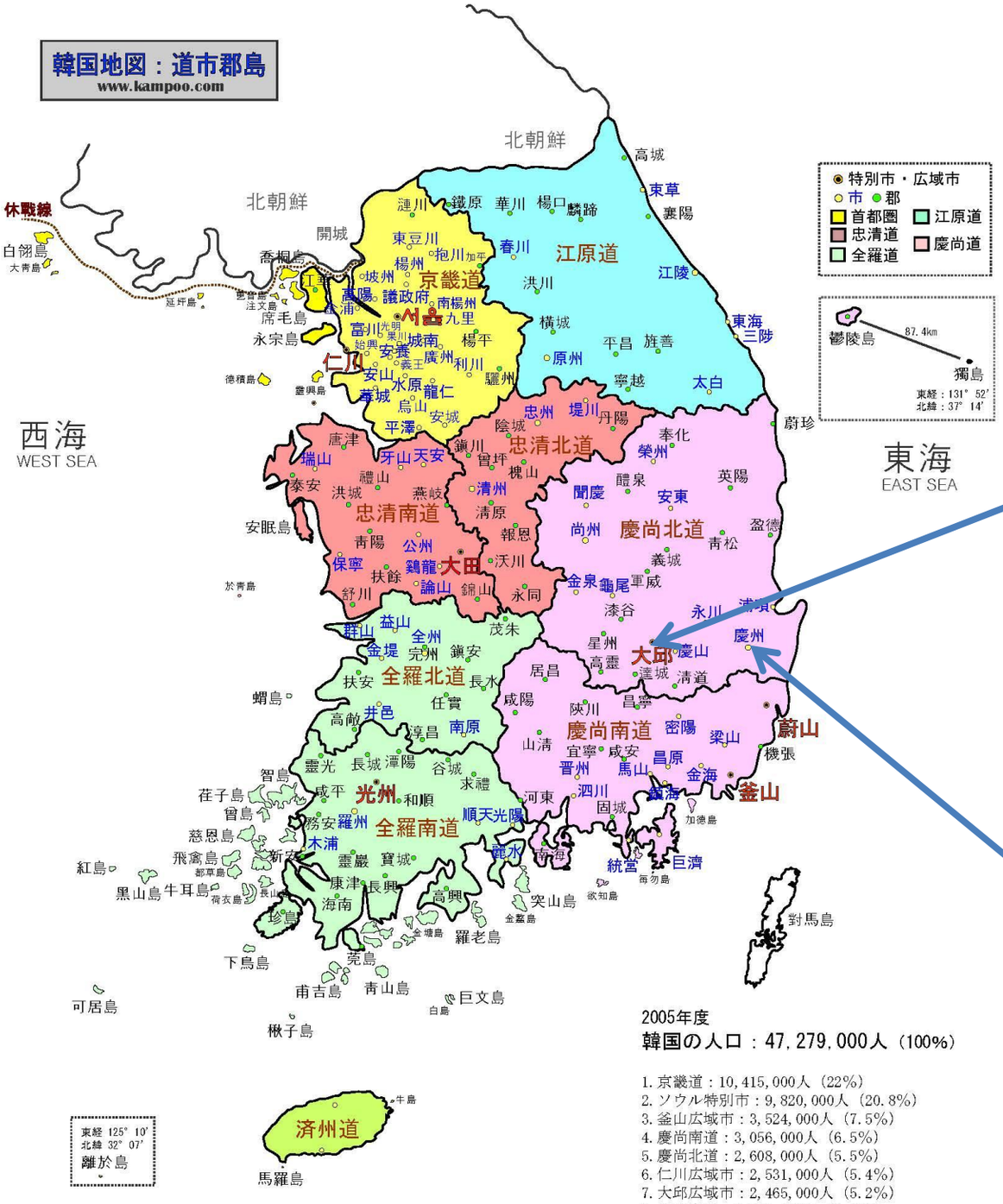
平壌城時代　遷都直後は大城山城を拠点としたが、後に平壌城に居城を構えた。長寿王は西へ進出して遼河以東を勢力下に収め、475年には百済の首都を陥落させて百済王を殺害、百済は南に遷都した。この時期は満洲南部、遼東半島、朝鮮半島の大部分を支配するに至った。しかし5世紀末になると百済と新羅が強くなり、百済と新羅の連合により南部の領土を奪われている。危機感を覚えた高句麗は百済に接近し、中国には南北朝の両方に朝貢を行って友好を保ち、新羅との対立を深めていく。

唐の第一次高句麗侵攻（645年）　中国で北朝系の隋が陳を滅ぼして全土を平定すると、高句麗は隋に対抗するため突厥と結ぶ。このため隋から4次にわたる侵攻を受けたが、乙支文徳の活躍もあってこれらすべて撃退した。隋が滅びて唐が興ると、今度は唐が高句麗遠征を行った。これに備えて淵蓋蘇文はクーデターを起こして宝蔵王を擁立し、軍事政権によって唐の進出に対抗した。高句麗は緒戦で善戦し、唐の太宗が親征した第1次侵攻を撃退、百済と結んで新羅を攻めた。新羅の宗主国である唐はこれを受けて新羅を全面支援した結果、660年には百済が滅亡、663年の白村江の戦いで百済の残存勢力も一掃されたため、高句麗は孤立した。さらに高宗の時代になって唐が戦略を持久戦に転換した結果、高句麗の国力消耗は著しくなり、その上に淵蓋蘇文の死後子の間で内紛が生じると、これを機に唐・新羅連合軍は第3次侵攻を起こして王都平壌を攻め、668年に宝蔵王は投降。ここに高句麗は滅亡した。(Wikipedia抜粋)

版図が最大に達した476年頃の高句麗と周辺諸国
Jiten.biglobe.ne.jp

三国時代後半の576年頃の半島
(Wikipedia抜粋)

南朝鮮（南韓、ほぼ大韓民国）



2005年度
韓国の人口：47,279,000人（100%）

1. 京畿道：10,415,000人（22%）
2. ソウル特別市：9,820,000人（20.8%）
3. 釜山広域市：3,524,000人（7.5%）
4. 慶尚南道：3,056,000人（6.5%）
5. 慶尚北道：2,608,000人（5.5%）
6. 仁川広域市：2,531,000人（5.4%）
7. 大邱広域市：2,465,000人（5.2%）
8. 忠清南道：1,889,000人（4.0%）
9. 全羅南道：1,820,000人（3.8%）
10. 全羅北道：1,784,000人（3.8%）
11. 江原道：1,465,000人（3.1%）
12. 忠清北道：1,460,000人（3.1%）
13. 大田広域市：1,443,000人（3.1%）
14. 光州広域市：1,418,000人（3.0%）
15. 蔚山広域市：1,049,000人（2.2%）
16. 済州特別自治道：532,000人（1.1%）

伊西国（慶尚北道清道郡）
（イザナギ・イザナミの故地？）
　清道郡（チョンドぐん）は大韓民国慶尚北道の南部にある郡である。郡の南部は慶尚南道と境界を接している。

~ 297年 - 伊西国
297年 - 伊西国、斯盧(後年、新羅に発展)により滅亡。

慶州市（キョンジュし）は、大韓民国慶尚北道の歴史文化都市。東は日本海に面し、西は永川市と清道郡、南は蔚山広域市、北は浦項市に接する。新羅王国の都・金城（クムソン）の地である。

韓-Uyopedia

「韓」は半島の南半分だけをさす言葉としては正式には後漢書記載のAD44年からである。

韓の起源

三韓の”韓”と戦国の七雄の”韓”はルーツが同じだが、どっちかが起源ということではなく、西周の初期に今のペキンのすぐ南（現在の地名では「固安」）に「韓」という都市国家があって、それが「ふたつの韓」の共通の起源にあたる。（周の武王の弟が侯爵として封建されたもの）周の成王の時、今のペキンには燕が建国されて入れ替わりに韓侯は山西省の西南（韓原）に国替えになった。その時に都市国家の市民は移動せず取り残され「韓」を姓として河北省方面に散らばった。だから後世まで河北省には韓という姓が多かった。一方、戦国七雄の「韓」というのは、山西省の西南（韓原）に移転した後、晋に滅ぼされてしまう。その跡地は、晋の公室のひとり、「萬」なる者に封領として与えられた。これが戦国時代の「韓」のはじまり。この人が韓武子（韓萬）で、戦国の七雄の”韓”の初代にあたる。（韓萬＝韓武子）

前漢代になって楽浪郡に移民した中国人について。楽浪郡の遺跡研究は戦前にすでにかなりのレベルに達しており、楽浪郡の住民はほとんど王氏と韓氏の2氏で大部分を占められていたことがわかっている。このうち王氏というのは山東半島の名族で、王氏を称したのは山東系の移民と思われ、後漢時代に謀叛をおこし6年間にわたって楽浪郡で独立政権を維持した「王調」、日本に漢字（と儒教思想）を伝えた「王仁」はともに山東系楽浪王氏と考えられる。王氏についで多いのが「韓氏」で、韓氏はすでに説明したように今の河北省に多く、これは西周初期にペキンのすぐ南、今の固安に建国された「韓」が、後に河南省に移転した時にとり残された住民が称した姓だとされ、項羽と劉邦の時代に燕王を称した「韓広」なる人物もこの韓氏と思われる。つまり王氏は山東系、韓氏は河北系の移民ということ。

楽浪郡のみならずそのさらに南の真番郡でも類似の事態、つまり移民の多くは王氏か韓氏だったろうと考えられる。真番郡はAD82年に廃止され、住民と土地は漢帝国から放置されてしまった。早ければ王莽の頃（紀元前後のあたり）遅くてもAD44年には半島に「韓」を名乗る勢力がいた。住民はその頃までに自立して王を立て国名を称したと思われる。その王の姓は十中八九「韓」であろうから、国名を韓と称したのであろう。

箕子説話

魏略が拾ってきた伝承では箕準（箕子の子孫）が馬韓に入ってきて王になるわけだがなぜか子姓でも箕氏でもなく（すでにそこは韓だったから）韓氏を称したということになっている。（箕子到来伝説には史実性はまったく無い）これは中国系の人々が箕子にこじつけた頃にはすでに「韓」の名は自明で韓の由来を説明できなくなっていたということだろう。箕準とされた人物は実はもとから韓氏を名乗る中国系の人物で、真番郡廃止後、一時的にせよ現地をとりまとめて王となったのだろう。でなければいくら中国系の人々が有力でも韓が真番にかわって地名になることは考えにくいし。

三韓

三韓（さんかん）は、1世紀から5世紀にかけての朝鮮半島南部に存在した種族とその地域。朝鮮半島南部に居住していた種族を韓と言い、言語や風俗がそれぞれに特徴の異なる馬韓・弁韓・辰韓の3つに分かれていたことから「三韓」といった。馬韓の言語は辰韓や弁韓とは異なっていた。4世紀中ごろには、言語は辰韓や弁韓とは異なっていた。馬韓の北部の国々は百済の支配下に置かれていたと思われるが、馬韓南部への百済の膨張は百済が高句麗に壊滅的大敗を喫し北部を失った後に、宗主国である倭国の領域を段階的に侵略・割譲などによって蚕食する事で進み、最終的には5世紀後半の所謂「任那四県の百済への割譲」によって終わった。辰韓は「辰王」に属していて、辰王は新羅が台頭するまで馬韓人や倭人などであった。辰韓の諸国も西晋に朝貢していたが3世紀末最後に途絶える。

弁韓は「卞韓」・「牟韓」ともかかれる。「弁辰」ともいう。弁韓という名は、半跛国を中心とする韓の諸国の意味である。三世紀には12カ国に分かれていて「十二国また王あり」という。その12国の中で狗邪国・安邪国・半跛国が強国だった。のち、金官国（駕洛国）がこの地域の盟主となり、それぞれの国家の連合をつくった。尚、弁韓の一国が辰韓の基となった（古代日本異族伝説の謎、田中勝也）。

大雑把にのちの任那・伽耶、現在の慶尚北道・慶尚南道のうち、ほぼ洛東江より西・南の地域である。辰韓と弁韓とは居住地が混在していたとされ、辰韓12国と弁韓12国は国々の所在地が入り混じっていたと解釈しているが、各国の比定地は洛東江を境にしてほぼ二つに分かれている。『三國志』弁辰伝によれば、言語は馬韓と異なり辰韓と類同していた。『後漢書』弁辰伝によれば辰韓とは城郭や衣服などは同じだが、言語と風俗は異なっていた。土地は肥沃で、五穀や稲の栽培に適していた。蚕を飼い、縑布を作った。大鳥の羽根を用いて死者を送るがそれは、死者を天空に飛揚させるという意味であった。鉄の産地であり、韓、濊、倭などが採掘していた。市場での売買では鉄が交換されており、それは中国での金銭使用のようであった。
（Wikipedia抜粋）

弥生時代の南朝鮮（南韓）の西側には、気候の寒冷化のため華北人さらに江南人の移民や流民が流れ込み、なかでも韓氏と名乗る河北省から移民が多かった。そのため、漢人が紀元前後に半島南部を韓と呼称するようになった。従って、半島南部に韓人がいたのではなく、半島南部の住民の総称が韓人である。ツングース系の濊人も縄文時代後期の気候の寒冷化のため半島の東側を南下してきたもので、これも本来の半島の住民ではない。

これに対して倭人（鬼界カルデラ噴火の避難民、東日本縄文人）が、縄文時代前期に列島からほとんど無人の半島南部に移住したと思われ、倭人こそが半島南部の原住民と言える。（藤田）

辰国

（三韓の前身）]

『史記』よりもはるか後世に書かれた『三国志』には「辰韓者古之辰国也」とあり、3世紀の辰韓は辰国の後身とされている。これに対し、『三国志』よりもさらに新しい『後漢書』では「韓有三種一曰馬韓二曰辰韓三曰弁辰（略）凡七十八国（略）皆古之辰国也」とあり、三韓の地すべてが昔の辰国であるとしていて『三国志』とは異説となっている。いずれにしろ辰国は辰韓または三韓の前身であるとされている。

馬韓（ばかん）

馬韓は、紀元前2世紀末から4世紀中葉に、朝鮮半島南部に存在した部族集団である三韓の一つ。帯方郡の南、黄海に接し、東方は辰韓（後の新羅）、南方は倭に接していた。後の百済と重なる場所にあった地域である。馬韓人は定住民であり、穀物を植え、養蚕を行っていた。それぞれの部族には酋長がおり、大きな部族の酋長を臣智（しんち）と言い、それに次ぐものを邑借（ゆうしゃく）と呼び、集落に城郭は無く、五十余国が存在した。その内の伯済国が百済になったとする説もある。

『後漢書』辰韓伝、『三国志』魏書辰韓伝によると、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦の遺民がおり、馬韓人はその東の地を割いて、彼らに与え住まわせ辰韓人と名づけたという。また、『三国志』魏書弁辰伝によると、馬韓人と辰韓人は言語が異なっていたという。

『後漢書』には「初、朝鮮王準為衛滿所破、乃將其餘衆數千人走入海、攻馬韓、破之、自立為韓王。（初め、朝鮮王準が衛満に滅ぼされ、数千人の残党を連れて海に入り、馬韓を攻めて、これを撃ち破り、韓王として自立した。）」と記されており、衛満が箕子朝鮮を滅ぼした際に箕子朝鮮の最後の王、準王は数千人を率いて逃亡し、馬韓を攻め落として韓王となって馬韓を支配したという。

(Wikipedia抜粋)

辰韓（しんかん）

辰韓（紀元前2世紀 ~ 356年）は、朝鮮半島南部にあった三韓の一つ。帯方郡の南、日本海に接し、後の新羅と重なる場所にあった地域である。その境は、南にある弁韓と接しており、入り組んでいた。もともと6国であったが、後に分かれて12国になった。そのうちの斯蘆が後の新羅になった。辰韓人は穀物と稲を育て、養蚕を生業としていた。

辰韓と中国人との関係

『後漢書』辰韓伝、『三国志』魏書辰韓伝、『晋書』辰韓伝によると、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人がおり、馬韓はその東の地を割いて、与え住まわせ辰韓人と名づけたという。そのため、その地の言葉には秦語（陝西方言。長安に都があった頃の標準語で、この亡民が秦代～前漢代に渡来したことを物語る）が混じり、秦韓とも書いた。秦人は王にはならず、王族は馬韓人であった。水谷千秋は、辰韓の民の話す言語は秦の人に似ており、辰韓は秦韓とも呼ばれていたため、実際に中国からの移民と考えて間違いない、と述べている。上田篤は、「秦の始皇帝が天下を握った紀元前221年ごろには、秦以外のすべての国々は消滅した。すると、大陸内には、もはや亡命する国さえない。そこで、何万、何十万というかつての権力者とそれにつながる人たちの多くは、海外、あるいは漢民族の支配圏以外の国々への亡命の道を選んだのではないか。東アジアでも、「陳勝などの蜂起、天下の叛秦、燕・斉・趙の民が数万口で、朝鮮に逃避した『魏志東夷伝』」と記されている。陳勝の農民一揆は、紀元前209年のことである。また、『三国志』（魏書弁辰伝）によると、辰韓人は馬韓人とは言語が異なっていたが、弁韓人とは互いに雑居し、風俗や言語は似通っていたという。『後漢書』弁辰伝によれば辰韓とは城郭や衣服などは同じだが、言語と風俗は異なっていたという。また、『北史』新羅伝には、「新羅者、其先本辰韓種也。地在高麗東南、居漢時樂浪地。辰韓亦曰秦韓。相傳言秦世亡人避役來適、馬韓割其東界居之、以秦人、故名之曰秦韓。其言語名物、有似中國人。（新羅とは、その先はもとは辰韓の苗裔なり。領地は高麗の東南に在り、前漢時代の楽浪郡の故地に居を置く。辰韓または秦韓ともいう。相伝では、秦時代に苦役を避けて到来した逃亡者であり、馬韓が東界を割譲し、ここに秦人を居住させた故に名を秦韓と言う。その言語や名称は中国人に似ている。）」との記述がある。

中国政府のシンクタンクである中国社会科学院は、公式研究書で新羅に対して、「中国の秦の亡命者が樹立した政権」であり、「中国の藩属国として唐が管轄権を持っていた」と記述している。また、中国の歴史学者の李大龍は、新羅の前身である辰韓は秦韓とも呼ばれ、中国の秦の人が建てた国だから、新羅は中国民族が建てた国だと主張している。チャン・セユン成均館大学教授は「中国の教科書には古朝鮮の歴史についての言及がなく、馬韓，辰韓，弁韓に代表される三韓時代に関しては、中国が自国の影響を多く受けたと主張する辰韓を中心に叙述している」と指摘している。

(Wikipedia抜粋)

新羅１

新羅（しらぎ/しんら、紀元356年- 935年）は、古代の朝鮮半島南東部にあった国家。「新羅」という国号は、503年に正式の国号となった。新羅、半島北部の高句麗、半島南西部の百済の3か国が鼎立した7世紀中盤までの時代を朝鮮半島における三国時代という。7世紀中ごろに朝鮮半島をほぼ統一し、高麗、朝鮮と続くその後の半島国家の祖形となった。内乱や飢饉で国力を弱体化させ、高麗に降伏して滅亡した。

概要　『三国史記』の新羅本紀は「辰韓の斯蘆国」の時代から含めて一貫した新羅の歴史としているが、史実性があるのは4世紀の第17代奈勿王以後である。6世紀中頃に半島中南部の加羅諸国を滅ぼして配下に組み入れた。唐が660年に百済を、668年に高句麗を滅ぼした時には、新羅は唐軍指揮下で参軍した。その後、唐が吐蕃と戦争を始めると、反乱を起こして旧百済領全土と旧高句麗の南半分を統治する唐の役所を襲撃して官員を殺戮し（唐・新羅戦争）朝鮮半島の中南部を統一した。首都はほぼ金城（現在の慶尚北道慶州市）にあった。9世紀末には新羅の国力は衰え、百済・高句麗の再興を図る勢力が出て後百済・後高句麗との鼎立による後三国時代となり、最終的には後高句麗から起こった高麗に帰順して新羅は滅亡した。

新羅の歴史は、『三国史記』新羅本紀・敬順王紀に記されるように、始祖から第28代真徳女王末年（654年）までを上代、第29代武烈王（金春秋）即位から第36代恵恭王末年（780年）までを中代、第37代宣徳王から滅亡までを下代と分類する。

呼称　当初の「斯蘆」という文字の発音は現代日本語では「しろ」現代韓国語では「サロ」だが、漢字の上古音では「シラ」である。日本では習慣的に「新羅」を「しらぎ」と読むが、奈良時代までは「しらき」と清音だった。

前史　斯蘆国の時代　3世紀ごろ、半島南東部には辰韓十二国があり、その中に斯蘆国があった。辰韓の「辰」は斯蘆の頭音で、辰韓とは斯蘆国を中心とする韓の国々の意味と考えられている。当時の新羅の領域は北九州と同程度で、百済も新羅の二倍程であった。また、新羅にとって、自国と同程度の広さの北九州と中国・四国・近畿地方を領土とする大和朝廷は脅威であった。

奈勿尼師今の即位（356年）が新羅の実質上の建国年とも考えられている。また、広開土王碑や中原高句麗碑により、時期によって倭（ここで言う倭をヤマト、九州の倭人を指すなど諸説あり。定説はヤマト）や高句麗によって支配を受けていたことも明らかとなっている。2011年に新しく見つかった『梁職貢図』模本に、新羅が韓や倭の属国であるという一節があった。また、『梁書』新羅伝には「新羅者、其先本辰韓種也。其人雑有華夏、高麗、百濟之屬（新羅、その先祖は元の辰韓（秦の逃亡者）の苗裔である。そこの人々は華夏（漢族）、高句麗、百済に属す人々が雑居している）」という事から、雑多な系統の移民の聚落が散在する国家であったと考えられる。

『三国史記』新羅本紀によれば、朴氏・昔氏・金氏の3姓の王系があること、そしてそれぞれに始祖説話を持っていることが伺える。新羅はこの3王統により何度か王朝交代が起きており、それぞれの王統が王位を主にしめていた時代を朴氏新羅(初代赫居世居西干～)・昔氏新羅(57年・第4代脱解尼師今～)・金氏新羅(356年・第17代奈勿尼師今～)と呼ぶ。なお、昔氏新羅時代に初代金氏の王である第13代味鄒尼師今が、また金氏新羅時代には第53代神徳王から3代だけ朴氏から王が出ている。

日本での伝承

－稲飯命伝承とアメノヒボコ伝承－

稲飯命（『古事記』では「稲氷命」と書く）については、『新撰姓氏録』が新羅の祖は鵜草葺不合命の子の稲飯命（神武天皇の兄）だとしているが詳細不明である。

天之日矛（日本書紀では天日槍と書く）については、『記紀』や『風土記』などに伝承がある。天之日矛は新羅の王子だったが王位を弟の「知古」に譲って自分は継がず、日本に帰化したという。彼は最終的に但馬（兵庫県豊岡周辺）に土着し、三宅連氏の祖先となった。天之日矛の渡来は『古事記』は応神朝、日本書紀は垂仁朝、風土記は神代のこととし、**伴信友は天之日矛から多遅麻毛理までの世代数から計算して天之日矛の渡来は孝霊天皇の時代のことと推定している。**

天之日矛のルーツについては、日本側の伝承によれば日本から渡った稲飯命の開いた新羅王朝家の子孫である。また半島側の資料からも、昔氏の始祖脱解の出生については倭国東北1千里という。昔脱解は船で渡った倭人と見られ、その出生地は諸説あって現在の日本の但馬、丹波、肥後のいずれかの地域とされるが、但馬（兵庫県北部）と推定する向きが多く、天之日矛が祭られる豊岡と一致する。豊岡等の地域を基点に倭から半島へ、そして半島から倭へと倭人の移動があった可能性が比定される。

(Wikipedia抜粋)

翡翠の勾玉を配した新羅の王冠

(Wikipedia抜粋)

新羅2

1145年に完成した『三国史記』の「新羅本紀」では、始祖から真徳女王までを上代、武烈王から恵恭王までを中代、宣徳王から敬順王までを下代と呼んでいる。一方日本の朝鮮史研究においては、新羅が半島を統一した時期を統一新羅時代と呼んでいる。

上代　新羅は長く高句麗に従属していたが、5世紀中頃からその支配下を脱却しようとしてこれと争うようになった。その傍らでは辰韓諸国に対する支配力を高め、加羅諸国の領有をめぐっては百済とも対抗する姿勢を明らかにし、ここに三国が相競う様相を顕われ始めた。さらには広開土王碑の銘文や日本の「三韓征伐」伝承にも垣間見られるように、新羅は倭国による断続的な侵攻にさらされ、その結果として何らかのかたちで倭国の支配下にあった期間もあったと考えられている。

「新羅本紀」による新羅の建国は前57年だが、実際の建国は356年と考えられている。以下は『三国史記』や『日本書紀』が記すそれぞれの王の治世における事績である。

新羅初代王赫居世居西干の時代　倭人が侵攻してくるが、赫居世王の説得に応じて倭軍は撤退する。また重臣に、もとは倭人の瓠公がいた。二代王南解次次雄の時代 倭人が兵船100艘余りで攻め寄せ、海岸の民家を略奪した。これに対して六部の精兵を派遣したところ、手薄になった首都を楽浪軍に攻められた。しかし、流星が楽浪軍の陣に落ちたため、彼らは恐れて引き上げたという。

第四代新羅王の脱解王の時代　脱解王は倭国から東北一千里の多婆那国の王の子といわれ、この多婆那国は竜神信仰を持っていたことや交易関係などから、日本列島の丹波国にも比定され、脱解王の出身氏族である昔氏は倭人とされる。百済の多婁王と蛙山城（忠清北道報恩郡）をめぐって度々戦争があった。

倭国が木出島(慶尚南道蔚山広域市の目島)に進入してきた。加羅と戦って大勝した阿飡（6等官）の吉門を波珍飡（4等官）に引き上げた。

第五代新羅王の婆娑尼師今の時代　日本書紀で倭国に服したという新羅王波沙寐錦（はさむきむ）のことを指すともいわれる。6世紀初頭当時の新羅が絶対的な「王」による一元的な王権の支配下にあったわけではなく、寐錦王と葛文王という二つの権力の並存であったとも考えられている。なお、法興王の前代の智証麻立干の時代に国号を新羅として君主号を王に定めている。

第6代新羅王の祇摩尼師今の時代　大甑山城（釜山広域市東萊区）を築いた。同年4月に倭人が東部海岸に侵入した。翌年に倭国と講和した。

第8代新羅王の阿達羅尼師今の時代 158年、倭人が来訪する。

第9代新羅王の伐休尼師今の時代　倭人が飢饉に見舞われ、食を求めて1千余人が新羅に流入した。

第10代王奈解尼師今の時代 倭人が国境を犯す。奈解王は将軍利音に反撃させた。倭人が東部国境に侵入。同7月、将軍の昔于老が沙道で倭軍を撃退、倭人の兵船を焼き払う。

第12代王沾解尼師今の時代 倭人が于老を殺害。

第14代の王儒礼尼師今の時代 天皇は平群木菟宿禰（へぐりのつくのすくね）、的戸田宿禰（いくはのとだのすくね）を加羅に遣わした。天皇は精兵を授けて、「襲津彦が帰らないのは、きっと新羅が邪魔をしているからだ。お前達は速やかに赴いて新羅を撃ちその道を開け。」と命じた。木菟宿禰らは精兵を進めて新羅の国境に臨んだ。新羅王は恐れて、その罪に服した。倭人が一礼部に来たり、集落に放火し、1千人を捕虜にして立ち去った。倭兵が沙道城（慶尚北道浦項市）を陥落させようとしたので一吉飡の大谷に命じて救援させたが、倭軍が攻略した。倭兵が長峯城を攻略した。伊西国に攻められ首都金城（慶州市）を包囲されるが、竹葉軍の助力で防衛に成功した。なお、この伊西国と日本のイツツヒコ王国との間に関係があったともされる。

第15代の王基臨尼師今の時代 倭国と使者を交わし、3月には楽浪･帯方の2国が帰服してきた。国号を新羅に戻した。

第16代の王訖解尼師今　倭国王から王子の通婚を要求。王子ではないが、阿飡（6等官）の急利の娘を嫁として送った。なお、新羅は百済に使者を送って国交を開こうとしている。倭国は再び通婚を要求。しかし、新羅側は娘は嫁に行ったとして断った。翌年、倭国は国書を送ってきて国交断絶。倭国は風島を襲撃し、さらに進撃して首都金城を包囲攻撃した。6世紀になると智証麻立干・法興王らが国制の整備によって国力を高め、6世紀中頃には真興王による急激な領域拡大が可能となった。高句麗を攻撃し北に領土を広げ、百済・日本の連合軍を退け、562年には加羅地方の大加羅を滅ぼして占領し、文字通りの三国時代となった。中国に対しては564年に北斉に朝貢して翌年に冊封を受け、その一方で568年に南朝の陳にも朝貢した。このように中国大陸の南北王朝との関係を深めたことは、半島北部の高句麗に大きな脅威を与えた。隋、唐に対しても建国後まもなく使者を派遣して冊封を受けた。

唐の中国統一の後に危機感を募らせた高句麗は淵蓋蘇文が実権を握って緊急軍事態勢を敷き、新羅と激しく対立するようになっていた百済の義慈王と連携（麗済同盟）したため、新羅は国際的に孤立することとなった。新羅は643年に善徳女王が唐に救援を求めたが、このときに唐からの救援は得られず、逆に女王を退けて唐の皇族を新羅王に据えることを求めてきた。このことが契機となって、新羅国内では親唐派と反唐派の対立を生じ、上大等の毗曇が女王の廃位を求めて反乱を起こした。乱を治めた金春秋（後の武烈王）と金庾信とは真徳女王を立てて親唐路線を継承していった。金春秋は中国の律令制度を取り入れる改革を始め、650年にはそれまで新羅独自で用いていた年号（太和）を廃止し、唐の年号を用いるなどして、唐との連携を強めていった。

日本との関係　新羅建国の王族の昔氏が倭人とされる。また、新羅の重鎮には倭人も登用されていたと考えられ、三国史記には新羅への数千人規模の倭人渡来、また倭国による新羅への軍事的な侵攻が度々記述されている。多くの場合日本側が勝利を収め、新羅側は食料・金銭・一部領土等を日本に割譲した。広開土王碑によれば、「新羅は高句麗の属民であったが、倭が391年に百残・加羅・新羅を臣民となした」とあり、上代の時期に日本の属国になっていたことが窺える。

また、倭の五王のうち珍王と済王が、南朝宋の文帝から「使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓・六国諸軍事安東大将軍」という称号をもらっており、日本列島と朝鮮半島南部の支配者として公式に認知されていた時期もあった。

三韓征伐（新羅征伐・遠征）においては神功皇后の存在の有無はともかく、倭国から新羅（朝鮮半島）への大規模な軍事侵攻があっただろうことは、朝鮮や中国の資料に残る新羅が倭に従属した経緯から窺える。

中代（654～780年）　武烈王の即位した654年から、その直系の王統が途絶える780年までの時代を中代と呼び、新羅の国力が最も充実していた時代であった。 新羅は金庾信が援軍を率いて、唐軍に付き随い百済へ進軍。660年に百済を滅ぼし、663年に唐軍が白村江にて倭国の水軍を破ると（白村江の戦い）、668年に唐軍が高句麗を滅亡させた戦いにも従軍した。

新羅の半島統一　その後、唐が西方で吐蕃と戦争している隙に反乱を起こして、676年に唐の行政府に駐留する役人や警備部隊を奇襲して殺害、旧百済領と旧高句麗領の南半分を合わせて朝鮮半島をほぼ統一することに成功した。これ以後を日本では統一新羅時代と呼んでいる。

唐・渤海との関係　半島統一後、唐に対して謝罪外交をする一方、引き続き唐との小競り合いが続いたので関係は緊張し続け、北境に長城を築くなどして唐に対抗した。しかし、696年に唐と渤海との間に戦端が開かれると渤海により唐と新羅は国境線を接しなくなった。これ以後を今日の韓国や北朝鮮では南北国時代と呼んでいる。南北国時代とは、南の新羅と北の渤海を一組にした時代認識である。

(Wikipedia抜粋)

百済

百済（くだら / ひゃくさい）は、古代の朝鮮半島南西部にあったツングース系夫余＝徐族による国家（346年? - 660年）。朝鮮史の枠組みでは、半島北部から満州地方にかけての高句麗、半島南東部の新羅、半島南部の伽耶諸国とあわせて百済の存在した時代を朝鮮半島における、三国時代という。新羅を支援した唐によって滅ぼされ、故地は最終的に新羅に組み入れられた。

歴史　百済は4世紀中頃に国際舞台に登場する（『晋書』「慕容載記」）。それ以前の歴史は同時代資料では明らかでない。建国時期が書かれている『三国史記』（1143年執筆）では紀元前18年建国になっており、韓国・北朝鮮の国定教科書ではこれを引用している。通説では『三国志』に見える馬韓諸国のなかの伯済国が前身だと考えられているが詳細は不明である。

民族と言語　民族については、百済王・高句麗王（夫余）等に代表されるツングース系夫余族＝徐族の国家だったとする説と、ツングース系夫余族の支配層（王族・臣・一部土民）と韓族の被支配層（土民中心）からなっていたとする説の2説がある。百済の支配層は扶余族＝徐族だったと見られている。百済の建国神話は系譜の上で扶余＝徐とつながりがあり、26代聖王が538年に泗沘に遷都した後に国号を「南扶余」としたこともそれは窺える。『隋書』百済伝には「百濟之先、出自高麗國。其人雜有新羅、高麗、倭等、亦有中國人。（百済の先祖は高句麗国より出る。そこには新羅人、高句麗人、倭人などが混在しており、また中国人もいる）」ということから、雑多な系統の移民の集落が散在する国家だったと考えられる。

建国神話　前漢の鴻嘉3年（前18年）、高句麗の始祖・朱蒙の三子温祚が百済を建国した。その国は百姓を受け容れたので国号は「百済」になったという。また初め百家で海を渡ってきた（百家済家）ので「百済」とした、ともいう。

歴史　=== 前期：漢城時代（ –475年） === 中国の史料で百済という国号が明らかになるのは4世紀の近肖古王からである。日本の『古事記』では、応神天皇の治世に照古王の名が記されている。その頃の百済の都は現在のソウルの漢江南岸にあり、漢城と呼ばれた。

高句麗と百済の戦争　漢城時代の百済は拡大を続ける北方の大国・高句麗との死闘を繰り返した。369年には、倭国へ七支刀を献上している。浜田耕策は倭国と友好関係を構築するためだったとしている。近肖古王は371年に楽浪郡の故地である平壌を攻めて高句麗の故国原王を戦死させたこともある。しかし、その後は高句麗の好太王や長寿王のために押され気味となり、高句麗に対抗するために倭国と結ぶようになった。この間の事情は好太王碑文に記されている。高句麗の長寿王は平壌に遷都し、華北の北魏との関係が安定するとますます百済に対する圧力を加えた。これに対して百済は、この頃に高句麗の支配から逃れた新羅と同盟（羅済同盟）を結び、北魏にも高句麗攻撃を要請したが、475年にはかえって都・漢城を落とされ、蓋鹵王が戦死した。

中期：熊津時代（475–538年）　王都漢城を失った475年当時、新羅に滞在していて難を逃れた文周王は都を熊津（現・忠清南道公州市）に遷したが、百済は漢城失陥の衝撃からなかなか回復できなかった。

南朝・倭国との外交関係　東城王の時代になって中国・南朝や倭国との外交関係を強化するとともに、国内では王権の伸張を図り南方へ領土を拡大して、武寧王の時代にかけて一応の回復を見せた。

新羅の台頭と遷都　しかし6世紀に入ると、新羅が大きく国力を伸張させ、高句麗南部へ領土を拡大させた。このような中で百済の聖王は538年都を熊津から泗沘（現・忠清南道扶余郡）に遷した。この南遷は百済の領土が南方（全羅道方面）に拡大したためでもあると考えられる。

後期：泗沘時代（538–660年）

新羅との対立　聖王によって泗沘に都が遷されると同時に、国号も南扶余と改められたが、この国号が国際的に定着することはなかった。この頃、かつての百済の都だった漢江流域も新羅の支配下に入り、高句麗からの脅威はなくなったものの、これまで同盟関係にあった新羅との対立関係が生じた。

倭国・高句麗との同盟　聖王は倭国との同盟を強固にすべく諸博士や仏像・経典などを送り、倭国への先進文物の伝来に貢献したが、554年には新羅との戦いで戦死する。ここにおいて朝鮮半島の歴史は高句麗と百済の対立から百済と新羅の対立へ大きく旋回した。百済は次第に高句麗との同盟に傾き、共同して新羅を攻撃するようになった。

新羅の女王はしきりに唐へ使節を送って救援を求め、高句麗と争っていた唐は日本からの遣唐使を黄海に面した領土を獲得した新羅経由で帰国させるようにして新羅の要請に応え、朝鮮半島は遠交近攻による「百済-高句麗」（麗済同盟）と「新羅-唐」（唐羅同盟）の対立となり、どちらのブロックに与するかが倭国の古代東アジア外交の焦点となった。

百済滅亡　660年、唐の蘇定方将軍の軍が山東半島から海を渡って百済に上陸し、百済王都を占領した。義慈王は熊津に逃れたが間もなく降伏して百済人は新羅および渤海や靺鞨へ逃げ、百済は滅亡した。

百済復興運動　唐は百済の領域に都督府を設置して直接支配を図るが、唐軍の主力が帰国すると鬼室福信や黒歯常之、僧道琛（どうちん）などの百済遺臣の反乱を抑え切れなかった。また百済滅亡を知った倭国でも、百済復興を全面的に支援することを決定し、倭国に人質として滞在していた百済王子・扶余豊璋を急遽帰国させるとともに阿倍比羅夫らからなる救援軍を派遣し、斉明天皇は筑紫国朝倉橘広庭宮に遷った。

白村江の戦い　帰国した豊璋は百済王に推戴されたが、実権を握る鬼室福信と対立し、遂にこれを殺害するという内紛が起きた。やがて唐本国から劉仁軌の率いる唐の増援軍が到着し、663年倭国の水軍と白村江（白馬江）で決戦に及んだ（白村江の戦い）。これに大敗した倭国は、各地を転戦する軍を集結させ、亡命を希望する百済貴族を伴って帰国させた。豊璋は密かに高句麗に逃れた。しかし、高句麗もまた668年に唐の軍門に降ることになる。

新羅と唐の対立　唐の支配に反発した新羅は百済・高句麗を名目的に復興させて反唐戦争（唐・新羅戦争）に動員し、倭国とも友好関係を結んだ。西方で国力をつけた吐蕃の侵入で都長安までもが危険に曝される状態となった唐は、物理的に遥かなる遠方に位置する上に、紛争続きで経営が困難だった朝鮮半島を放棄せざるを得なくなり、これで百済の故地は新羅の支配下に入った。新羅は百済故地に残留した百済の支配層を新羅の貴族階層へ取りこんでいくことで新羅支配の実効性を確保していった。ただし、前述のように扶余隆の子孫への帯方郡王任命は継続されており、唐は表向きは百済への支配権を主張する体裁を採っていた。

倭国との関係　倭国との外交関係としては、百済の中期に高句麗の軍事的圧力に対抗するために和通したことが記録されている。『日本書紀』には、隣国に攻められ窮地に陥った百済に対して日本が援軍を派兵した記録や、領土を奪われた百済に任那の一部を割いて与えた記録、さらには百済が日本に朝貢したり、王族を人質として差し出した記録などが数多く記されている。その一方で『日本書紀』には「百済は是多反覆しき国なり。道路の間すらも尚詐く」と記されており、結局すべては対新羅、そして任那の権益をめぐっての戦略外交だったことが窺える。

百済遼西経略説　百済が中国の遼西地方に進出したという、いわゆる「百済遼西経略説」は、『宋書』『梁書』などの南朝系史書から始まったものである。それによれば、『晋（265年 - 420年）の時に高句麗が遼東を占領した後（404年以降）[24]に、『宋書』によれば百済もまた遼西地方を征服して晋平郡を設置した（『梁書』では、晋平郡遼西郡の2郡を併合して百済郡を置いた）』という。実際に遼西地方を支配していた北朝系史書には関連記録が全く見られず、韓国・北朝鮮以外の学界では主要な学説とは認められていない。韓国の学界においても一般的には百済の遼西進出については否定的な見方が大勢だが、近年もなお百済の遼西進出を事実とする説は提起されている。

(Wikipedia抜粋)

弁韓（べんかん）は、紀元前2世紀末から4世紀にかけて朝鮮半島南部に存在した三韓の一つ。弁辰とも言う。

領域

馬韓の東、辰韓の南、日本海に接し、後の任那・加羅と重なる場所にあった地域である。その境は、辰韓と接しており、入り組んでいた。のち、金官国（駕洛国）がこの地域の盟主となり、それぞれの国家の連合をつくった。

社会・風俗

『三国志』魏書弁辰伝によると、辰韓と弁辰（弁韓）は、風俗や言語が似通っていたという。土地は肥沃で、五穀や稲の栽培に適していた。蚕を飼い、縑布を作った。大鳥の羽根を用いて死者を送るがそれは、死者を天空に飛揚させるという意味であった。鉄の産地であり、韓、濊、倭などが採掘していた。市場での売買では鉄が交換されており、それは中国での金銭使用のようであった。また倭人とも習俗が似ており、男女とも入れ墨をしていたとある。武器は馬韓と同じであった。礼儀がよく、道ですれ違うと、すすんで相手に道を譲った。

歴史

三韓時代

朝鮮半島南部の洛東江下流地域には、紀元前5世紀から紀元前4世紀にかけて無紋土器（無文土器）を用いる住民が定着しはじめた。彼らは農耕生活をしながら支石墓を築造し、青銅器を用いた。紀元前1世紀頃に青銅器と鉄器文化を背景に社会統合が進み、慶尚北道の大邱・慶州地域に辰韓諸国が現われた。紀元前後にこれらの製鉄技術が慶尚南道海岸地帯に普及したことで、この地域は豊かな鉄産地の保有と海運の良好な条件によって相当な富と技術を蓄積するようになった。それによって社会統合が進み、弁韓諸国が登場してくる。

駕洛国（金官伽耶）

2世紀から3世紀、政治的には辰韓と弁韓に大きく分けられていた。弁韓地域の中で一番優勢な勢力は金海市付近の駕洛国（金官伽耶）であった。金官伽耶は、自身を盟主として前期伽耶連盟を形成し、対外的に周辺地域と交易を行い、斯盧（新羅）を中心とする辰韓と勢力を争った。

4世紀初に至り高句麗は楽浪郡・帯方郡を消滅させて新羅にまで勢力を及ぼすようになった。

倭国と高句麗の戦争

4世紀末から5世紀前半にかけては広開土王碑文によれば、391年、倭が百済と新羅を破り臣民とする。393年には倭が新羅の王都を包囲する。397年、百済が倭国に阿シン王の王子腆支を人質に送り国交を結んだ。いったん高句麗に従属した百済が、399年高句麗を裏切り倭と通じる。400年には倭が新羅の王都を占領していた。高句麗の広開土王が新羅の要請に応じて軍を派遣し、倭軍を任那・加羅に退かせ、高句麗軍はこれを追撃した。402年、新羅も倭国に奈忽王の子未斯欣を人質に送り国交を結ぶ。404年には高句麗領帯方界にまで倭が攻め込んでいる。

日本書紀神功皇后49年3月条に神功皇后が新羅へ親征し服属させた三韓征伐の記事に、将軍荒田別（あらたわけ）及び鹿我別（かがわけ）を派遣し、七カ国を平定した。さら西方に軍を進めて、四つの邑を降伏させた記事がある。

(Wikipedia抜粋)

加羅【から】

古代朝鮮の南東部にあった国名。伽耶(かや)，駕洛(から)などとも。中国史料に見える三韓のうちの弁韓（弁辰）の領域とほぼ対応するものと推定され，洛東江の下流域を中心に，時代により中流域まで及ぶ。加羅諸国は三国時代の前半期に活動が盛んで，金海加羅や高霊加羅（大伽耶）がよく知られた。《日本書紀》に言う〈任那(みまな)〉は諸小国の総称であるが，任那は本来金海加羅を指す。金海加羅は532年，高霊加羅は562年に新羅(しらぎ)に併合された。のち日本では〈韓〉を〈から〉と訓んで朝鮮全体をさし，〈唐〉をも〈から〉と訓んで中国をさすようになる。（コトバンク）

伽耶は対馬対岸の洛東江流域の国で、1世紀から6世紀の所謂任那の滅亡まで、存在したとしている。この間2世紀までは弁韓と呼ばれ、また3世紀初めに対馬で興った任那によって占領され、6世紀の任那滅亡までは、任那と呼ばれます。尤も、伽耶は任那の一部あるいはほぼそのもので、時代によって微妙に違う。この伽耶あるいは任那には白村江の戦いでの敗戦まで一貫して倭人（古の日本人）の居住地であり倭国の支配下にあったと考える。（藤田）

大伽耶（高霊加羅）、伊西国（所謂、高天原か）

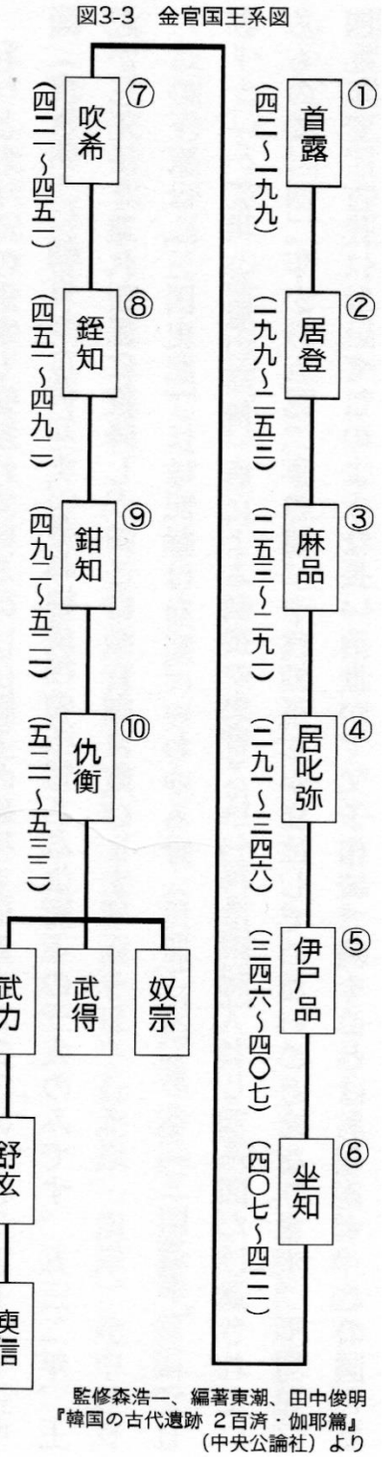
大伽耶、朝鮮古代の伽耶（加羅）諸国中の有力国。別名は高霊加羅。現在の慶尚北道高霊郡を中心とし，王都は高霊邑、王都防衛の山城は西方の主山と東方の望山とにあり，池山洞を中心に高霊古墳群がある。伊西国は大邱の南側盆地。

大加羅（金海加羅）、狗邪韓国（金官国）

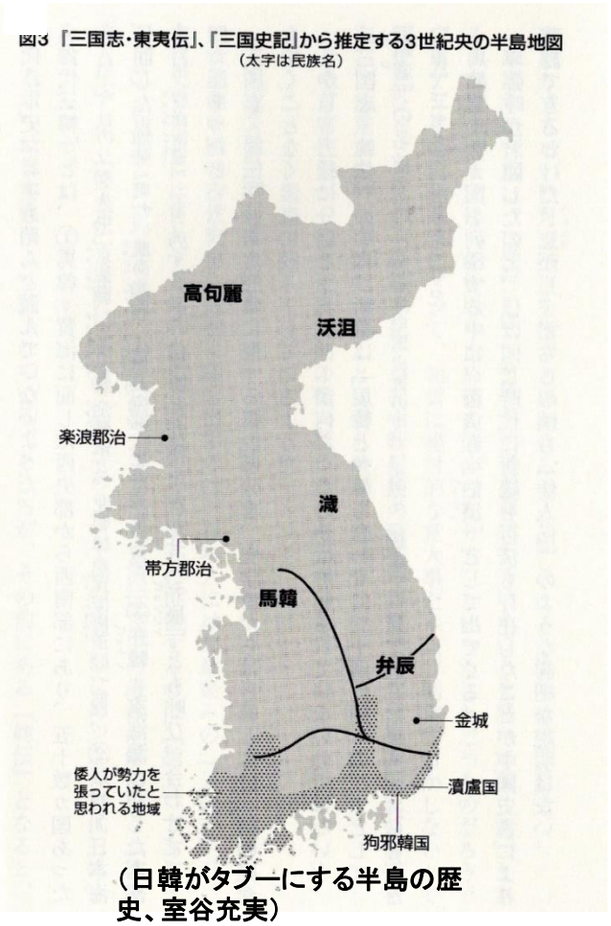
1世紀中葉に倭人の国で最も北に位置する大加羅（金海加羅）（慶尚南道金海市）とその北に位置する弁韓諸国と呼ばれる小国家群が出現している。後に狗邪韓国（金官国）となる地域は、弥生時代中期以後になると従来の土器とは様式の全く異なる弥生式土器が急増し始めるが、これは後の狗邪韓国（金官国）に繋がる倭人が進出した結果と見られる。（Wikipedia抜粋）

狗邪（伽耶・加羅）韓国、金官国の王家の系図が残されている（右図）。このうち著名な王は、伝説の首露王、南斉に朝貢した荷知王、最後の仇衡王であり、この系図は{三国遺事」の「駕洛國記」にある。
（知っていますか、任那日本府、大平 裕）

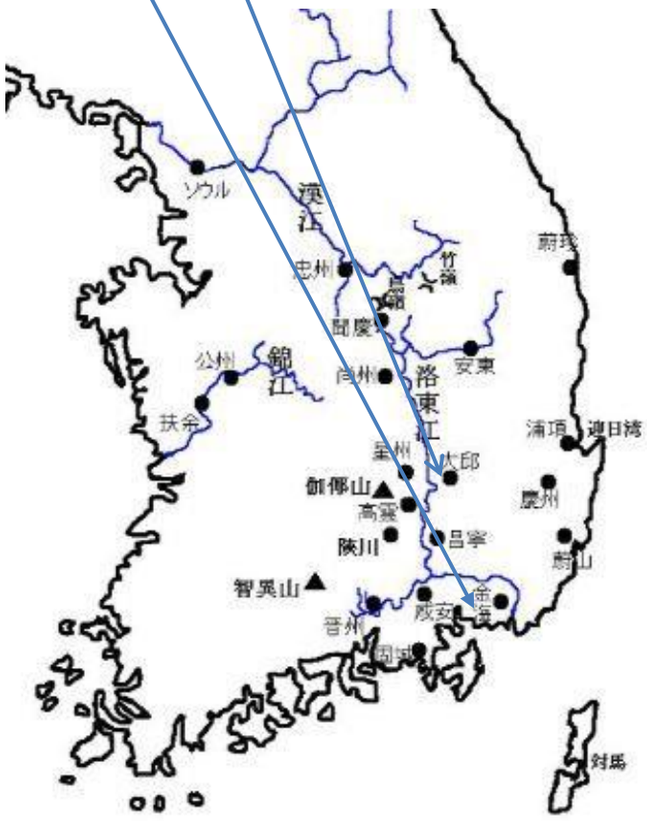
（北野正一、FB投稿2020-2-12）



『魏志倭人伝』によれば、「倭にいたるには……（中略）その北岸、狗邪韓国に到着するまで7千余里」という記述があるが、これは倭人伝なので「その」は明らかに「倭の」という意味である。倭人伝の記述を素直に読めば狗邪韓国は朝鮮半島の南部にあったはずであるから、つまり当時の倭国の北端は狗邪韓国だったということになる。また『魏志韓伝』にも倭の北端が朝鮮半島の南部にあったことを示す記述がある。
（別冊宝島 2283　日朝古代史　嘘の起源、室谷充実）



（日韓がタブーにする半島の歴史、室谷充実）



(【韓国飲料水崩壊】韓国人、Net)

任那（みまな、にんな、369年（～400年）- 562年）は古代に存在した朝鮮半島南部の地域。

概要

朝鮮半島における倭国の北端である『三国志』魏書東夷伝倭人条の項目における狗邪韓国（くやかんこく）の後継にあたる金官国を中心とする地域、三韓の弁辰、弁韓および辰韓の一部、馬韓の一部（現在の全羅南道を含む地域）を含むと看做すのが通説である。任那諸国の中の金官国（現在の慶尚南道金海市）を指すものと主張する説もある。後に狗邪韓国（金官国）そして任那となる地域は、弥生時代中期（前4、3世紀）に入り従来の土器とは様式の全く異なる弥生式土器が急増し始めるが、これは後の任那に繋がる地域へ倭人が進出した結果と見られる。

第二次世界大戦後、次第に政治的な理由により任那問題を避けることが多くなっていたが、倭が新羅や百済を臣民とした等と書かれている、広開土王碑日本軍改竄説が否定され、史料価値が明確になったこと、またいくつもの日本固有の前方後円墳が朝鮮半島南部で発見され始めたことなどから、近年ヤマト朝廷そのもの或いは深い関連を持つ集団による統治権、軍事統括権および徴税権の存在について認める様々な見解が発表されている。

領域

任那のさす領域については、相異なった二つの見方＝広義と狭義とがある。

広義と狭義の任那

広義の任那は、任那諸国の汎称である。日本史料では任那と加羅は区別して用いられ、任那を任那諸国の汎称として用いている。中国及び朝鮮史料の解釈でも、広義では任那諸国全域の総称とする説がある。百済にも新羅にも属さなかった領域＝広義の任那の具体的な範囲は、例えば478年の倭王武の上表文にみられる「任那・加羅・秦韓・慕韓」にて推測できる。ここにでてくる四者のうち、任那は上記の「狭義の任那」＝金官国（及び金官国を中心とする諸国）。同じく加羅は「狭義の加羅」＝大加羅（及び大加羅を中心とする諸国）。秦韓はかつての辰韓12国のうちいまだ新羅に併合されず残存していた諸国、例えば卓淳国や非自本国、啄国など。慕韓はかつての馬韓52国のうちいまだ百済に併合されず残存していた諸国、例えば百済に割譲された任那四県など、にそれぞれ該当する。『日本書紀』ではこれらの総称として任那という地名を使っているが、これらはこの後、徐々に新羅と百済に侵食されていったため、時期によって任那の範囲は段階的に狭まっており、領域が一定しているわけではないので注意が必要である。

（続き）

任那日本府

1960年代頃から朝鮮半島では民族主義史観が広がり、実証主義への反動から、『記紀』に記されているヤマト王権の直接的な任那支配は誇張されたものだとの主張がなされた。しかしながら、1983年に慶尚南道の松鶴洞一号墳（墳丘長66メートル）が前方後円墳であると紹介（ただし後の調査により、松鶴洞一号墳は、築成時期の異なる3基の円墳が偶然重なり合ったもので前方後円墳ではないと判明）されて以来、朝鮮半島南西部で前方後円墳の発見が相次ぎ、これまでのところ全羅南道に11基、全羅北道に2基の前方後円墳があることが確認されている。また朝鮮半島の前方後円墳は、いずれも5世紀後半から6世紀中葉という極めて限られた時期に成立したもので、百済が南遷して併呑を進める以前に存在した任那地域の西部や半島の南端部に存在し、円筒埴輪や南島産貝製品、内部をベンガラで塗った石室といった倭系遺物を伴うことが知られている。

ヤマト王権の勢力を示す他の傍証としては、新羅・百済・任那の勢力圏内で大量に出土（高句麗の旧領では稀）しているヒスイ製勾玉などがある。戦前の日本の考古学者はこれをヤマト王権の勢力範囲を示す物と解釈していたが、戦後に朝鮮から日本へ伝来したものとする新解釈が提唱されたこともあった。しかし、朝鮮半島にはヒスイの原産地がなく、古代においては東アジア全体でも日本の糸魚川周辺以外にヒスイ工房が発見されないことに加えて、最新の化学組成の検査により朝鮮半島出土の勾玉が糸魚川周辺遺跡のものと同じことが判明し、日本からの輸出品であることがわかった。

そのため、任那や加羅地域とその西隣の地域において支配権、軍事動員権および徴税権を有していた集団が、ヤマト王権と深い関連を持つ者達だった。ただしそれらは、ヤマト王権に臣従した在地豪族であって、ヤマト王権から派遣された官吏や軍人ではないという意見が有力である。ともあれ少なくとも軍事や外交を主とする倭国の機関があり、倭国は任那地域に権限と権益（おそらく製鉄の重要な産地があった）を有していたであろう。

(Wikipedia抜粋)

Wikipedia

「三国志」（魏志弁辰（弁韓）伝）（弁韓はほぼ任那の地にあたる）

1．弁辰は12国（大国）を数えるが、多くの小国がある。

2．大国は4000~5000家、小国は600~700家、総計4,5万戸。

3．国々から鉄を算出する。韓・濊・倭が皆鉄を取っている。どの市場の売買でも、みな鉄を用いていて（それは）中国で銭を用いているのと同じである。そしてまた（鉄を楽浪・帯方）2郡にも供給している。

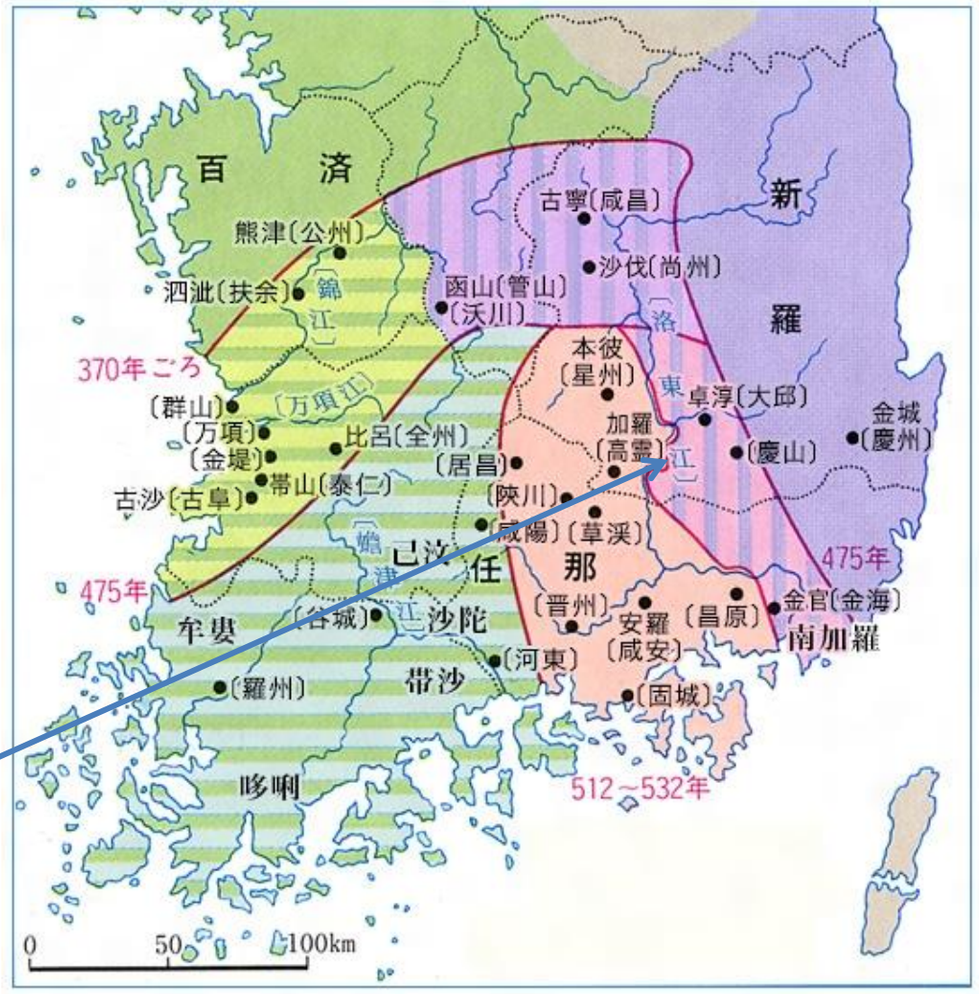
4．弁辰（弁韓）は、辰韓（後の新羅）と入り混じって生活している。また、弁辰（弁韓）には織部があり、衣服や住居は辰韓と同じである。言語や法俗もともに似ている。

任那は対馬に興った！　任那と日本は同義語！

『桓壇古記』によれば、任那とは対馬に興り、九州をも含んだ国と考えられる。
任那・連政（広義の任那）は、南朝鮮（伽耶諸国）から九州北中部にかけて成立した国家連合である。（邪馬台国時代の伊都国がこの国家連合の中核か）。任那は国力の隆盛のおもむくまま、勢力を日本列島東部に向かって拡張したのである。これが史実としては、崇神王権による畿内倭王権の樹立であった。この事態が任那の主力王権の東漸であったか、あるいは、その九州分権王国（＝分国）の成立であったかについては、なお検討すべき点である。著者（田中）は崇神とは九州の任那分国の王であり、畿内大和に侵入して新王権を立てた人格であったと考える。

九州の任那から東遷した勢力は、大和の地に入ってからも、自らを「任那」と号したのではないか。「日本」の国号が初めてあらわれるのが10世紀成立の『旧唐書』、11世紀成立の『新唐書』にみられる「倭国伝」等である。したがって、倭王権が倭から日本に国号を変えたのは、唐代に入ってからと考えられる。朝鮮の古地名では、‘本’は‘那’で国邑を表す。また‘日’は（nit）であり、‘任’(nin)に音韻上重なるものである。大和王権は任那滅亡にともなう新しい時代に対応して、国家的自立と自負を表明するため、「任那」の栄光の記憶を復活し、しかも「日の御子」の治める国にふさわしく「日本」という国号を立てたのではあるまいか。このように考えると『旧唐書』にある「日本はもと小国であったが、倭国の地を併合した」という記述がよく理解できる。（古代日本異族伝説の謎、田中勝也）

本著では「任那・連政」を「任那・伊都国連合」と呼称する。 右図は、4世紀後半(370年）から任那滅亡(562年）までの任那の領域を示す。任那は徐々に新羅と百済により蚕食されている。
（藤田）



任那の滅亡©Shogakukankotobank.jp

「倭王 武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」とする。（『宋書』順帝紀）「宋」は百済を除く南朝鮮のほぼ全領域への軍事権を認めている。（百済には宋の軍事権が及ぶと考えたか） このようにヤマト王権は古来から南朝鮮に支配権が及ぶと考えていたと捉える。尚、4世紀末（370年頃）の広義の任那の領域は、上図のように百済と新羅の南の領域を含んでいた。（藤田）

洛東江

朝鮮半島南東部の大河。太白山脈中の太白山に発し，甘川，琴湖江，黄江，南江等の支流を集めながらゆるやかに南下し，釜山市西方で朝鮮海峡に注ぐ。全長525km，流域面積は2.4万km2に達し，嶺南(慶尚道)地方のほぼ全体に及ぶ。雨量の豊富な南朝鮮を流れるため水量はゆたかで，流域には安東，金泉，大邱，晋州，金海など多数の盆地･平野が発達し，古くから加羅，新羅などの文化が形成され，今日も韓国の主要な農業地帯となっている。
（洛東江とはーコトバンク、Net)

神功皇后記には、倭に攻められた新羅王が、太陽が西に昇ったり、阿利那禮（アリナレ）河逆流でもしないかぎり、永久に倭王権に臣従するすると誓ったと記しているが、このアリナレ河とは阿羅（アリ）河（ナレ）で、洛東江のことである。神功記には倭の軍船が洛東江を遡ったとしている。
（古代日本異族伝説の謎、田中勝也）

阿羅国（安羅国）はアメノヒボコやツノガアラヒトの故地と思われるが、安羅国は、洛東江流域の慶尚南道咸安郡にあったと思われている。
（Wikipedia、伽耶）

ソナカシチとツノガアラシト

『日本書記』は垂仁紀で任那人・ソナカシチの来朝を告げている。また、崇神の時代、大加羅の王子でツヌガアラシトが到来した。ツヌガアラヒトは穴門に船でやってきたが、イツツヒコという名の伊都国？の王に道を妨げられたため、日本海を迂回して、出雲を経て、越国・笥飯浦（敦賀）に到着した。ツヌガアラヒトが帰国に当たって、倭王権から送られた品物を新羅に奪われたため、新羅と加羅が相争うに至ったと語っている。ツヌガアラヒトの国は加羅で、ソナカシチは任那の王族とある。すなわち。ソナカシチとツヌガアラヒトは同一人物の可能性が高い。（古代日本異族伝説の謎、田中勝也）

藤田

呉・越の滅亡と倭族（江南の民）の南朝鮮・倭（列島）への避難

●縄文時代から弥生時代前期にかけて、照葉樹林文化の江南から散発的に日本に稲作や青銅器文化などが流入していたと考えられる。さらに呉・越の滅亡を契機として、その後の秦や前漢の侵攻により、呉・越の遺民だけでなく、呉・越の領民となっていた東夷諸国の民たちも、稲作文化を携えて、朝鮮半島の中・南部に亡命し、辰国を築く。朝鮮半島の北部ではなく中・南部に入ったのは呉・越の敵対国であった燕が渤海湾、遼東半島さらに現在の平壌の近くまで勢力を伸ばしていたからである。その後、辰国から辰韓・弁韓が分立する。その後母体の辰国も馬韓となる。また、倭族（江南の民）の一部は倭国に達し、渡来系弥生人になった。この渡来系弥生人が水稲と金属器（とくに銅）、ならびに神道体系を持ち込んだと思われる。
呉からの渡来者は、北九州、山口、四国、近畿に向かった模様で、越からの渡来者は北陸に向かい越国と呼ばれるようになった？

●国津神は紀元前に呉・越から直接日本に移住した集団である。天津神は、南朝鮮の倭人あるいは南朝鮮に移住した江南の民が紀元前後から紀元後に日本に向かった集団と考えられる。（主たる国津神：大国主、猿田彦、大山津見神、熊野大神、など）

●最近の稲のDNAの研究によって、中国中南部から直接渡来したという考えが提唱されている。(b遺伝子は中国と日本に特有)

●土笛：弥生時代前期の日本海側遺跡（北九州～丹後）で見つかる。中国由来の農耕用祭祀。

●山口県土井ヶ浜遺跡は弥生時代前期から中期の墓地遺跡であり、山東半島からの直接の渡来人か。

●銅鐸の由来：中国南部・ベトナムの葬式では銅鼓が大地のうなりのように、連続して音を発する。大型の銅鐸は銅鼓に由来か？

●環壕集落は半島経由で環濠集落は江南から直接到来。甕棺、高床式倉庫および大型石包丁も江南からと思われる。

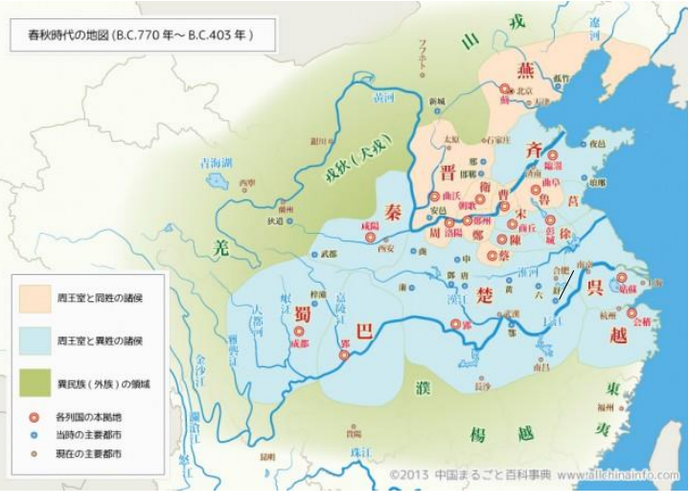
●呉伯太子孫の呉王夫差（呉の最後の王）の子「忌」は、BC473年呉の滅亡時に東シナ海に出て、菊池川河口付近（現熊本県玉名市）に到達し、菊池川を遡って現在の菊池市近辺に定住したと思われる（「松野連系図」参照）。呉王一族はそこを拠点として繁栄し、後の球磨国（狗奴国との説もあるが、現在は否定的）となったと推定される。この「忌」の住んでいたという火の国山門（菊池郡）は熊襲の本拠地と見なされている。（神社伝承・中国文献・考古学的事実の照合（古代史の復元）、Net）
また、鹿児島神社（姶良）には呉太伯伝説と犬の面が伝わっている。熊襲は隼人の古名。

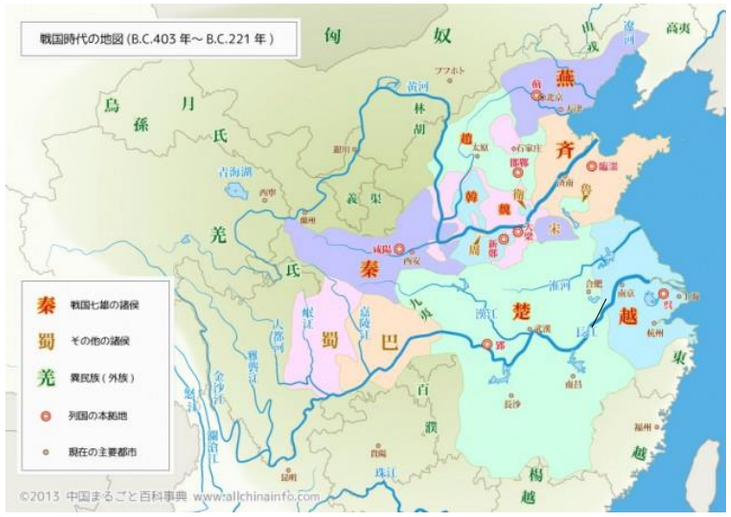
●著名な江南系渡来人：

隼人　隼人は犬祖民族の吐蕃やヤオ族を基層としてと思われるが直接的には江南あるいは海南島から沖縄を経て南九州に達したと思われる。

サルタヒコとウズメ　二人の結婚は猿と岩の女との結合を意味し、猿楽の猿女氏始祖となる。この結合はチベットや羌族の猿と岩の女との結婚というモチーフと一致する。江南から直接渡来か朝鮮半島経由かは不明。

久米　久米は熊襲に通じ、クメールを源とする？久米部は瓊杵尊を先導して天降ったと記されており、久米部は大伴氏の配下にあって軍事的役割を有していたと考えられている。





海人族（海神族）

海人族（かいじんぞく、あまぞく）、海神族は縄文時代から弥生時代以降にかけて海上において活動し、のちには海上輸送で力をつけることとなった集団である。

系統と分布

海人族には①インド・チャイニーズ系と②インドネシア系の２系統がある。
①は安曇系やその傍系の集団で、中国南部（江南地方）から東シナ海を北上、対馬海流に乗り山東半島、遼東半島、朝鮮半島西海岸、玄界灘、九州北部に達した集団と推定され、日本に水稲栽培がもたらされたルートと一致しており、倭族とほぼ同義であろうと考えられる。

兵庫県の淡路島には海人族に関わる逸話が古くからあり、北部九州から瀬戸内海を小舟で渡り淡路島に至るルート、または紀伊水道より上がるルートがあったとする説があり、青銅や鉄などが大陸からもたらされた。海人族研究で知られる甲元真之氏や系譜学者、宝賀寿男氏は瀬戸内海は岩礁や島々が多く外洋の船では航行できないとし、九州東岸から小舟に乗り換えたとする。淡路島は海人族の営みの地として「日本遺産」に認定されている。
②黒潮に乗って縄文時代に日本にやってきた南島系種族（隼人、久米）の可能性がある。

氏族

海人族に属す氏族には安曇氏、和邇氏、宗像氏などが有名である。ほかに海部氏（籠神社宮司家）や住吉大社の津守氏も元は海人族であったとする説がある。大国主も大山祇も元々は海神族と考える者もいる。
（Wikipedia抜粋　＋　藤田）

年表

弥生時代

前期

前400

中期

50年

後期

前771　中国春秋時代始まる

前473年　　呉の滅亡

前453　中国戦国時代始まる

前344年　　越の滅亡

首長集団、九州北部に渡来
青銅器の本格的な流入と鉄器使用の開始

前221　秦の始皇帝中国を統一

焚書坑儒

前219　徐福、不老不死の薬を求め出航

前202　前漢の建国（～後８年）

前108 楽浪郡設置

楽浪郡の南の海には倭人が住んでいる。そこには100余りの小国が形成されており、彼らは楽浪郡に定期的に貢ぎ物をもってくる。『漢書地理志」

紀元前2世紀、南朝鮮に辰国が成立、紀元後には三韓（馬韓、弁韓、辰韓）に分立、南朝鮮には主に倭人が居住

前57年 新羅(辰韓）建国（赫居世居西干）イザナギ？　近江に渡来

前37年 高句麗建国（東明聖王、朱蒙）

前18年　高句麗の始祖である朱蒙の三子温祚が百済を建国

紀元前後　このころ、倭は百余国に分かれ、楽浪郡に朝献

4年~24年　新羅　南解次次雄（スサノオ？）来倭（伊都国を建てる）、出雲侵攻、大国主を近江に東遷させる。「聞く銅鐸」の大量埋納

8年～23年、新

25年　後漢の建国（～220）

44年　辰韓・廉斯国の蘇馬諟が楽浪郡に入貢
蘇は金に通じ、金氏や蘇我氏と関係？

57年　奴国王、後漢・光武帝に使いを送り、金印を賜る

南朝鮮には、江南人、華北人や朝鮮人（高句麗系）が南下し、先住民たる倭人（縄文人）を圧迫

双環柄頭短剣の鋳型出土

高島市安曇川町三尾里の上御殿遺跡（弥生時代から古墳時代）で、弥生時代中期から古墳時代前期（紀元前350～紀元後300年ごろ）に作られた、柄の頭部にリング状の装飾（環（わ））が二つ施された青銅製の短剣「双環柄頭（そうかんつかがしら）短剣」の石製の鋳型が出土したと発表した。中国北方で見られる春秋戦国時代（前770～前221年）の「オルドス式短剣」に類似する。国内で見つかったのは初めてで、朝鮮半島でも確認されていない。日本海経由で直接到来か？（日経2013.8.9)

弥生時代中期に双環柄頭短剣が日本海系経由で列島にもたらされたということは、出雲の野ダタラ製鉄もまた沿海州から日本海経由でもたらされた可能性がある。（藤田）

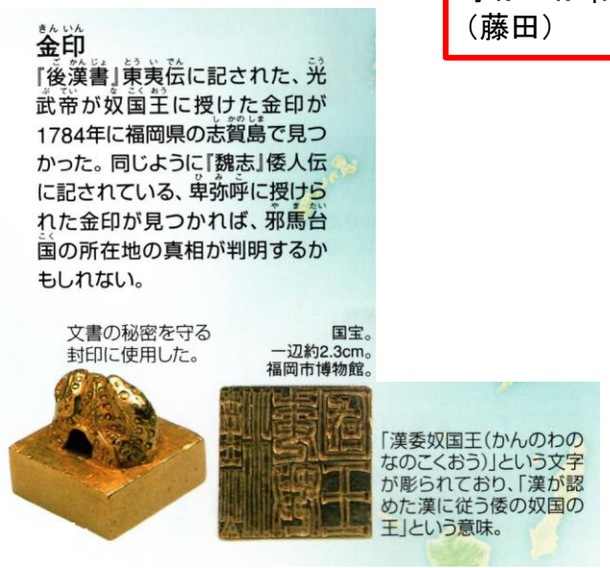
出雲を中心とする大国主の鉄・銅・玉のネットワーク確立

日本の壱岐市の原の辻遺跡では楽浪郡の文物と一緒に弥生時代の出雲の土器が出土。また、出雲の山持遺跡から楽浪土器が出土。、これらは、楽浪郡と壱岐、出雲の間の交流を示す。加茂岩倉遺跡や荒神谷遺跡のある出雲には、強大な国（大国主の国）があったと思われる。出雲が楽浪郡と深い関係を持ちながら、弁韓・辰韓・北九州・山陰・北近畿を覆う一大経済圏（大国主のネットワーク）を構築していたと思われる。（藤田）

新（王莽）の時代の銅鏡（方格規矩四神獣）が、豊岡市の森尾古墳（3世紀後半～4世紀前半）から出土、また貨泉(新のコイン）が丹後の久美浜町の函石浜で発見。

漢字の使用

筑前、豊前、出雲では紀元前数世紀の遺跡から、硯（すずり）が出土する。この出土は前漢が北朝鮮に楽浪郡を設置し、製鉄の拠点とした時期と一致する。当時、楽浪郡を中心とする鉄の交易ネットワークができたが、この鉄の商取引に楽浪郡に持ち込まれた漢字がつかわれたのではないのか。（藤田）



年表

弥生時代 後期 大己貴の国

邪馬台国（虚空見つ倭国ーニギハヤヒの国）

脱解王、脱解尼師今（だっかい にしきん）は、新羅の第4代の王（在位:57年 – 80年）であり、姓は昔（ソク）、名は脱解（タレ）。吐解尼師今（とかい にしきん、토해 이사금、トヘ・イサグム）とも記される。第2代の南解次次雄の娘の阿孝（アヒョ）夫人の婿。新羅の王族3姓（朴・昔・金）のうちの昔氏始祖。新羅初代王は朴赫居世で朴氏の祖。次次雄はスサングと発音され、スサノオに通じる。

天火明命（彦火明命、ホアカリ）はニニギの兄である。神武天皇はニニギにあたり、神武（崇神）東征は3世紀末のことと考える。神武東征の第1陣（1世紀半ば）は多氏を伴う三島神の東征か。（藤田）

ホアカリの3世孫倭宿禰命は丹（辰砂）を求めて大和に進出（ホアカリの東征）。丹後から由良川ー加古川ルートから淡路島に出て、紀ノ川を遡ったと推測する「鉄の路の一つ」。イヒカ（倭宿禰の母）は神武東征譚に現れる。

天孫降臨
ニニギ・ホアカリ

脱解王は多婆那国（丹波国？）の王の子といわれ、脱解王の出身氏族である昔氏は倭国と交易していた倭人の氏族とされる。脱解王は天火明命に当たると考えている。さらに、初代金官王：首露王がニニギに当たる。**ニニギたる首露王がインドより海路伽耶に伝わった仏教を筑紫にもたらした。**

大国主、近江伊勢遺跡を核とする大己貴の国「玉牆の内つ国」を建国

平原遺跡（伊都国）に内行花文八葉鏡出土、この頃伊都国が奴国を圧倒

奴国の和邇氏、筑前から近江・湖西に東遷

107年　倭国王、師升（伊都国王か？）等、後漢・安帝に使いを送る

157年　新羅第8代・阿達羅（あだるら）王の王子（？）、延烏郎（アメノヒボコか）、来倭

184–190年の後漢「中平」と紀年銘の鉄剣、和邇氏にわたる

146年 – 189年　この頃、倭国乱れる。
卑弥呼（17歳）を共立し、乱おさまる

189年以降、公孫氏（燕の後裔）有力化
邪馬台国は任那・伊都国連合と邪馬台国（山陽・山陰・南海道と近畿西部）とからなり、伊都国に一大率を置く （任那は対馬に興り、南朝鮮の大半を勢力下に置いた）

3世紀初頭、公孫氏、楽浪郡を廃し、その南部に帯方群を置く、卑弥呼、公孫氏より画文帯神獣鏡を入手

220年　中国、三国時代始まる
238年　魏により公孫氏、滅亡

都市牛利：丹波大縣主由碁理か

239年　卑弥呼、魏に使い（難升米・都市牛利ら）を送り、親魏倭王に任じられ銅鏡百枚などを賜る

三角縁神獣鏡

243年倭王再び魏に使い（伊聲耆ら）を送る

245年魏帝、難升米に黄幢を賜る

卑弥呼死す。男王が立つが収まらず、卑弥呼の宗女の臺（台）与（13歳）を女王とする

台与、魏に使い（掖邪狗ら）を送る

掖邪狗：和邇日子押人命？

266年倭 台与、西晋（晋）に使いを送る
288–297年、西晋の陳寿、『魏志倭人伝』を書く

晋（晉、しん、265年 - 420年）は、中国の王朝の一つ。司馬炎が魏最後の元帝から禅譲を受けて建国した。

『旧唐書(くとうしょ)』には、日本は倭国の別種であると記載され、もともと小国であった日本が倭国を併合したとも記述されている。『新唐書』でも、日本は、古くから交流のあった倭国とは別と捉えられており、日本の王の姓は阿毎氏であり、筑紫城にいた神武（崇神か）が大和を征服し天皇となり、600年頃に初めて中国と通じたと記述されている。

任那・伊都国連合の崇神（神武）の東征により邪馬台国が崩壊；任那は音韻上、日本に通じる

315年　崇神即位

八咫鏡（伊勢神宮皇大神宮）は平原遺跡（伊都国）出土の行花文八葉鏡と同じサイズ

倭国大乱

ニギハヤヒとアメノヒボコ協働して、吉備より大和に進出する。
和邇氏の巫女、卑弥呼を共立して、邪馬台国（虚空見つ倭国）建国。ニギハヤヒは孝霊天皇か！

倭国大乱は、気候が寒冷化したことによる高句麗（扶余）の南下が原因で引き起こされたと見られる。この頃から北関東以北で水稲栽培が見られなくなり、続縄文時代に先祖返りしたことと重なっている。（近江にいた弥生の大倭王、千城）

孫天村雲命（天火明命の孫）
- 丹生都姫
- 伊加里姫
- イヒカ井光
- 倭宿禰命 天忍人命

丹（辰砂）産地

邪馬台国・狗奴国の建国：狗奴国は玉牆の内つ国の後継国

「見る銅鐸」の大量埋納（大岩山古墳群）

画文帯神獣鏡は邪馬台国初期3世紀初め～中頃）公孫氏より入手し、威信財として国内に配られたと思われる。239年魏王から贈られた銅鏡100枚は**三角縁神獣鏡**（時代区分4段階の最初のもの）と思われ、239年の魏・晋の交代期に製造。その後晋からの舶来に頼ったが、晋が滅び（420年）、倭国で製造するようになった。（邪馬台国から大和政権へ、福永）

中臣氏の祖
- 伊香津臣命
  - 梨迹臣 邪馬台国 難升米？
  - 伊世理 邪馬台国 伊聲耆？

『日本書紀』の紀年と宝賀・貝田推論

第８表　古代天皇の治世時期の推定

世代	継承順	天皇名	事件	推計式の理論値	書紀の太歳	その比定値(A)	採用値	《参考》貝田氏の推計値	備考
				西暦年			西暦年	西暦年	
			東遷開始		甲寅	174	174	174	・神武元年は「太歳」としては記入されない。
①	1	神武	元年	175	(辛酉)	181	175	(176)	
			崩御年	196			崩194		
		(手研耳命)	(元年)		己卯	199	(194)	195	・己卯は綏靖が手研耳命を射殺した年の太歳。おそらく、手研耳命の即位年か。
②	2	綏靖	元年	196	庚辰	200	195		
	3	安寧	〃		癸丑	233	203	203	
③	4	懿徳	〃	224	辛卯	211	212	213	空位３年も摂政時期か。
④	5	孝昭	〃	245	丙寅	246	233	221	
	6	孝安	〃		己丑	269	242	242	
⑤	7	孝霊	〃	274	辛未	251	267	267	・３世紀後葉から古墳築造開始か。
	8	孝元	〃		丁亥	267	286	286	
⑥	9	開化	〃	302	甲申	324	300	300	
	10	崇神	〃		甲申	324	315	315	
⑦	11	垂仁	〃	331	壬辰	332	332	332	
	12	景行	〃		辛未	371	342	357	
⑧	13	成務	〃	359	辛未	371	357	372	◎372年夏に神功皇后征新羅か？
		(神功)	(元年)				372		
⑨	14	仲哀	〃		壬申	372	377	387	
		神功	摂政元年	380	辛巳	381	崩386	389	・神功39年にも太歳己未が記載されるが、事情不明。
			崩御年		己丑	389			
	15	応神	元年		庚寅	390	390	407	・倭五王の遣使記事 倭王賛の遣使 (413)、421、425 欠名倭王の遣使430 倭王珍の遣使438/4月 倭王済の遣使443、451 欠名倭王の遣使460 世子興の授爵462/3月 倭王武の遣使478 (倭王武の叙位479、502)
			崩御年				崩413		
⑩	16	仁徳	元年	409	癸酉	433	414	417	
			崩御年				崩435		
⑪	17	履中	元年	430	庚子	460	435	439	
	18	反正	〃		丙午	466	438	442	
	19	允恭	〃		壬子	472	441	445	
			崩御年				崩462		
⑫	20	安康	元年	466	甲午	451	462	466	
	21	雄略	〃		丁酉	457	465	467	
			崩御年				崩487	479	
⑬	22	清寧	元年	495	庚申	480	488	480	
	23	顕宗	〃		乙丑	485	493	以下(A)に同じ	
	24	仁賢	〃		戊辰	488	496		
	25	武烈	〃		己卯	499	507		
			崩御年				崩514		
	26	継体	元年		丁亥	507	515		
							崩534		
⑭	27	安閑	〃	531	甲寅	534	534	534	
	28	宣化	〃		丙辰	536	536		
	29	欽明	〃		庚申	540	540		
			崩御年	(567)	辛卯	571			
記入要領				㋐推計式(174.7＋13.0Gi＋7.8ΣNi)の値を四捨五入 ◎天皇の崩御年＝その次の天皇の即位年として記入する。	理論値に近い干支の年を記入。採用値と同じ数値をでくくる。		天皇の崩御年＝その次の天皇の即位年（元年の前年）、として記入。端数切捨て。	天皇の崩御年＝その次の天皇の即位年として記入。小数点以下は切捨て。	

「神武東征」の原像、宝賀寿男（p223）

『日本書紀』の紀年；宝賀・貝田推論

『日本書記』の全長1360年に及ぶ紀年の作成には、暦の関係者ばかりではなく、数学の関係者も参画していたと考えられる。旧暦の暦法は時代により変遷しており、1ツキが15日または30日、1トシが6か月であった。貝田氏は、「日付記事の分析により、1年の長さが、仁徳紀以前は実際の4倍に、履中紀から雄略紀までの間は実際の2倍に伸びており、太陰暦で読めるのは清寧紀以降である。」という。（古代天皇長寿の謎―日本書記の謎を解く一、貝田禎造）言い換えれば、仁徳紀以前は4倍年歴で、履中紀から雄略紀までは2倍年歴で記載されている。この貝田氏の推論を鑑みると、神武東征の開始は西暦174年となり、崇神元年は西暦315年となる。しかし、応神元年は『日本書記』の太歳を考慮し、西暦390年とする。（「神武東征」の原像、宝賀寿男）

邪馬台国の台与が西晋に使節を送ったのは西暦266年である。これは邪馬台国崩壊後の崇神元年の半世紀近く前であり、なんとか理解可能である。しかるに、神武東征の時期は摂津の河内潟の時代に当たると思われ、貝田推論より1世紀以上遡る。また、綏靖天皇から開化天皇までは、所謂、欠史8代と言われるほど事績が殆どない。さらに、神武東征は新羅王4代の脱解の時代で1世紀半ばのことと考える。従って、開化紀以前までにも4倍年歴を当てはめるのはかなり無理があると思う。私見では綏靖天皇から開化天皇までは大和の前ヤマト政権と考えており、崇神東征から始まる任那・伊都国出自の崇神らを核とするヤマト王権の崇神王朝以後の皇統とは異にすると考える。開化朝以前は一代を四半世紀程度と推算する方が天孫降臨の妥当な年代観（１世紀半ば）を与える。（藤田）

天孫・瓊瓊杵尊（ニニギ）の兄は彦火明命（ホアカリ）である。（瓊瓊杵から神武の系譜（日向三代）は作為的に挿入されたと考えると、瓊瓊杵と神武が同世代人あるいは同人格となる。）『記紀』の神武－開化天皇（1－9代)の系図と『海部氏勘注系図』の彦火明－乎縫命 (1－11)の系図とを並列させることができる。（とくに、『記紀』の懿徳－開化天皇（4－9代) と『海部氏勘注系図』の倭宿禰－乎縫命 (4－11)は、特に整合性・合理性をもたせて並列できる。）

『日本書紀』の天皇系図の紀年に宝賀・貝田推論を適用すると崇神即位は西暦315年となる（左表）。神武から開化まで9代、また彦火明命から乎縫命まで11代である。両方の代の数の平均は10代で、一代を四半世紀（25年）とすると瓊瓊杵（神武）および彦火明の即位（すなわち、天孫降臨の時期）は西暦65年となる。この年代は、金官国初代首露王（即位42年）や第4代新羅王脱解王（即位57年）と同年代である。（藤田）

『記紀』と天孫族の雑考

『古事記』と『日本書紀』の違い

『古事記』と『日本書記』は共に7世紀に天武天皇の命令によって編纂された書物であることは学校などで習っていますね。でも、なんでわざわざ2つに分ける必要があったのでしょうか？そもそも『古事記』と『日本書紀』に違いはあるのでしょうか？

まず、『古事記』ですがこれは天皇家による支配を正当化するために国内向けに書かれています。ですから、日本人に読みやすいように漢文体を組み替えた「日本漢文体」というのが使われていますよ。そもそも、『古事記』以前にも歴史書として500年代に編纂された『帝記』といわれる天皇の系譜が書かれたものや『旧辞』（きゅうじ）」という伝承を記した書物はあったのですが、修正に次ぐ修正で歴史書としての真実味は失われていっていました。その他の歴史書も焼けてなくなってしまったりしていましたから「正しい歴史書を後世に残さなければならない！」という理由で天武天皇は歴史書の編纂を命じたのです。

・・・というのは、表向きの理由。本当は、もっと天皇による支配に正当性を持たせよう。都合の悪いところは消してしまえっていうのが本来の目的！？だったのでは？と一般的にはいわれています。

ですから、天皇の先祖はアマテラスという女神ということになっています。日本列島を生んだのはイザナキとイザナミという神。そのイザナキの左目から生まれたのがアマテラス。そして、その子孫が初代天皇の神武天皇ってことになっているんです。日本を造った神様の左目から生まれたアマテラスが天皇の先祖なのだから天皇による支配は当然ってことですね。

さて、この『古事記』は『帝記』『旧辞』らを参考にし天武天皇の命によって編纂され（この最初の編纂は誰だかわかっていません）稗田阿礼（ひえだのあれ）というとんでもなく記憶力のいい人物に暗記させました。この稗田阿礼という人物は男か女かもわかっていません。『古事記』の序文に「一人の舎人（とねり・役職）がおりました。その氏は稗田、名は阿礼。年は28歳。生まれつき聡明な人で、一度目に触れたものは即座に暗誦し一度聞いた話は心に留めて忘れることがありません。そこで天武天皇は阿礼に仰せ下されて、「帝皇の日継」と「先代の旧辞」を誦み習わせなさったのです。」と書かれているだけです。もしかしたら、稗田阿礼という人物は記憶力が抜群だったので、すでに焼けてなくなってしまった書物なども頭に入っており、編纂に大きくかかわっていた可能性はありますね。

その後、天武天皇が突然亡くなってしまったため、『古事記』の編纂は中断。およそ30年経った711年に元明天皇によって再開され、稗田阿礼に口述させた内容を太安万侶（おおのやすまろ）によって執記、編纂させたのでした。

一方の『日本書紀』。こちらも天武天皇によって命じられ、川島皇子（かわしまのみこ）ら6名の皇族、6名の官人らによって681年から編纂がはじまります。『古事記』の編纂はすでに始まっていましたので稗田阿礼がまとめた資料をもとに編纂は進められたようです。

『古事記』が全3巻であるのに対して『日本書紀』は30巻+系図1巻という多さ！『古事記』の完成が712年ですが、その頃、まだ『日本書紀』は完成していません。『日本書紀』の内容を見ると藤原氏の地位の高さが強調されている部分がありますので藤原氏をはじめとする有力者の意見などが、まぁ～うるさかったんでしょうね。完成したのは720年になります。

天武天皇の子である舎人親王（とねりしんのう）によってまとめられ、やっと完成です。
（日本書紀と古事記の違い、Net)

神武と崇神

『日本書紀』における神武天皇の称号「始馭天下之天皇」と崇神天皇の称号である「御肇國天皇」はどちらも「はつくにしらすすめらみこと」と読める。「初めて国を治めた天皇」と解釈するならば、初めて国を治めた天皇が二人存在することになる。これについては、神武の称号にみえる「天下」という抽象的な語は崇神の称号の「国」という具体的な語より形而上的な概念であるため、本来は崇神が初代天皇であったが後代になって神武とそれに続く八代の系譜が付け加えられたとの説がある。私説では、南朝鮮出自の倭人で最初に大和に進出したのが神武天皇（三島神か）であり、一方、皇統の嫡流（ニニギの子孫）が初めて大和に進出したのが崇神天皇である。崇神天皇の即位をもってヤマト王権の始まりと見なす。（藤田）

『記紀』の時代的背景

奈良時代の貴族は、ヤマト王権の歴史をどのように捉えていたのだろうか。それはなかでも『古事記』の上巻の序文にあらわれている。『古事記』上巻の序文には、神代に記された神話のあらましと、推古天皇までの歴代の天皇とその治績があげられている。注目したいのはそこに選ばれた天皇とその事績は、神武・崇神・仁徳・成務・允恭天皇の５人とその事績である。神武天皇と崇神天皇はともに「はつくにしらすスメラミコト」すなわち「はじめてこの国を統治した天皇」と評価されている。次の仁徳天皇は「聖帝」と伝承されたとあり、漢風諡号に儒教的徳目「仁」と「徳」を用いて表現されている。それ故、天皇史のうえで「偉大な天皇」として選ばれたことは納得できる。

問題は、成務天皇と允恭天皇である。必ずしも馴染のある天皇ではなく、この二人の天皇が選ばれたことには、『古事記』が撰述された時代の歴史観があらわれているはずである。『古事記』序文に成務天皇は「境を定め邦を開きて、近淡海に制したまいき」、允恭天皇は「姓を正し氏を択びて、遠飛鳥にしらしたまいき」と書かれている。成務は『日本書紀』によれば「国群に造長（国造のこと）を立て」たという。つまり列島の地域行政組織に「国」と「県」が設置されたのであり、国土統治にうえで大きな治績と評されたのである。一方、允恭天皇は、氏・姓の氏姓制度を整えた。允恭の施策によって、貴族・百姓の身分的序列化が成し遂げられた。（ヤマト政権、吉村）

天孫族は、南朝鮮（南韓）出自と思われるが、彼らは南朝鮮の倭人（西日本縄文人）だと考える。というのは、朝鮮半島は1.2万年前から7,000年前までほぼ無人で、新石器人が居住し始めるのは縄文時代前期からである。縄文時代早期と前期の境に鬼界カルデラ噴火があり、九州南部と四国の西日本縄文人はほぼ壊滅した。この災厄からの避難民（西日本縄文人）の一群が南朝鮮に移り住み着いたのが新石器人居住の始まりだと考える。故に南朝鮮の現住民は倭人（西日本縄文人）だと言える。4,000年前地球の寒冷化が始まり、華北人や朝鮮人（高句麗系）の南下が始まる。また、華北人に追われた江南人が海路南朝鮮に逃避してきた。これら民族の南下に倭人は圧迫され次第に南下し、一部は列島に帰来するようになった。とはいえ、紀元前後までは弁韓と辰韓は倭人の勢力が優勢であったが、そのころ、天孫族の実質的な祖のスサノオもまた北九州に帰来し、伊都国を建てたと考えている。ニギハヤヒの建てた邪馬台国が始まる2世紀末頃、対馬の倭人が南朝鮮に侵入して、倭人の居住域を占領して建てた国家連合が任那である。任那と伊都国を中核とする北九州の国々との連合が任那・伊都国連合であり、この連合は倭人の国の連合と解せる。この連合の長と思われる天孫の瓊瓊杵尊の嫡流の崇神が、3世紀末に東征して邪馬台国）を乗っ取りヤマト王権を大和に樹立した。これらのことをまとめると皇統の嫡流の瓊瓊杵の系統が1世紀半ばから2,000年間続く、即ち、倭国は万世一系の天皇家の支配のもとにあったともいえる。
（藤田）

瓊瓊杵尊と天火明命は、各々金官国の首露王と大伽耶（伊西国を含む）の脱解王か！

『記紀』の系図群、『海部氏勘注系図』と『但馬の国風土記』に記載の天火明（ホアカリ）の系図、さらに『新撰姓氏録』の「稲飯命（神武天皇の兄）、新羅の祖」との記述、さらに『新羅本記』の新羅王室系譜をお互い並べ、考証すると次のことがわかる。

1. 皇統の祖から瓊瓊杵（ニニギ）への系図は、それに続く神武天皇からの天皇系図と直接に繋がる。従って、瓊瓊杵が神武天皇に当たる。（瓊瓊杵から神武の系譜（日向三代）は作為的に挿入されたと考えると、瓊瓊杵と神武が同世代人あるいは同人格となる。） 瓊瓊杵の天孫降臨は1世紀中頃の出来事である。また、天火明は瓊瓊杵の兄で稲飯命に当たる。

2. 新羅王室は3氏（朴、昔、金氏）からなり、この3氏の始祖伝承のすべてに倭人の瓠公が関わっている。日本の系図群と『新羅本記』の系図を比較すると次のことがわかる。狗邪韓国（金官国）の初代首露王は瓊瓊杵尊や神武天皇で、第4代新羅王（脱解王）は天火明命や稲飯命にあたる。脱解王と首露王、天火明命と瓊瓊杵尊、稲飯命と神武天皇は兄弟で各々同一人格である可能性が高い。彼らは、すべて、1世紀半ばの同世代人である。

さらに、伽耶には「アマテラスに比定されることもある正見母主に二人の息子、悩窒朱日と悩窒青裔が生まれ、悩窒朱日は大伽耶国（伊西国を含む）の国王に、悩窒青裔は首露王で金官国の初代王となった」という伝説がある（佐藤達矢、FB情報）。そこで、正見母主は高木神の娘、栲幡千千姫 （万幡豊秋津師比売命） と考えると、 正見母主の二人の息子、悩窒朱日と悩窒青裔が生まれた。悩窒朱日は第4代新羅国王の脱解王（天火明）で大伽耶の王となり、悩窒青裔は金官国初代王の首露王（瓊瓊杵）と考えられる。従って、新羅王室系譜（初期）は大伽耶（伊西国）王の系譜であると推定され、新羅王初代赫居世居西干は伊弉諾、第2代王南解次次雄は素戔嗚、第4代脱解王（天火明）は悩窒朱日（瓊瓊杵の兄）と考える。また、第8代阿達羅王の王子が天日槍（アメノヒボコ）に当たり、倭国大乱の時に来倭した。尚、金官国や大伽耶国は倭人の国であろう。（藤田）

崇神王朝（三輪王朝）に先行する弥生の国々

『日本書紀』に前ヤマト政権（国）と思われる3つの国が記載されている。紀元前後のイザナギ・イザナギの時代に近江にあったと思われる「浦安の国」、大国主（大己貴命）が近江に建てた「大己貴の国、玉牆の内つ国」、さらにニギハヤヒが大和に建てた「虚空見つ日本（倭）国（邪馬台（やまと）国）」である。尚、葛城・大和の前ヤマト国は、浦安の国の支国、玉牆の内つ国の支国（葛城王朝）、そして邪馬台国である。尚、大国主もニギハヤヒも、代々の彼らを称する人格の総称（世襲名）と考えている。また、『記紀』に記されている神武東征譚は、大山祇神（三島神）、ホアカリ、ニギハヤヒ、崇神、応神の東征を集合した「倭国平定譚」と考える。（藤田）

出雲（大国主）と大和（天孫族）

隠岐島（黒曜石の産地）を含む出雲は、西日本有数の火山県であり、温泉や種々の鉱物資源（玉、銅や鉄）に恵まれていた。縄文時代より、出雲は隠岐の黒曜石を持ち込み、また、メノウからの玉造りが栄えていた。大国主は弥生時代中期に、出雲の銅鉱を基盤とする青銅器（銅鐸に代表される）と渇鉄鋼と砂鉄を基盤とする鉄器のネットワークを西日本一帯に張り巡らせた。紀元前108年、前漢により楽浪郡が設置されたが、楽浪郡の製鉄所は、当時の倭国にはない大規模製鉄の技術を持っていた。『魏志韓伝』には、「倭人等は伽耶（弁辰）の鉄鉱石を採掘し、楽浪郡に供給していた」とある。楽浪郡からの舶載の鋳造鉄器は通貨代用品であり、鍛造鉄器の原料となる半製品である。出雲の大国主は、楽浪郡の鋳造鉄器を得るための交易ネットワーク（伽耶、筑紫、出雲、但馬・丹後）を構築した。このネットワーク構築前の中期中葉の鉄器の出土は、北九州が圧倒的に多いが、中期後葉になると中国地方や近畿北部での出土が多くなる。

紀元前後、伽耶（大伽耶の伊西国）からの渡来者のスサノオの北九州および出雲への侵攻により、大国主勢力が駆逐された。スサノオによって退治された八岐大蛇（ヤマタノオロチ）は出雲の大国主ことと思われる。また、殺されたヤマタノオロチの尾から草薙剣が出てきたが、これは当時の出雲で野ダタラによる砂鉄からの製鉄が行われていたことを示唆する。

ヤマタノオロチ伝説は出雲の須佐郷での出来事に矮小化されているが、元来この伝説はスサノオの北九州から出雲勢力の駆逐に伴ってもともと肥前神崎の姫巫女であった櫛名田姫を、征服者として妻にしたのではないか。それに伴い櫛名田姫は神崎の櫛田宮から博多の櫛田神社に遷ったのではないか。伊都国に近い博多の櫛田神社の祭神は以前には櫛名田姫であり、スサノオと誓約した天照大神とも考えられる。

スサノオの出雲侵攻により、大国主はスサノオに敗れ、青銅器祭器（銅剣、「聞く銅鐸」）が大量に埋納される（加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡）。それ以後、出雲では青銅器を祭器とする祭祀は行われなくなった。大国主は日本海側を東に勢力圏のネットワークの核を移した。丹後・若狭さらに近江に向かう。かくて、大国主の青銅器と鉄器のネットワークの拠点が出雲より近江に遷る。そして、近江の伊吹山を中心とする地域（伊富岐神社の祭神にヤマタノオロチも挙げられている）を拠点にして、湖南に大己貴の国（玉牆の内つ国（国都；伊勢遺跡）を建てたと思われる。ニギハヤヒによって引き起こされた倭国大乱により玉牆の内つ国が瓦解した。その際、玉牆の内つ国の祭器の大型青銅器祭器（巨大な「見る銅鐸」）が伊勢遺跡の近くの三上山の山麓の大岩山古墳群（野洲市）に埋納された。かくて、玉牆の内つ国は、ニギハヤヒの邪馬台国（国都、纏向遺跡）と大国主の玉牆の内つ国の後継国の狗奴国（国都、稲部遺跡か）に分裂した。崇神東征により邪馬台国が崩壊した後も狗奴国は生き残ったが成務天皇の時代に完全に滅びた。

（藤田泰太郎）

海神族と星辰信仰

『儺（な）の国の星』は、真鍋大覚氏（物部氏の末裔）の著作で、その続編が「拾遺」である。儺国は奴国（なこく）と思われる。奴国は『後漢書』「東夷伝」や『魏志倭人伝』にあらわれる倭人の国で、崇神朝以降のヤマト王権時代の儺県（なのあがた）、現在の福岡市付近に存在した。奴国は、阿曇氏、和邇氏等の海神族の国と見なされている。海神族は、航海の道標とする、太陽信仰、月信仰とともに星座を利用した星辰信仰をもっていた。（真鍋氏の著作は奴国の星辰信仰を解説する。）星辰信仰の中核はオリオン座の三つ星で夜間の航海の絶好の目標となった。かくて、海神族の神々は、オリオン座の三つ星に因んで三神となる。志賀三神は、底津綿津見神（そこつわたつみのかみ）、仲津綿津見神（なかつわたつみのかみ）、表津綿津見神（うはつわたつみのかみ）で、住吉三神は、底筒男命（そこつつのおのみこと）、中筒男命（なかつつのおのみこと）、表筒男命（うわつつのおのみこと）である。宗像三女神は、多紀理毘売命（たきりびめ）（沖津宮）、市寸島比売命（いちきしまひめ）(中津宮）、多岐都比売命（たぎつひめ）（辺津宮）である。さらに、海神族と思われる猿田彦が伊勢の阿邪訶の海で漁をしていた時、比良夫貝（ひらふがい）に手を挟まれ、溺れ死ぬ。この際、海に沈んでいる時に「底どく御魂」、猿田彦が吐いた息の泡が昇る時に「つぶたつ御魂」、泡が水面で弾ける時に「あわさく御魂」という三柱の神が生まれた。この三柱の神は志賀三神や住吉三神と類似している。海神族のオリオンの三つ星である三神（底・中・上の星）が、海から次々に昇って来ると読み取れる。

瀬戸内海に浮かぶ大三島には大山祇神社が鎮座する。大山祇神社は三島神社や大山祇神社の総本社で、山神社の総本社ともされる。祭神は大山祇神であるが、和多志大神や三島大明神（三島神）を別名とする。『伊予国風土記』によると、和多志大神は百済から渡来したとある。伽耶南岸の島嶼部にはかって三島と呼ばれた、三つ島（オリオン座の三つ星のアナログ）からなる巨文島がある。巨文島が、和多志大神すなわち大山祇神の起源地ではあるまいか。このことは大山祇神もまた海神族であることを示唆している。大山祇神の娘、コノハナサクヤヒメは瓊瓊杵尊の妻となり山幸彦を産んだ。このように、大山祇神は皇統の要の位置を占めている。物部氏の祖神の饒速日（ニギハヤヒ）は実質的な皇統の祖である素戔嗚命の御子神とされる。尚、大山祇神社の神職の越智氏は物部氏の一族とされている。

論理をかなり飛躍させるが、イザナギの禊ぎで最後の産まれた三貴神（三貴子）（天照大御神、月読命、素戔嗚命）は、太陽信仰、月信仰と星辰信仰の表れではあるまいか。天照大御神に高天原を、月読命には夜の国を、素戔嗚命には海原を委任した。紀元前後に渡来した素戔嗚命の子神がニギハヤヒ（物部の祖神）である。2世紀後半、ニギハヤヒの子孫（吉備で力を蓄える）は大和に東征（ニギハヤヒの東征）して邪馬台国を建てた。従って、邪馬台国の祭祀は、海神族の太陽・月・星辰信仰に基づく物部氏の祭祀と考えられる。ちなみに、東征したニギハヤヒの息子、宇摩志麻遅命（物部氏の祖、ウマシマジ）の不可解な名の由来だが、『儺の国の星』では、ウマシマジは銀河を表す「うましのみち」から由来しているとする。これも物部氏の星辰信仰に起因していると思われる。邪馬台国の物部氏の祭祀は、邪馬台国を継いだ崇神王朝に引き継がれた。

（藤田泰太郎）

藤田

古の日本(倭)の歴史(前1世紀～4世紀)－天孫族(伽耶族)の系譜

前一世紀
一世紀
二世紀
三世紀
四世紀

奴国
海神族の国　呉太白の末裔か

伽耶、のちの任那

伊弉諾尊　初代新羅王、赫居世居西千？

素戔嗚尊スサノオ　誓約うけひ　天照大御神　高木神

第2代新羅王
南解次次雄？

天之忍穂耳命　栲幡千千姫（万幡豊秋津師比売命）正見母主

イソタケル（饒速日命？）

天孫降臨　同伴：中臣氏、大伴氏、忌部氏

出雲古国
「聞く銅鐸」の国
（大国主ネットワークの中心）

スサノオの侵攻、八岐大蛇（大国主＝大穴持）敗死．「聞く銅鐸」の埋納、アジスキタカヒコネの近江・葛城への東遷．

浦安の国

近江を核
大国主（大己貴）の国

出雲王朝
アメノホヒら建国
邪馬台国時代の投馬国

近幾の前ヤマト政権の国）の系譜

欠史八代

近江を核とする
（大己貴の国）
玉牆の内つ国

大己貴と
少彦名の国

「見る銅鐸」の国

倭国大乱
「見る銅鐸」の埋納

大和を核

近江・美濃を核

初代金官王：首露王(42-199)、悩窒青裔

伊都国
（倭面土国、ヤマト国）

瓊瓊杵尊　筑前

彦火火出見尊

ウガヤフキアエズ

ウガヤ朝

和邇氏の東遷

南九州に進出

ニギハヤヒ（吉備）

ウマシマジ

物部氏

僸（な）の国

伊都国の系譜

1世紀半ば　葛城・大和

1. 神武天皇（狭野尊）

2. 綏靖天皇

3. 安寧天皇

4. 懿徳天皇

5. 孝昭天皇

6. 孝安天皇

7. 孝霊天皇

8. 孝元天皇

9. 開化天皇

10. 崇神天皇

11. 垂仁天皇

12. 景行天皇

13. 成務天皇

14. 仲哀天皇
神功皇后

15. 応神天皇

葛城多氏王権
（浦安の国の支国）

葛城王朝　始祖
（大己貴の国の支国）1世紀末

邪馬台国　始祖
（ヤマト国）2世紀末

多氏

三島神・多氏の東征

ニギハヤヒ東征

倭国大乱

卑弥呼共立

葛城氏、蘇我氏、平群氏、阿部氏

息長氏

和邇氏

滅亡か

ミマキイリビコイニエ

崇神東征 3世紀末
（隼人・久米人を伴う）
崇神即位315年

九州王朝（？）

応神東征 4世紀末
応神即位390年

第4代新羅王：脱解王(57-80)、悩窒朱日

彦火明命（ホアカリ）、稲飯命　丹後

アジスキタカヒコネ同伴
ホアカリ東征

倭宿禰

第8代新羅王、阿達羅王
王子、アメノヒボコ同伴

日本得魂命

乎縫命

邪馬台国滅ぶ
崇神王朝　ヤマト王権　始祖

狗奴国滅ぶ

応神王朝　始祖

海部氏、尾張氏

卑弥呼：
倭途途日
百襲姫

台与：
息長水依姫

崩壊か

邪馬台国　近江王朝
（西日本）

崇神王朝

狗奴国（東日本）

応神王朝

古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）－天孫族（伽耶族）の系譜

弥生時代中期の紀元前2世紀の倭国には、中国の春秋時代の末（BC473年）に滅亡した呉の遺民の子孫（呉太白の末裔）が筑前に建てたという海神族の雄国の「奴国」、戦国時代のBC344年に滅亡した越の遺民の血脈を引くという大国主により建国されたという「出雲古国」さらに出雲の流れを汲み農・産業の雄国の近江を中心とする「浦安の国」の3大国が存在した。このうちの「出雲古国」が、大国主（大穴持）の支配した、鉄、銅、玉のネットワークの中心の国である。紀元前108年、前漢により楽浪郡が設置された。楽浪郡の製鉄所は、当時の倭国にはない大規模製鉄の技術を持っていた。楽浪郡の鋳造鉄器は通貨代用品であり、鍛造鉄器の原料となる半製品である。海神族の出雲の大国主は、楽浪郡の鋳造鉄器を得るための鉄、銅と玉の交易ネットワーク（出雲古国を中心に、伽耶、筑紫、出雲、丹後・近江を覆う）を発展させた。楽浪郡の鋳造鉄器を含む交易品は、洛東江の水運を利用して伽耶北部の大伽耶（高霊加羅、大邱南の伊西国を含む）に集積されたと考えられる。これら鋳造鉄器等の交易品は、洛東江を南下すると大加羅（金海加羅、金官国）に至り、筑紫に運搬される。一方、大伽耶に集積した交易品は、斯蘆国（後の金城、慶州）の外港から出雲や丹後に向かう。紀元前後の大伽耶の素戔嗚（スサノオ）の筑前進出により伊都国が建国され、さらに出雲侵攻により、出雲古国は壊滅、大国主は敗死した。このため、大国主のネットワークの中心が出雲から近江へと遷り（アジスキタカヒコネらの東遷）、近江を核とする浦安の国を継ぐ、玉牆の内つ国（大己貴の国）が建てられた。尚、出雲古国の滅んだ出雲には、スサノオと高天原から派遣されたアメノホヒにより出雲王朝が建てられた。その後、出雲王朝の支配権は天津族より大国主一族の出雲残留者の出雲人に移ったが、この王朝は崇神朝まで連綿と栄えた。

前スライドは天孫族の系譜を示している。天孫・瓊瓊杵尊（ニニギ）の兄は彦火明命（ホアカリ）である。『記紀』の神武－開化天皇（1－9代)の系図と『海部氏勘注系図』の彦火明－乎縫命 (1－11)の系図とを整合性をもたせて並列させることができる。『日本書紀』の天皇系図の紀年に宝賀・貝田推論を適用すると崇神即位は西暦315年となる。（瓊瓊杵から神武の系譜（日向三代）は作為的に挿入されたと考えると、瓊瓊杵と神武が同世代人あるいは同人格となる。） 神武から開化まで9代、また彦火明命から乎縫命まで11代となる。両方の代の数の平均を取ると10代で、一代を四半世紀（25年）とすると瓊瓊杵（神武）および彦火明の即位は西暦65年となる。この年代は、金官国初代首露王（即位42年）や第4代新羅王脱解王（即位57年）と同年代である。尚、『新撰姓氏録』は、新羅の祖（昔氏の祖、脱解王）は稲飯命（神武の兄）だとしている。かくて、稲飯（脱解）が彦火明に当たるとすると、その弟の神武は瓊瓊杵に当たる。すなわち、瓊瓊杵（神武）と首露王は同一人格で、彦火明（稲飯）と脱解王もまた同一人格となる。伽耶の伝説『釈利貞伝』によれば「正見母主には悩窒青裔と悩窒朱日の二人の息子があり、悩窒青裔は金官国の初代首露王になり、悩窒朱日は大伽耶の王（脱解王）となった」とのことである。正見母主は、高木神の娘の栲幡千千姫（万幡豊秋津師比売命）であるとすると、天孫（瓊瓊杵と彦火明）は伽耶の出自となりそれぞれ伊都国と丹後国に降臨したことになる。以上より、天孫降臨の年代は1世紀半ばと結論する。また、新羅王室の系譜は大伽耶（伊西国を含む）の王の系譜となり、新羅王初代赫居世居西干は伊弉諾（イザナギ）、第2代新羅王南解次次雄は素戔嗚尊（スサノオ、天神）、第4代脱解王（彦火明（天孫））は悩窒朱日と考えられる。（即ち、脱解王の二代前が南海次次雄（スサング）で、天孫（瓊瓊杵と彦火明）の二代前がスサノオである。）尚、このように、新羅王室の初期系譜は大伽耶（伊西国を含む）の系譜であり、後世新羅となる辰韓の斯蘆国の系譜に移行したものと考える。

神武東征とは天津族による倭国平定譚であり、神武・ホアカリ・ニギハヤヒ・崇神東征を集合したものであると考える。1世紀半ばの神武東征は多氏を伴った三島神の東征とみる。神武から始まる天皇系図の2、3代の綏靖と安寧は、浦安の国の支国の王であろう。彦火明は1世紀半ばに丹後国に降臨した。2世紀初め、3世孫の倭宿禰が東征（ホアカリの東征）し、近江の玉牆の内つ国（大己貴の国）の支国である葛城王朝を建てた（倭宿禰は4代懿徳に当たる）。2世紀後半、吉備や筑前で力を蓄えた素戔嗚の息子、饒速日（ニギハヤヒ）の子孫は、アメノヒボコ（天之日矛、天日槍、第8代新羅王阿達羅王の王子）を伴い東征し、倭国大乱を引き起こした。ニギハヤは大己貴の国を崩壊させ、大国主と共に卑弥呼を共立して大和に邪馬台（ヤマト）国を建てた。ニギハヤヒは孝霊天皇（邪馬台国始祖）と同一人格であり、卑弥呼は孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命であろう。倭国大乱により、大国主の建てた玉牆の内つ国（大己貴の国）は、ニギハヤヒの邪馬台国（西日本）と大己貴の国の後継国の狗奴国（東日本）に分裂した。玉牆の内つ国（大己貴の国）を継いだ狗奴国は成務朝に滅びたと思われる。

（続く）

（続き）

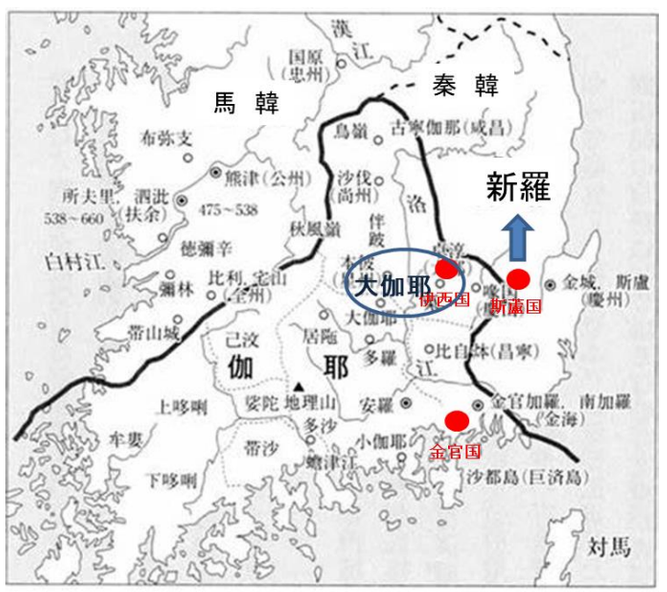
神武から開化までが前ヤマト政権で、（神武－安寧が大国主の浦安の国の支国、懿徳－孝安が玉牆の内つ国の支国、孝霊－開化がニギハヤヒの邪馬台国）の系譜を辿る。3世紀末に、崇神は、久米人、隼人等を同伴して九州より東征し大和に入り（崇神東征）、ニギハヤヒの建てた邪馬台国を引き継いだ。崇神朝以降がヤマト王権となる（崇神王朝、三輪王朝）。崇神即位は西暦315年。尚、開化朝に北近畿を束ねる日子坐王の近江王朝が成立したが、崇神勢力との抗争に敗れ衰退した。

一方、瓊瓊杵（ニニギ）は伊都国に降臨しウガヤフキアエズ朝（ウガヤ朝）を建てた。ニニギから神武に至る「日向三代」から始まるウガヤ朝の系譜は、伊都国王の系譜に当たり、3世紀末には崇神（ミマキイリビコイニエ）に至る。崇神は東征し大和に入り（崇神東征）、ニギハヤヒの建てた邪馬台国を引き継いだ。また、崇神朝に出雲王朝が滅ぼされた。さらに、4世紀末、仲哀天皇・神功皇后によりウガヤ朝を継いだ九州王国（？）が滅ぼされた。神功皇后は八幡神（応神）と住吉神と共に大和へ帰還した。この応神東征により、素戔嗚の直系の息長氏がヤマト王権を掌握する（応神王朝、河内王朝）。応神即位は西暦390年（宝賀・貝田推論）。
（FB藤田泰太郎タイムライン投稿21/4/30改訂）

参照： 近江の古代史（FB投稿20/6/6）、吉備が東遷・拡大し邪馬台（ヤマト）国になった（FB投稿20/9/6）、倭国大乱とアメノヒボコの軌跡（ FB投稿20/8/15 ）

伊西国と斯蘆国

紀元前後、倭人の国の伽耶の北西には馬韓、北東には秦韓（辰韓）があった（下図）。大伽耶（高霊加羅）と伊西国は、それぞれ洛東江の西岸と東岸に位置していた。とはいえ、当時の大伽耶は伊西国を含むと思われる。斯蘆国は後の新羅の都（金城）で、現在の慶州である。2世紀に高句麗の南下が始まるまでは、伊西国と斯蘆国は敵対関係にはなかったため、伊西国は斯蘆国を経由して日本海岸に至ることができ、経済的に出雲や丹後に結びついていたと思われる。しかしながら、斯蘆国は高句麗の影響で国力を伸ばし、伊西国と競合関係になった。3世紀末には筑前の伊都国（伊西国の分国か）と協働して海陸から斯蘆国を囲んだが反撃された。その後、斯蘆国は伊西国を滅ぼし、356年に新羅が建てられその都（金城）となった。（藤田）



『日本書紀』に記載された弥生の国々

1

『日本書紀』の記述より次のように類推できる。【大和の纏向遺跡を都とする「邪馬台国」の先行国は、近江・湖南の伊勢遺跡を都とする「大己貴の国（玉牆の內つ国）」であり、さらにその先行国の「浦安の国」も近江・湖南の野洲川流域にあった。】

『日本書紀』神武天皇31年夏、天皇の御巡幸の際、国名として「秋津洲」の名がみえる。それに続いて次の記載がみられる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【昔、伊弉諾尊目此国曰、「日本者浦安国。細戈千足国。磯輪上秀真国。」復、大己貴大神目之曰、「玉牆內国」。及至饒速日命乘天磐船而翔行太虛也、睨是鄉而降之、故因目之曰「虛空見日本国」矣。】

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（現代語訳）昔、伊弉諾尊がこの国を名付けて「日本（ヤマト）は、浦安（うらやす）の国、細戈千足（くわしほこのちだる）国、磯輪上秀真国（しわかみのほつま）国」とされた。また、大己貴大神が名付けて「玉牆の內つ国」といわれた。饒速日命は、天の磐船に乗って大空を飛び廻り、この国を見てお降りになり、「虛空見つ日本（ヤマト）の国」といわれた。

以上の『日本書紀』の弥生の国々の記述は、単に弥生時代の日本国の美称を羅列したものでなく、ヤマト王権（崇神朝）以前に実際に存在した国々を時系列で記載したものと考える。また、1世紀半ばの神武東征譚の主要部分は、3世紀末の崇神東征譚であろう。この巧妙に仕組まれた『日本書紀』の記述を理解するために、紀元前1世紀から4世紀の天孫族（伽耶族）の系譜（前々スライド）を参照のこと、天孫降臨は1世紀半ばの出来事で、崇神即位はAD315となる。かくて、神武朝（崇神朝）の国名は「秋津洲」となり、それに先行するのが、饒速日命（ニギハヤヒ）の建てた「虛空見つ日本（ヤマト）の国」で、『魏志倭人伝』に3世紀の国と記載されている「邪馬台（ヤマト）国」に当たる。（このヤマトが『記紀』における国名としてのヤマトの初出である。）その前の国が、2世紀初めに大己貴の建てた「玉牆の內つ国」（大己貴の国）で、さらにその前の紀元前1世紀の伊弉諾の時代には、このような大きな国は存在せず、西日本に「浦安の国、細戈千足国、磯輪上秀真国」が並立していたと思われる。

上述の国々の記載を時系列で換言すれば、紀元前1世紀の伊弉諾時代には、「浦安の国、細戈千足国、磯輪上秀真国」があった。「浦安の国」は近江・湖南を核とする大国主（大己貴）の国と考えられ、近畿一円に広がっていた。「細戈千足国」は九州北部の筑紫国（倭の奴国か）を指し、「磯輪上秀真国」は出雲と吉備と考えられる。（因みに邪馬台国時代の投馬国は出雲王朝であろう） 大己貴が少彦名と力を合わせて、2世紀の初めに近畿と東海地方に広がる「玉牆の內つ国」を建てた。この国は近江・湖南の伊勢遺跡を国都とした、「見る銅鐸」の国であり、「大己貴の国」と名付ける。この「大己貴の国」に続くのが、ニギハヤヒが2世紀末の倭国大乱の終結時に卑弥呼を女王として共立して建てた「虛空見日本の国」で、大和の纏向遺跡を都とする「邪馬台（ヤマト）国」に当たる。ヤマト国に続くのが大和王権（崇神王朝）であり、纏向遺跡を都として受け継いだ。

2

『日本書紀』巻第三、神武天皇（神日本磐余彦天皇）「東征出発」の項の次の記述に注目したい。【塩土の翁が「東の方に良い土地があり、青い山が取り巻いている。その中へ天の磐舟に乗って、とび降ってきた者がある。その者は饒速日であり、その土地はこの国の中心で、大業をひろめ天下を治めるにはよい土地であろう。」そこで、天皇は自ら諸皇子・舟軍を率いて、東征に向かわれた。】この神武東征譚の端緒「東征出発」は、崇神東征の発端と思われ、神武天皇ならぬ崇神天皇が、ニギハヤヒの建てた大和・纏向遺跡を国都とする「虛空見日本（ヤマト）の国」（「邪馬台（ヤマト）国」）を引き継ぎ、ヤマト王権（崇神朝）を建てた。

前々のスライドによると、天孫降臨と神武東征の時期が1世紀半ばと一致している。また、崇神即位は、AD 315年。天孫降臨の時期の神武東征は三島神 （三島湟咋耳命か）の東征に当たるとしている。この東征で成立したのが葛城多氏王権で神武から安寧天皇に当たる。これに続くのがホアカリの3世孫の倭宿禰が葛城に進出して建てたのが、「大己貴の国」の支国の葛城王朝で懿徳から孝安天皇に当たる。次の「邪馬台国」の時代は孝霊から開化天皇に当たる。従って、ニギハヤヒは孝霊天皇に当たり、卑弥呼は孝霊天皇の皇女の倭途途日百襲姫に当たる。『日本書記』には綏靖から開化天皇までの事績は殆ど記載さておらず、この間が所謂「欠史八代」となり、それ故に神武天皇は崇神天皇と同一人物とされることがある。1世紀半ばの瓊瓊杵から日向三代を含む3世紀末のミマキイリビコイニエ（崇神天皇）までの系譜は、九州の「ウガヤ（ウガヤフキアエズ）朝」の系譜と思われ、この間の天皇の系譜（神武から開化天皇）および近畿の「浦安の国」、「大己貴の国」、「邪馬台国」と続く国々とは全く関連がない。

このような皇統譜の不整合性は、7世紀の『記紀』の編纂に主導した左大臣の藤原不比等らの巧妙な作為によるものと考えている。藤原氏は中臣氏の後継氏族であり、中臣氏が支える天孫の瓊瓊杵の系譜をして天孫族の嫡流の系譜としようとした。そのためにヤマト王権（崇神王朝）の前に存在した前ヤマト王権（葛城多氏王権、葛城王朝、邪馬台国）の直前に神武天皇による神武東征をもってきた。即ち、3世紀末の崇神東征譚を神武東征譚の主要部分として1世紀半の天孫降臨の時代に押し込んだため、2世紀の断絶を生じ、この断絶が欠史8代説を生み、皇統の歴史の時系列を歪ませることとなった。

紀元前1世紀から4世紀の近江を廻る歴史

紀元前1世紀の伊弉諾の時代、近江・湖南に大国主の「浦安の国」が存在していた。紀元2世紀の初めに、大己貴が「玉牆の內つ国」（大己貴の国）を建てた。この国の都は、近江・湖南の伊勢遺跡であろう。2世紀半ばになると、ニギハヤヒが東征して、倭国大乱を引き起こした。この大乱が近江・湖南におよび「大己貴の国」の都の伊勢遺跡が瓦解した。ニギハヤヒは大和の纏向遺跡を都とする「邪馬台（ヤマト）国」を建てた。邪馬台国は西日本全域に広がり、「大己貴の国」の後継国の「狗奴国」は、近江・湖東の稲部遺跡を都としたと思われ、湖東/湖北から東日本に広がった。このように、弥生時代後期は近江が倭国の中心であったと思われる。

『日本書紀』に記載された弥生の国々

「玉牆の內つ国（大己貴の国）」の国名は、秀麗な山々（玉牆）に囲まれた琵琶湖を湛える近江が相応しい。また、大己貴の国は、巨大な「見る銅鐸」を祭器にしたと思われる。2世紀中ごろ、ニギハヤヒの吉備からの東征により倭国大乱が引き起こされた。物部を主力とする軍団は河内から大和に侵攻し、「大己貴の国」の支国（葛城王朝）を崩壊させ、さらに北上して「大己貴の国」の都の近江・湖南の伊勢遺跡を侵し、「大己貴の国」を瓦解させた。この折、伊勢遺跡近辺の大岩山に「見る銅鐸」が多数埋納された。ニギハヤヒは、和邇氏の巫女で大国主の血統の卑弥呼を女王として共立し、纒向遺跡を都とする邪馬台国（ヤマト国）を建て、倭国大乱を鎮めた。邪馬台国は西日本一円に、一方の「大己貴の国」の後継国の「狗奴国」は東日本一帯に広がった。

三世紀半ば「邪馬台国」の卑弥呼が死去し政治情勢が不安定化すると、「邪馬台国」と「狗奴国」との抗争が顕在化した。3世紀末の崇神東征（神武東征の主要部）により、崇神天皇は「邪馬台国」を乗っ取り「ヤマト王権（崇神王朝）」を建てた。一方、「狗奴国」は「ヤマト王権」の攻勢のため衰退を続け、成務朝に滅亡したと考える。

近江を巡る歴史（遺跡を中心に）

近江の考古学は、縄文草創期に遡ることができる。1万3千年前、近江・湖南の三上山が望める野洲川下流域で縄文のビーナスが出土した。このビーナスは、琵琶湖岸で定住を始めた人々が豊饒や命の再生への願いを込めたものと思われる。また、野洲川下流域の服部遺跡（縄文時代から古代までの複合遺跡）を始め琵琶湖岸全域に数多くの縄文遺跡が見つかり、琵琶湖岸は縄文人の定住に極めて適した地勢であったと思われる。

弥生時代前期には水田稲作が倭国全域に広がった。琵琶湖を湛える近江は水利に恵まれ、水田稲作に最適であり、農産力や人口も倭国有数であった。近江では弥生時代前期の終わり頃に玉つくりが始まり、中期には各地で行われていたことが確認されている。弥生前期から中期の初めにかけて、近畿では近江にしか玉つくり集落はなく、いち早く玉つくりが始まっていた。野洲川下流域で玉つくり工房と確認されるのは、野洲市の市三宅東遺跡と草津市の烏丸崎遺跡の2ヶ所である。市三宅東遺跡では、主に管玉を製作した円形竪穴住居が3棟見つかっている。ここでは、管玉の製作中にでた研ぎ汁が沈殿した ピットや玉を磨くための金剛砂（こんごうしゃ）が出土している。また、工房の床や埋土中より碧玉の破片大小が百数十点発見されています。草津市の烏丸崎遺跡でも、少なくとも2棟の竪穴住居で玉つくりをしていた。市三宅東遺跡と同じように玉つくりの道具や作りかけの未製品、原石を割ったり削ったりした時の破片、研磨材として使う細砂粒、研磨汁が詰まったピットが見つかっている。市三宅東遺跡と違うのは、ここの工房からは完成品も出ており、管に細い穴をあけるためのメノウの石針が見つかっている。

野洲川流域には、縄文時代の遺跡から弥生前期・中期・後期の遺跡が数多く存在していた。これら遺跡のなかで、下之郷遺跡は弥生時代中期後葉（BC220年頃か）に巨大な集落として誕生し、中期末（BC50年頃）に衰退する。下之郷遺跡は、三上山を頂点として広がる野洲川下流域平野のほぼ中央に位置している。この扇状地の末端は、地下の伏流水が地表に湧き出してくる水源地帯にあたり、生活を営む上でたいへん適した場所だと云える。下之郷遺跡の誕生から衰退までの移り変わりは、遺跡を取り巻く政治、大陸・半島との鉄や文物の交易、集落間や政治ブロック間の戦いなど、当時の政治・社会情勢を反映している。尚、下之郷遺跡が栄えたのは、吉野ヶ里遺跡や池上曽根遺跡とほぼ同時代である。

紀元前1世紀頃から下之郷遺跡が衰退して、その南東400mの地点に二ノ畔・横枕遺跡ができる。この頃、伊弉諾が浦安の国と名付けた近畿一円に広がる国があり、その都が二ノ畔・横枕遺跡集落ではないかと推察される。二ノ畔・横枕遺跡の規模は下之郷遺跡同様、全国最大級。80棟の竪穴住居、堀立柱建物、大型円形住居が見つかる。下之郷遺跡に比較すると石器が激減し、かわりに鉄製の鏃が出土してくる。

紀元前後に出雲から近江に銅鐸祭祀の中心が遷って、弥生時代後期になると近江・湖南を中心に巨大な「見る銅鐸」が作られるようになる。また、近江型土器（受口状口縁をもち、甕全体に文様が刻まれている）が弥生時代中期中葉から現れ、弥生時代後期にはこの独特の近江型土器が湖南を拠点に近畿・東海一円に拡散する。紀元2世紀になると近江・湖南の巨大な伊勢遺跡を中心とする「大己貴の国」が建てられ、その領域は近畿・東海地方一円に拡大した。

伊勢遺跡は下之郷遺跡の南約2.5kmの地点に位置している、弥生後期の集落遺跡であり、その規模は面積30ヘクタールを越える巨大な遺跡である。他の地域では弥生遺跡が衰退していく紀元1世紀末頃に、この伊勢遺跡は突如出現し、紀元2世紀末に衰退し始める。つまり、邪馬台国の建国前夜に発達を遂げた不思議な遺跡として注目される。遺跡の中心部には、二重の冊で四角に囲われた方形区画があり、そこには当時としては最大級の大型掘立柱建物跡や祭殿らしい建物跡など12棟の建物が整然と配置されていた。さらに、30棟の独立棟持柱付大型建物が、大型堀立建物群の中の祭殿と見られる建物を中心とする半径110mの円周上に等整然と並んでいた。この独立棟持柱付大型建物は、伊勢神宮本殿に見られる神明造りと呼ぶ建築様式に似ている。中央の祭殿で行われる宗教上のイベントや政治的議論のために、30棟の棟持柱付大型建物の各々に「大己貴の国」を構成する各支国の首長が招集されたと思われる。大岩山の中腹から発見された24個の銅鐸は、これら建物の祭壇に祀られていたものが、ニギハヤヒの近江・湖南への侵攻に伴う「大己貴の国」の崩壊の時にまとめて埋納されたものであろう。さらに、伊勢遺跡の瓦解に伴い、伊勢遺跡の建築資材が邪馬台国の都の纒向遺跡の造営に使用されたとも考えられる。

下鈎遺跡は縄文時代前期から近世にかけての複合遺跡である。弥生後期初めに衰退した後、伊勢遺跡の盛隆に少し遅れて出現した。このことから、計画的に造営された遺跡であると考えられる。祭祀を行う伊勢遺跡に対し 下鈎遺跡では青銅器を生産する目的で建設されたと思われる。独立棟持柱付き建物という括りでは、同じような建物であるが、柱の立て方、心柱など構造は異なっており、別の建築集団が建てたと考えられる。一方で、テラス付きの高殿祭殿という目的を同じにする建物もあり、連携性が伺われえる。 伊勢遺跡と下鈎遺跡は野洲川流域の人々が連携した造営した「大己貴の国」の中心である。

弥生～古墳時代（2～5世紀）の大規模集落跡が出土する、稲部（いなべ）遺跡（滋賀県彦根市）で、3世紀中頃の邪馬台国時代の国内最大級の大型建物1棟の跡が出土した。稲部遺跡から約80棟の建物跡が出土したが、このうちの大型建物跡は幅11.6メートル、奥行き16.2メートルで、同時期の纒向遺跡の大型建物跡（幅19.2メートル、奥行き12.4メートル）に次ぐ規模である。また、3世紀としては最大規模の鍛冶工房とみられる竪穴建物23棟以上の跡も確認された。建物跡などから鉄片や鉄製の矢尻といった鉄関連遺物が計約6キロも出土した。近江・湖南、大和、越前、尾張などで出土するのと同じ形状をした土器の破片も見つかり、各地から搬入されてきたと思われる。この稲部遺跡は近江・湖東/湖北を中核にして東日本に広がった狗奴国の都とみなされる。

『日本書紀』に記載された弥生の国々

5

近江を巡る歴史（人と物の流れ）

近江渡来の第一陣は大伽耶の伊西国出自の伊弉諾・伊邪那美で、その渡来は紀元前1世紀半ばと思う。『日本書紀』では、伊弉諾が当時の野洲川流域を中心とする近畿の国を浦安の国と名付けたことになっている。その伊弉諾・伊邪那美の伽耶からの渡来ルートは、隠岐（オノゴロ島の候補地の一つ）－丹後－近江で、湖東の多賀大社付近に進出した。海神族の大国主や和邇氏らが彼らに渡来の手助けをしたと思う。紀元前後に、スサノオが筑前に侵攻し、さらに出雲を侵した。大国主は敗退し、出雲から近江に遷った。次に、近江に進出したのは天孫の彦火明（ホアカリ）で、ホアカリの丹後降臨を海神族が手助けをし、その同伴者も近江に進出したと考える。ホアカリは海神族の大国主一族や宗像女神との婚姻関係をもっている。海神族のサルタヒコ（湖西の白髭神社の祭神）もその頃近江に進出したと思われる。

『日本書紀』に大己貴大神(大国主の別名)が玉牆の内つ国（大己貴の国）を建てたと記載されているように、1世紀末に大国主とスクナビコナが、近江・湖南の伊勢遺跡（守山市）を都とし、伊吹山を神奈備とする大己貴の国（近畿・中部地方）を建てた。この国は、西は但馬・播磨、東は越後・信濃・甲斐・駿河に及んでいたと思われる。巨大な「見る銅鐸」を祭器にした大己貴の国は、『魏志倭人伝』に「もともと男子を王としていたが70～80年を経て倭国が相争う状況となった」とある「男子を王とする国」に当たると思われる。2世紀半ば、筑前の奴国を根拠地としていた和邇氏が東遷し近江に入り、湖西に新たな奴国（玉牆の内つ国（大己貴の国）の支国、『魏志倭人伝』で邪馬台国に入る直前の国）を建てた。かくて、近江は2分され、湖西は和邇氏が占め（近江の奴国）、湖北・湖東・湖南は大己貴が占めた（大己貴の国）。

二世紀中ごろ、ニギハヤヒ（物部氏の祖神）の東征により倭国大乱が引き起こされた。この物部を主力とする軍団は河内から大和に侵攻し、ホアカリの3世孫の倭宿禰が建てた玉牆の内つ国の支国（葛城王朝）を崩壊させ、さらに北上して玉牆の内つ国の都の近江・湖南の伊勢遺跡を侵し、玉牆の内つ国を崩壊させた。ニギハヤヒは、和邇氏の巫女で大国主の血統の卑弥呼を共立し倭国大乱を鎮め、纒向遺跡を都とする邪馬台国（ヤマト国）を建てた。その邪馬台国の東側に玉牆の内つ国（大己貴の国）の後継国の狗奴国が建てられた。狗奴国の都は湖東の稲部遺跡ではないかと推察している。

伊勢遺跡と纒向遺跡からはそれぞれ400メートル級の秀麗な山容の三上山と三輪山を仰ぎ見ることが出来る。これら二つの山は、どちらも山間部と扇状地の境界にある「神の坐す山」とされてきた。三輪山の麓には大神神社があり、三上山の麓には三輪神社がある。近江・栗東には、近江の三輪神社が大和に遷り大神神社となったという古伝があるという。三輪山の奈良湖側には纒向遺跡があり、三上山の琵琶湖側に伊勢遺跡がある。さらに、纒向遺跡の北側に物部の総氏神の石上神宮があり、伊勢遺跡の北側には物部郷の総社である勝部神社が鎮座する。石上神社の存在は倭国大乱を引き起こしたニギハヤヒ軍団の大和制圧の証であり、物部郷の存在は倭国大乱の末期に近江湖南に攻め込み伊勢遺跡を解体させた証であろう。尚、伊勢遺跡に隣接して大宝神社が鎮座する。この神社は、大宝元年に降臨された素盞嗚尊と稲田姫命を追来（オフキ）神社境内に鎮座させたとされるもので、追来神社は地主神でありながら大宝神社本殿が主祭神となっているため、無理に境内社としての位置付けにされ、社名変更を余儀なくされたと推測される。古来、追来神社は意布伎(伊不伎)神社と記されている。追来神社は伊吹山に座す多々美彦命（別名八岐大蛇）を祭神とするが、多々美彦命は玉牆の内つ国（大己貴の国）の盟主の大国主（大己貴）のことだと推測される。

6

邪馬台国の建国後その東端は、若狭―近江（湖西・湖南）－伊賀―大和―紀伊で、狗奴国は近江（湖東・湖北）－美濃―伊勢、以東となる。邪馬台国は、庄内土器・方形周溝墳（のち前方後円墳）をもって西に延び任那・伊都国連合を勢力下に治めた。一方、狗奴国は、S字甕・前方後方墳をもって東国に伸張した。かくて、倭国は西日本の邪馬台国と東日本の狗奴国とに二分されることになった。この邪馬台国時代、近江・湖東の稲部遺跡は邪馬台国の都の纒向遺跡に次ぐ規模を誇り、かつ製鉄が栄えていた。この稲部遺跡は邪馬台国と対峙した狗奴国の都ではないかと考えている。若狭の小浜は邪馬台国の外港として機能し、越前の角鹿（敦賀）は狗奴国の外港として機能したと推察する。

近江の地政

琵琶湖を湛える近江は、水利に恵まれ水田稲作に最適であり、我国最大の農業生産力を誇った。因みに、平安時代の和名抄田積数（町歩）や安土・桃山時代の太閤検地（石高）によると、近江の国は日本全国（陸奥を除く）の中で田積数や石高が最も高かった。また、弥生時代前期末から中期にかけて近畿での唯一の玉つくりが盛んな地であった。弥生時代中期から銅鐸のような青銅器の生産が盛んで、中期中頃からは丹後・若狭・越前経由で伽耶の鉄素材が持ち込まれ鍛冶も盛んに行われていた。明治時代まで、近江は近畿地方最大の鉄の生産国であり、伊吹山山麓は製鉄業や製銅業が盛んであった。信楽（紫香楽）には窯業があり、甲賀には薬業があり、八日市の北東の永源寺付近には木工業がある。このように、弥生時代前期以来、近江は農産面と産業面で他国を凌駕し、人口もまた全国有数であった。

古くから「近江を制するものは天下を制する」と言われ権力者の争奪の的となってきた。近江は琵琶湖の水運を備えた東西・南北の交通の要衝であり、さらに弥生時代から古墳時代前期までは大陸や半島からの物的・人的往来が日本海経由で丹後・若狭・越前から近江へさらに倭国各国に先進の文物や有用な人材が動いていった。かくて、紀元前後から2世紀にかけて、倭国の中心が北九州から近江を核とする近畿に移った。さらに、古代から明治時代まで、近江は日本の農業や産業の中心地であった。

このような近江を除いてはは日本の歴史は語れない。しかるに、『記紀』では、近江の古代史が殆ど語られない。これは、『記紀』の編纂に関与した天孫族の後裔にとって、4世紀までの近江は天孫族に敵対する出雲（大国主）勢力（玉牆の内つ国や狗奴国）の拠点であり、景行朝には伊吹山に陣取った狗奴国勢力によりヤマト王権の大将軍である日本武尊が敗死されられるという屈辱を味わったためではないか。

（Facebook 藤田泰太郎タイムライン投稿22/9/16）

参照： 古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）－天孫族（伽耶族）の系譜 ③ 031

出雲とヤマト

出雲とヤマト（1）

――出雲古国の滅亡：天津神スサノオによる八岐大蛇（大国主（大穴持））の殺害　：大国主一族と銅鐸の出雲より近江への東遷――

弥生時代中期に西部出雲の斐伊川流域を核とする大国主の国「出雲古国」（仮称）が存在した。出雲は隠岐（黒曜石の産地）を含む西日本有数の火山地帯にあり、温泉や種々の鉱物資源（玉、銅や鉄）に恵まれていた。出雲は、縄文時代より隠岐の黒曜石を持ち込み、また瑪瑙の玉造りで栄えた。出雲古国は、弥生時代中期前葉から中葉にかけて、出雲の砂鉄と磁鉄鉱を基盤とする鉄器（野ダタラ）、銅鉱を基盤とする青銅器（銅鐸に代表）と玉（瑪瑙等）からなるネットワークを西日本一体に張り巡らせた。さらに、弥生時代中期後葉には、漢の植民地の楽浪郡（大型製鉄所）、伽耶（鉄鉱石の大産地）、丹後（水銀朱、水晶玉の産地）、越（糸魚川は東アジア唯一のヒスイの産地）をも抱合する、南朝鮮、北九州、西部日本海沿岸、中国・近畿に及ぶ広大な政治・経済ネットワークを構築していた。この出雲古国は祭器として「聞く銅鐸」などの青銅器を使用していた。

ところが、弥生時代中期後葉（紀元前後）に伽耶（朝鮮南部）の倭人であるスサノオが北九州に侵攻し、さらに出雲を侵した。当時の出雲古国の王は大穴持命（大国主の別称）であったが、大穴持命はスサノオの侵攻で敗死し、出雲古国は壊滅した。この時スサノオに退治された八岐大蛇（ヤマタノオロチ）とは大穴持命のことと思われ、十束剣（布留御魂剣）で斬殺された。斬殺された八岐大蛇の尾部から草薙の剣が現れた。大国主が殺害されたことは、次の『古事記』の記述から推察される。「大国主神は国譲りに応じる条件として「我が住処を、皇孫の住処の様に太く深い柱で、千木が空高くまで届く立派な宮を造っていただければ、そこに隠れておりましょう」と述べ、これに従って出雲の「多芸志（たぎし）の浜」に「天之御舎（あめのみあらか）（出雲大社）」を造った。」

高天原（大伽耶か）から天穂日命（アメノホヒ）が出雲に派遣されスサノオと協働して出雲全域を平定し、出雲王朝を建てた。アメノホヒとスサノオに敗北した大穴持命一族（アジスキタカヒコネら）は中型の「聞く銅鐸」等の青銅器祭器を加茂岩倉・荒神谷遺跡に埋納した。これ以降、出雲では銅鐸等の青銅器を祭器とすることは二度となかった。アジスキタカヒコネらは大国主のネットワークの核を出雲から丹後さらに近江へと日本海側を東遷し、さらに南下し葛城に至った。この東遷に伴い銅鐸もまた出雲から近江へと東遷している。そして、大国主一族（大己貴命（大国主の別称））は2世紀初めに近江の伊吹山を中心とする地域（伊富岐神社の祭神にヤマタノオロチも挙げられている）を拠点にして、近畿・東海に広がる浦安の国の後継国の大己貴の国「玉牆の内つ国」（国都：近江・湖南の伊勢遺跡）を建てた。玉牆の内つ国では「聞く銅鐸」の代わりに大型銅鐸「見る銅鐸」を祭器にした。さらに、2世紀後半、吉備よりアメノヒボコと大山祇神を伴ったニギハヤヒの物部軍団が東征し（倭国大乱）、大和と葛城を制圧しさらに北上して玉牆の内つ国を崩壊させた。この際、多数の「見る銅鐸」が伊勢遺跡近傍の大岩山中腹の古墳群（大岩山古墳）に埋納された。そして、ニギハヤヒは2世紀終わりに纒向を都とする邪馬台国を建てた。邪馬台国は大型銅鏡を祭器として用いた。この邪馬台国はさらに任那と西日本全域を勢力下におくに至った。一方、近江・湖東の稲部遺跡を国都としたと思われる、大己貴命の支配した玉牆の内つ国の後継国の狗奴国が建てられた。狗奴国は東日本一帯に広がった。3世紀末の崇神東征により邪馬台国は瓦解したが、狗奴国は邪馬台国崩壊後も残存した。この狗奴国も成務天皇の御代に滅びたと思われる。

――銅鐸文化の変遷と終焉――

大国主の国の「出雲古国」や「玉牆の内つ国」の祭祀では銅鐸を祭器として用いた。初期の小・中型の銅鐸「聞く銅鐸」は鈕の内側に紐などを通して吊るした、木や石、鹿角製の「舌（ぜつ）」を揺らし、内部で胴体部分の内面突帯と接触させる事で鳴らしたと考えられる。1世紀末頃には大型化が進み、鈕が薄手の装飾的なものへの変化することから、銅鐸の利用法が、音を出して

「聞く」目的から地面か祭殿の床に置かれて「見せる」目的へ、すなわち「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へ変遷した。銅鐸は朝鮮式小銅鐸が起源ともいわれるが、倭国の銅鐸より製造年代が新しく朝鮮起源とは思えない。春秋・戦国時代の越の貴族墓から、日本の銅鐸に似た青磁器の鐸が出土しているので、銅鐸は越から日本に伝わった可能性がある。また、南越（中国南部・ベトナム）の葬式では銅鼓が大地のうなりのように、連続して音を発する。銅鐸は、地中に埋納される銅鼓に由来するとも考えられる。尚、大国主は江南出自の海神族と考えられているが、大国主は越から伝わったと思われる銅鐸を祭器していたのであるから、大国主自身もまた越から渡来した可能性がある。越から日本に伝わったと思われる銅鐸は弥生時代中期初頭から倭国で作られ始めた。当初の銅鐸は小型であったが次第に大型化し近畿や四国さらには東海に広がって行った。紀元前後のスサノオの出雲侵攻により「出雲古国」は崩壊し「聞く銅鐸」などの多数の青銅器が加茂岩倉・荒神谷遺跡に埋納された。注目すべきは、加茂岩倉遺跡の銅鐸には「同笵銅鐸」つまり同一の鋳型でつくられた銅鐸が、39個中15組26個も存在し、そのうち11組は出雲以外の中国・近畿地域の銅鐸と同笵であったことである。このことは出雲古国が弥生時代中期の「聞く銅鐸」ネットワークの中心であったことを示唆する。スサノオの侵攻に敗北した、大穴持命（大国主の別名）一族（アジスキタカヒコネら）は出雲から丹後さらに近江・ヤマト・葛城へと東遷する。この東遷に合わせ、銅鐸のネットワークの中心が、出雲から近江へと東遷する。

スサノオとアメノホヒらの天津族は出雲古国を滅ぼし出雲王朝を建てたが、出雲では銅鐸を含む青銅器を祭器とすることはもはやなくなり、吉備、但馬、播磨、淡路、讃岐でも青銅器祭器が作られなくなった。弥生時代後期に入ると近畿・東海では、銅鐸は大型化し「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へと変遷する。この弥生時代後期の大型の銅鐸圏の中心は、近江・南部伊勢遺跡を都とする大巳貴命（大国主の別名）支配する「玉牆の内つ国」と考えられる。倭国大乱で「玉牆の内つ国」が崩壊したとき多数の「見る銅鐸」が伊勢遺跡近傍の大岩山古墳群に埋納された。その後の大型銅鏡を祭器とする邪馬台国の成立に伴い、倭国の銅鐸文化は終焉した。

参照：　古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）ー天孫族（伽耶族）の系譜　③031

（出雲とヤマト（1） Facebook 藤田泰太郎タイムライン投稿21/4/12）

八岐大蛇は『日本書紀』での表記。『古事記』では八俣遠呂智と表記している。「高志之八俣遠呂智、年毎に来たり」との記述『古事記』があり、古代日本の地方である高志（こし）（越か）から来たとされる。私は八岐大蛇とは大国主（紀元前後の出雲では大穴持）の尊称と考える。大国主は海神族の一派で、越から倭国の越に渡来してきたと思われる。また、大国主は製鉄民としての特性をもつ。筆者はヒッタイトの強靭な鉄を作るタタラ製鉄がスキタイによりアイアンロードを辿り匈奴に伝わり、さらに弥生時代中期に日本海を横断して越（越前か）にもたらされたのではないかと推察している。大国主によりこの製鉄技術が良質の砂鉄を産する出雲に伝わり草薙剣のような強靭で切れ味抜群の刀剣を生み出したのではないか。スサノオは出雲に侵攻し、大国主を殺し、出雲の砂鉄とタタラ製鉄技術を獲得した。その象徴がスサノオが八岐大蛇を殺したところ尾からが現れた草薙剣で、天津族たるスサノオが出雲の大国主を殺害して獲得した戦利品と見なされ得る。

出雲とヤマト

3

出雲とヤマト（2）

――スサノオとアメノホヒによる出雲王朝の建国――

紀元前後に「聞く銅鐸」などの青銅器を祭器とする、大国主（大穴持）の国「出雲古国」は素戔嗚尊（スサノオ）の侵攻を受けて滅んだ。敗残の大国主一族（アジスキタカヒコネら）は出雲から丹波・近江・葛城へと東遷した。『古事記』「葦原中国の平定」＜第1章＞「アメノホヒの派遣」や『出雲国造神賀詞』に記されているように、「天穂日命（アメノホヒ）が天照大神の命により地上の悪神を鎮めるために高天原から地上（出雲）に遣わされ、出雲の様相を天照大神に報告し、子神のアメノヒナドリおよび剣の神・経津主神（スサノオやその後のニギハヤヒ）とともに地上を平定した」としている。アメノホヒは、天孫の父神の天忍穂耳命（アメノオシホミミ）の弟神で、天照大御神とスサノオとの誓約（うけひ）で産まれたとされている。また、熊野大社（松江市八雲町熊野）は、出雲大社（出雲市大社町杵築東）と共に出雲国一宮とされているが、出雲では後世に造成された出雲大社より神格が上と考えられていた。熊野大社の祭神は、伊邪那伎日真名子加夫呂伎熊野大神 櫛御気野命で素戔嗚尊の別名であるとする。大仰な修辞を除く実際の神名は「櫛御気野命（くしみけぬのみこと、食物神か）」で、『出雲国造神賀詞』に出てくる長大な神名を採用したものであろう。現代では櫛御気野命とスサノオ（素戔嗚尊）とは本来は無関係であるとの説があるが、『先代旧事本紀』「神代本紀」にも「出雲国熊野に坐す建速素盞嗚尊」とあり、櫛御気野命が素戔嗚尊と同一神と考えられていたことがわかる。私は、櫛御気野命とは大穴持命（大国主の別名）のことであろうと推察する。即ち、出雲に侵攻したスサノオが熊野大社を乗っ取りその祭神におさまったと解釈する。

紀元前後に出雲古国が滅び「聞く銅鐸」等の青銅器が埋納された。スサノオやアメノホヒらの天津神を中心に「出雲王朝」が建てられて以来、出雲や吉備では青銅器を祭器とすることはなくなった。出雲王朝成立後、スサノオやその後のニギハヤヒは南下し吉備に拠点を移したので、出雲王朝の主導権はアメノホヒ（出雲国造の祖）ではなく大国主系の出雲人が握ることになったと思われる。（実際、『備後国風土記』の逸文に速須佐男神（スサノオ）の伝承がみえ、備後の式内社として須佐能袁（素戔嗚）神社（福山市新市町）が鎮座する。）その後、出雲では祭祀の場として奇怪な形をした墳丘墓「四隅突出型墳丘墓」が造られ、吉備では弥生墳丘墓が造営されるようになった。しかしながら、近畿や九州北部ではなお大型青銅器を祭器として使用していた。出雲古国の中心は西部出雲であったが、出雲王朝の中心は東部出雲と思われ東部出雲に四隅突出型墳丘墓が集中している。この強大な出雲王朝は弥生時代後期から古墳時代前期（崇神朝）にかけて、連綿として栄えた。弥生時代後期中葉・後葉の出雲王朝は、筑紫（伊都国連合、銅矛を祭器）、大吉備（特殊器台を使用）、近江を中心の近畿・中部地方西部（玉牆の内つ国（大己貴の国）、「見る銅鐸」を祭器）と並ぶ、日本海沿岸を北陸にまで達する、四隅突出型墳墓で規格化された国の集合体となっていった。一方、2世紀後半、吉備が勢力を伸ばし楯築遺跡のような最大規模の弥生墳丘墓を造営していた（大吉備）。また、東部出雲の四隅突出型墳丘墓に吉備の首長クラスの墳丘墓で用いられた特殊器台が出土したことは、2世紀末頃に出雲の首長層と吉備の首長層の間になんらかの政治的連携があったことを示す。ニギハヤヒの物部軍団は吉備より出雲に北上し出雲王朝を勢力下に置こうとしたが、意宇王のもとの強力な出雲王朝には敵わず出雲制圧を断念した。

4

――ニギハヤヒの東征と倭国大乱・少彦名の敗死・大己貴の国「玉牆の内つ国」の崩壊と邪馬台（やまと）国の建国――

2世紀後半、アメノヒボコと大山祇神を伴ったニギハヤヒの物部軍団が吉備より東征し、近畿一帯に拡大する倭国大乱を引き起こした。大和・葛城を制圧さらに北上して大国主の玉牆の内つ国を解体させた。私は、ニギハヤヒは、孝霊天皇や大物主と同一人物と考える。

倭国大乱の末期に大国主の盟友の少彦名（少名毘古那神）は、ニギハヤヒの軍団との美濃（美濃市の喪山周辺、後述）での戦闘で死亡したと思われる。このことは、『古事記』の次の記述（抜粋）から窺い知ることができる。【大国主之命と少名毘古那神はお互いに力を合わせてこの国を経営しました。ところが、国がちゃんと出来ないうちに少名毘古那神は、海の彼方の 常世国に渡って行ってしまいました。少名毘古那神に先立たれて大国主之命は「私ひとりでどうしてこの国を作ることができよう。いかなる神と力を合わせてこの国を作ったらよいのだろうか。」と言って嘆き悲しんでいました。この時、遠い沖合いから海原を照らして光輝きながら、次第に近寄ってくる神さま（大物主、ニギハヤヒ）がいました。そして、「もし私をよく祭りあがめるようならば、お前と一緒になってこの国の経営にあたってもよい。そうでなければ、この国がうまく治まることは難しいだろう。」「それでは、どのようにお祭りしたら宜しいのでしょうか。」「大和の国を青垣のように取り囲む山々の、その東の山の頂きに、身を清めて私を祭るが良い。」と言いました。これは御諸（みもろ）の山（三輪山）の上にいる神です。】かくて、大国主の大神神社はニギハヤヒに乗っ取られ、主祭神は大物主大神（ニギハヤヒ）となり、大己貴神 （大国主）と少彦名神は配祀神とされた。

2世紀末の倭国大乱の終結にあたり、ニギハヤヒと大国主は卑弥呼を女王に共立し邪馬台国を建て、一方大国主は玉牆の内つ国の後継国の狗奴国を建てた。尚、吉備の物部が倭国大乱や邪馬台国樹立に武力を割き、吉備の防備が手薄となったところに、出雲勢力が南下し鉄資源を奪った。邪馬台国初代の孝霊天皇の息子の吉備津彦がこの出雲勢力を制圧し、鉄資源を奪い返したことが「桃太郎伝説」のもとになったと考える。その後吉備津彦はさらに西海道を西征し、任那・伊都国連合を邪馬台国の勢力下に置き西日本全域を支配するようになった。（筆者には、吉備津彦とウマシマジが重なって映る。）

邪馬台国の所在地は未だに論争の的であるが、筆者には1世紀から4世紀の倭国の歴史を鑑みるに、大和の纏向以外に考えられない。『魏志倭人伝』には、魏の帯方郡から邪馬台国への行程が記載されている。帯方郡から北九州の不弥国までの行程は明らかであるが、その後南へ水行20日で投馬国に至り、さらに水行10日、陸行1月で邪馬台国に至ると記載されている。『魏志倭人伝』の編者の陳寿は邪馬台国が朝鮮半島の南方の台湾沖にあると誤解していたので、南を実際の東に正すと水行20日で投馬国、水行10日で若狭、陸行1月（琵琶湖経由）で邪馬台国に至ることになる。この投馬国は、出雲のイズモが、エツマ、ツマ（投馬、上古音）と訛ったものと思われる。即ち、投馬国は出雲国のことと思われ当時の出雲国は大国の出雲王朝であった。実際、東部出雲を拠点とする出雲王朝は、伯耆西部に延びる巨大な妻木晩田遺跡（北九州最大の遺跡の吉野ケ里遺跡の2倍以上の規模）を含む西日本有数の大国であった。ちなみに『魏志倭人伝』には、投馬国の戸数は5万戸と記載され邪馬台国の7万戸に次ぐ戸数である。

出雲とヤマト

5

――崇神東征と邪馬台国の瓦解・崇神王朝（ヤマト王権）の成立――

3世紀半ば卑弥呼が死去すると邪馬台国は弱体化した。3世紀末、任那・伊都国連合の崇神天皇が中臣氏、大伴氏や忌部氏を伴い久米人や隼人が加勢して東征した（崇神東征）。この東征が所謂神武東征の主要部分と考える。また、崇神東征は、物部一族が仕掛けた、任那・伊都国連合の崇神天皇による、邪馬台国を終焉させるクーデターであったとみる。ナガスネヒコ（大国主系、出雲系、日本海系）はこのクーデターに抵抗したが、敢え無く敗死した。残存する出雲勢力を追い詰めたのが、ウマシマジと天香山命（ニギハヤヒを父とする異母兄弟）であり、それぞれ石見に物部神社、越後に弥彦神社を創建し、出雲勢力を挟撃する体制を作り上げた。鎮魂祭は、皇居のほか、物部氏ゆかりの石上神宮（総氏神）、物部神社、弥彦神社で執り行われるが、この鎮魂祭は崇神東征で敗北した大国主を中心とする出雲勢力の鎮魂をもくろんだものであろう。

――出雲神宝事件と出雲王朝の実質的崩壊――

崇神天皇の御代に出雲神宝事件が起こる。崇神天皇は物部氏の武諸隅（たけもろずみ）を出雲に遣わして、出雲神宝（熊野大社に安置していた熊野大神の神宝、勾玉（八尺瓊勾玉か）等）の奉献を求めた。この時、神宝を管理していた出雲振根（いずもふるね）は筑紫に出掛けて留守だったので、弟の飯入根（いいいりね）が神宝を奉献する。筑紫から帰ってこれを知った出雲振根は怒って飯入根を殺す。飯入根の弟や子らが、このことを大和に訴えたので、大和は吉備津彦と武渟河別（たけぬなかわわけ）を派遣して出雲振根を誅殺する。

崇神朝の出雲神宝事件と景行朝の日本武尊西征の後半（出雲建の誅殺）との関連性、即ちこれら2事件は同じ事象か否かが注目されている。日本武尊の西征として、日本武尊（倭建尊）はまず九州の熊襲建兄弟の討伐を命じられる。九州に入った小碓命（倭建尊）は、熊襲建の新室の宴に美少女に変装して忍び込み、宴たけなわの頃にまず兄建を斬り、続いて弟建に刃を突き立てた。その後、倭建命（日本武尊）は出雲に入り、出雲建の太刀を偽物と交換して太刀あわせを申し込み、殺してしまう。このように、出雲神宝事件の出雲振根の誅殺（あるいは日本武尊の出雲建の謀殺）で出雲王朝は実質的に崩壊し、その後の出雲国は崇神王朝（ヤマト王権）の実質的な支配下に入ったと推察できる。

出雲王朝崩壊後も出雲国はヤマト政権支配下の有数の製鉄・産業国として栄えた。562年には任那が新羅に滅亡させられ、古来（縄文時代前期）より維持してきた南朝鮮の倭国の領土をすべて失うことになる。かくて、鉄資源の鉄艇の伽耶（任那）からの倭国への移入が途絶え、出雲国は製鉄国としての重要性が増した。この製鉄国としての出雲国の繁栄は19世紀半ばの明治維新まで連綿と続いた。

――『古事記』の「アメノワカヒコの死」と「国譲り」の章の考察――

『古事記』「葦原中国の平定」＜第1章＞「アメノホヒの派遣」は既に論じた。＜第2章＞「アメノワカヒコの死」や＜第３章＞「国譲り」は、いつの時代のどの出来事を反映しているのであろうか。＜第2章＞アメノワカヒコの死を大胆に推察すると、アメノワカヒコは倭国大乱末期に敗死したと思われる少彦名に当たるのではないか。アメノワカヒコ（天稚彦）と少彦名はともに渡来神と思われ、若くて小柄という意味で相通じるものがある。少彦名の敗死は倭国大乱終結、即ち天津神のニギハヤヒ軍団の大国主一族に対する勝利を意味する一大事であり、『古事記』「葦原中国の平定」の一章とする価値があると思う。ちなみに、ニギハヤヒはアメノワカヒコを殺害したという「天羽々矢」を携え東征したという。＜第2章＞は云う、

6

「高天原にいつアメノワカヒコの父は、アメノワカヒコの妻子とともに天より葦原中国に降りて嘆き悲しみました。アメノワカヒコを喪屋（もや）に安置していると、アヂスキタカヒコ神がやって来て、アメノワカヒコを弔いました。それを見たアメノワカヒコの父は「わが子は死んでいなかった。」といい、高天原に住む妻も「わたしの夫は死んでいななかった。」といって、アヂスキタカヒコ神の手や足にすがりついて泣きました。それを聞いたアヂスキタカヒコ神は、「仲の良い友だちだったからこそ、弔いに来たのにわたしを死者と間違えるなんて。」と大変怒って、その喪屋を切り倒し蹴り飛ばししてしまいました。その喪屋は、美濃国の喪山になってしまいました。」

また、次の＜第三章＞「国譲り」はどの出来事を反映するのであろうか。「タケミカヅチは、出雲国のイザサの小浜に天より降りてくると、剣を逆さまに刺し立てて その上にあぐらをかいてすわり、オオクニヌシ神にたずねました。「わたしは、アマテラス大神とタカギムスヒ神に遣わされて、命令を伝えるためにやって来ました。『あなたの支配する葦原中国は、わが御子が支配する国である』と、天つ御子に統治をお任せになりました。あなたの気持ちを聞かせてください。」（中略） タケミカヅチ神は、再び帰り来て、オオクニヌシ神に言いました。「あなたの子どもの、コトシロヌシ神もタケミナカタ神も天つ神の御子のご命令に従い、背くことはない、と言っていますが、あなたの気持ちはどうですか。」オオクニヌシ神は答えました。「わたしの子である二柱の神が同意したのなら、わたしもご命令に従い、背きません。この葦原中国は、命令どおりに差し上げましょう。ただし、私の住まいは、天つ神の御子が日継（ひつぎ）を受け継ぐ時に住む御殿のように、 宮柱を太く建て、高天原まで千木が届くように高くしてお祭りくだされば、私は曲がりくねった角の先に隠れておりましょう。」

この「国譲り」で大活躍するのは、藤原氏の守護神の建御雷（武甕槌命）である。後述するが、建御雷は飛鳥時代の藤原氏が物部氏の権勢を抑えるために、物部氏の祖神スサノオを模して祭り上げた架空の神と考える。実際、建御雷が活躍する「国譲り」の舞台は西部出雲のイザサの小浜(稲佐の浜、島根県出雲市大社町にある砂浜)であり、後世その近くに大国主を弔う出雲大社が建立された。従って、「国譲り」は、スサノオが八岐大蛇（大穴持か）を十束剣（布留御魂剣）で斬殺した西部出雲の斐伊川流域での出雲古国を滅ぼした出来事に基づくと思われる。しかしながら、『古事記』＜第2章＞「アメノワカヒコの死」に続くのが、＜第3章＞「国譲り」であり、スサノオの八岐大蛇退治が「国譲り」であるとすると説は、年代的観点から納得がいかない。

私は、『古事記』の「国譲り」は、邪馬台国を崩壊させた崇神東征を反映していると考える。崇神東征で、崇神軍は大国主の後裔のナガスネヒコ軍と対峙した。ナガスネヒコは、ニギハヤヒの御子神のウマシマジ（物部氏の祖）の背信によって殺害されると、ナガスネヒコ軍は一気に崩れ、大和と葛城から大国主勢力（事代主、アジスキタカヒコネ、タケミナカタ、イセツヒコなど）が一掃された。この崇神王朝（ヤマト王権）の樹立に至った一大事件（崇神東征）が「国譲り」と呼ばれるのに相応しい。とはいえ、この「国譲り」は出雲王朝の実質的崩壊に導いた出雲神宝事件での出雲振根の殺害（日本建命の西征での出雲建の誅殺と同事象か）を反映するとの説も無視できない。しかし、出雲王朝の中心は東部出雲であり、八岐大蛇（大穴持）が殺害され、また出雲大社が建てられたのは西部出雲であり、説得性に欠ける。

参照： 古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）－天孫族（伽耶族）の系譜 ③ 031（出雲とヤマト（２） Facebook 藤田泰太郎タイムライン投稿21/4/30）

出雲とヤマト

7

出雲とヤマト（3）

紀元前後のスサノオの出雲侵攻により、西出雲を中心とする出雲古国は滅び、その王の大国主（大穴持、八岐大蛇）は敗死し、残存の大国主一族は近江さらに大和・葛城へと東遷した。出雲ではアメノホヒとスサノオにより出雲王朝が建てられ、近江には大国主により大己貴の国「玉牆の内つ国」が建てられた。2世紀中頃、ニギハヤヒの軍団は吉備より東征して倭国大乱を引き起こした。ニギハヤヒは葛城・大和を侵し、さらに2世紀末には南近江に侵攻して玉牆の内つ国を解体させた。ニギハヤヒは卑弥呼を共立して邪馬台国を建て、一方南近江より敗退した大国主は北東近江と美濃を中心とする狗奴国を建てた。3世紀末の崇神東征により、葛城・大和の残存の大国主勢力が壊滅させられ、邪馬台国の後継国の崇神王朝が建てられた。

天津族が建てた出雲王朝は大国主の残存勢力に支配力を奪われたが、崇神王朝成立まで連綿と繋栄した。しかしながら、崇神朝の吉備津彦と武渟河別による出雲侵攻により、出雲王朝は実質的に滅んだと思われる。一方、狗奴国は成務朝に滅亡し、大国主一族はついに滅んだ。かくて、ヤマト王権が倭国全域を実質的に平定したと言える。

〇大国主の祟り、その1

崇神記によれば崇神5・6年（崇神即位は315年）に疫病が流行り、死亡するものが多く、百姓は流離・反逆し、世情が不安定となった。倭迹迹日百襲姫命（卑弥呼とされるが3世紀半ばに死去）が神懸かり、大物主神を祀るようにとのお告げを得、さらに、天皇と臣下が「大物主神を祀る祭主を大田田根子命とし、倭大国魂神を祀る祭主を市磯長尾市（いちしのながおち）をとすれば、天下は平らぐ」という同じ夢を見た。天皇は広く探させ、茅渟県の陶邑に大田田根子を見つけた。大田田根子を祭主として大物主神を祀り、長尾市を祭主として倭大国魂神を祀ることで、疫病ははじめて収まり、国内は鎮まった。

この崇神天皇の御代、大国魂神の祟りによって惹きおこされた疫病流行を、二度とおこさぬように、人々が考え出したのが鎮花祭（はなしずめまつり）である。これは大宝令にも定められている国家的行事である。『令義解』の「鎮花祭」の条に「大神と狭井の二神の祭りである。春の花の飛散する時、疫神も分散して散り疫病を起こす。その鎮滅のために、必ずこの祭りを行う。故に鎮花という」とある。疫神の鎮滅と、花の飛散をつなぎ合わせて鎮花とした祭りで、毎年3月の吉日か、晦日に行うと定めている。祭神の2神とは、大神神社の大国主の和魂（大物主、ニギハヤヒ）と大神神社の境内の北側にある狭井坐大神荒魂神社で祭っている大国主神の荒魂の大国魂神である。鎮花祭は特に大国主神の荒魂を鎮める祭りである。

〇大国主の祟り、その2

『古事記』では、垂仁天皇の誉津別皇子についてより詳しい伝承が述べられている。天皇は尾張の国の二股に分かれた杉で二股船を作り、それを運んできて、市師池、軽池に浮かべて、皇子とともに戯れた。あるとき皇子は天を往く鵠（白鳥）を見て何かを言おうとしたので、天皇はそれを見て鵠を捕らえるように命じた。鵠は紀伊、播磨、因幡、丹波、但馬、近江、美濃、尾張、信濃、越を飛んだ末に捕らえられた。

8

しかし皇子は鵠を得てもまだ物言わなかった。ある晩、天皇の夢に何者かが現れて「我が宮を天皇の宮のごとく造り直したなら、皇子はしゃべれるようになるだろう」と述べた。そこで天皇は太占で夢に現れたのが何者であるか占わせると、言語（物言わぬ）は出雲大神の祟りとわかった。天皇は皇子を曙立王、菟上王とともに出雲に遣わし、大神を拝させると皇子はしゃべれるようになったという。天皇は皇子が話せるようになったことを知って喜び、菟上王を出雲に返して大神の宮を造らせた。

〇出雲大社の創建―大国主の鎮魂

出雲大社の正式名称は「いづもおおやしろ」であるが、一般には主に「いづもたいしゃ」と読まれる。祭神は大国主大神である。創建以来、天照大神の子の天穂日命を祖とする出雲国造家が祭祀を担ってきた。出雲大社の創建についての『古事記』の伝承は次の通りである。大国主神は国譲りに応じる条件として「我が住処を、皇孫の住処の様に太く深い柱で、千木が空高くまで届く立派な宮を造っていただければ、そこに隠れておりましょう」と述べ、これに従って西部出雲の「多芸志（たぎし）の浜」に「天之御舎（あめのみあらか）」を造った。また、『日本書紀』では、高皇産霊尊は国譲りに応じた大己貴神に、「汝の住処となる「天日隅宮（あめのひすみのみや）」を、千尋もある縄を使い、柱を高く太く、板を厚く広くして造り、天穂日命に祀らせよう」と述べた。伝承の内容や大社の呼び名は異なるが、共通して言えることは、天津神（または天皇）の命によって、国津神である大国主神の宮が建てられたということであり、その創建が単なる在地の信仰によるものではなく、古代における国家的な事業として行われたものであることが窺える。尚、出雲大社の社伝では、垂仁天皇の時が第1回、斉明天皇の時が第2回の造営とされている。

西部出雲を中心とする「出雲古国」が紀元前後にスサノオの侵攻を受け、出雲古国の主祭者たる八岐大蛇こと大穴持命（大国主の別名）が殺害された。この殺害された大国主の鎮魂のため天津神（垂仁天皇）の命により、西部出雲に出雲大社が造営されたものであろう。

三種の神器の剣璽（草薙剣と八尺瓊勾玉）は出雲（大国主）からの言わば戦利品か

三種の神器は、日本神話において、天孫降臨の際に天照大神が瓊瓊杵尊に授けたとされる三種類の宝物、八咫鏡（やたのかがみ）、八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）、草薙剣（くさなぎのつるぎ））の総称である。この内、八尺瓊勾玉と草薙剣は併せて剣璽と称される。天皇即位の最初の儀式『剣璽等承継の儀』は、宮殿のなかで一番格式の高い正殿『松の間』で行われる。儀式では新天皇が侍従長より三種の神器と、天皇と日本国家の印鑑である国璽（こくじ）と御璽（ぎょじ）を受け取り、承継される。三種の神器のなかで剣璽（八尺瓊勾玉と草薙の剣）は、天孫族が出雲の大国主から奪い取ったいわば戦利品である。しかし、八咫鏡は天孫族が初めから所持していた神器である。『剣璽等承継の儀』で、剣璽（草薙剣と八尺瓊勾玉の形代）のみが継承されるのは、これらが大国主から倭国の支配権を譲り受けた証の神器であることによるのではないか。

〇八咫鏡：『記紀』神話で、天照大神が天の岩戸に隠れた岩戸隠れの際、石凝姥命が作ったという鏡。後世この鏡は天照大神が、1世紀半ば伊都国に降臨した瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）に授けたとされる。八咫鏡とサイズが同じ（直径48cm)といわれるのは、伊都国の都と考えられる平原遺跡から出土した内行花文鏡である。この内行花文鏡が3世紀後半の崇神東征の際にヤマト王権の神器として大和に持ち込まれたと推察する。

出雲とヤマト

〇草薙剣は天叢雲剣とも言われ、三種の神器の中では天皇のもつ武力の象徴であるとされる。『記紀』神話において、スサノオが出雲でヤマタノオロチ（八岐大蛇、大国主か）を退治した時に、大蛇の体内（尾）から見つかった神剣であり、スサノオの出雲侵攻の戦利品と見なされる。スサノオは、八岐大蛇由来の神剣を高天原のアマテラスに献上した。 続いて天孫降臨に際し他の神器と共に瓊瓊杵尊に託され、地上に降りたとされている。草薙の剣は十束剣（布留御魂剣）より強靭で、草を薙ぐほど鋭く、後世の日本刀を彷彿とさせる。この草薙の剣の製法（野タダラか）はアイアンロード通じ日本海経由で伝わった可能性がある。この草薙の剣は、スサノオからニギハヤヒに渡り、さらに天香語山、天叢雲（天村雲）、倭姫、日本武尊（ヤマトタケル）、宮簀媛と渡り、熱田神宮に神体として祀られた。
〇八尺瓊勾玉は、岩戸隠れの際に後に玉造連の祖神となる玉祖命が作ったとされる強大な赤メノウ製勾玉である（『記紀』）。後に天孫降臨に際して瓊瓊杵尊に授けられたとする。崇神天皇の御代の出雲神宝事件とは、熊野大社（出雲）に安置されていた赤メノウ製の勾玉などの神宝をヤマト王権が奪う事件である。この時奪われた出雲産の赤めのう製の巨大な勾玉が八尺瓊勾玉に当たり、出雲の大国主からの国譲りの戦利品と見なされたのではないか。

出雲国造神賀詞―出雲の神々の皇室への服属儀礼

出雲国造神賀詞（いずものくにのみやつこのかんよごと）は、『記紀』が献上された8世紀初めから9世紀半ばまでの1世紀余り、天皇に奏上された。出雲国造は都の太政官の庁舎で任命が行われる。任命者は直ちに出雲国に戻って1年間の潔斎に入司して出雲大社祝部とともに改めて都に入り、吉日を選んで天皇の前で奏上したのが神賀詞（かんよごと）である。その性格としては出雲の神々の皇室への服属儀礼とみる見方が一般的である。『延喜式』にその文章が記述され、『貞観儀式』に儀式の内容が記されている。内容は天穂日命（アメノホヒ）以来の祖先神の活躍と歴代出雲国造の天皇への忠誠の歴史とともに、明つ御神と表現される天皇への献上物の差出と長寿を祈願する言葉が述べられている。

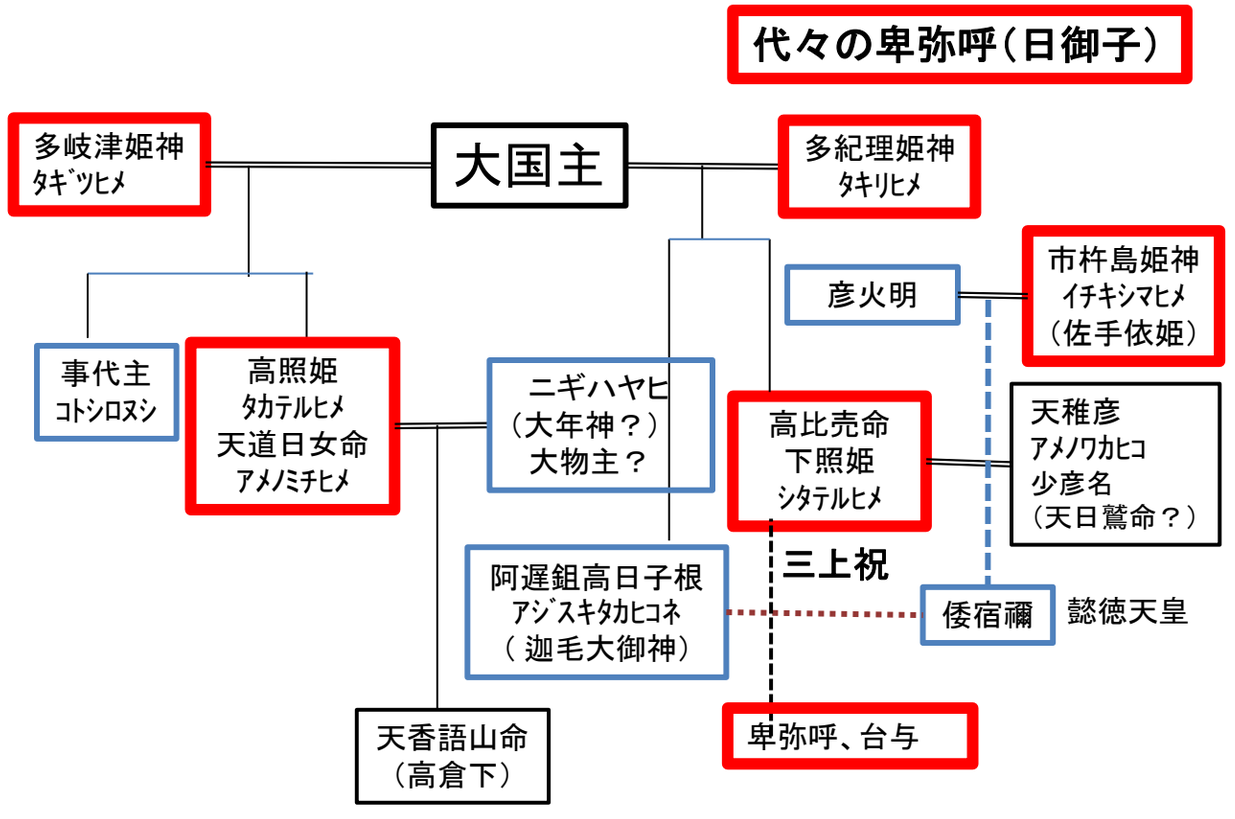
神賀詞で皇室を守護する出雲の神々として描かれているのは、謎の女神・賀夜奈流美命、大物主櫛長瓦玉命（おそらくニギハヤヒ（饒速日））、阿遅須伎高孫根乃命（阿遅鉏高日子根神、アジスキタカヒコネ）、事代主（コトシロヌシ）である。アジスキタカヒコネとコトシロヌシは、大国主命の御子神である。ニギハヤヒはスサノオの後の天津神であり、国津神である出雲の神々に属するとは思えない。しかし、ニギハヤヒは出雲や吉備で力を蓄えて東征し倭国大乱を引き起こした。ニギハヤヒは倭国大乱に勝利して邪馬台国を建て、さらに大神神社の祭神の座を大国主から奪った。大物主は自ら大国主の和魂と称したことにより出雲系の神と見なされたものと考える。問題は出雲の神の賀夜奈流美命とは如何なる女神かということである。『出雲國造神賀詞』に「賀夜奈流美命ノ御魂ヲ飛鳥ノ神奈備ニ坐テ皇孫命ノ近守神ト貢置」とあることから、大国主神が皇室の近き守護神として、賀夜奈流美命の神霊を飛鳥の神奈備に奉斎した。この飛鳥坐（あすかにいます）神社の祭神の飛鳥神奈備三日女神〔あすかのかんなびみひめのかみ〕が賀夜奈流美命とされる。社伝では、飛鳥神奈備三日女神が大国主の娘、高比売神〔たかひめのかみ〕/下照姫神〔したてるひめのかみ〕・高照光姫神〔たかてるみつひめのかみ〕であるとされている。大国主は、宗像三女神の沖津宮・多紀理媛神を妻とし阿遅鉏高日子根神と下照姫神（高比売神）をもうけ、また辺津宮・多岐津姫との間に事代主神と高照（光）姫神（天道日女、あめのみちひめ）をもうけた。下照姫は高天原から派遣された天稚彦（あめのわかひこ）と結ばれ、また高照姫の天道日女はニギハヤヒ（大年神？）と結ばれ天香語山命（高倉下）をもうけた。

賀夜奈流美命は、下照姫と高照姫（天道日女）合わせた女神の香用姫（かぐよひめ）で、加具夜姫（かぐやひめ）とも呼ばれたと考える。高照姫（天道日女）はニギハヤヒと結ばれ、天香語山命を産んだので、高照姫の方が加具夜姫と呼ばれるのに相応しい。実際、『大神分身類社鈔』によると、加夜奈留美命は高照姫の別名であるとされている。天香語山は別名高倉下で神武（崇神）東征の際に活躍した、尾張連の祖である。

私は、出雲の神々の系譜から類推されるように、加夜奈留美命とは、宗像三女神の一柱（多紀理姫神）やその御子神（下照姫）の後裔一族（三上祝）出自の邪馬台国の卑弥呼（日御子あるいは日巫女）に至る、海神族の代々の女王であると考える。ニギハヤヒ（饒速日）と彼により共立された卑弥呼（日御子）が共に出雲の神とされるは、「郁子なるかな」である。

参照： 古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）－天孫族（伽耶族）の系譜 ③ 031（出雲とヤマト（3） Facebook 藤田泰太郎タイムライン投稿21/6/1）

出雲の神々の系譜



イザナギ・イザナミ　国産み（1）（Wikipedia抜粋)

国産み（くにうみ）とは、日本の国土創世譚を伝える神話である。イザナギとイザナミの二柱の神は天の橋にたち矛で混沌をかき混ぜ島をつくる。そして、『古事記』などではその後2神で島を産んだのである。なお、国生みの話の後には神産み（かみうみ）が続く。『古事記』によれば、大八島は次のように生まれた。

伊邪那岐（イザナギ）・伊邪那美（イザナミ）の二柱の神は、別天津神（ことあまつがみ）たちに漂っていた大地を完成させるよう命じられる。別天津神たちは天沼矛（あめのぬぼこ）を二神に与えた。伊邪那岐・伊邪那美は天浮橋（あめのうきはし）に立ち、天沼矛で渾沌とした大地をかき混ぜる。このとき、矛から滴り落ちたものが積もって淤能碁呂島（おのごろじま）となった。二神は淤能碁呂島に降り、結婚する。まず淤能碁呂島に「天の御柱（みはしら）」と「八尋殿（やひろどの、広大な殿舎）」を建てた。ここで、（伊耶那岐命が）妹の伊耶那美命に「あなたの身体は、どのようにできていますか」と問うと、伊耶那美命は「私の身体には、成長して、成長していないところ（女陰のことを示す）が1ヶ所あります」と答えました。そこで、伊邪那岐命は「私の体には、成長して、成長し過ぎたところ（男根のことを示す）が1ヶ所あります。そこで、この私の成長し過ぎたところで、あなたの成長していないところを刺して塞いで、国土を生みたいと思います。生むのはどうですか。」と述べました。伊耶那美命は「それはよいことでしょう」と申しました。

伊邪那岐は左回りに、伊邪那美は右回りに天の御柱を巡り、出会った所で伊邪那美が「あなにやし、えをとこを」と伊邪那岐を褒め、伊耶那岐が「あなにやし、え娘子（をとめ）を」と伊邪那美を褒め、二神は性交する。しかし、女性である伊邪那美の方から男性の伊邪那岐を誘ったために、ちゃんとした子供が生まれなかった。二神は、最初に産まれた子供である水蛭子（ひるこ）を葦舟に乗せて流してしまい、次にアハシマが産まれた。水蛭子とアハシマは、伊邪那岐・伊邪那美の子供の内に数えない。二神は別天津神のもとに赴き、なぜちゃんとした子供が生まれないのかを聞いた。すると、占いによって、女から誘うのがよくなかったとされた。そのため、二神は淤能碁呂島に戻り、今度は男性の伊邪那岐から誘って再び性交する。

ここからこの二神は、大八島を構成する島々を生み出していった。産んだ島を順に記すと下のとおり。

1.淡道之穂之狭別島（あはぢのほのさわけのしま）：淡路島

2.伊予之二名島（いよのふたなのしま）：四国 胴体が1つで、顔が4つある。顔のそれぞれの名は以下の通り。

愛比売（えひめ）：伊予国、飯依比古（いひよりひこ）：讃岐国、大宜都比売（おほげつひめ）：阿波国（後に食物神としても登場する）、建依別（たけよりわけ）：土佐国

3.隠伎之三子島（おきのみつごのしま）：隠岐島 別名は天之忍許呂別（あめのおしころわけ）

4.筑紫島（つくしのしま）：九州 胴体が1つで、顔が4つある。顔のそれぞれの名は以下の通り。

白日別（しらひわけ）：筑紫国、豊日別（とよひわけ）：豊国、建日向日豊久士比泥別（たけひむかひとよじひねわけ）：

肥国、建日別（たけひわけ）：熊曽国

5.伊伎島（いきのしま）：壱岐島 別名は天比登都柱（あめひとつばしら）

6.津島（つしま）：対馬 別名は天之狭手依比売（あめのさでよりひめ）

7.佐度島（さどのしま）：佐渡島

8.大倭豊秋津島（おほやまととよあきつしま）：本州 別名は天御虚空豊秋津根別（あまつみそらとよあきつねわけ）

以上の八島が最初に生成されたため、日本を大八島国（おおやしまのくに）という。二神は続けて6島を産む。

1.吉備児島（きびのこじま）：児島半島 別名は建日方別（たけひかたわけ）、2.小豆島（あづきじま）：小豆島 別名は大野手比売（おほのでひめ）、3.大島（おほしま）：周防大島 別名は大多麻流別（おほたまるわけ）、4.女島（ひめじま）：姫島 別名は天一根（あめひとつね）、5.知訶島（ちかのしま）：五島列島 別名は天之忍男（あめのおしを）、6.両児島（ふたごのしま）：男女群島 別名は天両屋（あめふたや）。

天瓊を以て滄海を探るの図（小林永濯・画、明治時代）

藤田

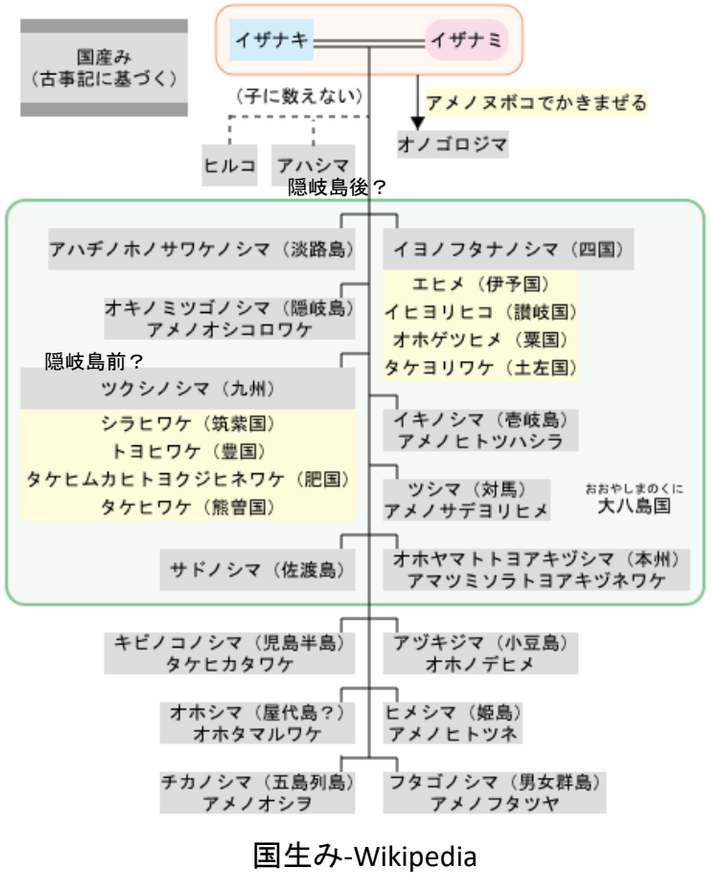
イザナギ・イザナミ　国産み（2）オノゴロ島

オノゴロ島の所在地

1．淡路島南海上の沼島。沼島は空から見ると勾玉のような神秘的な形をした離島で、淡路島の南海上4.6km先に位置している。沼島の海岸線には奇岩や岩礁が多く見られ、東南海岸には、矛先のような形をした高さ約30mの屹立する巨岩「上立神岩（かみたてがみいわ）」がそびえ立ち、国生みの舞台を思わせる象徴的な存在となっている。この上立神岩は、神話に登場する「天の御柱」とも言われ、イザナギノミコトとイザナミノミコトの2神が降り立ったと伝わっている。(Wikipedia抜粋)

2．オノゴロ島は隠岐。『古事記』で隠岐島の別名は天之忍許呂別（あめのおしころわけ）で、「あめの」と「わけ」を取ると「おしころ」となり、「オノゴロ」に通じる。「おしころ」や「オノゴロ」の清音である「オノコロ」は、「お」であるところの「ころ」となり、慶尚道方言を考えると、「遠い島」となる。また、『古事記』では隠岐の島後がオノゴロジマで、島前がオキノミツゴノジマを指すと思われる。（スサノオの来た道、朴炳植）

この説は伊西国出自のイザナギ・イザナミが日本海（隠岐）経由で丹後に入り、さらに近江にいたったと考える私見を支持するものである。（藤田）



国生み-Wikipedia

沼島の上立神岩（Wikipedia)

国産みは、中国南部、沖縄から東南アジアに広く分布する「洪水説話」に似た点が多いとされる。この説話は宗像や和邇などの海神族によって持ち込まれたものと考える。とはいえ、淡路島からの国産みは、応神王朝（河内王朝）が建てられ、河内に中臣氏と物部氏が拠点を置いていたことと関係している。すなわち、『記紀』の編纂は、藤原氏（中臣氏出自）の藤原不比等と物部氏の石上朝臣麻呂が主導したことと関連があると思う。
（藤田）

多賀大社（たがたいしゃ）は、滋賀県犬上郡多賀町多賀にある神社である。伊邪那岐命（イザナギ）・伊邪那美命（イザナミ）の2柱を祀り、古くから「お多賀さん」として親しまれた。『古事記』の写本のうち真福寺本には「伊邪那岐大神は淡海の多賀に坐すなり」との記述がある。（Wikipedia抜粋）

澤田さんの母方が多賀大社の神主で、今はなき多賀坊人の家系です。因みに、ご祭神は伊邪那岐大神ですが、御霊屋には大国主が祀ってあります。また、『多賀神社史』(昭和8年)には「反正天皇3年（5世紀半ば）に木菟臣勅（平群木菟宿禰）を奉じて伊弉諾尊の降臨地を検し」とある。『記紀』の編纂（8世紀始め）以前は近江・多賀が伊弉諾尊の降臨地と認識されていたということになる。（FB情報、澤田 順子）

イザナギ・イザナミは弁韓の伊西国から、隠岐－丹後－近江のルートで渡来したと考えている。伊弉諾神宮は淡路島からの国生み神話の故に創建されたのか。（藤田）

伊弉諾神宮（いざなぎじんぐう）は、兵庫県淡路市多賀にある神社。祭神は、伊弉諾尊と伊弉冉尊の2柱。『日本書紀』・『古事記』には、国産み・神産みを終えた伊弉諾尊が、最初に生んだ淡路島多賀の地の幽宮（かくりのみや、終焉の御住居）に鎮まったとあり、当社の起源とされる。（Wikipedia抜粋）

神産み(1) イザナギ･イザナミの誕生

紀元前一世紀に半島から列島に渡来したイザナキとイザナミが生んだ神々は、彼らが渡来する前にすでに列島にいた神々であろう。

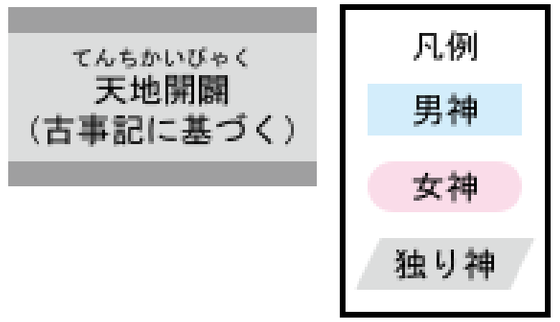
別天津神（Wikipedia抜粋)
　別天津神（ことあまつかみ）は、『古事記』において、天地開闢の時にあらわれた五柱の神々を云う。『古事記』上巻の冒頭では、天地開闢の際、高天原に以下の三柱の神（造化の三神という）が、いずれも「独神（ひとりがみ）」（男女の性別が無い神）として成って、そのまま身を隠したという。
　天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）- 至高の神
　高御産巣日神（たかみむすひのかみ）- 征服や統治の神
　神産巣日神（かみむすひのかみ）- 生産の神

　その次に、国土が形成されて海に浮かぶくらげのようになった時に以下の二柱の神が現われた。この二柱の神もまた独神として身を隠した。
　宇摩志阿斯訶備比古遅神（うましあしかびひこぢのかみ）
　天之常立神（あめのとこたちのかみ）

　これら五柱の神を、天津神の中でも特別な存在として「別天津神」と呼ぶ。別天津神の次に神世七代の神が現れた。

神世七代（Wikipedia抜粋)
　神世七代（かみのよななよ）とは、日本神話で天地開闢のとき生成した七代の神の総称。またはその時代をいう。神代七代とも書き、天神七代ともいう。陽神（男神）と陰神（女神）がある。
　初めは抽象的だった神々が、次第に男女に別れ異性を感じるようになり、最終的には愛を見つけ出し夫婦となる過程をもって、男女の体や性が整っていくことを表す部分だと言われている。

　『古事記』では、別天津神の次に現れた十二柱七代の神を神世七代としている。最初の二代は一柱で一代、その後は二柱で一代と数えて七代とする。
　1.国之常立神（くにのとこたちのかみ）
　2.豊雲野神（とよぐもぬのかみ）
　3.宇比邇神（うひぢにのかみ）・須比智邇神（すひぢにのかみ）
　4.角杙神（つぬぐいのかみ）・活杙神（いくぐいのかみ）
　5.意富斗能地神（おおとのじのかみ）・大斗乃弁神（おおとのべのかみ）
　6.淤母陀琉神（おもだるのかみ）・阿夜訶志古泥神（あやかしこねのかみ）
　7.伊邪那岐神（いざなぎのかみ）・伊邪那美神（いざなみのかみ）
　（左側が男神、右側が女神）



神産み(2) 三貴子の誕生

（Wikipedia抜粋)

神産み

大八洲国やその他の小さな島々を産んだイザナギ・イザナミは次に神々を産んだ。ここで産まれた神は家宅を表す神および風の神・木の神・野の神といった自然にまつわる神々である。大事忍男神（おほことおしをのかみ）、石土毘古神（いはつちびこのかみ）、石巣比売神（いはすひめのかみ）、大戸日別神（おほとひわけのかみ）、天之吹男神（あめのふきおのかみ）、大屋毘古神（おほやびこのかみ）、風木津別之忍男神（かざもつわけのおしをのかみ）、**大綿津見神**（おほわたつみのかみ）、速秋津日子神（はやあきつひこのかみ）、速秋津比売神（はやあきつひめのかみ）

速秋津日子神と速秋津比売神は以下の神々を産んだ。沫那藝神（あはなぎのかみ）、沫那美神（あはなみのかみ）、頬那藝神（つらなぎのかみ）、頬那美神（つらなみのかみ）、天之水分神（あめのみくまりのかみ）、国之水分神（くにのみくまりのかみ）、天之久比奢母智神（あめのくひざもちのかみ）、国之久比奢母智神（くにのくひざもちのかみ）、志那都比古神（しなつひこのかみ）、久久能智神（くくのちのかみ）、**大山津見神**（おほやまつみのかみ）、鹿屋野比売神（かやのひめのかみ） 別名は野椎神（のづちのかみ）

大山津見神と野椎神は以下の神々を産んだ。天之狭土神（あめのさづちのかみ）、国之狭土神（くにのさづちのかみ）、天之狭霧神（あめのさぎりのかみ）、国之狭霧神（くにのさぎりのかみ）、天之闇戸神（あめのくらどのかみ）、国之闇戸神（くにのくらどのかみ）、大戸惑子神（おほとまとひこのかみ）、大戸惑女神（おほとまとひめのかみ）、鳥之石楠船神（とりのいはくすぶねのかみ） 別名は天鳥船（あめのとりふね）、大宜都比売神（おほげつひめのかみ）、火之夜藝速男神（ひのやぎはやをのかみ） 別名は火之炫毘古神（ひのかがびこのかみ）別名は火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）

火の神・迦具土神を出産したとき女陰が焼け、イザナミは病気になった。病に苦しむイザナミの吐瀉物などから次々と神が生まれた。金山毘古神（かなやまびこのかみ　イザナミの吐瀉物から生まれる）、金山毘売神（かなやまびめのかみ　イザナミの吐瀉物から生まれる）、波邇夜須毘古神（はにやすびこのかみ、イザナミの大便から生まれる）、波邇夜須毘売神（はにやすびめのかみ、イザナミの大便から生まれる）、彌都波能売神（みつはのめのかみ、イザナミの尿から生まれる）、和久産巣日神（わくむすひのかみ、イザナミの尿から生まれる） 和久産巣日神には以下の一柱の子がいる。豊宇気毘売神（とようけびめのかみ）

イザナギはイザナミの死に涕泣したが、この涙から神がまた生まれた。泣沢女神（なきさわめのかみ）、イザナギはイザナミを出雲国と伯伎（伯耆）国の境にある比婆（ひば）の山(現在の島根県安来市)に葬った。妻を失った怒りからイザナギは迦具土（加具土）神を十拳剣で切り殺した。この剣に付着した血からまた神々が生まれる。なお、この十拳剣の名前を「天之尾羽張」（あめのをはばり）　別名を伊都之尾羽張（いつのをはばり）、石折神（いはさくのかみ） 根折神（ねさくのかみ）、石筒之男神（いはつつのをのかみ） 以上、三柱の神は十拳剣の先端からの血が岩石に落ちて生成された神々である。

甕速日神（みかはやひのかみ）、樋速日神（ひはやひのかみ）、建御雷之男神（たけみかづちのをのかみ） 別名は建布都神（たけふつのかみ）別名は豊布都神（とよふつのかみ）
以上、三柱の神は十拳剣の刀身の根本からの血が岩石に落ちて生成された神々である。

闇淤加美神（くらおかみのかみ）、闇御津羽神（くらみつはのかみ） 以上、二柱の神は十拳剣の柄からの血より生成された神々である。

また、殺された迦具土神の体からも神々が生まれた。正鹿山津見神（まさかやまつみのかみ、迦具土神の頭から生まれる）、淤縢山津見神（おどやまつみのかみ、迦具土神の胸から生まれる）、奥山津見神（おくやまつみのかみ、迦具土神の腹から生まれる）、闇山津見神（くらやまつみのかみ、迦具土神の性器から生まれる）、志藝山津見神（しぎやまつみのかみ、迦具土神の左手から生まれる）、羽山津見神（はやまつみのかみ、迦具土神の右手から生まれる）、原山津見神（はらやまつみのかみ、迦具土神の左足から生まれる）、戸山津見神（とやまつみのかみ、迦具土神の右足から生まれる）

黄泉の国

イザナミの病と死によって生まれた神々

イザナギはイザナミを取り戻そうと黄泉国へ赴いた。黄泉に着いたイザナギは、戸越しにイザナミに「あなたと一緒に創った国土はまだ完成していません。帰りましょう」と言ったが、イザナミは「黄泉の国の食べ物を食べてしまったので、生き返ることはできません」と答えた（注：黄泉の国のものを食べると、黄泉の住人になるとされていた。これを「黄泉竈食ひ（よもつへぐい）」という）。さらに、イザナミは「黄泉神と相談しましょう。お願いですから、私の姿は見ないで下さいね。」といい、家の奥に入った。イザナギは、イザナミがなかなか戻ってこないため、自分の左の角髪（みずら）につけていた湯津津間櫛（ゆつつなくし）という櫛の端の歯を折って、火をともして中をのぞき込んだ。するとイザナミは、体は腐って蛆がたかり、声はむせびふさがっており、蛇の姿をした8柱の雷神（八雷神）がまとわりついていた。雷神の名は以下の通り。
大雷（おほいかづち、イザナミの頭にある）、火雷（ほのいかづち、イザナミの胸にある）、黒雷（くろいかづち、イザナミの腹にある）、折雷（さくいかづち、イザナミの陰部にある）、若雷（わかいかづち、イザナミの左手にある）、土雷（つちいかづち、イザナミの右手にある）、鳴雷（なるいかづち、イザナミの左足にある）、伏雷（ふすいかづち、イザナミの右足にある）

おののいたイザナギは逃げようとしたが、イザナミは自分の醜い姿を見られたことを恥じて、黄泉醜女（よもつしこめ）にイザナギを追わせた。イザナギは蔓草（つるくさ）を輪にして頭に載せていたものを投げ捨てた。すると葡萄の実がなり、黄泉醜女がそれを食べている間、逃げた。しかしまだ追ってくるので、右の角髪（みずら）につけていた湯津津間櫛（ゆつつなくし）という竹の櫛を投げた。するとタケノコが生え、黄泉醜女がそれを食べている間、逃げた。イザナミはさらに、8柱の雷神と黄泉軍にイザナギを追わせた。イザナギは十拳剣で振り払いながら逃げ、ようやく黄泉の国と地上の境である黄泉比良坂（よもつひらさか）の坂本に着いたとき、坂本にあった桃の実を3つ投げたところ、追ってきた黄泉の国の悪霊たちは逃げ帰っていった。ここでイザナギは、桃に「人々が困っているときに助けてくれ」と言って、意富加牟豆美命（おほかむづみのみこと）と名づけた。最後にイザナミ本人が追いかけてきたので、イザナギは千人がかりでなければと動かないような大岩で黄泉比良坂をふさぎ、悪霊が出ないようにした。その岩をはさんで対面してこの夫婦は別れることとなる。このときイザナミは、「私はこれから毎日、一日に千人ずつ殺そう」と言い、これに対しイザナギは、「それなら私は人間が決して滅びないよう、一日に千五百人生ませよう」と言った。これは人間の生死の由来を表している。このときから、イザナミを黄泉津大神（よもつおほかみ）・道敷大神（ちしきのおほかみ）とも呼び、黄泉比良坂をふさいだ大岩を道返之大神（ちかへしのおほかみ）・黄泉戸大神（よみとのおほかみ）ともいう。なお、『古事記』では、黄泉比良坂は出雲国の伊賦夜坂（いふやのさか；現在の島根県松江市の旧東出雲町地区）としている。

禊祓と三貴子（神）の誕生

イザナギの禊ぎによって生まれた神々（古事記に基づく）

イザナギは黄泉の穢れから身を清めるために、竺紫（つくし）の日向（ひむか）の橘の小門（をど）の阿波岐原（あはきはら；現在の宮崎県宮崎市阿波岐原町）で禊を行った。衣を脱ぐと十二神が生まれた。衝立船戸神（つきたつふなとのかみ、杖から生まれる）、道之長乳歯神（みちのながちはのかみ、帯から生まれる）
時量師神（ときはかしのかみ、袋から生まれる）、和豆良比能宇斯能神（わづらひのうしのかみ、衣から生まれる）、道俣神（ちまたのかみ、袴から生まれる）、飽咋之宇斯能神（あきぐひのうしのかみ、冠から生まれる）、奥疎神（おきざかるのかみ、左手の腕輪から生まれる）、奥津那芸佐毘古神（おくつなぎさびこのかみ、同上）、奥津甲斐弁羅神（おきつかひべらのかみ、同上）、辺疎神（へざかるのかみ、右手の腕輪から生まれる）、辺津那芸佐毘古神（へつなぎさびこのかみ、同上）、辺津甲斐弁羅神（へつかひべらのかみ、同上）

「上流は流れが速い。下流は流れが弱い」といって、最初に中流に潜って身を清めたとき、二神が生まれた。この二神は黄泉の穢れから生まれた神である。八十禍津日神（やそまがつひのかみ）、大禍津日神（おほまがつひのかみ）次に、その禍（まが）を直そうとすると三神が生まれた。神直毘神（かむなおびのかみ）
大直毘神（おほなおびのかみ）、伊豆能売（いづのめ）、水の底で身を清めると二神が生まれた。底津綿津見神（そこつわたつみのかみ）、底筒之男神（そこつつのをのかみ）　水の中程で身を清めると二神が生まれた。中津綿津見神（なかつわたつみのかみ）、中筒之男神（なかつつのをのかみ）水の表面で身を清めると二神が生まれた。上津綿津見神（うはつわたつみのかみ）、上筒之男神（うはつつのをのかみ）　底津綿津見神・中津綿津見神・上津綿津見神は、これら三神の子の宇都志日金析命（うつしひかなさくのみこと）の子孫である阿曇連らに信仰されている。底筒之男神・中筒之男神・上筒之男神は墨江（住吉大社）の三柱の大神（住吉三神）である。

左の目を洗うと天照大御神（あまてらすおほみかみ）が生まれた。右の目を洗うと月読命（つくよみのみこと）が生まれた。鼻を洗うと建速須佐之男命（たけはやすさのをのみこと）が生まれた。イザナギは最後に三柱の貴い子を得たと喜び、天照大御神に首飾りの玉の緒を渡して高天原を委任した。その首飾りの玉を御倉板挙之神（みくらたなののかみ）という。月読命には夜の食国（をすくに）を、建速須佐之男命には海原を委任した。

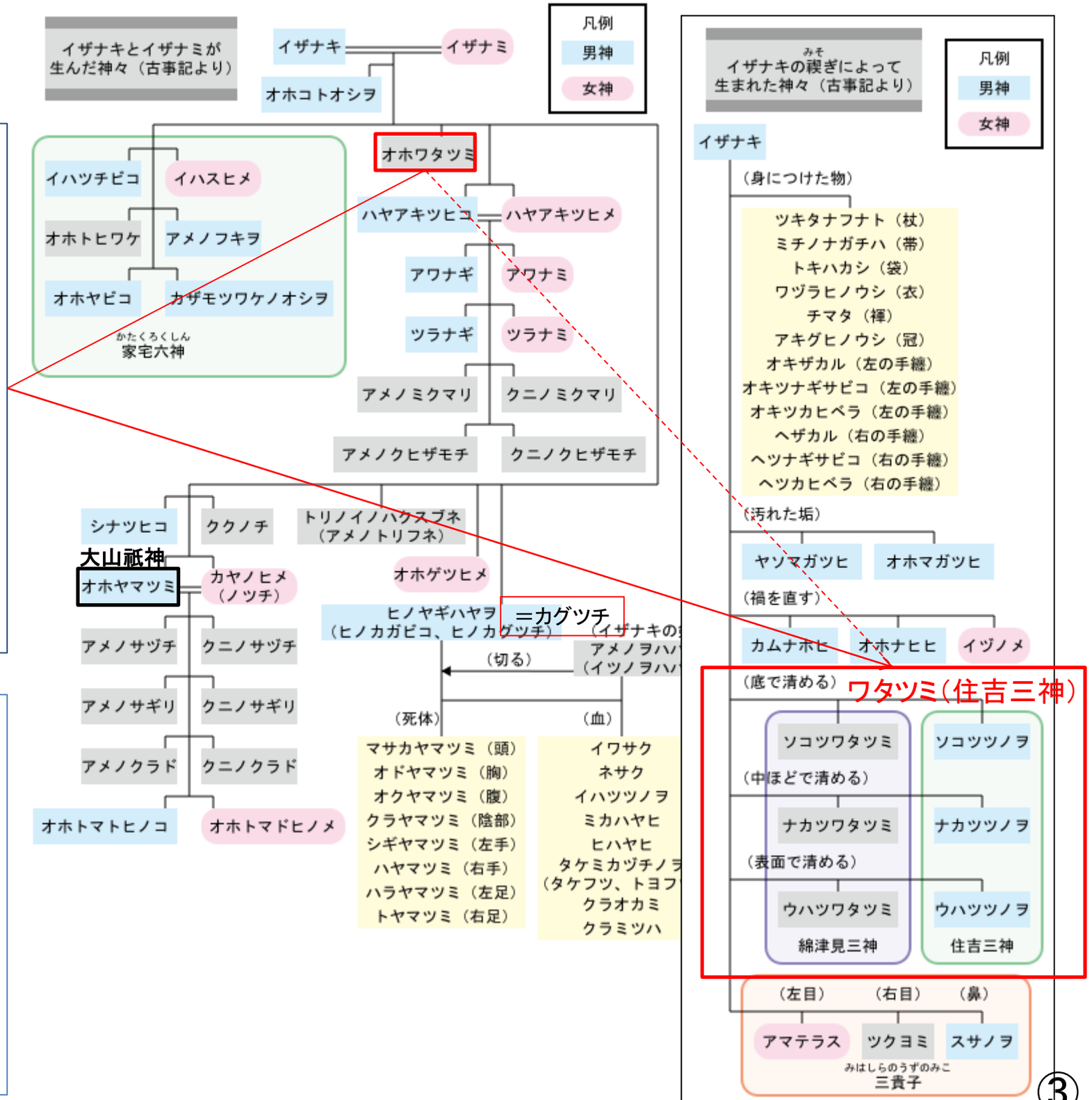
倭国の神 (1)

大綿津見（おおわたつみ）—海神族の王 （海の神）
綿津見—住吉三神

神産み－ワタツミ（Wikipedia抜粋)
オオワタツミ
日本神話で最初に登場するワタツミの神は、オオワタツミ（大綿津見神・大海神）である。神産みの段で伊弉諾尊（伊邪那岐命・いざなぎ）・伊弉冉尊（伊邪那美命・いざなみ）二神の間に生まれた。神名から海の主宰神と考えられている。

ワタツミ
イザナギが黄泉から帰って禊をした時に、ソコツワタツミ（底津綿津見神）、ナカツワタツミ（中津綿津見神）、ウワツワタツミ（上津綿津見神）の三神が生まれ、この三神を総称して綿津見神と呼んでいる。この三神はオオワタツミとは別神である。この時、ソコツツノオノミコト（底筒男命）、ナカツツノオノミコト（中筒男命）、ウワツツノオノミコト（表筒男命）の住吉三神（住吉大神）も一緒に生まれている。

おおわたつみのかみ**【大綿津見神】**
日本神話にみえる神の名。ワタは海，ワタツミとは海の霊を意味する。ワタの語源はさだかではないが，うみ，うなばらなどが自然としての海を想起させるのに対し，霊的なもののすみかとしての海を意味するようである。ワタツミノカミをまつる神社はいくつかあるが，とくにオオワタツミノカミとは，海底の宮殿に住み，海の幸また農の水を支配する神格として『記紀』の海幸・山幸の話に登場する神を指す。兄の海幸彦に借りた釣針を失った山幸彦(瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）の子)が，針を求めて訪れたのが綿津見の宮であった。
（ことバンク）



大山祇神　山の神　三島神

オオヤマツミ（大山祇神、大山積神、大山津見神、三島神）は、日本神話に登場する神。別名 和多志大神、酒解神。『日本書紀』は「大山祇神」、『古事記』では「大山津見神」と表記する。

神話での記述

『古事記』では、神産みにおいて伊弉諾尊と伊弉冉尊との間に生まれた。『日本書紀』では、イザナギが軻遇突智を斬った際に生まれたとしている。

オオヤマツミ自身についての記述はあまりなく、オオヤマツミの子と名乗る神が何度か登場する。八岐大蛇退治において、素戔嗚尊（すさのを）の妻となる奇稲田姫（くしなだひめ）の父母、足名椎命・手名椎命（あしなづち・てなづち）はオオヤマツミの子と名乗っている。その後、スサノオの系譜において、オホヤマツミ神の娘である神大市比売神（かむおほいちひめ）との間に大年神と倉稲魂尊（うかのみたま）をもうけていると記している。また、クシナダヒメとの間の子、八嶋士奴美（やしまじぬみ）は、オオヤマツミの娘の木花知流姫（このはなちるひめ）と結婚し、布波能母遅久奴須奴（ふはのもぢくぬすぬ）を生んでいる。フハノモヂクヌスヌの子孫が大国主である。

天孫降臨の後、瓊瓊杵尊はオオヤマツミの娘である木花之開耶姫と出逢い、オオヤマツミはコノハナノサクヤビメとその姉の磐長姫を差し出した。ニニギが容姿が醜いイワナガヒメだけを送り返すと、オオヤマツミはそれを怒り、「イワナガヒメを添えたのは、天孫が岩のように永遠でいられるようにと誓約を立てたからで、イワナガヒメを送り返したことで天孫の寿命は短くなるだろう」と告げた。

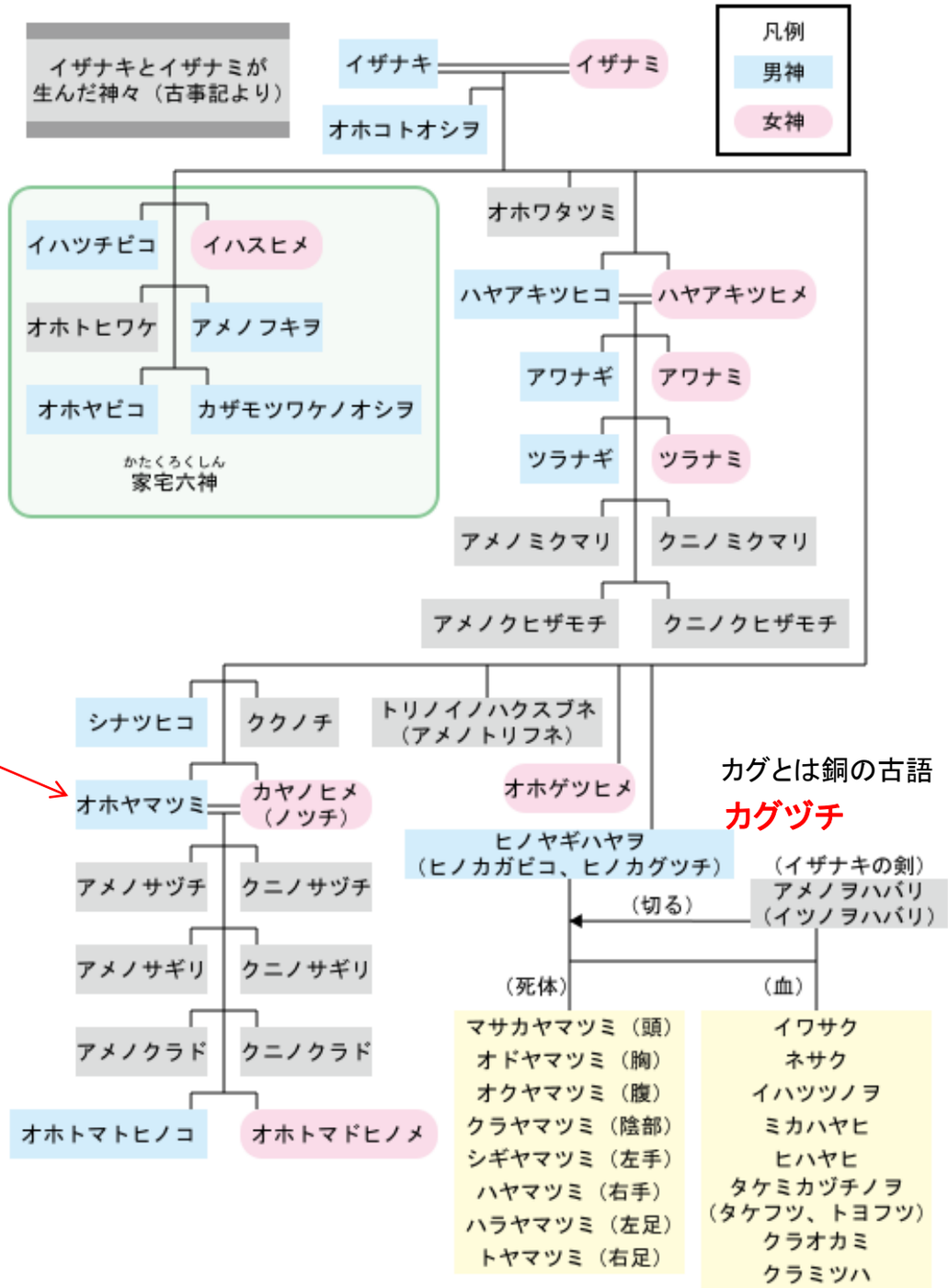
解説

神名の「ツ」は「の」、「ミ」は神霊の意なので、「オオヤマツミ」は「大いなる山の神」という意味となる。別名の和多志大神の「わた」は海の古語で、海の神を表す。すなわち、山、海の両方を司る神ということになる。大山祇神社が島に存在することもあり、三島信仰では海神としての性格が強くなっている。

また、木花之開耶姫が彦火火出見尊（ひこほほでみ）を生んだことを喜んだオオヤマツミが、天甜酒（あめのたむざけ）を造り神々に供げたとの記述もあることから、酒造の神・酒解神ともされている。このほか、軍神、武神としても信仰されている。

一般に、山の神と云えば女神だが、大山祇神は『古事記・日本書紀』ともに男神である。ただし、『日本書紀』では女神と読める箇所がある。山の神であるオオヤマツミは林業や鉱山関係者に崇拝され、山から下りてきて恵みをもたらすともされることから里山農業では田の神ともされる。ユネスコの無形文化遺産に登録された石川県奥能登地方の農神事アエノコトで迎える田の神はオオヤマツミであるとされる。

（Wikipedia抜粋）



火の神（軻遇突智（迦具土神）、金山彦、建御雷（武甕槌））の誕生

カグツチとは、『記紀』神話における火の神。『古事記』では、火之夜藝速男神（ひのやぎはやをのかみ）・火之炫毘古神（ひのかがびこのかみ）・火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ；加具土命）と表記される。また、『日本書紀』では、軻遇突智（かぐつち）、火産霊（ほむすび）と表記される。カグとは銅の古語で 銅精錬や青銅器の製作に関係した可能性がある。（藤田）

神話の記述

神産みにおいてイザナギとイザナミとの間に生まれた神である。火の神であったために、出産時にイザナミの陰部に火傷ができ、これがもとでイザナミは死んでしまう。その後、怒ったイザナギに十拳剣「天之尾羽張（アメノオハバリ）」で殺された。

●『古事記』によると、イザナミがカグツチを産んで火傷をし病み苦しんでいるときに、その嘔吐物（たぐり）から金山毘古（彦）神・金山毘売神の二神が生まれた。

●カグツチの血から、以下の神々が生まれた。

・石折神、根折神、石筒之男神、以上三柱の神は、十拳剣の先端からの血が岩石に落ちて生成された神々である。

・甕速日神、樋速日神、建御雷之男神（たけみかづちのをのかみ、別名は、建布都神（たけふつのかみ）、別名は、豊布都神（とよふつのかみ））、以上三柱の神は、十拳剣の刀身の根本からの血が岩石に落ちて生成された神々である。

・闇淤加美神、闇御津羽神、以上二柱の神は、十拳剣の柄からの血より生成された神々である。

●カグツチの死体から、以下の神々が生まれた。

正鹿山津見神、淤縢山津見神、奥山津見神、闇山津見神、志藝山津見神、羽山津見神、原山津見神、戸山津見神

信仰

・771年（宝亀2年）に創祀されたとされる火男火売神社（大分県別府市）は別府温泉の源である鶴見岳の2つの山頂を火之加具土命、火焼速女命の男女二柱の神として祀り、温泉を恵む神としても信仰されている。

・秋葉山本宮秋葉神社（静岡県浜松市）を始めとする全国の秋葉神社、愛宕神社、野々宮神社などで祀られている。また島根県安来市の意多伎神社（おだきじんじゃ）もこの神との関連の指摘がある。

・産田神社(三重県熊野市有馬町)で伊奘冉尊により出産されたとする同神社の社伝が存在する他、花窟神社(三重県熊野市有馬町)には境内に鎮座する伊弉冉尊の御陵の対面に軻遇突智の御陵も併せて鎮座している。先の産所とされている産田神社が軻遇突智の墓所であると言う説もあり、いずれにせよ熊野に非常に縁を持つ神である。

（Wikipedia抜粋）

南宮大社・金山神社　金山毘古（彦）神・金山毘売（姫）神の二神は、岐阜県垂井町の南宮大社（金山彦神のみ、美濃の国一宮）、南宮御旅神社（金山姫神のみ）、島根県安来市の金屋子神社、宮城県石巻市金華山の黄金山神社、京都府京都市の御金神社及び幡枝八幡宮末社の針神社を始め、全国の金山神社（かなやまじんじゃ）で祀られている。金山神社は、日本各地に鎮座する神社。金山彦神・金山姫神等、金属および鉱山とその関連業（鍛冶、鉱業、ほか）にまつわる神を祀るものが多い。金山神社は東日本とくに中部地方に偏在しており、九州や沖縄には1社もない。南宮大社は、諏訪から美濃の伊吹山の麓に遷ったと言われている。（藤田）

秋葉神社は、日本全国に点在する神社である。神社本庁傘下だけで約400社ある。また、歴史地理学者・米家泰作による2017年（平成29年）の調査では1,129社を数える。

神社以外にも秋葉山として祠や寺院の中で祀られている場合もあるが、殆どの祭神は神仏習合の火防（ひよけ）・火伏せの神として広く信仰された秋葉大権現（あきはだいごんげん、現在の遠州秋葉山秋葉山本宮秋葉神社と越後栃尾秋葉山の秋葉三尺坊大権現の二大霊山を起源とする）である。一般に秋葉大権現信仰は徳川綱吉の治世以降に全国に広まったとされているが、実際には各地の古くからの神仏信仰や火災・火除けに関する伝説と同化してしまうことが多く、その起源が定かであるものは少ない。

祠の場合は火伏せの神でもあるため、燃えにくい石造りの祠などが見かけられる。小さな祠であることが多く、一つの町内に何箇所も設置されている場合もある。

愛宕神社は、京都府京都市右京区にある神社。旧称は阿多古神社。旧社格は府社で、現在は別表神社。全国に約900社ある愛宕神社の総本社である。現在は「愛宕さん」とも呼ばれる。山城・丹波国境の愛宕山（標高924m）山頂に鎮座する。古くより比叡山と共に信仰を集め、神仏習合時代は愛宕権現を祀る白雲寺として知られた。

火伏せ・防火に霊験のある神社として知られ、「火迺要慎（ひのようじん）」と書かれた愛宕神社の火伏札は京都の多くの家庭の台所や飲食店の厨房や会社の茶室などに貼られている。

祭神

本殿：伊弉冉尊、埴山姫神命、天熊人命、稚産霊神、豊受姫命、

若宮：雷神、迦遇槌命（かぐつちのみこと）、破无神

奥宮：大黒主命（大国主命）以下17柱

（Wikipedia抜粋）

後述のように、建御雷(武甕槌))は素戔嗚を模した架空の神か？

倭国の神々(2)

菊理媛＝瀬織津姫＝豊受大神（縄文の女神？）、そして大宜都比売

白山信仰

白山神社の本社は加賀国石川郡の白山比咩神社で、加賀一の宮であった。奥宮は白山最高峰の御前峰山頂にある。
崇神天皇7年に、白山を仰ぎみる遥拝所が創建されたと伝えられる。祭神は菊理媛尊（白山比咩大神）、伊邪那岐尊（伊弉諾命）、伊邪那美尊（伊弉冉命）の三柱であった。その後、717年（養老元年）に、修験者泰澄が加賀国（当時は越前国）白山の主峰、御前峰（ごぜんがみね）に登って瞑想していた時に、緑碧池（翠ヶ池）から十一面観音の垂迹である九頭龍王（くずりゅうおう）が出現して、自らを伊弉冊尊の化身で白山明神・妙理大菩薩と名乗って顕現したのが白山修験場開創の由来と伝えられ、以後の白山信仰の基となった。翌718年（養老2年）に、泰澄は御前峰に社を築き、白山妙理大権現を奉祀した。平安時代には、加賀・越前・美濃の3国に禅定道が設けられ、「三箇の馬場（ばんば）は、加賀の馬場、越前の馬場、美乃の馬場也」（三馬場）と呼ばれた。そして、神仏習合により、820年（天長9年）には、それぞれの馬場に、白山寺、平泉寺、長滝寺の神宮寺が建立された。

室堂から望む白山奥宮と御前峰 (Wikipedia)

白山の三馬場と禅定道（Wikipedia改）

白山比咩神社の主祭神「白山比咩神」の実体は菊理媛（くくり媛）とされる。久保田氏は「日本の宗教とは何か」の中で白山から流れでる手取川が曲流する淵にある船岡山に白山信仰の源流がありとする。その根拠は、船岡山には縄文遺跡があり、白山比咩が最初に鎮座したのはこの地であった。聖地の船（舟）岡山という地名には北陸と丹後・但馬との共通性が見られる。丹後の大江山の南麓にある「元伊勢」のうち、豊受大神を祭る外宮は舟岡山という小丘に鎮座する。白山主神の菊理媛神は、『記紀』にわずかに見えるのみで、冥界という異境訪問をしたイザナギとその妻神イザナミの仲を取り持つ役割を果たすが、その実体は明確ではない。白山神が広く分布する北東日本海沿岸地域には、なぜか海神系の石部（磯部）神社が古社として多く分布する。これらの諸問題の検討から「**菊理媛＝瀬織津姫**」と所見が得られ、同時にこれが**豊受大神**ではないかとの推論にいたった。東北地方に見られる「おシラさま」も瀬織津姫に通じる。
（越と出雲の夜明け、宝賀寿男）

「祓戸の大神四神」（**瀬織津比咩**、速開津比咩、気吹戸主、速佐須良比咩）は、個人や社会の禍事【まがごと】と罪【つみ】、穢れ【けがれ】を祓ってくださる祓いと禊ぎ【みそぎ】をつかさどる神々です。瀬織津比咩は川の神、速開津比咩は海の神、気吹戸主は息吹の神、速佐須良比咩は地底の神です。「祓戸の大神四神」の名前は『古事記』や『日本書紀』には直接登場しませんが、いくつかの古い文献にはその名が見られ、なぞの多い神々とされています。
神道の最高祝詞である『大祓詞』には「高山の末短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織津比売という神、大海原に持ち出でなむ」とあります。勢いよく流れ下る川の力によって人々や社会の罪穢れを大海原に押し流してしまう、川に宿る大自然神であることがわかります。
（佐久奈度神社由緒記、Net）
瀬織津姫尊は、紀元前後のイザナギ・イザナミさらにスサノオが列島に帰来する前の原始神道の時代（縄文時代か）の神であると思う。（藤田）

オオゲツヒメ（オホゲツヒメ、大宜都比売、大気都比売、大宜津比売神、大気津比売神）。
オオゲツヒメという名称は「大いなる食物の女神」の意味。

概要

『古事記』においては、まず伊邪那岐命と伊邪那美命の国産みにおいて、一身四面の神である伊予之二名島（四国）の中の阿波国の別名として「大宜都比売」の名前が初めて表れる。そしてその直後の神産みにおいて、どういうわけか他の生まれいづる神々に混じり、ほぼ同名といえる「大宜都比売神」が再度生まれている記述がある。更に高天原を追放された須佐之男命に料理を振る舞う神としても登場するが、これらが同一神か別神かは不明。

説話

高天原を追放された須佐之男命は、空腹を覚えて大気都比売神に食物を求め、大気都比売神はおもむろに様々な食物を須佐之男命に与えた。それを不審に思った須佐之男命が食事の用意をする大気都比売神の様子を覗いてみると、大気都比売神は鼻や口、尻から食材を取り出し、それを調理していた。須佐之男命は、そんな汚い物を食べさせていたのかと怒り、大気都比売神を殺してしまった。すると、大気都比売神の頭から蚕が生まれ、目から稲が生まれ、耳から粟が生まれ、鼻から小豆が生まれ、陰部から麦が生まれ、尻から大豆が生まれた。これを神産巣日御祖神が回収した。
また島根県石見地方に伝わる伝説には、大気都比売神の娘に乙子狭姫がおり、雁に乗って降臨し作物の種を地上に伝えたとする。

起源

殺害された者の屍体の各部から栽培植物、とくに球根類が生じるという説話は、東南アジアから大洋州・中南米・アフリカに広く分布している。芋類を切断し地中に埋めると、再生し食料が得られることが背景にある。オオゲツヒメから生じるのが穀物であるのは、日本では穀物が主に栽培されていたためと考えられている。
（Wikipedia抜粋）

豊受大神（トヨウケビメ＝ウカノミタマ（宇迦之御魂神、倉稲魂命））、伊勢神宮外宮や稲荷神社などで祀られる

ウカノミタマ－Wikipedia抜粋

ウカノミタマは、日本神話に登場する神（女神）。『古事記』では宇迦之御魂神、『日本書紀』では倉稲魂命と表記する。名前の「ウカ」は穀物・食物の意味で、穀物の神である。また、伏見稲荷大社の主祭神であり、稲荷神（お稲荷さん）として広く信仰されている。ただし、稲荷主神としてウカノミタマの名前が文献に登場するのは室町時代以降のことである。伊勢神宮ではそれより早くから、御倉神（みくらのかみ）として祀られた。

『古事記』では、スサノオの系譜において登場し、スサノオがクシナダヒメの次に娶ったカムオオイチヒメとの間に生まれている。同母の兄に大年神（おおとしのかみ）がいる。『日本書紀』では、神産みの第六の一書において、イザナギとイザナミが飢えて気力がないときに産まれたとしている。飢えた時に食を要することから、穀物の神が生じたと考えられている。

平安時代の『延喜式』（大殿祭祝詞）には、トヨウケビメの別名ともされる屋船豊宇気姫命（やふねとようけひめのみこと）が登場するが、この女神について祝詞の注記では「これ稲の霊（みたま）なり。世にウカノミタマという。」と説明している。

伊勢神宮の外宮は、豊受大御神（ウカノミタマと同神）をお祀りしています。豊受大御神は内宮の天照大御神のお食事を司る御饌都神みけつかみであり、衣食住、産業の守り神としても崇敬されています。この外宮ではウカノミタマを倉稲魂命と表記し、御倉神として祀られている。

ウカノミタマは、伏見稲荷大社（京都市）などの全国の稲荷神社で祀られているほか、ウカノミタマを祀る神社として、以下のような例がある。

・小津神社（滋賀県守山市）　平安後期に制作された、ウカノミタマの神像（重要文化財）を祀る。垂髪（たれがみ）の女神の座像で、片膝を立て、手に宝珠を持つ。木製で像高50cm。

・小俣神社（三重県伊勢市）伊勢外宮の境外摂社。神道五部書の『御鎮座本紀』では、トヨウケ大神に随行してきた「ウカノミタマ稲女神」を祀ると記される。

・上社（三重県伊勢市）合祀により、4座の宇迦之御魂神を祀る。
　奥宮 真名井神社

丹後一宮 元伊勢 籠神社(このじんじゃ)奥宮 真名井神社は、豊受大神を主祭神として、天照大神・伊射奈岐大神（いざなぎおおかみ）・伊射奈美大神（いざなみおおかみ）・罔象女命（みづはのめのみこと）・彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）・神代五代神（かみよいつつよのかみ）をお祀りしています。豊受大神は別名を天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）・国常立尊（くにとこたちのみこと）・御饌津神（みけつかみ）とも云い、倉稲魂命（うかのみたま）・宇迦之御魂（うかのみたま）・保食神（うけもちのかみ）・大宜津比売命（おおげつひめのみこと）なども同神と考えられています。
（奥宮 真名井神社 - 丹後一宮 元伊勢 籠神社(このじんじゃ) 京都、Net)
（マナイと云う言葉は、元々はアイヌ語が語源で、水の出る/ある沢と云うつまり溢れ出る水のことで水源、湧水、泉、沢、川のことを指している。なので現在の日本には特別な清浄な水に先住民族から引き継がれた言葉が「真名井」と云う名で残っていると云うことなのだろう。FB投稿、ムサーフル）

伊勢神宮外宮の主祭神の豊受大神は、元伊勢籠神社から遷ったと見なされている。**豊受大伸の別名と考えられるウカノミタマを祀る小津神社が滋賀県守山市にあり、同市に弥生時代後期の伊勢遺跡があることとの関連性が注目**される。（藤田）

式内社　近江國野洲郡 小津神社

御祭神
宇迦之御魂命

滋賀県守山市にある。守山駅の北西5Kmほどの杉江町に鎮座。広い参道を北西に数十m進むと左手に当社の三之宮の本殿がポツンと鎮座。参道を右手（北東）に曲がって、さらに進むと砂利の広い境内。境内の中央部に拝殿があり、拝殿の後方、垣の中に国指定重要文化財の流造桧皮葺三間社の美しい本殿がある。
（小津神社 (守山市)、Net)

小津神社本殿
浜街道に面した大きな鳥居をくぐって馬場を進むと、本殿があります。この本殿は、三間社流造（さんげんしゃながれづくり）になっています。約500年前に焼けた後、約450年前に再建されています。丸や四角い柱が使われています。
（国重要文化財）
(ふるさと守山デジタル資料集、Net)

木造宇迦乃御魂命坐像（もくぞううかのみたまのみことざぞう）
小津神社の大切な御神像で、わが国の3大神像の一つと言われるほど、すぐれた彫刻で、約50cmの大きさです。平安時代の作。
（国重要文化財）
(ふるさと守山デジタル資料集、Net)

藤田

アラハバキ神　縄文の神、蝦夷の神か

氷川神社の祭神の推移：アラハバキ⇒大国主⇒スサノオ（物部）

氷川神社（さいたま市）や二宮神社（船橋市）の祭神は素戔嗚、稲田姫命と大国主（大己貴）となっており、このことは、物部一族が大国主の支配していた南関東（武蔵や下総）に進出し、大国主から支配権を奪ったことを示すと思う。

（氷川神社拝殿、Wikipedia）

氷川神社（武蔵国一宮）
・主祭神：須佐之男命、稲田姫命、大己貴命
・神社の境内は見沼（江戸時代中期まで存在した広大な沼）の畔に立ち、もとは見沼の水神を祀っていたと考えられている。この一帯は出雲族が開拓した地であり、武蔵国造は出雲国造と同族とされる。社名の「氷川」も出雲の「簸川」（ひかわ、現在の斐伊川（ひいかわ））に由来するという説がある。
・大宮の氷川神社・中川の中氷川神社（現 中山神社）・三室の氷川女体神社は冬至の日の出の線上に並んでいる。
・氷川神社の摂社に「門客人神社」があり、元々は「荒脛巾（あらはばき）神社」と呼ばれていたもので、アラハバキが「客人神」として祀られている。このアラハバキ社は氷川神社の地主神であり、先住の神がアラハバキとみられる。
（Wikipedia抜粋）

アラハバキ神
「荒脛巾神」という文字から、脛(はぎ)に佩く「脛巾(はばき)」の神と捉えられ、神像に草で編んだ脛巾が取り付けられる信仰がある。多賀城市の荒脛巾神社で祀られる「おきゃくさん」は足の神として、旅人から崇拝され、脚絆等を奉げられていたが、後に「下半身全般」を癒すとされ、男根をかたどった物も奉げられた。神仏分離以降は「脛」の字から長脛彦を祀るとされた。
（Wikipedia抜粋）

氷川神社
・縄文時代の貝塚は、日本列島全体で約2500か所発見されているが、その4分の1は東京湾岸一帯に集中している。そして弥生時代も彼らの子孫の多くが代々この地に暮らしていたと推測できる。この地にはアイヌ系のアラハバキ神を祀る古社があったと伝えられている。
・富士山は日本一の神奈備です。富士山を神奈備とする国とは氷川神社を一宮とする武蔵の國ではないか。紀元前2世紀、秦の徐福は蓬莱山と見なされる富士山を目指し、富士山の山麓の史記の言う「平原広沢の地」である武蔵の国に辿り着いたのではないか。そして、徐福は方術（風水術の原型・天文地理）を駆使して「都」を定め、関東の中心の武蔵の国を治めたのではないか。「徐福が富士山の山麓に国をたてたという伝承は偽書とされる宮下文書にもみられる（謎の宮下文書、佐治芳彦）」
・紀元前後、新羅のスサノオが北九州に侵攻し、さらには出雲を侵し、八岐大蛇を殺したが、その際大国主勢力（大己貴命）の一団は日本海側を北に逃れたと考える。その集団の一部は越後から信濃川沿いに北信濃、さらに関東北部・関東平野へと進み、徐福の立てた武蔵国を勢力下に治め、大国主ネットワークの一支国とした。また、邪馬台国時代、近江東北部・美濃を核とする大国主の狗奴国が東日本に拡張し、武蔵の国に達したとも考えられる。
・3世紀後半の邪馬台国衰退の頃、スサノオを崇める崇神朝の四道将軍の一人、大彦命が関東に至り、武蔵国を勢力圏においた。そのため、スサノオを氷川神社の祭神にしたのではないか。興味深いことに、氷川神社の近傍に稲荷山古墳があり、この古墳から金錯銘鉄剣と邪馬台国が三世紀の初めに遼東半島の公孫氏から独占的に入手した画文帯神獣鏡とが出土した。この鉄剣には埋葬された豪族の長の祖として開化天皇の兄弟で四道将軍の一人である意富比垝（大彦）の名が刻まれていた。また、南関東の土器が邪馬台国の都の纒向遺跡から出土している。これらのことを鑑みると開化朝（3世紀後半）に物部軍団を率いた大彦が大国主の支配する南関東（武蔵や下総）に進出し、大国主を倒して南関東を制圧したとみる。また、下総の物部氏の香取神宮はこの侵攻の折に創建されたのではないか。（富士山2200年の秘密、戸矢学＋藤田私見）

（富士山2200年の秘密、戸矢学）

氷川神社の全国鎮座数

県名	鎮座数
北海道	2
福島県	6
茨城県	2
栃木県	2
埼玉県	182
東京都	69
千葉県	1
神奈川県	3
新潟県	1
福井県	14
滋賀県	1
和歌山県	1
島根県	2
山口県	1
長崎県	1
鹿児島県	1
合計数	289

旧・武蔵国である東京・埼玉だけで251社。

藤田

倭国の神々(3)　五男三女神（宗像三女神と王子五柱の男神）の誕生

アマテラスとスサノオの誓約（アマテラスとスサノオのうけひ）

『古事記』や『日本書紀』に記される天照大神（アマテラス）と建速須佐之男命（スサノオ、日本書紀では素戔嗚尊）が行った誓約（占い）のこと。

『古事記』

伊邪那岐命（イザナギ）が建速須佐之男命（スサノオ）に海原の支配を命じたところ、建速須佐之男命は伊邪那美命（イザナミ）がいる根の国（黄泉の国）へ行きたいと泣き叫び、天地に甚大な被害を与えた。イザナギは怒って「それならばこの国に住んではいけない」と彼を追放した。

スサノオは、姉のアマテラスに会ってから根の国へ行こうと思い、アマテラスが治める高天原へ昇る。すると山川が響動し国土が皆震動したので、アマテラスはスサノオが高天原を奪いに来たと思い、武具を携えて彼を迎えた。

スサノオはアマテラスの疑いを解くために、宇気比（誓約）をしようといった。二神は天の安河を挟んで誓約を行った。まず、アマテラスがスサノオの持っている十拳剣（とつかのつるぎ）を受け取って噛み砕き、吹き出した息の霧から以下の三柱の女神（宗像三女神）が生まれた。この三姉妹の女神は、アマテラスの神勅により海北道中（玄界灘）に降臨し、宗像大社の沖津宮、中津宮、辺津宮、それぞれに祀られている。

多紀理毘売命 - 別名：奥津島比売命（おきつしまひめ）。沖津宮に祀られる。
多岐都比売命 - 中津宮に祀られる。
市寸島比売命 - 別名：狭依毘売命（さよりびめ）。辺津宮に祀られる。

次に、スサノオが、アマテラスの「八尺の勾玉の五百箇のみすまるの珠」を受け取って噛み砕き、吹き出した息の霧から以下の五柱の男神が生まれた。

左のみづらに巻いている玉から **正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命（アメノオシホミミ）**
右のみづらに巻いている玉から**天之菩卑能命（アメノホヒ）**
かづらに巻いている玉から**天津日子根命（アマツヒコネ）**
左手に巻いている玉から**活津日子根命（イクツヒコネ）**
右手に巻いている玉から**熊野久須毘命（クマノクスビ）**

これによりスサノオは「我が心清く明し。故れ、我が生める子は、手弱女を得つ。」と勝利を宣言した。

『日本書紀』（第一の一書）

『日本書紀』第六段の本文では、古事記と同様に天照大神が素戔嗚尊（スサノヲ）を待ち構えるが、天の安河を挟んではいない。また素戔嗚尊が「私は今、命令を受けて根國に向かおうとしており、一度高天原を訪れ姉上と会った後に去ろうと思う」と言うと（伊弉諾尊が）「許す」といった、とあるので古事記の様に追われたのでも無い。

誓約では、天照大神が素戔嗚尊の十握劒（とつかのつるぎ）を貰い受け、打ち折って三つに分断し、天真名井（あめのまない）の水で濯ぎ嚼みに嚙んで吹き出した、とある。その息の霧から生まれた神が以下の宗像三女神である。

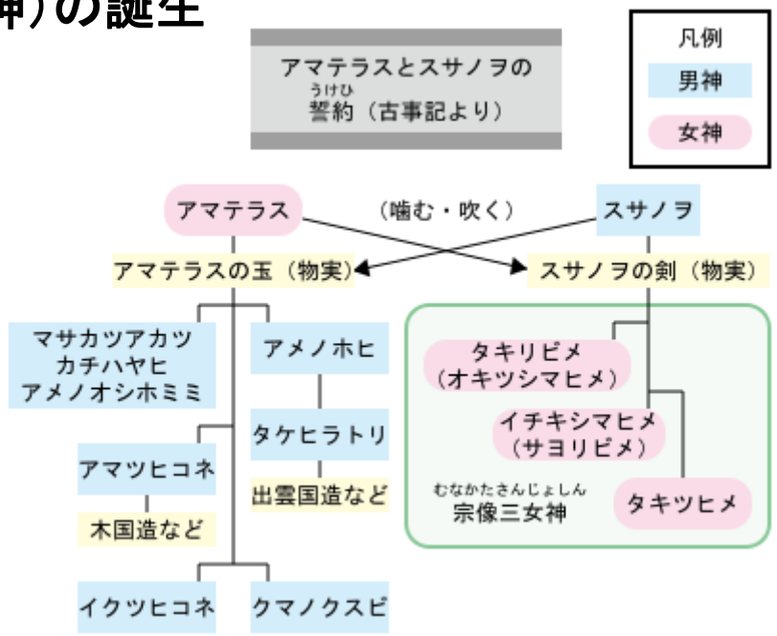
田心姫（たこりひめ）
湍津姫（たぎつひめ）
市杵嶋姫（いちきしまひめ）

そして素戔嗚尊が天照大神の頭髪と腕に巻いていた八坂瓊之五百箇御統（やさかにのいおつみすまる）を貰い受け、天眞名井の水で濯ぎ嚼みに嚙んで吹き出した、とある。その息の霧から生まれた神が以下の五柱の神である。

天忍穂耳命
天穂日命：出雲臣（いづものおみ）、土師連（はじのむらじ）等の祖神。
天津彦根命：凡川内直（おおしかふちのあたひ）、山代直（やましろのあたい）等の祖神。
活津彦根命
熊野櫲樟日命

これにより彼の心が清いと証明している。

（Wikipedia抜粋）



アマテラスとスサノオの誓約（解説）

『古事記』では天照大神（アマテラス）は、後に生まれた男神は自分の物から生まれたから自分の子として引き取り、先に生まれた女神は建速須佐之男命（スサノオ）の物から生まれたから彼の子だと宣言した。建速須佐之男命は自分の心が潔白だから私の子は優しい女神だったといい、天照大神は彼を許した。

『日本書紀』第一の一書では男神なら勝ちとし、物実を交換せずに子を生んでいる。すなわち、天照大神は十拳剣から女神を生み、素戔嗚尊（スサノオ）は自分の勾玉から男神を生んで彼が勝ったとする。『古事記』と同様に物実の持ち主の子とするならば天照大神の勝ちとなる。また、日本全国にある天真名井神社、八王子神社などでは、宗像三女神と、王子五柱の男神を五男三女神として祀る。

（Wikipedia抜粋）

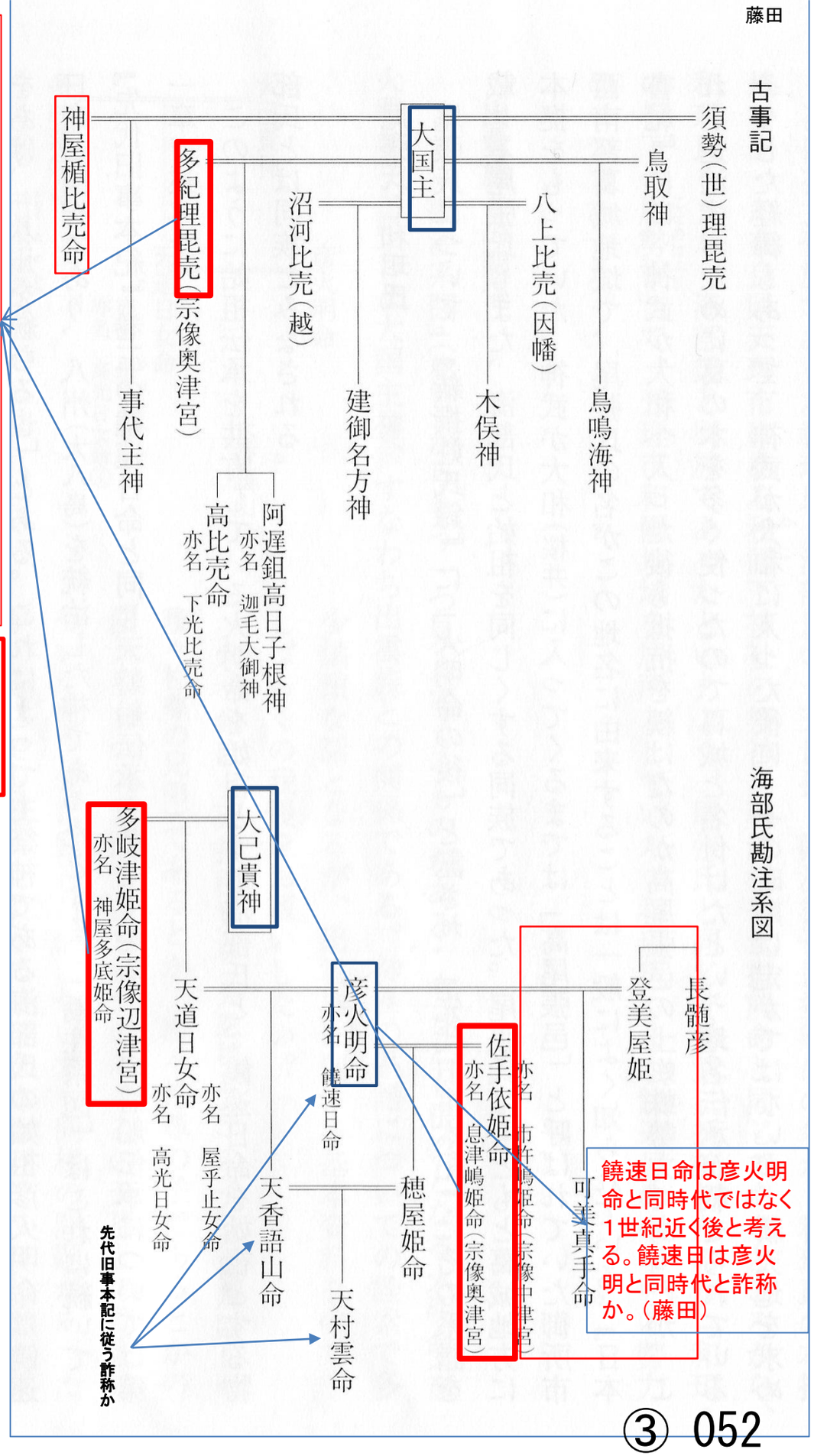
宗像三女神（海神族の女王）

海神（人）族は春秋戦国時代（弥生時代）に江南からの渡来民である。海人族に属す氏族には和邇氏、安曇氏、宗像（胸形）氏などが有名である。ほかに海部氏（籠神社宮司家）や住吉大社の津守氏も元は海人族であったとする説がある。大国主も大山祇ももとは海神族と考える識者もいる。

『古事記』に「宗像三女神の三柱の神は、胸形君等のもち拝（いつ）く三前（みまえ）の大神なり」とあり、胸形氏ら海人集団の祭る神であった。それが神功皇后の三韓征伐の成功や、朝鮮半島との緊密化により、土着神、地方神であった三神が5世紀以降国家神として祭られるようになった。
『古事記』には、誓約において、天照御大神が須佐之男命（すさのを）の十拳剣を譲り受けて生んだとされており、須佐之男命の物実（ものざね）から化生したので須佐之男命の子としている。降臨の地は、福岡県の宗像地方東端の鞍手郡鞍手町の六ヶ岳という山である。また、天照大神が国つくりの前に、宗像三神に「宗像地方から朝鮮半島や支那大陸へつながる海の道は降って、歴代の天皇をお助けすると共に歴代の天皇から篤いお祭りを受けられよ」と示した。このことから、三女神は現在のそれぞれの地に降臨し、祀れるようになった。
　これが宗像大社が祀る沖ノ島の沖津宮 - 多紀理毘売命（たきりびめ） 別名 奥津島比売命（おきつしまひめ）、大島の中津宮 - 市寸島比売命（いちきしまひめ） 別名 狭依毘売（さよりびめ）、田島の辺津宮（へつみや） - 多岐都比売命（たぎつひめ）である。
（宗像三女神— Wikipedia抜粋　＋　藤田）

大国主命（大己貴神）は、多岐津姫命（神屋楯比売命）と結ばれ、事代主神と天道日女命（高光日女（高照姫）、ニギハヤヒ（大年神）の妻）を産まれる。また、多紀理毘売命と結ばれ、阿遅鉏高日子根神（味鋤高彦根命）（アジスキタカネヒコネ（迦毛大御神））と下光比売命（下照姫）あるいは高比売命を産む。彦火明命は市杵島姫神を娶る。事代主命、味鋤高彦根命、下照姫、高照姫は葛城と深く関係している。（藤田）

宗像三女神（むなかたさんじょしん）は、宗像市の辺津宮（へつみや）、11km沖の大島にある中津宮、そして60km沖の沖ノ島にある沖津宮の三ヶ所にそれぞれ祀られています。（ステレオ歴史探訪「宗像海人と海の正倉院」）



宗像大社

宗像大社（むなかたたいしゃ）は、福岡県宗像市にある神社。日本各地に七千余ある宗像神社、厳島神社、および宗像三女神を祀る神社の総本社である。また、道の神としての総合神、貴（むち）の称号を伊勢神宮、出雲大社に並び持ち、道主貴（みちぬしのむち）と称す。神宝として古代祭祀の国宝を多数有し、裏伊勢とも称される。

「宗像大社」は沖ノ島の沖津宮、筑前大島の中津宮、宗像市田島の辺津宮の三社の総称であるが、現在では辺津宮のみを指す場合も多い。地図上で辺津宮から11km離れた中津宮、さらに49km離れた沖津宮を線で結ぶと、その直線は145km離れた朝鮮半島釜山の方向に向かう。古代から半島と大陸の政治、経済、文化の海上路であった。古くから海上・交通安全の神としての神威にちなみ、信仰されている。

海上交通の要所に位置する沖ノ島に祀られている沖津宮は、「おいわずさま」と呼ばれ島全体が御神体である。そのため現在でも女人禁制であり、男性であっても上陸前には禊を行なわなければならない。昭和29年以来十数年に渡り沖の島の発掘調査が行われ、4・5世紀から9世紀までの石舞台や古代装飾品などの大量の祭祀遺物が発見された。このことから、沖の島は俗に「海の正倉院」と呼ばれており、古代から信仰の対象とされていたことが偲ばれる。

伝えられる伝承では日本神話に起源を持つという。天照大神と素戔嗚尊の誓約（うけい）の際、天照大神の息から生まれたのが宗像三女神ということになっていて、彼女達は天照の勅命を奉じ皇孫を助けるため筑紫の宗像に降りこの地を治めるようになったのが起源とされている。

宗像は『古事記』では胸形という字が当てられ、また胸肩、宗形とも表記されるが、元は水潟であったとする説もある。古くから海の神として信仰を集めてきたが、神功皇后が三韓征伐の際ここに航海の安全を祈り霊験があったといわれ、事あるごとに国に幣使を遣わす習いになったとされる。またこの逸話からは航海安全の守護神として崇められるようになった経緯がうかがえる。

（Wikipedia抜粋）

祭神

宗像三女神（宗像三神）
沖津宮（おきつぐう）：多紀理媛神
中津宮（なかつぐう）：市杵島姫神
辺津宮（へつぐう）：多岐津姫神

祝　世界文化遺産登録！
2017年7月9日に世界遺産に登録された『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群。

辺津宮 本殿

中津宮拝殿

沖津宮拝殿

奴 国：海神族の国

呉伯太子孫の呉王夫差（呉の最後の王）の子「忌」は、BC473年呉の滅亡時に菊池川河口付近に渡来し現在の菊池市近辺に定住した（「松野連系図」参照）。「忌」の子孫が筑前に北上して奴国を建てた可能性がある。奴国では銅矛を祭器とし、墓制に甕棺墓を用いたか。

奴国（なこく、なのくに）とは、1～3世紀に『後漢書』「東夷伝」や「魏志倭人伝」「梁書」・『北史倭国伝』に現れる最古の倭人の国である。大和時代の儺県（なのあがた）、現在の福岡市や春日市など福岡平野一帯を支配していたとされる。この地域には、弥生時代中期の集落や水田跡、甕棺墓、青銅器鋳造跡等の遺跡が各所（須玖岡本遺跡など）で確認されている。

奴国は、海神（人）族の国々の中核で、博多湾の湾口に位置する志賀島は海神族の本拠地と見なされる。志賀島にある志賀海神社は志賀三神（綿津見三神）を祀り、全国の綿津見神社の総本宮である。

倭国が後漢と外交交渉をもったのは、以下の史料が示すように倭 奴国王が後漢の光武帝に朝貢したのが始まりである。『後漢書』東夷伝によれば、建武中元二年（57年）後漢の光武帝に倭 奴国が使して、光武帝により、倭 奴国が冊封され金印を綬与されたという。江戸時代に農民が志賀島から金印を発見し、倭奴国が実在したことが証明された。地中から発掘されたにしては金印の状態が余りに良いために金印偽造説も出たが、書体の鑑定等から、偽造説については否定的な意見が大勢を占めている。その金印には「漢委奴國王」(かんのわのなのこくおう)と刻まれていた。刻まれている字は「委」であり、「倭」ではないが、委は倭の人偏を省略することがあり、この場合は委＝倭である。このように偏や旁を省略することを減筆という。（主としてWikipedia抜粋）

金印の印面

須玖岡本遺跡

「奴国」有力者の墓か…国内最大級の甕棺墓

毎日新聞2016年6月17日

福岡県春日市教委は17日、同市の須玖（すぐ）岡本遺跡で、墓穴の大きさが国内最大級となる甕棺（かめかん）墓（弥生中期前半＝紀元前約150年）が見つかった、と発表した。同遺跡は『魏志倭人伝』に出てくる「奴国」の中心地で、王や王族の集団墓地。今回の甕棺墓は奴国のナンバー2、3クラスの有力者の墓の可能性が指摘されている。

墓穴は縦5．2メートル、横3．9メートル。長さ約1メートルの甕を二つ合わせた甕棺から銅剣（約42センチ）1点と、被葬者の身分が高いことを示す青銅製の飾り「把頭飾（はとうしょく）」（高さ約4．5センチ、幅約5．5センチ）1点が見つかった。遺物周囲の土の表面からは複数種類の布の痕跡が多数確認された。遺物や遺体を布で何重にもくるんだ可能性があるとみている。

奴国は、弥生時代の北部九州の中心的な国で、中国・後漢の光武帝から贈られた国宝の金印が有名。須玖岡本遺跡一帯は「奴国」の中枢部で、弥生時代有数の青銅器生産遺跡としても知られる。同遺跡では銅鏡30点以上を副葬した「王墓」とされる甕棺墓があり、今回の甕棺墓はこの王墓の時代よりやや古いが、位置は王墓から80メートルと近い。

須玖岡本遺跡で見つかった、墓穴の大きさが国内最大級となる甕棺墓の全景。左が甕棺＝福岡県春日市教委提供

王墓出土鏡

須玖岡本遺跡の王墓には、30面前後の中国製鏡が埋葬されていた。とりわけ注目されるのは、3面の草葉文鏡で、いずれも面径が20cmを超える大型鏡である。このような大型の草葉文鏡は中国でも出土例が少なく、奴国王の強大な権力を物語るものといえる。

奴国の都と推定されている、須玖岡本遺跡（福岡県春日市）の甕棺墓は紀元前約150年の墓と推定され、この年代は弥生時代中期中葉に当たる。スサノオが辰韓より北九州に侵攻したのが紀元前後で、スサノオにより伊都国が建てられたと考える。「57年、後漢の光武帝に奴国が使して、光武帝により、金印を綬与された」というのでこの頃までは奴国は強大であったと思う。その後、伊都国は奴国を圧倒し、奴国の嫡流の和邇氏は近江湖西に遷った。従って、107年　倭国王、師升等、後漢・安帝に使いを送るとあるが、師升はスサノオの子孫で伊都国王と推測する。（藤田）

建国直後の後漢の光武帝に倭国の代表として、「奴」国を認めさせ、金印を授与されたのは何故か

後漢初期、楽浪郡の漢族系在地豪族の王調が反乱を起こし、後漢の楽浪太守の劉憲を殺害し、大将軍・楽浪太守を自称した。30年（建武6年）、光武帝が王遵を派遣してこの反乱を鎮圧させようとしたが、王遵が遼東に到着すると、すでに郡三老の王閎と郡決曹史の楊邑らによって王調は殺害された後であった。この反乱を契機に後漢は、楽浪郡の地方豪族を県侯とし、一部郡県を県侯として、内政の自治を認めるようになった。これは単に後漢の政策変更だけではなく、朝鮮諸族の発展によるものであり、王調が反乱を起こした際にも、郡吏が王調の命令に従事するほどに在地勢力が政治的に発展していたことを示している。このような不穏な情勢を鎮めるために、南朝鮮まで勢力を拡大していた倭国の代表の奴国の力が必要になり、後漢光武帝は奴国に金印「漢委奴國王」を綬与したのではないか。それに加え奴国が呉太白の子孫の国であると主張したことも金印を授与する大きな要因であると思う。（Wikipedia抜粋＋藤田）

藤田

奴国(つづき)

【独自】国内最古の「分銅」、福岡で出土…大陸と規格共通
読売新聞オンライン2020/12/20
　中国の史書・魏志倭人伝が伝える奴国なこくの王都とされる福岡県春日市の須玖すぐ遺跡群で、国内最古となる弥生時代中期前半（紀元前2世紀頃）の計量用の重り「権けん」が出土した。重さの規格は韓国出土の権と共通しており、奴国が大陸の度量衡の制度をいち早く受容し、青銅器生産などに利用していたことを示す発見だ。
　今回見つかったのは5・85グラム～337・19グラム。ほぼ完全な形で残る5点は、韓国慶尚南道・茶戸里タホリ遺跡の権（約11グラム）の3倍（2点）、6倍、20倍、30倍の重さとなっていた。
　国内では「弥生分銅」と称される権が、紀元前後に近畿を中心に分布したが、その基本単位（8・67グラム）は大陸に類例がなく、近畿文化圏独自のものと考えられている。

志賀島と志賀三神（神綿津見三神）

志賀島（しかのしま）は、福岡県福岡市東区に所属する島である。博多湾の北部に位置し、海の中道と陸続きである。古代日本（九州）の大陸・半島への海上交易の出発点として、歴史的に重要な位置を占めていた。また島内にある志賀海神社は綿津見三神を祀り、全国の綿津見神社の総本宮である。
(Wikipedia抜粋)

志賀町でGoogle検索すると、滋賀県志賀町がヒットする。志賀町は現在大津市に組み込まれているが、旧志賀町には和邇という地名がある。和邇氏は天理市が本拠であったが、大津市和邇は和邇氏の故地と考えられる。和邇氏は奴国の嫡流との説（古代氏族の研究①　和珥氏、宝賀）がある。（藤田）

志賀海神社拝殿（Wikipedia）

志賀海神社（しかうみじんじゃ）は、福岡県福岡市東区志賀島にある神社。式内社（名神大社）。全国の綿津見神社、海神社の総本社を称する。龍の都と称えられ、古代氏族の阿曇氏（安曇氏）ゆかり地として知られる。
祭神は、次のように左・中・右殿に主祭神が各1柱、相殿神が各1柱が祀られている。主祭神の3柱は「神綿津見三神（わたつみさんしん）、志賀三神」と総称される。
左殿：仲津綿津見神（なかつわたつみのかみ）
左殿相殿：神功皇后（じんぐうこうごう）
中殿：底津綿津見神（そこつわたつみのかみ）
中殿相殿：玉依姫命（たまよりひめのみこと）
右殿：表津綿津見神（うはつわたつみのかみ）
右殿相殿：応神天皇（おうじんてんのう）
（Wikipedia抜粋）

綿津見神の綿=ソム、嶋の事を伝えており、綿津見とは「嶋の警備「嶋の監理」を意味しており、島を出入りする人や舟、国邑の監理、今で言う入国管理局のような職掌と言える。俗説に、綿のワタは韓語パダ=海を意味したものという説が観念化しているが、海というよりも島、その真意は「島」、海に囲まれた嶋の貿易や政経の観察が綿津見神の職掌であると断言できる。（石岡 茂、FB情報）

卑弥呼(日御子？)の系譜

1

わ(倭)、ヤマト(邪馬台)、そして日本(≒任那);大王・天皇は日の御子と呼称

縄文・弥生時代の列島および南朝鮮の住民は、古代中国人に問われ、自分たちのことをなんと呼んでいたのであろうか。我・吾(わ)と自称したので、それが漢字の倭になり、倭人の国(倭国)とされた。8世紀初頭に編纂された『日本書紀』に、饒速日(ニギハヤヒ)が建てたヤマト(邪馬台)国と思われる「虚空見つ日本(倭(やまと))の国(「虚空見つ」とは修辞句)」が記載されている。南朝鮮出自のユダヤ系の倭人と思われるスサノオの後のニギハヤヒがヤマト(ヤハウェ(エホバ)の民(ヤー・ウマト)を意味するヘブライ語)を倭国に持ち込んだとも云う。「ヤマト」は、倭、大倭、大和、日本の和訓ともなった。このなかで日本だけが異質である。

「日本という国号」や「天皇という地位・称号」が公式に設定されたのは689年の飛鳥浄御原令である。「日本」という国号を東アジア世界において初めて名乗った年は702年で則天武后(623頃-705)に面謁した遣唐使が自分たちの国は中国側が呼ぶ「倭」ではなく「日本」であると名乗っている。

3世紀末 任那から東遷した勢力(崇神を旗頭)は、大和の地に入ってからも、自らを「任那」と号したのではないか。「日本」の国号が初めてあらわれるのが10世紀成立の『旧唐書』、11世紀成立の『新唐書』にみられる「倭国伝」からである。したがって、倭王権が倭から日本に国号を変えたのは、唐代に入ってからと考えられる。田中勝也氏は云う、(朝鮮の古地名は、'本'は'那'で国邑を表す。また'日'は(nit)であり、'任'(nin)に音韻上重なるものである。大和王権は任那滅亡にともなう新しい時代に対応して、国家的自立と自負を表明するため、「任那」の栄光の記憶を復活し、しかも「日の御子」の治める国にふさわしく「日本」という国号を立てた。)尚、『記紀』に(「日の御子」とは大王(後の天皇)を指す)と記されている。

邪馬台(ヤマト)国を建てた饒速日(ニギハヤヒ)は日輪を表象し、饒速日が立てた邪馬台国の女王の卑弥呼(倭迹迹日百襲姫命に当たる)とは倭語で「日御子あるいは日巫女」のことであろうか。実際、魏は邪馬台(ヤマト)国の卑弥呼に倭国の大王たる権勢を認め、「親魏倭王」の金印綬を授けた。すなわち、卑弥呼とは後世の大王・天皇に匹敵する「日御子」に由来する漢風称号であると考える。また、卑弥呼の後継の女王の台与は、魏の後の西晋(晋)に使いを送っている。何故、2～3世紀の倭国の王たちは卑弥呼(17歳の少女)さらに台与(13歳の少女)に邪馬台国の女王に共立されるだけの生来の資質・器量が賦与されていると見なしたのであろうか。邪馬台国時代を遡る1世紀半ば(57年)、倭国を代表する筑前の奴国(海神(人)族の国)の王は、後漢から「漢委奴國王」の印綬を授けられている。卑弥呼(日御子)とは、後漢朝が認めた奴国の王(女王か)の代々の世襲名であったからに違いない。

卑弥呼(日御子)は海神(人)族の女王の世襲名

海神(人)族には、和邇氏、安曇氏、宗像氏などが有名である。大国主、猿田彦、大山祇も海神族と考えられ、海部氏(籠神社宮司家)や住吉大社の津守氏も元は海神族であったとされる。かれら海神族は、中国の春秋・戦国時代に江南から渡来したとされている。また、物部氏や息長氏もまた海神族と親密な関係にあった。邪馬台国の卑弥呼の「卑弥呼」とは、海神(人)族の崇める女王・日御子であり、宗像三女神(天照大御神と素戔嗚との誓約により誕生)やその後裔(下照姫を含む)の代々の世襲名であろう。

日御子は海神族の代々の女王か

2

紀元1世紀までは筑紫の奴国が海神族の中心の国であり、かつ倭国を代表する国であった。紀元前後にスサノオが北九州に侵入して伊都国を建て、さらに出雲に侵攻して大穴持(大国主)の出雲古国を滅亡させ、大国主一族を東遷させた。その後伊都国は奴国を圧倒し、奴国の嫡流の和邇氏は筑前から近江西部(湖西)に遷った。大己貴命(大国主)は近江南部の伊勢遺跡を都とする大己貴の国「玉牆の内つ国」を建てた。2世紀半ば、ニギハヤヒはアメノヒボコ(天日槍)と共に東征し倭国大乱を引き起こした。ニギハヤヒは2世紀末に玉牆の内つ国を解体させ、和邇氏の巫女の卑弥呼を共立してヤマト(邪馬台)国を建てた。一方、大己貴命は玉牆の内つ国の後継国の狗奴国を建て、狗奴国は近江湖東・湖北と美濃を核として東日本一帯に広がった。

海神族の女王の代々の世襲名は「卑弥呼(日御子)」であり、初代の「卑弥呼」は宗像三女神(多紀理姫神、市杵島姫神、多岐津姫神)であろうか。紀元前後の二代目の「卑弥呼」は、大国主と宗像女神の一柱、多紀理姫神との御子神の下照姫で天稚彦(少彦名か？)と結ばれる。幾世代か後の2世紀末の女王は、ヤマト(邪馬台)国の卑弥呼で、下照姫の後裔の三上祝一族の出自と思われる。卑弥呼はまた和邇氏の巫女で、ヤマト国のみならず、玉牆の内つ国の祭祀をも司ったと思われる。3世紀半ば卑弥呼が死去すると、海神族の女王たる「卑弥呼」は息長水依姫たる台与(日子坐王の妻)に継がれ、さらに倭姫、さらに神功皇后へと引き継がれたと考える。

『出雲國造神賀詞』の賀夜奈流美命は邪馬台国の卑弥呼に当たると思われるが、賀夜奈流美命(即ち卑弥呼)は代々世襲された海神族の女王の日御子の「卑弥呼」と同人格で、国津神たる海神族の女神とみるのが的確であろう。神賀詞(かんよごと)とは出雲の神々(邪馬台国の始祖ニギハヤヒや女王卑弥呼をも含む)の皇室への服属儀礼と考える。

倭国と中国王朝(後漢、魏と西晋)との外交

1世紀半ば、建国直後の後漢の光武帝に倭国の代表としての奴国を認めさせ、金印「漢委奴國王」を授与させたのは何故か。後漢の光武帝は、朝鮮諸侯が乱立した楽浪郡の混乱を抑えるため、南朝鮮に勢力を伸ばしていた奴国の力を必要としていたためであろうか。かくて、後漢の光武帝は、奴国王(女王か)を倭国王と見なし、金印を授与したと思われる。

1世紀末、筑前から近江湖西に遷った和邇氏は、湖西の国をも奴国と称したと思われる。ちなみに、『魏志倭人伝』には2つの奴国が記載されている。一つは、筑前の奴国と思われ、もう一つは近江湖西の奴国と思われる。2世紀半ば、ニギハヤヒがアメノヒボコを伴い吉備より東征し玉牆の内つ国(大己貴の国)を解体し、和邇氏の巫女と思われる卑弥呼を共立して邪馬台国の女王とした。(ニギハヤヒが孝霊天皇で卑弥呼は孝霊天皇皇女の倭途途日百襲姫に当たる。)卑弥呼は海神族の女王の宗像三女神の一柱(多紀理姫神)の後裔の三上祝の出自と思われる。奴国の和邇氏が近江湖西へ東遷のした後も、後漢と筑前の奴国との従来の外交を引き継ぎ、倭国大乱時には後漢より「中平太刀」を賜り、さらに邪馬台国時代には金印「親魏倭王」を授けられたと推察する。

卑弥呼(日御子？)の系譜　日御子は海神族の代々の女王か

3

3世紀半ばに邪馬台国の卑弥呼が死去し、台与が後を継いだ。台与は、卑弥呼の姪ともいわれ、三上祝一族の出自である。台与は天之御影命の後裔の女の息長水依姫(『記紀』における息長の初出)と考えられる。また、台与は魏の後継国の西晋に使者を送っている。

息長水依姫は、開化天皇と和邇氏の女との皇子の日子坐王(まさに日の子)と結ばれ、丹波道主をもうける。次に「卑弥呼」を継いだのが、垂仁天皇と丹波道主の息女の日葉酢媛命との間の皇女の倭姫であろう。最後の「卑弥呼」は、日子坐王の4世孫でアメノヒボコの6世孫の息長一族である息長帯比売命こと神功皇后であろう。(アメノヒボコはニギハヤヒの東征に同行し、その妻の阿加流比売神の伝承は豊前・備中・摂津にある。)三韓征伐には和邇氏武将の武振熊命を伴い、対馬の和珥津から新羅に侵攻した。新羅は殆ど無抵抗で神宮皇后の軍門に下っている。このように「卑弥呼」たる海神族の女王には和邇氏と息長氏との深い関係が窺われる。

息長水依姫(台与)と日子坐王

京都大学の林屋氏が提唱する近江王朝は、日子坐王を中核に据える王朝とされる。開化天皇の異母兄弟の日子坐王は、天皇(大王と呼ばれた)の皇子で王と呼ばれる唯一の人格であり、近江王朝を担ったと考えても不思議ではない。さらに卑弥呼を継ぐ台与と考えられる息長水依姫を妻としたのであるからその権勢は甚大なものであったと考えられる。(日子坐王は『古事記』での呼称で、『日本書紀』では「彦坐王」とされ事績の記載もない。日子坐王の妻「息長水依姫」の記載も『古事記』のみである。『日本書紀』はこの二人を意図的に排除しようとしているとみえる。)また、日子坐王の側についた氏族・豪族は、和邇氏と息長氏を核に大国主系およびホアカリ系(丹後)の豪族で概ね日本海系の北近畿勢力が結集したと思われる。さらに台与は狗奴国の近江の豊郷(稲部遺跡か)にいたとも考えられる。台与を擁立し邪馬台国と狗奴国の抗争をおさめたのであるから、狗奴国勢力もまた近江王朝に協力したのではないか。日子坐王の勢力圏(近江王朝)は、近江、山城、若狭、丹後、丹波、但馬、美濃で、北東近江と美濃を核とし東日本に伸びる狗奴国勢力とも協調関係を築いたことが分かる。

この日本海系勢力に対抗したのが邪馬台国を建てたニギハヤヒ直系の物部氏を中核とする瀬戸内海系勢力であろう。この勢力の中心にいたのが、孝元天皇の皇子の大彦(開化天皇の異母兄弟)と思われる。瀬戸内海系勢力は3世紀末に任那・伊都国連合の王、崇神天皇の東征を促し、大和の日本海系勢力を圧倒した。この東征譚が神武東征譚の主要部分である。崇神東征により日本海系勢力は後退したが、垂仁朝に日子坐王の子の狭穂彦が叛乱を起こし敗死するまでは日本海系勢力はかなりの力を維持していたと思われる。

景行天皇の皇子の日本(倭)建命は、西征後の東征の終わりに狗奴国の最後の砦と思われる伊吹山で敗死させられたと考えられる。その後景行天皇は狗奴国の拠点の北東近江・美濃に進出し、次の成務天皇の時代に日本(倭)建命の息子(稲依別王)により狗奴国は滅ぼされ、ここにヤマト王権の倭国制圧が完了した。息長氏は成務朝に滅ぼされた狗奴国の旧領の近江湖東・湖北さらに越前に進出して角鹿(敦賀)に達している。

4

倭姫

倭姫は、垂仁天皇の皇女で、母は皇后の日葉酢媛命(台与と日子坐王の息子(丹波道主)の娘)である。崇神天皇の皇女豊鍬入姫命の跡を継ぎ、天照大神の御杖代として大和国から伊賀・近江・美濃・尾張の諸国を経て伊勢の国に入り、神託により皇大神宮(伊勢神宮内宮)を創建したとされる。倭姫は伊勢の地で天照大神を祀る最初の皇女と位置づけられ、これが制度化されて後の斎宮となった。後に、倭姫は東夷の討伐に向かう日本武尊(倭姫命の甥王にあたる)に草薙剣を与えている。

神功皇后、三韓征伐と応神東征

神功皇后(息長帯姫)は、邪馬台国の台与(息長水依姫)の夫である日子坐王の四世孫で、アメノヒボコの6世孫である。神功皇后は、越前、若狭、丹後、但馬の軍船300艘を率い日本海を西行、三韓を征伐した。新羅が殆ど抵抗せずに神功皇后の軍門に下ったのは、神功皇后が海神族の女王たる「卑弥呼(日御子)」の後継と見なされたためではないか。三韓征伐に続く応神東征では、応神天皇(八幡神)を掲げ、住吉神を伴い畿内へ東征した。武内宿禰や武振熊命(和邇、彦国葺命の孫)の働きにより仲哀天皇の皇子、香坂王・忍熊王の反乱を平定し、ヤマト王権を息長氏の支配下に置き、応神王朝を樹立した。その後、息長氏は近江に進出し日本海沿岸の角鹿(敦賀)に達し、日本海航路をも掌握した。応神王朝の成立により、丹波・但馬の勢力は後退し、南朝鮮や中国との交流や交易も瀬戸内海経路が主となる。

宇佐神宮

宇佐神宮の祭神は、応神天皇(誉田別命、八幡大神)、比売大神(宗像三女神)と神功皇后(息長帯姫命)である。不思議なことに、中央に坐する主祭神は宗像三女神とされる比売大神である。比売大神とは海神族の女王たる「卑弥呼(日御子)」のことではないか。前述のように、「卑弥呼」の称号は宗像三神に始まり、神功皇后に終わる。私は、比売大神は「卑弥呼(日御子)」と同格神であろうと推察する。

宇佐神宮のある豊前地域は、古来より秦氏やその一族である漢氏の居住していた地域とされ、秦人と思われる秦氏の故地である。また、伽耶出自の息長氏が筑前より南下し権勢を伸ばした地域でもある。応神天皇は「八幡神」と称される。八幡は「はちまん」ではなく「やはた」が古名で、「八」は多さを表する。「幡」は「秦」とも「旗」とも云われる。八幡とは文字通り、多数の「秦氏」が住むところ、あるいは多数の「秦＝旗」が立つ所なのだ。この説によれば、八幡神は新羅からの外来神で、宇佐において秦氏の氏神だった事になる。新羅より養蚕などの産業や高度の建築・土木技術を持った秦氏が大挙渡来してきて、応神王朝の興隆に尽くした。このことにより、宇佐神宮が豊前におかれた理由と思われる。この地方の神に過ぎない宇佐八幡神が、一躍全国的な神へ展開していく画期が訪れる。養老四年(720)の大和朝廷による隼人出兵である。隼人出兵にあたって朝廷は八幡神を守護神とするが、この出兵が朝廷の勝利に終わり、八幡神は朝廷の守護神となるのである。

(Facebook 藤田泰太郎タイムライン投稿21/7/9)

参照：　古の日本(倭)の歴史(前1世紀～4世紀)ー天孫族(伽耶族)の系譜
③　031

猿田彦　国津神、大国主と並ぶ弥生時代の大神、道開きの大神

猿田彦（江南系海神族）

邇邇芸尊が天降りしようとしたとき、天の八衢（やちまた）に立って高天原から葦原中国までを照らす神がいた。その神の鼻長は七咫、背長は七尺、目が八咫鏡のように、またホオズキのように照り輝いているという姿であった。そこで天照大神と高木神は天宇受売命（あめのうずめ）に、その神の元へ行って誰であるか尋ねるよう命じた。その神が国津神の猿田彦で、邇邇芸尊らの先導をしようと迎えに来たのであった。

邇邇芸尊らが無事に葦原中国に着くと、邇邇芸尊は天宇受売神に、その名を明らかにしたのだから、猿田彦を送り届けて、その名前をつけて仕えるようにと言った（『日本書紀』では、猿田彦が天鈿女命（あめのうずめ）に自分を送り届けるように頼んだとなっている）。そこで天宇受売神は「猿女君」と呼ばれるようになったという。猿田彦は故郷である伊勢国の五十鈴川の川上へ帰った。

猿田彦は伊勢の阿邪訶（あざか。旧一志郡阿坂村（現松阪市））の海で漁をしていた時、比良夫貝（ひらふがい）に手を挟まれ、溺れ死ぬ。この際、海に沈んでいる時に「底どく御魂」、猿田彦が吐いた息の泡が昇る時に「つぶたつ御魂」、泡が水面で弾ける時に「あわさく御魂」という三柱の神が生まれた。（住吉神は．底筒男命（そこつつのおのみこと）、中筒男命（なかつつのおのみこと）、表筒男命（うわつつのおのみこと）の総称であり、猿田彦が死んだ時に生まれた三神に酷似）。

『倭姫命世記』（神道五部書の一つ）によれば、倭姫命が天照大神を祀るのに相応しい地を求めて諸国を巡っていたとき、猿田彦の子孫である大田命（おおたのみこと）が倭姫命を先導して五十鈴川の川上一帯を献上したとされている。大田命の子孫は宇治土公（うじのつちぎみ）と称し、代々伊勢神宮の玉串大内人に任じられた。

猿楽の祖。猿田彦が天狗になったか。

(Wikipedia抜粋)

サルタヒコとは

国津神の猿田彦（サルタヒコ）は、サルタヒコを祭神とする神社の数や広がりを考えると、同じ国津神の大国主と並ぶ弥生時代の大神と考えられる。かくて、サルタヒコは銅鐸の神ではないかとの示唆（藤井）がある。

サルタヒコとウズメは結婚して、後代宮廷での音楽や舞踏で仕えた大和王権の大族・猿女氏の始祖となったという。サルタヒコは猿を擬人化した神でありウズメは強靭で猛々しい女性であった。ウズメのウズはウスに通じる。ウスはしばしば石を材料としている。サルタヒコとウズメの結婚は猿と岩の女の結合を意味するものであり、チベットや羌族の猿と岩の女の結合をモチーフとする始祖伝説と一致する。従って、猿女氏はチベットや羌族の流れをくんだ氏族と考えられる。サルタヒコは江南から直接渡来したものと考えている。（古代日本 異族伝説の謎、田中　＋　サルタヒコの謎を解く、藤井　＋　藤田）

海神族と思われる猿田彦を祭神とする著名な神社

猿田彦神社と椿大神社

猿田彦神社とは、三重県伊勢市の伊勢神宮内宮の近くにある神社である。猿田彦大神と、その子孫の大田命を祭神とする。全国約2千社の猿田彦大神を祀る神社の総本社「地祇猿田彦大本宮」は鈴鹿市の椿大神社ということになっている。椿大神社の宮司は山本という姓で、猿田彦神社の宮司は宇治土公（うじとこ）という姓である。どちらも猿田彦神・大田命の直系の子孫であると主張している。『倭姫命世記』によれば宇治土公家こそ猿田彦大神の直系の子孫とされており、猿田彦神社が神宮内宮の近くにあることや、猿田彦大神を祀る各地の神社で椿大神社とつながりのある神社は少数しか存在しないことから猿田彦神社が猿田彦神を祀る神社の総本社と考える者も多い。 (また、田村神社は讃岐国の一の宮で、祭神は初めは猿田彦命であった。）

白鬚神社は、高島市鵜川にある神社。別称は「白鬚大明神」「比良明神」。神紋は「左三ツ巴」。猿田彦命 を祭神とする。元々の祭神は比良山の神であるともいわれる。猿田彦命は水尾神社（高島市拝戸）の縁起『三尾神社本土記』にも見えることから、両社の密接な関係が指摘される。（Wikipedia抜粋)（猿田彦は伊勢の阿邪訶（あざか。旧一志郡阿坂村（現松阪市））の海で漁をしていた時、比良夫貝（ひらふがい）に手を挟まれ、溺れ死ぬ。この比良夫貝と比良山との関係は？）

全国にある白鬚神社の総本社とされる（白鬚は新羅に由来するとの説もある）。沖島を背景として琵琶湖畔に鳥居を浮かべることから、「近江の厳島」とも称される。福山市には白鬚神社（猿田彦を祭神）や素戔嗚神社（備後一宮と称す）がある。

（Wikipedia抜粋)

（猿田彦神社－Wikipedia）

白鬚神社

びわ湖に浮かぶ大鳥居

（光一郎 撮影）

大国主（出雲古国、大己貴の国「玉牆の内つ国」、狗奴国の王）

海神族とも言われる。出雲古国と玉牆の内つ国ではそれぞれ「聞く銅鐸」と「見る銅鐸」を祭器とした。越（中国春秋戦国時代）の遺民で、日本海沿いの出雲や越に渡来したと云われる。尚、江南出自の大国主が、紀元前後に新羅から渡来したスサノオの子あるいは子孫ではありえない。

神話における記述

『日本書紀』本文によるとスサノオの息子。また『古事記』、『日本書紀』の一書や『新撰姓氏録』によると、スサノオの六世の孫、また『日本書紀』の別の一書には七世の孫などとされている。スサノオの後にスクナビコナと協力して天下を経営し、禁厭（まじない）、医薬などの道を教え、葦原中国の国作りを完成させる。だが、高天原からの使者に国譲りを要請され、幽冥界の主、幽事の主催者となった。国譲りの際に「富足る天の御巣の如き」大きな宮殿（出雲大社）を建てて欲しいと条件を出したことに天津神が約束したことにより、このときの名を杵築大神ともいう。

大国主を扱った話として、因幡の白兎の話、根の国訪問の話、ヌナカワヒメへの妻問いの話が『古事記』に、国作り、国譲り等の神話が『古事記』・『日本書紀』に記載されている。『出雲国風土記』においても多くの説話に登場し、例えば意宇郡母里郷（現在の島根県安来市）の条には「越八口」を大穴持命が平定し、その帰りに国譲りの宣言をしたという説話がある。尚、大国主とは世襲名と考える。

別称

大国主は多くの別名を持つ。

●美濃大国主神（おおくにぬしのかみ）・大國主大神 - 根国から帰ってからの名。

大国を治める帝王の意

●大穴牟遅神（おおなむぢ）・大穴持命（おおあなもち）・大己貴命（おほなむち）・大汝命（おほなむち『播磨国風土記』の表記）・大名持神（おおなもち）・国作大己貴命（くにつくりおほなむち）

●八千矛神（やちほこ） - 須勢理毘売との歌物語での名。矛は武力の象徴で、武神としての性格を表す。

●葦原醜男・葦原色許男神（あしはらしこを） - 根国での呼称。「しこを」は強い男の意で、武神としての性格を表す

大物主神（おおものぬし）-『古事記』においては別の神、『日本書紀』においては国譲り後の別名

●大國魂大神（おほくにたま）・顕国玉神・宇都志国玉神（うつしくにたま）- 根国から帰ってからの名。国の魂。大和神社（おおやまと、大和）、大國（国）魂神社（おおくにたまじんじゃ、武蔵）。

●伊和大神（いわおほかみ）伊和神社主神-『播磨国風土記』での呼称

●所造天下大神（あめのしたつくらししおほかみ）-『出雲国風土記』における尊称

●幽冥主宰大神（かくりごとしろしめすおおかみ）

●杵築大神（きづきのおおかみ）

妻・子孫

大国主の系図（『古事記』による）。青は男神、赤は女神、黄は性別不詳（右図）

大国主は色々な女神との間に多くの子供をもうけている。子供の数は『古事記』には180柱、『日本書紀』には181柱と書かれている。記においては以下の6柱の妻神がいる（紀では記にみえない妻神がさらに1柱おり、『出雲風土記』ではこれ以外にもさらに何人もの妻神が表れている）。別名の多さや妻子の多さは、明らかに大国主命が古代において広い地域で信仰されていた事を示し、信仰の広がりと共に各地域で信仰されていた土着の神と統合されたり、あるいは妻や子供に位置づけられた事を意味している。

スセリビメ - スサノオの娘。最初の妻で正妻とされる。

ヤガミヒメ - 根の国からの帰還後では最初の妻とされる。間にキノマタノカミが生まれた。

ヌナカワヒメまたはヌナガワヒメ（奴奈川姫） - 高志国における妻問いの相手。間にミホススミ（『出雲国風土記』）もしくはタケミナカタ（『先代旧事本紀』）が生まれた。

タキリビメ - 間にアヂスキタカヒコネとシタテルヒメの二神が生まれた。

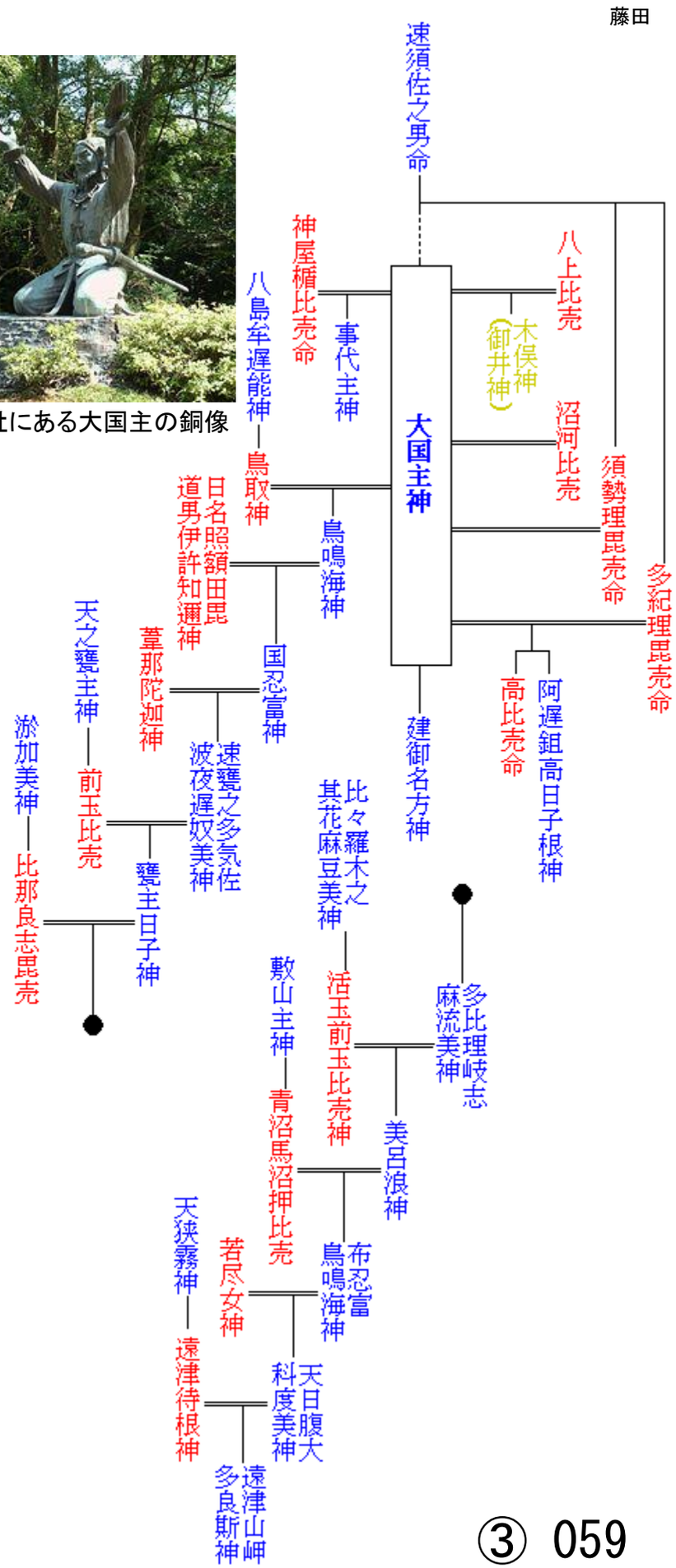
カムヤタテヒメ - 間にコトシロヌシが生まれた。

トリトリ - ヤシマムジの娘。間にトリナルミが生まれた。『古事記』にはそれ以降の系譜が9代列挙されている。

（Wikipedia抜粋）

（大国主は複数の人格を指し、かつ世襲名とも思われるので。大国主の系譜は多岐多様である。藤田）

出雲大社にある大国主の銅像



大国主（つづき）

出雲族の渡来-富氏伝承（藤田加筆）

・出雲大国主命の家系を継いできた富氏の語りによれば、原出雲族は紀元前2,500年頃大祖先であるクナトの神に引き連れられて北から出雲の地に着いた。[1)、2)]

・原住民に鉄、製布、農耕等を教えた。

・出雲の地の王となった。その後、大和に登美族、信濃に建御名方命などの出雲族の分家が出来ていった。

・それぞれが土着の民人と融合し、地方の支配者となっていった。各地の大国主命の誕生である。

・スサノオは南朝鮮からの来訪者で大国主とは血統を異にする。大国主は、スサノオの来訪する何世紀も前から出雲の王であり、大国主がスサノオの子あるいは子孫ではありえない。

・スサノオの後裔、ニギハヤヒは吉備で勢力を養い、出雲と敵対した。その勢いでヤマトに侵攻した。

・ニギハヤヒはアメノヒボコはとともに大和に東征しが、倭国大乱を引き起こした。

・崇神（神武）東征に抗した長髄彦（ナガスネヒコ）は大国主の後裔であり、その妹（トミヤ姫はニギハヤヒの妃である。また、ナガスネヒコは伊勢の国のイセツヒコ（神武軍により信濃に敗走）の兄弟である。

・ヤマトの出雲族は崇神（神武）東征により、滅亡させられる。

（出雲帝国、吉田　＋　藤田）

1）縄文後期に入る4,000年前ごろから冷涼化に見舞われ、縄文晩期に入る3,000年前ごろには厳しい寒冷化・乾燥化に見舞われた。このため東日本縄文社会の崩壊の危機に瀕し多数の原アイヌ人（蝦夷）が西日本に移動した。あるいは、大古、北方から古バイカル人が樺太より南下したこと、また縄文後期にツングースが沿海州から日本海を横断して越に至ったことを指すのか。2）出雲神話は、アイヌ族の伝説を基層としている。（古代日本異族伝説の謎、田中勝也）

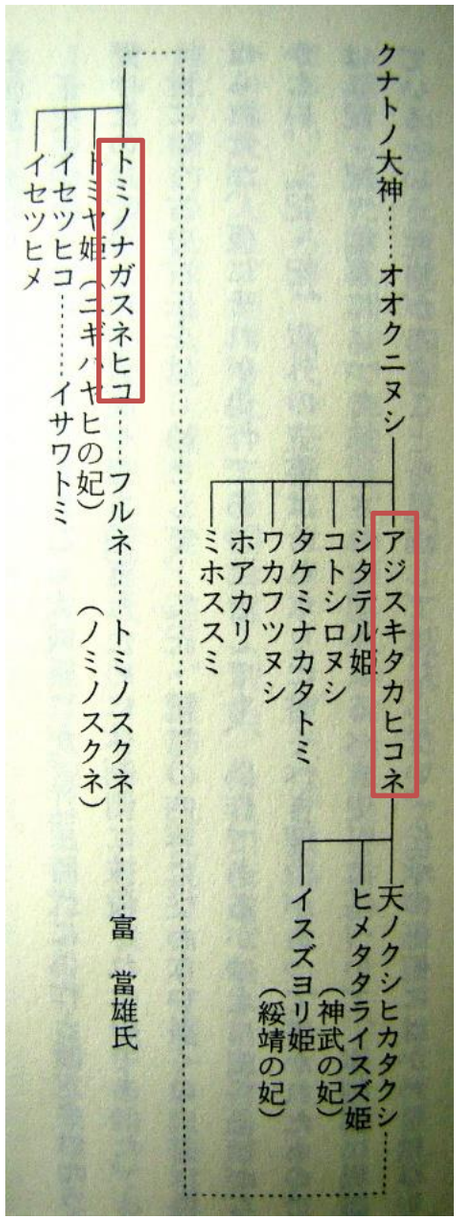
大国主と前ヤマト王権の国々

大国主はまず出雲から越に至る日本海沿岸を支配下に治め、政治的・経済的ネットワークを創りあげた。出雲はスサノオの侵攻により大国主の影響は薄くなるが、丹波のホアカリやスクナビコナが大国主と力を合わせ近江、播磨、山城、伊勢、東海地方へ勢力を伸ばす。

紀元前後の大国主のネットワークの国の一つがイザナギ・イザナミ時代の浦安の国と考えられる。その後、大国主とスクナビコナが近江の伊勢遺跡を本拠にして立ち上げた国が大己貴の国「玉牆の内つ国」であろう。ニギハヤヒとアメノヒボコによって引き起こされた倭国大乱の終結に当たり、大国主と和邇氏の血を引く巫女、卑弥呼が共立された。卑弥呼は伊勢（近江）から纒向（大和）に都を移し、ここに実質的にニギハヤヒの支配する邪馬台国（虚空見つ倭国）（纒向遺跡）が成立した。邪馬台国を終焉させた、崇神（神武）の東征は、任那・伊都国連合、南九州（隼人、久米人）、さらに物部・和邇の連合軍による、大国主派の掃蕩をもくろんだクーデターであった可能性が極めて高い。ここに崇神と物部の支配する、ヤマト王権が誕生した。尚、秋津洲は葛城王朝のことで、玉牆の内つ国の支国ではないか

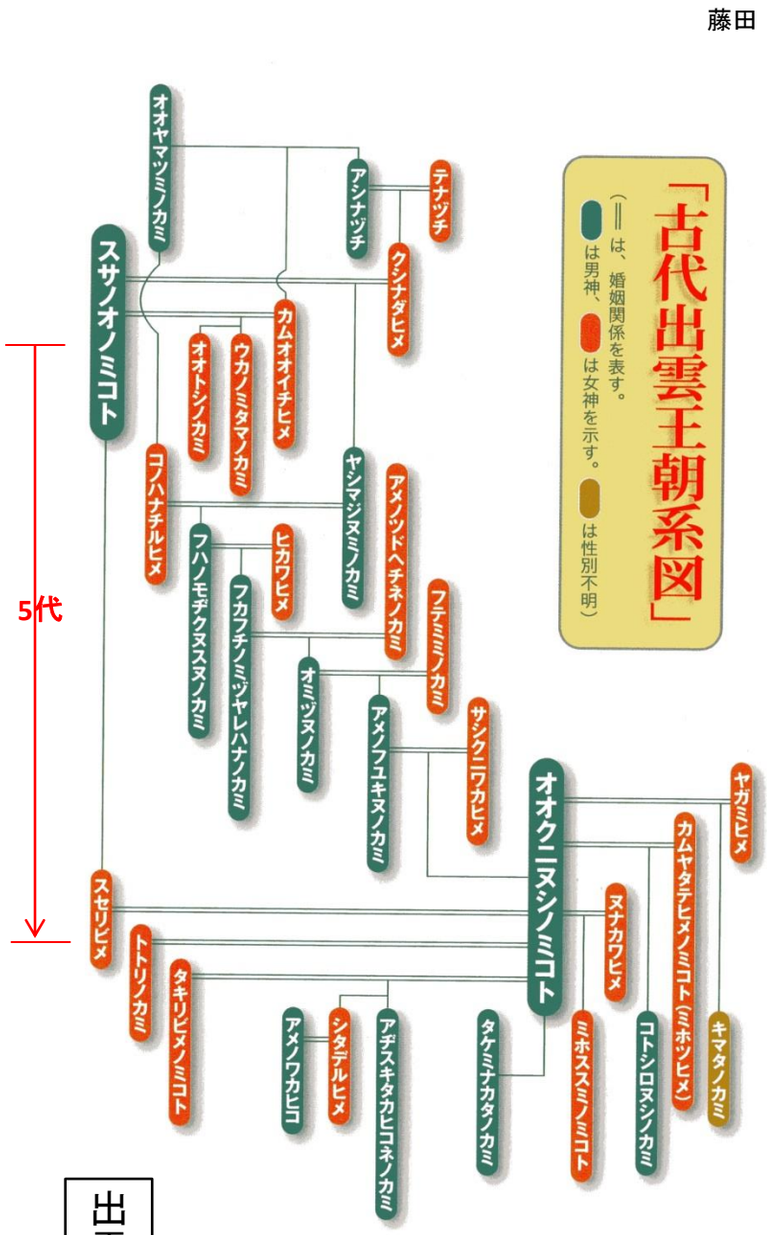
（藤田）

大国主（オオクニヌシ）とは、各地・各時代の大国主の総称、即ち世襲名、と思われる。（藤田）



富氏の伝承による原出雲系の系譜（謎の出雲帝国、吉田）

藤田



（葬られた王朝、梅原猛）

アラ（ハ）バキ族

東日流外三郡志（偽書とされるが無視できない記述もある）によれば、かって津軽にはアソベ族と呼ばれるアイヌ系とみられる種族がいた。その後、カムチャッカ方面から到来したと推察できるツボケ族が支配した。更に支那の戦国時代に晋の流民が到来し。アソベ・ツボケ族と同化して成立したのがアラバキ族である。（古代日本異族伝説の謎、田中勝也）

大国主とアジスキタカヒコネの東遷

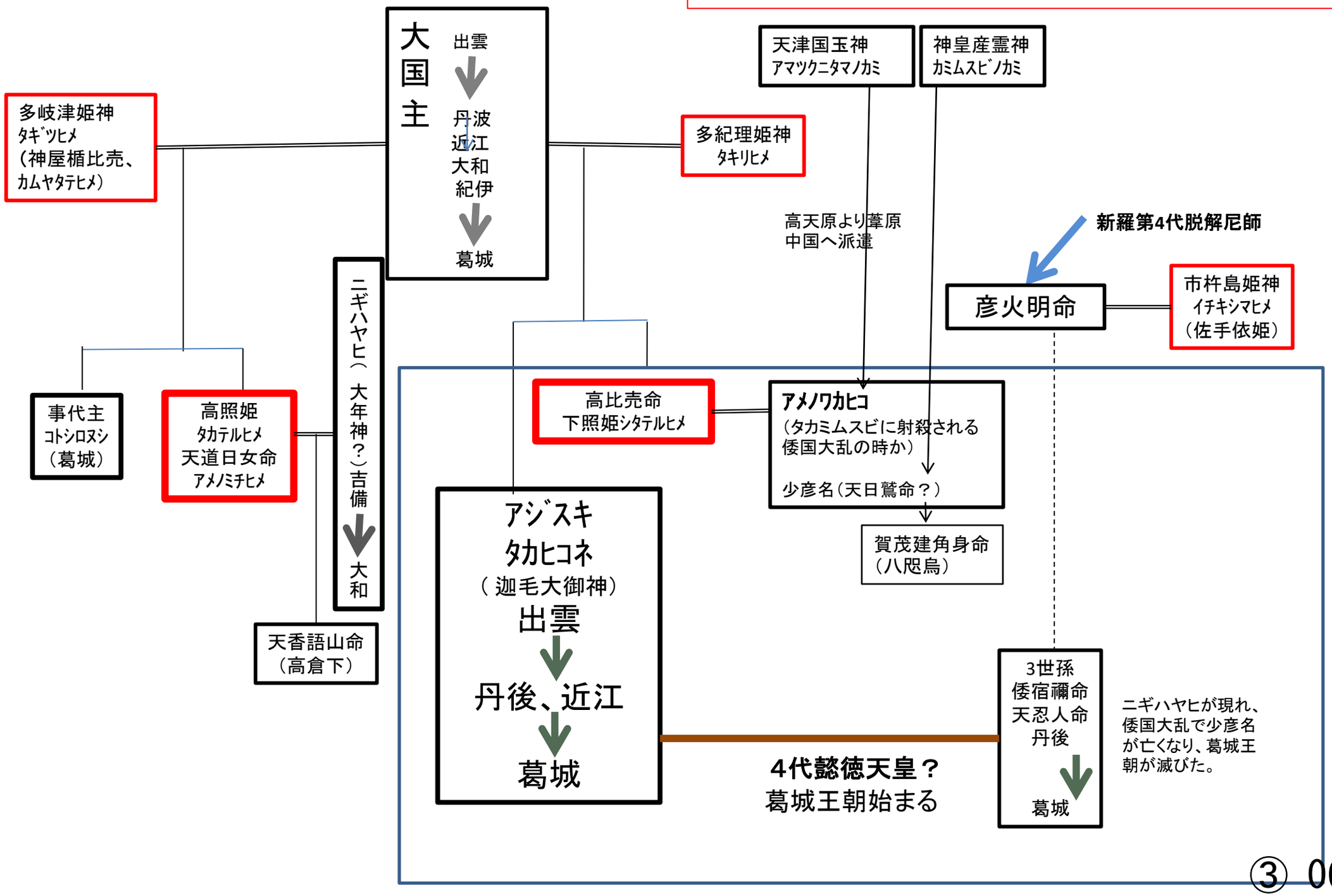
大国主と宗像三女神との御子神

スサノオにより大国主（大穴持）が殺された出雲古国が崩壊する。大国主一族（味耜高彦根命（阿遅鉏高日子根神、アジスキタカヒコネ）ら）は東遷する。（出雲⟹丹波⟹近江⟹大和・葛城）。

大国主と玉牆の内つ国（大己貴の国）

大国主はまず出雲から越に至る日本海沿岸を支配下に治め、政治的・経済的ネットワークを創りあげた（出雲古国）。出雲はスサノオの侵攻により大国主の影響は薄くなるが、大国主一族（アジスキタカヒコネら）は丹後の倭宿禰（スクナビコナか）と力を合わせ、近江、播磨、山城、伊勢、東海地方へ勢力を伸ばす。

紀元前後の大国主のネットワークの国の一つが浦安の国と考えられる。その後、大国主とスクナビコナが近江の伊勢遺跡を本拠にして立ち上げた国が玉牆の内つ国（大己貴の国であろう。尚、秋津洲は葛城王朝のことで、大己貴の国の支国ではないか



大国主と紀伊

大国主は神皇産霊神（神産巣日神、かみむすび、かむむすび）に庇護されている。また、少彦名は神産巣日神の御子である。

紀伊は、弥生時代中期の大国主のネットワークに入る－－紀伊は銅を産し、多数の銅鐸が出土

大国主と紀伊

兎の予言した通り、八上比売やかみひめは大国主之命おおくにぬしのみことの兄弟達が因幡に着いて婚姻を申し込むと「私は、あなたたちとは結婚しません。私は大国主之命と一緒になるつもりです。」と言ったので兄弟たちは、大変怒りました。そしてみんなで大国主之命を殺してしまおうという計画をたてたのです。一行が旅を続けて伯伎の国（ほうきのくに）の手間の山の麓に来た時、兄弟たちは「大国主之命よ。この山には赤いイノシシがいるという事だ。我々が山の上からそいつを追い落とすからお前は下で待っていて、そいつをうまく捕まえろ。もし捕まえなかったらお前を殺すぞ。」と言ってイノシシの形に良く似た大きな石を、火で真っ赤になるほど焼いて、これを山の上から突き落とした。これをイノシシだと思った大国主之命は 追いかけていってこれを抱きとめたが、その石に焼かれ死んでしまいました。この知らせを聞いた母は嘆き悲しんで、高天原の神産巣日神（かむむすひのかみ）に御子の命を助けて頂きたいとお願いしました。そこで生成をつかさどるこの神様は赤貝であるさき貝比売さきがいひめと蛤である蛤貝比売うむがいひめとに命じ、大国主之命を治療させて再び命を吹き返させました。これを見た兄弟たちは、事が失敗したのでまた大国主之命を騙して、深い山の中へ連れて行きました。そこで大きな木を切り倒し、木の割れ目にくさびを入れておいたところへ、大国主之命がその割れ目に入った時にくさびを引き抜いて挟み殺してしまいました。そこでまた母は泣き泣き大国主之命の亡骸を木から取り出して、生き返させました。そして大国主之命に「お前がここにいると本当に兄弟達に殺されてしまうでしょう。」と言って紀伊の国の植林の神様である大屋毘古之神おおやびこのかみの元へ逃がしました。ところが、兄弟たちは紀伊の国まで追いかけて矢をつがえて殺そうとしたので、大国主之命は木の下に身を隠し、こっそりと木のまたから抜け出して逃げ出した。こうした度重なる危機を見て、母は「お前の祖父にあたる須佐之男命がいらっしゃる根の堅州国（かたすくに）逃げなさい。そうすれば大神がきっと良い取り計らいをしてくれましょう」
と言いましたので、大国主之命はひとりで遠い根の国へと旅立ちました。（『古事記』より）

●弥生時代、有田川・日高川流域は有数の青銅器生産地帯であった。
●大国主神社（紀ノ川市）
(藤田）

大国主神社

紀の川市貴志川町國主1

祭神
大国主命
（配祀神）天照皇大神、（合祀神）権大神、（境内社）市杵島比売大神

由緒
紀伊続風土記によれば、八十神等の危難から逃れ、五十猛命のもとへ赴こうとした大国主命が当地を訪れた事を由緒としている。この説話では古事記では母の神が大国主命を紀の国の大屋毘古の神のもとに逃がしたとある。
五十猛命と大屋毘古命を同一神とする見方があるが、京都の八坂神社の八御子神の中に五十猛命と大屋毘古命は別の神としてカウントされている。元々別の神であったのがいつの間にか同一神とされたのであろう。
紀伊と出雲とは後の生け贄を捧げる話、須佐之男命の由来、五十猛命やイザナギ命の終末の地などよく似た説話を共有しており、古来より人の行き来が多かったものと思われる。
（大国主　紀の川市貴志川町國主1　Kamnavi.jp、Net)

大国主神社本殿（三間流造）

大国主の国造りの盟友、スクナビコナ

スクナビコナ（少彦名）：天津神

スクナビコナ（スクナヒコナとも。表記は少名毘古那、須久那美迦微、少彦名、少日子根など）は、日本神話における神。『古事記』では神皇産霊神（かみむすびのかみ）の子とされ、『日本書紀』では高皇産霊神（たかみむすびのかみ）の子とされる。尚、スクナビコナ（スクナヒコナ、少彦名）は世襲名であろう。

『古事記』によれば、大国主の国土造成に際し、天乃羅摩船（アメノカガミノフネ）（＝ガガイモの実とされる）に乗って波間より来訪し、オホナムチ（大己貴）大神の命によって国造りに参加した。『日本書紀』にも同様の記述があるが、『記紀』以外では『上記(ウエツフミ)』に登場している。オホナムチ同様多くの山や丘の造物者であり、命名神である。悪童的な性格を有するとも記述される（『日本書紀』八段一書六）。のちに常世国へと渡り去る。

名前の由来について、『古事記伝』によれば「御名の須久那（スクナ）はただ大名持（オホナムチ）の大名持と対であるため」とある。あるいは金井清一によれば「若き日の御子」の意とする説もある。また、この神が単独ではなく、必ずオホナムチと行動を共にすることから、二神の関係が古くから議論されている。

国造りの協力神、常世の神、医薬・温泉・禁厭（まじない）・穀物・知識・酒造・石の神など多様な性質を持つ。酒造に関しては、酒は古来薬の1つとされ、この神が酒造りの技術も広めた事と、神功皇后が角鹿（敦賀）より還った応神天皇を迎えた時の歌にも「少名御神」の名で登場する為、酒造の神であるといえる。石に関しては記述よりそうした面が見られると想像されるだけであり、あくまで性質的なものである。（Wikipedia抜粋）

少彦名神は、阿波忌部の祖神である天日鷲命と同人格と思われる。少彦名神の後裔氏族には鳥取連、三島県主があげられ、天日鷲命の後裔氏族に粟・安房の忌部、神麻績連、鳥取連、倭文連、長幡部、神宮部造などがあげられます。（少名彦命と天日鷲命との関係 (http://wwr2.ucom.ne.jp/hetoyc15/hitori/sukunahi.htm)）

『古事記』によれば、スクナビコナ（少彦名、少名毘古那）は、高天原に座する神々の祖神的存在の高御産巣日神（タカミムスビ）と神産巣日神（カミムスビ）（造化の三神の二柱）の後者の御子とされる。スクナビコナは、大国主（オオクニヌシ）の国造りに際し、天乃羅摩船（アメノカガミノフネ＝ガガイモの実とされる）に乗り、鵝（ヒムシ＝ガとされる）の皮の着物を着て波の彼方より来訪し、神産巣日神の命により大国主（オオクニヌシ）と義兄弟の関係となって国造りに参加した。スクナビコナは、国造りの協力神、常世の神、医薬・温泉・禁厭（まじない）・穀物・知識・酒造・石の神など多様な性質を持つ。

大国主（オオクニヌシ）は多数の別名をもち、かつ代々の受け継がれる世襲名であるのと同様に、少彦名（スクナビコナ）もまた世襲名と思われる。大国主と少彦名は、2世紀初め協力して、近江・湖南の伊勢遺跡を都とする大己貴の国「玉牆の内つ国」を建てたと思われ、この国の領域と思われる近畿・中部地方に彼らを祀る神社が数多く存在する。ちなみに、スクナビコナを祀る伊勢遺跡近辺の神社は、沙沙貴神社（近江八幡市）や高野神社（栗東市、祭神は大名草彦命（スクナビコナ））などである。また、スクナビコナの系譜は多岐に亘り複相していて極めて難解である。とはいえ、スクナビコナはカミムスビの子孫の天津神であり、その系譜には天日鷲命（アメノヒワシ、阿波忌部の祖）、倭文神（倭文神)や鴨健角身命（カモタケツヌミ、八咫烏（ヤタガラス））が含まれる。さらに、スクナビコナは、天稚彦（アメノワカヒコ）と同一視されることがある。また、ホアカリ（天火明）の三世孫の倭宿禰（懿徳天皇か）と阿遅鉏高日子根神（アジスキタカヒコネ）が建てた葛城王朝（玉牆の内つ国の支国）の王の一人が一言主大神で、スクナビコナと同一人物と見なされることがある。（藤田）

スクナヒコナ

出雲大社常陸分社（常陸国出雲大社）

少彦名神：硫黄の神、薬の神、白浜、道後、有馬などの硫黄泉の神
硫黄は倭国の主な輸出品。

少彦名神社（神農さん）（大阪市道修町、Wikipedia）
薬のまち、道修町（どしょうまち）に鎮座する少彦名神社は「神農さん」の愛称で皆様に親しまれております。日本医薬の祖神・少彦名命と中国医薬の祖神・炎帝神農をお祀りし
日本医薬総鎮守として信仰されています。

大国主の国造りにスクナビコナが大いに貢献した。大国主は国津神の代表で、出雲族から興り、代々大国主と称し国造りに当たり、ニギハヤヒが虚空見つ倭国（邪馬台国)を建てるまで、近畿地方一円を支配してきた。一方、スクナビコナは南朝鮮から渡来したと思われ、丹後に天降ったホアカリあるいはその子孫と混雑したのではではないかとの思う。丹後には、北九州以外で最初に王と呼ばれうる支配者が現れたと思われる。スクナビコナも代々大国主の国造りに協力した人格の総称（世襲名）と思われ、海部氏勘注系図に現れる7世孫までの代々に当たるのではないかと夢想している。このスクナビコナ（アメノワカヒコか）はヤマト大乱の終焉時にニギハヤヒと戦い敗死したのではないか。（藤田）

阿波と伯耆と常陸の繋がり、少彦名神と天日鷲命は同一神か

忌部氏は、古代朝廷における祭祀を担った氏族。天太玉命を祖とする流れと、天日鷲命を祖とする流れ（阿波忌部）、天道根命を祖とする流れ（紀伊忌部、讃岐忌部）の三種が有名で、いずれも神別（天神）に分類される。
阿波忌部の祖神天日鷲命は、『日本書紀』や『古語拾遺』に登場する神。『日本書紀』では天照大神が天岩戸に入られたとき、岩戸の前で神々の踊りが始まり、天日鷲神が弦楽器を奏でると、弦の先に鷲が止まった。多くの神々が、これは世の中を明るくする吉祥（きっしょう）を表す鳥といって喜ばれ、この神の名として鷲の字を加えて、天日鷲命とされた。『古語拾遺』によると、天照大神が天岩戸に隠れた際に、穀（カジノキ：楮の一種）・木綿などを植えて白和幣（にきて）を作ったとされる。そのため、天日鷲神は「麻植（おえ）の神」とも呼ばれ、紡績業・製紙業の神となる。また、『古語拾遺』等では、忌部氏遠祖の天富命（天太玉命の孫）は各地の部民を率いて種々の祭祀具を作っていたが、さらに良い土地を求めようと阿波忌部(天日鷲命の孫）を率いて東に赴き、安房に麻（アサ）・穀（カジノキ）を植えたという。
『新撰姓氏録』には角凝魂命（神産巣日神）の三世孫が天湯河桁命で後裔が鳥取連、美努連とされ、『先代旧事本紀』には少彦名神が鳥取連の祖神とされる一方、『斎部宿祢本系帳』には角凝魂命の四世孫・天日鷲神の子である天羽槌雄神が鳥取部連、美努宿祢の祖とされている。少名彦神が天日鷲命にあたるとすると、名前に「鷲」をもつことで、同じ猛禽類の鷹を操って鳥を捕る職掌をもった鳥取連の祖に相応しいことでもある。また、少彦名の後が八咫烏すなわち鴨健角身命である。これらのことから少名毘古那神（少彦名神）と天日鷲命と同一神であると考えられ、神産巣日神からの系譜をNet情報を基に纏めると
「角凝魂命（神産巣日神）➡伊狭布魂命➡ 天底立命➡ 天背男命（天湯川田命、天湯河桁命）➡天日鷲神（少名毘古那神，少彦名神）➡ 天羽槌雄神（大麻比古神、建日穂命、倭文神、建葉槌命、鴨健角身命）➡波留伎別命（阿波忌部）」となる。
阿波の国一宮の大麻比古神社（徳島県鳴門市）の祭神は、天日鷲神の御子神の大麻比古神である。また、忌部神社（徳島市二軒屋町）は、阿波国最高の社格を有していたこともあり、「四国一宮」を称している。祭神は天日鷲命である。
『古語拾遺』に登場する、天羽雷命（あめのはづちのみこと、天羽槌雄神）は、倭文神（しとりのかみ）、倭文神（しずのかみ）とも呼ばれる。天照大神を天の岩戸から誘い出すために、文布（あや）を織ったとされる。文布は倭文布とも倭文とも書き、「シドリ」また「シヅリ」という織物である。同じ織物の神では栲幡千々姫命、天棚機姫命が挙げられるが、天羽槌雄神は機織りの祖神とされている。また倭文（しどり）氏の遠祖でもある。天羽雷命と同一神とされるのが、建葉槌命（武葉槌命・たけはづちのみこと）である。建葉槌命は『日本書紀』に登場した倭文神で、経津主神・武甕槌命では服従しなかった星神香香背男（ほしのかがせお、常陸の国に遷った和邇氏を祖）を征服した神とされる。建葉槌命は伯耆の国一宮の倭文神社（しとりじんじゃ/しずりじんじゃ）の祭神である。（Wikipedia抜粋　＋　少名彦命と天日鷲命との関係（http://wwr2.ucom.ne.jp/hetoyc15/hitori/sukunahi.htm）　＋　藤田）

（神産巣日神 ➡ 少彦名神（天日鷲神？）➡ 鴨健角身命(八咫烏）の系譜は概ね妥当と思われる。しかし、少彦名が複数の人格を指し、また世襲名とも思われるので、少彦名の系図は諸説紛々である。藤田）

須代神社（京都府与謝野町）に、大己貴命の本妻/后である須勢理姫命を祀る。この社には素戔嗚尊の御子とされる三柱（天太玉命、天明玉命、倉稲魂命（須勢理姫命の兄）も合祀されている。
野田川の対岸の倭文神社の御祭神、天羽槌雄神との仲を裂かれ、大己貴命に娶られたとされる。物部氏の祖、饒速日と忌部氏の祖、天太玉命は、ともに素戔嗚尊の御子である。すなわち、物部氏と忌部氏は同祖で素戔嗚を祖神とする。（FB情報、明石洋一、文責藤田）

（須代神社、Net）

倭文神社(しとりじんじゃ/しずりじんじゃ)は、鳥取県東伯郡湯梨浜町大字宮内にある神社。伯耆国一宮。境内にある経塚は国の史跡に指定され、出土品は国宝に指定されている。
主祭神:建葉槌命　配神:下照姫命、建御名方命、天稚彦命、事代主命、少彦名命、味耜高彦根命
機織に携わった氏族である倭文氏が祖神の建葉槌命を祀ったのが起源とされている。ただし、社伝には下照姫命に関するものが多く、大正時代までは下照姫命が主祭神であると考えられていた。社伝によれば、出雲から渡った下照姫命が現在の湯梨浜町宇野に着船し、御冠山に登って現在地に鎮まったという。着船したと伝えられる場所には、下照姫命が化粧を直したという「化粧水」や、腰を掛けたという「お腰掛岩」などが残っている。これについて、『式内社調査報告』では、元々は織物の神である建葉槌命を祀っていたのが、当地で織物が作られなくなったことにより建葉槌命の存在が忘れられ、共に祀られていた下照姫命だけが残ったと記している。
境内の塚が下照姫命の墓であると考えられていたが、大正4年(1915年)の発掘により経塚であることが判明した。その出土品の銘文から、当社が平安時代後期には伯耆国一宮であったことがわかった。このときの出土品である観音菩薩立像などは「伯耆一宮経塚出土品」の名称で、一括して国宝に指定されている。
尚、天稚彦命と少彦名命は同一神であるとの説もある。(Wikipedia抜粋)

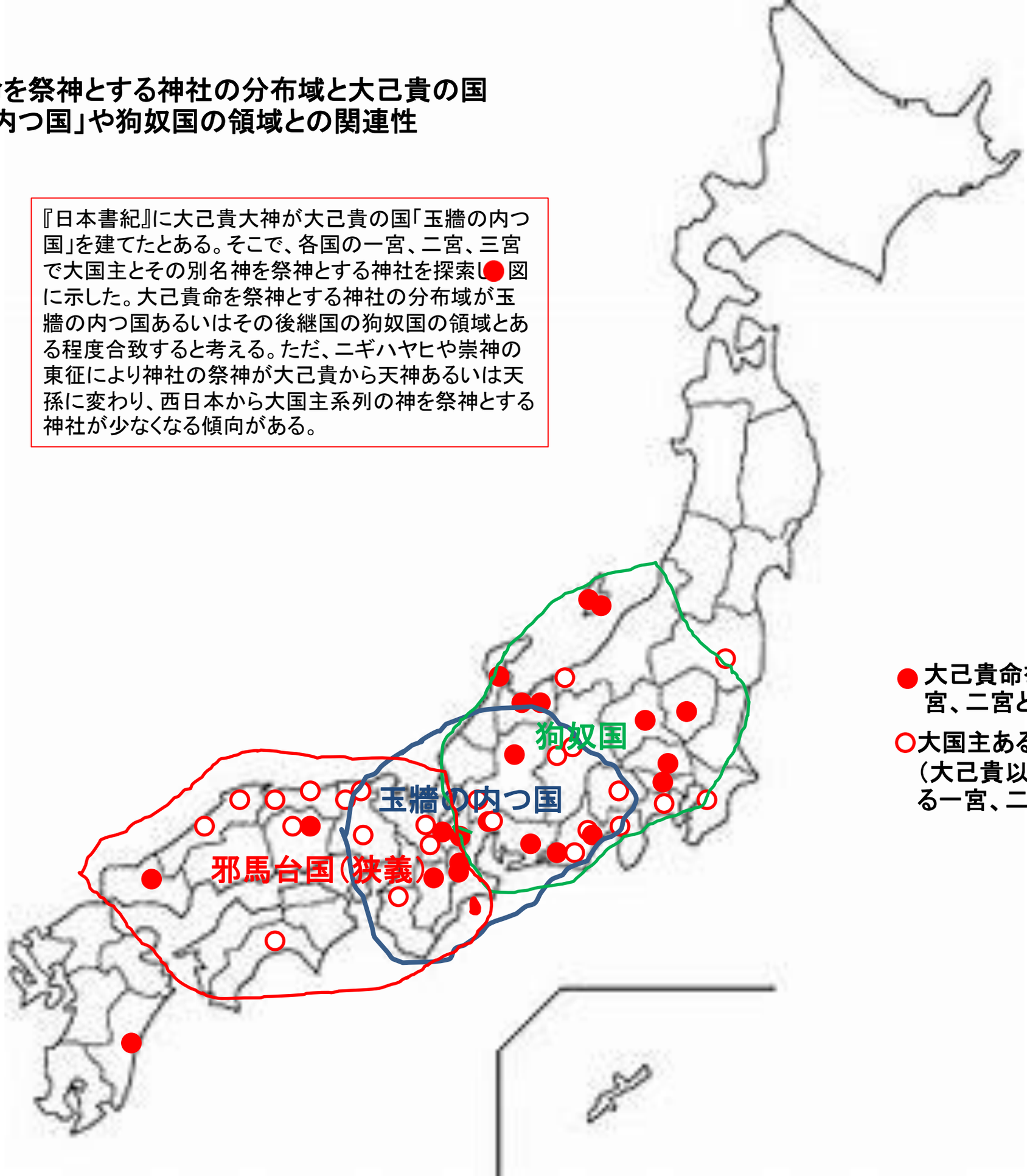
倭文神社(鳥取県)　拝殿（Wikipedia）

忌部神社の神官家の1つ早雲家の記録によれば五代目、天日鷲が神武天皇を案内して中連命が神武東征に参加して伊予二名島を賜わうとしていますから。五代目が金鵄でしょうか。天日鷲は世襲名。
（FB情報　宮井幸彦）
2022・6・20

三河国　青木家忌部系図:天日鷲命-大麻彦命(天日鷲命)-阿波之宇志彦命(天日鷲翔矢命)-天日鷲翔矢命-建男命(天日鷲建男命)-由布彦主命(天日鷲毘古命)。この系図では、阿波之宇志彦命(天日鷲翔矢命)の兄弟として由布津主命(又の名を阿和気彦命、神名 天冨命)。『古語拾遺』にあるように阿波の忌部を別けて安房に東行したのは由布津主命であろう。その時に同時に東に向かったのが大麻彦(天日鷲)の子の倭文の神、建葉槌や麻続氏の祖の長白羽。(FB情報　宮井幸彦)2022・6・20

大己貴命を祭神とする神社の分布域と大己貴の国「玉牆の内つ国」や狗奴国の領域との関連性

『日本書紀』に大己貴大神が大己貴の国「玉牆の内つ国」を建てたとある。そこで、各国の一宮、二宮、三宮で大国主とその別名神を祭神とする神社を探索し●図に示した。大己貴命を祭神とする神社の分布域が玉牆の内つ国あるいはその後継国の狗奴国の領域とある程度合致すると考える。ただ、ニギハヤヒや崇神の東征により神社の祭神が大己貴から天神あるいは天孫に変わり、西日本から大国主系列の神を祭神とする神社が少なくなる傾向がある。



●大己貴命を祭神とする一宮、二宮と三宮

○大国主あるいはその別名（大己貴以外）を祭神とする一宮、二宮と三宮

大国主と共に国造りに携わった少彦名（天日鷲命と同一神か）を祭神とする神社の分布

大己貴命（大国主）を祭神とする神社の分布域は、大己貴の国「玉牆の内つ国」やその後継国の狗奴国の領域と関連すると思われる（前スライド）。この大国主の領域は、大国主との国造りの盟友の少彦名（天日鷲命と同一神と言われる）を祭神とする神社の分布域と大体一致する。注目すべきは、天日鷲命は阿波忌部の祖で、阿波忌部は安房さらに常陸へ東遷したためか、阿波、安房、常陸での少彦名（天日鷲命）が大国主に比べて顕在化する。

天日鷲命を祀る神社 ○
少彦名命を祀る神社 ●

沙沙貴神社（祭神：少彦名神、滋賀県近江八幡町）。神代に少彦名神を祀ったことに始まり、古代に沙沙貴山君が大彦命を祭り、景行天皇が志賀高穴穂宮遷都に際して大規模な社殿を造営させたと伝わる。
沙沙貴神社楼門（光一郎撮影）

「スクナビコナ（少彦名）、アメノヒワシ（天日鷲）、アメノワカヒコ（天稚彦）、ヤタガラス（八咫烏）は、同一神か」

1

『古事記』によれば、スクナビコナ（少彦名、少名毘古那）は、高天原に座する神々の祖神的存在の高御産巣日神（タカミムスビ）と神産巣日神（カミムスビ）（造化の三神の二柱）の後者の御子とされる。スクナビコナは、大国主（オオクニヌシ）の国造りに際し、天乃羅摩船（アメノカガミノフネ＝ガガイモの実とされる）に乗り、鵝（ヒムシ＝ガとされる）の皮の着物を着て波の彼方より来訪し、神産巣日神の命により大国主（オオクニヌシ）と義兄弟の関係となって国造りに参加した。スクナビコナは、国造りの協力神、常世の神、医薬・温泉・禁厭（まじない）・穀物・知識・酒造・石の神など多様な性質を持つ。

大国主（オオクニヌシ）は多数の別名をもち、かつ代々の受け継がれる世襲名であるのと同様に、少彦名（スクナビコナ）もまた世襲名と思われる。大国主と少彦名は、2世紀初め協力して、近江・湖南の伊勢遺跡を都とする大己貴の国「玉牆の内つ国」を建てたと思われ、この国の領域と思われる近畿・中部地方に彼らを祀る神社が数多く存在する。ちなみに、スクナビコナを祀る伊勢遺跡近辺の神社は、沙沙貴神社（近江八幡市）や高野神社（栗東市、祭神は大名草彦命（スクナビコナか））などである。

また、スクナビコナの系譜は多岐に亘り複相していて極めて難解である。とはいえ、スクナビコナはカミムスビの子孫の天津神であり、その系譜には天日鷲命（アメノヒワシ、阿波忌部の祖）、倭文神（倭文神)や鴨健角身命（カモタケツヌミ、八咫烏（ヤタガラス））が含まれる。さらに、スクナビコナは、天稚彦（アメノワカヒコ）と同一視されることがある。また、ホアカリ（天火明）の三世孫の倭宿禰（懿徳天皇か）と阿遅鉏高日子根神（アジスキタカヒコネ）が建てた葛城王朝（玉牆の内つ国の支国）の王の一人が一言主大神で、スクナビコナと同一人物と見なされることがある。

● スクナビコナは天日鷲（アメノヒワシ）と同一神か

阿波忌部の祖神・天日鷲命は、『日本書紀』に登場する神。天照大神が天岩戸に入られたとき、岩戸の前で神々の踊りが始まり、天日鷲神が弦楽器を奏でると、弦の先に鷲が止まった。多くの神々が、これは世の中を明るくする吉祥を表す鳥といって喜ばれ、この神の名として鷲の字を加えて、天日鷲命とされた。『古事記』ではスクナビコナはカミムスビの御子とされる。『新撰姓氏録』にはカミムスビの三世孫が天湯河桁命で後裔が鳥取連、美努連とされ、『先代旧事本紀』にはスクナビコナが鳥取連の祖神とされる一方、『斎部宿祢本系帳』にはカミムスビの四世孫・天日鷲神の子である天羽槌雄神が鳥取部連、美努宿祢の祖とされている。スクナビコナが天日鷲命にあたるとすると、名前に「鷲」をもつことで、同じ猛禽類の鷹を操って鳥を捕る職掌をもった鳥取連の祖に相応しい。また、スクナビコナの後が八咫烏（ヤタガラス）すなわち鴨健角身命ともされる。これらのことからスクナビコナと天日鷲命は同一神であろうと推察されている。

●スクナビコナはアメノワカヒコと同一神か

少彦名（スクナビコナ）と天稚彦（アメノワカヒコ）の「少」と「稚」には相通じるニュアンスがある。倭文神社（しとりじんじゃ/しずりじんじゃ）は、伯耆国一宮。主祭神は天日鷲の後の倭文神とされているが、大正時代までは大国主の娘である下照姫（シタテルヒメ）が主祭神であった。配神には下照姫の夫である天稚彦やスクナビコナ（天稚彦と同一神とされる）が配座されている。また、播磨の国一宮の伊和神社の主祭神は大己貴神（オオナムチ、伊和大神、大国主）であるが、配神としてあたかも夫婦であるかのように少彦名神と下照姫神が並んで配座されている。これらのことも、アメノワカヒコとスクナビコナが同一人物であることを示唆すると思われている。

2

『古事記』葦原中国の平定、第2章の要約 「葦原中国を平定するに当たって、遣わされた天之菩卑能命（アメノホヒ、天穂日）が3年たっても戻って来ないので、次に天若日子（天稚彦）が遣わされた。しかし、天若日子は大国主神の娘下照比売（シタテルヒメ）と結婚し、葦原中国を得ようと企んで8年たっても高天原に戻らなかった。そこで天照大御神と高御産巣日神（タカミムスビ）は雉の鳴女（ナキメ）を遣して戻ってこない理由を尋ねさせた。すると、その声を聴いた天佐具売（アメノサグメ）が、不吉な鳥だから射殺すようにと天若日子に勧め、彼は遣わされた時に高皇産霊神から与えられた弓矢（天羽々矢と天之麻迦古弓）で雉を射抜いた。その矢は高天原まで飛んで行った。その矢を手にした高皇産霊神は、「天若日子に邪心があるならばこの矢に当たるように」と誓約をして下界に落とす。すると、その矢は寝所で寝ていた天若日子の胸に刺さり、彼は死んでしまった。天若日子の死を嘆く下照姫の泣き声が天まで届くと、天若日子の父の天津国玉神は下界に降りて葬儀のため喪屋を建て八日八夜の殯をした。下照姫の兄の阿遅鉏高日子根神（アジスキタカヒコネ）も弔いに訪れたが、彼が天若日子に大変よく似ていたため、天若日子の父と妻が「天若日子は生きていた」と言って抱きついた。すると阿遅鉏高日子根神は「穢らわしい死人と見間違えるな」と怒り、大量を抜いて喪屋を切り倒し、蹴り飛ばしてしまった。が飛ばされた先は美濃の藍見の喪山だという。」

スクナビコナはカミムスビの子とされ天津神であり、またアメノワカヒコは天津国玉神の子とされる。スクナビコナが代々の世襲名とすると幾代目かのスクナビコナがアメノワカヒコと考えられる。アジスキタカヒコネにより飛ばされた喪屋が落ちた先とされる喪山（岐阜県美濃市）には、アメノワカヒコを祭神とする喪山天神社（大矢田神社境外摂社）がある。美濃は近江とともに玉牆の内つ国の中心と考えられる。倭国大乱の末期にニギハヤヒの軍団が美濃に至り、スクナビコナが率いる大国主の軍団との争いになった。この時敗死したスクナビコナがアメノワカヒコと思われる。

アメノワカヒコはいつ頃渡来したのであろうか。想像を逞しくすると、このスクナビコナが大国主を協力して、2世紀初めに近江・湖南を中核とする玉牆の内つ国を建て、この国が近畿・中部地方一帯に拡がったのではないか。ちなみに、この国の中核の一つと思われる近江・豊郷町には、アメノワカヒコを祀る天稚彦神社とアメノワカヒコと顔がそっくりであったというアジスキタカヒコネを祀る阿自岐神社がある。また、豊郷町より若干南の愛荘町には、穀物神として天稚彦命（アメノワカヒコ）を祀る安孫子神社がある。

『古事記』の記述を引用する。「大国主之命と少名毘古那（少彦名）神はお互いに力を合わせてこの国を経営しました。ところが、国がちゃんと出来ないうちに少名毘古那神は、海の彼方の 常世国に渡って行ってしまいました。」このように少名毘古那神に先立たれた大国主之命は「私ひとりでどうしてこの国を作ることができよう。いかなる神と力を合わせてこの国を作ったらよいのだろうか。」と言って嘆き悲しんでいました。この時、遠い沖合いから海原を照らして光輝きながら、次第に近寄ってくる神さま（饒速日（ニギハヤヒ）、大物主）がいました。そして、「もし私をよく祭りあがめるようならば、お前と一緒になってこの国の経営にあたってもよい。そうでなければ、この国がうまく治まることは難しいだろう。」「それでは、どのようにお祭りしたら宜しいのでしょうか。」「大和の国を青垣のように取り囲む山々の、その東の山の頂きに、身を清めて私を祭るが良い。」と言いました。これは御諸（みもろ）の山（三輪山）の上にいる神（大神神社の大物主）です。

「スクナビコナ（少彦名）、アメノヒワシ（天日鷲）、アメノワカヒコ（天稚彦）、ヤタガラス（八咫烏）は、同一神か」

以上のように、スクナビコナ（アメノワカヒコ）は倭国大乱の終末期に美濃・喪山近辺でニギハヤヒにより天羽々矢で射殺されたと考える。倭国大乱後、ニギハヤヒ（大物主）は、邪馬台国を建てるとともに、大国主とスクナビコナが祭神であった大神神社を乗っ取り、自らが祭神となった。

スサノオの後のニギハヤヒは吉備で力を蓄え、2世紀の半ば瀬戸内の三島神の軍勢とアメノヒボコの軍団を伴って東征した（倭国大乱）。ニギハヤヒは、スサノオがヤマタノオロチ（大国主か）を退治した時の十握剣「布都御魂劔」と日の御子の証である「天羽々矢」を携え、大和に向かった。ニギハヤヒの軍団は大国主の軍団と戦闘状態に入り、大和・葛城を制圧し、さらに北上して近江・湖南の玉牆の内つ国の都の伊勢遺跡を解体させた。ニギハヤヒ軍の一団は美濃に侵入し、喪山（美濃市、アメノワカヒコを祭神とする喪山天神社がある）近辺で、大国主軍団のスクナビコナを敗死させた。（アメノワカヒコ（スクナビコナ）はタカミムスビならぬニギハヤヒに射殺された。）倭国大乱の終焉後、ニギハヤヒは大神神社の祭神（大物主）となり、大国主と少彦名は配神として祀られている。このことは、これ以前の大神神社の祭神は大国主と少彦名であったが、祭神をニギハヤヒに乗っ取られたことを意味すると思う。

ニギハヤヒは、大国主と和邇氏と共に、卑弥呼を共立して邪馬台（ヤマト）国を建て、大和の纒向遺跡を都とした。一方、大国主は近江・湖東から美濃を中核して、湖東の稲部遺跡を国都とする狗奴国を建てた。邪馬台国と狗奴国はそれぞれ西日本と東日本に拡がった。邪馬台国は、崇神東征により任那・伊都国勢力に乗っ取られたが、狗奴国は景行朝の頃からその勢力が衰えはじめ、成務朝に滅びたと思われる。

●八咫烏はスクナビコナの後裔

八咫烏（ヤタガラス）は、『古事記』では神武東征の際、タカミムスビによって神武天皇のもとに遣わされ、熊野国から大和国への道案内をしたとされるカラス（烏）である。『日本書紀』では、同じ神武東征の場面で、金鵄（金色のトビ）が長髄彦との戦いで神武天皇を助けたとされており、天日鷲神の別名である天加奈止美命（あめのかなとみ）の名称が金鵄（かなとび）に通じることから、天日鷲神と同一視されることがある。また、八咫烏は、熊野三山においてカラスはミサキ神（死霊が鎮められたもの、神使）とされ、熊野大神（素戔嗚尊）に仕える存在として信仰されている。

一方、賀茂建角身命（カモタケツヌミ）は、山城の賀茂氏（賀茂県主）の始祖であり、賀茂御祖神社（下鴨神社）の祭神として知られる。尚、上賀茂神社の祭神は大国主の御子で下照姫の兄にとされる、アジスキタカヒコネである。『新撰姓氏録』によれば、賀茂建角身命はカミムスビの孫である。（尚、スクナビコナはカミムスビの御子とされ、天日鷲命にあたる。）神武東征の際、高木神（タカミムスビ）・天照大神の命を受けて日向の曾の峰に天降り、大和の葛木山に至り、八咫烏に化身して神武天皇を先導し、金鵄として勝利に貢献したとある。（八咫烏は大和の八咫烏神社にまつられている。）以上のように、神魂命（神皇産霊神）➡天日鷲神（少彦名・天稚彦）➡賀茂建角身命（八咫烏）の系譜が、概ね妥当と考えられる。

神武東征とは、1世紀半ばから3世紀末に起こった次の4回の東征、三島神（神武に当たる）東征、ホアカリの東征、ニギハヤヒの東征（倭国大乱を引き起こし、邪馬台国を建国）、および崇神東征（邪馬台国を崩壊させ崇神王朝を建てる）、を集合する倭国平定譚とみなされる。そして、神武東征譚の主要部は、崇神東征譚と考えられる。また、倭国大乱の終焉期にスクナビコナたるアメノワカヒコがニギハヤヒにより天羽々矢で射殺されたとみる。スクナビコナの名を継いだ賀茂建角身命が八咫烏として神武東征（崇神東征）で大活躍したと考える。

FB藤田泰太郎タイムライン投稿2022・6・17

参照：　古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）ー天孫族（伽耶族）の系譜　③　031

歌川国芳『日本国開闢由来記』巻一より波に乗ってオオナムチ(大国主神)の前に出現したスクナビコナ（右上）
（Wikipedia）

出雲古国 ➡ 出雲王朝

出雲古国は、紀元前後にスサノオに侵攻され滅びる。スサノオとアメノホヒは出雲王朝を建てる。

弥生時代後期の各地の祭祀

紀元前後のスサノオの筑紫さらに出雲への侵攻で大国主の出雲古国が滅び、「聞く銅鐸」が大量に埋納された。大国主一族（アジスキタカヒコネら）は東遷し、丹後さらに近江に至る。スサノオとアメノホヒは出雲王朝を建てたが、後に大国主系の出雲人によって支配権を奪われた。近江に至った大国主と少彦名は近江・湖南の伊勢遺跡を都とする大己貴の国「玉牆の内つ国」を建て、「見る銅鐸」を祭器とした。（藤田）

紀元前1世紀の伊弉諾・伊邪那の時代には、浦安（うらやす）の国、細戈の千足る国（くわしほこのちだるくに）、磯輪上の秀真国（しわかみのほつまくに））があった。弥生時代後期（V期）（AD50~250)には、北部九州、瀬戸内海（吉備）、山陰（出雲）、畿内・東海の各ブロックが認められる。北部九州と畿内・東海では、それぞれ広形銅矛と「見る銅鐸」が祭器として使われる。出雲と吉備では、青銅器の出土はなくなり、大きな墳丘墓（四隅突出型墳丘墓と大型の弥生墳丘墓） の築造が盛んになる。吉備の大型弥生墳丘墓には後に埴輪に発展すると言われる特殊器台が現れる。四隅突出型墳丘墓は三次が発祥の地とされる。この墳丘墓が出雲に伝わり、また吉備では大型弥生墳丘墓となったと思われる。吉備の特殊器台は三次でも出雲でも出土する。（藤田）

紀元前後のスサノオによる出雲侵攻により大国主の出雲古国が滅ぼされて以来、出雲と吉備ではそれまでの合議制（共和制とも云える）の象徴であった青銅器祭器が放棄され、王制を匂わせる四隅突出型墳丘墓や楯築遺跡に代表される弥生墳丘墓が築造されるようになった。吉備が拡大して大吉備になり前方後円墳のプロトタイプが現れ、さらに東征して西日本一帯を支配する邪馬台国となった。（藤田）

スサノオの出雲侵攻とスサノオルート

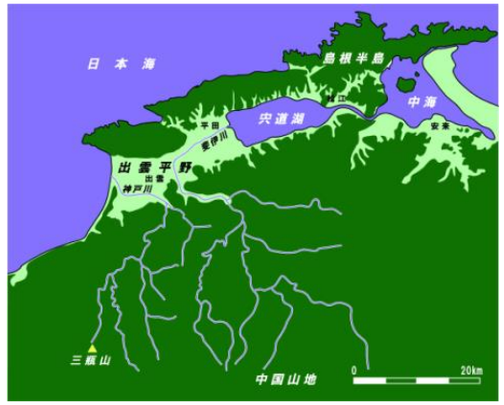
スサノオとイソタケル（ニギハヤヒか）は新羅から追放され、出雲に上陸した。（スサノオらは石見に上陸したと云う説もある。） 三次（四隅突出型墳丘墓の発祥の地）からスサノオ軍団の別動隊（スサノオ配下の三次の豪族か）が、出雲に上陸したスサノオの一団と連動して揖斐川流域に攻め込み出雲古国を滅ぼしたとも考えられる。

スサノオとニギハヤヒは筑前を本拠地としていたと思われ、筑前から日本海海路で石見につき、江の川を遡った三次から峠を越え芦田川上流域から芦田川を下り備後の新市に入る。その後、旧山陽道を東進し、備中や備前に達する。このルートにはスサノオの痕跡がはっきり認められ、備後・新市にはスサノオを祭る古社の素戔嗚神社があり、全国の素戔嗚神社の元社と考えられている。本ルートは**スサノオルート**と呼べる。

スサノオルートで三次に進出していたのはアメノヒボコではないか。アメノヒボコは秦氏とともに大型墳丘墓を造る技術を三次に持ち込み四隅突出型墳丘墓を造営したか。スサノオはアメノヒボコはと協働して出雲に侵攻して出雲古国を滅ぼし、四隅突出型墳丘墓を造成する技術を出雲に移植したか。さらにスサノオとニギハヤヒはアメノヒボコや秦氏とともに備後・新市経由で吉備の総社に進出し、楯築遺跡などの大型弥生墳丘墓を造営したか。総社にはアメノヒボコの妻・阿加流比売（アカルヒメ）を御祭神とする姫社（ヒメコソ）神社があり、吉備の秦氏が崇拝していた。この仮説、今後の検証を要するが、魅力的で充分蓋然性がある。（藤田）

大国主の故地、出雲古国

「出雲古国」の起源の地
出雲の起源地は、「出雲郡の出雲郷」と考えられる。出雲郷は、現在の出雲市斐川町出西、神氷、求院、富村の一帯に当たり、同郷を中心とした地域が出雲地方の国造りの大神・大穴持命の本拠とみられる。南東に出雲四神名火山の一つ、仏経山がありがあり、曽支能夜社に坐すキヒサカミタカヒコを祀っている。これが出雲古国の始祖神たる味鋤高彦根「アヂスキ神」であり、大穴持神の父と思われている。近くの荒神谷遺跡から多量の銅剣が出土し、その近隣の加茂岩倉遺跡からは日本最多の銅鐸が出土した。この一帯を本拠地とした出雲古国の王が強大な権力をもって、出雲全域に広範的な支配をおこなったこと、すぐれた銅、鉄の金属技術を持っていたことがわかる。
（越と出雲の夜明け、宝賀寿男＋藤田）



「聞く銅鐸」の埋納

加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡―日本一の青銅器大量出土遺跡二カ所（弥生時代中期後葉頃埋納）
全国最多39個の銅鐸が出土した加茂岩倉遺跡、そして全国最多358本の銅剣と16本の銅矛、6個の銅鐸が出土した荒神谷遺跡。大量の青銅器を埋納した二つの遺跡は、山々を挟んで直線距離約3.3kmという近い距離に位置しています。
どちらの遺跡も青銅器の出土状況が復元整備され、発見時の興奮と感動が蘇ります。荒神谷遺跡は周辺一帯が史跡公園となっており、6月中旬から7月中旬には色鮮やかな2000年ハスも楽しめます。加茂岩倉遺跡は現在、史跡整備の途中ですが、弥生時代の原風景を彷彿とさせる景観が魅力です。
また、加茂岩倉遺跡には加茂岩倉遺跡ガイダンス、荒神谷遺跡には荒神谷博物館という博物館があります。施設内に展示された出土青銅器のレプリカやパネルなどが、遺跡への理解を一層深めてくれるでしょう。遺跡のガイドもこの施設で受け付けています。そのほか、加茂岩倉遺跡の近くには、邪馬台国の女王卑弥呼が魏より授かった鏡のうちの一枚とされる「景初三年」銘三角縁神獣鏡が出土した神原神社古墳があります。この鏡には一体どのような情景が映し出されていたのでしょうか。
大量の青銅器埋納の謎、卑弥呼の謎を解くカギは、やはり現地にあります。豊かな自然に包まれた遺跡に立ち、しばし弥生びとの祈りの囁きに耳を傾けてみませんか。
（島根県：加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡、Net）
紀元1前後のスサノオの出雲侵攻のため出雲古国が滅び、銅鐸と銅剣が埋納されたと考える。（藤田）

加茂岩倉遺跡　銅鐸出土状況

荒神谷遺跡　銅矛・銅鐸出土状況

三次: 弥生墳丘墓の発祥地

スサノオは、紀元前後に筑前・出雲に侵攻し、八岐大蛇たる大国主を敗死させ、出雲古国を滅ぼした。この際、銅鐸や銅剣などの青銅器祭器が埋納された(加茂岩倉、荒神谷遺跡)。その後、中国地方西部(出雲・吉備)では二度と青銅器を祭器とする祭祀は行われることがなかった。出雲・吉備では、青銅器を用いた祭祀に代わり、王制を髣髴とさせる弥生墳丘墓(四隅突出型墳墓など)が造営された。四隅突出型墳丘墓の最も古い例は弥生中期後半の広島県の三次盆地(備後・三次)にみられる。弥生後期から美作・備後の北部地域や東出雲(島根県東部)・伯耆(鳥取県西部)を中心にした山陰地方に広まった。北陸では少し遅れて能登半島などで造られている。一方、三次盆地にみられた初期形式の四隅突出型墳墓が三次から備後南部へ広まり、さらに大型の弥生墳丘墓である備中・総社の楯築遺跡の築造に至った。

スサノオは筑前と出雲を行き来したと思われるが、備後の三次に拠点を置いたと思われる。スサノオは筑前より石見の江の川を遡り三次に至る。三次から三次盆地に流れ込む河川を遡り、峠を越え芦田川の上流域に至る。次に芦田川を下り備後南部の新市に至る。三次にはスサノオを祀る須佐神社とスサノオと同一神と思われる武塔天神を祀る武塔神社が隣り合わせで鎮座する。また、新市には備後一宮の素戔嗚神社があり、祇園信仰や蘇民将来伝説の発祥の地と云われる。さらに、総社には吉備の秦氏が奉納するアメノヒボコの妻のアカル姫を祀る姫社(ひめこそ)神社がある。吉備の秦氏とアメノヒボコが協力して楯築墳丘墓を造成したと云われる。

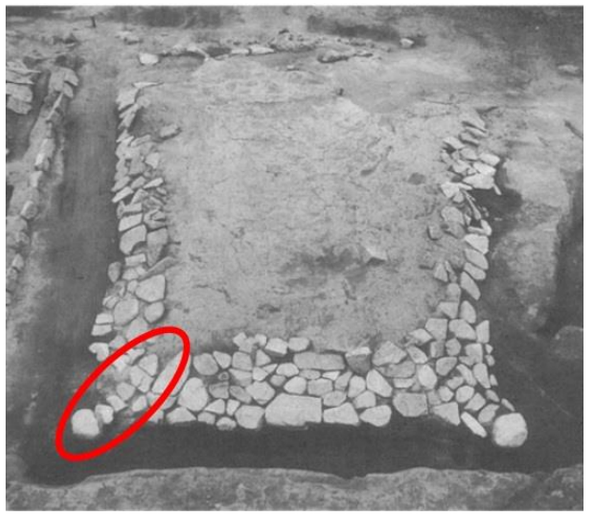
スサノオ(新羅王室2代南解次次雄に当たる)は紀元前後に筑前に侵攻して伊都国を建てた。この折アメノヒボコを伴っていたとも思われる。(ひょっしたらスサノオそのものがアメノヒボコか) スサノオの孫が迎鳥で4世孫が阿加流日古で両者ともにアメノヒボコと呼ばれたという。2世紀中頃の倭国大乱時渡来したアメノヒボコは新羅王室8代阿達羅尼師今の皇子の延烏郎で、ニギハヤヒの東征に同伴したと思われる。また、アメノヒボコは秦氏と結びついている。

スサノオが出雲に侵攻した当時、石見の日本海沿岸から江の川を遡り、三次に至りさらに芦田川上流から備後・新市に達し、そこから古山陽道を辿り備中・総社に至る、ルート(スサノオルートとも云える)があったと思われる。事実、三次には須佐神社があり、新市には素戔嗚神社があり、ニギハヤヒは吉備で力を養い、また2世紀にはアメノヒボコが総社に達していた証左がある。さらに、アメノヒボコは秦氏との関連が強い。秦氏は出雲の四隅突出型墳丘墓や吉備の大型弥生墳丘墓の造営と関係しているとも云われる。ちなみに、三次は四隅突出型墳丘墓の発祥の地と云われ、その造営と秦氏との関連が注目される。
(藤田泰太郎)

四隅突出型墳丘墓の始まり

(古代出雲への道.jp　四隅突出型墳丘墓とは？Net)
広島県の三次盆地には、四隅突出型墳丘墓の初期の遺跡として、宗祐池西1号・2号墓、殿山38号・39号墓、陣山墳墓群が発見されています。

陣山墳墓群(広島県三次市四拾貫町)



陣山3号墓 (赤丸は加工) 発掘時の写真です。
初期の墳形は、隅がそんなに際立って長くありません。初期の形は、四隅が伸びておらず、四隅の配列が規則正しく縦に並んでいます。これは、「踏石(ふみいし)状石列」とか「ステッピング・ストーン」と呼ばれています。

(古代出雲への道.jp　四隅突出型墳丘墓とは？　Net)

出雲王朝の建国

出雲王朝　西谷墳墓群・今市大念寺古墳

斐伊川・神戸川に挟まれたこの場所は、多くの王墓が集中するところです。出雲市の南東にある西谷墳墓群は山陰地域独特の形をした**四隅突出型墳丘墓**が集中しています。発掘調査の行われた3号墓では墓の上で祭祀が行われた様子がわかっており、出土品からは葬られた王が吉備や北陸地方とも交流をもっていたと考えられています。ここからは斐伊川や出雲平野を一望することができます。

また、神戸川の東には日本最大級の家形石棺を持つ今市大念寺古墳、精美な石室を持つことで知られる上塩冶築山古墳など、この地に君臨した王を葬った古墳を見ることができます。西側には妙蓮寺山古墳、放れ山古墳など、王を補佐したといわれる有力者の古墳も多く築造されており、古墳時代後期に花開いた古墳文化にもふれることができることでしょう。

（島根県：西谷墳墓群・今市大念寺古墳、Net）

出雲王朝は1世紀始めにスサノオとアメノホヒによって建てられ、後に大国主系の出雲人に支配権を奪われたが 、1世紀から崇神朝まで連綿と繁栄した。（邪馬台国時代の投馬国）

西谷3号墓第１主体部
（島根大学考古学研究室提供）

西谷3号墓

四隅突出型墳丘墓（よすみとっしゅつがたふんきゅうぼ）は、弥生時代中期以降、吉備・山陰・北陸の各地方で行われた墓制で、方形墳丘墓の四隅がヒトデのように飛び出した特異な形の大型墳丘墓で、その突出部に葺石や小石を施すという墳墓形態である。四隅突出型弥生墳丘墓とも呼称する。

四隅突出型弥生墳丘墓の最も古い例は弥生中期後半の広島県の三次盆地にみられる。弥生後期後葉から美作・備後の北部地域や後期後半から出雲（島根県東部）・伯耆（鳥取県西部）を中心にした山陰地方に広まった。北陸では少し遅れ能登半島などで造られている。

山陰地方すなわち日本海側を中心に約90基が確認されている。北陸地方（福井県・石川県・富山県）では現在までに計8基が知られている。

墳丘墓側面には貼り石を貼りめぐらし、規模は後の前期古墳の規模に近づくなど、古墳時代以前の墓制ではもっとも土木技術が駆使されており、日本海沿岸という広域で墓形の規格化が進んでいた。

このことから、山陰～北陸にわたる日本海沿岸の文化交流圏ないしはヤマト王権以前に成立していた王権（出雲王権）を想定する論者もいる。また、もっとも集中的に存在する島根県安来市（旧出雲国）では古墳時代前期に全国的にも抜きん出た大型方墳（荒島墳墓群の大成、造山古墳）が造営されるが、四隅突出型墳丘墓の延長線上に築かれたものと考える者もおり、出雲国造家とのつながりを指摘する者もいる。

（Wikipedia抜粋）

四隅突出型墳丘墓の分布

西谷3号墓模型（島根県web）

出雲王朝　安来―意宇王

東部出雲（安来）

弥生/古墳時代の間にかけて出雲に強力な王権が発生するが、その中心地（東部 出雲王朝）だったという説がある。全国最大級の方墳である造山古墳群や出雲文化圏特有の四隅突出型墳丘墓（国内最大級の集中地帯）などを含む多くの古墳が発掘されており、弥生から古墳時代にかけて約500年の間、連綿と栄えた地域である。当時の出雲は筑紫、大和、近江、毛野と並ぶかそれ以上の古代日本の有力な地方政権で、弥生後期においては北陸まで及ぶ日本海沿岸には四隅突出型墳墓形式で規格化された連合政体のようなものがあった。ヤマトとともに抜きん出た勢力を誇り意宇王の指導のもとで一時は独立王朝をなしたという説がある。

山陰では鉄器も北九州に準ずる量が発掘されており、安来でも弥生期の製鐵遺構が竹ヶ崎・柳遺跡で見つかっているため、これらの鉄が当時鉄不足であった大和地方へ供給されヤマト朝廷建国の原動力となったという説がある。実際前近代的な野だたらは弥生時代以降、連綿と続いていたようで製鉄遺跡として認知されている。

（安来市－Wikipedia抜粋）

妻木晩田遺跡

（出雲王朝の遺跡か）

妻木晩田遺跡（むきばんだいせき）、あるいは妻木晩田遺跡群は、鳥取県西伯郡大山町富岡・妻木・長田から米子市淀江町福岡に所在する国内最大級の弥生集落遺跡。遺跡の面積は156ヘクタールにもなり、これは発掘当時国内最大級と喧伝された吉野ヶ里遺跡（当時32ヘクタール、現在は調査が進み、約2倍の面積になっている）の5倍にもおよぶ大規模なものである。大山山系から続く丘陵（通称「晩田山」）上に位置し、美保湾（日本海）を一望できる。島根県安来市から、この妻木晩田遺跡まで弥生後期に栄えた古代出雲の中心地であったと考えられる。中国の歴史書『魏志倭人伝』に記されている倭国乱の時代（2世紀後半）に最盛期を迎えます。激動の時代を生きた弥生時代の人々の暮らしぶりが、この遺跡には残されています。

現在、全体のおよそ1/10が発掘調査されています。その結果、弥生時代中期末（西暦１世紀前半）～古墳時代前期（3世紀前半）にかけての、竪穴住居跡420棟以上、掘立柱建物跡500棟以上、山陰地方特有の形をした四隅突出型墳丘墓などの墳墓34基や、環壕など、山陰地方の弥生時代像に見直しをせまる貴重な資料がたくさん発見されました。

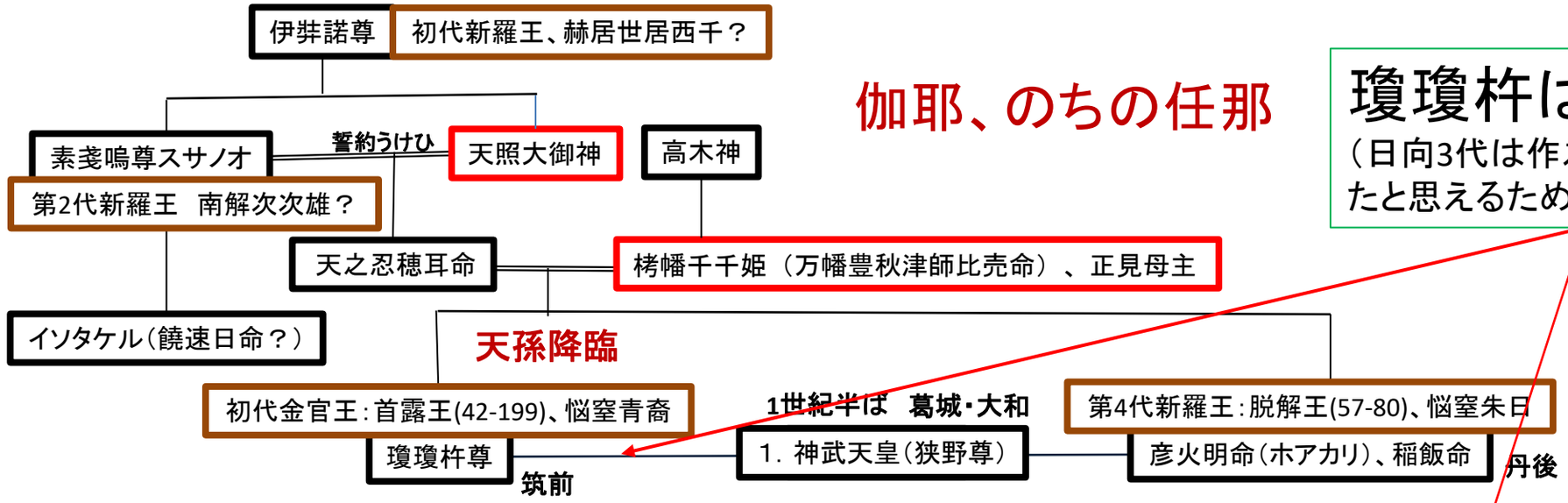
（Wikipedia抜粋、とり ネット）

妻木晩田遺跡の四隅突出型墳丘墓（鳥取県web）

妻木晩田遺跡、洞ノ原地区西側丘陵と弓ヶ浜半島（Wikipedia抜粋）

藤田

イザナギ・イザナミの来訪は紀元前1世紀半ば、スサノオの渡来は紀元前後、天孫降臨は1世紀半ば



瓊瓊杵は神武！
（日向3代は作為的に挿入されたと思えるため削除）

『日本書記』の全長1360年に及ぶ紀年の作成には、暦の関係者ばかりではなく、数学の関係者も参画していたと考えられる。旧暦の暦法は時代により変遷しており、1ツキが15日または30日、1トシが6か月であった。貝田氏は、「日付記事の分析により、1年の長さが、仁徳紀以前は実際の4倍に、履中紀から雄略紀までの間は実際の2倍に伸びており、太陰暦で読めるのは清寧紀以降である。」という。（古代天皇長寿の謎―日本書記の謎を解く―、貝田禎造）言い換えれば、仁徳紀以前は4倍年歴で、履中紀から雄略紀までは2倍年歴で記載されている。この貝田氏の推論に基づくと、神武東征の開始は西暦174年となり、崇神元年は西暦315年となる。（「神武東征」の原像、宝賀寿男）

邪馬台国の台与が西晋に使節を送ったのは西暦266年である。これは邪馬台国崩壊後の崇神元年の半世紀近く前であり、なんとか理解可能である。しかるに、神武東征の時期は1世紀頃の摂津の河内潟の時代に当たると思われ、貝田推論より1世紀以上遡る。また、綏靖天皇から開化天皇までは、所謂、欠史8代と言われるほど事績が殆どない。従って、開化紀以前までにも4倍年歴を当てはめるのはかなり無理がある。

上図は天孫族の系譜を示している。天孫・瓊瓊杵（ニニギ）の兄は彦火明命（ホアカリ）である。『記紀』の神武－開化（1－9代)の系図と『海部氏勘注系図』の彦火明－乎縫 (1－11)の系図とを整合性をもたせて並列させることができる。瓊瓊杵と神武が同人格とすると開化まで9代、また彦火明命から乎縫命まで11代となる。両方の代の数の平均を取ると10代で、一代を四半世紀（25年）とすると瓊瓊（神武）および彦火明（稲飯、神武の兄）の即位は西暦65年となる。この年代は、金官国初代首露王（即位42年）や第4代新羅王脱解王（即位57年）と同年代であると考えられる。すなわち、瓊瓊杵（神武）と首露王は同一人格で、彦火明（稲飯）と脱解王もまた同一人格となる。

因みに、伽耶の伝説『釈利貞伝』によれば「正見母主には悩窒青裔と悩窒朱日の二人の息子があり、悩窒青裔は金官国の初代首露王になり、悩窒朱日は大伽耶の王（脱解王）となった」とのことである。正見母主は、高木神の娘の栲幡千千姫（万幡豊秋津師比売命）であるとすると、天孫（瓊瓊杵と彦火明）は伽耶の出自となりそれぞれ伊都国と丹後国に降臨したことになる。以上より、天孫降臨の年代は1世紀半ばと考える。

（つづく）

（つづき）

『三国史記』「新羅本紀」や『三国遺事』によれば、倭人の瓠公（ここう）が新羅の3王統（朴氏、昔氏と金氏）の全ての始祖伝説に関わったとされる。新羅の始祖王は、朴氏の赫居世居西干（ヒョッコセコソガン、BC57-AD4）であり、第4代新羅王脱解王（AD57-80）を彦火明（稲飯）とすると、第2代南海次次雄（スサングAD4-24年）がスサノオに当たり、赫居世居西干が伊邪那岐（イザナギ）に当たる。
（藤田泰太郎）

稲飯命（イナイノミコト・イナイイノミコト）はウガヤフキアエズとトヨタマヒメの間に生まれた第二子（神武の兄）。『古事記』によると、その後、母の海へと帰って行ったとあります。稲飯命は姓氏録の右京皇別「新良貴（シラキ）条」に「新羅の国主になった」「新羅の国王の祖と合わさった」「ただし『日本書紀』にはこのことが書かれていない」と書かれている。また、新羅の4代王の昔脱解（ソクタレ）や部下の瓠公は「倭人」と朝鮮の歴史書の三国史記に書かれている。
（稲飯命 nihonsinwa.com + 藤田）

瓊瓊杵は神武！
上図によると、瓊瓊杵は、首露王、悩窒青裔あるいは神武（狭野尊）に当たる。瓊瓊杵の兄の彦火明（ホアカリ）は、脱解王、悩窒朱日あるいは稲飯に当たる。しかるに、『記紀』には邇邇芸⇒彦火火出見尊⇒ウガヤフキアエズ⇒神武の系図、所謂「日向三代」が瓊瓊杵と神武の間に挿入されている。この「日向三代」は百越の始祖伝説に酷似しており、人為的に挿入された可能性が高い（後述）。私見では、この「日向三代」はむしろ瓊瓊杵命に続く九州のウガヤ朝の系譜ではないかと考える。（藤田）

藤田

新羅建国と南朝鮮（南韓）の倭人

『三国史記』と『三国遺事』

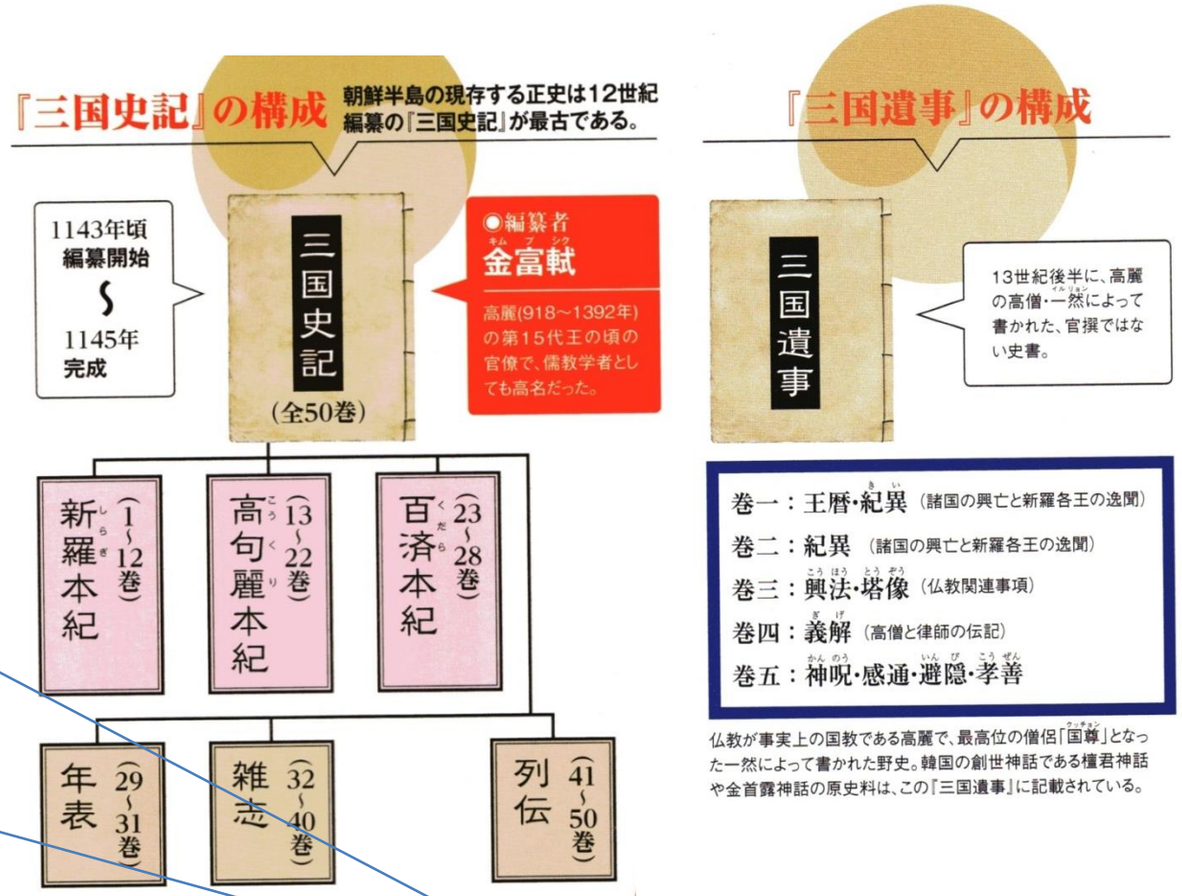
新羅本紀

『三国史記』は高麗が編纂した正史で、朝鮮半島の三国時代、統一新羅時代さらに後三国時代を扱い、日本の正史である『日本書記』に相当するものである。『三国遺事』は『古事記』に相当する。その中の「新羅本紀」には次の記述がある。

1.『三国史記』第1巻（新羅本記）には、日本列島の多婆那国（倭国の北西千里に位置する）から渡来してきた賢者が新羅2代目の長女を娶り、義理の兄弟となり、3代目の死後に4代目の王として即位する説話がある。この王が脱解王で、新羅の3王室の一つの昔氏の始祖となる。脱解王と倭人の大輔（総理大臣に相当する）の瓠公が政権を掌握して善政を行い、のちに高麗王朝にまで通じる金王朝の始祖となる赤子（脱解の実子との説がある）を王族として養育した。

2.『三国遺事』には、脱解が、現在の慶州中心部にあった瓠公の土地を手に入れようとするくだりで、「この家（瓠公の家）がある場所は元々私（脱解）の土地だ。私の祖先は鍛冶屋だったから、掘れば砥石や炭が見つかるだろう」と述べている。

（別冊宝島2283　日朝古代史　嘘の起源、室谷克実　監修）



南朝鮮の倭人（西日本縄文人）

7300年前の鬼界カルデラ噴火の災厄から逃れるため、西日本縄文人は当時殆ど無人であった朝鮮半島に移った。縄文時代前期に入り、朝鮮半島南部（南朝鮮）と西北九州に広がる漁撈文化が興った。その頃から後期の4,000年前頃の世界の冷涼化の開始までは、南朝鮮には専ら西日本縄文人のみが居住していた。冷涼化に伴い、華北人やツングース系の濊・貊人（朝鮮人）が半島へ南下を開始した。また、弥生時代前期の南朝鮮へは華北人に追われた江南人が向かった。したがって、紀元前後の南朝鮮は縄文人がなお多数であったが、華北人や江南人との混血も進んだ。この南朝鮮と西日本の縄文人が倭人と称されるようになった。さらに弥生中期・後期のなるとさらに漢人や河北人の南朝鮮への侵入が多くなり、河北人、漢人や江南人、および彼らとの混血の進んだ倭人が、韓人と称されるようになった。弥生時代の列島への渡来人は主に南朝鮮の倭人であり、次いで韓人さらには少数の漢族およびツングース系の朝鮮人であろう。とくに、弁韓、辰韓ではとくに倭人が優勢であったと思われる。（藤田）

倭国の**多婆那国**とは丹波国（丹後を含む）と思われる。紀元前後の丹後は製鉄業が進んでいた。脱解の時代の新羅は辰韓と呼ばれ12ケ国から成り立っていたが、そのうちの斯盧（しろ）が発展して新羅となった。当時の倭国は多くの国に分かれていたが、南朝鮮にも倭人の国が多く、特に弁韓と辰韓の国の多くは倭人が支配していた。従って、南朝鮮、北西九州および西日本の日本海沿岸の諸国には、大国主の古出雲国を中心とする、鉄、銅、玉を商う巨大な経済圏（交易ネットワーク）が形成されていた。この経済圏の中核には高炉を備えた製鉄所のある楽浪郡が存在する。尚、脱解とは、丹後に降臨した天（彦）火明命（ホアカリ）と思われる。（藤田）

『三国史記』「新羅本記」
建国時代の新羅王室の系図と倭人の瓠公

『記紀』の紀元前後からの崇神（神武）東征までの古代史は、新羅、出雲、丹波、但馬や近江などの日本海勢力と密接な関係がある。かくて『記紀』の神世は、『三国史記』の「新羅本記」の初代から4代を基にしているのではないかと推察できる。というのは、スサノオとホアカリが、それぞれ「新羅本記」の第2代南海次次雄と第4代脱解王にあたるのならば、**イザナギとイザナミ**は初代の赫居世居西干夫婦にあたる。ホアカリ弟（ニニギ）を神武天皇に当てていると思われる。さらに、アメノヒボコは第8代阿達羅尼師今の皇子（？）の延烏郎である。来倭の時期はちょうど倭国大乱の真最中である。
（藤田）
紀元前1世紀半ば、イザナギとイザナミは伊西国より丹後を経由して近江多賀に落ち着く。イザナギ・イザナミは、伊西国の男・女か。

瓠公（ここう、生没年不詳）は、新羅の建国時（紀元前後）に諸王に仕えた重臣。また金氏王統の始祖となる金閼智を発見する。もとは倭人とされる。新羅の3王統（朴氏、昔氏と金氏）の始祖の全てに関わる、新羅の建国時代の重要人物である。瓠（ひさご）を腰に下げて海を渡ってきたことからその名がついたと『三国史記』は伝えている。
　初代新羅王の赫居世居西干の朴姓も同じ瓠から取られているため、同一人物を指しているのではないかという説がある。
　また、脱解尼師今が新羅に着した時に瓠公の家を謀略で奪ったと言う。この瓠公の屋敷が後の月城（歴代新羅王の王城）となった。
（Wikipedia抜粋）

7世紀の『記紀』の編纂者は、12世紀編纂の『三国史記』「新羅本記」の新羅王室の系図（その原典？）を認知していたと思われる。紀元前後の弁韓・辰韓は主として倭人の勢力下にあり、楽浪郡の鉄を核にした南朝鮮と日本海側の倭の国々の経済的ネットワークが存在した。さらに、共通の王室起源の認識もあったと推察する。

南解次次雄（なんかいじじゆう、新羅の第2代の王（在位:4年 - 24年））　姓は朴次次雄はスサングと発音され、**スサノオ**に通じる（新羅の神々と古代日本、出羽弘明）。
賢者の昔脱解（後の第4代王の脱解尼師今）の噂を聞きつけて取立て、王の長女を嫁がせ、軍事及び政治を任せた。
紀元前後に、北九州を侵しさらに出雲に侵攻し、大国主を敗退させる。息子のイソタケルは伊西国の勇者で伊西国の出自か。

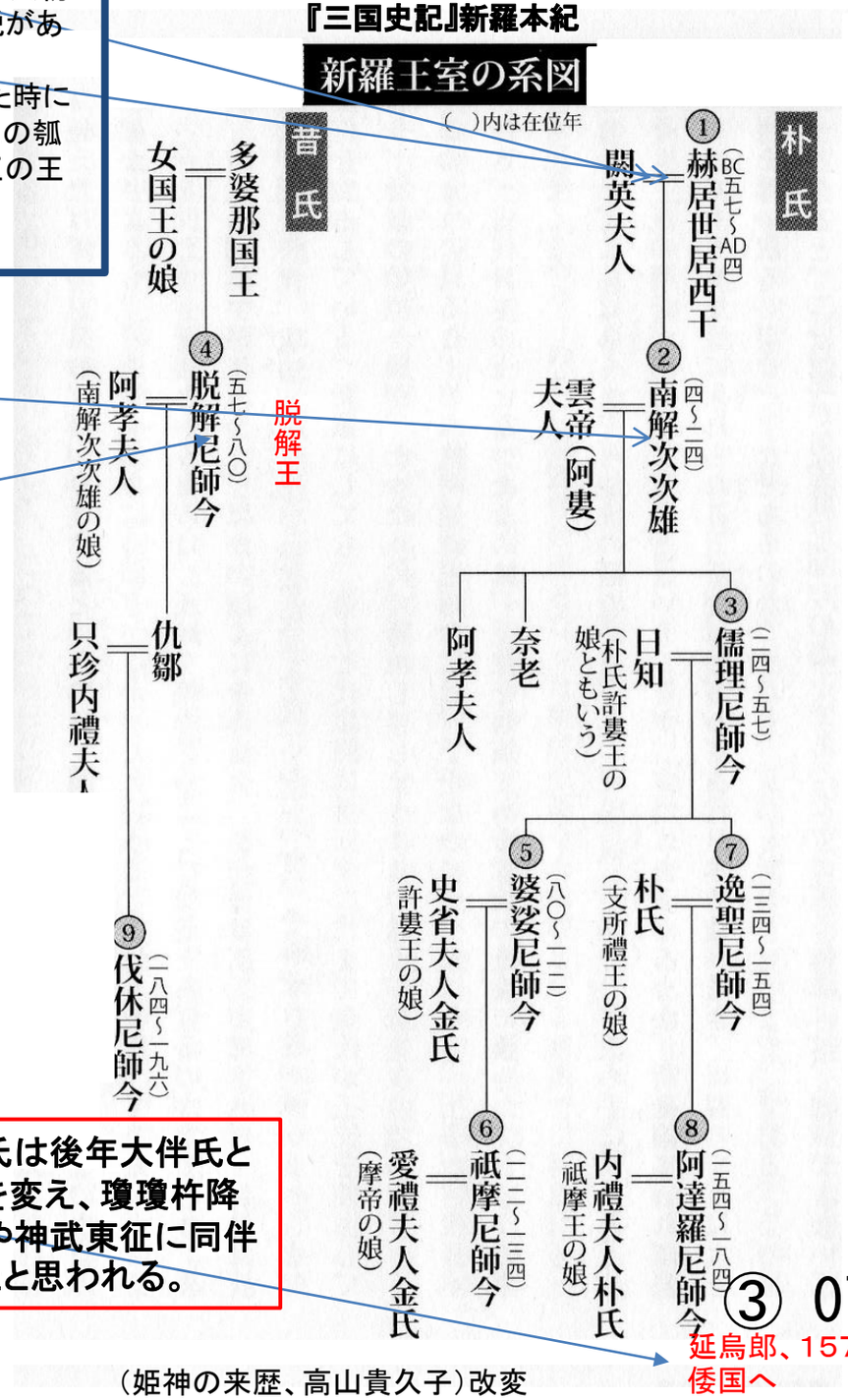
脱解王（脱解尼師今、倭国多婆那国（丹波国か）**ホアカリ**か
　現在の韓国人の直接の祖先である新羅の王が倭人であったことが、朝鮮半島の正史『三国史記』に記されています。その倭人とは、昔氏の始祖の新羅の第四代王である脱解王 (在位：西暦57-80年)です。脱解王が重用したのも倭人の瓠公（ここう）であり、『三国遺事』（さんごくいじ）は脱解王を「鍛冶（かじ）」だったと記録しており、素戔男尊や天日槍は、脱解王の一族であると考えられます。また、天日槍（＝天之日矛）の妻の比売語曽（ひめこそ）が夫の元を去るとき、「親の国に帰る」と告げているように、南朝鮮は倭国の管轄下にあり、多くの倭人が住み着いていた証拠でしょう。
（邪馬台国と卑弥呼-23　　日本人新羅王　脱解王）
新羅の第2代王がスサノオであるなら第4代脱解王は孫に当たり、天孫降臨が想起される。

延烏郎は**アメノヒボコ**か
「迎日」という地名は高麗時代の延日県に由来し、『三国遺事』阿達羅王（在位154-184年）．四年（157年）の延烏郎と細烏女の説話に現れる。それによれば、日月の精である延烏郎細烏女夫婦が日本へ渡ったため日月が光を失い、王が使いを寄越したが、延烏郎は日本で王（新羅人が王になったという記録がないことから大王のことではなく地方を治める小王であるとみられる）として迎えられているのを天命として帰国を拒み、代わりに細烏女の織った絹（絹の織物）を与え、それで天を祭ったところ日月が元に戻った事から、天を祭った所を迎日県または都祈野と呼んだのだという。158年、皆既日蝕。
(迎日湾-Wikipedia抜粋)
ニギハヤヒと共に倭国大乱を引き起こし、邪馬台国を建てる。

金氏始祖の金閼智（第13代味鄒尼師今の7世祖）

昔氏は後年大伴氏と名を変え、瓊瓊杵降臨や神武東征に同伴したと思われる。

『三国史記』新羅本紀



（姫神の来歴、高山貴久子）改変

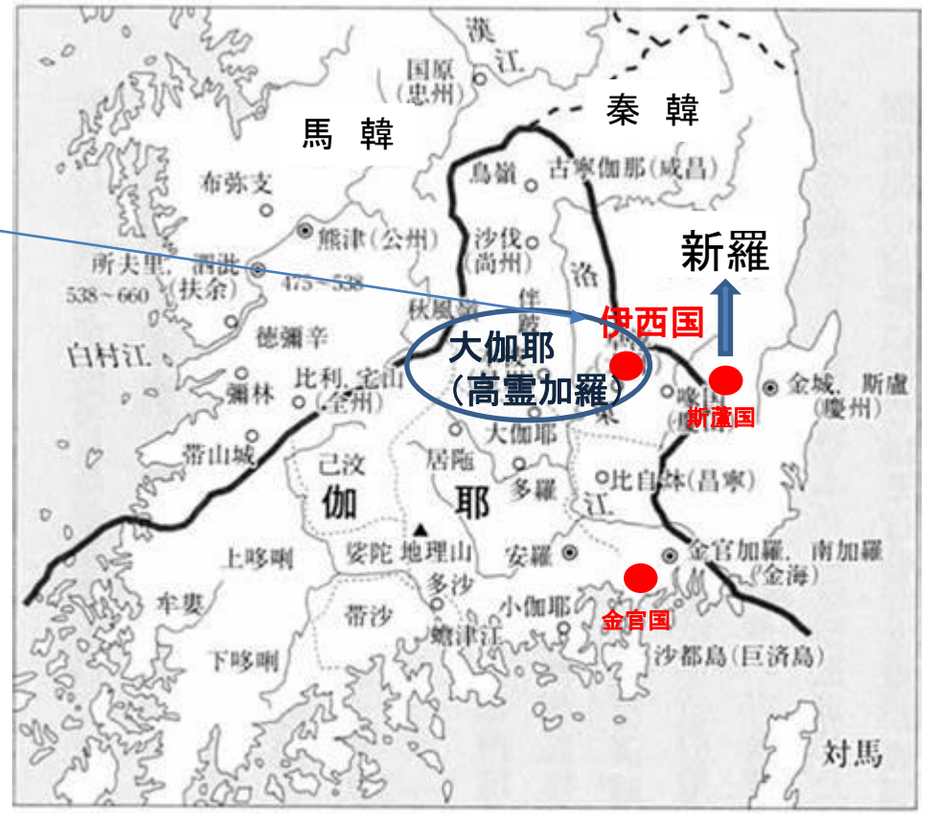
③ 076
延烏郎、157年
倭国へ

伊西国はイザナギ・イザナミの故地か

（大伽耶（高霊加羅）が高天原か）

伊西国（『三国遺事』、『三国史記』では伊西古国）
伊西国は紀元前後から3世紀末まで、洛東江東岸の大邱近辺に存在した。この地域は伽耶（弁韓、任那の前身）の東端に当たり、日本海側の慶州当たりに辰韓の斯蘆国（新羅の前身）があった。297年、伊西国に攻められ首都金城（慶州市）を包囲されるが、竹葉軍の助力で防衛に成功した。なお、この伊西国と日本のイツツヒコ王国（伊都国か）との間に連携があったとされる（『三国史記』新羅本紀の儒礼尼師今紀）。（藤田　＋　日羅関係―Wikipedia抜粋）

イザナギとイザナミ
『古事記』に、「イザナギの神は多賀（近江湖東）に近い杉坂山に降臨し、多賀にお鎮まりになった（つまりここに移り住み、ここで亡くなった）」と記されてる。多賀にはイザナギ、イザナミを祀った多賀大社がある。
　多賀から少し南下した守山には弥生後期の巨大な環濠遺跡（伊勢遺跡）があり、大己貴の国「玉牆の内つ国」の中心かと思われる。付近からは大型銅鐸がたくさん出土している。イザナギ、イザナミ両神が、古代朝鮮の伊西（イセ）国から渡ってきた人々だったとすれば、日本で定住した地（近江）に、故郷にちなんで「伊勢（イセ）」と名づけたとしても、まったく不思議ではない。尚、イザナギはイセの男、イザナミはイセの女と解せられる（イザナギ、イザナミを韓国語で訳せば、徐延範）。（Net　＋　藤田）



韓国の言語学者・徐延範氏の著書によれば、≪韓国語のイルタ（言う・告げる）という言葉の語根「イル」の祖語形は、イッである。このイッは、もともと「言」の意であったことになるが、これはイザの祖語形イッと一致している。さらにイザの祖語形であるイッと、「巫女」の意のイチの祖語イッとは、同根語である。歌舞をしたり、予言をしたりするシャーマンの祭儀のことを、イル「巫儀」という。キは「男」の意であり、イザナギは、「巫男」の意であろう。また、イザナミのミは、「女」の意である。すなわち、イザナギ命とイザナミ命が、当時、大巫人であった。≫
　「イザ」は地名としてもとらえることができる。弁韓の一国（伊西（イソ）国）のイソが訛ったのがイトである。『魏志倭人伝』に伊都国が記される。伊都国は、伊西国の後継国と考えられる。また、伊西（イソ）は、音韻上伊勢（イセ）に通じる。伊西国の「イソ、イセ」はイザナギ・イザナミのイザにも通じる。すなわち、イザナギ・イザナミは「伊西の男・女（人）」の意味を持つ。
　国産み神話の主役であるイザナギ、イザナミ両神が、古代朝鮮の伊西国から渡ってきた人々だったとすれば、日本で定住した地（クニ）に、故郷にちなんで「イセ」と名づけたとしても、まったく不思議ではない。するとイザナギ、イザナミの子である天照大神（卑弥呼とも）が生まれ育ち、やがて女王となる土地（クニ）の名が、「イセ」国だった可能性は、十分ある。近江は、琵琶湖を中心に、湖北、湖東、湖南、湖西のいずれもが、渡来人の影がひときわ濃厚な土地柄である。その中には、大陸で流行していた初期道教の影響を受けた「鬼道」などを用いる、祭祀を司った人々もいたはずである。彼らの中に、卑弥呼の祖先がいた可能性も否定できない。事実、湖東の多賀町には、イザナギ、イザナミを祀った多賀大社がある。『古事記』にも、「イザナギの神は多賀に近い杉坂山に降臨し、多賀にお鎮まりになったと記されている。湖東から湖南にかけての弥生時代の遺構を時代順に見ると、北から次第に南下しているような印象を受ける。朝鮮半島から渡ってきた人々が、肥沃な琵琶湖沿岸に住み着き、多賀から守山（伊勢遺跡）まで数代、あるいは十数代かけてゆっくりと南下してきた。そして卑弥呼の代に、三十のクニグニからなる連合国家「邪馬台国」の女王に推されたと思われる。（邪馬台国近江説、後藤　＋　Net　＋　藤田）

多賀大社（たがたいしゃ）　伊邪那岐命（イザナギ）・伊邪那美命（イザナミ）の2柱を祀り、古くから「お多賀さん」として親しまれた。（Wikipedia抜粋）

イソ（伊西）・イト（伊都）・イセ（伊勢）

倭人とされる**瓠公**は、新羅の建国時に諸王に仕えた重臣で、新羅の建国時代の重要人物である。瓠公は新羅の3王統（朴氏、昔氏と金氏）の始祖の全てに関わったとされる。新羅の始祖王である朴氏の赫居世居西干は、瓠公その人であるとの説もある。朴氏の起源地は伽耶（弁韓）の「伊西（イセ）国」とされ、伊勢神宮がある「イセ」と同じ発音である。伊西は古来イソとも発音され、伊都イトとも訛る。従って、伊西国が衰退したので、紀元1世紀中頃に伊西国に因むスサノオによって筑紫に伊都国が建てらたのではないか。『筑前国風土記』逸文では、天皇の誰何に対して五十迹手（伊都国王か）が「高霊国の意呂山[おろやま]（伊西国の領域の烏禮山[オレサン]か）から、天より降ってきたアメノヒボコの末裔、五十迹手であります」と自らの身元を明かしたとされる。アメノヒボコは、新羅王家の第8代王の皇子（？）の延烏郎であると考えている。邪馬台国時代、伊都国は、対馬に起こり南朝鮮の大部分を制圧した任那と連合して、南朝鮮と北西九州を支配する任那・伊都国連合を結んだ。

新羅王家第2代王南海次次雄がスサノオに当たると考える。スサノオ本人あるいはその子はイソタケルと呼ばれる。イソタケルのイソは、伊西のイソから由来すると思われる。さらに、最古の神社の一つである石上神宮はイソノカミ神宮と呼ばれるが、これはスサノオの子、イソタケルのイソに起因するのではないか。従って、ヤマトタケル（日本武尊）が日本の英雄を指すようにイソタケルは伊西武尊で伊西の英雄と解される。興味深いことに、古来「神宮」と呼ばれるのは、伊勢神宮と石上神宮のみである。さらに、伊勢神宮の古名は「磯宮（いそのみや）」であり、イセとイソの繋がりを強く示す。

新羅王家の朴氏および昔氏は伊西国の倭人の末裔氏族であり、倭人のイザナミ、スサノオ、ホアカリ（脱解王）やアメノヒボコは、ツングース系の濊・貊（高句麗、朝鮮人）の南下により圧迫され、列島に帰来したのではないかと考えている。

（邪馬台国近江説、後藤　＋　天皇の誕生、Net　＋　藤田）

イソタケルはニギハヤヒか？

スサノオの子、イソタケルは高天原を追放されたスサノオとともに新羅曽尸茂梨に天降り、スサノオがこの地吾居ること欲さずと言ったので、一緒に埴土船で渡って出雲斐伊川上の鳥上峯に至ったとある。そこで、スサノオは八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を天羽々斬剣（十握剣）で切り殺した。天羽々斬剣は、布都御魂（ふつのみたま）とされ岡山県赤磐市の石上布都魂神社（いそのかみふつみたま）に安置されていたが、崇神天皇の時代に石上（いそのかみ）神宮へ移されたとされている。石上神宮の祭神の布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ）は、布都御魂の霊とされる。石上神宮は物部氏が祭祀し、ヤマト政権の武器庫としての役割も果たしてきた。

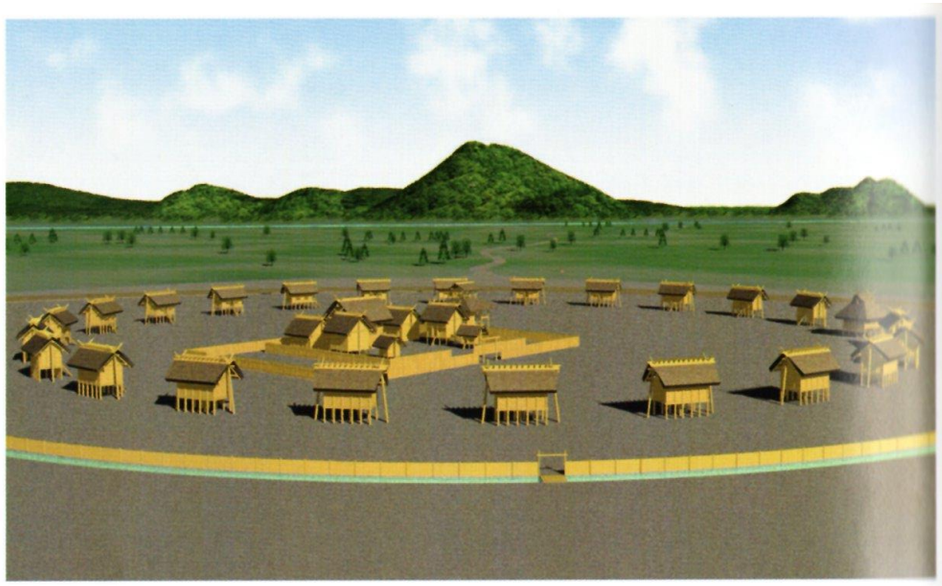
石上神宮（いそのかみ）を祭祀する物部氏の祖神と伝わるニギハヤヒは、2世紀に吉備から大和に東征した。従って、スサノオと共に出雲に行ったイソタケル（石のイソと相通じる）の子孫が吉備で勢力を伸ばし、ニギハヤヒと称し、東征して邪馬台国を建てた。（藤田）

伊西国・伊都国考

伊西（イセ、イソ）国は、洛東江東岸の大邱近辺に存在した。この地域は伽耶（弁韓、任那の前身）の東端に当たり、日本海側の慶州近辺には辰韓の斯蘆国（新羅の前身）があった。紀元前1世紀半ばから始まる新羅王家の系図（『三国史記』「新羅本記」）の第8代までには、南朝鮮の倭人が深く関与していることを伺わせる。すなわち、天津神のイザナギ、スサノオ、ニニギやホアカリ、アメノヒボコを、この系図上に位置づけることが可能である。

紀元前後の頃は、伊西国と斯蘆国とはお互い緊張関係にはなかったように思われる。しかし、濊（高句麗の前身）の南下が激しくなり、斯蘆国が濊族の影響下に置かれると、伊西国は斯蘆国に圧迫され、その王族の一部集団（スサノオらか）が九州北部へ移住し、伊都国（イトはイソの訛り）を建国した。2世紀中頃には、伊都国は奴国を圧倒した。奴国の嫡流の和邇氏は近江・湖西に遷った。伊西国は、伊都国と協働し斯蘆国を圧迫したこともあったが、結局3世紀末に伊西国は斯蘆国によって滅ぼされた。スサノオの息子のニギハヤヒは東征して、邪馬台国を建てた。邪馬台国時代、伊都国は、対馬に起こり伽耶（弁韓）を領した任那と連合（任那・伊都国連合）を組み、南朝鮮と北九州に勢力を広げた。この連合の中心が崇神で、東征して邪馬台国を解体させた。（藤田）

滋賀県守山市伊勢遺跡



伊勢遺跡全景 CG（小谷正澄氏作成）

藤田

スサノオは天津神のなかで実在性が認められうる最古の神格であろう。系譜上、スサノオと大山祇は密接に関連している。『後漢書』に登場する倭国王師升とはスサノオのことと思われ107年に安帝に使いを送った。

紀元元年頃までに、大国主は倭国（南九州と東北を除く）に玉、青銅器、鉄器の経済ネットワークを構築していた。**1世紀始め**スサノオ（新羅本記の第2代南海次次雄にあたる？）とイソタケル（スサノオと同一人あるいはその子）は大伽耶より、まず海神族の奴国と出雲古国の勢力下にある北九州に侵攻して、大山祇神の孫娘、肥前神崎の櫛名田姫（天照大神かも、スサノオの侵攻前は大国主の妻かも）を妻とし、伊都国を建てる。さらに出雲に侵攻して、布都御魂剣（十握剣）で大国主（八岐大蛇）を倒し、出雲古国を崩壊させた。その後、吉備に向うが本拠は伊都国に置く。尚、イソタケルは伊西武で、大伽耶の伊西（イソ）国の勇者か？（藤田）

五十猛神（イソタケル）は、日本神話に登場する神。「イタケル」とも読まれる。『日本書紀』『先代旧事本紀』に登場する。『古事記』に登場する大屋毘古神（オホヤビコ）と同一神とされる。射楯神（いたてのかみ）とも呼ばれる。須佐之男命（スサノオ）の子で、オオヤツヒメとツマツヒメは妹神。（Wikipedia抜粋）
また、イソタケルはニギハヤヒであるとの説がある。

【五十猛命】いたける-の-みこと
「日本書紀」の一書に見える神。素戔嗚尊(すさのおのみこと)の子。父とともに新羅(しらぎ)に渡ったが、のち、樹種を持って出雲に移住し、全国に植林した。和歌山市伊太祈曾(いだきそ)の伊太祁曾神社の祭神。大屋毘古命(おおやびこのみこと)と同神ともいう。（コトバンク）

スサノオ－Wikipedia抜粋

スサノオ（スサノヲ、スサノオノミコト）は、『日本書紀』では素戔男尊、素戔嗚尊等、『古事記』では建速須佐之男命（たけはやすさのおのみこと）、須佐乃袁尊と表す。『古事記』の記述によれば、神産みにおいて伊弉諾尊（伊邪那岐命・いざなぎ）が黄泉の国から帰還し、日向の橘の小戸の阿波岐原で禊を行った際、鼻を濯いだ時に産まれたとする。『日本書紀』では伊弉諾尊と伊弉冉尊（伊邪那美命・いざなみ）の間に産まれた三貴子の末子に当たる。三貴神（三貴子）のうち天照大神は高天原であるが、月夜見尊は滄海原（あおのうなばら）または夜を、素戔嗚尊には夜の食国（よるのおすくに）または海原を治めるように言われた。

『古事記』によれば、建速須佐之男命はそれを断り、母神伊邪那美のいる根之堅洲国に行きたいと願い、伊邪那岐の怒りを買って追放されてしまう。そこで母の故地、出雲と伯耆の境近辺の根の国へ向う前に姉の天照大神に別れの挨拶をしようと高天原へ上るが、天照大神は弟が攻め入って来たのではと思い武装して応対し、二柱は疑いをはっきり究明するために誓約（うけひ）を行う。我の潔白が誓約によって証明されたとして高天原に滞在する建速須佐之男命だったが、滞在できることになると次々と粗暴を行い、天照大神はかしこみて天の岩屋に隠れてしまった。そのため、彼は高天原を追放された（神逐）。

出雲の鳥髪山（現在の船通山）へ降った建速須佐之男命は、その地を荒らしていた巨大な怪物八岐大蛇（八俣遠呂智）への生贄にされそうになっていた美しい少女櫛名田比売（奇稲田姫・くしなだひめ）と出会う。建速須佐之男命は、櫛名田比売の姿形を歯の多い櫛に変えて髪に挿し、八俣遠呂智を退治する。そして八俣遠呂智の尾から出てきた草那芸之大刀（くさなぎのたち、紀・草薙剣）を天照御大神に献上し、それが古代天皇の権威たる三種の神器の一つとなる（現在は、愛知県名古屋市の熱田神宮の御神体となっている）。その後、櫛から元に戻した櫛名田比売を妻として、出雲の根之堅洲国にある須賀（すが）の地（中国・山陰地方にある島根県安来市）へ行きそこに留まった。そこで、「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠に 八重垣作る その八重垣を」と詠んだ。これは日本初の和歌とされる。また、ここから「八雲」は出雲を象徴する言葉ともなった。その須賀の地で二人は大国主命などをもうけた。（『日本書紀』では大国主を大己貴神（おおあなむちのかみ）と称する。）『古事記』では大国主命は彼の6代後の子孫としている。

『日本書紀』における八岐大蛇の記述がある一書第4では、天から追放された素戔嗚尊は、新羅の曽尸茂梨（そしもり）に降り、この地吾居ること欲さず「乃興言曰 此地吾不欲居」と言い息子の五十猛神（いそたける）と共に土船で東に渡り出雲国斐伊川上の鳥上の峰へ到った後、八岐大蛇を退治した。（なお出雲の伝説ではスサノオらの上陸地点は出雲国に近い石見国・五十猛の海岸であるといわれ、ここから出雲国へと向かったとされている。）また続く一書第5では、木がないと子が困るだろうと言い、体毛を抜いて木に変え、種類ごとに用途を定め、息子の五十猛命 、娘の大屋津姫命（おおやつひめ）、枕津姫命（つまつひめ） に命じて全国に植えさせたという。大国主の神話において根の国の須佐之男命の元にやってきた葦原色許男神（あしはらしこを、後の大国主命）は、須佐之男命の娘である須世理比売（すせりひめ）と互いに一目惚れするが、須佐之男命は葦原色許男神に様々な試練を与える。葦原色許男神は須世理比売の助けを得ながらそれらを克服したので、須佐之男命は葦原色許男神に、須世理比売を妻とすることを認め大国主という名を贈った。

『記紀』で大国主はスサノオの子あるいは6世孫とされるが、大国主はスサノオが渡来する幾世紀も前から出雲古国の王として君臨していた。従って、大国主がスサノオの子孫ということはあり得ない。（藤田）

須佐之男命。歌川国芳作

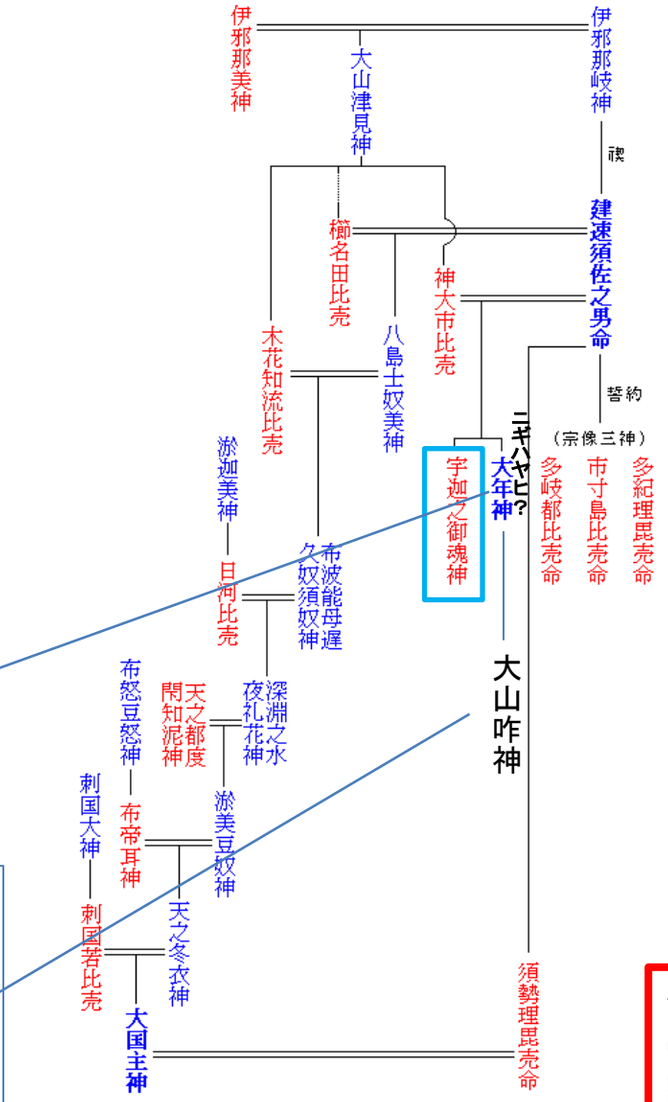
藤田

スサノオ（つづき）

スサノオは多彩な性格を有している。母の国へ行きたいと言って泣き叫ぶ子供のような一面があるかと思えば、高天原では凶暴な一面を見せる。出雲へ降りると一転して英雄的な性格となる。八岐大蛇退治の英雄譚は優秀な産鉄民を平定した象徴と見る説も根強く、草薙剣の取得はその象徴であるとの解釈も多い。しかし、日本初の和歌を詠んだり、木の用途を定めたりなど文化英雄的な側面もある。これは多数の伝承をまとめて一つの話にしたためとする説もあるが、彼が成長するにつれて見せる側面であるとする説もある。

『記紀』神話においては出雲の神の祖神として書かれているスサノオであるが、『出雲国風土記』では彼はあまり登場せず、意宇郡安来郷や飯石郡（いいしのこおり）須佐郷などの地名制定や御子神たちの説話が書かれており、八岐大蛇退治の説話は記載されていない。そのため元々は別の地方の神ではないかとする説もあり、その地として、以下のような説がある。『日本書紀』の一書で八岐大蛇退治が行われたとする備中とする説、『日本書紀』一書第4のまず新羅の曽尸茂梨に天降ってから出雲の鳥上峯に来たとの記述から、新羅の神とする説等。

しかし、基本的には『記紀』、風土記をそれぞれ眺めると出雲との結びつきが強い神といえる。出雲国（現：島根県）東部の奥出雲町にはスサノオが降臨したといわれる鳥髪峰（現：船通山）、それに隣接する安来市は彼が地名をつけたという風土記の記述もある。また、前述の通り八岐大蛇退治は産鉄民の平定を象徴すると見る説があるが、これらの地域はアマテラスへの献上の草那芸の大刀、大国主命への譲渡した生大刀など日本刀の源流とされる神話があり、古代よりたたら製鉄が盛んだった流れから起因する。



左図によると，須佐之男命（素戔嗚尊、スサノオ）と大山津見神（大山祇神、三島神）の系譜は密接に関連している。須佐之男命の二人の妻は大山積見神の娘の櫛名田比売と神大市比売である。スサノオの息子のイソタケルは何れの妻の御子であろうか。イソタケルはニギハヤヒであり、ニギハヤヒは神大市比売との間の子の大年神であるとの説がある。スサノオとイソタケル(ニギハヤヒ）は、紀元前後に出雲で布都御魂剣により八岐大蛇（大国主か）を倒した。ニギハヤヒは布都御魂剣を吉備に持ち込み、吉備(筑前でも）で力を蓄えた。2世紀半ばニギハヤヒの子孫はその息子の天香語山と共に布都御魂剣を掲げてアメノヒボコと大山祇神の後裔を伴い河内へと東征し、大和に入り邪馬台国を建てた。ニギハヤヒは物部氏の祖神であり、布都御魂剣は物部氏の総氏神である大和の石上神宮に祀られている。ニギハヤヒは大山祇神の孫に当たり、物部氏と大山祇神との浅からぬ関係を窺い知ることができる。ちなみに、伊予の大山祇神神社の神主の越智氏は物部の一族である。(藤田）

大年神（おおとしのかみ）－Wikipedia抜粋

スサノオと神大市比売（かむおおいちひめ・大山津見神の娘）の間に生まれたのが大年神である。毎年正月に各家にやってくる来方神であり、「年」は稲の実りのことで、穀物神であり、また、家を守ってくれる祖先の霊、祖霊として祀られることもある。

大年神は、ニギハヤヒと同人格とされることがある。（藤田）

大山咋神－Wikipedia抜粋

大年神とアメノチカルミヅヒメの間の子である。名前の「くい（くひ）」は杭のことで、大山に杭を打つ神、すなわち大きな山の所有者の神を意味し、山の地主神であり、また、農耕（治水）を司る神とされる。『古事記』では、近江国の日枝山（ひえのやま、後の比叡山）および葛野（かづの、葛野郡、現京都市）の松尾に鎮座し、鳴鏑を神体とすると記されている。なお、大山咋神は里山に鎮まるとされることから、『古事記』の「日枝山」とは、比叡山全体というより、里山である八王子山（比叡山の一部）を指すとする説もある。

「日枝山」には日吉大社が、松尾には松尾大社があり、ともに大山咋神を祀っている。日枝山と松尾については、共通の祭神を祀る社の存在だけではなく、八王子山と松尾山の両方に巨大な磐座と、古墳群（日吉社東本宮古墳群、松尾山古墳群）が存在し、ともに漢人系氏族（三津首（みつのおびと）氏、秦氏）に祀られるなど、共通点が多いことが指摘されている。特に、古墳群については、それらの古墳の埋葬者の勢力範囲と、大山咋神の神域とされる範囲の一致する可能性が指摘されている。 比叡山に天台宗の延暦寺ができてからは、最澄によって、天台宗および延暦寺の結界を守る守護神ともされた。この理由として、最澄が、大山咋神を祀る漢人系氏族である「三津首氏」の出身であり、大山咋神の神域についての深い知識を有していたことが指摘されている。

大山咋神の別名山王（さんのう）は中国天台山の鎮守「地主山王元弼真君」に倣ったものである。なお、比叡山には、本来、山の全域において、大山咋神の他にも多数の神が祀られており、最澄が延暦寺の守護神として認識したのは、大山咋神だけでなく、その他の「諸山王」を含めた、比叡山の神々全体のことであったとも指摘されている。

天台宗が興した神道の一派を山王神道と言い、後に天海が山王一実神道と改めた。太田道灌が江戸城の守護神として川越日吉社から大山咋神を勧請して日枝神社を建てた。江戸時代には徳川家の氏神とされ、明治以降は皇居の鎮守とされている。

伽耶（大伽耶の伊西国）からの渡来者のスサノオによって退治された八岐大蛇（ヤマタノオロチ）は出雲の大国主（大穴持）ではないか。大穴持が敗退し出雲古国は滅びた。このヤマタノオロチ伝説は出雲の須佐郷での出来事に矮小化されているが、この伝説は紀元前後、スサノオによって出雲勢力が北九州および西出雲から駆逐されたことを意味するのではないか。尚、大山祇神の孫娘である櫛名田姫は元々神崎の土着の姫巫女で、スサノオは大山祇神と協働して北九州から出雲勢力の駆逐するため、妻にしたのではないか。

さらに、高天原からアメノホヒが派遣され、スサノオと協力して出雲王朝が建てられた（藤田）

藤田

スサノオ（素戔嗚）はユダヤ系か

素盞嗚神社と蘇民将来

素盞嗚神社（すさのおじんじゃ）は、福山市新市町にある神社。祇園信仰、祇園祭発祥の式内社で、備後国一宮を称する。この神社は蘇民将来伝承の発祥地とも見なされている。

蘇民将来：伝説に因む災厄払いの民間信仰、茅（ち）の輪くぐりは、備後国風土記逸文にある「疫隈の国つ社」（素盞嗚神社の古名）を祭る由来が起源とされる。荒ぶる神と二人の兄弟をめぐる逸話である。

＜昔、北の海に坐しし武塔の神。南の海なる神の女子を結婚に坐すに日暮れぬ。その所に蘇民将来、二人ありき。＞

求婚の旅に出た武塔神がある日暮れ、蘇民将来という貧しい兄と、裕福な弟に出会った。一夜の宿を請うと、弟は金を惜しんで拒み、兄は粗末な家で精いっぱいもてなした。年月を経て、武塔神が8人の御子神を連れて帰る際、兄を訪れてお礼をしたいと申し出た。

「汝が子孫其が家に在りや」「己がお女子と婦と侍る」「茅の輪を以ちて腰の上に着けしめよ」

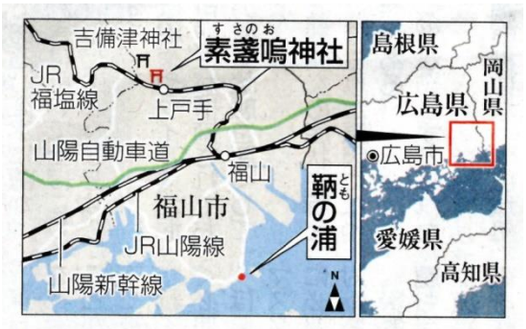
逸文は話の顛末をこう記す。＜即夜に蘇民の女子一人を置きて、皆悉く殺し滅してき＞「将来に民が蘇るとの名の通り、娘一人だけが助かり、子孫を残した。残酷なようですが、不条理に命を奪われる疫病観も背景にあるのでしょう。」 日本地名研究所所長の関和彦氏はそう話す。

武塔神は、皆を滅ぼした直後、「吾は速須佐雄の神ぞ」と正体を明かす。そして、「後の世に疫気あらば、汝、蘇民将来の子孫と云いて、茅の輪を以ちて腰に着けて在る人は、免れなむ」

「出雲から備後に進出した　素盞嗚集団を、ある一族は拒んで滅ぼされ、別の一族は受け入れて栄えた。そんな史実があったのでしょう」吉備津神社禰宜で、広島民俗学会理事の尾多賀氏はいう。

素盞嗚神社付近は、瀬戸内海が入り込んで江隅と呼ばれる土地があった。同神社は蘇民将来の伝承の地として、茅の輪発祥の地を名乗る。この伝承は海上交通の要衝だった福山市南部の鞆の浦などを経て全国に広がった。「茅の輪をつければ誰でも、蘇民将来の子孫を名乗れるという寛容性も、伝承が多くの人々に受け入れられた要因でしょう。」と関氏は言う。

（産経新聞2018.7.25　地方に息づく　神と王の物語・神話）（Wikipedia抜粋）



（民家につるされている茅（かや）の輪、産経新聞）

スサノオの出雲侵攻と吉備進出

石見から吉備に入るルートは、次のように考えられる。日本海から江の川を遡り三次に入る。三好から峠を越え芦田川上流域から芦田川を下り備後の新市に入る。以後、旧山陽道を東進し、備中や備前に達する。このルートには確かにスサノオの痕跡が認められる。（スサノオとイソタケルは新羅から追放され、石見に上陸したとの説がある。三次には須佐神社（祭神：須佐之男命）と武塔神社（祭神：武塔天神）が鎮座する。） また、備後・新市のスサノオを祭る古社の素戔嗚神社があり、全国の素戔嗚神社の元社と考えられている。スサノオ一族は筑前を本拠地としていたと思われ、筑前から海路日本海沿いに石見に入り、江の川を遡り、三次経由で芦田川を下って新市に入り、古山陽道を辿り備中・備前に向かう。本ルートは**スサノオルート**と呼べるものだと思う。四隅突出型墳丘墓の発祥の地の三次からスサノオ軍団の別動隊（スサノオ配下の三次の豪族、アメノヒボコと関連か）が、出雲に上陸したスサノオの一団と連動して揖斐川流域に攻め込み出雲古国を滅ぼしたとも考えらる。この仮説、今後の検証を要すると思うが、魅力的で充分蓋然性がある。

（追記）スサノオルートで三次に進出していたのはアメノヒボコではないか。アメノヒボコは大型墳丘墓を造る技術を三次に持ち込み四隅突出型墳丘墓を造営したか。アメノヒボコはスサノオと協働して出雲に侵攻して出雲古国を滅ぼし、さらに備後・新市経由で吉備の総社に進出し、楯築遺跡などの大型弥生墳丘墓を造営したか。総社にはアメノヒボコの妻・阿加流比売（アカルヒメ）を御祭神とする姫社（ヒメコソ）神社があり、吉備の秦氏が崇拝していた。（藤田）

蘇民将来の起源はユダヤ教の過越祭（すぎこしのまつり）か？

過越祭：ユダヤ教の祭日の一つ。英語でPassover。ユダヤ暦ニサン月14日の夜から1週間。奴隷状態にあったユダヤ民族のエジプト脱出を記念する。神がエジプト中の初子を殺したとき，仔羊の血を門口に塗ったユダヤ人の家だけは過ぎ越したという故事にちなむ。初日に〈セデル〉という正餐をとる。（ことばんく）

蘇民将来の伝説はスサノオ集団の侵略性を暗示するか。（藤田）

茅の輪くぐりとは、参道の鳥居などの結界内に、茅（ちがや）という草で編んだ直径数メートルの輪を作り、これをくぐることで心身を清めて災厄を祓い、無病息災を祈願するというものです。日本神話のスサノオノミコトに由来するといわれ、唱え詞を唱えながら8の字に3度くぐり抜けます。

茅の輪くぐりは、毎年6月30日に各地の神社で執り行われる「夏越の祓（なごしのはらえ）」で行われる儀式であり、茅の輪くぐりが夏越の祓と同義で呼ばれるほど、日本に定着している風習です。

（Beyond編集部）

藤田

スサノオと八岐大蛇伝説、そして スサノオルート、筑前⇒石見⇒備後

伽耶（大伽耶の伊西国）からの渡来者で天神の素戔嗚命（須佐之男命、スサノオ）がイザナギから始まる皇統譜で最初の実在性が極めて高い人格と思われる。スサノオは大伽耶から筑紫に侵入、さらに出雲に侵攻した。その後スサノオは石見から備後・三次から備後・新市に達したと思われる。

吉備で力をつけたスサノオの後の饒速日（ニギハヤヒ）が率いる物部軍団が、吉備から東征して葛城・大和を制圧し、さらに近江・湖南に向かって北上し大己貴の国「玉牆の内つ国」の都の伊勢遺跡を瓦解させた（倭国大乱）。ニギハヤヒ（孝霊天皇と同人格）は纒向遺跡を都とする邪馬台国を建てた。邪馬台国（孝霊天皇から開化天皇）は西に向かい伊都国・任那連合を勢力下においた。このようにスサノオとニギハヤヒに代表される物部氏が、任那をも含む列島の西部を中心とする邪馬台国を建て、倭国を統合したと云える。

『記紀』の八岐大蛇伝説は、『記紀』神話の根幹をなすものと考えている。出雲の鳥髪山（現在の船通山）へ降ったスサノオは、その地を荒らしていた巨大な怪物、八岐大蛇（ヤマタノオロチ、八俣遠呂智）への生贄にされそうになっていた大山祇神（大山津見神、三島神）の孫娘の櫛名田姫（櫛稲田姫（クシイナダヒメ）、稲田姫（イナダヒメ））と出会う。スサノオは、八俣大蛇（大国主と思われる）を退治する。そして八俣大蛇の尾から出てきた草薙剣（くさなぎのつるぎ）を天照御大神に献上し、それが古代天皇の権威たる三種の神器の一つとなる。（現在、草薙剣は熱田神宮（名古屋市）の御神体となっている。）ちなみに、八岐大蛇を斬殺した布都御魂剣は、ニギハヤヒの東征で掲げられ、葛城・大和を制圧後、物部氏の総氏神の石上神宮に神宝として納められている。

八岐大蛇伝説はスサノオとクシイナダヒメが、民を苦しめる八岐大蛇を退治するというストーリーであるが、私見では、物部の太祖神たるスサノオがクシイナダヒメの父方の大山祇神（三島神）の協力を得て、大国主などの出雲系神々を成敗するというのが八岐大蛇伝説の基本構造であろう。スサノオは大山祇神の娘（神大市姫）や孫娘（櫛名田姫）を妻とすることにより、大山祇神との協力関係を築いた。天孫の瓊瓊杵尊（ニニギ）もまた大山祇神の娘の木花之開耶姫を妻として大山祇神と九州統治で協働した。因みに、スサノオと神大市姫の間の御子が大年神で、大年神がニギハヤヒであるとの説がある。

スサノオは生前、筑前と出雲を行き来していたと思われるが、出雲から吉備にも勢力を伸ばしている。スサノオは石見から江の川を遡り、吉備の一国の備後の三次に達し、三次から芦田川の上流域に入り、芦田川を下っての新市に至る。この古代の道は川の道でスサノオの道とよばれ、瀬戸内海西部を経由せずに筑前から吉備の一国の備後に入るルートで**スサノオルート**とも呼ばれる。このスサノオルートにはスサノオを祀る備後三大祇園、即ち**須佐神社**（三次市甲奴町）、素盞嗚神社（福山市新市町）と沼名前神社（福山市鞆の浦）がある。

素盞嗚神社（主祭神：素盞嗚尊、配神：稲田姫命と八王子（やはしらのみこ）、素盞嗚尊の8人の王子）が鎮座する。素盞嗚神社は祇園信仰、祇園祭発祥の式内社で、備後国一宮を称する。この神社は蘇民将来伝承の発祥地とも見なされている。また、素盞嗚神社から八坂（やさか）神社に素戔嗚尊（牛頭天王：武塔天神）が勧請された。八坂神社は全国にある八坂神社や素戔嗚尊を祭神とする関連神社（約2,300社）の総本社であり、通称として祇園さんとも呼ばれる。祭神は素盞嗚神社と同じく、主祭神を素戔嗚尊とし、東御座に櫛稲田姫命、西御座に八柱御子神（素戔嗚尊の8人の子供）を配する。尚、西御座に蛇毒気神（だどくけのかみ）が祭られていて、八岐大蛇が変化したものと考えられている。

（藤田泰太郎）

素盞嗚神社

拝殿
（日本のゆかしい神社旅、Net）

大鳥居（Wikipedia）（境内東端、石造り。江戸時代中期元禄時代の建立。）

三次市甲奴町小童（ヒチ）には隣接して須佐神社（祭神：須佐之男命）と武塔神社（祭神：武塔天神）が鎮座する。

須佐神社　（備後三祇園のひとつ、小童（ひち）の祇園さん）
（ameblo.jp)

武塔神社（ameblo.jp)

『備後国風土記逸文』にある「吾は速須佐雄の神なり、後の世に疫気あらば、汝、蘇民将来の子孫と云ひて、茅の輪を以ちて腰に着けたる人は免れなむ」の記述から、武塔神は須佐之男命と同一神であることが分かる。（前スライドも参照） したがって、小童の須佐神社と武塔神社の祭神は同一神で、ともに疫病除けの神話を基に信仰を集めてきたと言える。尚、武塔神とは牛頭天王 の別名とされる。

八坂神社（やさかじんじゃ）

京都府京都市東山区祇園町にある神社。旧社格は官幣大社。

全国にある八坂神社や素戔嗚尊を祭神とする関連神社（約2,300社）の総本社である。通称として祇園さんとも呼ばれる。7月の祇園祭（祇園会）で知られる。

元の祭神であった牛頭天王が祇園精舎の守護神であるとされていたことから、元々「祇園神社」「祇園社」「祇園感神院」などと呼ばれていたものが、明治元年（1868年）の神仏分離令により「八坂神社」と改められた。

祭神

現在の祭神は以下の通り。
主祭神中御座：素戔嗚尊（すさのおのみこと）
東御座：櫛稲田姫命（くし（い）なだひめのみこと）
西御座：八柱御子神（やはしらのみこがみ）- 素戔嗚尊の8人の子供（八島篠見神、五十猛神、大屋比売神、抓津比売神、大年神、宇迦之御魂神、大屋毘古神、須勢理毘売命）の総称
配神（東御座に同座）神大市比売命、佐美良比売命 - いずれも素戔嗚尊の妻

西御座に稲田宮主須賀之八耳神、東御座には社伝に明確な記述が無い蛇毒気神（だどくけのかみ）が祭られている。この神は沙渇羅（さから）龍王の娘で今御前(第二婦人のこと)と呼ばれる。または、八岐大蛇が変化したものとも考えられている。
（八坂神社−Wikipedia抜粋）

牛頭天王とスサノオとの習合・朝鮮半島との関係

新羅に牛頭山という山があり、熱病に効果のある栴檀を産したところから、この山の名を冠した神と同一視する説がある。

また『日本書紀』巻第一神代上第八段一書に、スサノオ（素戔嗚尊）が新羅の曽尸茂利/曽尸茂梨（ソシモリ）という地に高天原から追放されて降臨し、「ここにはいたくはない。」と言い残し、すぐに出雲の国に渡ったとの記述があるが、この伝承に対して、「ソシモリ」は「ソシマリ」「ソモリ」ともいう朝鮮語で、牛頭または牛首を意味し、朝鮮半島の各地に牛頭山という名の山や牛頭の名の付いた島がある由と関連するという説もある。

また、ソシモリのソは蘇民のソで、蘇民は「ソの民」であるとして、蘇民将来説話と『日本書紀』のスサノオのソシモリ降臨と関連づける説もある。
（Wikipedia抜粋）

スサノオの別名はヘブライ語の「ゴズ」でありイザヤの子と同名で「略奪」を意味し、これに漢字の「牛頭」が当てられたとされる。また、蘇民将来の起源はユダヤ教の過越祭（すぎこしのまつり）と思われる。故に、スサノオはユダヤ系と見なされる。（藤田）

本殿（重要文化財）（光一郎撮影）

石鳥居（重要文化財）

南楼門（光一郎撮影）

西楼門（光一郎撮影）

曽尸茂梨ー高霊説

韓国慶尚北道高霊の郷土史研究家金道允氏は、高霊にはその昔「ソシモリ山」と呼ばれていた山が実在していたという。その山は高霊の現加耶山である。加耶山とは、仏教が伝わって以降の呼び名で、古代には「牛の頭の山」と呼んでいたそうだ。「牛の頭」は韓国語のよみで「ソシモリ」。その山が「牛の頭の山」と呼ばれたのは、加耶山麓の白雲里という村の方から見た時、山全体が大きな牛が座っているように見えるからだという。さらに白雲里には「高天原」という地名まである。
（曽尸茂梨(ソシモリ)考、Net）

主峰・上王峰（サンワンボン）

伽耶山（伽倻山、カヤさん 가야산）は、大韓民国南部にある山並の総称で、慶尚北道の南西部（高霊郡・星州郡）と慶尚南道の北西部（陜川郡）にまたがり、小白山脈の一部をなす。主峰の上王峰（サンワンボン／상왕봉）は標高1,430mであるが、最高峰は1,433mの七仏峰である。周囲には標高1,000m級の山が屏風のように連なる。
(Wikipedia抜粋)

櫛名田姫（稲田姫）　楠田宮（佐賀県神崎町）から楠田神社（博多）へ遷った

櫛名田姫は大山祇命の娘（あるいは孫娘）で、もともと神崎の土着の姫巫女である。
スサノオの北九州から大国主勢力の駆逐に伴って、征服者として妻にしたか！

櫛田神社

櫛田神社

櫛田神社は、古くより博多の氏神・総鎮守として信仰を集めている神社である。7月の博多祇園山笠や10月の博多おくんちなどの祭事をおこなう。5月の博多松囃子（博多どんたく）は厳密には櫛田神社の祭事ではないものの、松囃子一行は櫛田神社から出発するしきたりになっている。旧社格は県社。地元の博多の人々からは「お櫛田さん」と愛称で呼ばれている。

祭神は大幡大神（櫛田大神）、天照皇大神、素盞嗚大神（祇園大神）の三神で、正殿に大幡主神、左殿に天照大神、右殿に素盞嗚神が祀られている。当社以外にも日本全国にいくつかの櫛田神社があるが、それらが櫛名田姫を主祭神とする神社であるのに対し、当社では櫛名田姫は祀られていない。ただし、元々は櫛名田姫を祀る神社であったとする説もある。

大幡大神（大幡主命）は伊勢国松坂の櫛田神社から勧請した神とされている。別名を大若子命といい、天御中主神の19世の子孫で、北陸地方で怪物を退治したとされる。なお、大幡神を主祭神とする神社は佐渡市にあり、櫛名田姫を主祭神とする神社5社のうち3社も北陸地方にある。

社伝では、天平宝字元年（757年）、松阪にあった櫛田神社を勧請したのに始まるとされ、松坂の櫛田神社の祭神の大幡主神が天照大神に仕える一族の神であったことから、天照大神も一緒に勧請されたと伝えられる。また、平安時代末期、平清盛が所領の肥前国神埼の櫛田神社（櫛田宮）を、日宋貿易の拠点とした博多に勧請したものであるとする説があり、櫛田神社の宮司らが編纂し昭和40年（1965年）に文部省（当時）に提出した『博多山笠記録』や昭和54年（1979年）に福岡市が発行した『福岡の歴史』はこの説を取り上げている。（Wikipedia抜粋）

伊都国の平原遺跡 1号墓は女王墓と見なされ、その副葬品は大型内行花文鏡。この鏡は八咫鏡と同じサイズと思われる。伊都国にごく近い櫛田神社はもともとは櫛名田姫を祭る神社であったとも思われる。伊都国の櫛名田姫はもともとの天照大神であろうと考えることもある。（藤田）

博多祇園山笠

櫛田宮（櫛田宮のあった「神崎御荘」は、現在の神埼市・吉野ヶ里町のほぼ全部と近隣町を含む皇室領の大荘園）

櫛田宮（佐賀県神埼町）は、櫛田三神、櫛稲田（櫛名田）姫命（櫛田大明神）、須佐之男命、と日本武命を祭る。神社の創建は、神社から北東方向約2kmに位置する吉野ヶ里遺跡の隆盛な頃と同時代の弥生時代後期にあたる。境内の宝庫にあった古文書には「櫛田大明神と申し奉るは伊勢大神宮の大娘（ひめ）豊次（とよつぐ）比売命、是なり」と書かれている。概要は「天照大神の代に草創されたのが、一時期途絶え、櫛田荒神となってしまったのを、景行天王が祀ってやわらぎ、櫛田大明神として神埼の庄を敷地として祀られた」という。

神社裏一帯を櫛山と称して、古代神祭の旧跡と伝える。かたわらに石造の酒甕と伝えられるものもあり、祭神が八岐大蛇（ヤマタノオロチ）の災厄をのがれ給うた神話の証として、生児のヒハレ（初宮）詣りの際、その生毛を納めて生育を祈る風習がある。博多の祇園山笠が国の民俗資料として記録作成の指定を受け、古記録の調査と写真撮影を要望された。博多の方は古記録・資料に乏しいため神埼の記録をもって補足することになった。結局3回来神して記録整い、翌40年3月文部省に提出された。その「博多山笠記録」にも、神埼が本家で博多は分家の説を紹介してある。

元寇の際、博多へ神剣を移して祈願した記録が「櫛田大明神縁起」にある。蒙古勢襲来の時　櫛田の御託宣に曰く「われ異国征罰の為に博多の津に向かう。我が剣を博多の櫛田に送り奉るべし」と云々。仍てこれを送り奉る。ここに博多の鍛冶岩次良霊夢あるによりて、三日精進して御剣をとぎ奉る。これを箱におさめ白革を以て三所ゆい封をなして神殿に納め奉り畢ぬ。即ち蒙古合戦の最中筑前国志摩郡岐志の海上に、数千万の蛇体浮かび給う。万人の見知其の隠れなし。また、三ヶ月の後、末社櫛田の社壇に疵を蒙る蛇体多く現じ給う。即ち御託宣に曰く「各疵を蒙ると言えども、蒙古既に降伏して帰り来る」と云々。仍て神埼本社の神仁等数百人、かの岐志の浦に発向して迎え奉り畢ぬ。その後更に十三年を経て、かの御剣を本社に遷入れ奉らん為、神埼の神仁いむ田太良以下数百人、博多の櫛田に参向して件の箱の封を解きし処に、蛇体御剣を巻つめて頭をつばの本に打ちかけて、殆ど倶利伽藍明王の如し。見聞の諸人渇仰肝に銘じ、随喜の涙袂をしぼると云々。
（櫛田宮ホームページ、Net）

スサノオによって退治された八岐大蛇（ヤマタノオロチ）は出雲の大国主ではないか。このヤマタノオロチ伝説は出雲の須佐郷での出来事に矮小化されているが、本来この伝説は当時（紀元前後か）は出雲の勢力が北九州に及び、伽耶（大伽耶の伊西国）からの渡来者のスサノオによって出雲勢力が北九州と西出雲から駆逐されたことを意味するのではないか。櫛名田姫はもともと神崎の土着の姫巫女で、スサノオの北九州から出雲勢力の駆逐に伴って、征服者として妻にしたのではないか。それに伴いこの櫛名田姫は神崎の櫛田宮から博多の櫛田神社に遷ったのではないか。

博多を含む伊都国の櫛田神社の祭神はかっては櫛名田姫であり、スサノオと誓約した天照大神ではないか。伊都国の平原遺跡 1号墓は女王墓と見なされ、その副葬品は大型内行花文鏡。この鏡は八咫鏡と同じサイズと思われる。またスサノオは伊都国王と思われる師升（スイショウ）と音韻的に通じるところがある。スサノオを1世紀半ばに降臨したニニギの祖父とすると北九州侵攻は紀元前後のことと思われる。後漢書の「安帝の永初元年（107年）、倭国王帥升等が生口160人を献じ、謁見を請うた。」との記事にある西暦107年とは一世紀近い違いがある。
（藤田）

楠田宮（Wikipedia抜粋）

『記紀』の八岐大蛇伝説は、『記紀』神話の根幹をなすものと考える。この伝説は素戔嗚と稲田姫が、民を苦しめる八岐大蛇を退治するというストーリーですが、私は物部の太祖神たるスサノオが稲田姫の父方の大山祇神（三島神）の協力を得て、出雲系の神々（大国主など）を成敗するというのが基本構造だと思う。（藤田）

熊野三山　出雲の製鉄民が紀伊に移住したか

熊野とは？　溶けた鉄を湯という。金屋（鍛冶屋か）は湯屋（ゆや）となり、ゆやは熊野とも書かれる。

熊野の地名が最初に現れるのは『日本書紀』の神代記で、神産みの段の第五の一書に、伊弉冉尊が死んだとき熊野の有馬村（三重県熊野市有馬の花窟神社）というところに葬られたという記述がある。

熊野三山（くまのさんざん）は、熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の3つの神社の総称。熊野三山の名前からもわかる通り、仏教的要素が強い。日本全国に約3千社ある熊野神社の総本社である。熊野権現（くまのごんげん、または熊野神〈くまののかみ〉、熊野大神〈くまののおおかみ〉とも）は、熊野三山に祀られる神であり、本地垂迹思想のもとで権現と呼ばれるようになった。

熊野三山・熊野本宮大社の鳥居の横に掲げられた八咫烏の旗
（Wikipedia抜粋）

熊野三山・熊野那智大社

熊野三山・熊野那智大社

熊野権現（熊野大神）：素戔嗚　　八咫烏

熊野三山の主祭神は次の通りであるが、相互に祭神を勧請しあい、三山では三神を一緒に祀っている。

熊野本宮大社の主祭神の家都御子神（けつみこのかみ）または家都美御子神（けつみこのかみ）は素戔嗚で阿弥陀如来、新宮の熊野速玉大社の熊野速玉男神（くまのはやたまおのかみ）または速玉神（はやたまのかみ）は伊邪那岐で尊薬師如来、熊野那智大社の熊野牟須美神（くまのむすみのかみ）または夫須美神（ふすみのかみ）は伊邪那美で千手観音とされる。熊野本宮大社・熊野速玉大社では三神の他九神（熊野十二所権現）が祀られている。尚、熊野那智大社では「瀧宮」（祭神 大己貴命（飛瀧権現、本地仏 千手観音）を第一殿とし、熊野十二所権現とあわせて熊野十三所権現となっている。
（Wikipedia抜粋）

出雲国一宮の熊野大社の主祭神（熊野大神）は素戔嗚であるが、もとは大国主と考える。熊野三山の三神の事実上の主祭神も素戔嗚と思われる。とはいえ、熊野那智大社では三神の上に大己貴命（大国主の別名）をもってきている。八咫烏は熊野大神（素戔嗚尊）に仕える存在とされる。
（藤田）

八咫烏は、日本神話において、神武天皇を大和の橿原まで案内したとされており、導きの神として信仰されている。また、太陽の化身ともされる。
熊野三山においてカラスはミサキ神（死霊が鎮められたもの。神使）とされており、八咫烏は熊野大神（素戔嗚尊）に仕える存在として信仰されており、熊野のシンボルともされる。近世以前によく起請文として使われていた熊野の牛玉宝印（ごおうほういん）にはカラスが描かれている。咫（あた）は長さの単位で、親指と中指を広げた長さ（約18センチメートル）のことであり、八咫は144cmとなるが、ここでいう八咫は単に「大きい」という意味である。なお、八咫烏は『日本書紀』や『古事記』に登場するが、『日本書紀』では、同じ神武東征の場面で、金鵄（金色のトビ）が長髄彦との戦いで神武天皇を助けたともされるため、八咫烏と金鵄がしばしば同一視ないし混同される。
（Wikipedia抜粋）
『新撰姓氏録』によれば、八咫烏は賀茂建角身命とされ神魂命（かみむすびのみこと）の孫とある。（藤田）

熊野本宮大社 八咫烏の像

水稲の伝搬と八咫烏の伝説

水稲が中国から伝搬してきたことを物語っているとみられる伝説が、『記紀』神話の神武天皇にみえる八咫烏（三本の足の長さが8寸の鳥）で、中国でいう三足烏（三本の足の黒い烏）にあたる。華南の水田稲作民では、三足烏は太陽神にあたり、豊作と大漁をもとらすものと考えられている。
（近江にいた弥生の大倭王、千城 ）

スサノオ（素戔嗚、須佐之男）

『旧約聖書』と『記紀』のアナロジー、カイン追放とスサノオの神逐
―シュメールとユダヤの影―

『旧約聖書』という呼称は旧約の成就としての『新約聖書』を持つキリスト教の立場からのもので、ユダヤ教ではこれが唯一の「聖書」であり、ヘブライ語で記載されている。『旧約聖書』（創世記）の天地創造と『古事記』と『日本書紀』『記紀』（神代編）の天地開闢、さらに両書の「闇と光の概念」には相通じるところがある。また、『旧約聖書』（創世記）によれば、カインとアベルはアダムとイヴの失楽園後に生まれた兄弟であるが、カインはヤハウェへの供物のことでアベルを憎み殺害する。カインはこの罪により、エデンの東にあるノド（「流離い」の意）の地に追放された。ヤハウェは、アベルの代わりにセト（セツ）を授けた。一方『記紀』（神代編）によれば、スサノオはイザナギとイザナミの間に産まれた三貴子（天照大神、ツキヨミ、スサノオ）の末子に当たる。天照大神には高天原を、ツキヨミには夜を、スサノオには海原を治めるようにとの達しがあった。スサノオはそれを断り、母神イザナミのいる根之堅洲国に行きたいと願い、イザナギの怒りを買って追放されてしまう。そこで母の故地、出雲と伯耆の境近辺の根の国へ向う前に姉の天照大神に別れの挨拶をしようと高天原へ上るが、天照大神は弟が攻め入って来たのではと思い武装して応対し、二柱は疑いをはっきり究明するために誓約（うけひ）を行う。我の潔白が誓約によって証明されたとして高天原に滞在するスサノオだったが、滞在できることになると次々と農耕の慣行を破る天津罪を犯し、天照大神はかしこみて天の岩屋に隠れてしまった。そのため、スサノオは天津高天原を追放された、これを（神逐）という。

『旧約聖書』（創世記）にはシュメール神話に基づいていると思われる所が多々ある。創世記の天地創造やカインの追放にもシュメール神話の影響がみられる。カインの追放に続く「ノアの箱舟」とほぼ同じ内容の説話がシュメールの『ギルガメシュ叙事詩』に語られる。5800年前頃（縄文時代前期）、シュメール人がメソポタミアにやって来ると、メソポタミア文明の一大ブレークとも言うべき現象が起きた。天文と暦を始め、美術、建築、宗教は言うに及ばず、社会機構、日常の細かな慣習から楔形文字の発明に至るまで、シュメール人の成せる画期的偉業であった。しかしながら、4380年前にシュメール都市国家にセム族が侵入。セム族がアッカド建国。4200年前にはシュメールが再び奪い返すが、4000年前にはセム族がバビロニア建国。メソポタミアのシュメール人は壊滅した。敗北したシュメール人は、海洋民族になり世界各地に拡散していったといわれる。シュメール文化が滅びたのは地球の気候の寒冷化が始まる縄文時代後期にあたる。また、フェニキアがインド洋に進出したのは気候の寒冷化が本格化する3000年前の縄文時代晩期である。海洋民族となったシュメール人や海洋民族のフェニキア人が日本に達していたのとの痕跡は、太平洋岸の各地に残る楔形文字の痕跡を残すフェニキアの岩刻文字ペテログラフなどにみられる。シュメール語は日本語と同じ助詞を使う膠着語である。ちなみに、『古事記』は部分的にシュメール語で読めると言う。また、天皇を「スメラ」と言う。この語は、古代バビロニアの「Sumer（スメル）」と似ているだけでなく、シュメールと発音されていました。ちなみに「スメラギ」はSumerの複数形である。さらに、「ミコト」や「ミカド」は「Migut（ミグ）」が訛ったもので「天降る（天孫降臨か）開拓者」の意で「神」を意味する。神道の精神的基盤は縄文時代の西日本と江南との文化交流により形成されたと思われる。日本語の基となった古日本語は縄文時代後期末に形成されたと言われる。かくて、シュメール語が古日本語の形成に影響を及ぼした可能性が充分にある。

『記紀』の神代の記述は、ユダヤの『旧約聖書』（創世記）を想起させるに充分な類似性がある。南朝鮮にあるとされる高天原を追放された倭人のスサノオは、北九州に侵攻して櫛名田姫を妻にし、さらに出雲を侵し大国主のことと思われる八岐大蛇を十握剣（布都御魂剣）で殺した。このスサノオにはユダヤ人の血を混ざっていると思われることについて次に述べる。

新羅の前身とされる辰韓と古代中国との関係を記す、『後漢書』辰韓伝、『三国志』魏書辰韓伝、『晋書』辰韓伝、『北史』新羅伝によると、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人あるいは秦の滅亡によって亡民となった秦人に、馬韓（百済の前身）は、その東の地を割いて住まわせ、辰（秦）韓と名づけたという。そのため、秦韓の民の言葉には秦語（陝西方言、長安に都があった頃の標準語）が混じり、秦韓人とも称された。秦人は漢人以外の民族を総称することがあり、秦人にはかなりのユダヤ人やペルシャ人が含まれていた。彼らが、中央アジア経由で、倭（ヤマト）や新羅の語源（シラキ）、皇室の十六菊家紋等を持ち込んだと思われる。
（つづく）

（つづき）
秦韓の地は、倭人が居住する伽耶（弁韓）の大伽耶（伊西国）の北側に位置し、その民の秦人は伽耶の倭人と混雑したと思われる。伽耶の南部の金官国の初代首露王は天孫のニニギと思われ、1世紀半ば、伊都国に降臨した。その同伴者に祭祀を与る忌部氏の祖、天太玉命がいるが、彼はユダヤ系と言われる。忌部氏が天孫族の祭祀を担い、ユダヤの祭祀形式を倭国に持ち込んだ可能性がある。ヤマトはヤハウェ（エホバ）の民（ヤー・ウマト）を意味するヘブライ語に由来するともいう。尚、スサノオは、別名をヘブライ語のゴズ（牛頭）といい、蘇民将来のユダヤ伝説に絡み、ユダヤ系であることを匂わせる。スサノオの後のニギハヤヒ（物部の祖）が後世東征して大和に邪馬台国を建てたとき、ヘブライ語由来の「ヤマト」に因んだ大和国名（ヤマト）にした可能性がある。

応神朝に秦韓の民の末裔で景教徒の秦氏が大挙来倭し、ユダヤ教と景教に因む神道の神社や祭祀、大型土木・建築技術、養蚕等々を倭国に持ち込んだ。このように天孫降臨の時代のユダヤ人や応神朝の秦氏がユダヤ教や景教の一神教に因む祭祀様式を持ち込んだが、倭国の多神教の神道に同化され、ユダヤの影響は神社の建築様式や祭祀および日本語の語彙、『記紀』の神話にのみに残されたと思われる。

ユダヤ起源とされる「蘇民将来」の説話に因む災厄払いの民間信仰、「茅（かや）の輪くぐり」は、各地の神社で行われる祓（はらえ）の儀式である。大祓（おおはらえ）は天下万民の罪穢を祓うという儀式で、宮中と伊勢神宮で執り行われ、中臣の祓とも言われる。中臣氏は物部氏とともに仏教受容問題で蘇我氏と対立した。中臣鎌足は大化の改新で活躍し、藤原姓を賜った以後、鎌足の子孫は藤原氏を名乗ったが、本系は依然として中臣を称した。古来中臣氏と並んで祭祀職を担った忌部氏は退けられ、中臣氏が神祇官・伊勢神官など神事・祭祀職を世襲した。

大祓では長文の大祓詞を奏上する。大祓詞には地上で国の人間が犯す罪が主体の「国津罪」よりも農耕に関する慣行を破ることが主体の「天津罪」のほうを先に列挙しており、古代ではこちらのほうが共同体秩序を乱す大罪と考えていたことが伺える。高天原の秩序を乱したスサノオは，八十万神の合議により千座置戸（ちくらおきど）を科せられたうえで，神逐（かんやらい）すなわち追放刑に処せられた。大祓詞では、実名こそ伏せられているが、暗にスサノオだけを集中的に攻撃していると解釈できる。普通に考えると、「天津罪を犯したスサノオは、悪神の象徴であり、本来は“あってはならない神様”だ」ということになる。

物部氏の総氏神である石上神宮の主祭神は、布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ、神体の布都御魂剣（武甕槌神（タケミカズチ）の剣に宿る神霊）である。不可思議なのは、石上神宮の主祭神が武甕槌神のもっていた剣（出雲の国譲りと神武東征で圧倒的パワーを誇示した）に宿る布都御魂大神となっていて、八岐大蛇（大国主と考える）を殺した天羽々斬剣（十握剣、布都御魂剣ともいう）に宿る神霊の布都斯魂大神が配神となっていることである。一方、藤原氏（中臣氏）の総氏神の春日大社の主祭神は武甕槌命であり、飛鳥時代の政治を支配した藤原氏に対する『記紀』における配慮・忖度として、出雲の国譲りでの武甕槌神に圧倒的パワーと、神武東征での渋いサポートが割り振られたと思われる。その証拠に武甕槌神が大活躍する国譲りだが、別の伝では香取神宮の祭神の経津主命（物部氏の祖神）だけで国譲りを成す。すなわち、武甕槌神は『記紀』の編纂者が創案した架空の神と思われる。この架空の武甕槌神が春日大社の主祭神に祭り上げられと共に、石上神宮の主祭神もまた武甕槌神のもっていた剣に宿る布都御魂大神とされたのであろう。実際の所、経津主命は布都御魂大神（布都御魂命ともいう）と同神で、スサノオが出雲で八岐大蛇（大国主か）を退治した際に使用した剣（布都御魂剣、天羽々斬剣）を神格化したもの考えられ、かくて、布都御魂命はスサノオと同神と考えられる。

天照大御神の嫡流の天之忍穂耳命の御子で天孫のニニギの子孫（藤原氏）が支配した飛鳥時代に編纂された『古事記』と『日本書紀』において、物部氏の実質的な祖神と考えられるスサノオを出雲の国譲りでの主役の地位から外すことにより、物部氏は飛鳥時代のヤマト王権の中枢から除外されたと推察する。かくて、神祇官である中臣氏が奏上した大祓詞においても、天津罪を犯したスサノオは神逐（かんやらい）すなわち高天原からの追放刑に処せられた悪神とされた。
（FB藤田泰太郎タイムライン2021/3/7投稿）

スサノオ（素戔嗚）の足跡（1）

伽耶の伊西国：天津神揺籃の故地

伽耶と倭国の歴史

縄文時代草創期～早期（1万数千年前～7000年前）の朝鮮半島には遺跡が殆ど見出せず、ほぼ無人状態であった。縄文時代前期の始め鬼界カルデラ噴火があり南九州からの避難民（西日本縄文人）が南朝鮮（南韓）に渡った。この縄文人が朝鮮半島における新人の原住民と思われ、言わば南朝鮮人（倭人）の祖先と考えられる。縄文時代の後期から弥生時代の気候の寒冷化のため、華北人と朝鮮人（高句麗系）が朝鮮半島を南下し、南朝鮮の倭人は圧迫され一部は倭国に帰来したが、少なくても紀元前後までは倭人が南韓（とくに弁韓と辰韓）の主導権を握っていたと考えられる。

伽耶（弁韓、任那の前身）の伊西国(イソ、イセ)国（『三国遺事』、『三国史記』では伊西古国）は、倭人の国と思われ、紀元前1世紀から3世紀末まで、南朝鮮・洛東江東岸の大邱近辺に存在した。この地域は伽耶の東端に当たり、日本海側の慶州当たりに辰韓の斯蘆国（新羅の前身）があった。 紀元前には伊西国と斯蘆国とはお互い緊張関係にはなかったように思われる。しかし、濊（高句麗の前身）の南下が激しくなり、斯蘆国が濊族の影響下に置かれると、伊西国は斯蘆国に圧迫され、その王族のスサノオ（物部氏の太祖）が筑前のほぼ全域を占める奴国の西部に侵攻して伊西国に因んだ伊都国（イトはイソの訛り）を建国した。この伊西国と伊都国（イツツヒコ王国と同じと云われる）との間に政治および経済的連携があったとされる。

筑前の奴国は和邇氏等の海神族の国で弥生時代中期後半から筑前のほぼ全域を占めていた。奴国は南韓の諸国と密接な政治的かつ経済的に密接な関係を持っており、植民地の楽浪郡をもつ前漢から倭国の中心の国として認知されていた。奴国が楽浪郡の安寧のため必要との前漢の後の後漢の思惑および奴国は呉太白の子孫の国であるとの主張が功を奏し、AD57年後漢の光武帝から金印「漢委奴國王」を綬与されるに至った。しかし、1世紀末頃には、邇邇藝（ニニギ）が降臨（1世紀半ば）した伊都国は奴国を圧倒した。

伊西国は、伊都国と協働し斯蘆国（新羅の前身）を圧迫したこともあったが、結局3世紀末に伊西国は斯蘆国によって滅ぼされた。2世紀末スサノオの後の饒速日命（ニギハヤヒ（世襲名）、物部の祖神）は吉備から東征して、邪馬台国を建てた。邪馬台国時代、伊都国は、対馬に起こり伽耶（弁韓）を領した任那と連合（任那・伊都国連合）を組み、南朝鮮と北九州に勢力を広げた。この連合の中心がミマキイリヒコイリエ（崇神）で、東征して邪馬台国を引き継いだ。

『記紀』の皇統譜と高麗が編纂した『三国史記』「新羅本記」の新羅王家系図との間には、不思議な一致がみられる。『日本書紀』の紀年を鑑み、宝賀・貝田推論に基づくと崇神即位はAD315となり、神武～崇神10代（一代、4半世紀、海部氏勘注系図と比較し10代）として考証したところ、神武天皇からの人代の始まる時期は1世紀半ばとなる。ニニギから神武に至るまでの日向三代は作為的に挿入されたと思われ、ニニギと神武は同時代人（あるいは同一人物）と考えられる。

『三国史記』「新羅本紀」や『三国遺事』によれば、倭人の瓠公（ここう）が新羅の3王統（朴氏、昔氏と金氏）の全ての始祖伝説に関わったとされる。新羅の始祖王は、朴氏の赫居世居西干（ヒョッコセコソガン、BC57-AD4）である。第2代南海次次雄（スサング、AD4-24年）の娘婿が倭人の第4代脱解王（AD57-80）である。このスサングがスサノオに当たるとすると、赫居世居西干が伊邪那岐（イザナギ）に当たる。朴氏の起源地は大伽耶の伊西（イソ、イセ、イトとも訛る）国とされる。従って、紀元前後にスサノオが筑紫に侵攻することにより、伊西国に因んで伊都 (イト) 国が建てられた。スサノオの孫（天孫）、すなわち、天之忍穂耳と高木神の娘の栲幡千千姫（万幡豊秋津師比売）の子が、邇邇藝（ニニギ）と火明（ホアカリ、天火明、彦火明）である。伽耶の伝説『釈利貞伝』によれば「正見母主には悩窒青裔と悩窒朱日の二人の息子があり、悩窒青裔は金官国の初代首露王（AD42-199）になり、悩窒朱日は大伽耶の王（脱解王）となった」とのことである。正見母主は、栲幡千千姫であるとすると、天孫（ニニギとホアカリ）は伽耶の出自となりそれぞれ伊都国と丹後国に降臨したことになる。このように、『三国史記』「新羅本紀」や『三国遺事』を検証しても天孫降臨の年代は1世紀半ばとなる。さらに、第8代阿達羅王（AD154-184）の御代、王子の延烏郎（天日槍（アメノヒボコ））が来倭、その折（157年）はちょうど倭国大乱（AD146-189）の真最中である。以上『日本書紀』と「新羅本記」とも天孫降臨の時期は弥生時代後期の始めの1世紀半ばとなる。

天津神（イザナギ、ニギハヤヒ、崇神）や海神族（大国主や和邇氏）の近畿への進出

弥生時代中期以来、近江は農産面と産業面で他国を凌駕し、人口もまた全国有数であった。 国産み神話の主役であるイザナギが新羅の始祖王の赫居世居西干であるとすると、その妻イザナミと共に伊西国から倭国に渡ってきたのは紀元前1世紀のことと推定される。イザナギ・イザナミの軌跡は隠岐、丹後、出雲、筑前、近江、淡路等に見られる。ちなみに、近江・湖東の多賀町には両神を祀った多賀大社があり、『古事記』（真福寺本）には、「イザナギの神は多賀に近い杉坂山に降臨し、多賀にお鎮まりになった」と記されている。『日本書紀』によれば、イザナギ・イザナミの時代の近畿には近江を核とする浦安の国があったと云う。

紀元前のイザナミ・イザナミの近江渡来に続き、紀元前後のスサノオの筑紫・出雲侵攻に敗北した大国主一族のアジスキタカヒコネ等が出雲から近江に東遷した。1世紀末頃には、スサノオが建てた伊都国に圧倒された奴国の嫡流の和邇氏や猿田彦が、近江・湖西に遷った。2世紀前半には大国主（大己貫）は少彦名と協力して、玉牆の内つ国（大己貴の国）を建てた。その都の近江・湖南の伊勢遺跡（守山市伊勢町 ）は、当時の倭国の最大規模の遺跡の一つで、大陸や半島の文化・文物の多くを取り入れた文化都市である。興味深いことに、伊勢遺跡の独立棟持柱付大型建物は、現在の伊勢神宮本殿に見られる「神明造り」と呼ばれる建築様式を採っている。イザナギ出自の伊西国の伊西(イソ)は、音韻上伊勢遺跡の伊勢(イセ)さらには伊勢神宮の伊勢に通じる。かくて、イザナギあるいはその子孫が多賀から南下した守山の地を伊勢と名付けたと考える。和邇氏の巫女で邪馬台国の女王となる卑弥呼（日御子？）は2世紀末頃の大己貴の国の崩壊時に伊勢遺跡にいた可能性がある。

3

2世紀後半、ニギハヤヒとアメノヒボコに率いられた大吉備（吉備の南北の国々を含む）の軍団が、東征して倭国大乱を引き起こした。ニギハヤヒ軍団は播磨、摂津を平定さらに河内から大和川を遡り大和・葛城を制圧し、さらに北上して大己貴の国（玉牆の内つ国）の中心の近江・湖南の伊勢遺跡を解体させた。ニギハヤヒは和邇氏の巫女の卑弥呼を共立して、大和を中心とし、近江南部・西部と紀伊・阿波の国を含む西日本に拡がる邪馬台国を建てた。尚、ニギハヤヒは孝霊天皇に当たり、卑弥呼は倭迹迹日百襲姫に当たると推察する。一方、大己貴は近江湖北・湖東を中核に東日本に拡がる玉牆の内つ国の後継国の狗奴国を建てた。かくて、倭国は邪馬台国と狗奴国とに西と東に2分されることになった。邪馬台国は西征して、南朝鮮と九州に拡がる任那・伊都国連合を勢力下においた。3世紀半ば卑弥呼が死去し邪馬台国は弱体化した。天孫のニニギが九州に建てたウガヤフキアエズ朝が南九州まで拡大していた。3世紀末、ニニギの直系のミマキイリビコイニエ（崇神）が中臣氏、大伴氏、忌部氏と久米人や隼人を伴い東征して、邪馬台国を乗っ取り、ヤマト王権（崇神王朝）を建てた。崇神王朝の攻勢に狗奴国は退潮を続けるが、成務天皇の時代に滅んだと思われる。

伊西(イソ)と伊都(イト)、石(イソ)の上と伊勢(イセ)

イザナギやスサノオは、大伽耶の伊西（イソかイセ）国の出自である。第2代新羅王南海次次雄と考えられるスサノオは大伽耶の伊西国出自のユダヤ系の倭人と思われ、紀元前後に筑前の奴国の西側に侵攻し、伊西国に因んだ伊都(イト)国を建てた。スサノオと大山祇神の系譜は密接に関連している。スサノオの二人の妻は大山祇神の娘の櫛名田姫と神大市姫である。スサノオの息子のイソタケルは何れの妻の御子であろうか。ヤマトタケルが倭(ヤマト)国の勇者を意味するようにイソタケルは伊西(イソ)国の勇者を意味すると思われる。尚、イソタケルはニギハヤヒであり、ニギハヤヒは神大市姫との間の子神の大年神であるとの説がある。スサノオとイソタケル(ニギハヤヒ）は、紀元前後に出雲で布都御魂剣により八岐大蛇（大国主か）を倒した。ニギハヤヒは布都御魂剣を吉備に持ち込み、吉備で力を蓄えた。2世紀半ばニギハヤヒの子孫はその息子の天香語山と共に布都御魂剣を掲げてアメノヒボコと大山祇神の後裔を伴い河内へと東征し、大和に入り邪馬台国を建てた。ニギハヤヒは物部氏の祖神であり、布都御魂剣の神霊が物部氏の総氏神である大和の石上(イソノカミ)神宮の筆頭の祭神である。一方、伊西(イソ)は音韻上伊勢遺跡や伊勢神宮の伊勢(イセ)に通じる。興味深いことに、古来「神宮」と呼ばれるのは、伊勢神宮と石上神宮のみである。さらに、伊勢神宮の古名は「磯宮（イソノミヤ）」であり、イセとイソの繋がりを強く示唆する。

以上ように、伽耶の伊西国は天津神の揺籃の地と考えられる。伽耶の伊西国のイソとイセに因んで、倭国にとって政治的に極めて重要な事象（伊都国(イト)、石(イソ)上神宮、伊勢(イセ)遺跡や伊勢(イセ)神宮）が名付けられ、「古の日本（倭）の歴史」が物部氏を軸に大きく発展・展開する様を窺い知ることが出来る。

（FB投稿、藤田泰太郎タイムライン2022・1・28）

参照： 古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）－天孫族（伽耶族）の系譜 ③ 031

『本朝英雄傳』より「牛頭天王 稲田姫」
歌川国輝 画（Wikipedia）

石上神宮拝殿（国宝） （光一郎撮影）

1

スサノオの足跡（2）

八岐大蛇伝説、スサノオとクシイナダヒメ

伽耶（大伽耶の伊西国）からの渡来者で天神の素戔嗚命（須佐之男命、スサノオ）がイザナギから始まる皇統譜で最初の実在性が極めて高い人格と思われる。スサノオは大伽耶から筑紫に侵入、さらに出雲に侵攻した。その後スサノオは三次から備後・新市に達したと思われる。吉備で力をつけたスサノオの後の饒速日（ニギハヤヒ）が率いる物部軍団が、吉備から東征して葛城・大和を制圧し、さらに近江・湖南に向かって北上し大己貴の国「玉牆の内つ国」の都の伊勢遺跡を瓦解させた（倭国大乱）。ニギハヤヒ（孝霊天皇と同人格）は纒向遺跡を都とする邪馬台国を建てた。邪馬台国（孝霊天皇から開化天皇）は西に向かい伊都国・任那連合を勢力下におき、また東に水行し南関東に侵入した。このようにスサノオとニギハヤヒに代表される物部氏が、任那や南関東をも含む列島の西部を中心とする邪馬台国を建て、倭国を統合したと云える。

八岐大蛇伝説、スサノオとクシイナダヒメ

『記紀』の八岐大蛇伝説は、『記紀』神話の根幹をなすものと考えている。出雲の鳥髪山（現在の船通山）へ降ったスサノオは、その地を荒らしていた巨大な怪物、八岐大蛇（ヤマタノオロチ、八俣遠呂智）への生贄にされそうになっていた大山祇神（大山津見神、三島神）の孫娘で、足摩槌命 (あしなづち)と手摩槌命 (てなづち)を親とする櫛名田姫（櫛稲田姫（クシイナダヒメ）、稲田姫（イナダヒメ））と出会う。スサノオは、クシイナダヒメの姿形を歯の多い櫛に変えて髪に挿し、八俣大蛇（大国主と思われる）を退治する。そして八俣大蛇の尾から出てきた草薙剣（くさなぎのつるぎ）を天照御大神に献上し、それが古代天皇の権威たる三種の神器の一つとなる。（現在、草薙剣は熱田神宮（名古屋市）の御神体となっている。）ちなみに、八岐大蛇を斬殺した布都御魂剣は、ニギハヤヒの東征で掲げられ、葛城・大和を制圧後、物部氏の総氏神の石上神宮に神宝として納められている。

尚、八岐大蛇伝説はスサノオとクシイナダヒメが、民を苦しめる八岐大蛇を退治するというストーリーであるが、私見では、物部の太祖神たるスサノオがクシイナダヒメの父方の大山祇神（三島神）の協力を得て、大国主などの出雲系神々を成敗するというのが八岐大蛇伝説の基本構造であろう。スサノオは大山祇神の娘（神大市姫）や孫娘（櫛名田姫）を妻とすることにより、大山祇神との協力関係を築いた。天孫の瓊瓊杵尊（ニニギ）もまた大山祇神の娘の木花之開耶姫を妻として大山祇神と九州統治で協働した。因みに、スサノオと神大市姫の間の御子が大年神で、大年神がニギハヤヒであるとの説がある。4世紀初めに崇神王朝（ヤマト王権）が成立する前に、スサノオ（物部の太祖）やニギハヤヒ（物部の祖神）が侵攻した出雲系の地域には、スサノオとクシイナダヒメを祭神とする神社が多く存在する。

2

櫛田宮（佐賀県神埼町）と櫛田神社（福岡市）

紀元前後に大伽耶からの渡来者のスサノオが筑紫に侵攻した折、大山祇神勢力と協働するため大山祇神の孫娘のクシイナダヒメ（もともと肥前・神崎の姫巫女か）を妻にしたのではないか。尚、これに伴いクシイナダヒメは神崎の櫛田宮（祭神：櫛稲田姫命（櫛田大明神）、須佐之男命、日本武命）から博多の櫛田神社（祭神：大幡大神、天照皇大神、素盞嗚命（祇園大神））；以前の祭神は櫛稲田姫命と素盞嗚命であったか）に遷ったのではないか。素盞嗚命は祇園精舎の守護神である牛頭天王と見なされ祇園大神と称されている。

八岐大蛇伝説は出雲の須佐郷での出来事に矮小化されているが、この伝説は、スサノオがクシイナダヒメの祖父の大山祇神勢力と協力して出雲勢力を筑紫と出雲から駆逐したことを意味するのではないか。スサノオにより出雲の大国主一族のアジスキタカヒコネらを近江に東遷さたことは先のFB投稿に記述した。一方、筑前・筑前町（旧三輪町、筑後に近い）には大己貴神社（大己貴命は大国主の別名）がある。この神社は最も古いといわれている神社のひとつであり、大己貴神社付近と大和の大神神社付近の地名や地形も偶然とは思えないほど酷似している。このことは、筑前を追われた出雲勢力が大和の大神神社の近傍に移住したのではないか。

須佐神社（出雲市佐田町須佐）、素盞嗚神社 (福山市新市町)と八坂神社（京都市東山区祇園町）

出雲の須佐郷で八俣遠呂智を退治した須佐之男命は、櫛から戻した櫛名田比売と暮らす場所を求めて出雲の根之堅洲国（現・島根県安来市）の須賀の地へ行き、そこで「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠に 八重垣作る その八重垣を」と最古の和歌を詠んだ。さらに須佐神社（祭神：須佐之男命、稲田比売命、足摩槌命、手摩槌命）は、『出雲国風土記』に見えるスサノオの御終焉の地として御魂鎮めの霊地となっている。

スサノオは生前、筑前と出雲を行き来していたと思われるが、出雲から吉備にも勢力を伸ばしている。スサノオは石見から江の川を遡り三次に達し、三次から芦田川の上流域に入り、芦田川を下って吉備の一国の備後の新市に至る。このルートは瀬戸内海を経由せずに筑前から吉備に入るルートで、私はこのルートをスサノオルートと呼ぶ。

備後の新市には素盞嗚神社（主祭神：素盞嗚尊、配神：稲田姫命と八王子（やはしらのみこ）、素盞嗚尊の8人の王子）が鎮座する。素盞嗚神社は祇園信仰、祇園祭発祥の式内社で、備後国一宮を称する。この神社は蘇民将来伝承の発祥地とも見なされている。また、素盞嗚神社から八坂（やさか）神社に素戔嗚尊（牛頭天王）が勧請された。八坂神社は全国にある八坂神社や素戔嗚尊を祭神とする関連神社（約2,300社）の総本社であり、通称として祇園さんとも呼ばれる。祭神は素盞嗚神社と同じく、主祭神を素戔嗚尊とし、東御座に櫛稲田姫命、西御座に八柱御子神（素戔嗚尊の8人の子供）を配する。尚、西御座に蛇毒気神（だどくけのかみ）が祭られていて、八岐大蛇が変化したものと考えられている。

3

大宝神社（滋賀県栗東市綣(へそ)）と大矢田神社（岐阜県美濃市）

2世紀半ばスサノオの後のニギハヤヒは吉備より東征して倭国大乱を引き起こした。ニギハヤヒ（孝霊天皇と同人格）は、葛城・大和を制圧し、さらに北上して、近江湖南の大己貴の国（玉牆の内つ国）の都と考えられる伊勢遺跡を瓦解させた。この伊勢遺跡に隣接して大宝神社（祭神：素盞嗚尊と稲田姫命）があるが、大宝元年に降臨した素盞嗚尊と稲田姫命を追来神社境内に鎮座させたと云われる。追来(オフキ)神社は伊吹山に座す多々美彦命（別名八岐大蛇）を祭神とし、多々美彦命は大国主のことと推測される。古来、追来神社は意布伎(伊不伎)神社と記されていた。追来神社は、在来神でありながら大宝神社本殿が主祭神となったため、無理に境内社としての位置付けにされ、社名変更を余儀なくされたと推測される。このことは、滋賀県と岐阜県の県境に聳える伊吹山を神奈備とし多々美彦命を神と崇める一族（大国主一族）が古来は伊勢遺跡含む琵琶湖東岸一帯を治めていたが、素盞嗚尊を奉祭する物部一族に取って代わられたということを意味するのであろうか。

大矢田神社（祭神：建速須佐之男命（タケハヤスサノオ）、天若日子命（アメノワカヒコ））は2世紀末の倭国大乱の終結期の孝霊天皇の御代に創祀された。社伝では、悪龍が山に住んで人々が困っていたところ、須佐之男命を祭るようにという神託があり、お迎えしたとされる。

大矢田神社のひんこ祭は、須佐之男命が農耕の邪魔をする大蛇を退治し、御殿にいる妻、櫛稲田姫を食べようとする龍も退治する様子を人形で表現する。祭神を御旅所まで運ぶ神輿には明治頃まで、沿道から小さな矢の飾り物を投げつける風習があった。天若日子の故事にちなむもので、大正からは参詣者にまくように改められたという。アメノワカヒコは少彦名と考えられ、倭国大乱の終わりに美濃・喪山でタカキムスビ神ならぬニギハヤヒに射殺されたと推察する。

氷川神社（埼玉県さいたま市）と二宮神社（千葉県船橋市）

倭国大乱に勝利したニギハヤヒは、3世紀始めに卑弥呼を共立して、纒向遺跡（桜井市）を都とする邪馬台国が建てた。邪馬台国は、3世紀の半ばまでに任那・伊都国連合を勢力下におき、また東に水行して南関東に進出した。

氷川神社（祭神：須佐之男、稲田姫命、大己貴命）や二宮神社（祭神：建速須佐之男命、櫛稲田比売命、大国主命）の祭神はスサノオ、クシイナダヒメ、大己貴（大国主）となっており、物部一族が大国主の支配していた南関東（武蔵や下総）に進出し、大国主から支配権を奪ったと推察する。

物部一族がいつの時代に南関東に侵攻して大国主一族を成敗したのか。興味深いことに、氷川神社の近傍に稲荷山古墳があり、この古墳から金錯銘鉄剣と邪馬台国が三世紀の初めに遼東半島の公孫氏から独占的に入手した画文帯神獣鏡とが出土した。この鉄剣には埋葬された豪族の長の祖として開化天皇の兄弟で四道将軍の一人である意富比垝（大彦）の名が刻まれていた。また、南関東の土器が邪馬台国の都の纒向遺跡から出土している。これらのことを鑑みると開化朝（3世紀後半の邪馬台国の衰退期）に物部軍団を率いた大彦が大国主（狗奴国の王）の支配する南関東（武蔵や下総）に進出し、大国主を倒して南関東を制圧したと考える。また、下総の物部氏の香取神宮はこの侵攻の折に創建されたのではないだろうか。

（FB投稿、藤田泰太郎タイムライン2022・3・29）

参照：　古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）－天孫族（伽耶族）の系譜　③　031

楠田宮

素盞嗚神社大鳥居

八坂神社本殿（重要文化財）
（光一郎撮影）

スサノオの足跡（3）

スサノオ、アメノヒボコと秦氏（秦人の血脈）
備後・三次の弥生式墳丘墓；前方後円墳の起源

伽耶（弁韓、後の任那）、百済、辰韓（後の新羅）と秦韓

縄文時代後期（4,000年前頃）に世界の冷涼化が始まるまでは、朝鮮半島北部はほぼ無人で、南朝鮮には専ら西日本縄文人（倭人）が居住していた。冷涼化に伴い、半島北部には、華北人とツングース系の濊・狛（わい・はく）（高句麗の前身）が侵入を開始した。とはいえ、弥生時代前期までは南朝鮮では倭人が大多数を占めていた。弥生中期・後期のなると華北人や朝鮮人（高句麗系濊・狛）の南下が激しくなった。また、中国の春秋・戦国時代の戦乱により流浪した江南の民が朝鮮半島西岸に漂着して辰国（のちの馬韓）を建てた。紀元前2世紀始め、前漢が朝鮮半島北西部へ侵入し楽浪郡を置いた。さらに、後漢の時代に漢人が南朝鮮（南韓）を韓と呼び、華北人、江南人や秦人および彼らとの混血の進んだ倭人が韓人と称された。弁韓は伽耶（後の任那）に当たり、辰韓は後の新羅で、その北側は秦韓があった。

辰韓と秦との関係を記す、『後漢書』巻85辰韓伝、『三国志』魏書巻30辰韓伝、『晋書』巻97辰韓伝、『北史』巻94新羅伝によると、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人あるいは秦の滅亡によって亡民となった秦人に、馬韓はその東の地を割いて与え住まわせ、秦韓と名づけたという。秦人は漢人以外の民族を総称することがあり、秦人にはかなりのペルシャ人やユダヤ人、およびその子孫が含まれていた。しかし、秦・前漢の時代は辰韓（秦韓を含む）や弁韓ではなお倭人が強い勢力を保っていたと思われる。

漢の植民地の北朝鮮の楽浪郡には倭国にない製鉄の高炉があり、朝鮮や倭国の鉄鉱石からの大規模な製鉄を行っていた。その頃（紀元前2～前1世紀）、楽浪郡を中核とする、筑紫―出雲―丹後を覆う鉄と銅と玉の交易ネットワークが形成された。紀元前後、前漢が衰亡し楽浪郡は混乱に陥り、多くの南朝鮮の倭人（スサノオやニニギら）が倭国へ帰来した。

天孫族の系譜；初期新羅王室と伽耶倭人王室の類似；秦人の影

スサノオ（後のニギハヤヒ）、アメノヒボコと秦氏

伽耶での伊邪那岐から瓊瓊杵、即ち天孫族の降臨までの系譜（紀元前1世紀～1世紀）は、新羅王室の初期系譜に類似している。これは、紀元前後の伽耶（後の新羅を含む）は倭人により政治的に支配されており、初期新羅王室の系譜は伽耶倭人王室の系譜であったことに起因する。しかし、伽耶の北東部はユダヤ人やペルシャ人を含む秦人の住む秦韓と接しており、かなりの倭人が秦人と混血した。（新羅王室には少なからず秦人の血が混ざっていると思われる。）1世紀始めユダヤ人の血脈を引くスサノオ（新羅本記の第2代南海次次雄にあたる）は、伽耶（弁・辰韓）の大伽耶（伊西国）より北九州に侵攻して伊都国を建てる。さらに出雲に侵攻して、大国主（八岐大蛇）を倒し、出雲古国を崩壊させた。この際、銅鐸や銅剣などの青銅器祭器が埋納された（加茂岩倉、荒神谷遺跡）。さらに、2世紀の後漢の弱体化と地球規模の気候の寒冷化による高句麗のさらなる南下が、第8代新羅王阿達羅の王子（延烏郎か）の天日槍（天日鉾、アメノヒボコ）の渡来を引き起こした。倭国大乱は、天日槍を伴った饒速日（ニギハヤヒ、孝霊天皇にあたる）の東征により引き起こされた。この倭国大乱は、大和を中心とする本州中央部（中国・四国地方東部、近畿地方と中部地方西部）に広がった。ニギハヤヒは、近江・湖西に遷った和邇氏や近江・湖東（湖北）の大国主と計らい卑弥呼を共立して、纒向遺跡を国都とする邪馬台国を建てた。

ニギハヤヒやアメノヒボコは代々継承されてきた世襲名と考える。ニギハヤヒは紀元前後に渡来したスサノオの息子とされており、その子孫は吉備で力を付け、2世紀半ばに東征して倭国大乱を引き起こした。アメノヒボコもまた1～3世紀に亘っての複数の人格からなる渡来神をあらわす世襲名と思われ、2世紀半ばに渡来した阿達羅の王子のアメノヒボコ（神功皇后の6世祖）が倭国大乱に参画した。

高祖神社宮司家の上原・殿上家系図（新羅王家の系図、FB投稿 川岡保）は、『三国史記』の「新羅本記」の新羅王室の系図とはかなり違っている。「新羅本記」によると、新羅王室2代は南解次次雄で大伽耶（伊西国）出自のスサノオ、4代は大伽耶の昔脱解としている。上原・殿上家系図では初代が次次雄で2代が神乎多で、神乎多に昔氏祖とあり昔脱解と思われる。本系図の3代が迎鳥で意呂山に降臨したアメノヒボコとし、また5代阿加流日古と8代日桙をもアメノヒボコとしている。（前2者は『記紀』や『風土記』にあるアメノヒボコの来倭時期とは一致しない。スサノオ自身がアメノヒボコの可能性あり。）8代日桙は、垂仁朝の清日古（清彦、但馬）4世祖で、仲哀朝の五十跡手（伊都）の6世祖であり、孝安/孝霊朝の倭国大乱の折に来倭したアメノヒボコに当たると考える。

新羅王室には秦人の血が混ざっており、スサノオ（ニギハヤヒも）とアメノヒボコは、秦始皇帝三世孫、孝武王の後裔の弓月君（ゆづきのきみ）を先祖とする秦氏と深い関係がある。

弥生式墳丘墓の起源地は備後・三次、弥生式墳丘墓の前方後円墳への発展

スサノオは、紀元前後に筑前・出雲に侵攻し、八岐大蛇たる大国主を敗死させ、出雲古国を滅ぼした。この際、銅鐸や銅剣などの青銅器祭器が埋納された（加茂岩倉、荒神谷遺跡）。それ以後、中国地方西部（出雲・吉備）では二度と青銅器を祭器とする祭祀は行われることがなかった。スサノオは出雲古国を滅ぼした後、筑前と出雲を行き来していたと思われるが、備後・三次に一大拠点を置いたと考えられる。スサノオは筑前より石見の江の川を遡り三次に至る。さらに、三次から三次盆地に流れ込む河川を遡り、峠を越え芦田川の上流域に至る。次に芦田川を下り備後南部の新市に至る（スサノオルートと呼ぶ。スサノオの道とも呼ばれ、所謂、川の道である。）ちなみに、三次にはスサノオを祀る須佐神社とスサノオと同一神と思われる武塔天神を祀る武塔神社が隣り合わせで鎮座する。また、新市には備後一宮の素戔嗚神社があり、祇園信仰や蘇民将来伝説の発祥の地と云われる。

3

墳丘墓の発展

三次は四隅突出型墳丘墓の発祥の地と云われ、その造営と秦氏との関連が注目されている。四隅突出型墳丘墓は、弥生後期から美作・備後の北部地域や東出雲（島根県東部）・伯耆（鳥取県西部）を中心にした山陰地方に広まった。北陸では少し遅れて能登半島などで造られている。一方、三次盆地にみられた初期形式の四隅突出型墳墓が三次からスサノオルートを通って備後南部へ広まり、さらに大型の弥生墳丘墓である備中・総社の楯築遺跡の築造に繋がった。

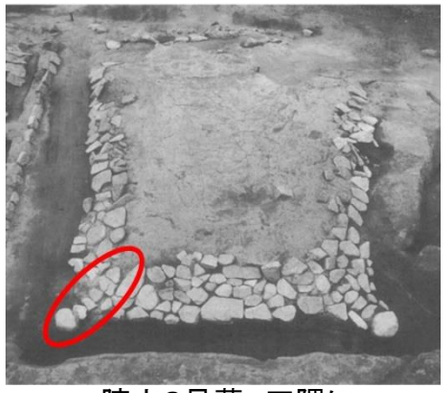
秦氏は、5世紀に来倭した、中央アジアの出自とされる弓月君を先祖とする渡来人である。また、弓月君は、『新撰姓氏録』では、秦始皇帝三世孫、孝武王の後裔とされる。しかしながら、総社市に秦と言う秦一族の集落があり、この一族の定住は遅くとも2世紀で、当時最大の弥生式墳墓の楯築遺跡を造営したと云われている。この秦一族の氏神である姫社（ひめこそ）神社の祭神はアメノヒボコの妃のアカル姫であり、アメノヒボコと秦氏の関係を髣髴とさせる。（FB情報、大浜 明文）

興味深いことに、出雲と吉備の大型墳丘墓（楯築古墳と西谷3号墳丘墓）は形状大きく異なるが、埋葬施設は2重の木棺で底に水銀朱を敷くこと、副葬のあり方や特殊器台を供える等、著しい類似性が見られる。このことは、出雲の王と吉備の王は互いに密接な政治的連携をもっていたと考えられる。この楯築古墳の造営技術が秦氏により大和に伝わり、ホノケ山古墳（ひよっとしたらニギハヤヒの墳墓か）、さらに邪馬台国の卑弥呼の古墳と考えられる箸墓古墳の造営に繋がった。

（FB投稿、藤田泰太郎タイムライン2022・5・11）

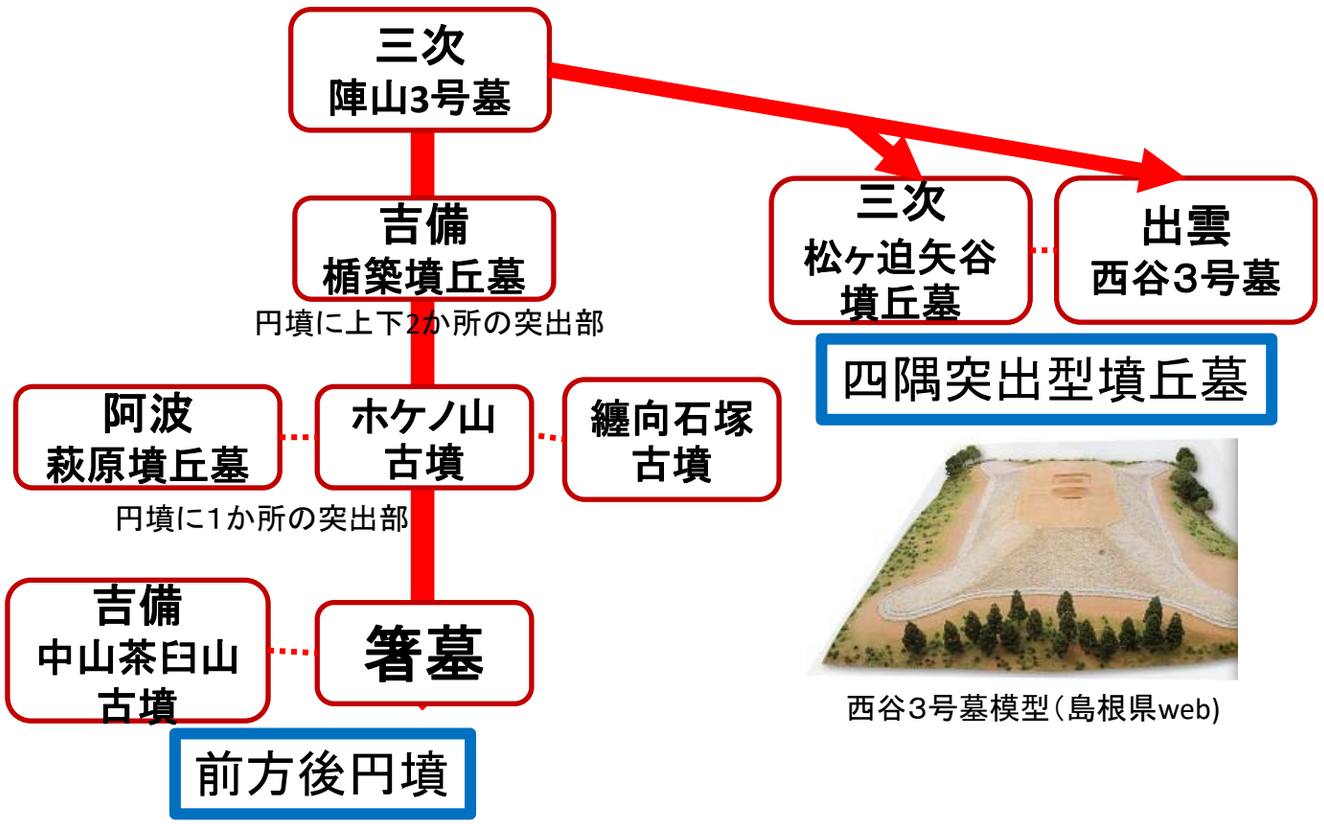
参照： 古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）ー天孫族（伽耶族）の系譜 ③ 031

国土交通省国土画像情報（カラー空中写真）を基に作成
（箸墓古墳）



陣山3号墓　四隅に
踏石状石列（赤印）

四隅突出型墳丘墓の原型



西谷3号墓模型（島根県web）

奴国は呉太白の末裔の国か。倭国王・帥升とはスサノオでヤマト国（倭面土国）を筑前に建て、ニギハヤヒが大和にヤマト国（邪馬台国）を建てた。

1

「奴国は呉太白の末裔の国か。倭国王・帥升とはスサノオでヤマト国（倭面土国）を筑前に建て、ニギハヤヒが大和にヤマト国（邪馬台国）を建てた」

『後漢書』には、「57年　奴国王、後漢・光武帝に使いを送り、金印を賜る」とあり、さらに「107年　倭国王、師升等、後漢・安帝に使いを送る」とつづく。この『後漢書』に記載の「奴国」と「倭国王 帥升」について述べる。奴国は呉太白の末裔の国か。帥升は大伽耶のスサノオと思われ紀元前後に、「ヤマト（ヘブライ語か）国」（倭面土国、伊都国）を筑前に建て、さらにその末のニギハヤヒが3世紀初頭大和にヤマト国（邪馬台国）を建てた。

海神族の雄国、奴国

縄文時代前期の始め鬼界カルデラ噴火があり南九州からの避難民（西日本縄文人）が南朝鮮（南韓）に渡った。この縄文人が朝鮮半島における新人の原住民と思われ、いわば南朝鮮人（倭人）の祖先と考えられる。縄文時代の後期から気候の寒冷化が始まり、弥生時代前期初めに中国では犬戒の南下により周が滅び春秋時代が始まった。春秋時代になると西戒（犬戒を含む）の中原への侵入が著しくなり、漢民族を含む華北の民もまた東南に遷り始める。これら華北の民が江南の民を圧迫し、江南の民の一部が九州の東シナ海沿岸部に漂着し始める。この時期、江南から伝わったのは、水田稲作技術、土笛、環濠集落、石包丁（一部）、高床倉庫や神道体系などである。南朝鮮には見られない甕棺もまた長江中・下流域から北九州に伝わったと思われる。甕棺は弥生中期に専ら北九州で盛んに使用された。甕棺から銅剣・銅戈・石剣・石戈の切っ先が出土する。

春秋時代の終わりの弥生時代前期末（BC473年）の呉の滅亡時、呉太伯子孫の呉王夫差（呉の最後の王）の子「忌」は、東シナ海に出て、菊池川河口付近（現熊本県玉名市）に着き、菊池川を遡って現在の菊池市近辺に定住したと云う（『松野連系図』参照）。彼らは、自らを呉太伯子孫と名乗り弥生時代中期の筑前に奴国を建てたと考える。（S8-S9）奴国では埋葬に甕棺を用い、また中広形あるいは中細形の矛・戈を祭器に使用したと思われる。さらに、この時期、燕の民が朝鮮半島さらに列島の日本海西部沿岸に鉄器を持ち込んだ。

筑前の奴国は和邇氏等の海神族の国で弥生時代中期後半から筑前のほぼ全域を占めていた。紀元前108年前漢は朝鮮半島の北部（平壌あたり）に植民地の楽浪郡を設置して、鉄素材を朝鮮半島南部と日本列島西部に大規模に供給し始めた。奴国は南韓の諸国（馬韓、後の百済；弁韓、後の伽耶；辰韓、後の新羅）および大国主の出雲古国と密接な政治的かつ経済的関係を持っており、楽浪郡を植民地とする前漢から倭国の中心の国として認知されていた。漢の後の後漢の奴国は楽浪郡の安寧のため極めて重要との判断および奴国は呉太白の子孫の国であるとの主張が功を奏し、AD57年、後漢の光武帝から金印「漢委奴國王」を綬与されるに至った。

2

筑紫の奴国は紀元1世紀までは海神族の中心の国であり、かつ倭国を代表する国であったが、紀元前後にスサノオが筑紫に侵入して伊都国を建て、さらに出雲に侵攻して大穴持（大国主）の出雲古国を滅亡させ、大国主一族を東遷させた。大己貴（大国主）と少彦名は近江南部の伊勢遺跡を都とする玉牆の内つ国（大己貴の国）を建てた。その後1世紀後半に奴国は伊都国に圧倒され、奴国の嫡流の和邇氏は筑前から近江西部(湖西)に遷った。2世紀半ば、スサノオの末のニギハヤヒはアメノヒボコと共に東征し倭国大乱を引き起こした。ニギハヤヒは2世紀末に大己貴の国を解体させ、和邇氏の巫女の卑弥呼を共立して大和の纒向遺跡を都とするヤマト（邪馬台）国を建てた。邪馬台国は近江湖南・湖西と大和を中心に西日本一円に広がった。一方、大己貴命は大己貴の国の後継国の狗奴国を建て、この狗奴国は近江湖東・湖北と美濃を核として東日本一帯に広がった。

スサノオとニギハヤヒが各々九州・筑前と畿内・大和に「ヤマト」を持ち込んだ

新羅の前身とされる辰韓と古代中国との関係を記す、『後漢書』辰韓伝、『三国志』魏書辰韓伝、『晋書』辰韓伝、『北史』新羅伝によると、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人あるいは秦の滅亡によって亡民となった秦人に、馬韓（百済の前身）は、その東の地を割いて住まわせ、辰（秦）韓と名づけたという。そのため、秦韓の民の言葉には秦語（陝西方言、長安に都があった頃の標準語）が混じり、秦韓人とも称された。秦人は漢人以外の民族を総称することがあり、秦人にはかなりのユダヤ人やペルシャ人が含まれていた。秦韓の地は、倭人が居住する伽耶（弁韓）の大伽耶（伊西国）の北側に位置し、その民の秦人は伽耶の倭人と混雑したと思われる。

南韓の伽耶（弁韓、任那の前身）の伊西国(イソ、イセ)国（『三国遺事』、『三国史記』では伊西古国）は、倭人の国と思われ、紀元前1世紀から3世紀末まで、南朝鮮・洛東江東岸の大邱近辺に存在した。この地域は伽耶の東端に当たり、日本海側の慶州当たりに辰韓の斯蘆国（新羅の前身）があった。紀元前には伊西国と斯蘆国とはお互い緊張関係にはなかったように思われる。しかし、濊（高句麗の前身）の南下が激しくなり、斯蘆国が濊族の影響下に置かれると、伊西国は斯蘆国に圧迫され、その王族のスサノオ（物部氏の太祖）が筑前のほぼ全域を占める奴国の西部に侵攻して伊西国に因んだ伊都国（イトはイソの訛り）を建国した。この伊西国と伊都国（イツツヒコ王国と同じと云われる）との間に政治および経済的連携があったとされる。

スサノオは倭人と思われるが、別名をヘブライ語のゴズ（牛頭）といい、蘇民将来のユダヤ伝説に絡み、ユダヤ系であることを匂わせる。スサノオは紀元前後に北九州の奴国の西側に侵攻し伊都国を建てた。その折、ヤハウェ（エホバ）の民（ヤー・ウマト）を意味するヘブライ語に由来するとも云う「ヤマト」を北九州に持ち込んだと思われる。実際、伊都国を指すと思われる倭面土国はヤマト国と呼称される。さらに、2世紀半ばスサノオの末のニギハヤヒ（物部の祖）が吉備より東征して大和・纒向遺跡を都とする邪馬台（ヤマト）国を建てたとき、ヘブライ語由来の「ヤマト」を国名にしたと思われる。

藤田

奴国は呉太白の末裔の国か。倭国王・帥升とはスサノオでヤマト国（倭面土国）を筑前に建て、ニギハヤヒが大和にヤマト国（邪馬台国）を建てた。

3

『後漢書』には、「建武中元二年 倭奴國 奉貢朝賀 使人自稱大夫 倭國之極南界也 光武賜以印綬」とあり、さらに「安帝永初元年 倭國王 帥升等 獻生口百六十人 願請見」とつづく。これを訳すと、「漢の建武中元二年（57年）に、倭の奴國が朝献して来た。使者は自称、大夫と謂っている。倭の奴国は倭国の南端になる。（奴国は北部九州にあった。）光武帝（後漢最初の皇帝）は印綬（印鑑と紐）を授けた。（金印とは書かれていないが、太宰府にあり中国には無い国宝文献の『翰苑』（カンエン）には、「紫綬」（紫の高位の紐）とあるので、金印の可能性が高い。）」さらに「後漢の安帝の永初元年（107年）に倭国王の帥升等が生口（奴隷）160人を献じ、皇帝に謁見することを願い出た。」とつづく。

前者は、海神国の雄の倭の奴国が後漢の光武帝から金印を賜ったという事績である。実際、江戸時代に農民が、博多湾の湾口に位置する海神族の本拠地の志賀島から金印「漢委奴國王」を発見した。（この金印には偽造説もあるが、書体の鑑定等から、偽造説については否定的な意見が大勢を占めている。）後者は、倭国王の帥升らが後漢の安帝に謁見し、生口160人を献じたとの事績である。この「倭国王の帥升」とは何者かとの議論が白熱している。諸説を鑑みた私見を次に述べる。

前述の『翰苑』には、「後漢書曰 安帝永初元年 有 倭 面上國王 師升」となっている。「帥升」と「師升」の発音は、中国の言語学者、王力氏の云う漢の時代の発音は、帥升＝ʃwi（ʃíuět）・ɕiəŋ、師升＝ʃi・ɕiəŋであり、現在の和語に相当させれば、どちらも、「シゥ・シャ」と読める。[ɕi]は日本語の「し」の発音である。では、帥（師）升（シゥ・シャ）とは、誰のことか。「シゥ・シャ」は、『古事記』建速須佐之男（たけはや・すさのを）命のスサを連想させ、スサノオを指すと思われる。健速（たけ・はや）とは何か。「はや」は文字通り「速い」を意味し、「たけ」はヤマトタケルの「タケル」と同じ、武将・将軍のことだと推察する。

また、『翰苑』にある「面上國」とは何処の国なのか。中国側の古い文献では、「面土」と記載され、面土国を意味すると思われる。尚、宋の時代には、倭面土国と書かれていて、その発音ではヤマト国で、伊都国を意味するものと解されている。（邪馬台国畿内説を唱えた内藤湖南は、この倭面土国をヤマト（大和）国とした。一方、九州説を唱えた白鳥庫吉は「倭の面土国」と読んで伊都国のことだとしました。面は回の古字の誤りで「回土国」が正しいとし、その音が伊都に似ているというのです。）このように、『翰苑』の倭面土国（ヤマト国）は、『魏志倭人伝』の邪馬台国（ヤマト国）と同じ発音である。即ち、2世紀の初めのAD107年には北九州に倭面上国（ヤマト国、伊都国か）が存在し、3世紀の畿内・大和に『魏志倭人伝』に記載の邪馬台国（ヤマト国）が存在したことになる。

ユダヤ系の倭人と思われるスサノオの渡来に伴うヘブライ語と思われる「ヤマト」の伝搬・変遷を述べる。スサノオは第2代新羅王 南解次次雄と考えられ、紀元前後に海神族の国の奴国の西側に侵入し、伊都国（倭面土国(ヤマト国)とも見なせる）を建てた。スサノオは南下し、大山祇神の孫娘である肥前神崎の櫛名田姫を妻とした。その後、スサノオはさらに出雲に侵攻して、布都御魂剣（十握剣）で大国主（大穴持、八岐大蛇ともいう）を倒し出雲古国を崩壊させて、アメノホヒと協力して出雲王朝を建てた。一方、敗残の大国主の子孫のアジスキタカヒコネらは丹後さらに近江に東遷した。2世紀になると大己貴（大国主、アジスキタカヒコネを含む）は少彦名と協力して、伊勢遺跡を都とし、近江・湖南/湖東を中心とし近畿・中部一円に広がる玉牆の内つ国（大己貴の国、邪馬台国の先行国）を建てた。

4

一方、スサノオは出雲古国を滅ぼしたのち、伊都国（倭面土国、ヤマト国）と出雲王朝を行き来していたと思われる。一世紀半ばに天孫の瓊瓊杵が伊都国に降臨したので、伊都国は奴国の領域の福岡市早良区あたりまで拡大した。しかし、奴国は依然として倭国の代表と見なされ、AD57年後漢の光武帝より金印を賜った。1世紀後半、奴国は伊都国（倭面土国）に圧迫され、倭面土国のスサノオが倭国を代表するようになり、AD107年、後漢の安帝と謁見した。2世紀始め、伊都国に圧倒された奴国の王族の和邇氏は同じ海神族の大国主（アジスキタカヒコネら）の後を追い、丹後さらに近江に東遷して、近江・湖西に新たな奴国を建てた。

その頃、スサノオの子孫（ニギハヤヒら）は石見から備後・三次を経る、所謂スサノオルートを通って、備後・新市に入り吉備（備中・備前）に至った。2世紀半ば、吉備で力を蓄えたニギハヤヒは、物部軍団、アメノヒボコ軍と大山祇神一族を率いて東征し近畿に倭国大乱を引き起こした。ニギハヤヒは葛城と大和を制し、大己貴の国の都の伊勢遺跡を瓦解させた。そして和邇氏の巫女の卑弥呼を共立して纒向遺跡を都とする邪馬台国（ヤマト国）を建てた。邪馬台国は大和と近江・湖南/湖西を中心に西日本一帯を占め、一方、大己貴の国の後継国の狗奴国は近江・湖東/湖北から東日本一帯に広がった。

スサノオやその子孫による「ヤマト」の東遷の過程をまとめる。スサノオの倭面土国（ヤマト国）は1世紀から2世紀始めには伊都国からその東側の福岡市早良区あったと思われる。その後スサノオの子孫により「ヤマト」は東遷して（一時的に宗像付近に遷ったという説もある）、筑前から備後・三次（さらに新市）を経由して吉備に至った。最後に「ヤマト」は2世紀半ばのニギハヤヒの東征により吉備より大和に東遷し、2世紀末には纒向遺跡を都とする邪馬台国（ヤマト国）が成立した。以上の推論より、『翰苑』の倭面土国（ヤマト国）は1世紀～2世紀始めに筑前にあったが、このヤマト国が3世紀始めの『魏書倭人伝』に記載の畿内・大和と中心とする邪馬台国（ヤマト国）になったと結論する。

最後にスサノオとニギハヤヒは、大国主のように、代々の世襲名であろうとの私見を述べる。紀元前後のスサノオの筑前と出雲侵攻と2世紀半ばのニギハヤヒの東征の間には150年の隔たりがある。この1世紀半は1世代を四半世紀とすると6世代に当たる。スサノオとニギハヤヒの系図は伊都国の系譜に含まれると考えられるが伊都国の系譜は不明である。スサノオとニギハヤヒは何代にもわたる世襲名であり、スサノオは紀元前後の伊都国（倭面土国）の成立から少なくても107年の後漢安帝との謁見まではスサノオで、その後の邪馬台国建国まではニギハヤヒと称したのではないかと推察する。

（藤田泰太郎FBタイムライン投稿2022/10/28）

参照：　古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）ー天孫族（伽耶族）の系譜　③　031

スサノオとその末のニギハヤヒがヘブライ語の「ヤマト」を倭国に伝搬・東遷させた

『後漢書』辰韓伝、『三国志』魏書辰韓伝、『晋書』辰韓伝、『北史』新羅伝によると、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人あるいは秦の滅亡によって亡民となった秦人に、馬韓（百済の前身）は、その東の地を割いて住まわせ、秦韓と名づけた。秦人は漢人以外の民族を総称することがあり、秦人にはかなりのユダヤ人が含まれていた。そのユダヤ人が、中央アジア経由で、ヘブライ語に由来するというヤマトを秦韓に持ち込んだか。ヤマトとはヤハウェ（エホバ）の民（ヤー・ウマト）を意味するという。

秦韓の地は、倭人が居住する伽耶（弁韓）の大伽耶（伊西国を含む）の北側に位置し、秦韓人は伽耶の倭人と混雑したと思われる。紀元前後、ユダヤ人の血脈を汲む倭人で大伽耶（伊西国）の王族のスサノオ（物部氏の太祖）が筑前のほぼ全域を占める奴国の西部に侵攻して伊西国に因んだ伊都国（イトはイソの訛り）を建国した。この時スサノオがにヘブライ語のヤマトを北九州に持ち込んだと考える。ちなみに伊都国は倭面土（ヤマト）国）とも呼ばれていたと思われる。さらに、スサノオは出雲に侵攻して、八岐大蛇たる大穴持（大国主）敗死させ、出雲古国を崩壊させた。その後スサノオは筑前と出雲とを行き来していたと考える。、

『後漢書』には「107年、倭面土国王 帥升等が後漢の安帝と謁見した」とある。漢の時代の「師升」の発音は、シゥ・シャであり、スサノオ（須佐之男）のスサを連想させ、帥升とはスサノオのことと思われる。スサノオは、筑前より海路石見に向かい、備後・三次（須佐神社があり）を経由して、芦田川水系辿り、備後・新市（素盞嗚神社）に至るスサノオルートを開発していた。2世紀前半、スサノオの末のニギハヤヒ（物部の祖）が備中・備前（吉備）で力を蓄えた。2世紀半ばニギハヤヒが吉備より東征してヤマトを畿内に持ち込み、大和・纏向遺跡を都とする邪馬台（ヤマト）国を建てた。

このように、1世紀にスサノオの建てた伊都国（倭面土（ヤマト）国）に続き、3世紀初頭にスサノオ末のニギハヤヒが建てた邪馬台（ヤマト）国もまたヘブライ語由来の「ヤマト」を国名にしたと思われる。

紀元前後のスサノオの筑前と出雲の侵攻と2世紀半ばのニギハヤヒの東征の間には150年の隔たりがある。この2世紀半は世代数でいうと6世代に当たる。スサノオとニギハヤヒの系図は伊都国の系譜に含まれると思うが伊都国の系譜は不明である。私はスサノオとニギハヤヒは何代にもわたる世襲名であると考える。スサノオは紀元前後から少なくても107年の後漢安帝との謁見まではスサノオで、その後の邪馬台国建国まではニギハヤヒと称したのではないかと推察する。（藤田）

藤田

伊都国（倭面土（ヤマト）国か）；素戔嗚が大伽耶の伊西国の後継国とし、瓊瓊杵が降臨

伊都国

伊都国（いとこく）は、『魏志倭人伝』にみえる倭国内の国の一つである。『魏志倭人伝』によれば、末盧国から陸を東南に500里進んだ地に所在するとされ、福岡県糸島市、福岡市西区（旧怡土郡）付近に比定されている。

概要　『魏志倭人伝』には、次のように記されている、「（末盧國から）東南へ陸を500里行くと、伊都國に到る。そこの長官を爾支（にし、じき）といい、副官は泄謨觚（せつもこ、せつぼこ）・柄渠觚（ひょうごこ、へいきょこ）という。1000余戸の家がある。世々（世）に王があるも、みな女王國に統べて属する。帯方郡（たいほうぐん）の使者が往来して、ここに常にとどまる場所である。」となる。

『魏志倭人伝』の中で『王』が居たと明記されている倭の国は伊都国と邪馬台国と狗奴国で、他の国々には長官、副官等の役人名しか記されていない。

一大率　一大率は、卑弥呼の王権によって任命された派遣官である。倭国の官人である。その官名は城郭の四方を守る将軍である大率に由来するとする説もある（道教の古典とされる『墨子』の「迎敵祠」条）。

『魏志倭人伝』には、次のように書かれている。「女王国より北には、特別に一つの大率（たいすい、だいそつ）を置いて諸国を監察させており、諸国はこれを畏（おそ）れている。大率はいつも伊都国で政務を執り、それぞれの国にとって中国の刺史（しし）のような役割を持っている。王が京都(洛陽)や帯方郡や諸韓国に使者を派遣したり、帯方郡が倭国へ使者を遣わすときは、いつも津（しん・水上交通上の関）で、文書や賜与された物品を点検して、伝送して女王のもとへ到着する時に、間違いがないようにする」ということである。

この地域が伝統的に朝鮮・中国との交流の拠点として重要な意味を持っていた。そのため一大率は、伊都国に常駐して北部九州を行政的・軍事的にも統括する任務や女王の行う外交の実務を厳格に監督し実行する任務を持っており、女王の命を受けて全ての外交実務を伊都国で掌握していたとされる。

日本側文献の記述　旧怡土郡付近は大化の改新以前は怡土縣（いとのあがた）が置かれ、『日本書紀』によるとその祖の名は五十跡手（いとて）で仲哀天皇の筑紫親征の折に帰順したとされる。『筑紫国風土記』逸文には五十跡手が「高麗の意呂山（おろのやま）に天より下った天日鉾命の後裔である」と天皇に述べたとある。

考古遺跡　糸島市三雲を中心とした糸島平野の地域に伊都国があったとする説が有力である。弥生時代中期後半から終末期にかけて厚葬墓（こうそうぼ）（王墓）が連続して営まれており、それが三雲南小路遺跡・平原遺跡である。井原鑓溝（やり・みぞ）遺跡は遺物の点から「将軍墓」の可能性が高いとも言われる。

平原遺跡

平原遺跡（国の史跡）は三雲南小路遺跡の西側の曽根段丘上に存在する弥生時代後期から終末期の 5基の周溝墓群を合わせた名称である。 その 1号墓の「王墓」は、「女王墓」ではないかと云われている。1号墓の副葬品は日本最大の、直径46.5センチメートルの大型内行花文鏡（内行花文八葉鏡）4面が出土。この鏡は、三種の神器（天孫降臨の時に、瓊瓊杵尊が天照大神から授けられた、八咫鏡（伊勢神宮皇大神宮蔵）と同じサイズである。（伊都国－Wikipedia）

1号墳の被葬者を天照大御神や萬幡豊秋津師比売と比定するのは年代的に無理がある。この古墳からは内行花文鏡などの後漢鏡が出土するのだから、1世紀終わりから3世紀初めのものであろう。私見では、師升（伊都国王？）が、107年、後漢・安帝に使いを送ったが、その頃の伊都国王妃の古墳であろう。
(藤田）

平原遺跡出土の内行花文鏡（直径46センチ余）

内行花文鏡：後漢代の中国や、弥生時代から古墳時代にかけての日本で製造された銅鏡

伊都国の長官を爾支（ニシ、ジキ、ニギ）という。ニシといえば、尼師今（ニシキン）を想起する。尼師今とは新羅の初期王号の一つで第3～18代の王号である。単なる思い付きではあるが、伊都国の王は新羅王家となんらかの関連があるのではないか。また、ニギといえばニニギ、ニギハヤヒを連想する。（藤田）

漢委奴国王印
委奴国の読み方にも諸説ある。（1）伊都国説、（2）ワのナ国説が代表的なものであろう」としている。しかし、明治以前の日本語の発音では「委奴」と「伊都」は発音は同じではないので置き換えが可能であったはずがないとの反論。

イツツヒコ（伊都々比古、伊都国の王）
ツノガアラヒト（アメノヒボコと同一人物か）は倭国に来訪の際、はじめ穴門（下関）に到来した。しかし、イツツヒコに航路を妨げられ、出雲を経て越の敦賀に至った。当時、穴門は伊都国の勢力範囲であったと思われる。

『後漢書』の「倭國王帥升」とは？一説

本居宣長は、『通典』では「倭面土地王師升等」と表記されていることに気づき、「面土地」の三字はどういう意味か明らかでないが察するに「一つのちひさき國の王」のようだ、と述べている。宣長の考えを発展させて「一つのちひさき國」を探しあてようとしたのは白鳥庫吉博士であった。白鳥氏は、面の古い字体はしばしば回に見誤られやすいといい、「倭面土國」は正しくは「倭回土國」であったとし、それは「倭の回土(ヱト、weitu)國」とよむべきだとして、伊都国をさしているとした。
（Wikipedia抜粋）

帥升の王墓があると考えられる井原鑓溝遺跡からは弥生時代後期の墓域が検出。3基の木棺墓から方格規矩（きく）四神鏡1枚と内行花文鏡2枚分の破片が見つかり、7000個以上のガラス小玉などが出土した。被葬者は、貴重な鏡を副葬された王に近い人物とも考えられることから、「幻（まぼろし）の伊都国王墓」といわれる「井原鑓溝王墓」が近くに存在する可能性が高まった。実際、井原ヤリミゾ遺跡からは弥生時代後期の墓域が見つかり、3基の木棺墓から方格規矩（きく）四神鏡1枚と内行花文鏡2枚分の破片が見つかり、7000個以上のガラス小玉などが出土した。（伊都遺跡 王都発掘ニュース、Net）

漢の時代の「帥升」の発音は、帥升＝ʃwi（ʃĭuĕt）・ʂiəŋ、であり、現在の和語に相当させれば、「シゥ・シャ」と読める。[ʂi]は日本語の「し」の発音である。では、帥升（シゥ・シャ）とは、誰のことか。「シゥ・シャ」は、スサを連想させ、スサノオを指すと思われる。また、宋の時代に、倭面土国の記載があり、その発音ではヤマト国で、伊都国を意味するものと解されている。
（藤田）

伊都国考古遺跡

三雲南小路遺跡

三雲南小路遺跡は弥生時代中期の方形周溝墓で、甕棺墓 2 器を持つ『王墓』と云われている。

1号甕棺墓の副葬品は、銅剣 1、銅矛 2、銅戈 1、ガラス璧破片 8個以上、ガラス勾玉 3個、ガラス管玉 60個以上、銅鏡 31面以上、金銅製四葉座金具8個体分などである。この他にも鉄鏃 1、ガラス小玉 1が出土している。

鏡の多くは「潔清白」に始まる重圏文または内行花文鏡であり、福岡市聖福寺に伝えられている内行花文鏡に合う外縁部が出土している。この鏡の直径は16.4センチメートルである。

1号甕棺墓の北西に近接（15センチメートル横）して 2号甕棺墓がある。甕棺内に内行花文鏡（日光鏡） 1面が元の位置のまま発見された。直径6.5センチメートル、「見日之光天下大明」（日の光、見（まみ）えれば、天の下、大いに明らかなり）という銘文の青銅鏡。

副葬品は、銅鏡22面（星雲文鏡1、内行花文銘帯鏡4、重圏文銘帯鏡1、日光鏡16。）以上、ガラス小勾玉12個、硬玉勾玉1個、ガラス製垂飾品(大きさは 1センチメートル弱で紺色)が出土している。銅鏡は6.5センチメートル前後のものが多い。

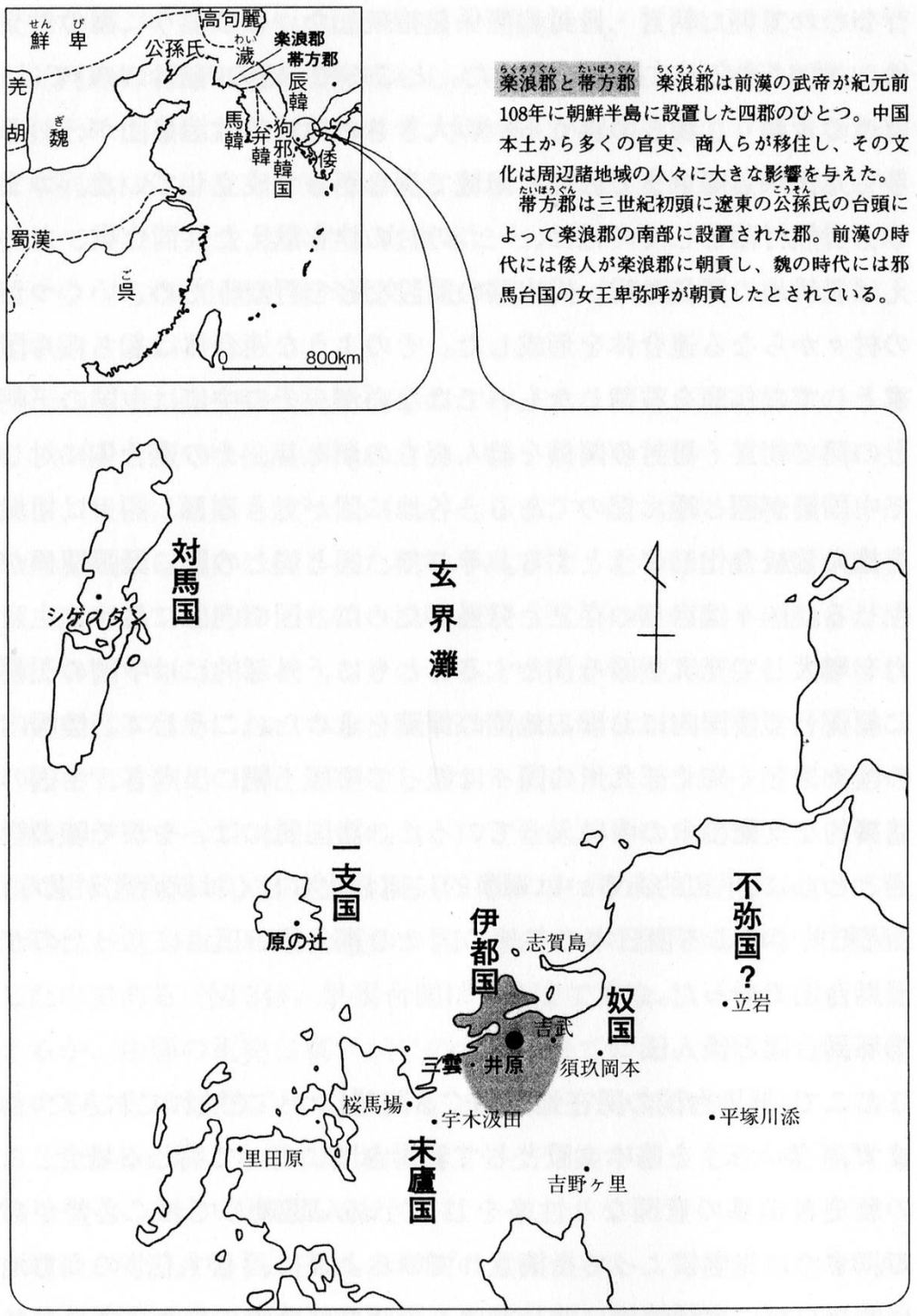
1号墓を「王」とすれば、2号墓は「王妃」に当たるものと推定されている。1.5メートル以上の盛り土の墳丘墓であることは、青柳種信が記すところである。

平成の調査で、「周溝」を持つ事が判明して、「方形周溝墓」という事が判り、現在その様に復元されている。これにより「東側」に隣接する「細石神社」との関係が深く想像できる。

（伊都国－Wikipedia抜粋)

任那・伊都国連合

伊都国はスサノオにより建てられたと思われ、西北九州一帯に勢力を伸ばした。任那は、弥生時代後期に対馬で興り、南朝鮮の倭人居住地域（伽耶、弁韓）を勢力下に置いた。2世紀後半の倭国大乱の頃、伊都国は任那と国家連合（任那・伊都国連合）を結び、南朝鮮と西北九州一円を勢力下に置いた。この連合が崇神東征の主力になる、すなわちヤマト王権の本体と考える。（藤田）



北部九州の国々 (1)（前原市・前原市教育委員会 1999)

（市民の考古学13　古代日本と朝鮮半島の交流史、西谷　正）

さあ邪馬台国へ…倭人伝を裏付け、最古級すずり片が「伊都国」から出土　福岡の三雲・井原遺跡

古代中国の歴史書『魏志倭人伝』に登場する「伊都国」の都だったとされる福岡県糸島市の三雲・井原遺跡で、弥生時代（紀元前4世紀～紀元後3世紀）のものとみられる国内最古級のすずりの破片1個が出土した。同市教育委員会が1日、発表した。

弥生時代のすずり発掘は国内2例目。市教委は『魏志倭人伝』は伊都国で文書が取り扱われていたと記しており、裏付けにつながる」として、日本の文字文化が伊都国から始まった可能性を示す史料と位置付けている。

国内では田和山遺跡（松江市）で、平成10（1998）年に弥生中期ごろの地層から、硯と研石の破片が見つかっている。2遺跡の破片を鑑定した九州大の西谷正名誉教授（考古学）は「先進文化に触れる窓口だった伊都国に入ったものが、山陰地方との交流で移譲されたのではないか」との見解を示した。

「産経WEST」160302

福岡県糸島市の三雲・井原遺跡で出土した
国内最古級のすずりの破片

西■ 筑後　14版　2021年（令和3年）5月1日（土）

藤田

弥生時代の硯工房か

糸島・御床松原遺跡 板状の石50点

糸島市の御床松原遺跡から出土した弥生時代の石製品の中に、硯とみられる板状の石が約50点含まれていることがわかった。外交・交易の拠点でもあった同遺跡には硯の工房があったとみられ、ここから交易を通して各地に硯が広がった可能性があるという。

国学院大の柳田康雄・客員教授が4月28日、発表した。

御床松原遺跡は糸島半島の西岸に広がる集落跡。中国の銅銭や朝鮮半島の土器が出土し、3世紀の「魏志倭人伝」に登場する「伊都国」の海の玄関口だったとみられる。1982年の発掘調査で多数の板石が出土し、土を掘る「石鍬」や砥石と推定されていた。

柳田さんは4年ほど前から、今まで砥石とされてきた各地の石製品の中に硯があるのではないかとみて、九州から近畿にかけての遺跡の出土品を再検討。これまでに300点以上の石製品を硯と判定している。

御床松原遺跡では、石鍬とされていた長さ約19㌢、幅約7㌢の石製品が、筑前町の遺跡で出土した硯と大きさや形がほぼ同じことに注目。ほかの石製品も調べ、47点が弥生時代の硯の可能性が高いと判定した。出土数が突出して多く、板石を切る工具らしい石器も出土したことから、硯の工房があったと推定した。

硯の一部は弥生時代中期前半（紀元前180～150年ごろ）のものとみられ、柳田さんはこの時期に交易を通して中国から硯が伝わったと推測。御床松原遺跡では近畿地方の土器も出土しており、「ここで『国産』された硯が、交易を介して各地に広がったのでは」とみている。（今井邦彦）

柳田康雄・国学院大客員教授が硯と判定した御床松原遺跡出土の石製品＝糸島市

行橋市下稗田遺跡からもで最古級の硯（紀元前2世紀頃）が出土　NHK News Web (2020-10-12)

福岡県行橋市（豊前国）下稗田遺跡は紀元前にあたる弥生時代の前期末から中期にかけての遺跡で、出土品の中に、片方の表面がなめらかな薄い板状の石が複数含まれていました。石はいずれも大きさが6センチから10センチほど、厚さが1.5センチほどで、発掘当時は「砥石」と見られていました。その後、弥生時代の遺跡に詳しい國學院大学のヤナギ※田康雄客員教授が詳しく調べたところ、紀元前2世紀ごろの中国で作られた、石製のすずりと形状が似ていることや、墨を擦る際にできたとみられるくぼみなどの特徴などから、この石をすずりと判断したということです。

漢字の伝来はいつか

秦の始皇帝が国土の統一事業に乗り出したことで、秦に追われ江南諸国の流亡の動きが始まった。前5世紀の呉、前4世紀には越が滅亡し、流民の一部が直接日本に渡来し、漢字もそのときにもたらされたと考えられる。しかし実際漢字が外交や商取引で実用されはじめたのは、秦の滅亡による秦人の半島への流入と漢による楽浪郡の設置であろう。とくに、前108年の楽浪郡の設置は朝鮮や日本の中華文明の受容に大きな役割を果たした。上記の硯の出土は筑紫や出雲で漢字文化が定着したことを示すものであろう。この漢字文化は弥生時代後期には山陰から近畿に達してしていたと思われる。2世紀後半に邪馬台国が成立したが邪馬台国と公孫氏さらには魏との外交でも、当然のことながら公式な漢文文書を介した交渉が行われたことは、想像に難くない。

（教科書的には、漢字文化（千字文と論語）を日本にもたらしたのは、5世紀初めで、日本書紀では王仁（わに）が、『古事記』では和邇（わに）吉師（きし）としており、この二人は同一人物と見做されており王仁と和邇との関連が注目される。）

（藤田）

倭国への仏教の伝来は2世紀初め、インドから海路で金官伽耶国に伝わり、そこから筑紫の伊都国に伝来した！

韓国の遺跡から日本古代史を考える。
金海市東部、神魚山のやや南の盆城山の山頂には、金官伽耶国王初代の首露王と許黄玉王妃を祀る寺、海恩寺（写真1）がある。そこには王と王妃の肖像画(写真2,3) を祀る祠がある。（首露王は1世紀半ばの人物で、瓊瓊杵尊と同世代である。）海恩寺という名前は、許王妃が実兄・長遊和尚と共にはるばる海を越えて金海に嫁いできたとき、海難封じのためアユタヤ王から特別な力を持った石を携えて行くように言われて持ってきた石で（写真4）、この石に旅の無事を祈願し続け、到着したあとにその石を祀って、石の恩義に感謝したところからつけられた名前である。この石は首露王ご夫妻の廟に安置されているほか、許妃の陵墓の前にも石塔：ストゥーパ(写真4)として安置されている。

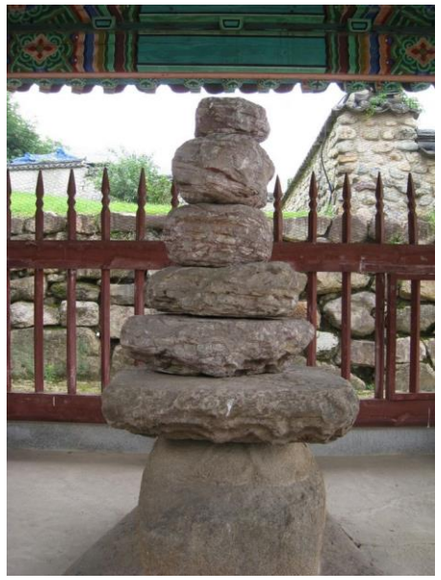
金官伽耶国の首露王も、ニニギや神武と同じ天孫族であった。どうやら彼らはごく近しい親族だったのではないか。山上に登り、太陽神に向かって祈祷を行うのが天孫族の特徴で、この「くしふるの峰」はこの金海市盆城山を振り出しに、福岡県糸島市の高祖山、宮崎県高千穂町のくしふる山、奈良県橿原市の橿原宮と、天孫族の足跡とともに再生を繰り返した。

釈迦国は仏陀の入滅後まもなく滅亡し、釈迦族の末裔はこのアユタヤ国（当時はコーサラ国という名前だった）に逃げ込んでいるから、許黄玉王妃はもしかしたら釈迦族の血統を引いていたかもしれない。許黄玉の一族は金官伽耶国のみならず、日本にも来ていると思っている。たとえば宇佐神宮の元宮があったとされる「御許山」は、許氏一族の姫君が日本の皇室にも嫁いでいたことを示す名前ではないか。当時は伽耶諸国と日本の王族の政略結婚はかなり頻繁に行われたと思われるので、日本の天皇家にはお釈迦様の一族の血統が入っているかもしれない。

許黄玉皇后の実兄・長遊和尚は神魚山銀河寺には祀られている。長遊和尚が伽耶国に来ていたのなら、筑紫の伊都国に来ていてもぜんぜんおかしくない。長遊和尚は首露王の子供のほとんどを出家させているから、清賀上人はそのうちの一人で、清賀上人が糸島から福岡市にかけての多数の寺を創建されたとされる。雷山の千如寺の伝承では、邇邇藝命が清賀上人を招いたもので、それは2世紀前半となっている。このことから、倭国への仏教の伝来は、2世紀初めで、インドから海路で伽耶国に、さらに伊都国に伝来したということになり、従来の百済からの仏教の伝来は6世紀とされているので、日本への仏教の伝来が4世紀余り早まることになる。
（佐藤達矢、FB投稿とそのディスカッション、2020.2.1)

（写真1、海恩寺、佐藤）

（写真2，３、首露王と許黄玉王妃、佐藤）



（写真4、石塔：ストゥーパ、佐藤）

近江の古代史

ー応神東征までの伽耶族や海神族の近江への進出

1．近江渡来の第一陣は大伽耶の伊西国出自のイザナギ・イザナミで、その渡来は紀元前1世紀半ばかと思う。『日本書紀』ではイザナギが当時の近畿の国を浦安の国と名付けたことになっている。イザナギ・イザナギの渡来ルートは、隠岐（オノゴロ島の候補地の一つ）ー丹後ー近江と思われ、湖東の多賀大社付近に進出した。海神族の大国主や和邇氏らが渡来の手助けをしたと思う。紀元前後に、スサノオが筑前に侵攻し、さらに出雲を侵した。大国主は敗退し、その一族（アジスキタカヒコネら）は出雲から近江に遷った。この東遷に少彦名（スクナビコナ）も同伴したと思われる。次に、近江に進出したのは伽耶族の彦火明（ホアカリ）で、ホアカリの丹後降臨を海神族が手助けをし、その同伴者も近江に進出したと考える。ホアカリは海神族の大国主一族や宗像女神との婚姻関係をもっている。海神族のサルタヒコ（湖西の白髭神社の祭神）もその頃近江に進出した。その次は、筑前の奴国に根拠地を置いていた和邇氏で大国主に次いで東遷し近江に入り、2世紀半ば湖西に新たな奴国（『魏志倭人伝』で邪馬台国に入る直前の国）を建てた。このように、近江湖西は和邇氏が占め、大国主（とスクナビコナ）は湖北・湖東・湖南を占めた。『日本書紀』に大己貴大神(大国主の別名)が大己貴の国「玉牆の内つ国」を建てたとあるように、1世紀末に、大国主とスクナビコナは近江を核とし湖南の三上山を仰ぎ見る伊勢遺跡（守山市）を都とし伊吹山を神奈備とする玉牆の内つ国（近畿・中部・関東地方）を建てた。玉牆の内つ国とは、玉牆如き秀麗な山並みに囲まれ琵琶湖を湛えた近江の国が最も相応しい。この国は、西は但馬・播磨、東は越後・信濃・甲斐・駿河・武蔵に及んでいたと思われる。玉牆の内つ国は、『魏志倭人伝』に「もともと男子を王としていたが70～80年を経て倭国が相争う状況となった」とある「男子を王とする国」に当たり、巨大な「見る銅鐸」を祭器にしたと思われる。

2．2世紀中ごろ、アメノヒボコを同伴したニギハヤヒ（吉備で力を蓄える）の東征により倭国大乱が引き起こされた。アメノヒボコは第8代新羅王、阿達羅王の王子である。この物部を主力とする軍団は河内から大和に侵攻し、ホアカリの3世孫の倭宿禰が建てた玉牆の内つ国の支国（葛城王朝）を崩壊させ、さらに北上して玉牆の内つ国の都の近江湖南の伊勢遺跡を侵し、玉牆の内つ国を崩壊させた。ニギハヤヒは、和邇氏の巫女で大国主の血統の卑弥呼を共立し倭国大乱を鎮め、纒向遺跡を都とする邪馬台国（ヤマト国）を建てた。その邪馬台国の東側に玉牆の内つ国（大己貴の国）の後継国の狗奴国が建てられた。狗奴国の都は湖東の稲部遺跡ではないかと推察している。尚、物部軍団が湖南を侵攻した証と思われる勝部神社（守山市）が伊勢遺跡の北側にあり、草津市にはアメノヒボコを祀る安羅（阿羅）神社がある。アメノヒボコは近江から但馬に遷った。

3．邪馬台国の東端は、若狭ー近江（湖西・湖南）ー伊賀ー大和ー紀伊で、狗奴国は近江（湖東・湖北）ー美濃ー伊勢、以東となる。邪馬台国は、庄内土器・方形周溝墳（のち前方後円墳）をもって西に延び任那・伊都国連合を勢力下に治めた。一方、狗奴国は、S字甕・前方後方墳をもって東国に伸張した。かくて、倭国は西日本の邪馬台国と東日本の狗奴国とに二分されることになった。若狭の小浜は邪馬台国の外港として機能し、越前の角鹿（敦賀）は狗奴国の外港として機能したと思われる。

4．3世紀半ば邪馬台国の卑弥呼が死去し政治情勢が不安定化すると、邪馬台国と狗奴国との抗争が顕在化してきた。そこで卑弥呼の宗族である台与（息長水依姫か）を邪馬台国の女王とし、争乱を鎮めた。台与は狗奴国の都とされる稲部遺跡の近くの豊郷の出自ではないかと推察している。台与は開化天皇の皇子の日子坐王を夫とし丹波道主王命をもうけた。日子坐王は丹後、近江に勢力を伸ばした。日本海勢力と見なされる日子坐王と対抗したのが、瀬戸内海勢力の中心の、孝元天皇の皇子で開化天皇の同母兄弟である大彦である。邪馬台国は後世の南北朝時代のような様相を呈した。

（つづく）

（つづき）

5．1世紀半ば、首露王たる瓊瓊杵尊の降臨した伊都国は、ウガヤフキアエズ朝（ウガヤ朝）の系譜を辿り、南九州を勢力下においた。三世紀末、ミマキイリビコイリエの代に至り、中臣氏、大伴氏、忌部氏を伴い、久米人と隼人を連れ、大和に東征した。この崇神東征が神武東征譚の主要部分である。この東征は、邪馬台国の物部氏が崇神を引き込むために起こしたクーデターであったと推察する。崇神天皇は、大和の大国主勢力を一掃し、大彦の娘と結ばれた。崇神天皇は倭国を制圧するため四道将軍を西海、東海、北陸、山陰に派遣し平定した。日子坐王は狗奴国と協調関係を築いた。垂仁天皇の后の日葉酢媛命は、日子坐王と息長水依姫（台与か）の息子の丹波道主王命の娘で景行天皇をもうける。日子坐王の異母子の狭穂彦が乱を起こし、妹の狭穂姫命（垂仁天皇妃）と共に焼死する。この乱の敗北を契機に、日子坐王一族の権勢は傾いた。

6．景行天皇の御代、ヤマト王権の侵攻（日本武尊（ヤマトタケル）の東征）により、狗奴国は圧迫されたが、伊吹山一帯を最後の拠点とし戦いヤマトタケルを敗死させた。近江穴太を都にする成務天皇の御代にヤマトタケルの息子イナヨリワケにより狗奴国は完全に滅ぼされたと思われる。ここにヤマト王権の倭国支配が完遂した。ちなみに、近江の国一の宮（建部大社）の祭神は日本武尊（本殿）であるが、権殿には大己貴命（おおなむちのみこと、大国主の別名）が祀られている 。

7．スサノオの嫡流の息長氏の先遣隊（息長水依姫をもうける）の近江への進出は開化朝のことであり、景行・成務朝には、息長氏は琵琶湖に至る淀川水系に本格的に進出し、越前の角鹿に達していた。息長氏は、狗奴国滅亡後、鉄鉱石を産する伊吹山麓の湖東・湖北を領地とし勢力を伸ばし、東日本・北日本への交通の要衝を抑え、後世天皇を輩出する絶大な権力基盤を確立した。

8．神宮皇后（息長足姫）は、邪馬台国の台与の夫である日子坐王の4世孫で、アメノヒボコの6世孫である。神功皇后は、三韓征伐後、応神天皇（八幡神）を掲げ、住吉神を伴い東征し、ヤマト王権を息長氏の支配下に置いた。秦氏がこの政権を建築・土木や養蚕・機織り等の産業面で支えた。

海神族と伽耶族の近江進出を時系列で追うと、大国主（海神）、スクナビコナ（伽耶）、イザナミ・イザナギ（伽耶）、サルタヒコ（海神）、彦火明（伽耶）、和邇氏（海神）、物部（伽耶）、アメノヒボコ・安倍氏（伽耶）、日本武尊（伽耶）、息長氏（伽耶）となる。

（FB藤田泰太郎タイムライン投稿20/6/6））

参照： 古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）ー天孫族（伽耶族）の系譜

③ 031

秀麗な三上山：近江富士

藤田

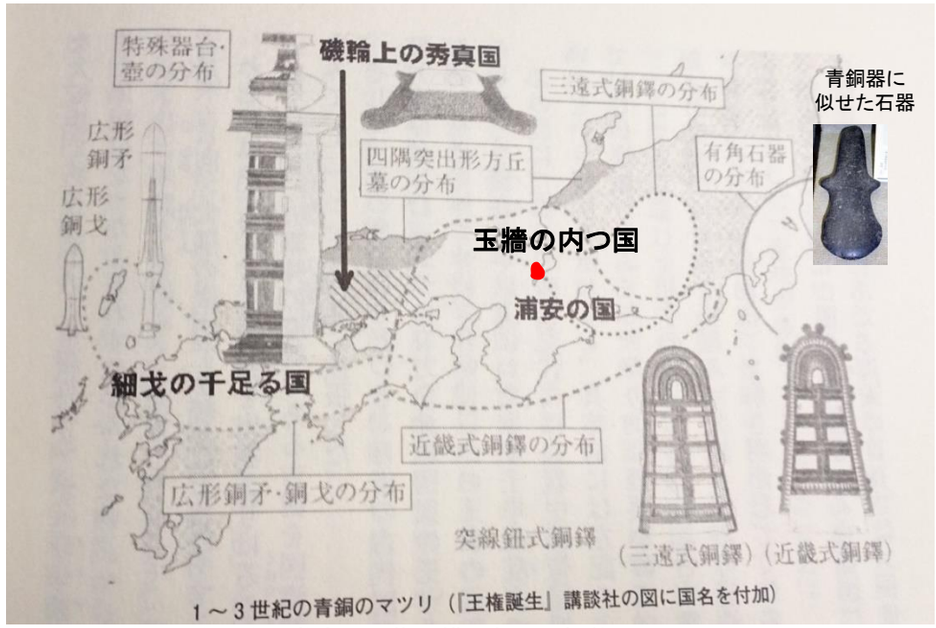
浦安の国 ⟶ 大己貴の国「玉牆の内つ国」

近畿・中部地方では大国主は大己貴と呼称される

大国主は弥生時代中期後葉には、出雲を中心とする玉、銅と鉄のネットワークを南九州と東北を除く倭国全域に広げた。紀元一世紀初頭、南朝鮮のスサノオが北九州および出雲へ侵攻した。大国主は敗退し祭祀の「聞く銅鐸」や銅剣を出雲に埋納し、ネットワークの中心を出雲より近江に遷した。この東遷により建てられた国が大己貴の国「玉牆の内つ国」である。尚、大国主とは、弥生時代中期から古墳時代前期までの国々の政治的および経済的ネットワークの中核をなす代々の出雲系人格の総称である。（藤田）

『日本書紀』には、
「昔伊弉諾尊目此国曰。日本者浦安国。細戈千足国。磯輪上秀真国。」 昔、伊弉諾尊、此国（このくに）を目（なづ）けて曰（のたま）はく。日本（やまと）は**浦安の国**、細戈の千足る国、磯輪上の秀真国。「復大己貴大神目之曰。**玉牆の内つ国**。復（また）大己貴大神(おおなむちのおおかみ)、目（なづ）けて曰（のたま）はく、玉牆の内つ国。」と記されている。

浦安の国
『日本書紀』には、イザナギが名付けた「浦安（うらやす）の国」（大国主の本貫地）、「細戈の千足る国（くわしほこのちだるくに）」、「磯輪上の秀真国（しわかみのほつまくに）」の三つの国があったと記されている。これらの国は右図のように特定の地域に対応した固有の意味をもち適当な創作とは考えられない。浦安の国は、弥生時代後期（1～2世紀）の大型銅鐸（近畿式、三遠式）の国と思われる。また、細戈の千足る国は筑紫で、磯輪上の秀真国は吉備か。（大国主対物部氏、藤井耕一郎）
「浦安の国」は弥生中期後葉から1世紀（75年頃）まで存在した。都は、近江湖南の近江二ノ畔・横枕遺跡か。銅矛を祭器にしたと思われる「細戈の千足る国」は北九州にあり、銅剣を祭器としたと思われる「磯輪上の秀真国」は吉備のみならず出雲も含むか。（藤田）



1～3世紀の青銅のマツリ（『王権誕生』講談社の図に国名を付加）
（大国主対物部氏、藤井耕一郎から転載）

玉牆の内つ国「大己貴の国」
女王国ではもともと男子を王としていたが70～80年を経て倭国が相争う状況となった。争乱は長く続いたが、邪馬台国の一人の女子を王とすることで国中が服した。名を卑弥呼という。（『三国志』「魏志倭人伝」や『後漢書』「東夷伝」）
男子とは大己貴大神（大国主）のことで、倭国大乱の前、70～80年続いたのは玉牆の内つ国であると考える。倭国大乱は2世紀中頃勃発したので、玉牆の内つ国は2世紀初頭から大乱の終結した2世紀末まで続いたと思われる。都は近江湖南の伊勢遺跡か。また、玉垣は「宝石のように美しい垣」ですが、これは綺麗な立派な「山に囲まれている」との意味で、近江を指すか。
倭国大乱はニギハヤヒとアメノヒボコの大和侵攻（ニギハヤヒの東征）により引き起こされ、卑弥呼を女王とする邪馬台国を建てることで終結した。この邪馬台国の建国により、玉牆の内つ国は崩壊した。この崩壊により伊勢遺跡は壊され、大和の纏向遺跡が邪馬台国の都となった。玉牆の内つ国で祭祀として使用していた「見る銅鐸」は、近くの大岩山山麓に埋納された。大国主は近江北東部に逃れ、狗奴国を建てるに至った。（藤田）

『日本書紀』記載の大己貴大神（大国主）が名付けた大己貴の国「玉牆の内つ国」とは、近江を核とする大国主の治める国の美称と思われる。実際の国名は「玉牆の内つ国」の後継国と思われる狗奴国ではないか。狗奴の狗はイヌを意味する、即ち狗奴国とは犬祖伝説をもつ海神族の国となる。大国主は犬祖伝説をもつ江南の国（越の一国か）からの渡来者で、越から銅鐸を持ち込んだと考える。実際、大国主の「玉牆の内つ国」では銅鐸を祭器にした。（藤田）

近江高天原説
近江高天原説は、近江に高天原があったという説で、その一つが、1966年、菊池山哉が著書『蝦夷と天ノ朝の研究』で唱えた説である。この説によると、「神々の住むところ」として、神話ではなくヤマト王権以前に近江に実在した王朝で、これこそがヤマト王権によって歴史から葬りされた古代王朝だとする。その上で「高天原は近江国湖南の野洲郡に仮定すべきだとする。そして、この王朝は卑弥呼・台与の邪馬台国の没落をもって終焉したとする。邪馬台国に敵対した狗奴国がヤマト王権を担い邪馬台国を終焉させた」と主張する。
拙著では、近江湖南の大国主の国（浦安の国およびその後継国の玉牆の内つ国（大己貴の国））がニギハヤヒとアメノヒボコの東征によって滅ぼされ、大和に邪馬台国が建てられた。狗奴国は、大国主によって支配された玉牆の内つ国の後継国となる。玉牆の内つ国の崩壊により、高天原が近江より葛城に遷ったものと考える。
（藤田）

玉牆の内つ国（大己貴の国）、そして邪馬台国と狗奴国

紀元前後に素戔嗚が北九州から出雲に侵攻し、大国主を敗退させ、近畿の近江へ遷させた。1世紀末、大己貴（大国主）は近江・湖南の伊勢遺跡を都とする大己貴の国「玉牆の内つ国」を建てた。玉牆の内つ国とは、玉牆如き秀麗な山並みに囲まれ琵琶湖を湛えた近江の国が最も相応しい。大己貴の国は、西は但馬・播磨、東は越後・信濃・甲斐・駿河に及んでいたと思われる。大己貴の国は、『魏志倭人伝』に「もともと男子を王としていたが70～80年を経て倭国が相争う状況となった」とある「男子を王とする国」に最も相応しく、巨大な「見る銅鐸」を祭器にしたと思われる。

2世紀半ば、吉備で力を蓄えたニギハヤヒ（子孫、孝霊天皇か）は来倭したアメノヒボコと協働し倭国大乱を引き起こし、大和へと侵攻した（ニギハヤヒの東征）。ニギハヤヒ・アメノヒボコの軍団は葛城王朝を倒し、さらに北上して近江・湖南を侵し、伊勢遺跡の大己貴の国を瓦解させ、多数の「見る銅鐸」を三上山麓の大岩山中腹に埋納させた。ニギハヤヒは大国主の血脈の和爾氏の巫女の卑弥呼を共立して、大和・纒向遺跡を都とする邪馬台国を建てた。一方、大国主は伊勢遺跡から北に逃れ、湖東の稲部遺跡を都とする、玉牆の内つ国の後継国の狗奴国を建てた。邪馬台国と狗奴国は列島を東西に2分；邪馬台国の東端の国々は、若狭・近江（湖西・湖南）・伊賀・大和・紀伊で、狗奴国の西端は越前・近江（湖北・湖東）・美濃・伊勢と考える。邪馬台国と狗奴国は抗争を止め、それぞれ西方と東方に拡大した。邪馬台国は、方形周溝墓（後には前方後円墳）と庄内式土器を伴い吉備より西に拡大し、任那・伊都国連合を勢力下に置いた。一方、狗奴国はS字甕と前方後方墳をもって東国までを勢力下においた。また、邪馬台国は魏の帯方郡から狗邪韓国（金官国）経由で小浜に至る東行航路と瀬戸内海の西行航路を抑えた。一方の狗奴国は伽耶(あるいは北朝鮮)から角鹿（敦賀）に至る航路と沖縄より伊勢・尾張に至る、黒潮ルートの東行航路（および逆の西行航路）を開いた。出雲では弥生時代の鳥人外洋舟の土器絵が出土し、奈良県天理市でも数十人乗りと思える外洋舟の土器絵が出土している。さらに、狗奴国の拠点の一つと考えられる美濃の荒尾南遺跡から大型船が描かれた線刻絵画土器が出土している。邪馬台国と狗奴国時代（3世紀）、魏、蜀、呉の三国は中国の覇権を巡り、苛烈な争いを展開していた。魏は遠交近攻策を取り、呉を牽制するために邪馬台（ヤマト）国の卑弥呼の求めに応じ「親魏倭王」の金印綬を授けた。一方、呉も魏を牽制するため琉球や狗奴国と黒潮ルートで親交を結ぶ遠交近攻策をとった。

3世紀半ばになり邪馬台国の卑弥呼の権勢が衰えてくると狗奴国との抗争が起こり、卑弥呼が死去すると争乱状態となった。男王（開化天皇か）が立つも乱は収まらず、卑弥呼の宗族の台与を立てて争乱を鎮めた。台与は日子坐王を夫とした息長水依姫と思われ、卑弥呼と同じく大国主の血脈で、狗奴国領域の湖東の豊郷の出自と思われる。台与と日子坐王は北近畿を勢力下に置き、狗奴国と協調したと思われる。この台与・日子坐王勢力に対抗したのが邪馬台国の正規軍団である物部氏の大彦である。大彦は任那・伊都国連合を統括する崇神を邪馬台国に招き入れるクーデータを起こし、ヤマト王権たる崇神王朝を建てた。台与・日子坐王と崇神・大彦の邪馬台国を南北に分断する確執は垂仁朝まで続いたが、垂仁朝に日子坐王の息子の狭穂彦が謀反を起こし、妹の狭穂姫命（垂仁天皇妃）と共に焼死して以来、台与と日子坐王の権勢は一気に傾いた。景行朝になると天皇自ら美濃に出兵し、また息子の日本武尊を東征させて、狗奴国勢力を弱体化させた。しかし、日本武尊は東征の最後に伊吹山に結集した狗奴国勢力のために敗死した。成務朝になると日本武尊の息子の稲依別が隼人の合力を得て湖東に集結した狗奴国勢力を討ち滅ぼした。

（FB藤田泰太郎タイムライン投稿20/4/1）

参照：　古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）－天孫族（伽耶族）の系譜　③　031

スサノオの筑紫・出雲への侵攻により、大国主は敗退し近江に遷る。大国主は近江を核とする玉牆の内つ国（都：伊勢遺跡）を建てた。

倭国大乱

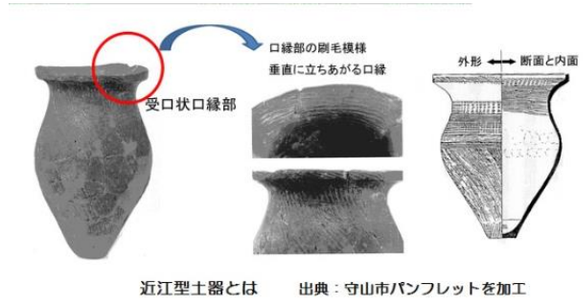
倭国大乱により玉牆の内つ国は邪馬台国と狗奴国に分裂。各々纒向遺跡と稲部遺跡を都とする。邪馬台国は任那・伊都国連合を勢力下置いた。

弥生の近江 1 （玉牆の内つ国：近畿政権（大己貴の国））

野洲川下流域の弥生遺跡（https://yasugawa-iseki.yayoiken.jp/）
>こんなに凄い遺跡だった > 近江型土器が語る弥生の近江商人？
（NPO法人　守山弥生遺跡研究会）

近江型土器が語る弥生の近江商人？

装飾性に富んだ縄文土器に比べ、弥生時代の土器はシンプルで機能的になります。弥生土器は、穀物などを貯蔵する壷は美しい文様で飾られても、煮炊きに使う甕は煤が付着するため、飾られることがないというのが一般的です。ところが近江では、煤が厚く付着し薄汚れた甕にも丹念に文様が刻まれています。煮炊きに使用する甕までに著しく文様を加える近江の地域色は、弥生文化の中で異彩を放っています。
もう一つの特徴は、土器の口縁部を「く」の字方に立ち上げるつくり方です。これを「受口状口縁」と呼んでいます。近江型土器に顕著な特徴「受口状口縁」の写真（右上）を示します。
近江型土器が現れるのは、弥生前期にその兆候が出てきますが、顕著な形になるのは中期半ばになる頃です。各地の弥生土器も地域色を持っていましたが、月日と共に変化し、飾らなくなりますが、近江型土器は弥生時代を通じてその形式を維持し続け、古墳時代中頃まで700年間以上も継承します。
【近江型土器の広がり】
弥生時代、人々は土器と共に移動し交易をしていました。弥生時代中期後半の下之郷遺跡が栄える弥生時代中期には、近江型土器は、淀川水系、河内、伊勢湾岸、尾張から山陰、北陸にまで広がっています。弥生後期、伊勢遺跡が栄える時期には、近江型土器はさらに広範に広がり、北九州から新潟、群馬、千葉に至るまで近江型土器が見つかっています（右下）。最近、韓国南部でも近江から搬入された近江型土器が2点発見されました（発掘は2005年、判明したのが2010年）。これまで、九州の土器が韓国で見つかることはあっても、近江の土器が韓国に渡っていたことは両国の考古学者にとって驚くべきことでした。それだけ広範囲に近江の人が積極的に移動し、おそらく交易をしていたということが伺われます。
　この時期、各地の人々も自分たち独自の土器を持って移動しており、東海地方のS字型土器や近畿の庄内式土器も、広く移動し、各地で見つかっています。しかし、量的には近江型土器がとても多いのです。近江型土器が伝わった各地では、その土地の土を使って近江型土器を作り始め、在地土器となります。
（藤田加筆）



近江型土器とは　　出典：守山市パンフレットを加工

弥生の近江 2 （玉牆の内つ国：近畿政権（大己貴の国））

野洲川下流域の弥生遺跡（https://yasugawa-iseki.yayoiken.jp/）
＞こんなに凄い遺跡だった＞銅鐸祭祀圏を統合した近畿政権＞弥生の祭祀から見えてくるる政治統合と近畿政権（NPO法人　守山弥生遺跡研究会）

銅鐸祭祀圏を統合した近畿政権（大己貴の国）（１）
～弥生の祭祀から見えてくる政治統合と近畿政権の誕生～

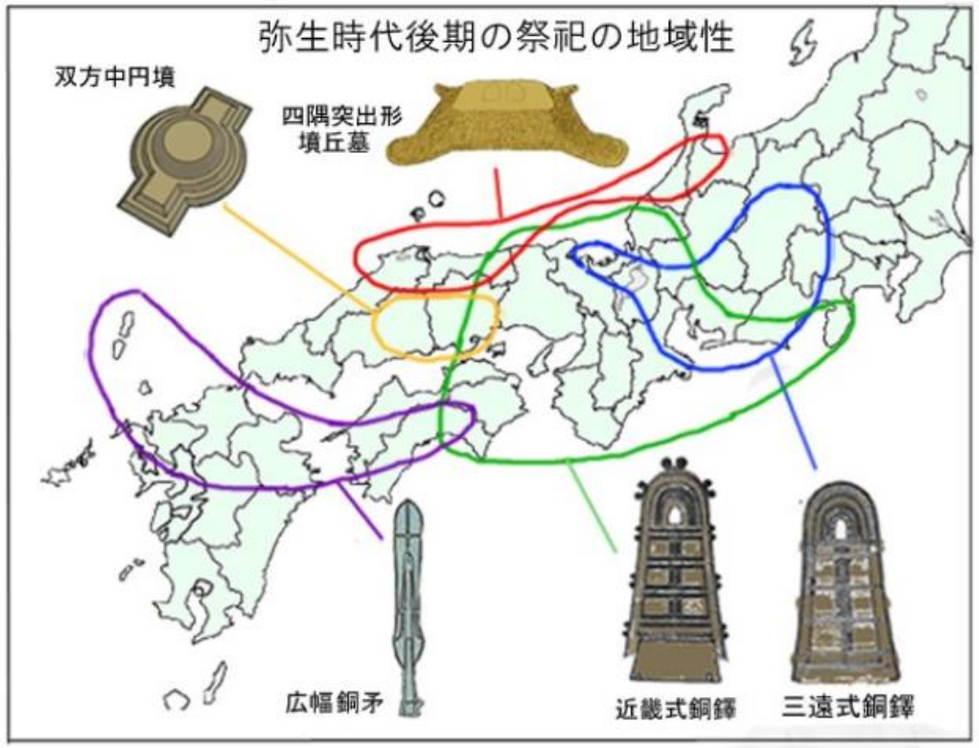
弥生後期の祭祀のシンボル（伊勢遺跡の時代）

弥生時代後期は、『魏志倭人伝』に記されているように、倭国に属する30余の国が分立していた時期です。しかし、中期末の社会変動により、次第に武器型祭祀や銅鐸祭祀を続けている地域と、青銅器祭祀を止めて、墳墓をシンボルとしてまとまっていくより大きなブロックが現れます。

後期祭祀のシンボル山陰地方は銅鐸や銅剣の祭祀から四隅突出型墳丘墓をシンボルとした祭祀に変わります。瀬戸内地方は双方中円墳をシンボルとした祭祀に移ります。銅鐸祭祀を続ける四国・近畿・東海も、「聞く銅鐸」から大きくて華麗な「見る銅鐸」へと祭祀のやり方が変わります。その「見る銅鐸」の形式も「近畿式銅鐸」と「三遠式銅鐸」へと集約されていきます。

弥生後期には、30余の国々は、祭祀の統合を通じてより大きなブロックにまとまっていたことが判ります。銅矛・銅剣祭祀を続ける北九州は、やがて大型広幅銅矛に統一されていきますが、それらは墓の副葬品ではなく、クニの祭祀に使用されるようになります。その一方で、豪華な装飾金具や大型中国鏡、鉄製武具を多数副葬する王墓が継続的に出現しており、ここに一大勢力（ウガヤ朝か）があったことが判ります。九州に比べ、中国文明の到達が遅れていた近畿地方も、大陸系文物が急速に搬入され、原初的な集落構成から政治勢力の総合が進みます。

右図のように、、地域政治勢力としては近畿地方の近畿政権と東海地方の尾張政権（大己貴の国）にまとまっていきます。瀬戸内地方では、吉備王権が地域政権として巨大な墳丘墓を築き「特殊器台」、「特殊壷（吉備型甕）」を副葬します。山陰地方では四隅が突出した巨大な墳丘墓を築く出雲政権（出雲王朝）としてまとまります。 このように相争った30国も祭祀を共通する大きな地域政権にまとまって行きました。ここで大切なのは、大己貴の国のように武力による制圧ではなく、銅鐸を祭器とする祭祀（宗教と言っていいか）を通じた連合であったことです。（藤田加筆）



出典：寺沢薫「王権誕生」に基づき作成

弥生の近江 ３　（玉牆の内つ国：近畿政権（大己貴の国））

野洲川下流域の弥生遺跡（https://yasugawa-iseki.yayoiken.jp/）
＞こんなに凄い遺跡だった＞銅鐸祭祀圏を統合した近畿政権 ＞状況証拠から見えてくる近畿政権（大己貴の国）の中核：近江
（NPO法人　守山弥生遺跡研究会）

銅鐸祭祀圏を統合した近畿政権（大己貴の国）（２）
～状況証拠から見えてくる近畿政権の中核：近江～

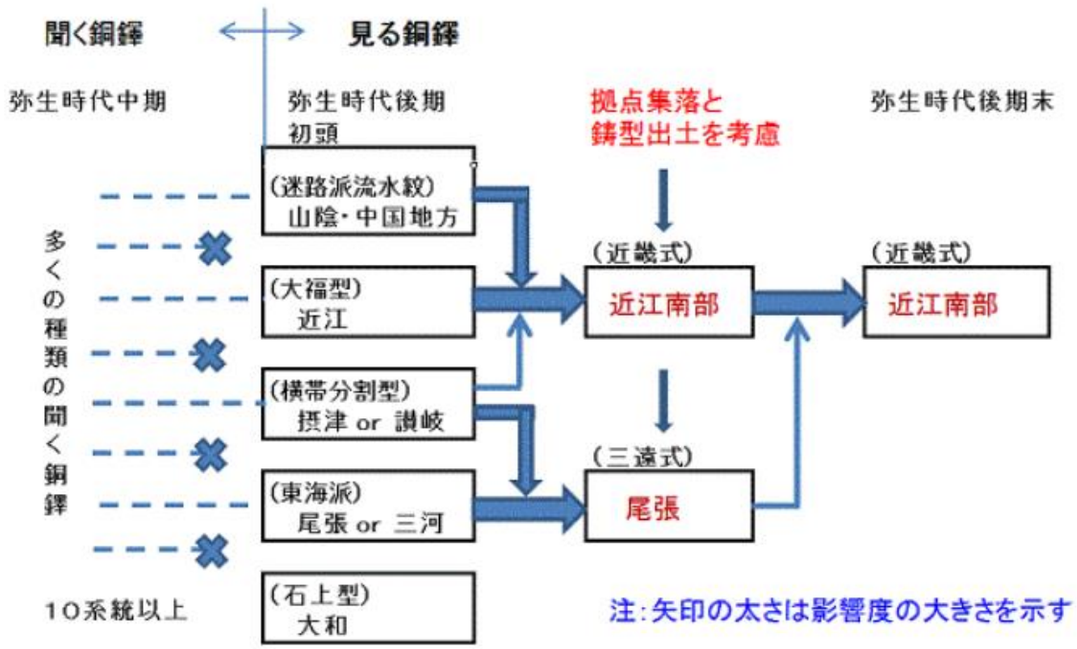
1．銅鐸祭祀を継続したのは近畿と東海で、近畿地方では、近畿政権（大己貴の国）が誕生していたと考えられる。その中核となる地域はどこなのか、銅鐸の制作主体の検討や状況証拠から推測していく。

銅鐸の変遷、出土状況から見えてくる製作地域（右図上）
青銅祭器の分布から地域政権の誕生と範囲が見えてきて、さらに銅鐸を詳しく調べることにより、小さな地域政権が政治的統合を行って大きな地域政権になる様子がみえました。では、その中核となる地域はどこなのかを絞り込むために、銅鐸の変遷、銅鐸や鋳型の出土状況から推測していきます。青銅祭器は権威の象徴であり、その政権のシンボルであるとすると、銅鐸が出土した場所よりも、誰が製作主体であったのかということが重要になります。

【近畿式銅鐸のルーツとしての大福型銅鐸の製作地域】
近畿式銅鐸のベースとなる大福型銅鐸は出土地が判明しているのは4個で、内3個は大岩山で見つかったものです。しかも、大岩山の24個の銅鐸の中で、一番古いのがこの形式で、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」の移行期に当るものです。このようなことから、難波さんは近江の工人が造ったものではないかと推測されています。ここで、近江南部が製作地域として浮かび上がります。

【近畿式、三遠式の双方に影響を与えた横帯分割型銅鐸の製作地域】
難波さんは、瀬戸内東部（摂津や讃岐）の工人集団が製作したのではと推測されています。さらに、弥生時代中期効用の横帯分割型銅鐸と平型銅剣の分布の重なる場所（讃岐）とも言われています。量的なことも考えると、この条件をよく満たすのは讃岐です。一方で、鋳型の出土地と考慮すると、摂津が有力な製作地域になります。

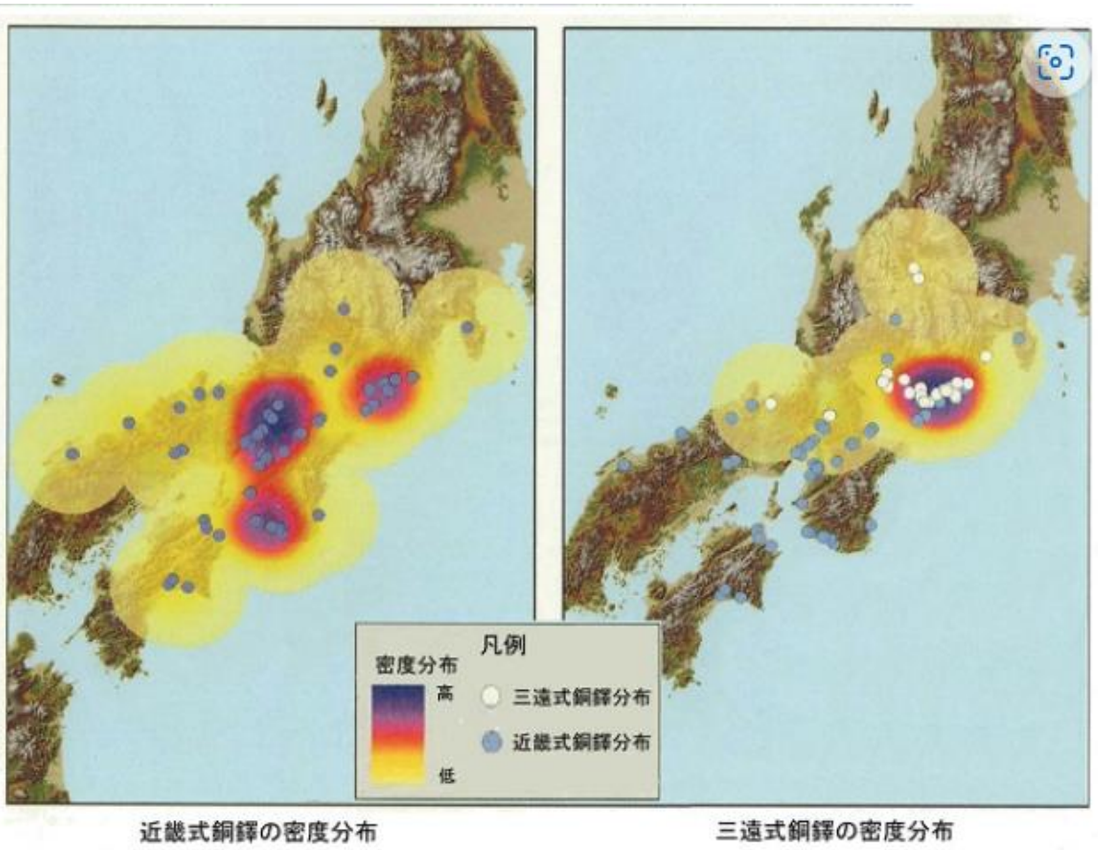
【三遠式銅鐸のルーツとしての東海派銅鐸の製作地域】
出土地が判っている東海派銅鐸は4個あり、1個は尾張から、3個が三河からです。東海派銅鐸の祖形は「聞く銅鐸」へさかのぼることができますが、これらは近畿以西から出土しており、製作工人たちは「見る銅鐸」の時期に東海へ移ったものと考えられます。尾張または三河の地域勢力が製作主体と考えられます、
（藤田加筆）



銅鐸製作主体の推定（難波洋三氏説を基に追加作成）

２．銅鐸祭祀を継続したのは近畿と東海で、近畿地方では、玉牆の内つ国：近畿政権（大己貴の国）が誕生していたと考えられます。では、その中核となる地域はどこなのか、銅鐸の制作主体の検討や状況証拠から推測していきます。

前スライドの「弥生時代後期の青銅器祭祀の地域性」で、銅鐸の分布範囲を示しましたが、その主力がどこであったのかを知るためには出土密度を見る必要があります。
　愛媛大学の吉田広さんたちはGIS解析の手法を使って青銅器祭祀の密度分布を視覚的に分かりやすく図示しています。その中から弥生時代後期の「見る銅鐸」の密度分布図（右図）を転記します。この図から、近畿式銅鐸は近畿東部（近江南部）に密度が高く、和歌山でも多く見られます。一方、三遠式銅鐸の密度分布は東海地方が圧倒的に高く、近畿、北陸にも密度は低いながらも広がっていることが見て取れます。
　また、東海地方でも近畿式銅鐸の密度が高くなっていますが、これは三遠式銅鐸が近畿式銅鐸に統合された後の銅鐸です。このように、銅鐸の密度分布からも地域政権の所在が近畿地方と東海地方にあったことが視覚的に判ります。近畿の勢力と東海の勢力が並び立っているように見えますが、最終的には、上にも述べたように近畿式銅鐸に統合され、銅鐸圏を広く治める近畿政権（大己貴の国）が浮かび上がってきます。

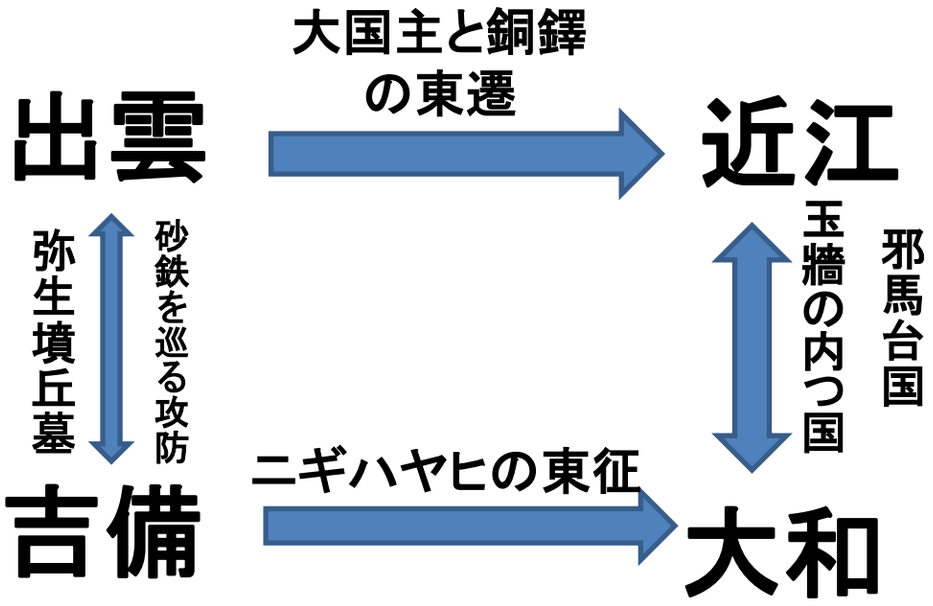


出典：吉田広ら　「弥生銅鐸のGIS解析～密度分布と埋納地からの可視領域」

【近畿型銅鐸最盛期の地域勢力】
弥生時代後期前半、近畿式銅鐸がどんどん大きくなり始める頃、近畿の拠点集落は解体し小さくなる中で、突如現れる巨大遺跡が**伊勢遺跡**です。吉野ヶ里遺跡や池上曽根遺跡と比べても大型建物が圧倒的に多く、祭祀空間としても巨大です。
ただ、伊勢遺跡は祭祀空間であって、近江勢力の拠点であったかどうかは判りませんが、伊勢遺跡またはその周辺に近江勢力の拠点があったと考えられます。
　先にも述べたように、近江型土器が全国に向けてどんどん拡散していくことからしても、この地に大きな力を持つ勢力があったことも確かです。また、先ほど、政治連携が武力ではなく、祭祀を通じてなされたと言いましたが、伊勢遺跡の祭祀空間がその役割を果たしたと充分考えられます。
　他に大きな勢力はなく、上記ような背景から、また、大福型の後継形式を強く受け継いでいることなどを勘案して、近畿式銅鐸の製作主体は「近江南部の勢力」と推定します。

『日本書紀』には、「イザナギ・イザナミ時代に3国（浦安（うらやす）の国、細戈の千足る国（くわしほこのちだるくに）、磯輪上の秀真国（しわかみのほつまくに））があり、大国主（大己貴）は**「玉牆の内つ国」**（美称、大己貴の国（近畿政権）で、実際は狗奴国？）を建て、饒速日命（ニギハヤヒ）は「虚空見つ日本（倭）国」（邪馬台国（ヤマト国にあたる！）を建てた」とある。
　文献的には弥生時代後期は、『後漢書』「東夷伝」によれば、「57年、倭の奴国王が後漢の光武帝に使いを送り金印を賜る」との事積から始まる。また、「107年、倭国王師升が朝貢し、生口160人を献上した」とある。さらに、「桓帝・霊帝の治世の間（146 - 189年）、倭国は大いに乱れ、互いに攻め合い、何年も主がいなかった。卑弥呼という名の一人の女子が有り、鬼神道を用いてよく衆を妖しく惑わした。ここに於いて共に王に立てた。」とある。『魏志倭人伝』には、「女王国ではもともと男子を王としていたが70～80年を経て倭国が相争う状況となった。（男子の王とは大己貴で、「玉牆の内つ国」（大己貴の国（近畿政権）を指す。）　争乱（倭国大乱）は長く続いたが、邪馬台国の一人の女子を王とすることで国中が服した。名を卑弥呼という。」とある。（藤田泰太郎）

弥生後期の四角関係



吉備と出雲の繋がり

●「素戔嗚の蛇を断ちし剣は、今吉備の神部のもとにあり」また「此の今石上（備前の石上布都魂神社）に坐す」『日本書記』
●『備後国風土記』の逸文に速須佐男神の伝承がみえ、備後の式内社として須佐能袁神社（福山市新市町）が鎮座する。速須佐男の子孫のニギハヤヒは吉備で力を蓄え、大和への東征にでる。ニギハヤヒは世襲名。
●出雲市の西谷3号・4号墓からは吉備でつくられた特殊器台が出土している。これらの墓は四隅突出型墳丘墓であるが、吉備の首長クラスの墳丘墓で用いられた特殊器台が四隅突出型墳丘墓で出土するということは、西暦200年前後のころ、出雲の首長層と吉備の首長層の間になんらかの政治的関係が存在したことを示している。ちなみに、四隅突出型墳丘墓は弥生時代中期後半に備後の三次盆地で発生したという。
●楽楽福神社にまつわる鬼退治の話は、砂鉄資源を奪い合う出雲と吉備の紛争である。
●振根と飯入根の争いに介入した人物が吉備津彦である。
（藤田）

吉備と大和の繋がり

●物部氏の祖、ニギハヤヒはスサノオの子孫で、吉備で勢力を蓄える。
●ニギハヤヒはアメノヒボコと倭国大乱を引き起こした。
●ニギハヤヒは孝霊天皇（卑弥呼＝倭迹迹日百襲姫命はその養女？）か。吉備およびその南北に孝霊伝承。
●ニギハヤヒは、大国主と卑弥呼を共立して、邪馬台国（虚空見つ日本の国)をたてる。
●大国主との国造りに関わったスクナビコナの死後、ニギハヤヒが現れる。ニギハヤヒと大物主（卑弥呼の夫？）は同一人物か。
●吉備型甕が発展した庄内型土器が卑弥呼の時代に纏向で使用される。吉備の弥生墳丘墓の特殊基台や弧帯文が纏向遺跡に見られる。
●卑弥呼（倭迹迹日百襲姫）と吉備津彦（桃太郎）とは姉弟！吉備と纏向は桃核の出土でもつながる。道教に繋がる卑弥呼の鬼道では桃核が祭祀に使われる。
●神武東征譚の主要部分は崇神東征と思われる。崇神は、ニギハヤヒを奉じるナガスネヒコを倒し、ヤマト王権（崇神王朝）を建てる。
（藤田）

近江と大和さらにヤマト政権との繋がり

❶ 大国主は、近江の三上山を神奈備とし、浦安の国や大己貴の国「玉牆の内つ国」を治めた。大国主の葛城や大和への進出はかなり早く紀元前と考える。
❷ 葛城と近江は水運で結ばれている。琵琶湖西岸（和邇氏本貫地）と東岸（息長氏本貫地）－瀬田川－宇治川－淀川－木津川－名張川の経路で、宇陀に入り、忍坂（桜井市忍阪）を超えて葛城に至る。このことから和邇氏（海神系）や息長氏（スサノオ系）と葛城氏との密接な関係が築かれた。息長氏は、木津川流域の筒木（京田辺市）や竹原の里（久御山）に拠点をもっていた。また、応神朝初期、磐の媛の歌に見える那羅山にあるように、葛城氏が、紀伊国－難波大津－淀川・木津川－山城国筒城－那羅山－倭－葛城高宮に至る水運を息長・和邇氏とともに掌握していたと思われる。大和の水銀朱（辰砂）鉱床が宇陀山地（宇陀市南部）にも達しており、露頭している場所を中心に古来から採掘が行われていた。この水銀朱は紀の川水系や木津川水系で全国に運ばれた。
❸『海部氏勘注系図』と『記紀』の天皇系図とを比較してみると、彦火明の3世孫倭宿禰が、丹後から近江に遷っていたアジスキタカヒコネを伴い、葛城に入ったと思われる。倭宿禰は第4代懿徳天皇に当たり、第４代懿徳天皇、第5代孝昭天皇から第9代開化天皇の間にお互いの系図に相関が見られる。第5代孝昭天皇と第6代孝安天皇は、葛城王朝の最盛期とみられる。第6代孝安天皇の同母兄が和邇氏の祖と見なされる天足彦国押人命である。
❹ ニギハヤヒとアメノヒボコが協働して倭国大乱を引き起こし、大和に侵攻し大国主勢力を圧倒した。ニギハヤヒは、和邇氏の巫女の卑弥呼を近江の伊勢遺跡より纏向遺跡に遷し邪馬台国を立てた。
❺ 玉牆の内つ国の後継国の狗奴国は、近江北部・美濃から東国を領し、大国主が治めた。
❻ 卑弥呼の死後、宗族の台与が後を継いだ。台与はオキナガミズヨリ姫で狗奴国内の近江の豊郷にいたと思われる。台与は日子坐王の妻となり、大和に遷った。
❼ 崇神天皇は九州から東征し、邪馬台国を解体し、崇神王朝を建てた。この時の戦いの破れた葛城勢力は河内（大阪）や山城（京都府南部）に逃れ、再起を窺った。孝元天皇の皇子で、山城、河内を根拠地とする武埴安彦王と妻の吾田媛が謀反を起こした。崇神天皇側の吉備津彦の軍が武埴安彦の妻の吾田媛の軍を河内で破った。一方、大彦命と和邇の祖、彦国葺（ヒコクニブク）の軍は武埴安彦の軍を破り、崇神天皇の政権は安定した基盤を築いた。
❽ 日子坐王は、但馬・丹後・若狭・近江・美濃を勢力下に置き、崇神天皇勢力に対抗した。
❾ 景行天皇の御代、伊吹山を最後の砦とする狗奴国勢力がヤマトタケルを敗死させた。天皇は近江国に行幸して、志賀高穴穂宮（現在の大津市穴太か）に3年間滞在した。
❿成務天皇は志賀高穴穂宮に宮を構え、伊吹山の八岐大蛇（大国主か）を倒し、近江を制し、琵琶湖の水運を掌握した。
⓫日子坐王の4世孫の神功皇后（オキナガタラスヒメ）は三韓征伐の後、息長氏の血を引く誉田別尊（後の応神天皇）を掲げて東征した際、異母兄にあたる香坂皇子と忍熊皇子が畿内で反乱を起こし戦いを挑んだが、神功皇后軍は武内宿禰や武振熊命（彦国葺命の孫）の働きによりこれを平定した。
⓬ 息長氏は、淀川水域から近江の北部（現在の米原市あたり）に遷り、伊吹山麓の鉄鉱資源を独占し、また近江と淀川水系の農工業の富を得、大いに隆盛した。この経済力を背景にヤマト政権に絶大な権勢を誇示した。
⓭ 応神天皇の立てた応神王朝が衰退し、武烈天皇の跡継ぎが絶え、近江の高島にいた応神天皇の5世の孫の男大迹王を天皇に迎えた。この異例の抜擢には近江の息長氏の後押しが大きいと言われている。
⓮ 男大迹王は現在の皇統に繋がるとされる継体天皇となった。息長氏は継体朝以降の天武天皇に至る歴代天皇の政治に大きな影響を及ぼした。
⓯ 天智天皇は近江宮（大津市錦織）を都とし、近江令や庚午年籍など律令制の基礎となる施策を実行した。天皇崩御後に朝廷の首班となった大友皇子（弘文天皇）は、近江を激戦の舞台とする壬申の乱で大海人皇子（後の天武天皇）に敗れたため、近江宮は5年余りで廃都となった。

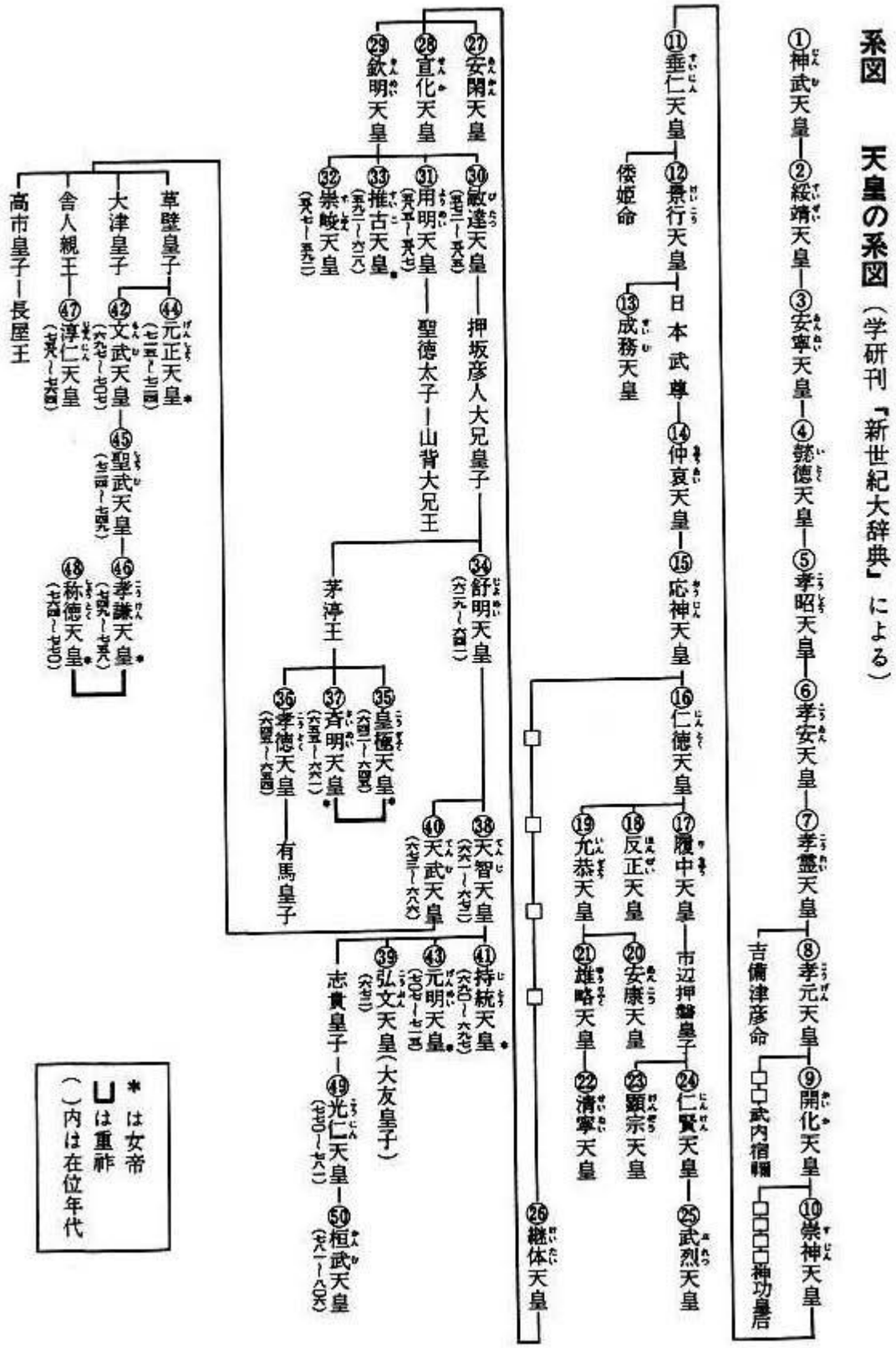
藤田

弥生時代後期の年表 （神武から崇神まで）

区分	年表	天皇	事項
(AD 50) 浦安の国	・スサノオ、筑紫さらに出雲に侵攻し出雲古国滅ぶ。 ・天孫降臨（天火明命（ホアカリ、新羅本記第4代脱解王）と瓊瓊杵尊（ニニギ）） 57年　脱解尼師今（脱解王）（～80年）、新羅第4代（昔氏始祖）、丹後のホアカリに当たる！ 57年　奴国王、後漢・光武帝に使いを送り、金印を賜る。『後漢書倭伝』 107年　倭国王、師升等（筑紫伊都国王？）、後漢・安帝に使いを送る。『後漢書倭伝』	1.神武 2綏靖 3安寧	（弥生中期後葉から、近江下之郷遺跡～二ノ畔・横枕遺跡が中心か） ・神武天皇の妃の出自を考えると、三島神の東征が南朝鮮系倭人の摂津・大和への進出の第1陣とも考えられる。この東征の時期はニニギやホアカリの降臨と同時期。この三島神の東征に、阿蘇山近辺で鉱物採取に当たっていた多氏が同伴したか。 ・第2代綏靖天皇は倭の最古の氏族、多氏の祖の神八井耳命の弟であり、多氏との関係が注目される。神武天皇から安寧天皇までは葛城多氏王権とも考えられる。 ・「見る銅鐸」の製造始まる（近畿式、三遠式） ・三次発の四隅突出型墳丘墓が出雲から日本海沿岸に広がる。 ・奴国は伊都国に圧倒された。この頃、奴国の王族の和邇氏が若狭へ遷る。 ・師升は伊都国王で、スサノオの後裔とみる。
玉牆の内つ国 ― 大己貴（大国主）の国	2世紀の第1四半世紀　大国主、玉牆の国を建国 146年　**倭国大乱**（- 189年） 157年　新羅第8代・阿達羅（あだるら）王の王子、延烏郎（アメノヒボコ）、来倭 158年　皆既日蝕（迎日湾～吉備） 184-190年　後漢「中平」と紀年銘の鉄剣、和邇氏にわたる（後漢から戦勝祈願で賜るか）。	4懿徳 5孝昭 6孝安	（国都：近江伊勢遺跡） ・見る銅鐸の巨大化（近畿式のみになる）。 ・吉備に大型墳丘墓 ・「海部氏勘注系図」によるとホアカリの三世孫の倭宿禰が大和に進出したとある。ホアカリを第1代天皇（神武）とすると、第4代の懿徳天皇が倭宿禰にあたる。さらに、第4代～第9代天皇は「海部氏勘注系図」に関係付けられる。 ・第4代～第6代天皇が葛城朝（秋津洲）で、玉牆の内つ国の支国と思われる。孝昭天皇はコトシロヌシか。 ・和邇氏が近江湖西に入り、さら大和に入る。 ・吉備の特殊器台が出雲に現れ、その後河内を経て大和に移動する。 ・日本海勢力（大国主と少彦名）は、新羅からの但馬、丹後、若狭への鉄のルートを築き、出雲、吉備と伊都国を除く本州中央部を勢力下に置いた。これに対しニギハヤヒに率いられた瀬戸内海勢力（吉備と巨文島系の海人）は、アメノヒボコ（新羅から渡来し因幡、但馬そして播磨を席巻）と合流し東征、大和を支配下に置いた。所謂ニギハヤヒの東征である。 ・少彦名はこの倭国大乱で敗死か？ ・「見る銅鐸」の大量埋納（近江大岩山古墳群）
邪馬台国 ― 虚空見つ倭国	190年頃　玉牆の内つ国瓦解、卑弥呼を共立し乱収まる。邪馬台国建国。卑弥呼は倭迹迹日百襲姫命と思われる。 189年以降、公孫氏有力化 3世紀初頭、公孫氏、楽浪郡を廃し、その南部に帯方群を置く。 この頃邪馬台国、伊都国に一大率を置く。 220年　中国、三国時代始まる。 238年　魏により公孫氏、滅亡 239年　卑弥呼、魏に使い（難升米・都市牛利ら）を送り、親魏倭王に任じられ（三角縁神獣鏡）銅鏡百枚などを賜る。 243年倭王再び魏に使い（伊聲耆ら）を送る。 245年魏帝、難升米に黄幢を賜る。 この頃、卑弥呼死す。箸墓に葬られる。 男王が立つが収まらず、卑弥呼の宗女の台（臺）与を女王とする。台与、魏に使い、（掖邪狗ら）を送る。 台与は息長水依姫（オキナガミズヨリヒメ）と思われる。 265年　晋（- 420年）　司馬炎が魏最後の元帝から禅譲を受けて建国した。 266年　倭、台与、西晋(晋)に使いを送る。 崇神東征	7孝霊 8孝元 9開化	（国都：纒向遺跡） ・ニギハヤヒ(物部の祖、吉備のスサノオの後裔）は、大国主と和邇氏と談判し和邇の巫女（卑弥呼）を伊勢遺跡から纒向遺跡に遷し邪馬台国を建て、倭国大乱を終結させた。孝霊天皇は「海部氏勘注系図」の日本得魂命に当たる。 ・孝霊伝承によると、吉備が美作、因幡、但馬、播磨、讃岐に勢力を拡大し、孝霊天皇の御代に大和の大部分を治めた。卑弥呼（倭迹迹日百襲姫）は、孝霊天皇の養女になったか。孝霊天皇はニギハヤヒで、大物主と思われる。 ・卑弥呼は、公孫氏より手に入れた画文帯神獣鏡を威信財として有力豪族に配ったが、その出土は畿内の古墳に限られている。 ・本州西部を手中に治めたニギハヤヒと卑弥呼（邪馬台国）は伊都国と南朝鮮（任那・伊都国連合）をも勢力下においた。 ・帯方郡から邪馬台国への経路は日本海経由で、投馬国は出雲。 ・吉備由来の庄内式土器が大和から北九州に、狗奴国（玉牆の内つ国の後継国か）由来のS字型甕が東国に広がる。 ・三角縁神獣鏡も威信財として国内に配った。魏滅亡後、晋からこの鏡を得ていたが、調達不能になり国内で製造した。 ・難升米と伊聲耆は任那・伊都国連合にいた中臣氏の一族であり、都市牛利は丹波大縣主由碁理で掖邪狗は和邇日子押人命か。また、大伴氏は新羅の昔氏を継いだ氏族か？ ・邪馬台国（卑弥呼）、狗奴国（男王卑弥弓呼）とは、まえまえから不和であった。当時、邪馬台国はたびたび狗奴国の侵攻を受ける。 ・吉備由来の前方後円墳が邪馬台国に、狗奴国（北東近江と美濃が中心の東日本）に前方後方墳広がる。 ・卑弥呼が死に箸墓に葬られる。男王立つが国中は不服で、こもごもあい誅殺した。当時千余人を殺しあった。 ・この抗争は卑弥呼の宗女の台与を女王とすることで一応収束する。 （近江の天の御影神（息長氏か）の後の台与は卑弥呼の姪（孫）とも言われる。台与は大国主の狗奴国の領域の近江の豊郷にいたと思われ、彦（日子）坐王の妻となる。） ・開化天皇の異母兄弟（**大彦命**）と大彦の子（武渟川別）、彦国葺、吉備津彦（瀬戸内海側）と開化天皇の異母兄弟（武埴安彦命）、開化天皇の子（**彦坐王**）（日本海側）との間に抗争があった。狗奴国勢力は日本海系に加担したと思われ、東征してきた崇神勢力は瀬戸内海系を支援したと思われる。 ・武埴安彦と妻の吾田媛が謀反を起こした。吉備津彦が吾田媛を破り、一方、大彦命と彦国葺は武埴安彦を破った。 ・崇神勢力（大彦ら）が大和を制圧し、ウマシマジと天香久山に出雲を挟撃させる。 ・四道（北陸、東海、西海、丹波）に四道将軍（大彦、武渟川別、吉備津彦、彦坐王）を派遣し各道を制圧する。
崇神王朝	4世紀初め　邪馬台国亡び、崇神王朝（ヤマト王権）成立	10崇神	・崇神元年は315年．崇神・垂仁朝になっても崇神（大彦ら）と台与・彦坐王の対立は続く。

歴代天皇の漢風諡号

淡海 三船（おうみ の みふね、722-785）は、大友皇子の曽孫。
『釈日本紀』所引「私記」には、三船が神武天皇から元正天皇までの全天皇（弘文天皇と文武天皇を除く）と15代帝に数えられていた神功皇后の漢風諡号を一括撰進したことが記されている。



歴代天皇と宮

	代数	天皇	読み	在位	本名(いみな)	読み	古事記	日本書紀・続日本	読み	推定地	記事	天皇
神武即位(天孫降臨)1世紀半ば	1	神武	じんむ	BC660～BC585	神日本磐余彦	かむやまといわれひこ	白檮原宮	橿原宮	かしわらのみや	奈良県橿原市畝傍町		神武
	2	綏靖	すいぜい	BC581～BC549	神淳名川耳	かんぬなかわみみ	葛城高丘宮	葛城高丘宮	かつらぎのたかおかのみや	奈良県御所市森脇		綏靖
	3	安寧	あんねい	BC549～BC511	磯城津彦玉手看	しきつひこたまてみ	片塩浮穴宮	片塩浮孔宮	かたしおのうきあなのみや	奈良県大和高田市三倉堂		安寧
	4	懿徳	いとく	BC510～BC477	大日本彦耜友	おおやまとひこすきとも	軽境岡宮	軽曲峡宮	かるのまがりおのみや	奈良県橿原市大軽町		懿徳
	5	孝昭	こうしょう	BC475～BC393	観松彦香殖稲	みまつひこかえしね	葛城掖上宮	掖上池心宮	わきのかみのいけこころのみや	奈良県御所市池之内		孝昭
	6	孝安	こうあん	BC392～BC291	日本足彦国押人	やまとたらしひこくにおしひと	室秋津島宮	室秋津島宮	むろのあきつしまのみや	奈良県御所市室	秋津島は後に大和の枕詞になる	孝安
	7	孝霊	こうれい	BC290～BC213	大日本根子彦太瓊	おおやまとねこひこふとに	黒田廬戸宮	黒田廬戸宮	くろだのいほとのみや	奈良県磯城郡田原本町黒田		孝霊
	8	孝元	こうげん	BC214～BC158	大日本根子彦国牽	おおやまとねこひこくにくる	軽境原宮	軽境原宮	かるのさかいはらのみや	奈良県橿原市大軽町		孝元
	9	開化	かいか	BC158～BC98	稚日本根子彦大日日	わかやまとねこひこおおひひ	春日伊邪河宮	春日率川宮	かすがのいさかわのみや	奈良県奈良市子守町		開化
崇神即位 AD315	10	崇神	すじん	BC97～BC30	御間城入彦五十瓊殖	みまきいりびこいにえ	師木水垣宮	磯城瑞籬宮	しきみずがきのみや	奈良県桜井市金屋	三輪王朝の始祖　四道将軍	崇神
	11	垂仁	すいにん	BC29～70	活目入彦五十狭茅	いくめいりひこいさち	師木玉垣宮	纒向珠城宮	まきむくのたまきのみや	奈良県桜井市穴師		垂仁
	12	景行	けいこう	71～130	大足彦忍代別	おおたらしひこおしろわけ	纒向之日代宮	纒向之日代宮	まきむくのひしろのみや	奈良県桜井市穴師	全国支配の確立期、ヤマトタケル	景行
								高穴穂宮	たかあなほのみや	滋賀県大津市坂本穴太町		
	13	成務	せいむ	131～190	稚足彦	わかたらしひこ	高穴穂宮	高穴穂宮	たかあなほのみや	滋賀県大津市坂本穴太町		成務
	14	仲哀	ちゅうあい	192～200	足仲彦	たらしなかつひこ	穴門之豊浦宮	穴門豊浦宮	あなとのとゆらのみや	山口県下関市長府町豊浦	神功皇后	仲哀
							筑紫訶志比宮	橿日宮	かしひのみや	福岡県福岡市東区香椎町		
応神即位 AD390	15	応神	おうじん	270～310	誉田別	ほむたわけ	軽嶋之明宮	明宮	あかるのみや	奈良県橿原市大軽町	三輪王朝に替わり、河内王朝の始祖	応神
								難波大隈宮	なにはのおおすみのみや	大阪府大阪市東区		
	16	仁徳	にんとく	313～399	大鷦鷯	おおさざきの	難波之高津宮	難波高津宮	なにはのたかつのみや	大阪府大阪市東区	讃	仁徳
	17	履中	りちゅう	400～405	去来穂別	いざほわけ	伊波礼之若桜宮	磐余稚桜宮	いわれのわかさくらのみや	奈良県桜井市池之内		履中
	18	反正	はんぜい	406～410	多遅比瑞歯別	たじひのみずはわけ	多治比之柴垣宮	丹比柴籬宮	たじひのしばがきのみや	大阪府松原市上田町	珍	反正
	19	允恭	いんぎょう	412～453	雄朝津間稚子宿禰	おあさづまわくごのすくね	遠飛鳥宮		とおつあすかのみや	奈良県高市郡明日香村	済(確)	允恭
	20	安康	あんこう	453～456	穴穂	あなほ	石上之穴穂宮	石上穴穂宮	いそのかみのあなほのみや	奈良県天理市田町	興(確)	安康
	21	雄略	ゆうりゃく	456～479	大泊瀬幼武	おおはつせのわかたけ	長谷朝倉宮	泊瀬朝倉宮	はつせのあさくらのみや	奈良県桜井市黒崎	武(たけ)(確)　471年、稲荷山古墳の鉄剣(治天下)	雄略
	22	清寧	せいねい	480～484	白髪武広国押稚日本根	しらかのたけひろくにおしわかやまとねこ	伊波礼之甕栗宮	磐余甕栗宮	いわれのみかくりのみや	奈良県桜井市池之内		清寧
	23	顕宗	けんそう	485～487	弘計	をけ	近飛鳥宮	近飛鳥八釣宮	ちかつあすかやつりのみや	奈良県高市郡明日香村八釣		顕宗
	24	仁賢	にんけん	488～498	億計	おけ	石上広高宮	石上広高宮	いそのかみののひろたかのみや	奈良県天理市石上町		仁賢
	25	武烈	ぶれつ	498～506	小泊瀬稚鷦鷯	こはつせのわかささぎ	長谷之列木宮	泊瀬列城宮	はつせのなみきのみや	奈良県桜井市出雲		武烈
継体即位 AD507	26	継体	けいたい	507～531	男大迹	おおどの		樟葉宮	くすばのみや	大阪府牧方市楠葉	天皇の後継がなく、越前から迎えられ即位(応神天皇五世の	継体
								筒城宮	つつきのみや	京都府京田辺市多々羅	527年、筑紫国造磐井の反乱	
								弟国宮	おとくのみや	京都府長岡京市		
							伊波礼之玉穂宮	磐余玉穂宮	いわれのたまほのみや	奈良県桜井市池之内		
	27	安閑	あんかん	531～535	広国押武金日	ひろくにおしたけかなひ	勾之金箸宮	勾金橋宮	まがりのかなはしのみや	奈良県橿原市曲川町	武蔵国造の乱	安閑
	28	宣化	せんか	535～539	武小広国押盾	たけおひろくにおしたて	檜垣廬入野宮	檜隈廬入野宮	ひのくまのいほりののみや	奈良県高市郡明日香村檜前		宣化
	29	欽明	きんめい	539～571	天国排開広庭	あめくにおしはらきひろにわ	師木嶋大宮	磯城嶋金刺宮	しきしまのかなさしのみや	奈良県桜井市外山	562年、任那の滅亡	欽明
	30	敏達	びだつ	572～585	淳中倉太珠敷	ぬなくらふとたましき		百済大井宮	くだらおおいのみや	奈良県桜井市吉備		敏達
							他田宮	訳語田幸玉宮	おさださきたまのみや	奈良県桜井市戒重(かいじゅう)		
	31	用明	ようめい	585～587	橘豊日	たちばなのとよひ	池辺宮	磐余池辺双槻宮	いわれのいけべなみつきのみや	奈良県桜井市池之内		用明
	32	崇峻	すしゅん	587～592	泊瀬部	はつせべ	倉椅柴垣宮	倉梯宮	くらはしのみや	奈良県桜井市倉橋		崇峻
	33	推古	すいこ	592～628	額田部	ぬかたべ		豊浦宮	とゆらのみや	奈良県高市郡明日香村豊浦	603年、冠位十二階　604年、憲法十七条	推古
							小墾田宮	小墾田宮	おはりだのみや	奈良県高市郡明日香村豊浦・橿原	607年、遣隋使	
	34	舒明	じょめい	629～641	息長足日広額	おきながたらしひひろぬか		飛鳥岡本宮	あすかおかもとのみや	奈良県高市郡明日香村小山		舒明
								田中宮	たなかのみや	奈良県橿原市田中町		
								厩坂宮	うまやさかのみや	奈良県橿原市大軽町		
								百済宮	くだらのみや	奈良県桜井市吉備		
	35	皇極	こうごく	642～645	宝	たから		飛鳥板蓋宮	あすかいたぶきのみや	奈良県高市郡明日香村岡	645年、大化の改新(乙巳の変)	皇極
	36	孝徳	こうとく	645～654	天万豊日	あめよろずとよひ		飛鳥板蓋宮	あすかいたぶきのみや	奈良県高市郡明日香村岡		孝徳
								難波長柄豊碕宮	なにわのながらのとよさきのみや	大阪府大阪市東区法円坂町		
								後飛鳥岡本宮	のちのあすかおかもとのみや	奈良県高市郡明日香村小山		
	37	斉明	さいめい	655～661	宝	たから		飛鳥川原宮	あすかかわはらのみや	奈良県高市郡明日香村川原	皇極天皇重祚	斉明
	38	天智	てんじ	668～671	天命開別	あめみことひらかすわけ		近江大津宮	おうみおうつのみや	滋賀県大津市南滋賀町	663年、白村江の戦で惨敗	天智
	39	弘文	こうぶん	671～672	大友	おおとも		近江大津宮	おうみおうつのみや	滋賀県大津市南滋賀町	672年、壬申の乱　弘文天皇は日本書紀から削除されている	弘文
	40	天武	てんむ	673～686	大海人	おおあま		飛鳥浄御原宮	あすかきよみはらのみや	奈良県高市郡明日香村飛鳥		天武
	41	持統	じとう	690～697	鸕野讃良	うののさらら		飛鳥浄御原宮	あすかきよみはらのみや	奈良県高市郡明日香村飛鳥		持統
								藤原宮	ふじわらのみや	奈良県橿原市	藤原京は日本最初の都城	
	42	文武	もんむ	697～707	軽	かる		藤原宮	ふじわらのみや	奈良県橿原市	701年、大宝律令なる	文武
	43	元明	げんめい	707～715	阿閉	あへ		藤原宮	ふじわらのみや	奈良県橿原市	710年、平城京に遷都	元明
								平城宮	ならのみや	奈良県奈良市	712年、太安麻呂、古事記を撰上	
	44	元正	げんしょう	715～724	氷高	ひたか		平城宮	ならのみや	奈良県奈良市	720年、舎人の親王ら、日本書紀を撰上	元正
	45	聖武	しょうむ	724～749	首	おびと		平城宮	ならのみや	奈良県奈良市	749年、東大寺の大仏開眼	聖武
								甚仁宮	くにのみや	京都府相楽郡加茂町		
								紫香楽宮	しがらきのみや	滋賀県甲賀郡信楽町		
								難波宮	なにわのみや	大阪府大阪市東区		
								保良宮	ほらのみや	滋賀県大津市国分		
								由義宮	ゆげのみや	大阪府八尾市八尾木		
	46	孝謙	こうけん	749～758	安倍	あべ		保良宮	ほらのみや	奈良県奈良市		孝謙
	47	淳仁	じゅんにん	758～764	大炊	おおい		平城宮	ならのみや	滋賀県大津市国分		淳仁
	48	称徳	しょうとく	764～770	安倍	あべ		平城宮	ならのみや	奈良県奈良市	孝謙天皇重祚	称徳
	49	光仁	こうにん	770～781	白壁	しらかべ		平城宮	ならのみや	奈良県奈良市	光仁天皇(天智の孫)の即位は天武系から天智系に交替	光仁
	50	桓武	かんむ	781～806	山部	やまべ		長岡宮	ながおかのみや	京都府向日市鶏冠井町	794年、平安京に遷都	桓武
								平安宮		京都府京都市上京区		

天皇の本名(いみな)の「足(タラス)」は、「平らげる」とか「征服する」との意味であるとする。(大国主対物部氏、藤井耕一郎)
例えば、孝元天皇のヤマトタラスヒコクニオシヒトは、「ヤマトを平らげたヒコクニオシヒト」の意であろう。

高天原と神々の渡来

高天原

『古事記』においては、その冒頭に「天地（あめつち）のはじめ」に神々の生まれ出る場所としてその名が登場する。次々に神々が生まれ、国産みの二柱の神が矛を下ろして島を作るくだりがあるから、海の上の雲の中に存在したことが想定されていたと推測される。天照大御神が生まれたときに、高天原を治めるよう命じられた。須佐之男命にまつわる部分では、高天原には多くの神々（天津神）が住み、天之安河や天岩戸、水田、機織の場などもあったことが記述されており、人間世界に近い生活があったとの印象がある。葦原中国が天津神によって平定され、天照大御神の孫の邇邇芸命が天降り（天孫降臨）、以降、天孫の子孫である天皇が葦原中国を治めることになったとしている。（Wikipedia抜粋）
私見では、高天原は高靈加羅（大伽耶）と考えている。
（藤田）

天津神

【造化三神】

天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）- 至高の神
高御産巣日神（たかみむすひのかみ）- 征服や統治の神
神産巣日神（かみむすひのかみ）- 生産の神

【神代七代の最終段】

伊邪那岐神（いざなぎのかみ）
伊邪那美神（いざなみのかみ）

【イザナギ・イザナミの神産みの最終段、三貴子】

天照大御神（あまてらすおほみかみ）
月読命（つくよみのみこと）
建速須佐之男命（たけはやすさのをのみこと）
天照大御神に首飾りの玉の緒を渡して高天原を委任した。その首飾りの玉を御倉板挙之神（みくらたなののかみ）という。月読命には夜の食国（をすくに）を、建速須佐之男命には海原を委任した。

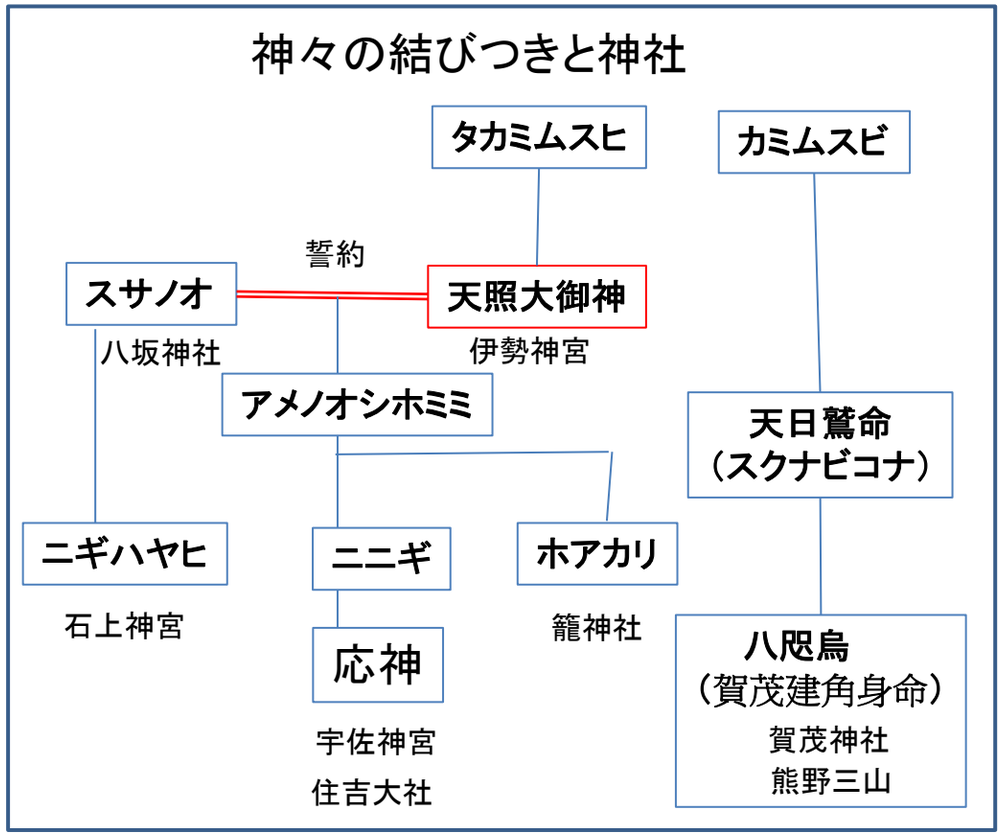
【天孫】

ニニギ、ホアカリ、
ニギハヤヒ（天孫と同格）

天津神と国津神

天津神（スサノオ、ニニギ、ホアカリなど）は天孫族とほぼ同じで、南朝鮮に流浪してきた江南人（海神族）の影響を受けた倭人（縄文人）が北九州に帰来したものと考える。国津神（大国主、サルタヒコなど）は江南人（海神族）が直接列島に流浪してきたのち、倭人（縄文系）と交雑したものと考える。

天津神と国津神は、それぞれ、天神と地祇ともいう。一般に、天神は高天原(たかまがはら)に生まれた神、あるいは葦原の中つ国に天降った神で、地祇はこの国土の神とされる。
（藤田）



天津神とユダヤの影

辰韓と古代中国人との関係を記す、『後漢書』巻85辰韓伝、『三国志』魏書巻30辰韓伝、『晋書』巻97辰韓伝、『北史』巻94新羅伝によると、秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人あるいは秦の滅亡によって亡民となった秦人に、馬韓はその東の地を割いて与え住まわせ、辰（秦）韓と名づけたという。そのため、秦韓の言葉には秦語（陝西方言。長安に都があった頃の標準語で、この亡民が秦代～前漢代に渡来したことを物語る）が混じり、秦韓人とも称された。秦人は漢人以外の民族を総称することがあり、秦人にはかなりのユダヤ人やペルシャ人が含まれていた。彼らが、中央アジア経由で、倭（ヤマト）や新羅の語源（シラキ）、くしふるの峰、十六菊家紋等々をもってきたと思われる。

秦韓の地は、倭人が居住する伽耶（弁韓）の大伽耶（伊西国）の北側に位置し、その民の秦人は伽耶の倭人と混雑したと思われる。伽耶の南部の金官国の首露王は天孫のニニギと思われ、1世紀半ば、伊都国に降臨した。その同伴者に祭祀を与る忌部氏の祖、天太玉命が含まれる。天太玉命はユダヤ系かと言われる。忌部氏が天孫族の祭祀を担い、イスラエルの祭祀形式を倭国に持ち込んだ可能性がある。ヤマトはヤハウェ（エホバ）の民（ヤー・ウマト）を意味するヘブライ語に由来するともいう。また、中東系の人々（ユダヤ人やペルシャ人）が「くしふるの峰」を倭国に持ち込み、糸島市の高祖山、高千穂町のくしふる山、橿原市の橿原宮と、天孫族の足跡とともに再生を繰り返した。尚、三貴神の一人のスサノオは、別名をヘブライ語のゴズ（牛頭）といい、蘇民将来のユダヤ伝説に絡み、ユダヤ系であることを匂わせる。スサノオの後のニギハヤヒ（物部の祖）が東征して邪馬台国を建てたとき、ヘブライ語由来の「ヤマト」（倭）に因んだ国名（ヤマト）にした可能性がある。

応神朝に秦韓の民の末裔で景教徒の秦氏が大挙来倭し、ユダヤ教と景教に因む神道の神社や祭祀、大型土木・建築技術、養蚕等々を倭国に持ち込んだが、ヤマト王権の中枢とは距離を置き、政権には深く関与しなかったと思われる。このように天孫降臨の時代のユダヤ人や応神朝の秦氏がユダヤ教や景教の一神教に因む祭祀様式を持ち込んだが、倭国の多神教の神道に同化され、ユダヤの影響は神社の建築様式や祭祀および日本語の語彙にのみに残されたと思われる。
（藤田、FB投稿2020－2-11）

天孫降臨からヤマト王権（崇神王朝）まで

天孫降臨(1世紀半ば)

（bokete. jp、Net）

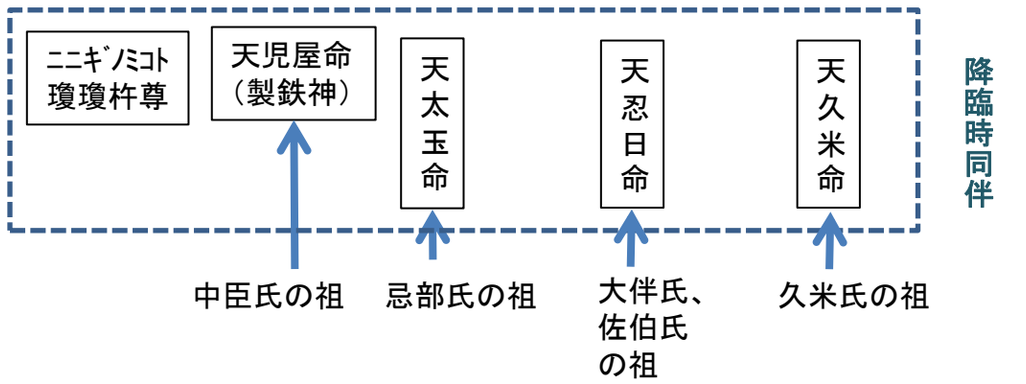
天孫降臨（てんそんこうりん）とは、天孫の邇邇藝命（ににぎのみこと）が、高皇産霊尊の意向によって、もしくは天照大御神の神勅を受けて葦原の中津国を治めるために、高天原から筑紫の日向の襲の高千穂峰へ天降あまくだったこと。邇邇藝命は天照大御神から授かった三種の神器をたずさえ、天児屋命（あまのこやねのみこと）などの神々を連れて、高天原から地上へと向かう。途中、猿田毘古神（さるたひこのかみ）が案内をした。『記紀（古事記と日本書紀）』に記された日本神話である。
（Wikipedia抜粋）

天孫族

『記紀』によると、瓊瓊杵尊が国譲りの後、高天原より葦原中国平定のため日向に降臨し、中国地方を経て近畿地方まで東征し西日本各地の豪族を従え大王（天皇）を中心とするヤマト王権（倭国）を樹立させ、中部・関東地方まで勢力を拡大させ、のちの日本へと発展させていったのが天孫族であるとしている 『新撰姓氏録』では、天孫族を次のように定義している。天照大神の子孫とみなされる神々、天穂日命、天津彦根命、天火明命、火闌降命、天佐鬼利命の子孫。
　天照大御神は倭国の女神を集合したものと思われる（後述）。天孫族の実質の祖神は、実在性の確かなスサノオであろう。
（Wikipedia抜粋　＋　藤田）

天孫降臨

三種の神器（天孫降臨の時に、瓊瓊杵尊が天照大神から授けられた？）
・八咫鏡（伊勢神宮皇大神宮）　・八尺瓊勾玉（宮中三殿の賢所）
・天叢雲剣（草薙剣）（熱田神宮）



邇邇藝の降臨

天孫降臨（てんそんこうりん）とは、天孫の邇邇藝命（ににぎのみこと、天忍穂耳命と高木神の娘万幡豊秋津師比売命との間に生まれた子）が、天照大御神の神勅を受けて葦原の中つ国を治めるために、高天原から筑紫の日向の襲の高千穂峰へ天降（あまくだ）ったこと。邇邇藝命は天照大御神から授かった三種の神器をたずさえ、天児屋命（あまのこやねのみこと）などの神々を連れて、高天原から地上へと向かう。途中、猿田毘古神（さるたひこのかみ）が案内をした。『記紀（古事記と日本書紀）』に記された日本神話である。
（Wikipedia抜粋）
ニニギは金官国初代の首露王に当たり、筑前の伊都国に降臨したか（藤田）

天火明命の降臨

『古事記』及び『日本書紀』の一書によれば、天火明命（ホアカリ）も天忍穂耳命と高木神の娘万幡豊秋津師比売命との間に生まれた子としている。これらの伝承において邇邇芸命は弟としている。ホアカリは丹後の冠島に天降った。
（Wikipedia抜粋）
天火明は第4代新羅王とされる（藤田）

「天孫降臨」の地“日向”は、本当は何処なのか？「神武東征」伝承の真実を検証する②
宝賀 寿男

高千穂の宮にいたイワレビコは、天下を治める最良の地を目指して東征を思い立つ。兄とともに東の地を目指した旅路は決して平穏なものではなかった……。『古事記』『日本書紀』に描かれた”神武東征”伝承は史実なのか？神話と史実を探求しながら、その実像に迫る。

「日向＝宮崎」説を覆す
「日向＝北九州」説
　神武東征伝承が疑問とみられる理由として、まず出発地「日向」にある。
　葦原中国の大己貴神に国譲りをさせて天孫が降臨した地が、僻遠の南九州の「日向」、宮崎県とされる。その後の天皇家とまるで縁のない地で三代(日向三代)を過ごしてから、大和入りを図るという筋書が荒唐無稽で、これにより神武東征の史実性は根底から崩れているとされる。

「日向」とは、もともと南九州全域を指し、後に薩摩・大隅の文理で日向一国となるが、異民族的な色彩の隼人が住む未開地であった。これが皇室の現実の発祥の地でありえたかは疑問が大きい。
　記紀の編者が「日向」を日神の子孫と称する皇室の先祖が住む土地にふさわしいとみて、天孫降臨させた結果、日向と大和を結びつける必要性のために、「神武東征」は日神思想による観念から生まれたもので、歴史的事実ではない」とみられることになってしまったのだ。

　この「日向＝宮崎」説には最近まで多くの疑問が出されてきた。実際の「日向」は北九州で、福岡県の玄界灘沿岸にあったとの見解が多い。旧地名でいえば筑前の早良郡・怡土(いと)郡の地域であり、現在の地名では福岡市の西区あたりから糸島市にかけての地となる。ここが、福岡平野の那珂川流域にあった海神族の国「葦原中国＝奴国」を屈服させて天孫降臨があった地域だとされる。

『書紀』には「筑紫の日向」と表現され、『古事記』でも「竺紫の日向の高千穂」、「この地は韓国(からくに)に向ひ、……、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり」と書かれてあり、こうした地理的状況に筑前海岸部は合致する。西区と糸島市との境界あたりには日向峠・日向山や槵触(くしふる)山の地名も残る。

（「天孫降臨」の地“日向”は、本当は何処なのか？ | BEST TIMES （ベストタイムズ、NET）

皇統の系譜に作為的に挿入されたと思われる「日向三代」を省くと邇邇芸と神武は同一人格となる。尚、『新撰姓氏録』は、新羅の祖（昔氏の祖、脱解王）は稲飯命（神武の兄）だとしている。稲飯（脱解）が彦火明に当たるとすると、その弟の神武は瓊瓊杵に当たる。

天照大御神から神武に至る系譜は、百越の始祖伝説に酷似しており、海神族の始祖伝説を皇統の系譜に取り込むために作為・挿入されたものと考える。また、その後半の邇邇芸から神武までの「日向三代」の系図の挿入は次の意図に基づいたものと考える。
1. 『上記』などの所謂「古史古伝」に伝えられる九州に存在したと思われるウガヤフキアエズ朝の系譜を一代だけであるが取り込んだ。
2. 神武東征譚の主要部分は崇神東征譚であろうと思われる。崇神東征に随伴した隼人や久米人は、邪馬台国の終焉時、出雲系統（大国主一族）の征伐に活躍した。その戦功に報いるために『記紀』は邇邇芸の実際の降臨地である筑紫の伊都国に代えて、南九州の日向（宮崎県）に降臨させ、また神武東征の出立の地も日向にした。
3. 倭国の成立に貢献した海神族のために「海彦・山彦伝説」などの海神族の説話を「日向三代」として入れ込んだ。
　従って、前述の皇統の系譜（前1世紀から4世紀）で示しているように、「日向三代」を省くと邇邇芸と神武は同一人格となる。そうすることにより、邇邇芸から崇神までの皇統譜と邇邇芸の兄の彦火明の系図（海部氏系図）とを整合性をもたせて比較・検討できる。（藤田泰太郎）

スサノオ・瓊瓊杵(ニニギ)・神武の系譜

(日向三代(次スライド)は作為的挿入か)

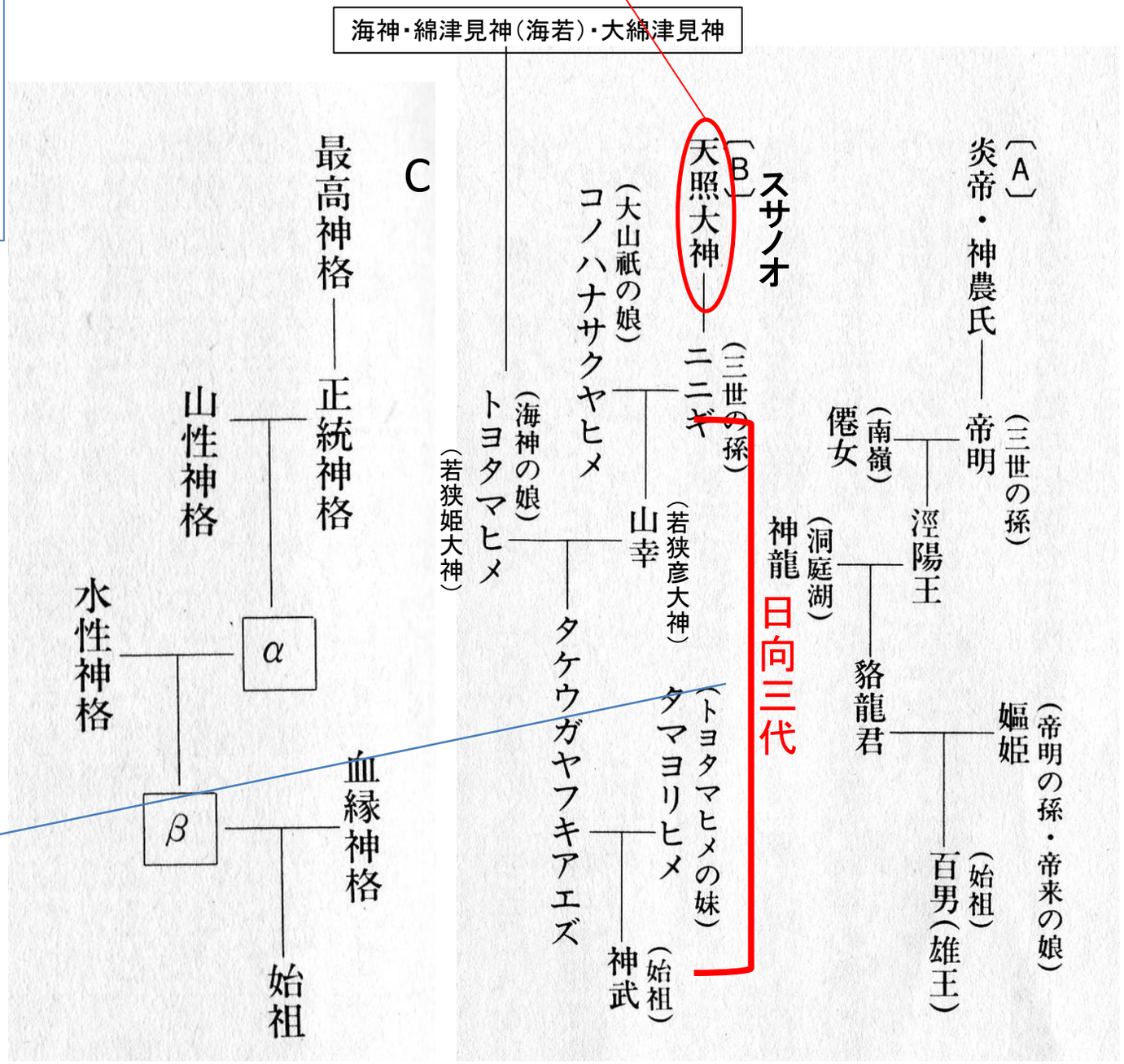
天照大神とは、櫛稲田姫、豊受大神、卑弥呼と台与を集合し、さらに持統天皇を反映させ、皇統の最高神として祀り上げられたものと解する。皇統の実質的な祖神は、実在性が確かな素戔嗚(スサノオ)であろう。(藤田)

右図Aは史書『大越史記』にある古代中国の江南領域に散在雑居した**百越の始祖伝説**であり、Bは『記紀』にみられる天孫族始祖伝説である。CはAとBとに共通する系譜構造を示したものである。このような系譜構造をとる始祖伝説は、出雲系神格系譜、朝鮮高麗朝始祖伝説、加羅始祖伝説、新羅始祖伝説などである。要するに、東シナ海をはさんで中国江南、朝鮮半島、日本列島の三域にまたがって、同じ系統で同じ構造の始祖伝説がみいだされるのである。これは江南から日本列島、朝鮮半島にかけて蟠踞した越人系倭人が共通にもっていた伝説と始祖観念が伝承されたからと思われる。
(古代日本異族伝説の謎　田中勝也)

『海部氏勘注系図』によれば、始祖は彦火明命である。彦火明命はニニギの兄である。皇統系譜によれば、神武天皇はニニギの三世孫となる。従って、『記紀』の編集者は、ニニギから神武に至る「日向三代」を人為的に挿入し、Bで示す始祖系譜を作製したと思われる。というのは、瓊瓊杵尊は日向の高千穂峰に天降ったとされ、彦火明命は丹後に天下っている。しかるに、瓊瓊杵の子である山幸彦(彦火火出見尊)は若狭の国の一の宮である若狭彦神社の祭神(若狭彦大神)であり、山幸彦の妻である豊玉姫は同じく若狭の国の一宮である若狭姫神社の祭神(若狭姫)とされている。なぜ、瓊瓊杵尊の子の山幸彦とその妻が瓊瓊杵の降臨した日向でなく、彦火明の降臨した丹後の隣の若狭の一宮の祭神になっているのか、疑問であったが、瓊瓊杵の系図は『記紀』の編者によって人為的に作成されたものであると考えると納得がいく。

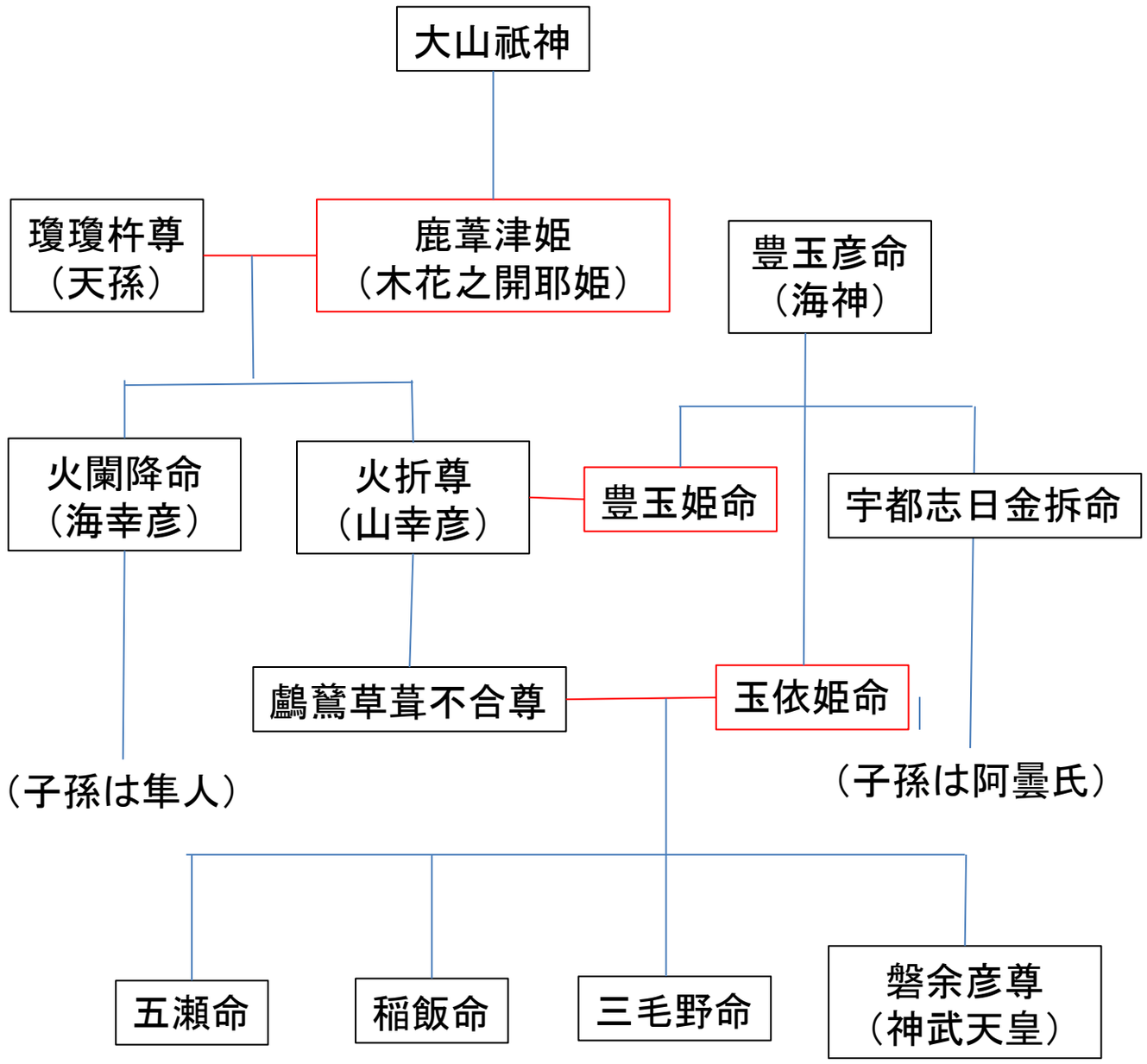
天照大神の直系の瓊瓊杵尊の系譜は、大山祇命(三島大明神)と海神族との密接な繋がりを示し(日向三代)、崇神東征後の大和の崇神王朝に繋がる、ウガヤフキアエズ朝は、瓊瓊杵尊(神武)・崇神までの十代の伊都国王朝である。尚、皇統譜の欠史八代(綏靖～開化)は、崇神朝に始まるヤマト王権の前の多氏王権、葛城王朝および邪馬台国の系譜に当たる。

また、ニニギから神武に至る三代、所謂、日向三代は、崇神東征における久米人・隼人の活躍の故に作為・挿入された可能性が高い。
(藤田)



欠史八代
津田左右吉は2代から14代までの天皇実在を疑う「欠史十三代」説を主張した。現在の歴史学では2代から9代までの実在を疑う「欠史八代」説が主流となっている。(Wikipedia抜粋)

日向三代
（Wikipedia参照）



コトバンク―日向系神話

天孫瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)の降臨以後、その御子(みこ)の彦火火出見尊(ひこほほでみのみこと)、孫の鵜葺草葺不合尊(うがやふきあえずのみこと)の三代にわたり、日向(ひむか)の地と海神国を舞台として展開される神話。瓊瓊杵尊の聖婚、火中出産、海幸(うみさち)・山幸(やまさち)、豊玉姫(とよたまひめ)の出産、鵜葺草葺不合尊の五群からなるこの神話は、高天原(たかまがはら)の神話と初代天皇神武(じんむ)の人代とを結ぶ位置にあり、太陽神・穀母神の天照大神(あまてらすおおみかみ)の斎(えい)である天神御子(あまつかみのみこ)が、いかにして現人神(あらひとがみ)なる支配者となるかの経緯を語る。

瓊瓊杵尊の御子として生誕する彦火火出見の名は、神武天皇の諱(ただのみな)（御実名）としてもあり、したがって神話の古い形は、穀霊として降臨した瓊瓊杵尊が聖婚し、その御子が初代天皇となる構想であった可能性がある。それが、瓊瓊杵尊以下日向三代を経て初代天皇の即位となる形に改められたのには、それだけの理由があったはずである。まず瓊瓊杵尊が山の神の娘の木花開耶姫(このはなさくやひめ)と結婚する神話は、山の神が磐長姫(いわながひめ)と木花開耶姫の2人の娘を妻に送ったにもかかわらず、瓊瓊杵尊が醜い磐長姫のほうを送り返したため、磐のような永遠の生命を得ることができなかったと語る。これは、人間の死の起源を説く神話を利用して、さらに現人神である天皇がなぜ死ぬのかを説明するとともに、天神御子が母を通して山の呪力(じゅりょく)の持ち主となることを語る。また聖婚の条にこの神話を挿入し、次の展開へと連続させる方法は、木花開耶姫と鹿葦津姫(かしつひめ)（吾田津姫(あたつひめ)）とを亦名(またのな)で一体化することで処置している。懐妊した御子の父を疑われた鹿葦津姫が火中で出産する神話は、本来海幸彦となるべき御子の生誕を語るものであったが、ここでは日の御子は火によっても犯しえないことを強調する。この火中出産で生まれた御子はすべて海幸彦となるべき存在であるが、そこに前の話からの連続上、山幸彦として単独に、または火折尊(ほおりのみこと)に重ねて彦火火出見尊を兄弟に加え次の海幸・山幸の神話への発端としたのは、記紀神話の構想による改訂であった。この改訂によって、本来は魚族の国に赴いて海幸を得るという海幸彦成立の神話であった伝承が、多くの変化を余儀なくされた。ひとことでいえば、山幸彦（天神御子）を主人公とする天皇神話への変質であり、その成果は、海幸彦の服従を通しての隼人(はやと)の服従と奉仕、さらに天神御子と海神の娘の豊玉姫との結婚であった。これに続く豊玉姫出産の神話は、海神の娘の子として生まれた鵜葺草葺不合尊が海（水）の呪力を得たことを語っており、記紀神話は、この聖なる呪力をもつ御子の生誕を、始祖誕生をもつ異類女房譚(たん)を利用して語ったのであった。最後の鵜葺草葺不合尊が叔母の玉依姫(たまよりひめ)に養育されて叔母と結婚する話は、天武(てんむ)朝以後に顕在化する同母系の異世代婚を含み、天武朝以後に増補された初代天皇へのつなぎの部分であったと考えられる。

以上のように、日向系神話は本来別々の神話を巧みに統合して合目的的に展開されたもので、皇祖神の天照大神の斎であり、現人神である天皇の死すべきゆえん、ならびに天神御子が山と海との呪力をあわせもって、より強力な呪的支配者となることを語るとともに、記紀成立時の大きな政治的問題であった隼人の服従と奉仕の基盤について語ることをねらいとするものであった。したがって、すべての神話群が日向を本来の伝承地として語られていたのではない。日向は太陽に向かう聖地としての観念に始まるもので、それが海幸彦神話を保有していた隼人の在住地に結合して、初めて日向なる特定地に定着したものと考えられる。

『吉井巌著『火中出産ならびに海幸山幸説話の天皇神話への吸収について』（『天皇の系譜と神話　一』所収・1967・塙書房）』

天孫降臨⇒三島神東征（神武東征の発端）⇒ホアカリの東征⇒ニギハヤヒの東征⇒崇神東征（神武東征譚の主要部分）

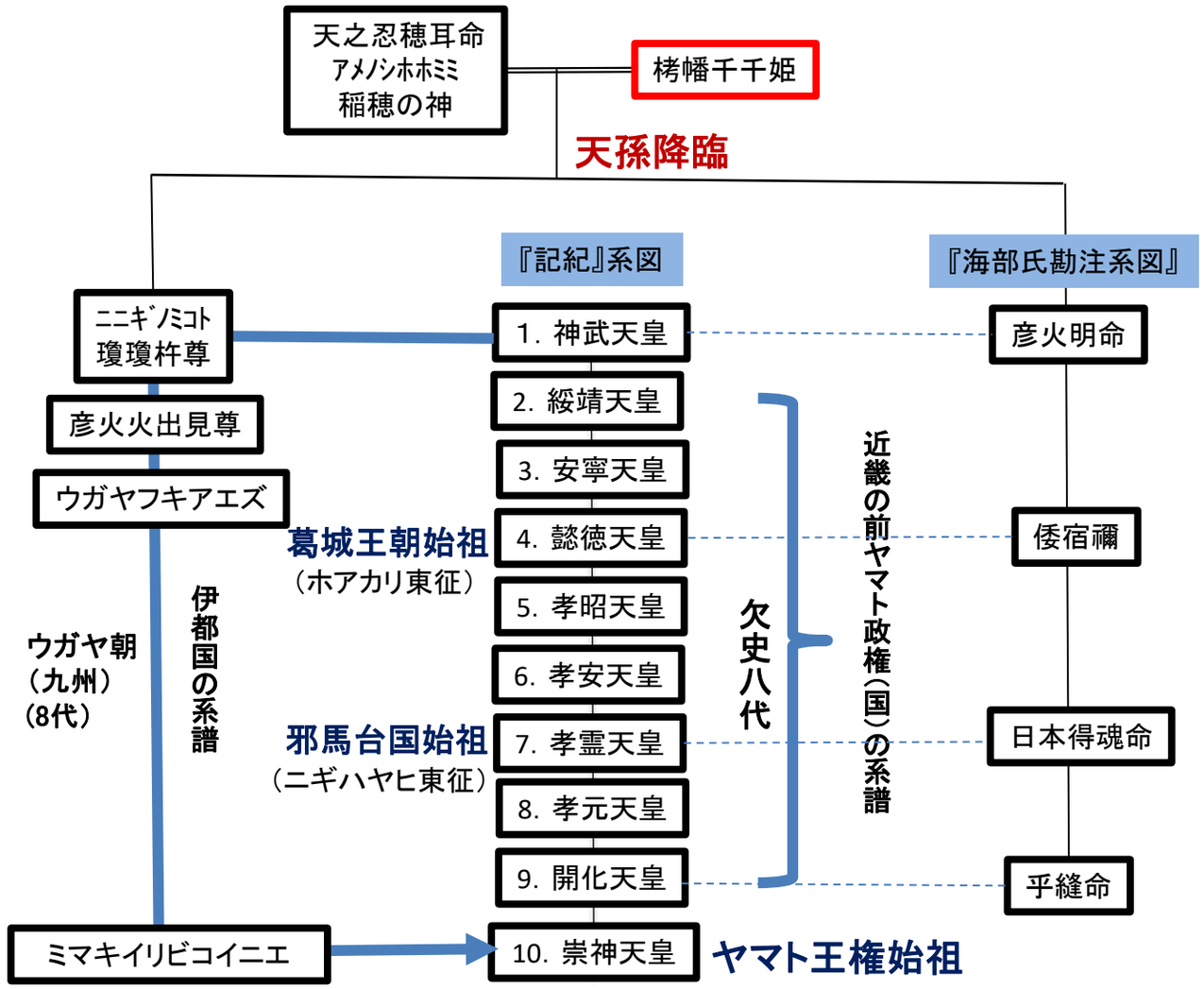
邪馬台国を継ぐ、崇神王朝の成立

宝賀・貝田推論によると、崇神元年は315年となる（前述）。ちなみに、崇神天皇陵と治定されている行燈山古墳の築造年代は4世紀半ばである。従って、崇神東征の時期は3世紀末である可能性が高い。

天孫瓊瓊杵の降臨は弥生時代後期の始め（1世紀半ば）の事と推察する。しかし、日向への降臨は考えられず、筑紫（伊都国か）に降臨したと推量する。また、瓊瓊杵から神武までの系図は『記紀』編者により作為されたものと思う。さらに、神武から崇神までの系図は近畿の前ヤマト王権の系図と思われ、この間が欠史八代と見なされるのも無理はない。さらに、『記紀』の懿徳天皇から開化天皇の系図は、『海部氏勘注系図』の倭宿禰から乎縫命までの系図に対応させることが出来る。尚、瓊瓊杵から崇神までの伊都国王（ウガヤフキアエズ朝）の系図は不明である。

崇神東征は神武東征譚の主要部分を占める。この東征に同伴したのは、瓊瓊杵降臨の同伴者（天児屋命（中臣氏）、天太玉（忌部氏）、天忍日命（大伴、佐伯氏）と天久米命（久米氏））および隼人であろう。崇神を大和に侵攻させ、クーデターを起こさせたのは、物部氏と和邇氏と考える。

卑弥呼死後、物部と和邇は崇神勢力を大和に呼び込み出雲勢力のナガスネヒコらを葬り、さらに武埴安の反乱を鎮圧し、畿内を制圧した。さらに四道（北陸、東海、西海、丹波）に四道将軍（大彦、武渟川別、吉備津彦、彦坐王）を派遣し各道を勢力下に治めた後、崇神はヤマト王権（崇神王朝）の始祖として即位した。（藤田）



崇神東征（神武東征譚の主要部分）

降臨した瓊瓊杵の2世孫が鸕鷀草葺不合尊（ウガヤフキアエズ）でその子が神武天皇である。上記（うえつふみ）などの古史古伝は九州にウガヤフキアエズ王朝が存在したという。私見の天皇系図は、初代神武がホアカリにあたり、4代懿徳がホアカリの3世孫の倭宿禰に当たる。7代孝霊が邪馬台国の始祖であり、10代崇神がヤマト王権の始祖である。従って、2代から9代までの所謂欠史八代は、ヤマト王権以前に大和に存在した王朝（邪馬台国を含む）の8代であったと思われる。この間九州には崇神に至るウガヤフキアエズ王朝があったのであろう。（藤田）

狗邪韓国（金官国）の初代首露王、瓊瓊杵尊、天火明命、新羅・脱解王、神武天皇、稲飯命は、1世紀中頃の同世代人！

『記紀』に記載の皇統の系譜やアメノヒボコから神功皇后への系図、『海部氏勘注系図』と『但馬の国風土記』に記載の天火明命系図、さらに『新撰姓氏録』の記述「稲飯命（神武天皇の兄）、新羅の祖」、さらに「新羅本記」に記載の新羅王室系譜をお互い並べると次のことがわかる。

1．皇統の祖から瓊瓊杵尊への系図は、それに続く神武天皇からの天皇系図と直接繋がる。従って、瓊瓊杵が神武天皇に当たる。

2．上述のわが国の系図群と新羅本記の系図を比較すると不可思議な一致が見られる。新羅王室は3氏（朴、昔、金氏）からなり、この三氏の始祖伝承のすべてに倭人の瓠公が関わっている。新羅王第4代脱解尼師今（脱解王）は、丹後・但馬の天火明命に当たる。また、第8代阿達羅王の王子がアメノヒボコに当たり、倭国大乱の時に来倭した。また、第2代南解次次雄王が素戔嗚命に当たると推測される。このことは、皇統と新羅王室とには何らかの密接な関係があったことを示唆する。さらに神武天皇を瓊瓊杵尊とするとその兄の稲飯命は天火明命で脱解王に当たる「但馬の国風土記」。

狗邪韓国（金官国）の初代首露王は、瓊瓊杵尊、天火明命、脱解王、神武天皇、稲飯命と1世紀中頃の同世代人である。首露王は、脱解王と兄弟で、瓊瓊杵尊や神武天皇と同一人格である可能性がある。

1世紀中頃は後漢の光武帝が朝鮮半島経営に乗り出した頃で、楽浪郡の遺民との戦闘があり、その動乱が倭人を圧迫し、一部の倭人を列島に帰来させたのかもしれない。

(藤田）

ウガヤフキアエズ朝（ウガヤ朝）

ウガヤ朝

ウガヤ朝が存在したのが、おおよそB.C.1000年頃からA.D.300年頃の間です。なぜ、そんなに正確に分かったのかというと、ウエツフミには天文に関する正確な記述が含まれているからです。五島プラネタリウムの金井三男氏が分析した結果、この「ウエツフミ」の星辰伝承は、「紀元前8百年から同千年頃の間に成立したことは間違いない。」と結論づけています。
（ウエツフミの研究-ウガヤフキアエズ王朝実在論 、Net)

ウガヤフキアエズ朝（ウガヤ朝）とは

ウガヤ朝は九州の王朝であると考えています。その長さは『記紀』では1代、『上記』では74代、武内文書では72代なっています。正直72代―74代の長期の王朝が実在したとはとても思えないですが、強いて考えるなら、ニニギの降臨（記紀の皇統譜から推定すると1世紀半ば）からの伊都国の王朝のことではないかと思います。まず、ニニギからの日向三代（ウガヤフキアエズを含む）でウガヤ朝がはじまったとします。日向三代は、伊都国勢力が南九州に向かったことを示すと思います。このウガヤ朝11代目の崇神こと ミマキイリビコイニエが、伊都国の影響下におかれた久米人や隼人（熊襲）を引き連れ、崇神東征（神武東征の主たる部分、3世紀末、崇神即位は315年）を敢行したと思います。さらに、崇神東征後も伊都国が残ったとするとさらにウガヤ朝は続くわけですが、この後継国（九州王朝か）が仲哀天皇・神功皇后によって滅ばされるまで続いたとしても17代ぐらいにしかなりません。『上記』のウガヤ朝は、女系の王を抱合しており、その分だけ王の世代数が多くなったと思いますが、伊都国ウガヤ朝説も、ウガヤ朝の70代を超す長期王朝を説明することはできません。
（FB　コメント2020-2-9、藤田）

ウガヤフキアエズ王朝（ウガヤ朝）

『ウエツフミ』「竹内文献」などの古史古伝に記載されている神武天皇以前の古代王朝で、火々出見命の子、鸕鷀草葺不合尊（鵜萱葺不合命）が開いた王朝とされる。『ウエツフミ』によれば74代、「竹内文献」によれば72代続いたされる。鸕鷀草葺不合尊をウガヤ朝の初代とし、九州王朝をウガヤ朝とするなら、ミマキイリヒコイリエ（崇神天皇（10代天皇））まで、ウガヤ朝は11代続いたことになる。（藤田）

神武東征

『古事記』

神倭伊波礼毘古命（カムヤマトイワレビコ、若御毛沼命）は、兄の五瀬命（イツセ）とともに、日向の高千穂で、葦原中国を治めるにはどこへ行くのが適当か相談し、東へ行くことにした。彼らは、日向を出発し筑紫へ向かい、豊国の宇沙（現・宇佐市）に着く。菟狭津彦命（ウサツヒコ）・宇沙都比売（ウサツヒメ）の二人が足一騰宮（あしひとつあがりのみや）を作って彼らに食事を差し上げた。彼らはそこから移動して、筑紫国の岡田宮で1年過ごし、さらに阿岐国の多祁理宮（たけりのみや）で7年、吉備国の高島宮で8年過ごした。速吸門で亀に乗った国津神に会い、水先案内として槁根津日子という名を与えた。

浪速国の白肩津[注釈 1]に停泊すると、登美能那賀須泥毘古（ナガスネビコ）の軍勢が待ち構えていた。その軍勢との戦いの中で、五瀬命は那賀須泥毘古が放った矢に当たってしまった。五瀬命は、「我々は日の神の御子だから、日に向かって（東を向いて）戦うのは良くない。廻り込んで日を背にして（西を向いて）戦おう」と言った。それで南の方へ回り込んだが、五瀬命は紀国の男之水門に着いた所で亡くなった。

神倭伊波礼毘古命が熊野まで来た時、大熊が現われてすぐに消えた。すると 神倭伊波礼毘古命を始め彼が率いていた兵士たちは皆気を失ってしまった。この時、熊野の高倉下（タカクラジ）が、一振りの大刀を持って来ると、神倭伊波礼毘古命はすぐに目が覚めた。高倉下から神倭伊波礼毘古命がその大刀を受け取ると、熊野の荒ぶる神は自然に切り倒されてしまい、兵士たちは意識を回復した。

神倭伊波礼毘古命は高倉下に大刀を手に入れた経緯を尋ねた。高倉下によれば、高倉下の夢に天照大神と高木神（タカミムスビ）が現れた。二神は建御雷神を呼んで、「葦原中国は騒然としており、私の御子たちは悩んでいる。お前は葦原中国を平定させたのだから、再び天降りなさい」と命じたが、建御雷神は「平定に使った大刀を降ろしましょう」と答えた。そして高倉下に、「倉の屋根に穴を空けてそこから大刀を落とすから、天津神の御子の元に運びなさい」と言った。目が覚めて自分の倉を見ると本当に大刀があったので、こうして運んだという。その大刀は甕布都神、または布都御魂と言い、現在は石上神宮に鎮座している。

また、高木神の命令で遣わされた八咫烏の案内で、熊野から吉野の川辺を経て、さらに険しい道を行き大和の宇陀に至った。宇陀には兄宇迦斯（エウカシ）・弟宇迦斯（オトウカシ）の兄弟がいた。まず八咫烏を遣わして、神倭伊波礼毘古命に仕えるか尋ねさせたが、兄の兄宇迦斯は鳴鏑を射て追い返してしまった。兄宇迦斯は神倭伊波礼毘古命を迎え撃とうとしたが、軍勢を集められなかった。そこで、神倭伊波礼毘古命に仕えると偽って、御殿を作ってその中に押機(踏むと挟まれて、あるいは、天上や石が落ちてきて、押し潰すことで、圧死する罠)を仕掛けた。弟の弟宇迦斯は神倭伊波礼毘古命にこのことを報告した。そこで神倭伊波礼毘古命は、大伴氏（大伴連）らの祖の道臣命（ミチノオミ）と久米直らの祖の大久米命（オオクメ）を兄宇迦斯に遣わした。二神は矢をつがえて「仕えるというなら、まずお前が御殿に入って仕える様子を見せろ」と兄宇迦斯に迫り、兄宇迦斯は自分が仕掛けた罠にかかって死んだ。その後、圧死した兄宇迦斯の死体を引き出し、バラバラに切り刻んで撒いたため、その地を「宇陀の血原」という。

忍坂の地では、土雲の八十建[注釈 2]が待ち構えていた。そこで神倭伊波礼毘古命は八十建に御馳走を与え、それぞれに刀を隠し持った調理人をつけた。そして合図とともに一斉に打ち殺した。

その後、兄師木（エシキ）・弟師木（オトシキ）の兄弟と戦った。最後に、登美毘古（ナガスネビコ）と戦い、そこに邇藝速日命（ニギハヤヒ）が参上し、天津神の御子としての印の品物を差し上げて仕えた。

こうして荒ぶる神たちや多くの土雲（豪族）を服従させ、神倭伊波礼毘古命は畝火の白檮原宮[注釈 3]で神武天皇として即位した。

その後、大物主神の子である比売多多良伊須気余理比売（ヒメタタライスケヨリヒメ）を皇后とし、日子八井命（ヒコヤイ）、神八井耳命（カムヤイミミ）、神沼河耳命（カムヌナカワミミ、後の綏靖天皇）の三柱の子を生んだ。

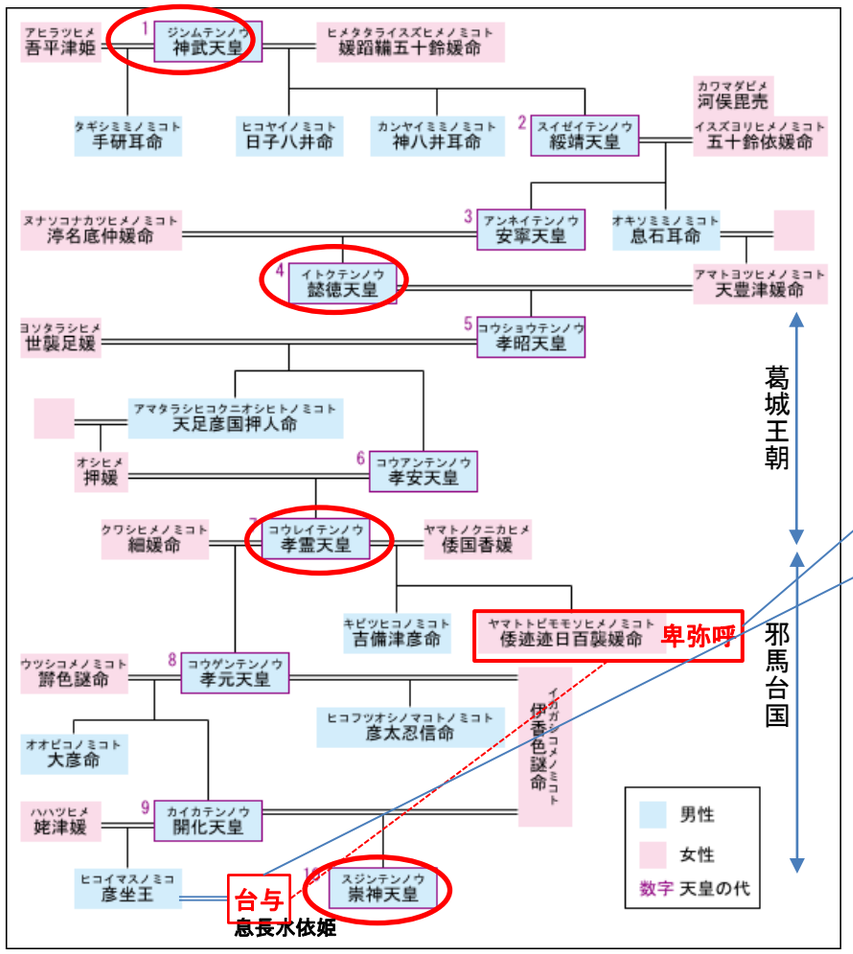
（Wikipeda

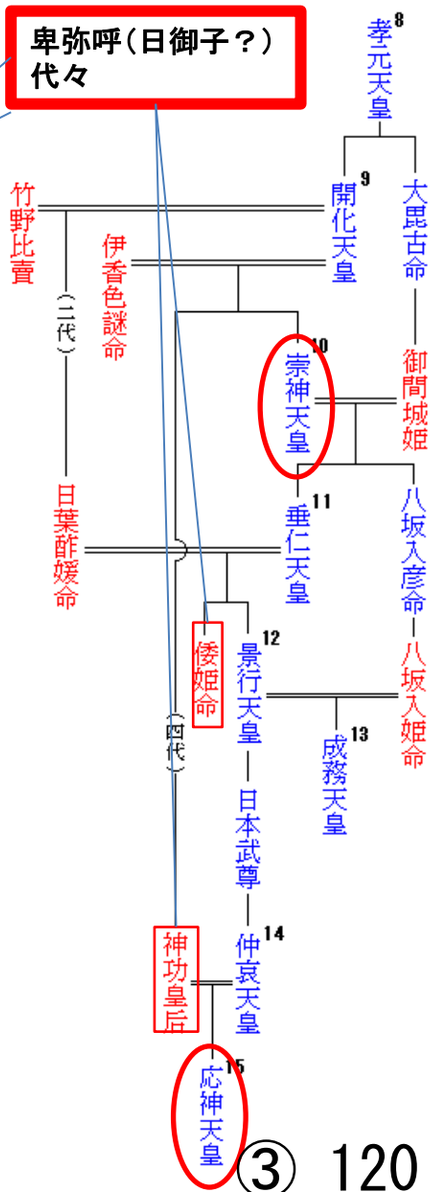
（縄文系弥生人~銅鐸を作る弥生人が縄文の土偶・石棒を作った.NHK、phity.net）

藤田

神武東征譚は、倭国平定譚では

神武東征は、三島神、ホアカリ、ニギハヤヒ、崇神、（＋応神？）東征を集合したもの





神武東征（1世紀中頃～3世紀末）の考証

神武東征は次の5回に亘る南朝鮮系倭人による大和進出を集合していると思われる。

1. 初代神武天皇の東征は、弥生時代後期初頭（1世紀半ば）のことで、南朝鮮の巨文島（三島）出自の大山祇神（三島神、三島大明神）（あるいはその子孫、三島湟咋耳命か）が摂津三島に進出したことではないか。三島湟咋耳命の孫娘が神武天皇の皇后とされる。孫娘の父は三島鴨神社の祭神（大山祇と事代主）の事代主あるいは大物主とされている。従って、三島神の東征が第1回目の神武東征にあたると考える。ちなみに、この時期はちょうど天孫の瓊瓊杵尊や天火明（彦火明）命が降臨した時期で、また、摂津の河内潟の時代に当たる。『記紀』の神武天皇東征の物語に、皇軍が生駒山のふもと日下の入江にあった「河内国草香邑青雲白肩之津」に上陸したことが書かれていて、大和への入口の地として初めて日下の地が登場する。この三島神の東征に多氏も同伴したのではないか。多氏は鉱物資源の豊富な阿蘇山周辺で鉱物の採掘に当たっていた。彼らは大和の丹（辰砂）に魅せられ同伴したのではないか。この東征により葛城多氏王権ができた。
2. 第2回目の神武東征は、懿徳天皇（オオヤマトヒコスキトモ、アジスキタカヒコネか）の東征で、丹後の天火明命（ホアカリ）の3世孫の倭宿禰（珍彦（椎根津彦）か）の葛城進出に当たる。ちなみに神武天皇が吉野山で出会ったとされる井光は倭宿禰の母である。この第2回目の東征により、葛城王朝（秋津洲）が成立し、孝昭天皇、孝安天皇へと続く、この何れかが天皇が一言主であろうか。この地方政権である葛城王朝は大国主の大己貴の国「玉牆の内つ国」の支国の一つではないか？このホアカリの東征も大和の辰砂を求めての東征であろう。
3. 第3回目の東征が所謂、ニギハヤヒによる吉備からの東征であり、倭国大乱を引き起こした。ニギハヤヒはアメノヒボコとともに「日下」に上陸した。ニギハヤヒさらに大和川沿いに大和の三輪に至り、大和全域をほぼ掌握したと思われる。このニギハヤヒの東征が近江・湖南および玉牆の内つ国を解体させた。そして、ニギハヤヒは、伊吹山を核とする大国主の狗奴国連合とで和邇氏の巫女である卑弥呼を共立し、卑弥呼を近江の伊勢遺跡から大和の纒向遺跡へと遷し、ここに虚空見つ日本（倭）の国とも呼ばれる邪馬台（やまと）国が成立した（2世紀末）。ニギハヤヒは大物主や孝霊天皇に当たる。卑弥呼に当たると思われる倭途途日百襲姫は大物主の妻で、孝霊天皇の養女になったのではないか。
4. 第4回目の東征が所謂崇神天皇による中臣氏、大伴氏や忌部氏と久米人や隼人を伴う東征で、神武東征譚の主要部分となる。邪馬台国の終焉期、狗奴国の大国主との抗争が起こっているところに、卑弥呼が死去し（3世紀半ば）、邪馬台国は弱体化した。このため、大国主の血を引く台与（息長水依姫＝日子坐王の妻か）を立て狗奴国との融和を図った。任那・伊都国連合からの瓊瓊杵尊の子孫と考えられる崇神天皇の東征で、邪馬台国は崇神勢力に乗っ取られ、崇神王朝が建てられた。この崇神東征で大和の大国主勢力は敗退したが（出雲の国譲り）、大国主の狗奴国は近江北部から美濃にかけ、依然相当な力を維持していた。このころ、スサノオと大山祇神の流れを汲む息長氏が、近江に進出したと思われる。狗奴国は徐々に勢力を失っていったが景行天皇の時、日本武命を敗死させた。成務天皇の時に狗奴国は亡びたと思われる。
5. 第5回目の東征が応神天皇の東征（4世紀末）である。河内の物部氏や中臣氏と結託した息長氏の出自の応神天皇の宇佐神宮からの神功皇后の東征である。この応神東征により、丹後を中心とする日本海勢力はほぼ力を失い、南朝鮮や中国との交流も日本海経路が廃れ、主に瀬戸内海経路をとるようになる。

右図に5回の神武東征に関わった天皇を赤で丸を付ける。

最後の応神東征をも倭国平定譚に加える見解の分かれる所である。

邪馬台国を建てた物部氏の祖神のニギハヤヒと応神王朝を建てた応神天皇とその母の神功皇后（オキナガタラスヒメ）は、共に天子の天津彦根命の後裔と考えられる。息長一族で神武天皇妃の祖父とされる三島湟咋耳は天津彦根命の子神である。ニギハヤヒは天津彦根命の孫神ととされる。このように物部氏と息長氏はスサノオの直系と考えられ、三島神（大山祇神）との関係が深い。

息長氏は近江に進出し、湖東・湖北での製鉄による莫大な富と北陸への交通の要衝を抑えることにより絶大な権勢をもつようになったと思われる。因みに現在の皇室の直系と考えられる継体天皇も息長氏との関係が極めて深い。

（古代史族の研究⑥と⑧、宝賀寿男　＋　藤田）

ニギハヤヒ東征が倭国大乱を引き起こした.

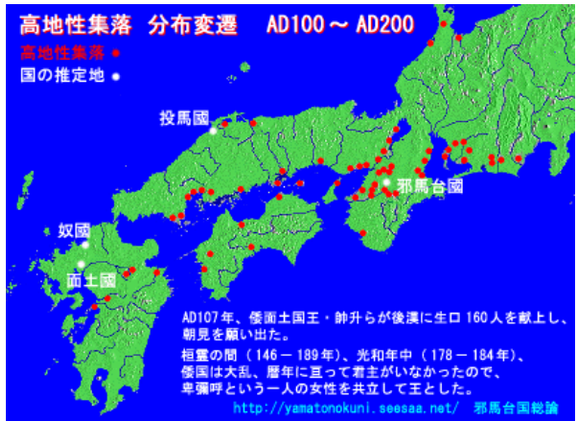
『魏志倭人伝』には、卑弥呼が邪馬台国を治める以前は、諸国が対立し互いに攻め合っていたという記述がある。また、『後漢書東夷伝』には、桓帝・霊帝の治世の間、倭国が大いに乱れた(倭国大乱)という記述がある。

近年、畿内の弥生時代V期は、弥生時代後期に併行するという考えが主流になった。この時期(AD50~250)には、畿内を中心として北部九州から瀬戸内、あるいは山陰から北陸、東海地域以東にまで高地性集落が見られること、環濠集落が多く見られることなどから、これらを倭国大乱の証拠であるとする考え方が有力となっている。ところが、武器の発達が見られず、特に近接武器が副葬品以外ではほとんど認められないこと、受傷人骨の少なさなどから、具体的な戦闘が頻発していたと主張する研究者はあまり多くない。倭国大乱がどのような争いであったのかは未だ具体的に解明されていないのが現状である。しかしながら、具体的戦闘があったかは未知数であるが、文献学的知見および考古学的成果により、2世紀半ばのニギハヤヒの東征が倭国大乱を引き起こし、2世紀末に卑弥呼を共立し邪馬台国を建て倭国大乱は終結したと見るのが妥当であろう。

紀元前1世紀から紀元1世紀の日本といえば、西暦57年に奴国が後漢から印綬を貰ったり、西暦107年の面土国・帥升が奴国を征服し後漢に使者を送る直前の時代である。この年代のどこかで神武東征があった可能性が高い。高地性集落が、畿内から瀬戸内海沿岸部にかけて多く建造されるが、まだ、九州・熊本以南や中部地方以東には殆ど建造されていない。また、最近の考古学の研究では紀元前50年ころには既に、九州同様、畿内でも中国思想を導入した街づくりが行われていたようである。
(邪馬台国総論、Net)
紀元1世紀の神武東征は三島神の東征で、第1回目の神武東征にあたるのではないか。(藤田)

北宋版『通典』には「倭面土國王師升等…」とある。白鳥庫吉博士は、面の古い字体はしばしば回に見誤られやすいといい、「倭面土國」は正しくは「倭回土國」であったとし、それは「倭の回土(ヱト、weitu)國」とよむべきだとして、伊都国をさしているとした。(Wikipedia抜粋 ＋ 藤田)

紀元2世紀の日本といえば、西暦107年の面土国(吉野ヶ里が勢力圏)・帥升が奴国を征服し後漢に使者を送ったり、後半には卑弥呼擁立のきっかけになった倭国大乱があった時代である。この時代になると、高地性集落が、九州・熊本まで南下し、東海地方まで広がり始める。
(邪馬台国総論、Net)
紀元2世紀の倭国大乱を引き起こしたのは、邪馬台国を建てたニギハヒの東征で、第3回の神武東征にあたる。(藤田)



紀元3世紀の日本といえば、『魏志倭人伝』の邪馬台国の時代である。現在の考古学のデータでは、その時代の高地性集落の分布は九州から大和ではなく、大和から東や北の方角に変わるために、卑弥呼以後の九州から畿内への東遷説は説明しにくい。逆に、日本書紀に記載されている崇神天皇時代の四道将軍の大和から四方への派遣とは照応する。このことが、考古学者が邪馬台国大和説に傾く大きな理由になっているようだ。
(邪馬台国総論、Net)
3世紀末の崇神東征により、邪馬台国が瓦解し、ヤマト王権が成立した。このヤマト王権は東日本に侵攻した。(藤田)

ヤマト政権（崇神王朝）以前の王権

葛城多氏王権⇒葛城王朝⇒邪馬台国

神武～安寧　　懿徳～孝安　　孝霊～開化

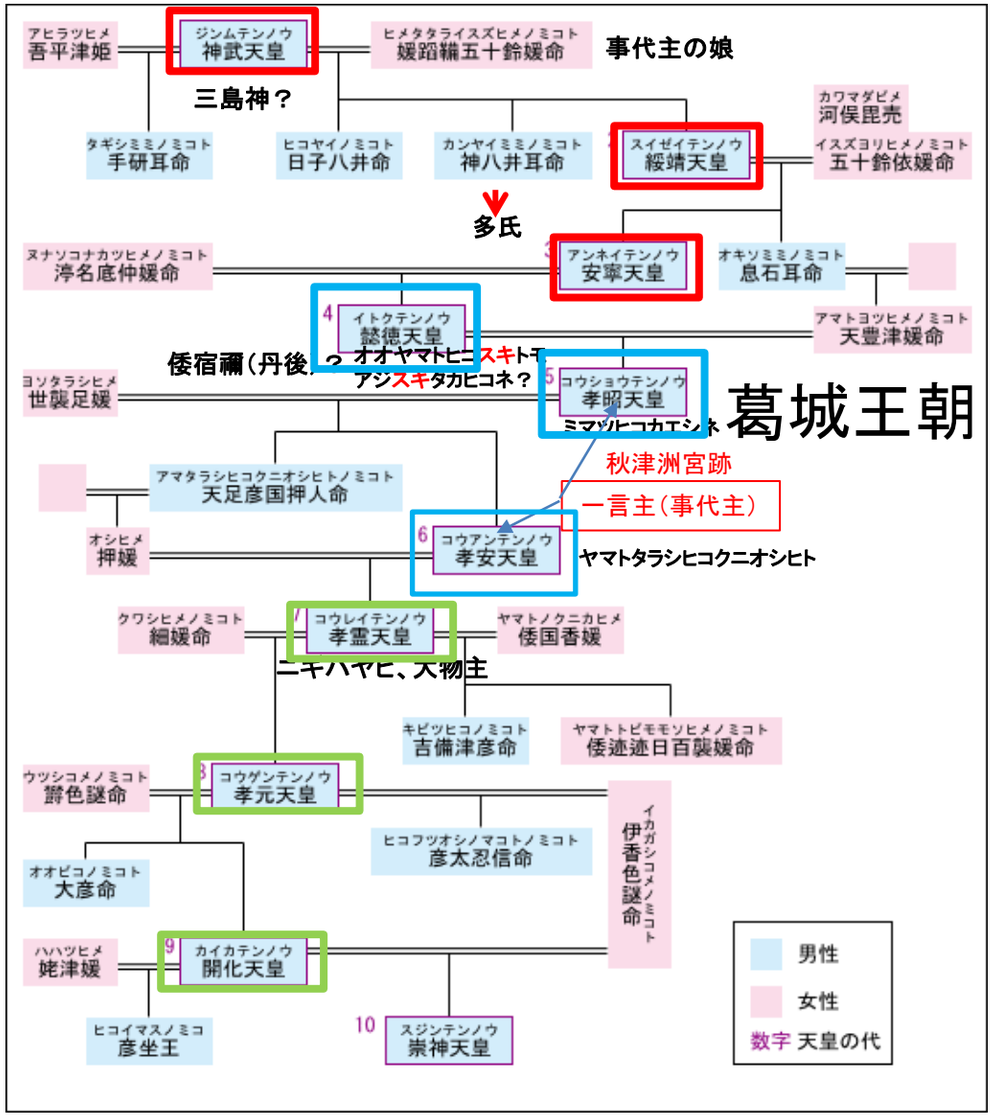
葛城族と鴨族との結びつきは深い。初代神武は、鴨族が祖神とする事代主神（ことしろぬし）の娘・媛踏鞴五十鈴媛命（ひめたたらいすずひめのみこと）・三島溝咋耳命（みしまみぞくいみみ）の孫娘）を娶って皇后とした。（『古事記』では、この説話を三輪伝説に引きつけて潤色しており、三輪山の大物主神（おおものぬしのかみ）が見初めた女に産ませた娘・ヒメタタライスケヨリヒメが神武の皇后になった、としている）。

第二代綏靖も媛踏鞴五十鈴媛命の妹の鈴依媛（すずよりひめ）を后として迎え、第三代安寧も事代主神の孫である「鴨君の女」を后としている。すなわち、葛城王朝の初期三代（葛城多氏王権）の天皇は葛城山麓に都を定め、その土豪の鴨族の娘たちを娶ることで、鴨族との政治的結合を強め、部族国家を発足させた。さらに、第4代から第6代まで（葛城王朝）は尾張氏など外戚関係にある葛城地域の女を后に迎えて部族国家の紐帯を強めている。ニギハヤヒ（第7代孝霊天皇に当たる）が東征して倭国大乱を引き起こし、2世紀末に卑弥呼を共立して邪馬台国を建てた。この孝霊天皇のとき、大和平野のほぼ全域を平定したのか、宮を大和平野の中央に移すとともに、后には磯城（しき）の県主（あがたぬし）の娘を選んでいる。第8代孝元天皇は、大和北部をはじめ河内も占めていたと思われる物部氏から后と妃を迎えている。第9代開化天皇は、物部氏の伊香色謎（いかがしこめ）命を后とし、さらに和邇氏の遠祖の娘や丹波国の竹野媛を妃としている。こうした后や妃選びからも、葛城王朝さらに邪馬台国の時代を通じて倭国が部族国家から強力な統一国家に成長していった足取りが追える。そして、葛城王朝と邪馬台国によって築かれた基盤の上に、第10代崇神天皇が崇神王朝、すなわちヤマト政権を樹立した、と結論される。

（葛城王朝、Net　＋　藤田）

従来の葛城王朝は、葛城多氏王権⇒葛城王朝⇒邪馬台国とに分けられる（私見）。

大国主の葛城進出はかなり早く弥生時代中期後葉のことと考えている。大国主は葛城の豪族の娘と結ばれ事代主神をもうけたのではないか。そして、1世紀末に倭宿禰がアジスキタカヒコネの率いる鴨族と共に葛城に進出したのではないか。倭宿禰あるいはアジスキタカヒコネと同人格と思える第4代懿徳天皇が葛城王朝（秋津洲）を建て、この葛城王朝は第6代孝安天皇まで続いたと考える。（藤田）



天皇	お宮址	陵	宮址から見た陵の方位
初代神武 神倭伊波礼毘古 かんやまといわれひこ	神武宮址（御所市柏原）	神武陵（橿原市大久保町）	北東方向
2代綏靖 神沼河耳 かんぬなかわみみ	高宮（御所市森脇）	綏靖陵（橿原市四条町）	北東方向
3代安寧 師木津日子玉手見 しきつひこたまてみ	安寧宮址（大和高田市片塩町）	安寧陵（橿原市吉田町）	南東方向
4代懿徳 大倭日子鉏友 おおやまとひこすきとも	懿徳宮址（橿原市大軽町）	懿徳陵（橿原市西池尻町）	北西方向
5代孝昭 御真津日子誌恵志泥 みまつひこかえしね	孝昭宮址(御所市池之）	孝昭陵(御所市三室)	北西方向
6代孝安 大倭帯日子国押人 やまとたらしひこくにおしひと	孝安宮址（御所市室）	孝安陵(御所市玉手)	北東方向
7代孝霊 大倭根子日子賦斗邇 おおやまとねこひこふとに	孝霊宮址（田原本町黒田）	孝霊陵(北葛城郡王寺町)	北西方向
8代孝元 大倭根子国玖琉 おおやまとねこくにくる	孝元宮址（橿原市大軽町）	孝元陵（橿原市石川町	北東方向
9代開化 若倭根子大日々 わかやまとねこひこおおひひ	開化宮址(奈良市本子守町）	開化陵（奈良市油阪町）	北東方向

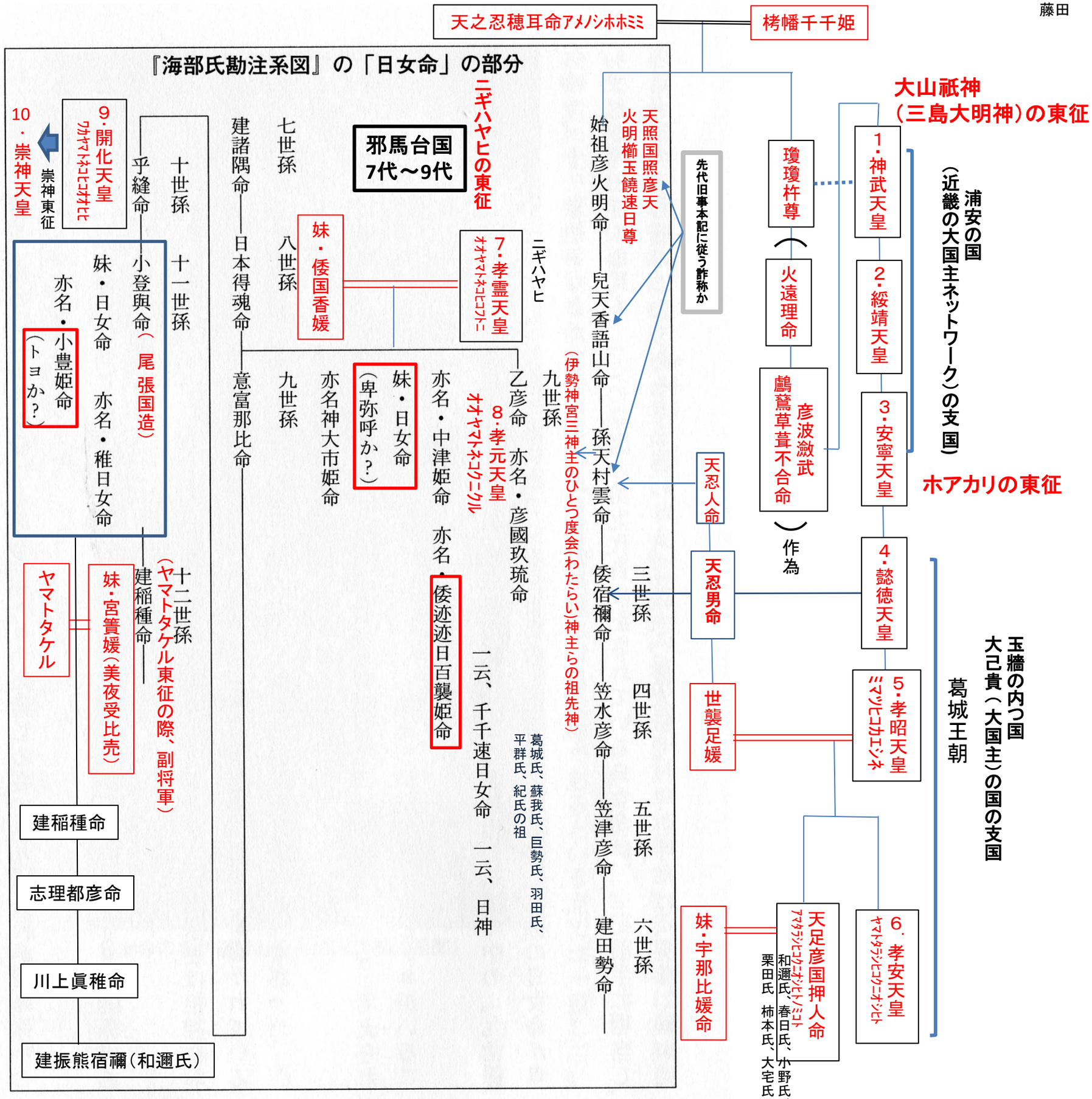
前ヤマト政権

（崇神王朝以前の政権）

『記紀』の第4代懿徳天皇～第9代開化天皇（6世代）の系図が『海部氏系図』の3世孫の倭宿禰命～10世孫（8世代）の乎縫命の系図が重なる。

右図は『海部氏勘注系図』と『記紀』の皇統系図（各々天孫の瓊瓊杵と彦天火明を始祖）の前ヤマト政権（崇神朝以前）に当たるところをまとめたものである。『記紀』では、瓊瓊杵から神武に至る「日向三代」と言われる系図がある。天照大御神から神武に至る皇統の始祖伝説は、百越の始祖伝説の構図に基づいて作為されたものであると推測される（古代日本異族伝説の謎、田中勝也）ので、「日向三代」は除外した。かくて、邇邇芸と神武とは同一人物あるいは同時代人となる。また、『海部氏勘注系図』の彦火明から、天香語山、天村雲までの系図もまた、饒速日を彦火明と同人格（天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊）であると詐称するために挿入された可能性が高い（『先代旧事本紀』）。（この系図は、孝霊天皇（ニギハヤヒか）が全権を握っている邪馬台国時代に作成されたか。）さらに、『古事記』は多氏一族（葛城の古氏）の太朝臣安萬侶によって献上されたが、多氏の素性を皇統系譜の初期に位置付けるために、神武、綏靖、安寧の三代が入り込んだ可能性も否定できない。（藤田）

『記紀』の真相を露にする「古の日本（倭）の歴史」の論考で、神武は邪馬台国の始祖のニギハヤヒを模して創出されたとの想念に至った。この想念が、物部氏をして、『海部氏勘注系図』の初代の彦火明（神武と同世代）をニギハヤヒと集合させ、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊とし、2代目を天香語山、3代目を天村雲とする顕在的な動機になったのではないか。実際、ニギハヤヒは筑前を本拠地としており、またニギハヤヒの東征は吉備から瀬戸内海海路で大和に侵攻したことと思われる（丹後からの陸路での大和への東征は伝承上ありえない）。このように紀元1，2世紀では、ニギハヤヒは丹後と殆ど縁がなく、彦火明と集合させることは極めて無理である。尚、宝賀寿男氏も同様な見解を述べている。（藤田）



海部氏勘注系図　（前ヤマトを創った大丹波王国、伴）改変

神武から安寧（葛城多氏王権;近江の浦安の国の支国か？）

第一回目の神武東征:三島神(三島湟咋耳命か)の多氏を伴う東征(紀元1世紀半ば)

神武天皇（じんむてんのうは日本の初代天皇。諱は彦火火出見（ひこほほでみ）、あるいは狭野（さぬ）。『日本書紀』での名は神日本磐余彦天皇。『日本書紀』・『古事記』によれば天照大御神の五世孫であり、日向から大和国への東征を行い畝傍橿原宮（現在の奈良県）に都して日本を建国したとされる伝説上の人物。（Wikipedia抜粋）

天照大御神の子である天忍穂耳命と高皇産霊神（高木神）の娘の栲幡千千姫命との間に邇邇藝命と天火明命が生まれた。邇邇藝命に葦原の中つ国の統治を委任し、天降りを命じられた。また、天火明命は丹後に降臨した。神武天皇はウガヤフキアエズの子で邇邇藝命の3世孫であるが、邇邇藝命－火遠理命（山幸彦）－ウガヤフキアエズ－神武天皇に続く系図（日向三代）は、百越の始祖伝説に酷似しており作為・挿入されたものと思われる。

神武東征は崇神東征に当たり、神武(1代)と崇神(10代)の間が結びつかず、この間の天皇の事績が乏しく、欠史八代と言われるのも無理はない。また、『日本書記』ではウガヤフキアエズ1代であるが、『富士宮下文書』では、ウガヤ朝は51代続き、『ウエツフミ』では74代続いたとする。著者はウガヤ朝は任那・伊都国連合(九州の北西部と南朝鮮)の王朝でないかと考える。(日向3代を除くと、神武天皇は系図上天孫の邇邇藝に当たる。)『日本書記』の神武(天孫に当たる)から崇神の間の8代は、ヤマト王権が生まれる前の葛城・大和に拠点を置く、浦安の国の支国(葛城多氏王権)、大己貴の国「玉牆の内つ国」の支国(葛城王朝)、邪馬台国(虚空見つ大和の国)と続いた国々の王であろう。邇邇藝がウガヤ朝の初代に当たり8代のミマキイリビコイニエ(崇神)が東征して、邪馬台国を乗っ取った。
（藤田）

淡路新町辺りの2260年前の地層から汽水域に生息するチリメンユキガイが出土。森ノ宮貝塚や日下貝塚からは淡水域に生息するセタシジミが出土。神武東征の記述「まさに難波碕に着こうとするとき、速い潮流があって大変早く着いた。」「川を遡って、河内の国草香村(日下村)の青雲の白肩津に着いた。」は、河内潟の時代(紀元前後)に神武東征があったということを示す。
（国民のための日本建国史、長浜浩明）

大和に達した最初の南朝鮮の倭人は三島神(大山祇神)と考えるので、神武東征の発端はは一世紀半ばの三島神東征のことではないか。その頃、天孫降臨があった。(藤田)

「河内潟の時代」(前1050年～前50年)

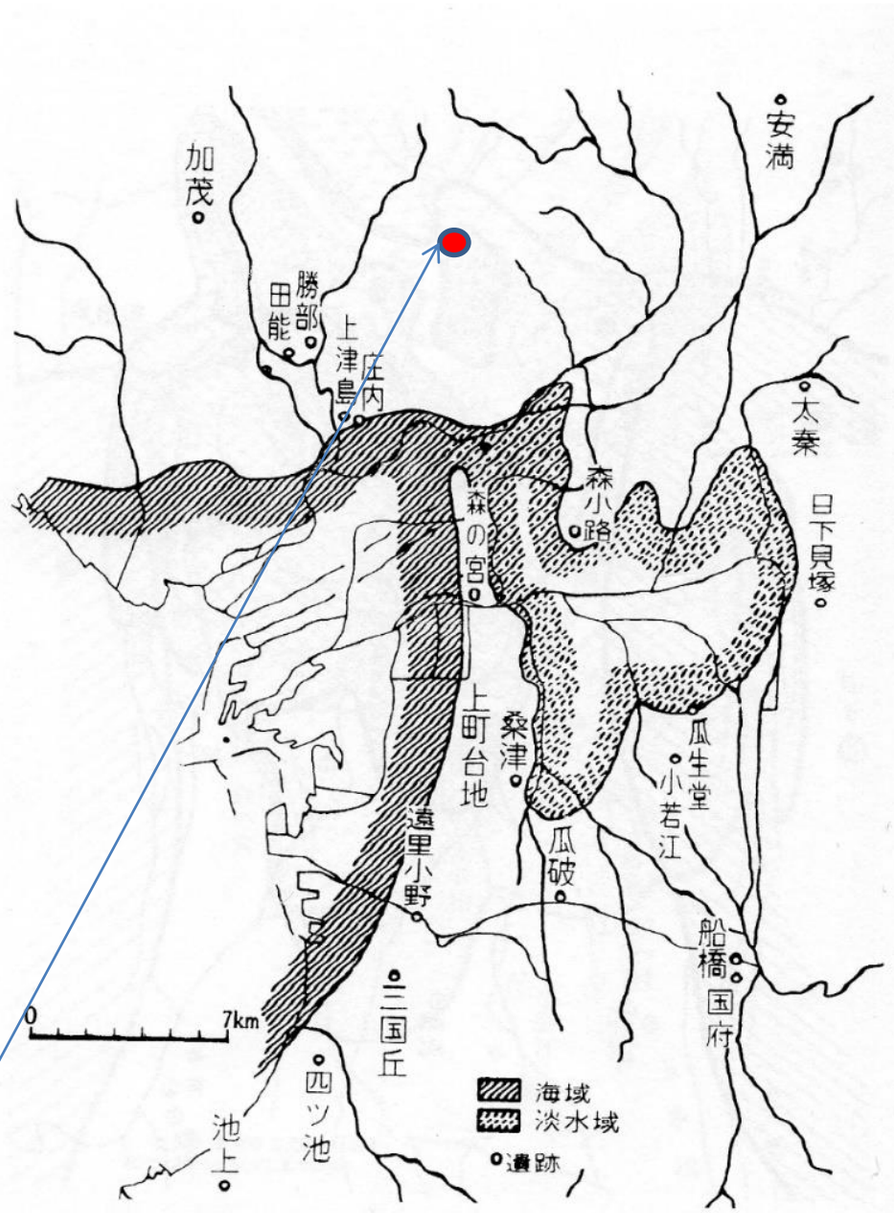


図-13　河内潟の時代の古地理図（『大阪府史第一巻』より）

三嶋神

三島神（三島大明神、大山祇神）の由来はかって韓国の巨文島が三島と呼ばれたことによる。三島神の東征が南朝鮮の倭人の摂津・大和への進出の第1陣と考えられ、皇紀の神武天皇の東征に当たると考える。この三島神の東征に、鉱物資源の豊富な阿蘇山周辺で鉱物の採掘に当たっていた多氏が大和の丹（辰砂）に魅せられ同伴したのではないか。次に、丹後の倭宿禰（懿徳天皇に当たる）がつづき、さらにニギハヤヒ（孝霊天皇、大物主に当たる）、崇神天皇、最後に応神天皇が続いた。ニギハヤヒが東征し、邪馬台国を建てた時、アメノヒボコと三島神の子孫が同行したのではないか。（藤田）

摂津三島は、東奈良遺跡（茨木市）での弥生時代中期後葉の「聞く銅鐸」の製造で知られている。同市の三島湟咋耳一族の氏神の溝咋神社は、神武天皇妃の五十鈴媛命の母、玉櫛媛命（たまくしひめのみこと）を祭神とする。尚、三島湟咋耳尊は息長氏の祖たる天津彦根神の子神とされ、瓊瓊杵尊ら天孫と同時代の人格である。（藤田）

【神武・海道東征　第９部】（産経WEST 2016.2.12 15:00）

立后と崩御（2）出雲の血統で図った融和

カムヤマトイハレビコノミコト（神武天皇）の皇后候補を見つけてきた大久米命（おおくめのみこと）は、その両親の物語から報告を始めた。「三嶋の湟咋（みぞくひ）が女（むすめ）、名は勢夜陀多良比売（せやだたらひめ）、其の容姿麗美（かたちうるは）し。故（ゆえに）美和の大物主神（おおものぬしのかみ）、見感（みめ）でて…」と『古事記』は記す。三嶋は、現在の大阪府茨木市から高槻市にかけての三島地域、は三嶋の首長である。「湟咋の娘を大和・三輪山（現奈良県桜井市）の神で、出雲の大国主命の分神でもあるオオモノヌシが見初めた」とする記述は、現代文にすると、おおむね次のようになる。<オオモノヌシは朱塗りの矢に化けて川を下り、用便をするセヤダタラヒメのほと（女陰）を突いた。驚いたヒメが、その矢を床のそばに置くと、矢は麗しき壮夫となってヒメと結ばれた。生まれた子が富登多多良伊須岐比売命（ほとたたらいすすきひめのみこと）で、またの名は比売多多伊須気余理比売（ひめたたらいすけよりひめ）である。こういうわけでヒメは神の御子なのです。>

オオモノヌシが湟咋の娘を望んだ理由、さらにその娘をオオクメが皇后に薦める理由を示唆するのが、茨木市五十鈴町に鎮座する湟咋（みぞくい）神社である。主祭神は玉櫛媛（たまくしひめ）（セヤダタラヒメ）と媛蹈鞴五十鈴媛命（ひめたたらいすずひめのみこと）（イスケヨリヒメ）。溝咋は湟咋と同義で、溝は水路、咋は水路を支える杭を意味し、三嶋が農業先進地だったことが推測できる。「三嶋は、銅鐸を各地に供給した一大生産地でもありました」そう話すのは同市立文化財資料館の清水邦彦学芸員である。同神社の南西に広がる弥生時代の東奈良遺跡からは、36点もの銅鐸の鋳型片（国の重要文化財）が見つかっている。ヒメたちの名に、金属精錬で使う足踏みフイゴや炉を意味する「タタラ」がついているのは、こうした土地柄を示しているのだ。「イススキやイスケという語には、振り動かすことで霊や命をよみがえらせ、招き寄せる呪能の意味がある。稲穂の豊かな結実を祈願し、銅鐸を鳴らして稲魂を招く姿が想像できる」 皇后候補となったイスケヨリヒメについて、『古事記』学会の三浦茂久氏はこう話す。畿内の先進地を祭祀（さいし）によって治める女性。このヒメこそイハレビコの皇后にふさわしい、と忠臣のオオクメは考えたのだ。

『日本書記』には、〈事代主神（ことしろぬしのかみ）、三島湟咋耳神（みぞくひみみのかみ）の女（みむすめ）、玉櫛媛に共（あ）ひて生める児（みこ）、号（なづ）けて媛蹈鞴五十鈴媛命と曰（まを）す〉とある。日本書紀は、イスケヨリヒメの父を大国主命の子のコトシロヌシと記す。日本書紀は『古事記』より明確に、初代皇后を出雲の血統と書いている。立后は、国譲りした勢力との融和を図るものだったことがうかがえる。コトシロヌシは、溝咋神社から約2キロしか離れていない三島鴨神社（高槻市三島江）に祭られ、溝咋神社と往古、御輿（みこし）が行き来した。松井位幾（なりふさ）宮司は「ご祭神が妻や娘に会いに行くお渡りだった」と話す。初代皇后は、出雲の神に愛された娘でもあったのである。

初代皇后とその母を祭る溝咋神社＝大阪府茨木市　（恵守乾撮影）

【用語解説】三嶋の銅鐸

銅鐸は弥生時代の中、後期に盛んに造られ、忽然（こつぜん）と姿を消す謎の祭器。時代とともに大型化し、内部の舌（ぜつ）を揺らして音を聞く銅鐸から、祭壇に置いて見る銅鐸へ変化したとされる。東奈良遺跡で製造していたのは古いタイプの聞く銅鐸だ。全国で約500点が出土している。

銅鐸が最初に製造されたのは、大阪周辺と推測されているが、その起源を探る上で注目されるのが同遺跡で出土した高さ14センチの小さな銅鐸。国内最古とも指摘されるが、類例がないだけに考古学者の間で見解が分かれている。

神武天皇の后とされる媛蹈鞴五十鈴媛命は、孝霊朝（3世紀始め）の大三輪神（大物主、ニギハヤヒ）と玉櫛媛の娘である。また媛蹈鞴五十鈴媛命の祖父の三島湟咋耳命（大山祇神の後）は、天津彦根神（スサノオの子）の御子神とされ、天孫と同時代（1世紀中頃）の人物である。『記紀』には、2世紀半ばから3世紀末のニギハヤヒや崇神の東征の時期を1世紀の天孫降臨の時期とする作為を感じる。三島湟咋耳は1世紀半ばから2世紀末にかけて、引き継がれた世襲名ではなかろうか。

溝咋神社（みぞくいじんじゃ）

主祭神:
玉櫛媛命（たまくしひめのみこと）- 五十鈴媛命の母
媛蹈鞴五十鈴媛命（ひめたたらいすずひめのみこと）- 神武天皇皇后
相殿神:
湟咋耳命（みぞくいみみのみこと）- 五十鈴媛命の祖父
天日方奇日方命（あめのひかたくしひかたのみこと）- 五十鈴媛命の兄
速素盞嗚尊（すさのおのみこと）- 五十鈴媛命の祖
天児屋根命（あめのこやねのみこと）- 藤原氏祖

溝咋神社の創建は不詳。社伝では、第10代崇神天皇の頃に創建されたとしている。当社は祭神節にあるように三島湟咋耳一族を祀っており、『古事記・日本書紀』の諸伝承との関係が指摘される。
『古事記』神武天皇段では、大物主神が勢夜陀多良比売（玉櫛媛）を見染め、丹塗矢に化して比売の陰部を突く。そして比売は驚いたが、その矢を床に置いたところたちまち壮夫となり、比売との間に富登多多良伊須須岐比売命（媛蹈鞴五十鈴媛命）が生まれたという。
『日本書紀』神代巻では、媛蹈鞴五十鈴媛命が大三輪神の子と記すとともに、事代主神が八尋熊鰐となって三島溝樴姫（玉櫛媛、玉依姫）のもとに通い、生まれた媛蹈鞴五十鈴媛命が神武天皇の后になったと記す。『日本書紀』神武天皇即位前庚申年8月16日条にも同様の記載があり、ここでは玉櫛媛は三島湟咋耳命の娘と記されている。
これらの文献を踏まえた上で、さらに当社の境内社には大物主神でなく事代主神が祀られていることから、事代主を奉祀する鴨氏と三島勢力との交流が指摘される。実際、周辺には三島鴨神社・鴨神社といった神社や、鴨村・鴨林といった地名が残り、鴨氏の勢力がうかがわれる。後世になってこの交流が『記紀』神話に再構成され、出雲系の神が上記の様に強調されたと考えられる。また、三島湟咋耳一族の実態については明らかでなく、三島県主との関係を指摘する説はあるが定かではない。溝は「水」を象徴し、耳は「長」を表すことから、安威川水系の用水に関わる氏族と考えられる。
(Wikipedia抜粋)
三島湟咋耳命は天津彦根神の子神とされ、天孫と同時代の人格と考える。また、三島を名乗ることは、三島神（大山祇神）との関連が伺われる。

大阪府茨木市五十鈴町9-21

三島鴨神社（みしまかもじんじゃ）

社伝では、伊予の大山祇神社、伊豆の三嶋大社とともに「三三島」と呼ばれたという。また、日本で最初の三島神社（山祇神社）とされる。

祭神
大山祇神（おおやまづみのかみ）
『伊予国風土記』逸文によれば、伊予国乎知郡（越智郡）御島に坐す大山祇神（大山積命に同じ）は、またの名を「和多志の大神」といい、仁徳天皇の御世に百済より渡来して津の国の御島に鎮座していたという。「津の国の御島」とは摂津国三島（現 高槻市三島江）を指すとされ、この記述によれば大山祇神社（愛媛県今治市）の祭神は元々は当地の神とされる。
事代主神（ことしろぬしのかみ）
事代主は鴨氏の氏神とされ、当地に鴨氏の進出が背景にあるとされる。『日本書紀』神代巻には、事代主神が八尋熊鰐となって三島溝樴耳の娘・三島溝樴姫（玉櫛媛）のもとに通い、生まれた媛蹈鞴五十鈴媛命が神武天皇の后になったと記す。三島溝樴耳一族の氏神として、当社近くには溝咋神社が祀られている。

創建
三島鴨神社の創建は不詳。当社は元々淀川の川中島（御島）に祀られていたといい、社伝では仁徳天皇が茨田堤を築くにあたって、淀川鎮守の神として百済から遷り祀られたという。上記の『伊予国風土記』逸文によると、大山祇神は百済から当地に祀られ、次いで伊予国の大山祇神社に遷座したとされる。同文に見える「津の国の御島」が当社であれば、大山祇神社が大三島瀬戸に鎮座したのが推古天皇2年（594年）とされているので、当社はこれ以前の創建となる。なお、当社では伊豆の三嶋大社へも当社から御魂が遷されたとしている。
一方、事代主神が祭神として祀られていることから、鴨氏の進出が指摘されている。そして、すでに淀川の渡船の神として祀られていた大山祇神（三島神）と事代主神（鴨神）が合祀されたことで、「三島鴨神社」の社名が生まれたとされる。
（Wikipedia抜粋）

三島鴨神社（大阪府高槻市三島江）

大山祇命　和多志大神、三島神（三島大明神）

大山祇神社（おおやまづみじんじゃ）は、愛媛県今治市大三島町宮浦にある神社。式内社（名神大社）、伊予国一宮。全国にある山祇神社(大山祇神社)の総本社である。また、主祭神の大山祇神は「三島大明神」とも称され、当社から勧請したとする三島神社は四国を中心に新潟県や北海道まで分布する。

瀬戸内海に浮かぶ大三島西岸、神体山とする鷲ヶ頭山（標高436.5メートル）西麓に鎮座する。古くは大三島南東部に位置した。三島神社や大山祇神社の総本社であり、山の神・海の神・戦いの神として歴代の朝廷や武将から尊崇を集めた。大山祇神を祀る代表的な神社ということもあり、山神社の総本社とされることもある。境内には国の天然記念物「大山祇神社のクスノキ群」がある。また、源氏・平氏をはじめ多くの武将が武具を奉納して武運長久を祈ったため、国宝・重要文化財の指定をうけた日本の甲冑の約4割がこの神社に集まっている。

祭神

大山積神（大山祇抻、おおやまづみのかみ、おおやまつみのかみ）別名として「和多志大神（わたしのおおかみ）」とも、「三島大明神」とも云う。伊弉諾尊と伊弉冉尊の間の子で、磐長姫命と木花開耶姫命（瓊瓊杵尊の妃）の父。元は山の神であるが、大山祇神社が瀬戸内海の要所に位置することなどから、大山祇神社では海の神としての性格も強い。大山祇神社では社名「大山祇」と祭神名「大山積」とは異なる表記が用いられているが、かつては社名も「大山積」と表記されている。

創建

大山祇神社の鎮座する大三島は古くは「御島」と記されたように、神の島とされていた。大三島に鎮座した由来には諸説がある。

『大三島記文』（社伝） 大山祇神子孫の小千命（乎千命、おちのみこと）が大三島に勧請したとする。

『伊予国風土記』逸文大山祇神は百済から渡来して津の国（摂津国）の御嶋に鎮座、のち伊予国に勧請されたとする。その解釈として、越智氏が朝鮮半島出征で大大山祇神を戴いて帰国したとする説、越智直が百済に出征し捕虜となり中国を回って帰国したとする説話による説があるが、いずれも確証は欠く。摂津国の御嶋は三島江（三島鴨神社）が定説だが、鴨神社（式内社三島鴨神社の論社）ともされる。

『予章記』・『予陽河野家譜』越智玉興がこの地での霊験にあやかり、勅宣により社殿を造営したとする。

境内には弥生時代の神宝や祭祀遺跡があるといわれており、いずれにしてもかなり古い時代から存在したとされる。

（Wikipedia抜粋)

三嶋大社（みしまたいしゃ、三島大社）は、静岡県三島市大宮町にある神社。

祭神

大山祇命（おおやまつみのみこと）、**積羽八重事代主神**（つみはやえことしろぬしのかみ）。2柱は「三嶋大神（みしまのおおかみ）」または「三嶋大明神（みしまだいみょうじん）」と総称される。

三嶋大社の祭神に関しては、古くは大山祇命祭神説・事代主神祭神説が存在した。大山祇命説は、鎌倉時代の『東関紀行』に始まって『源平盛衰記』『釈日本紀』『二十一社記』『日本書紀纂疏』等の諸史料に見える説である。三嶋神が伊予国一宮の大山祇神社（大三島神）に由来するという伝説に基づき、事代主神説が唱えられるまでは広く定着していた。

一方の事代主神説は、江戸時代後期の平田篤胤の『古史伝』での主張に始まる説である。室町時代の『二十二社本縁』に「都波八重事代主神（中略）伊豆賀茂郡坐三島神、伊予国坐三島神同体坐云」とある記載に基づく。江戸時代までの祭神は大山祇命とされていたが、幕末に事代主神説が国学者の支持を得たため、明治6年（1873年）に事代主神に改められた。その後大正期に入って大山祇命説が再浮上したため、2柱説が昭和27年（1952年）に制定されて現在に至っている。

近年の研究では、三嶋神は「御島神」すなわち伊豆諸島の神を意味するとして、上記2説とも後世の付会とする見方が有力視される。この中で、噴火の盛んな伊豆諸島で原始的な造島神・航海神として祀られたのが「ミシマ神」の始まりであるという。そして「ミシマ」の音から、後世に他の神に結び付けられたとも推測されている。

（Wikipedia抜粋)

大山祇神社、愛媛県今治市大三島町宮浦

三島大社、舞殿（手前）と拝殿（左奥）
静岡県三島市大宮町

大山祇神社

大山祇神社から勧請したと伝える三島神社は、四国を中心に新潟県や北海道まで広がる。静岡県の三嶋大社と共に三島神社の総本社とされる。大山祇神社の祭神は大山祇神で別名として「和多志（わたし）大神」ともいい「三島大明神」とも称する。伊弉諾尊と伊弉冉尊の間の子で、磐長姫命と木花開耶姫命（瓊瓊杵尊の妃）の父。元は山の神であるが、当神社が瀬戸内海の要所に位置することなどから、海の神としての性格も強い。

三島神の由来はかって韓国の巨文島が三島と呼ばれ、韓の民から渡来した韓神にあるとされる（私の古代史、上田）。摂津の御嶋神（高槻市三島江三島鴨神社の祭神）がのち大山祇神社に勧請されたとする。渡来の時期は不明であるが、伊予国湯津の百済系渡来人８千の兵がアメノヒボコに加勢して、大国主命と戦ったとあるので（出石神社の神主の神床家の伝承、『播磨の国風土記』）、倭国大乱以前であると考えられる。

多氏　葛城多氏王権
神武⇒綏靖⇒安寧

綏靖天皇の即位
神武天皇が崩御した際、朝政の経験に長けていた庶兄の手研耳命は皇位に就くため弟の神八井耳命（多氏の祖）と神渟名川耳尊（綏靖天皇）を害そうとした（タギシミミの反逆）。この陰謀を知った神八井耳・神渟名川耳兄弟は、神武天皇の山陵を築造し終えると、弓部稚彦に弓を、倭鍛部の天津真浦に鏃を、矢部に箭を作らせた。そして片丘（奈良県北葛城郡王寺町・香芝町・上牧町付近か）の大室に臥せっていた手研耳を襲い、これを討った。この際、神八井耳（多氏の祖）は手足が震えて矢を射ることができず、代わりに神渟名川耳が射て殺したという。神八井耳はこの失態を深く恥じたため、神渟名川耳が皇位に就き、神八井耳は天皇を助けて神祇を掌ることとなった。翌年の1月に即位して葛城高丘宮（かずらきのたかおかのみや）に都を移す。同年7月、事代主神の娘で天皇本人の叔母（母の妹）にあたる五十鈴依媛命を皇后として磯城津彦玉手看尊（後の**安寧天皇**）を得た。
(Wikipedia抜粋)

多氏（おおし／おおうじ／おほし）は、「多」を氏の名とする氏族。日本最古の皇別氏族とされる。「太」「大」「意富」「飯富」「於保」とも記され、九州と畿内に系譜を伝える。
(Wikipedia抜粋)

多坐弥志理都比古神社拝殿

多氏の氏神

多坐弥志理都比古神社（おおにますみしりつひこじんじゃ）は、奈良県磯城郡田原本町にある神社である。式内社（名神大）で、近代社格制度による旧社格は県社。一般には多神社（おおじんじゃ）と呼ばれ、多社、多坐神社、太社、意富社とも書かれる。

主祭神
第一社 神倭磐余彦尊（神武天皇：神八井耳命の父）
第二社 神八井耳命
第三社 神沼河耳命（綏靖天皇：神八井耳命の弟）
第四社 姫御神（玉依姫命：神八井耳命の祖母）

歴史
『記紀』神話には、「神八井耳命は皇位を弟に譲り、自らは神祇を祭る」とあり、それが当社の始まりであるとしている。綏靖天皇2年、神八井耳命は春日県（後の十市県）に邸宅を造り、そこに神籬磐境を立てて自ら神祇を司り、春日県主の遠祖・大日諸神を祭祀者として奉祀せしめた。崇神天皇7年、その神祠を改造し、天津日瓊玉命・天璽鏡劒神を祈賽したと伝える。
（Wikipedia抜粋）

二の鳥居、後ろには奉献された石燈篭が並ぶ

多氏は縄文以来の鉱物採集民と思われるが、江南からの渡来人（耳族）の血脈をも引いている

多氏は皇別氏族屈指の古族であり、**神武天皇の子の神八井耳命（ｶﾝﾔｲ「ﾐﾐ」ﾉﾐｺﾄ）の後裔とされる**が、確実なことは不明。「太　安麻呂」（多氏は大氏ともいう）という人物が「多氏」の中では最も有名な人物である。例の『古事記』を編纂したとされている人物である。多氏の拠点は多神社（磯城郡田原本町）である。多氏と
秦氏には密接な関係があるとの説がある（秦氏の研究、大和）。
　「ミミ」がつく名称は、『記紀』では、出雲系や神代系に多く登場する名前である。「ミミ」は古代王家（日本海系？）のものを顕わす尊称と思われる。アメノオシホミミ神は、スサノオ神とのうけいで一番目に生まれた神である。第2代綏靖天皇（ｽｲｾﾞｲﾃﾝﾉｳ）はｶﾝﾇﾅｶﾜﾐﾐで、兄弟にｶﾐﾔﾐﾐﾉﾐｺﾄ（=ｶﾝﾔｲﾐﾐﾉﾐｺﾄ）がいて、異母兄弟にとﾀｷﾞｼﾐﾐﾉﾐｺﾄがいる。投馬国は出雲国のことと思われ、長官は彌彌（ミミ）、副官は彌彌那利（ミミナリ）である（『魏志倭人伝』）。『古事記』に、青葉山山中に土蜘蛛あり、玖賀耳之御笠（クガミミノミカサ）という。日子坐王、勅を奉り来たりて、これを伐つ。とある。この土蜘蛛は鉱物採取民の蔑称と思われ、神武東征後の豪族・土豪の抵抗民の一例として高尾張邑の土蜘蛛を挙げている。さらに大田田根子の系図『古事記』によると、大物主神の妻の活玉依媛　（ｲｸﾀﾏﾖﾘﾋﾒ）は陶津耳命（ｽｴﾂﾐﾐﾉﾐｺﾄ）の娘である。（Net　＋　藤田）

「ミミ」は古代王家（日本海系？）のものを顕わす尊称か
１．第2代綏靖天皇（ｽｲｾﾞｲﾃﾝﾉｳ）はｶﾝﾇﾅｶﾜﾐﾐで、兄弟にｶﾐﾔﾐﾐﾉﾐｺﾄがいて、異母兄弟にとﾀｷﾞｼﾐﾐﾉﾐｺﾄがいる。
２．若狭富士の青葉山山中に土地蜘蛛あり、玖賀耳之御笠（クガミミノミカサ）という。日子坐王、勅を奉り来たりて、これを伐つ。『古事記』　玖賀耳之御笠と日子坐王は丹後の同族でこれを伐つとは違和感がある。（前ヤマトを創った大丹波王国、伴）
３．　投馬国は出雲国のことと思われる。南へ水行20日で、投馬国に至る。長官は彌彌（ミミ）、副官は彌彌那利（ミミナリ）である。推計5万戸余。『魏志倭人伝』

耳族

南朝鮮の天津神が侵入する前からの先住の南方系の海人族とは、揚子江沿岸から海南島にいたる中国南部に住む海人であり、常時大きな耳輪をさげる風習を持っていた。その習俗を日本列島に渡来してからもなお持ち続けていたので、多くの人びとの目を引き、ミまたはミミの名をもって呼ばれていたのではないか。彼らは弥生時代の稲作の盛行期に日本列島の土を踏んだ水田耕作民であり、他方狩猟にも長じ、また鍛冶技術も列島にもたらしたのである。（青銅の神の足跡、谷口健一）

耳族は中国南部に居住した種々の種族の一つであろう。彼らの渡来は大国主と同時期で、天津神の渡来の前か（藤田）

鉱物氏族・多氏の分布

　東アジアの犬祖伝説分布からわかることは犬戎、槃瓠が持ち、やがて越、呉、秦へと引き継がれる犬祖伝説が独自に海を渡って日本列島にまで民間レベルで及んでいる。

丹生氏は最初の鉱物採集民か？

今の段階では、丹生氏を最古の鉱物採集民とする説には異論もあろうが、文献上に現れる氏族の中で最も古くから水銀を採集していた氏族あるいは彼らの管理者であったと言えるだろう。おそらく縄文時代から？

阿蘇、あるいは祖母・傾山系を源流とする大野川は大分市丹生遺跡、丹生川遺跡を通過して、海部の大古墳亀塚、築山のある坂ノ市・王の瀬地区の河口へと流れ出る。その大野川の源流沿いに古代から栄えた木浦鉱山、尾平鉱山という、極めて埋蔵鉱物種類の多い九州屈指の鉱山があり、各所に多氏の痕跡がある。したがって支流である丹生川沿岸にあった水銀鉱脈や鉄分を含む高師小僧（褐鉄鉱）を、主として呪術、顔料を目的として採集活動を行っていた先住縄文人たちが丹生地域にいて、その定住先は九六位山をまたいだ臼杵市藤河内、諏訪地域にあったと見られるのである。

　科野国造家、諏訪大社大祝、のちの金刺氏や他田（おさだ）氏が、阿蘇氏を大元とすると書いている。だからと言ってその内容がまったく間違いないとは誰にもわからない。しかし諏訪大明神絵詞や神道集の記述を分析すると、のちに伝説上の人物として現れる甲賀三郎訪方（諏訪頼方）が蛇体となって近江の人穴（坑道）から諏訪に出てくる話はあきらかに大和三輪山の苧環伝説を背景としており、蛇＝大和大物主と考えられることから、多氏大三輪氏の伝説的鉱物神格を頼方が持っていたことになろう。

　水銀鉱脈には自然に砂鉄、砂金を作る溶解性がある。また水銀はあらゆる鉱物を粒子にして溶かし込む力がある。　従って鉱物を探す場合、まず水銀鉱脈を発見するのが手っ取り早い方法である。
　修験者や山師は峰入りする際に、まず
１　河口の砂を調査分析する。
２　必要な粒子があれば川を遡って
３　赤茶けた岸壁などを探し
４　あたりの植生を調べ、笹百合、箱根シダ、楓などの「指標植物」を探す。
５　楓などに群がるスズメバチなどを探す。
６　たたら製鉄に充分な風が吹く場所も併せて探す。（福原、伊福、於福、息長、伊吹山）
７　目印になる山、樹木、巨石を記憶する。
８　星と月の位置や月日を考え合わせ、方角を記憶する。風水、陰陽五行、宿曜教、干支 猿犬酉は吉相の方角などなどの応用）
９　別に隕鉄などを含む隕石が落ちるのを観察する。（妙見・三宅）　１０百足と呼ばれる石英の筋を岩石に探す。その先に鉱脈がある。
（Net）

舟木氏

『古事記』には、神八井耳命を祖とする氏族名を19あげているがその中に意冨臣（多臣）とともに「伊勢の舟木直」も含まれている。舟木氏は船材の提供者であり、丹波、摂津、伊勢を活躍の場とした。そして、伊勢の朝明郡の多神社は、多氏の同族である船木直の子孫が代々奉斎している。
（伊勢と出雲：韓神と鉄、岡谷公二）

多氏と大国主および鉱山を司る神である金山彦命を（南宮大社の祭神）との関係に興味がもたれる？　多氏は古く縄文中期からの弥生前期の渇鉄鉱からの製鉄に関係あると思われている。（藤田）

三島神・多氏は、倭宿禰、ニギハヤヒ、崇神と同じくは、丹（辰砂）を求めて大和に進出か

辰砂（しんしゃ、cinnabar）は硫化水銀(II)（HgS）からなる鉱物である。中国の辰州（現在の湖南省近辺）で多く産出したことから、「辰砂」と呼ばれるようになった。別名に賢者の石、赤色硫化水銀、丹砂、朱砂、水銀朱などがある。日本では古来「丹（に）」と呼ばれた。 日本では弥生時代から産出が知られ、いわゆる『魏志倭人伝』の邪馬台国にも「其山 丹有」と記述されている。古墳の内壁や石棺の彩色や壁画に使用されていた。漢方薬や漆器に施す朱漆や赤色の墨である朱墨の原料としても用いられ、古くは伊勢国丹生（現在の三重県多気町）、大和水銀鉱山（奈良県宇陀市菟田野町）、吉野川上流などが特産地として知られた。
水銀採掘で一大勢力を築いた丹生一族の崇める丹生都比売大神。『丹生大明神告門』では、比売大神はイザナギ・イザナミ の御子神であるとしている。また同神を稚日女尊と同一とする説もある。
（辰砂－Wikipedia抜粋)

辰砂

丹生都比売神社（にふつひめ、丹生都比賣神社）（和歌山県かつらぎ町上天野にある紀伊国一宮、官幣大社、全国に約180社ある丹生都比売神を祀る神社の総本社　丹生氏の氏神

和歌山県北東部、高野山北西の天野盆地に鎮座する。空海が金剛峯寺を建立するにあたって丹生都比売神社が神領を寄進したと伝えられ、古くより高野山と深い関係にある神社である。神社背後の尾根上には高野山への表参道である高野山町石道（国の史跡、世界遺産）が通り、丹生都比売神社は高野山への入り口にあたることから、高野山参拝前にはまず丹生都比売神社に参拝する習わしであったという。丹生都比売神社自体も高野山からの影響を強く受け、境内には多くの仏教系の遺跡・遺物が残る。和歌山県・奈良県を主とした各地では、高野山の荘園に丹生都比売神社が勧請された関係で、丹生都比売神社の分霊を祀る神社の分布が知られる。
神社では国宝の銀銅蛭巻太刀拵を始めとする文化財のほか、本殿および楼門などの社殿が国の重要文化財に指定されている。また境内は国の史跡に指定されている。これらのうち本殿、楼門および境内は、ユネスコの世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部として登録されている。

祭神について

丹生都比売神丹生都比売神の性格については大きく分けて2説がある。1つは水神とみるもので、その根拠として天野の地が紀の川の一水源地であること、空海が丹生都比売神社から譲り受けたという神領は有田川・貴志川・丹生川・鞆淵川の流域のほぼ全域を占めていたこと、関係する丹生川上神社は水神信仰であること、東大寺のお水取りで水を送る遠敷明神（おにゅうみょうじん；若狭彦神社）の存在、御田祭などの祭事における性格等が挙げられる。もう1つは、「丹」すなわち朱砂（辰砂：朱色の硫化水銀）の採掘に携わる人々によって祀られたという説である。後述の『播磨国風土記』逸文にも「赤土」の記載が見えるほか、全国にある「丹生」と名のつく土地・神社は、水銀の採掘に携わった氏族（丹生氏）と深い関係にあることが明らかとなっている。これらに対する一説として、丹生一族が水銀採掘で一大勢力を築いたが、その枯渇に際して天野や三谷で帰農、丹生都比売神社も水神信仰に変化したとする説もある。なお『丹生大明神告門』では、丹生都比売神を伊佐奈支命・伊佐奈美命の子とする。また稚日女尊と同一神とする説もある。
（Wikipedia抜粋)

境内（正面に楼門：国の重要文化財
Wikipedia

（光一郎撮影）

丹生の民俗

丹生の民俗-神奈備にようこそ

朱の呪術

血の色でもある朱、これは、活力と蘇生、死との対決、死霊封じ、太古の人々は朱を呪術具としたのである。

葬る遺体に施朱をする風習があった。再生を願い、死霊を封じるこの風習は、北海道南半部から東北北部と九州北部の二ヶ所で、縄文後期に登場した。九州では弥生時代に引き継がれていったが、北部では終焉してしまった。

朱の原料

天然の赤鉄鉱を砕いた鉄丹（ベンガラ）は縄文早期、同じく辰砂を砕いて得る水銀朱、他に鉛丹等が主な原料である。辰砂は硫化水銀である。常温で液体の水銀は、天然に存在するが、多くは辰砂を製錬して入手する。

丹生氏と丹生都比売

辰砂を産出する水銀鉱床群の分布する地域には丹生、丹生川、丹生神社が同じように分布している。祭神は丹生都比売神で、辰砂の産出を司る女神である。丹生都比売の祭祀には丹生氏があたった。施朱に使うには、辰朱を細かく砕いて遺骸をつつんだのであって、水銀にまで昇華させる必要はなかった。

施朱の風習は古墳時代前半には終わり、更に金製品が渡来し、国内でも金製品や鍍金製品が作られ始めた。金と水銀に溶かし込んだアマルガムを銅などに塗り、これに熱をかけて水銀を蒸発させると、表面に金がしっかりと食い込む。この時代になると水銀が必要になってくる。6世紀の頃である。

辰砂の採取を司る丹生氏は、水銀製錬・鍍金の技術を持っていなかった。この技術を持ち込んできたのは秦氏である。辰砂と水銀の利用の主役は秦氏に移り、丹生氏は丹生都比売を祭祀する神官となった。秦氏もまた、丹生の地名、丹生神社の鎮座地に多く分布している。

7世紀後半の『記紀』が編纂される頃には、丹生氏の影は薄くなっており、『記紀』には丹生都比売神（天野大社）は登場していません。神功皇后のエピソードの中にかろうじて天野祝の名が出てくる程度の扱いとなっている。

中央構造線沿いの水銀鉱床群

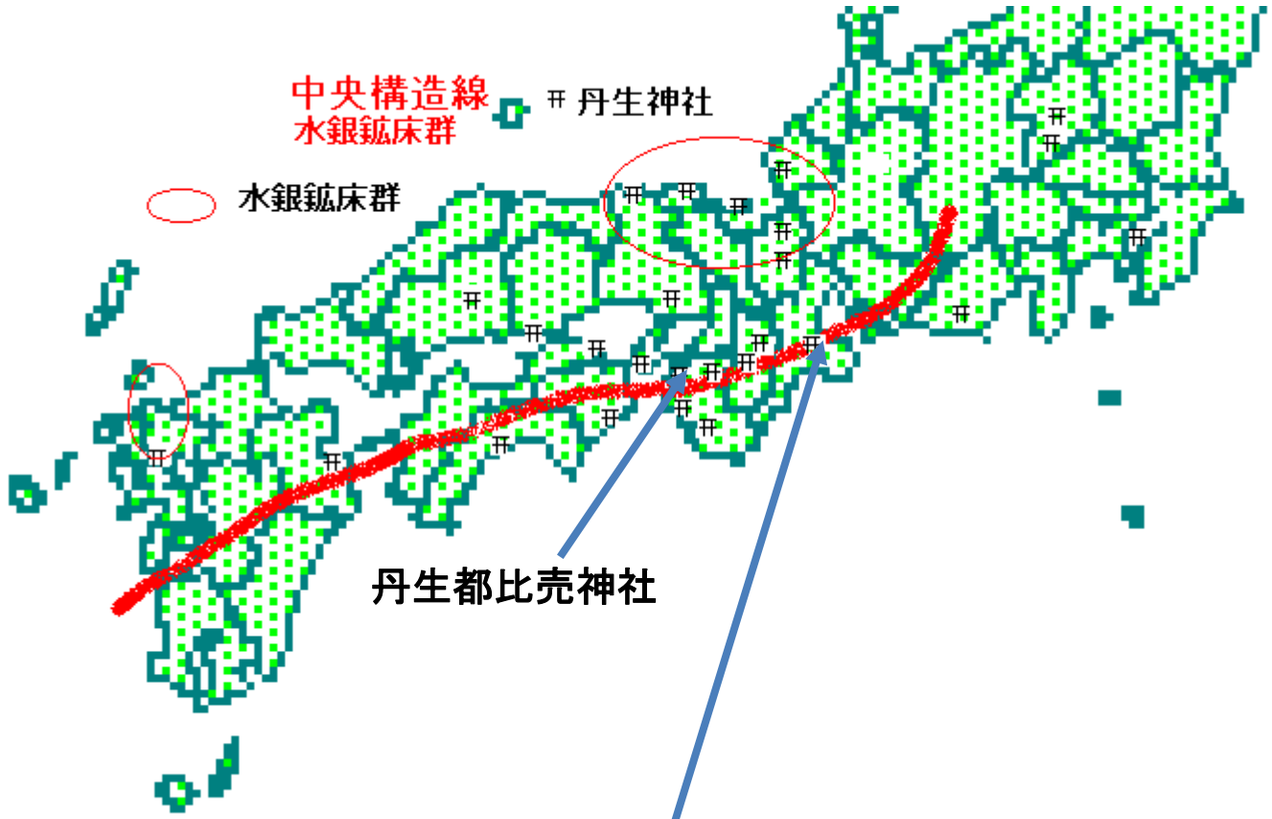
大和鉱床群　伊勢から紀ノ川河口の間　伊勢神宮と日前国縣神宮が東西の端に鎮座している。阿波鉱床群　阿波吉野川沿い　若杉山遺跡は古墳時代の辰砂採掘遺跡で石臼石杵が多数出土している。九州鉱床群　大分市坂ノ市から姶良郡溝辺町丹生附　九州西部鉱床群　佐賀県多良岳から嬉野町、松浦市

（Net）

紀伊半島は，歴史的に見て日本では間違いなく最大の辰砂の産地でした．中央構造線を挟んで，紀伊半島には，現在でも50以上もの丹生神社が残っているそうです．

その中でも，三重県多気郡勢和村丹生付近は辰砂の採掘の中心地でした．奈良の大仏に渡金するため用いられた水銀は，主にこの地の辰砂から精製された水銀が用いられたようです．

（丹生の辰砂紀行、Net抜粋）



丹生神社　（三重県多気郡多気町丹生）

丹生神社由来

祭神 埴山姫命・水波賣命ほか十六柱

延喜式の神名帳、飯高郡九座に列せられた由緒ある神社で、継体天皇16年（523）に鎮座したという。聖武天皇が東大寺大仏殿の建立のさい、水銀の産出をこの神に祈ると忽ち水銀が湧出したので、丹生明神と名付けた。又、嵯峨天皇が降雨を祈ったら霖雨があり、晴れを祈ったら、晴れたという故事により丹生大明神は祈雨・祈晴の神ともいう。なお近接する神宮寺とともに水銀に関する遺物が保存され、両者は水銀を通じて深い関係にあることが推察できる。

（丹生神社々務所　社頭掲示板　抜粋）

土蜘蛛

土蜘蛛とは先住の縄文人とされることがあるが、むしろ鉱山の坑道で働く人々を「土蜘蛛」や「穴居民」と蔑称したものであろう。

土蜘蛛(つちぐも)

『日本書紀』には各地の土蜘蛛が登場するが、蜘蛛のことではない。先住の縄文人とする説もあるが、鉱山の坑道で働く人々を「土蜘蛛」や「穴居民」と蔑称したもので、国栖(くす)・国樔(くず)・佐伯(さへき)・八束脛(やつかはぎ)・隼人(はやと)、いずれも土蜘蛛であり穴居民を意味しており、土蜘蛛の分布地と丹生(ニュウ)・砂金・砂鉄など鉱山資源の産地が合致する。というより、合致するからこそ冷酷に駆逐されたのである。

『古事記』神武紀
伊波禮毘古は言葉に従い八咫烏(やたがらす)の後についていいと、阿陀(あだ)で朝廷に魚などを献上する国津神と出会い、国栖 (くす)で穴居民の迎えを受けた。

『日本書紀』神武紀
高尾張邑(タカオワリムラ)に土蜘蛛(つちくも)がいた。その人態は、身丈が低く、手足が長かった。磐余彦尊(いわれひこ＝後の神武天皇)の軍は葛(桂)の網を作り、罠をはって捕らえ、これを殺した。そこで邑の名を変えて葛城とした。
　土蜘蛛の中でも、奈良県の大和葛城山にいたというものは特に知られている。大和葛城山の葛城一言主神社には土蜘蛛塚という小さな塚があるが、これは神武天皇が土蜘蛛を捕え、彼らの怨念が復活しないように頭、胴、足と別々に埋めた跡といわれる。
(土蜘蛛(Wikipedia抜粋))
　大和国の土蜘蛛の外見で特徴的なのは、有尾人として描かれていることにもある。『日本書紀』では、吉野首(よしののおふと)らの始祖を「光りて尾あり」と記し、吉野の国樔(くず)らの始祖を「尾ありて磐石(いわ)をおしわけてきたれり」と述べ、大和の先住民を、人にして人に非ずとする表現を用いている。『古事記』においても、忍坂(おさか・現桜井市)の人々を「尾の生えた土雲」と記している点で共通している。

『日本書紀』応神紀
吉野宮に行幸。国樔人(くずひと)が醴酒(こざけ)を天皇に奉り、歌を詠んだ。国樔の人は、人となりが純朴であり、常は山の木の実を取って食べている。また、カエルを煮て上等の食物としていて、名付けて毛瀰(もみ)という。
　上記から、大和地方にも多くの土蜘蛛がいたのだろうが、竪穴式住居の大王家の人々も「アリ」のようなもの。なにやら「目クソ、鼻クソを笑う」の感じがするが、劣悪な連中だとしなければならない理由があるのだ。それは後述する。

『日本書紀』景行紀
筑紫の土蜘蛛討伐と熊襲討伐の話があり、景行天皇が大和に帰還すると、東国から戻ってきた武内宿禰が、次のように言上したという。
「東国のいなかの中に、日高見(ひたかみ)国があり、その国の人は蝦夷(えみし)と呼ばれ、男も女も髪を椎(つち)のような形に結って、体には刺青(いれずみ)をした勇敢な者達です。また土地は肥えていて広大です。是非攻略すべきです」
　肥沃で広大な土地があるから略奪すべきだと言われ、すぐに景行天皇は日本武尊(ヤマトタケル)に東国の蝦夷征伐を命じている。これでは、蝦夷は西部劇に登場する北米インディアンのようなもの。ただし、この段階では蝦夷と呼んでいるが、蝦夷とは「辺境の野蛮な異国人」を意味しており、まだ、『鬼』とはされていない。

つづき

『日本書紀』は日本武尊(『古事記』では倭建)の蝦夷征伐を記しているが、『古事記』には、蝦夷征伐は一行も記されていない。だが、『常陸国風土記』には、日本武尊が登場するのでそれをみてみよう。
『常陸国風土記』
○　行方郡(なめかたのこおり)・当麻(たぎま)郷
　倭武(ヤマトタケル)天皇が巡行して、この郷を通られたとき、佐伯(さへき)の鳥日子という者があった。天皇の命令に逆らったため、すぐに殺された。
○　行方郡・芸都(きつ)里
　昔、芸都里に国栖(くず)の寸津毘古(きつひこ)、寸津毘賣(きつひめ)という二人がいた。その寸津毘古は天皇の命令に背き、教化に従わず、無礼であった。そこで、御剣を抜いて、すぐに斬り殺された。寸津毘賣は恐れおのき、白旗を掲げてお迎えして拝んだ。天皇は哀れに思って恵みを垂れ、住むことをお許しになった。
○　小城郡(おきのこおり)
　昔、この村に土蜘蛛(つちぐも)がいて、小城(城壁)を造って隠れ、天皇の命令に従わなかった。日本武尊が巡行なさった時、ことごとく誅罰した。

　この『常陸国風土記』に対して、茨城県潮来市には次のような伝承がある。
『潮来伝説』 崇神天皇の頃、霞ヶ浦の一帯で先住民に対する大掛かりな攻撃が行われた。東海地方を古代は「ウミノミチ」と呼び、船でなければ辿り着けない土地だった。霞ヶ浦の国栖(くず)に対する攻撃は海からの上陸作戦がとられた。朝廷の船団は伊豆から房総半島を回り、当時まだ小さな半島だった『鹿島』を望みながら、浮島に上陸した。国栖の抵抗はもろかった。大和朝廷は出雲の勢力を借りて鹿島を征定し、砂鉄の産地を手中に治めたのである。
　『常陸国風土記』の編纂は、養老年間(717－723年)に常陸国守の藤原宇合(うまかい)によって治められた。大和朝廷で権勢を誇る藤原氏四家の一人である藤原宇合が国守として派遣されるほど、常陸国は重要視されていたことがわかる。辰砂常陸国の辰砂・砂金・砂鉄の確保、これは大和朝廷にとっては死活問題だったのである。常陸の国造(クニノミヤツコ)には、筑波国造の壬生連・那珂国造の壬生直・上野国造の壬生公と、壬生(にゅう)氏が三名もいるが、壬生とは丹生(にゅう＝辰砂・水銀)のことである。これが潮来の伝承を裏付けているのではないだろうか。ちなみに、壬生氏は壬生古志の一族で、『新選姓氏録』には「吉志、難波忌寸と同祖、大彦命之後也」となっている。要するに安倍貞任と同族の安倍氏である。Net)

地蜘(土蜘蛛)

懿徳から孝安（葛城王朝）

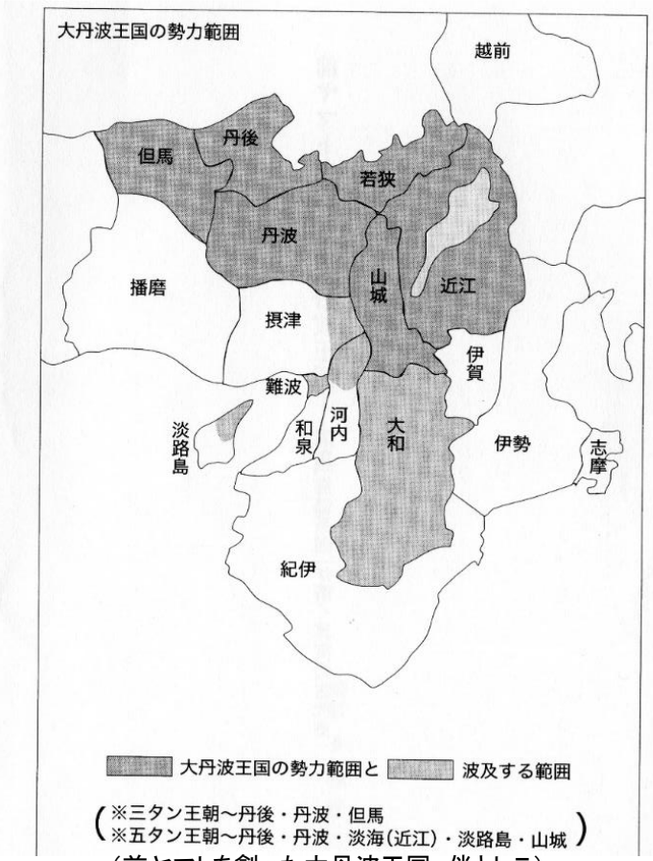
葛城王朝は大己貴の国「玉牆の内つ国」の支国か

丹　後

古来、丹後は、丹波と但馬とで形成する三丹の中核である。

漢の植民地の北朝鮮の楽浪郡には倭国にない製鉄の高炉があり、朝鮮や倭国の鉄鉱石からの大規模な製鉄が可能となっていた。その頃（紀元前2～前1世紀）、楽浪郡を中核とする、筑紫ー出雲ー丹後を覆う鉄と銅と玉の交易ネットワークが形成され、丹後にも大量の鉄がもたらされるようになった。かくて、丹後は鉄、ガラスと玉の取引で所謂、大丹波大国（右図）の中核となっていた。

1世紀半ば邇邇芸の兄の天火明（彦火明、ホアカリ）は第４代新羅王の脱解王に当たり、彦火明（脱解）が丹後に降臨したことになる。脱解は新羅や丹後で鍛冶に従事していたのではないかと言われている。彦火明の3世孫の倭宿禰がアジスキタカヒコネを伴い葛城に侵攻して（ホアカリの東征）、葛城王朝を建てた。倭宿禰が懿徳天皇に当たると考える。葛城王朝は当時近畿・中部地方一円を支配した大己貴の玉牆の内つ国の支国であると考えている。（藤田）



（※三タン王朝～丹後・丹波・但馬
※五タン王朝～丹後・丹波・淡海(近江)・淡路島・山城）
（前ヤマトを創った大丹波王国、伴とし子）

天の橋立

籠神社のある丹後半島周辺は、不思議な伝説が多いところであります。『丹後国風土記逸文』には、このあたりの漁師の若者が竜宮城を訪れる話、つまり、有名な浦島太郎の伝説が残っています。ほかにも、羽衣を奪われた天女が天に帰れなくなるという羽衣伝説、さらに、天橋立はもともとイザナギ命が天から通ってくる梯子でしたが、神が地上で寝ている間に倒れて天橋立になった、という伝説もあります。いずれも、天上界や海の彼方にある別世界と交渉する内容をもっているのが特徴といえます。籠神社の名前の由来も、神代に彦火火出見命（ひこほほでみのみこと・彦火明命の別名）が籠船で龍宮に行ったとの伝説があり、そのために昔は籠宮（このみや）といったようです。丹後はこのように、どこか神話的な世界の残る地方でもあります。籠神社のある宮津市の「宮津」とは、大きな宮のそばにある港という意味です。むろん籠神社を指してのことです。天橋立はもともと籠神社の参道だったからです。
（倉橋 日出夫著『古代出雲と大和朝廷の謎』より）

籠神社

天の橋立

籠神社（元伊勢）

籠神社（このじんじゃ）は、京都府宮津市大垣にある神社。丹後国一宮。
　元伊勢の一社で「元伊勢籠神社」とも称し、また「元伊勢根本宮」「内宮元宮」「籠守大権現」「籠宮大明神」とも称する。現在まで海部氏が神職を担当している。丹後国総社は不詳だが、当社が総社を兼ねたとする説がある。

主祭神

彦火明命（ひこほあかりのみこと）「天火明命」、「天照御魂神」、「天照国照彦火明命」、「饒速日命」ともいうとする。社家海部氏の祖神。

相殿神

豊受大神（とようけのおおかみ）-「御饌津神」ともいうとする。

天照大神（あまてらすおおかみ）

海神（わたつみのかみ）- 社家海部氏の氏神。

天水分神（あめのみくまりのかみ）

　社伝によれば、現在伊勢神宮外宮に祀られている豊受大神は、神代は「真名井原」の地（現在の奥宮真名井神社）に鎮座したという。その地は「匏宮（よさのみや、与佐宮/吉佐宮/与謝宮）」と呼ばれたとし、天照大神が4年間営んだ元伊勢の「吉佐宮」にあたるとしている。そして白鳳11年（671年）彦火明命から26代目の海部伍佰道（いほじ）が、祭神が籠に乗って雪の中に現れたという伝承に基づいて社名を「籠宮（このみや）」と改め、彦火火出見尊を祀ったという。その後養老3年（719年）、真名井原から現在地に遷座し、27代海部愛志（えし）が主祭神を海部氏祖の彦火明命に改め、豊受・天照両神を相殿に祀り天水分神も合わせ祀ったと伝える。
　伊勢神宮外宮の旧鎮座地が丹後国分出前の丹波国であったという伝承は古く、その比定地には諸説がある。延暦23年（804年）の『止由気宮儀式帳』では「比治乃真名井」から伊勢に移されたとし、『神道五部書』以来の伊勢神道では旧地を丹波国与佐宮としている。籠神社をその地にあてたものとしては、建武2年（1335年）の文書の「豊受太神宮之本宮籠大明神」という記載、天和年間（1681年-1684年）の籠神社縁起秘伝の「当社籠大明神ハ即豊受大神也」とし「与謝宮ハ則是籠大明神也」とする記載がある。
（Wikipedia抜粋）

拝殿（Wikipedia）

境内遠景（傘松公園より）
左下に社殿、右上に天橋立（Wikipedia）

冠島と沓島は元伊勢・籠神社の海の奥宮であり、籠神社の祭神・彦火明命（ホアカリ）と市杵嶋姫命（イチキシマヒメ）が天降って夫婦となった神聖な島として、古代から特別視されている。ホアカリは豊受大神を祀って丹後丹波から開拓を始め、イチキシマヒメは航海安全を祈って両神ともに国の発展に貢献したとされる。また、近江の竹生島神社の祭神は市杵嶋姫命である。
　なお、室町時代に描かれた雪舟の「天橋立図」には、本来ならば構図に入らない両島が絵の右下に描き込まれており、これは雪舟が冠島・沓島が特別な島であることを知っていたからだと考えられているようです。
（人文研究見聞録　冠島・沓島遥拝所、Net)

雪舟の天橋立図

古代丹後の鉄とガラス－奈具岡遺跡

（紀元前の鍛冶炉や玉作り工房）

弥生時代には、この丹後地方は列島のなかでもかなり特別な地域だったようです。何が特別かというと、弥生時代からなんとガラスや鉄製品が作られていたのです。それを物語る考古学の発掘が、この１０年ほどの間に相次いでいます。特徴的なものをいくつかピックアップしてみると…

まず、丹後半島中央部の弥栄（やさか）町、奈具岡（なぐおか）遺跡では、紀元前１世紀頃ごろ（弥生時代中期後半）の鍛冶炉や、玉造りの工房が見つかっています。水晶やガラスを使って勾玉（まがたま）や管玉（くがたま）などを生産していた工房です。そのための道具としてノミのような鉄製品が作られていたようです。水晶工房は国内で最古で最大の規模とのことである。この遺跡の場合、出土した鉄屑だけでも数キログラムになるといわれ、大和や河内など近畿地方の中心部と比べると、「鉄の量としては桁違いの多さ」だといわれます。ましてや、鉄製品そのものが残されていたら、どれほどの量だったのでしょうか。

このような玉造りが丹後半島では紀元前2世紀ごろから始まっていました。玉造りの工房のある遺跡が、丹後半島だけで十数か所見つかっています。当然、この地域の遺跡から大量のガラス玉が出土するケースも多く、大宮町の三坂神社墳墓群や左坂墳墓群など、ガラス玉の総数は1万点にも及ぶということです。全国の弥生時代のガラス玉のほぼ10分の1が、丹後から出土しているといわれます。

（倉橋 日出夫著『古代出雲と大和朝廷の謎』より）

奈具岡遺跡より出土した鉄片・鉄製品

（奈具遺跡（京丹後市弥栄町満谷）Net）

倭国大乱の原因となる鉄

丹後地方は、弥生時代の終わりごろになってくると、今度は鉄製の武器を大量に保有するようになります。平成１０年９月、携帯電話の中継塔を立てる目的で、籠神社から数キロはなれた岩滝町の天橋立を見下ろす丘陵の中腹を調査したところ、驚くべき出土品が多数見つかりました。これは大風呂南遺跡と呼ばれる墳墓群ですが、その中心的な墓（１号墓）から１１本の鉄剣と、美しい青色のガラスの腕輪が出土したのです。墓の年代は西暦２００年前後。ほかにも、銅の腕輪（銅釧・どうくしろ）が１３個、大量の鉄製品や管玉、朱など、弥生時代の墳墓の常識を超えるものでした。なかでもガラスの腕輪は、国内ではこれまでに3例しかないうえに（福岡県で2例、丹後で1例）、どれも原形をとどめていませんでしたが、ここでは完全な形で出土し、透明感のあるコバルトブルーの輝きを放っています。被葬者が左手につけていたもので、権威の象徴です。

１１本の鉄剣も、墓の副葬品としては異例の多さです。弥生時代の墓に副葬される鉄剣は通常１～２本ですが、１１本というのは被葬者がいかに大きな権力を持っていたかをよく物語っています。しかも、時代は西暦２００年前後、まさに邪馬台国が誕生した直後です。

この墓の被葬者は、奈良県・纒向遺跡の石塚や、岡山県・楯突墳丘墓に葬られた人物と同じ時代に生きていたことになります。この時代の丹後の墓からは、鉄剣が大量に出土します。特別な立場にあるような人の墓ではなく、家長クラスの墓からも当たり前のように鉄剣が出てくるのです。おそらく軍事集団のようなものが存在していたのではないか、と考えられています。そうなると当然、軍事集団を束ねるリーダーがいたはずです。大風呂南遺跡の墓の被葬者は、そのような人物だったのではないか、と考えられています。

このように倭国大乱期から邪馬台国時代にかけて、列島のなかでどこよりも鉄を保有していたのが丹後です。その多くが鉄剣や鉄鏃（てつぞく・矢の先端部）など、武器として出土しています。

弥生時代はかつて平和な農村社会と考えられていましたが、案外、戦いが多かった時代だと今では考えられています。各地の戦いで武器の主力が鉄器になってくるのは、1世紀ごろからです。そのころから、丹後の墓からも鉄剣が出始める。ちょうど1世紀ごろの王墓と見られる三坂神社3号墓からは、大陸製の鉄刀やりっぱな弓矢、豪華な玉飾りなど、経済的な権力を持った王の姿があらわれてきます。

その後、2世紀後半から3世紀前半にかけては、上に述べたような状況で鉄剣がポンポン出てきます。この倭国大乱と邪馬台国の建国の時期において、丹後の勢力がもっていた鉄は、ひとつのキャスティング・ボードになったのではないでしょうか。

（倉橋 日出夫著『古代出雲と大和朝廷の謎』より）

（大風呂南遺跡群、Net）

丹後の神宝

京都府北部、丹後半島の付け根にある天橋立は、日本三景の一つに数えられる観光の名所ですが、天橋立を渡ったところにある丹後一の宮、籠(この)神社はまた、古代史ファンにはよく知られた神社です。

籠神社　1975年、神社に代々極秘で伝えられていた系図『海部氏系図』が公表され、関係者の大きな注目を集めました。現存する日本最古の系図として、また、従来にない古代史の新史料として、思いがけないものだったからです。翌年にはさっそく国宝の指定を受けたのも異例のスピードでした。

この系図には、なんと邪馬台国の女王、卑弥呼と思われる名前が記されています。最近、卑弥呼の墓の最有力候補として注目されている奈良県・纒向遺跡にある箸墓古墳、その被葬者とされる倭迹迹日百襲姫(やまととととひももそひめ)の名が載っているのです。系図によると、始祖の彦火明命(ひこほあかりのみこと)から9代目の孫のところに、「日女命(ひめのみこと)」と出てきます。この「日女命」の脇に、「またの名を倭迹迹日百襲姫命」、「またの名を神大市姫命」、「日神ともいう」などと記されています。「日神」とは、すごい呼び方です。太陽神のような扱いを受けた女性ということでしょうか。なんとなく卑弥呼を思わせるといってもいいでしょう。それに、「神大市姫命」の「大市」。これは『日本書紀』のなかで箸墓について、「倭迹迹日百襲姫が死んで、大市に葬る。時の人はこの墓を名づけて箸墓という」とある記述に完全に一致します。宮内庁による箸墓の呼び名「倭迹迹日百襲姫の大市墓」の「大市」です。どうやら、箸墓に葬られた百襲姫という女性は、丹後の籠神社の系図にある「日女命」と同一人物で、彼女が卑弥呼であるらしい。つまり、卑弥呼は「日女命」と考えてよいようです。

この系図は、5世紀に丹波国造となった海部氏が、籠神社の神主となって代々伝えてきたものです。主祭神の彦火明命を丹波国造の祖として、以後、今日まで海部氏が代々続いており、現在は82代目の海部光彦さんです。

籠神社には、2000年間にわたり伝世されてきた息津鏡(おきつかがみ)、辺津鏡(へつかがみ)と呼ばれる秘蔵の鏡も2面あります。

息津鏡と辺津鏡

息津鏡は紀元後1世紀の後漢鏡(長宜子孫内行花文鏡)で、辺津鏡は紀元前1世紀後半の前漢鏡(内行花文昭明鏡) です。

前漢鏡の方は、近畿地方では出土例がまったくない貴重なものですし、後漢鏡の方も、近畿地方では破片で出ることはあっても、完全な形で出土したことはなく、やはり貴重な鏡といえます。驚くべき鏡が、代々神社の神宝(かんだから)として伝えられていたわけです。では、なぜ卑弥呼の名が籠神社の系図のなかに残っているのでしょうか。それが謎です。

(倉橋 日出夫著『古代出雲と大和朝廷の謎』より)

息津鏡

辺津鏡

ガラス製の釧をもつ日本海側(伊都、出雲や丹後)の首長

弥生時代後期中葉、日本海側(伊都、出雲や丹後)の有力な首長たちが緑色や青紺色をした貴重なガラス釧を所持し、同盟の証としていたと思われる。その当時鉄器生産地の墳墓から多くのガラス製の小玉が出土している。(製鉄とガラス生産は結びつくことが多い。)このことは玉造の多くが自然石加工から見た目により美しいガラスの加工に移行したと考えられる。

ガラス釧(腕輪)と銅釧　丹後郷土資料館蔵

『記紀』の系図と『海部氏系図』との比較検証

『海部氏系図』 国宝

海部氏系図（あまべしけいず）は、京都府宮津市に鎮座する籠神社の社家、海部氏に伝わる系図であり、『籠名神社祝部氏係図』1巻（以後「本系図」と称す）と『籠名神宮祝部丹波国造海部直等氏之本記』1巻（以後『勘注系図』と称す）とからなる。ともに古代の氏族制度や祭祀制度の変遷を研究する上での貴重な文献として、昭和50年（1975年）6月に重要文化財、翌51年（1976年）6月に国宝の指定を受けた。

『勘注系図』は「本系図」に細かく注記を施したもので、竪系図の形式を襲うが、現存のものは江戸時代初期の写本であり、原本は仁和年中（885年 - 889年）に編纂された『丹波国造海部直等氏之本記』であると伝える。始祖から第34世までが記され、各神・人の事跡により詳しい補注を加え、当主の兄弟やそこから発した傍系を記す箇所もあって、『記紀』は勿論、『旧事本紀』などの古記録にも見られない独自の伝承を記すとともに、「本系図」上代部で省略されたと覚しき箇所もこれによって補い得る。
（海部氏系図－Wikipedia抜粋)

『海部氏勘注系図』（次スライド参照）

1．日本得魂命の御子（九世の孫）に「日女命（ヒメノミコト）」がいて、またの名は「神大市姫命」とも「倭迹迹日百襲媛命（ヤマトトヒモモソヒメノミコト）」と云います。
2．.十一世の孫、小登與命の妹に「日女命」がいて、またの名を小豊姫と云い台与のことと思われます。

ここで重要なのは、日女命の名が出て来ることです。日女命という名は、「卑弥呼」という名に近いし、太陽の神であるアマテラスにも近いものを感じます。日女命（卑弥呼）が日本得魂命の御子、即ち孝霊天皇の皇女である倭迹迹日百襲媛命、であるというのは、「倭迹迹日百襲媛命の墓と言われている箸墓古墳が卑弥呼の墓である」という説が有力なだけに説得力があります。
（卑弥呼と海部氏系図 : 日本の古代を推理する - ライブドアブログ、Net　＋藤田）

海部氏系図（本系図）巻頭

藤田

天之忍穂耳命アメノシホホミミ　栲幡千千姫

『海部氏勘注系図』の「日女命」の部分

ヤマト国（邪馬台国）

ニギハヤヒの東征

10．崇神天皇　崇神東征　9．開化天皇 ワカヤマトネコヒコオオヒヒ

妹・倭国香媛　7．孝霊天皇 オオヤマトネコヒコフトニニギハヤヒ

天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊

始祖彦火明命―兒天香語山命―孫天村雲命―

先代旧事本記

瓊瓊杵尊

1．神武天皇 カンヤマトイワレヒコ

2．綏靖天皇 カンヌナカワミミ

3．安寧天皇 シキツヒコタマテミ

4．懿徳天皇 オオヤマトヒコスキトモ

5．孝昭天皇 ミマツヒコカエシネ

6．孝安天皇 ヤマトタラシヒコクニオシヒト

天忍人命

天忍男命

世襲足媛

天足彦国押人命 アマタラシヒコクニオシヒトノミコト

和邇氏、春日氏、小野氏、栗田氏、柿本氏、大宅氏の祖

妹・宇那比媛命

天香山刀売命（彦火明命娘）

但馬の国風土記

御出石櫛甕玉命

天国知彦命（出石縣主）

天多知命

天波賀麻命

天太耳命

麻多烏

天日槍

十世孫　十一世孫　十二世孫

乎縫命―小登與命（尾張国造）―建稲種命―

妹・日女命　亦名・稚日女命

亦名・小豊姫命（トヨか？）

ヤマトタケル

妹・宮簀媛（美夜受比売）

建稲種命

志理都彦命

川上眞稚命

建振熊宿禰（和邇氏）

（ヤマトタケル東征の際、副将軍）

七世孫　八世孫　九世孫

建諸隅命―日本得魂命―意富那比命―

妹・倭国香媛

妹・日女命（卑弥呼か？）

亦名・中津姫命　亦名・倭迹迹日百襲姫命

亦名神大市姫命

乙彦命　亦名・彦國玖琉命

8．孝元天皇 オオヤマトネコクニクル

三世孫　四世孫　五世孫　六世孫

倭宿禰命―笠水彦命―笠津彦命―建田勢命―

一云、千千速日女命　一云、日神

葛城氏、蘇我氏、巨勢氏、羽田氏、平群氏、紀氏の祖

海部氏勘注系図　（前ヤマトを創った大丹波王国、伴）改変

『日本書紀』（天孫降臨）によれば、天火明命（彦火明命、ホアカリ）と瓊瓊杵（ニニギ）はアメノオシホミミと高木神の娘ヨロヅハタトヨアキツシヒメとの間に生まれた兄弟で、ニニギがホアカリの弟とされる。ニニギから神武に至る日向3代は作為的に挿入されたと思われるので削除すると、ニニギと神武は同一人（あるいは同世代人）となる。かくて、ホアカリとニニギ（神武）は兄弟となり、ニニギとホアカリの三世孫がそれぞれ懿徳天皇と倭宿禰命となる。

『日本書紀』では、神武東征（3世紀末の崇神東征がメイン）の折、神武天皇が宇陀から吉野へ巡幸時、人が居て井戸の中から出てきた。その人は体が光って尾があった。天皇は「お前は何者か」と問うと「国津神、名は井光」と名乗ったと言う。この井光は伊加里姫で、倭宿禰命の母にあたる。したがって、この井光伝承は倭宿禰命が大和進した際（2世紀始めのホアカリの東征）の出来事と思われる。

皇統系譜の4代懿徳天皇から9代開化天皇までが、勘注系図と関係づけられることは特筆すべきである。また、孝元天皇の異母妹である日女命（ヒミコ）とその後を継いだトヨに当たると思われる小豊姫命が注書されている。小豊姫命の兄に当たる小登與命は尾張氏の祖と考えられており、4世紀初め大和国葛城の高尾張から尾張国に移り、定住したと思われる。

宮簀媛（ミヤズヒメ）は、日本神話に登場する尾張国造の乎止与命（小登與、オトヨ）の娘。『日本書紀』では宮簀媛、『古事記』では美夜受比売。父の乎止与命は天火明命（アメノホアカリ）の子孫、建稲種命の妹（熱田神宮の伝承）。 また、『但馬の国風土記』の天日槍に至る系図は『海部氏勘注系図』と『記紀』の系図に対応できる

尚、『海部氏勘注系図』の彦天火明（『先代旧事本記』では天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊）、児天香語山、孫天村雲の系図は、饒速日を彦天火明と同人格であると詐称するために、『先代旧事本紀』に倣って偽称された可能性が高い。（藤田）

葛城王朝は近江の大己貴の国「玉牆の内つ国」の支国か？

葛城王朝

鳥越憲三郎（1914～2007、大阪教育大学名誉教授）らが提唱していた説で、『古事記・日本書紀』の記述に間違いがないとすれば、神武天皇即位から欠史八代と呼ばれる第9代開化天皇までの期間は、奈良・葛城を中心としてまた古代豪族葛城氏と姻戚関係にあった大王が統治していた王朝（葛城王朝）であり、その後10代崇神天皇から14代仲哀天皇までを「崇神王朝（三輪王朝）」、神功皇后以降を「応神王朝（河内王朝）」として、それぞれ異なった王朝が存在していたのではないか？という説です。（Yahoo知恵袋、Net）

私見では、葛城王朝は、懿徳ー孝昭ー孝安で、邪馬台（やまと）国が、孝霊ー孝元ー開化である。

第4代懿徳天皇
（いとくてんのう）

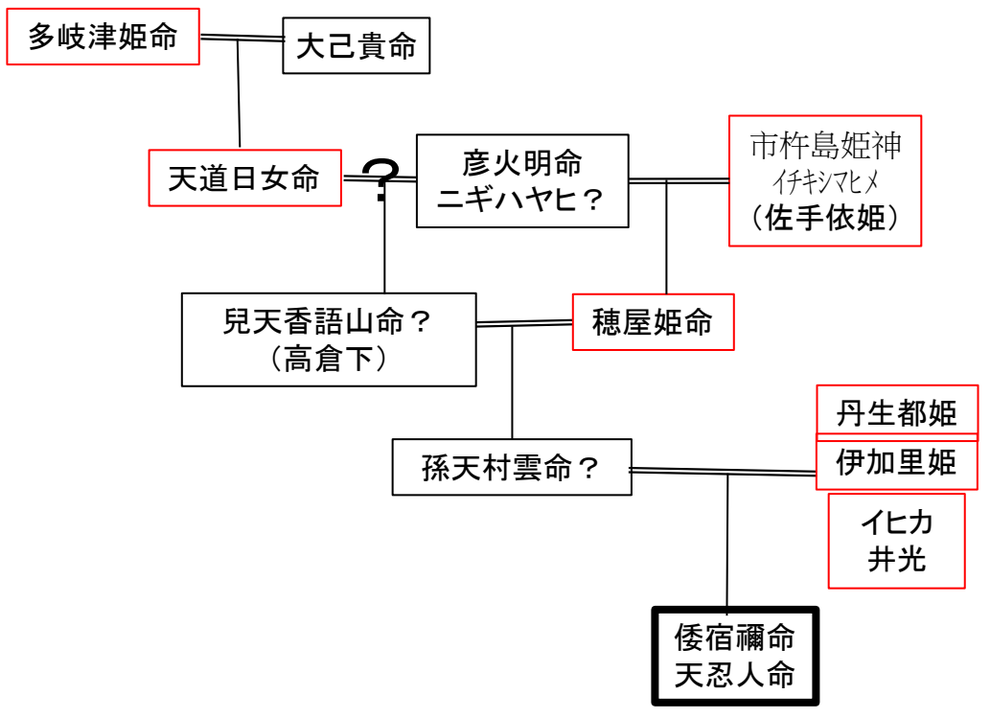
第5代孝昭天皇

第6代孝安天皇

ホアカリの東征：懿徳天皇は倭宿禰か

ホアカリ（倭宿禰）の東征

ホアカリ（3世孫の倭宿禰）は丹後から賀茂族のアジスキタカヒコネを伴い葛城王朝の始祖として葛城に入った。尚、倭宿禰には少彦名の影が色濃く伺える。この東征の根拠は、丹後では最古の祭礼といわれる籠神社の「葵祭」は懿徳天皇の御代に始まったとされていること、懿徳天皇の実名がオオヤマトヒコスキトモであり、アジスキタカヒコネに通じるものがあること、さらに、倭宿禰の母とされる伊加理姫（神武が吉野山中であった井光か）が葛城と丹波に祀られていること（Net情報）等です。



『海部氏勘注系図』の彦天火明、児天香語山、孫天村雲の系図は、饒速日を彦天火明と同人格であると詐称するために、『先代旧事本紀』に倣って改称された可能性が高い。この系図は、孝霊天皇（ニギハヤヒか）が全権を握っている邪馬台国時代に作成されたと思われる。（藤田）

京都府宮津市にある籠神社に、海部宮司の祖・椎根津彦こと倭宿禰命の像

倭宿禰

倭宿禰は彦火明命の3世孫で初めて大和に進出した人格とされている、父は天村雲命（？）で母は伊加里姫である。倭宿禰は、神武が大和王権を樹立した時、大和に赴き神宝を献じて神武に仕えたとする。その大和に居たとき娶ったのが、白雲別の娘、豊水富（とよ みずほ）または豊御富（とよみほ）であり、『勘注系図』の注記は、豊水富の亦の名を井比鹿（いひか）（伊加里姫と同じ）とする。これは『日本書紀』神武記で、神武が吉野で名を問 うた時答えた「井光（いひか）」と同じである。

一方、同じ倭宿禰と称され人物がある。倭氏の祖で倭国造（やまとのくにのみやつこ）の倭宿禰である。こちらは天理市大大和神社（おおやまとじんじゃ）を奉祭する倭氏の祖先である。元の名を珍彦（うずひこ）と言い、神武東征に加わった際、椎根津彦という名を賜る。その出身地はおそらく兵庫県の神戸市か明石市であろう。
（勘注系図　丹波系譜の祖、三世孫倭宿禰、Net）

神武東征の際、高倉下（タカクラジ、天香語山命）に太刀（ミカフツ神、またはフツノミタマ、現在は石上神宮にある）を渡し、神武を勝利への導いた。タカクラジはニギハヤヒを祖としている。また、大和に進出した倭宿禰（彦火明の三世孫）は第4代懿徳天皇（おおやまとひこ**すき**とも）は同一人格と思われる。さらに、懿徳天皇はアジ**スキ**タカヒコネと同一人格とも思われる。かくて、懿徳天皇が御所に秋津洲を立てたのではないか。

神武東征譚の一部（神武が吉野で遭遇したイヒカは、倭宿禰の母とされる）は、倭宿禰の大和進出を模して創り上げたと考えられる。また、葛城王朝（秋津洲）は、伊勢遺跡を都とする大己貴の国「玉牆の内つ国」の支国か？
（藤田）

秋津島

秋津島（洲）の語源は、神武が国見をした時、その様子がトンボの交尾に似ていると云ったことが始まりとされる。アキツとはトンボの古い時代の呼び名で、トンボの交尾は円形となる。第6代孝安天皇の宮（皇居）の名称は、『日本書紀』では室秋津島宮（むろのあきつしまのみや）、『古事記』では葛城室之秋津島宮。 宮の伝説地は、『和名類聚抄』の大和国葛上郡牟婁郷と見られ、現在の奈良県御所市室周辺と伝承される。

『日本書紀・古事記』では日本の本州の異称として「秋津島（秋津州）」が使用されるが、元々は上記の宮が営まれた奈良盆地西南部の葛城地方を指した地名であったとする説がある。（Net）

和邇氏は孝安朝に葛城に至ったか

一言主神

名前の類似から、大国主命の子の事代主神と同一視されることもある。葛城山麓の奈良県御所市にある葛木一言主神社が全国の一言主神社の総本社となっている。地元では「いちごんさん」と呼ばれており、一言の願いであれば何でも聞き届ける神とされ、「無言まいり」の神として信仰されている。

『古事記』（712年）の下つ巻に登場するのが初出である。460年（雄略天皇4年）、雄略天皇が葛城山へ鹿狩りをしに行ったとき、紅紐の付いた青摺の衣を着た、天皇一行と全く同じ恰好の一行が向かいの尾根を歩いているのを見附けた。雄略天皇が名を問うと「吾は悪事も一言、善事も一言、言い放つ神。葛城の一言主の大神なり」と答えた。天皇は恐れ入り、弓や矢のほか、官吏たちの着ている衣服を脱がさせて一言主神に差し上げた。一言主神はそれを受け取り、天皇の一行を見送った、とある。

少し後の720年に書かれた『日本書紀』では、雄略天皇が一言主神に出会う所までは同じだが、その後共に狩りをして楽しんだと書かれていて、天皇と対等の立場になっている。時代が下がって797年に書かれた『続日本紀』の巻25では、高鴨神（一言主神）が天皇と獲物を争ったため、天皇の怒りに触れて土佐国に流された、と書かれている。これは、一言主を祀っていた賀茂氏の地位がこの間に低下したためではないかと言われている。（ただし、高鴨神は、現在高鴨神社に祀られている迦毛大御神こと味耜高彦根神であるとする説もある）このほか、『続日本紀』で流されたと書かれている土佐国には、一言主を祀る土佐神社があり土佐国一宮になっている。ただし、祀られているのは味耜高根彦神であるとする説もあり、現在は両神ともが主祭神とされている。

さらに、822年の『日本霊異記』では、一言主は役行者（これも賀茂氏の一族である）に使役される神にまで地位が低下しており、役行者が伊豆国に流されたのは、不満を持った一言主が朝廷に讒言したためである、と書かれている。役行者は一言主を呪法で縛り、『日本霊異記』執筆の時点でもまだそれが解けないとある。（Net）

葛城一言主神社

一言主神は、少彦名命と同一神と云われる（事代主が少彦名と同一と云われることもある）。『古事記』には、「雄略天皇が葛城山へ鹿狩りをしに行ったとき、紅紐の付いた青摺の衣を着た、天皇一行と全く同じ恰好の一行が向かいの尾根を歩いているのを見附けた。雄略天皇が名を問うと「吾は悪事も一言、善事も一言、言い放つ神。葛城の一言主の大神なり」と答えた。」とある。このことは、葛城王朝の懿徳、孝昭，孝安天皇の何れかが一言主神と思われる。私見では、ホアカリの3世孫の倭宿禰と大国主の子のアジスキタカヒコネが葛城に進出して葛城王朝を建てたと考えている。また、懿徳天皇たる倭宿禰が少彦名の血脈を引いているのではないかと推察している。（藤田）

尾張氏

アメノホアカリ（天火明）を祀る尾張氏は愛知県が本拠地のイメージが強くありますが、元々の根源地は御所市高尾張で、「葛城の道」の入り口に位置する笛吹（笛吹神社）辺りです。真清田神社がある尾張一宮市の周辺には、猫島遺跡、八王子遺跡、元屋敷遺跡などの弥生遺跡があり、近くに大規模な朝日遺跡があります。4世紀前後、尾張氏は土着勢力を破った後、木曽川の伏流水が湧き出る真清田神社周辺を開拓をしながら、尾張国に定着していったのでしょう。（広畠輝治の邪馬台国吉備・狗奴国大和説、Net）

二つの葵祭

丹後の藤祭 ➡ 京都の葵祭

二つの葵祭
「葵祭」と聞くと5月15日の上賀茂・下鴨神社（山城一宮）で行われる京都三大祭の一つ「葵祭」を連想される方がほとんどでしょうね。女性の斎王代や祭員が葵の葉を飾って古都を練り歩く様は なんとも雅やかで、毎年多くの見物客を集めています。この天橋立の地にも「葵祭」があります。それが元伊勢丹後一宮籠（この）神社の「葵祭」なのです。双方とも歴史は古く、古墳時代後期の欽明天皇（540 ～571年）のときから行われているようです。

葵祭と藤祭
もともと、京都の葵祭は凶作に見舞われ飢餓疫病が蔓延したため行われた「鴨の神」を奉る祭礼が始まりと言われています。この頃の丹後は丹波国という、現在の丹後、丹波を併せた大国で、その政治の中心地は天橋立のある府中にあったと考えられています。当時、真名井神社は吉佐宮（与謝宮）とよばれ、毎年、旧暦の4月には稲作農耕の神、豊受大神を奉る「藤祭」を行っていました。農業は春からが新しいスタートとなりますよね。だから藤祭は春ごとに生まれ変わる御祭神の再誕生を祝い、五穀豊穣を祈願する祭りであったようです。なぜ京都、丹後の神社が同じ名前の祭礼を行うようになったのか は諸説が分かれる所らしいのですが、やはり欽明天皇の時代もともとからあった藤祭を葵祭と呼ぶようになりました。京都葵祭では葵の葉をつけるといいましたが、籠神社葵祭では宮司、祭員とも豊受大神ゆかりの藤の花を飾ります。
（葵祭の歴史、Net）

丹後の倭宿禰が大和（葛城）に進出した折、鴨族も大和に同伴した。その際、丹後の藤祭りを大和に持ち込んだと思われる。その後、崇神（神武）東征の折、鴨族が圧迫され山城に居を移した。それが山城での藤祭でのちにお葵祭と変わり、丹後の藤祭も葵祭と変わったと推測される。
（藤田）

一の宮・籠神社の葵祭（府中祭り） 葵祭は籠神社の例祭として、毎年4月24日に行われ、地元では府中祭りとして江尻・中野・溝尻など各地区の神楽や勇壮な太刀振りなどの奉納神事が行われます。 各地の祭りが仕事の都合などによる担い手不足で、日曜日に例祭の日を変更する中、籠神社の葵祭は昔からの日にちに拘り神事を執り行っています。観光地という場所柄を考えると、日曜に変更した方が多くの方に見て頂けるのですが、格式の高さがそれを許さないのでしょうか。籠神社の「葵祭」は丹後では最古の祭礼といわれ、懿徳天皇の紀元前507年に始まり、2,500年余りという長い歴史があります。この「葵祭」は、京都三大祭りとして有名な、上賀茂・下鴨、両神社の祭礼と同様の名前で、籠神社の「葵祭」ともゆかりの深い祭礼ですが、京都の「葵祭」は 祭員が「葵の葉」を付けるのに対し、籠神社では冠に豊受大神様ゆかりの「藤の花」を付けるのが古例となっています。（籠神社の葵祭は、以前は藤祭といった。上賀茂・下鴨両神社は賀茂氏の祭りであり、邪馬台国崩壊の時に、葛城から山城に遷ったと思われる。このように、賀茂氏と縁の深い籠神社の藤祭と京都の葵祭は起源を同じくする。）（一の宮・籠神社の葵祭、Net)

懿徳天皇は、倭宿禰命でアジスキタカヒコネであると推察している。尚、上賀茂神社の祭神の賀茂別雷命は、アジスキタカヒコネと同人格と考えられている。（藤田）

葛城

葛城には辰砂（丹、水銀朱）が産する。弥生時代中期に大国主が葛城に進出していたと思われ、２世紀前後にはアジスキタカヒコネが葛城に到達していた。

鴨都波遺跡　弥生時代中期よりの遺跡

所在地：御所市三室・御所字ワキガミ

遺跡は葛城山麓より東方に延びる低い丘陵状地形の東端にあたり、標高99～101m、葛城山系に源流をもつ柳田川と金剛山麓より北に流れる葛城川の合流点に面し、水に恵まれた絶好の場所に立地しています。昭和28年以降、発掘調査が行われ、全期間を通じて営まれた拠点集落であることが分かりました。検出された遺構には溝、高床建物と見られる柱列、矢板を打ち込んだ柵列、竪穴住居跡、大溝、木器貯蔵穴などがあります。遺物も木器、土器、石器などが多量に出土しています。この遺跡から出土する遺物の特徴として、「紀伊型甕」が挙げられます。この甕は和歌山で見られる甕ですが、中期に入ると鴨都波遺跡でも見かけられるようになります。地理的に近い和歌山との関係がうかがえる遺跡です。さらに北に位置する橿原市の四分遺跡では、「紀伊型甕」と「大和型甕」の折衷型である「四分型甕」が見られます。

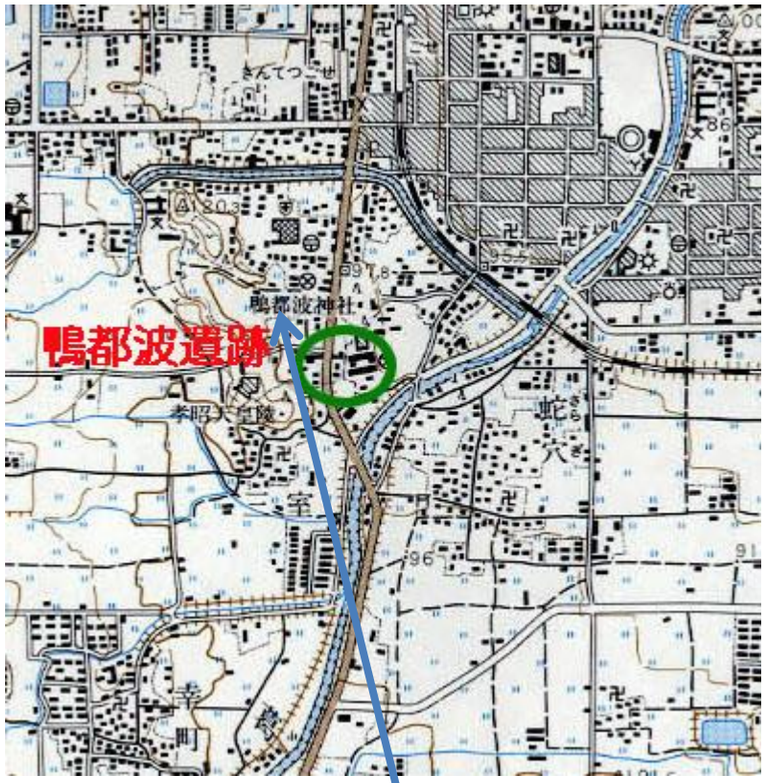
奈良盆地内の遺跡とはやや趣を異にした遺跡と言えます。

（鴨都波遺跡、Net）

2000年に第15次調査の結果

弥生時代中期前半の方形周溝墓2基。古墳時代前期の方墳3基、その一つ鴨都波1号墳からは、三角縁神獣鏡4、鉄製の剣5以上等が出土。

（謎の古代豪族　葛城氏、平林）



鴨都波神社（Wikipedia)

葛城の神社　その１

鴨都波神社；「鴨族」との関わりをもつ神社、大物主の前は大国主を祭神とした大神神社の別院

鴨都波神社が御鎮座されたのは、飛鳥時代よりもさらに古い第10代崇神天皇の時代であり、奈良県桜井市に御鎮座されている「大神神社」の別宮とも称されています。おまつりされている神様は、「**積羽八重事代主命**」（つわやえことしろぬしのみこと）と申され、大神神社におまつりされている「大国主命」（おおくにぬしのみこと）の子どもにあたる神様です。国を守る農耕の神様として大変崇められ、宮中におまつりされている八つの神様の一神でもあります。また、一般的には「えびす神」という呼称で、商売繁盛の神様としても有名です。

そもそもこの葛城の地には、「鴨族」と呼ばれる古代豪族が弥生時代の中頃から大きな勢力を持ち始めました。当初は、「高鴨神社」付近を本拠としていましたが、水稲農耕に適した本社付近に本拠を移し、大規模な集落を形成するようになりました。そのことは、本社一帯が「鴨都波遺跡」として数多くの遺跡発掘によって明らかになっています。彼らは、先進的な優れた能力を発揮して、朝廷から厚く召し抱えられました。そのような「鴨族」とのかかわりの中から誕生した本社は、平安時代には名神大社という最高位に列せられた由緒ある名社であります。

（鴨都波神社、Net）

賀茂氏

八咫烏に化身して神武天皇を導いたとされる賀茂建角身命を始祖とする天神系氏族。代々賀茂神社に奉斎し、山城国葛野郡・愛宕郡を支配した。子孫は上賀茂・下鴨の両神社の祠官家となった。また、賀茂県主は同じ山城国を本拠とする秦氏との関係が深い。山城国葛野の賀茂県主は、大和国葛城の地祇系賀茂氏が山城に進出したものとする説があり、御所市の鴨にある高鴨神社の祭神である事代主や味鋤高彦根神（賀茂大御神）は賀茂氏が祀っていた神であると考えられている。また、現在の島根県安来市には賀茂神社があり、祖神である一言主の同一神、言代主の活躍地である東部出雲に属することから、ここを本貫とする説もある。(Net)

葛城の神社　その2

葛城御歳神社　ニギハヤヒと繋がりがあるか

祭神：御歳神（みとしのかみ）…大年神の御子神
相殿：大年神（おおとしのかみ）…須佐之男命の御子神、高照姫命（たかてるひめのみこと）…大国主命の御子神
御祭神はご本社の背後の御歳山にお鎮まりになって、五穀豊穣をご守護された神であります。創祀は神代。古来より朝廷で 豊作祈願のために行われた年頭の祈年祭には、まず本社の御歳神の名が読みあげられました。古書の記録では、仁寿二年（八五二年）には、大和国で本社だけが最高の正二位の神位を授かる程篤く崇敬され、後に従一位に昇格され、延喜の制では、名神大社に列した神社として尊ばれた古社で、全国の御歳神、大年神の総本社であります。
（葛木御歳神社公式ホームページ）
大山祇神の娘の神大市比売との間に大年神が生まれた。大年神はニギハヤヒではないかとの説がある。スサノオと大山祇神の親族関係は物部氏と大山祇神とが星辰信仰での繋がりを示唆するもので興味深い。（藤田）

御歳神社境内

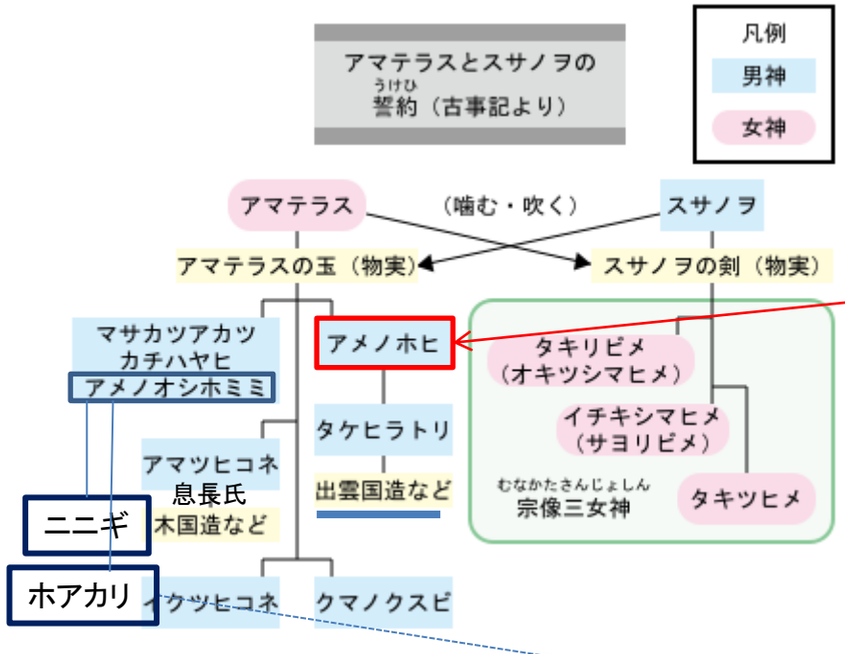
大国主と葛城

「天照大神は地上の国も高天原の管理下にあるべきであるとして、地上を支配していた大国主神のところへ、天菩比神（アメノホヒ）を派遣し支配権を譲るよう交渉させました。ところが天菩比神は大国主神にうまく丸め込まれてしまい、三年たっても復命しませんでした。そこで天照大神は次に、天若日子（アメノワカヒコ）を地上に派遣しました。ところが天若日子は大国主神の娘の下照比売（シタテルヒメ）と結婚してしまい、八年たっても復命しませんでした。」 有名な国譲り神話『古事記』の前史です。では、天孫族の天若日子の妃となった下照比売とはどのような比売でしょうか。下照比売は、大国主命の娘で、味鋤高彦根（アジスキタカヒコネ）命の同母妹、そして、天若日子の妃です。下光比売とも書かれ、あかる姫とも呼ばれます。さらに、下照比売の姉妹に高照比売（タカテルヒメ）という方もおられ、こちらは事代主（コトシロヌシ）命の同母妹にとされています。つまり、大国主命には、味鋤高彦根命と事代主命という二人の母を異にするお子神がいて、そのそれぞれのお子神に、下照比売と高照比売という妹がいたことになります。国譲り神話では、もう一人、建御名方（タケミナカタ）命が登場しますね。ところが、出雲で天若日子の妃となったはずの下照比売は、不思議なことに大和の葛城の地でも「葛城の長柄神社」に祀られているのです。しかも他の三人も、味鋤高彦根命が「葛城の高鴨神社」に、事代主命が「葛城の下鴨神社」に、高照比売が「葛城の中鴨神社」にと、すべて葛城の地の重要な神社に、別々に祀られているのです。そしてその地理的配置は、平行四辺形状に並んでいるとされます。葛城は大和の中でも古くから繁栄した地で、鳥越憲三郎先生や門脇禎二先生は、「葛城王朝」の存在を指摘されています。また、「葛城の下鴨神社」は京都の「上賀茂、下鴨神社」の源流ともいわれ、さらに、味鋤高彦根命は「賀茂大神」とも呼ばれています。こうしたことから、これらの神々はもともと大和の神だという説が出てくるのでしょう。（次のスライド参照）

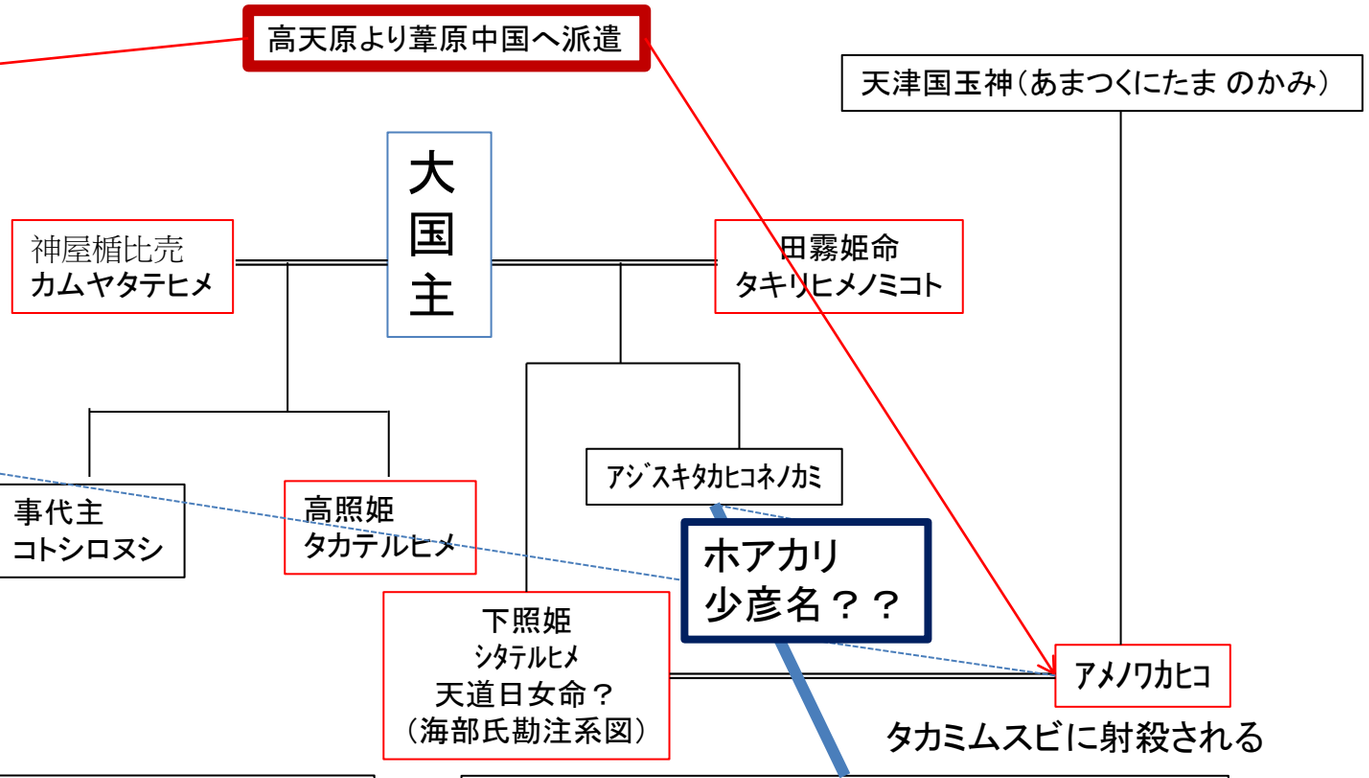
高鴨神社（たかかもじんじゃ）は、奈良県御所市の金剛山東山麓にある神社。式内社（名神大社）。社格は県社。京都の賀茂神社（上賀茂神社・下鴨神社）を始めとする全国のカモ（鴨・賀茂・加茂）神社の総本社と称する。阿治須岐高日子根命（迦毛之大御神）を主祭神とし、下照比売命・天稚彦命を配祀する。（高鴨神社ーWikipedia抜粋)

アジスキタカヒコネ、事代主、さらに高照姫、下照姫も、大国主の御子

コトシロヌシ
大国主の子とされているが、元々は出雲ではなく大和の神とされ、国譲り神話の中で出雲の神とされるようになったとされる。元々は葛城の田の神で、一言主の神格の一部を引き継ぎ、託宣の神の格も持つようになった。このため、葛城王朝において事代主は重要な地位を占めており、現在でも宮中の御巫八神の一つになっている。葛城には、事代主を祀る鴨都波神社（奈良県御所市）があり、賀茂神社（上賀茂神社・下鴨神社）のような全国の鴨（賀茂・加茂など）と名の付く神社の名前の由来となっている。（Wikipedia抜粋）



（古代出雲『下照比売（シタテルヒメ）』の謎（その3）、Net）



八重事代主命（ヤエコトシロヌシ）、高照姫（タカテルヒメ）、アジスキタカヒコネと下照姫（シタテルヒメ）の四神が、大和葛城の高鴨神社（アジスキタカヒコネ）、長柄神社（シタテルヒメ）、下鴨神社（ヤエコトシロヌシ）（＝鴨都波神社）、中鴨神社（タカテルヒメ）にそれぞれ祀られています。尚、アジスキタカヒコネ（＝賀茂別雷命？）は、出雲市の阿須伎神社、安来市の安来賀茂神社や邑南町の賀茂神社の祭神である。

アジスキタカヒコネ、大国主神(おおくにぬしのかみ)と田霧姫命(たぎりひめのみこと)の子。天稚彦(あめわかひこ)が死んだときアジスタカネヒコネが弔問にいったところ,顔が似ているため死者が生きかえったとまちがえられ,おこって刀をぬいて喪屋をきりたおしたとつたえる。岐阜県美濃市の喪山はこの喪屋という。奈良県御所(ごせ)市の高鴨神社の祭神。

大国主とスクナビコナが協力して葦原中国の国造りをした。このスクナビコナがホアカリではないか？スクナビコナは倭国大乱において、ニギハヤヒと抗争して敗れ、ニギハヤヒの国（（虚空見つ倭の国＝邪馬台国）が成立したと考えている。ひっとしたら、スクナビコナはアメノワカヒコでもあり、その死を高天原のタカミムスビが射殺したと『古事記』では表現したのではないか？（藤田）

藤田

近江・湖南：大己貴の国「玉牆の内つ国」の中枢

伊勢遺跡を都

下之郷遺跡（弥生時代中期）

二ノ畦・横枕遺跡（弥生時代中期末～後期前葉）

浦安の国

伊勢遺跡（弥生時代後期中葉・後葉）

大己貴の国（玉牆の内つ国）

二ノ畦・横枕遺跡（弥生時代中期末～後期前葉）
二ノ畦・横枕遺跡は下之郷遺跡の南東部に，下之郷遺跡の衰退する頃に出現した遺跡です。
南北500m・東西450mの，野洲川を挟んで守山市から野洲市に拡がる広さがあり，周囲には1～2条の環濠も発見されました。集落内部には80棟以上の竪穴住居をはじめ直径15mを越える大型円形住居も確認されています。特徴的なのは，下之郷遺跡でみられた多量の石器は少なくなり，鉄製品（鉄製のヤジリなど）が発見されていることで、鉄製武器が下之郷の「ムラ」を滅ぼした可能性もあるのではないかと想像されます。野洲川流域でも，前1世紀頃から急速に鉄器が流通し始めたようです。

倭国大乱の終焉の時期、ニギハヤヒは大和から近江湖南に侵攻し、伊勢遺跡を都とする大己貴の国「玉牆の内つ国」を解体し、勝部神社を建てたと考える。（藤田）

小津神社は宇賀之御魂命（大宮）を祀り主神と仰ぐ。

安羅神社（草津市穴村）はアメノヒボコを祭る。

勝部神社（物部大明神）が伊勢遺跡の北側に位置しており、石上神宮を想起する。

三輪神社が三上山の麓にあり、ヤマトの三輪山の麓の大神神社を想起する。

大宝神社が大国主系のイブキのタタミヒコを祀る。伊勢遺跡に隣接している。

高野神社（祭神：大名草彦命、紀伊の国の祖＝少彦名？）

三上山山麓の神社　　大宝神社、勝部神社、三輪神社

大宝神社本殿

追来神社（大宝神社境内社）

大宝神社（大宝天王宮）

祭神…素盞嗚尊（スサノヲノミコト）

当神社は、701年（大宝元年）疫病流行の時、小平井村信濃堂（シナンド）（現在の栗東市小平井）に降臨された素盞嗚尊（スサノヲノミコト）と稲田姫命を霊仙寺（栗東市霊仙寺）経由綣村（栗東市綣）の地先、追来神社境内にご鎮座。

追来（オフキ）神社

祭神…伊吹山に座す多々美彦命

地主の神として大宝年間以前よりこの綣の地に鎮座されている。古来は、意布伎（伊不伎）神社と記されている。社内にあった狛犬の台座裏に「伊布伎里惣中」と記されている。中世には、若宮権現とも呼ばれ現在も通称その名で呼んでいる。御神木は、いぶきで、意布伎の意は「オ」とも読めるため「オフキ」とよんで追来に転じたとされる説が有力である。

「イフキ」の「フキ」は、息を吹く、風を意味し風の神である。また、雨乞いにより雨を授けて頂いたので水の神でもある。地主神でありながら大宝神社本殿が主祭神となっているため、無理に境内社としての位置付けになり、若宮でありまた、社名変更を余儀なくされていると推測される。

（大宝神社　大宝神社紹介、Net）

勝部神社（かつべじんじゃ）

主祭神 - 物部布津神
（天火明命・宇麻志間知命・布津主神）
合祀神 - 住吉神・猿田彦命

守山市勝部にある神社で 正式名称は物部郷総社 勝部神社。戦前までは物部神社または物部大明神、勝部大明神と称されていた。旧社格は郷社で、旧物部郷の総社である。
(Wikipedia抜粋)
天火明命は饒速日命を指すと考えられるが、私見では両者は同人格でないと考えている。

（大国主対物部氏、藤井）　大橋の三輪神社

三輪神社（ミワ）（栗東市大橋）

御祭神：三輪大神

大和の大神神社を勧請して奉斎したと思われるが、その年代は不詳である。当初の鎮座地は村の北一里の寺山の頂上であった。小谷城築城の後この寺山が艮の方にあたり鬼門鎮護の神として浅井家の尊敬が篤かった。明治24年現在の地に移遷された。（神社紹介 > 滋賀県の神社 > 滋賀県神社庁、
Net)

倭国大乱を引き起こしたニギハヤヒの東征により、このニギハヤヒ（物部）軍団は大和の磯城を制圧した。さらに、北上し近江・湖南に達し、さらに、大己貴の国「玉牆の内つ国」の国都の伊勢遺跡を解体させ、和邇氏の巫女で大国主の血脈の卑弥呼を共立し、大和の纒向遺跡（桜井市）を国都とする邪馬台国を建てた。従って、物部軍団は伊勢遺跡を解体させ纒向遺跡を造営したことになる。伊勢・纒向遺跡からはそれぞれ400メートル級の秀麗な山容の三上山と三輪山を仰ぎ見ることが出来る。これら二つの山は、どちらも山間部と扇状地の境界にある「神の坐す山」とされてきた。三輪山の麓には大神神社があり、三上山の麓には三輪神社がある。近江・栗東には、近江の三輪神社が大和に遷り大神神社となったと伝える古老がいるという。三輪山の奈良湖側には纒向遺跡があり、三上山の琵琶湖側に伊勢遺跡がある。さらに、纒向遺跡の北側に物部の総氏神の石上神宮があり、伊勢遺跡の北側には物部郷の総社である勝部神社が鎮座する。石上神社の存在は倭国大乱を引き起こしたニギハヤヒ軍団の大和制圧の証であり、物部郷の存在は倭国大乱の末期に近江湖南に攻め込み伊勢遺跡を解体させた証であろう。尚、伊勢遺跡に隣接して大宝神社が鎮座する。この神社は、大宝元年に降臨された素盞嗚尊と稲田姫命を追来（オフキ）神社境内に鎮座させたとされるもので、追来神社は地主神でありながら大宝神社本殿が主祭神となっているため、無理に境内社としての位置付けにされ、社名変更を余儀なくされたと推測される。古来、追来神社は意布伎(伊不伎)神社と記されている。追来神社は伊吹山に座す多々美彦命（別名八岐大蛇）を祭神とするが、多々美彦命は玉牆の内つ国の盟主の大国主のことだと推測される。玉牆の内つ国の国都である伊勢遺跡は2世紀末に解体され、その建材は邪馬台国の国都の纒向遺跡に移された」か。（藤田泰太郎）

三上山を神奈備

御上神社と三上祝　卑弥呼と台与は三上祝一族

御神神社
祭神：天之御影命（あめのみかげのみこと）天津彦根命の子（天照大神の孫）。鍛冶の神である天目一箇神と同一神とされ、日本第二の忌火の神とされる。
創建：孝霊天皇の時代、天之御影命が三上山の山頂に降臨し、それを御上祝が三上山を神体（神奈備）として祀ったのに始まると伝える。御上祝は、野洲郡一帯を治めていた安国造の一族であり、御上神社の祭祀は安国造が執り行ったとされる。明治から昭和にかけての発掘調査では三上山ふもとの大岩山から24個の銅鐸が発見されており、三上山周辺では古来から祭祀が行われていたと考えられている。
（Wikipedia抜粋）
創建が孝霊天皇の御代とされていることに注目

御上神社本殿（国宝、三上山麓）

天之御影命

天之御影神（天津彦根命の子）：天照大神の孫、息子は意富伊我都神(オオイガツノカミ)、鍛冶の神、天目一箇神と同一神．刀工の神　神社：御上神社、国懸(クニカカス)神宮　子の意富伊我都神を祀るものとしては額田神社．
　天之御影神は、我が国の鍛冶の祖神とされる神である。『古事記』では、この神は近江国の三上山を御神体とする御上神社(滋賀県野州町)に祀られる神であるとしている。三上山は”近江富士”とも呼ばれ、俵藤太こと藤原秀衡(平安中期の関東の武将で、平将門を討った勇者として多くの伝説が語られている) のムカデ退治の伝説が残る山である。この神も、古くは三上山に宿る山の神であり、近在の人々の生活を守護する地主神であった。
　古来、近江のあたりというのは帰化人の定着が多く見られ、外来文化とも密接な関係があった。帰化人のもたらした文化のなかには当然、先進的な鍛冶の技術もあったはずである。実際に野洲周辺の古墳の出土品に、大量の銅鐸や刀剣などが含まれていることから、この地に鍛冶の技術が根付いていたことは確かである。その技術が中世以降は刀鍛冶として発展し、ひいては、のちに戦国の世に革命をもたらした鉄砲の生産地、近江国友村(滋賀県長浜市近郊)の鉄砲鍛冶の技術としてつながった。
　なお、天之御影神の息子に意富伊我都神がいる。この神は、古代の多くの氏族の祖神とされる額田部湯座連(ヌカタベノユエムラジ)天津彦根命の孫ともいわれ、やはり刀鍛冶の守護神として崇敬されている。祖父の天津彦根神は、もともと火に関係が深く、祖父の系統を引くこの神もまた火と強く結びついていると考えてよいだろう。つまり、焼き入れ(火)によって強靭で優美な刀剣を生み出す霊力を発揮するのがこの神なのである。また、刀剣は邪悪を払う霊力を持つ。ゆえに、この神も人間を災いをもたらす悪霊から守護してくれる神としても信仰されている。
息長水依姫は天之御影命の女とされるが、実際は天之御影命の6世孫の国忍富命の女である。
（天之御影神、Net）

天津彦根命は息長氏の祖である。卑弥呼の宗族の台与は、天ノ御影神後裔の女の息長水依姫であろう。（藤田）

三上祝（みかみのはふり）
近江の湖西地域を中心に分布した和邇氏族も、湖南地域では、あまり顕著でない。湖南では、阿部氏族の佐々貴山君一族や三上氏族の三上祝一族の勢力が相当に大きかったようである。とくに後者は、近江の先住部族で野洲郡三上山の麓を根拠にし、湖南から湖東にかけての地に広く一族を繁衍させ、三上祝を宗族にして蒲生稲置・安国造（安直）・犬上県主・川上舎人・菅田首などの諸氏を分出させた。この一族は湖東平野部の豊かな生産力と製鉄・鍛冶技術を基盤として栄えた。（古代氏族の研究①　和珥氏　中国江南から来た海神族の流れ、宝賀寿男）

　24個もの大量の大型銅鐸を出土した野洲市小篠原の大岩山遺跡に関係するとみられる三上祝・淡海の国造は、大巳貴命の娘・下照姫後裔であり、物部連の同族であった。（「神武東征」の原像、宝賀寿男）

佐々貴山君一族は少彦名系で三上祝一族は大国主系と考える。卑弥呼は大国主系でかつ和邇氏一族か。（藤田）

湖南地方をまとめていたのは，青銅文化の**安(やす)氏**であったとの記述あり。（近江の弥生遺跡、Net)

卑弥呼（倭迹迹日百襲姫命か）と台与（卑弥呼の姪、息長水依姫か）は、大国主や下照姫を祖とする三上祝一族と思われる。卑弥呼を日巫女とし、海神族の代々の女王の世襲名とすると、下照姫－卑弥呼－台与－倭姫－神功皇后（主たる女王）と世襲されてきたのであろうか。

伊勢遺跡は下之郷遺跡の南約2．5kmの地点に位置している。JR東海道線「栗東」駅から徒歩で東約500mのところにあり、周りは田畑、新興住宅などが広がる平野である。弥生後期の集落遺跡であることがわかってきた。その規模は東西約700m、南北約450m、面積30ヘクタールを越える巨大な遺跡である。他の地域では弥生遺跡が衰退していく紀元1世紀末頃に、この遺跡は突如出現し、紀元2世紀末に衰退し始める。つまり、邪馬台国建国前夜に、発達を遂げた不思議な遺跡として注目されている。

遺跡の中心部には、二重の冊で四角に囲われた方形区画があり、そこで、この時期のものとしては最大級の大型掘立柱建物跡や祭殿らしい建物跡など12棟の建物が整然と配置された跡が見つかっている。特に、独立棟持柱付大型建物は、大型建物群の中の楼観と見られる建物を中心として、半径110mの円周上に等間隔に約30棟が並んでいたと推定され、国内に例のない配置となっている。

これら独立棟持柱付大型建物は、現在の伊勢神宮本殿に見られる神明造りと呼ぶ建築様式に似ている。そのため、祭りなどを行った祭殿ではないかと考えられている。これまでの発掘状況を考え合わせると、これらの建物は直径約220mのサークル状に、等間隔で約30棟が並んでいたと推定され、建物で囲まれた約3ヘクタールの地域は祭祀のための聖なる空間だったと推測されている。30棟の棟持柱付大型建物に対して、中央の楼閣で行われる宗教上のイベントや政治上の合議のために招集をかけられた、”伊勢王国”を構成する各集落の首長たちである。30もの首長を表すものとして、すぐ念頭に浮かぶものに銅鐸がある。大岩山の中腹から発見された24個の銅鐸は、あるいはこれらの祭殿に祀られていたものが、何かの事情でまとめて遺棄されたものであろうか。そうであれば、大岩山には未発見の銅鐸がまだ眠っていることになる。

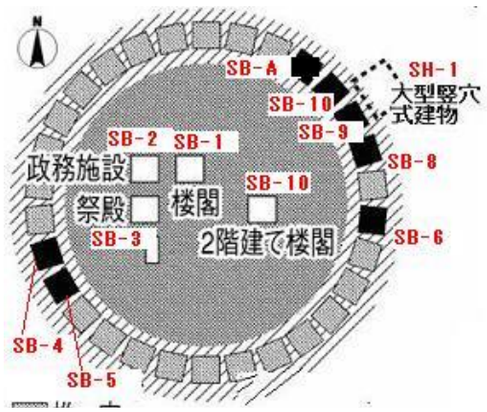
2003年2月に発見された床とレンガの壁を持つ大型竪穴式建物（SH-1）は、一辺が13．6mx13．8m、床面積が約187平米及ぶ国内最大級の規模の大型竪穴式建物だった。床面から出土した土器から弥生時代後期後半の住居跡と推定されている。この住居跡から復元される建物の規模の大きさには驚くべきものがあるが、さらに注目すべきはその床と壁にあった。住居をつくるのに、先ず深さ80cm以上掘り込み、次に厚さ約25cmの粘土を床面に貼り、その上面を焼いて整え、さらに約8cmの精良な粘土を貼り高温で焼いて固めている。こうした床を焼床（やきどこ）といい、従来にはなかった建築工法である。この床にはさらに、直径2cm程の穴が多数、開けられていた。一方、壁際には40cm×30cm、厚さ約8cmのレンガと思われる建築部材が少なくとも5個以上見つかっている。日本で出土した焼成の最古のレンガは白鳳時代の7世紀後半とされてきたが、その歴史が500年もさかのぼることになる。焼床の床を持ち、壁にレンガを用いている点で、この建物は特異な施設が施された住居だったことが分かる。これらの建築工法は明らかに大陸や朝鮮半島からの技術の伝来を示しているが、我が国では前例がないため、建築史上の新たな謎とされている。この建物の西には直径220mの円周に囲まれた巨大な祭祀空間と思われるスペースがある。したがって、司祭者または首長の居館だったと考えた方がわかりやすい。首長の居館であったとすれば、邪馬台国が出現する前の時代に、朝鮮半島などと深いつながりを持つ巨大な政治勢力が、野洲川流域に拠点をおいたことになる。その首長は下之郷遺跡の後継者だったかもしれない。あるいは、新たに半島から渡来して、この付近を切り従えた渡来系氏族だったかもしれない。

伊勢遺跡の小高い一角から、衰退期に埋めたと思われる多数の勾玉や管玉、および破砕された銅鏡が出土したという。伊勢遺跡の衰退期にこの場所で何らかの祭が行われ、その後人々はこの土地を離れていった。何処へ移り住んだかを示す遺物は発見されていない。

（伊勢遺跡、Net）

大型建物群復元図（滋賀職業能力開発短期大学校講師　大上直樹氏作成）

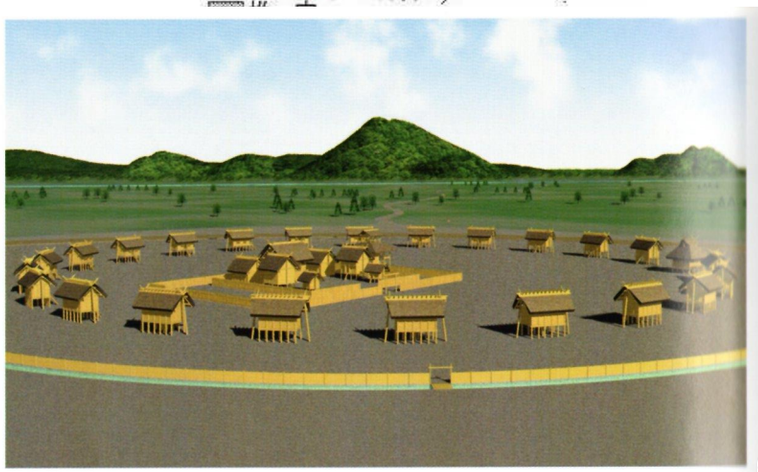
伊勢遺跡東半部遺構図



伊勢遺跡で出土した手焙り型土器（守山市教育委員会提供）

手焙り型土器（伊勢遺跡）、用途は香炉か、巫女が神懸かりするとき使用、多数の出土のためこの流域で生産されたものと思われる。

(邪馬台国近江説、後藤）


伊勢遺跡全景 CG（小谷正澄氏作成）

（邪馬台国近江説、後藤聡一）

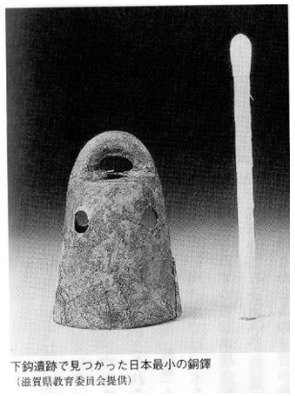
五角形竪穴住居

五角形住居跡（伊勢遺跡）【守山市教委】

【五角形竪穴住居】
　弥生後期になると竪穴の形状が五角形の竪穴住居が出現します。五角形住居は、滋賀県では、野洲川下流域に集中しており、なかでも伊勢遺跡で半数以上を占めます。このような五角形住居は、北陸や山陰地方など日本海側で多く見られるものです。
　弥生中期の終わり頃から後期初めにかけて、瀬戸内海ルートの交易が停滞し、日本海ルートが活発になります。野洲川下流域で多くの五角形住居が見られるのは、この日本海ルートとの関連し、日本海交易が影響していると思われます。北陸、山陰と強いつながりがあったようです。
（弥生の建物ー竪穴住居から祭殿まで、Net)

下鈎遺跡：青銅器の生産基地　伊勢遺跡の盛隆に少し遅れて出現

下鈎遺跡は縄文時代前期から近世にかけての複合遺跡である。弥生後期初めに衰退した後、伊勢遺跡の盛隆に少し遅れて出現します。このことから、計画的に造営された遺跡であると考えられます。祭祀を行う伊勢遺跡に対し 下鈎遺跡では青銅器を生産する目的で建設されたのではないでしょうか。独立棟持柱付き建物という括りでは、同じような建物ですが、柱の立て方、心柱など構造は異なっており、別の建築集団が建てたのかもしれません。一方で、テラス付きの高殿祭殿という目的を同じにする建物もあり、連携性が伺われます。伊勢遺跡と下鈎遺跡は野洲川流域の村々が連携したクニの中心であり、卑弥呼擁立に深くかかわったことは明らかと考えます。
（守山弥生遺跡研究会）
出土品；日本最小の銅鐸（弥生時代中期後半～後期）、独立棟持柱をもつ高床式建物（日本最古）、前漢鏡、水銀朱の付着した石杵、銅製品（銅鏃、銅環）、青銅器等）(邪馬台国近江説、後藤）、土製の銅鐸鋳型（サルタヒコの謎を解く、藤井）



下鈎遺跡で見つかった日本最小の銅鐸
（滋賀県教育委員会提供）

弥生の青銅製分銅か　産経新聞令和元年5月24日
　弥生時代の環濠集落として知られる下鈎遺跡（栗東市）で20年前に出土した弥生時代後期後半（2世紀後半）の青銅品1点が、てんびんばかりに用いるリング状の分銅（環権）である可能性が高いことが分かった。（韓国の伽耶地域の茶戸里遺跡から出土した青銅製環権の最大のもののちょうど4倍の重さ）　この遺跡での青銅器や祭祀に使う赤色顔料「朱」を生産しており、朱の計量など綿密な計量に用いたのであろう。弥生時代に度量衡制度が伝わっていた証と考えられる。

弥生時代にてんびんばかりに分銅「環権」を使う様子のイメージ
（栗東市教育委員会提供）

左図（出土したリング状の青銅品）　分銅の可能性が強い。奥の銅輪は「銅釧」

近江（湖北・湖東）

大国主（大己貴）と伊吹山

伊吹山は、大己貴の国（玉牆の内つ国）と狗奴国の神奈備か

伊富岐神社（いぶきじんじゃ）（岐阜県不破郡垂井町、美濃国二宮、伊吹山を背後にした形で造営）. 伊富岐神社の祭神：伊福氏の祖神、多多美彦命（夷服岳神、気吹男神、伊富岐神、伊吹山の神、タタラの神）、八岐大蛇、天火明命、草葦不合尊など。伊福氏は伊福部氏ともいい、朝廷に特定の技術を以て仕えた集団の品部の一つであり、管楽器奏者の集団とする説もありますが、吹いて火を熾して製鉄や鍛冶技能を持った技能集団だと云われます。この辺りは、鉱石も豊富で、伊吹おろしは、火力をあげる風として一役買った と思われ、銅や鉄を吹く人々が集まった土地であり、同じ垂井の南宮大社さんも鉄鉱業の守り神として知られています。
（ホツマツタエに書かれている神を祀る　伊富岐神社　[パワースポット] Net）
（伊富岐神社の祭神は多多美彦命で、八岐大蛇もまた祭神として挙げられている。本当の祭神は大国主か）

伊富岐神社拝殿（（ホツマツタエに・・・・））

伊吹の神は『古事記』では白猪ですが、『日本書紀』では大蛇となっています。大蛇とは海蛇の事で、砂鉄やら砂金やら、鉄の取れる川を所有し製鉄を行っていた一族の神の様です。猪の方は分かりません。昔聞いたかも知れませんが忘れました。態々「白」と書いてあるので、白山神の関係かも。
　伊吹山の神はイブキノオオカミとか云われています。今は、伊吹山寺があり、伊吹山修験道の場となっているようです。白山神社が伊吹山南南西参道沿いにあるのも、修験道の関係だと思われます。当時この辺りの豪族が伊福氏で、氏族のイブキオオカミが祖神とされているようです。現在は岐阜県不破郡に伊富岐神社があり祀られており、伊福氏は製鉄を行っていたとか。また、山を挟んで反対側、滋賀県米原市にも「伊夫岐神社」（岐阜県のとは字が違う）があり伊吹山を祀っています。米原市、息長氏という豪族の土地だそうで、こちらも製鉄を行っていたようです。息長川は現在の姉川。
（ヤマトタケルノミコトを倒した伊吹山の神とは何もんですか？Net）

注）伊吹は「鋳吹」から来た名でと思われる。

伊福部氏は、古代因幡国法美郡を中心とした地域の有力な豪族であり、しばしば因幡国造に任ぜられたとの伝承をもつ家柄です。伊福吉部、五百木部とも書かれ、「いふくべ・いふきべ・いほきべ」などと読まれています。その職務や名の由来として、笛を吹く部、景行天皇の皇子五百木之入日子命の御名代、天皇の御前の煮炊きをする職などいくつかの説があり、“気を変化させる力”を持ち「気をつむじ風に変化させるが故に気吹部の性を賜った」として『伊福部氏系図』では第20代の若子臣を気吹部臣（伊福部臣）氏の始めと位置づけています。また、伊福部氏の分布が鉱山地帯に多く、初期の製鉄法であるたたら製鉄は製鉄反応に空気を送り込んでつくられるため、風を司る伊福部氏は鉄鋼の精錬に従事していた氏族ともいわれています。そして宇倍神社（因幡国一宮）の神職は、古来より明治の初めまで伊福部家が務めていました。尚、伊福部氏の始祖は大己貴命（おほなむち）とも言われている。
（因幡・国府のうつろう流れ　殿ダム・袋川流域風土記、Net）

伊富岐神社と大宝神社の祭神：多多美彦命

大宝神社（守山市）はかっては大宝天王社といいました。大宝元年（701）疫病流行のとき、地主神（多々美彦命）を祀っていた「追来神社」の境内に素盞嗚尊（スサノヲノミコト）と稲田姫命を迎え祀ったところ疫病が鎮まったと伝えられます。
　地主神として大宝時代以前よりここに鎮座していて、伊吹山に座す多々美彦命が祭神です。古来は意布伎（伊不伎）神社と記されています。「イフキ」は息を吹くで風の神で、雨乞いで雨を授けられたことで水の神でもあります。
　このことをどう理解すればいいのでしょうか。かって滋賀県と岐阜県の県境に聳える伊吹山を中心に多々美彦命を神とする一族がこの一帯まで治めていたが、素盞嗚尊（牛頭天王）を奉祭する一族に取って代わられたということでしょうか。
（守山宿から草津宿へ②・・・大宝神社と芭蕉句碑記事、Net）

近江・湖西

奴国の嫡流：和邇（和珥）氏

（筑前から近江（湖西）へ遷る）

藤田

和邇氏と近江

近江西南部の志賀（滋賀）郡は、北九州の和邇原郷域たる筑前の国糟屋郡の志賀（志珂）郷（現福岡市東区）と同名だけあって、和邇氏族の中心地であった。和邇という表記は大和の添上郡と近江の志賀郡にのみ見られる。志賀郡の北隣の高島郡も、猿田彦神を祀る白鬚神社の全国総本社があり、安曇川の地名が残る。

志賀郡には、和邇、小野、真野などの地名があり、和邇氏族の古代における一大根拠地であった。真野臣の氏神とみられる神田神社の地を含んで、堅田や小野・和邇の地域が「和名抄」の真野郷とみられる。小野には湖西地域最大の前方後円墳（72メートル、4世紀末）である和邇大塚山古墳があり、また古代の産鉄遺跡も分布している。

（古代氏族の研究①、和珥氏、宝賀寿男）

海部氏勘注系図によると天足彦国押人命が6世孫建田勢命に関係づけられ、建振熊宿禰（和邇氏）もこの系図にのっている。従って、和邇氏は、筑前、丹後、若狭、近江（湖西）、そして大和に至ったものと考える。(藤田）

和邇氏−Wikipedia抜粋

5世紀から6世紀にかけて奈良盆地北部に勢力を持った古代日本の中央豪族である。和邇は和珥・丸邇・丸とも。

出自については2世紀頃、日本海側から畿内に進出した太陽信仰を持つ朝鮮系（江南系の方が適切（藤田））鍛冶集団とする説がある。本拠地は旧大和国添上郡和邇（現天理市和爾町・櫟本町付近）、また添下郡。6世紀頃に春日山山麓に移住し、春日和珥臣となる。

神田神社（滋賀県大津市真野普門）

【祭神】彦国葺命　天足彦国押人命
第五代孝昭天皇・その皇子、天足彦国押人命（あまたらしひこくにおしひとのみこと）とその三世の孫、彦国葺命併せて須佐之男命をお祀りするお社です。彦国葺命は真野の遠祖で、その子孫が真野の入江の汀、神田（みとしろ）の地に神殿を建てお祀りしたのが始まりで地名により神田神社と云います。

和邇氏考

1．和邇氏の「ワニ」が「ワニザメ」のことで「海の鰐」、すなわちサメ・フカの類を意味するという見解は古くからある。和邇氏とその同祖氏族が竜蛇信仰を強くもつことから、「ワニ」とは本来の爬虫類の鰐を含んで、広く竜蛇類に通じるもので、海神の宮が竜宮城と呼ばれる所似でもあろう。中国の江南から直接あるいは南朝鮮を経て北九州海岸部に渡来したが、我が国には鰐類が棲息しないことから、「ワニ」の名が海中の巨大魚類のサメ・フカの類にも代置されたとみられる。

2．和邇氏は九州北部の筑前に発した海神族の一大流派、そのうちでも嫡流的存在。安曇氏も大流派で、猿田彦も海神族と思われる。海神族の国として博多平野の那珂川流域にあった奴国があげられるが、その王族嫡流が和邇氏で、安曇氏はむしろ支流と思われる。

3．奴国は弥生時代中期後葉の倭国の中核国であった。倭国が後漢と外交交渉をもったのは、倭奴国王が後漢の光武帝に朝貢したのが始まりである。『後漢書』東夷伝によれば、建武中元二年（57年）後漢の光武帝に倭奴国が使いして、光武帝により、倭奴国が冊封され金印を綬与されたという。紀元前後のスサノオの北九州侵攻により伊都国が建てられ、1世紀後半に奴国は伊都国に圧倒されたと思われる。このため、和邇氏は、日本海を東遷し若狭を経由し、近江湖西に至ったと考える。和邇氏はさらに南下し葛城王朝に食い込んだ。

4．歴代の中国王朝は、和邇氏が東遷した後も和邇氏を倭国の王と見なしていた兆候がある。というのは、近畿での倭国大乱の際、後漢が和邇氏に詔書や黄幢をもたらし、「檄を以てこれを告諭」した際、和邇氏に対して中平大刀が下賜された。

5．和邇氏は、倭国大乱の折はニギハヤヒや大国主と諮り、大国主の血筋で和邇氏の巫女の卑弥呼を邪馬台国の女王とした。

6．『三国志』魏志倭人伝には、3世紀前半の奴国の様子が記録されている。倭人伝には二か所の奴国が記載されている。一つは筑前の奴国で、もう一か所は邪馬台国の極東界にある奴国である。この二度目の奴国は近江湖西の和邇氏の国と思われ、その東側（湖北・湖東）から美濃、伊勢さらに東国へと狗奴国が広がっていた。一方、邪馬台国の領域は近江湖南・湖西、大和以西の西日本一帯に広がっていた。

7．帯方郡から邪馬台国へのルートの帯方郡から不弥国（宗像周辺か）までのルートは確定している。不弥国から投馬国（出雲・伯耆と思われる）までを、『魏志倭人伝』の南方に向かうを東方に向かうと読むと矛盾なく水行20日で出雲に着く。次の水行10日で小浜湾（小浜市）に着く。その後、お水送りのルート（和邇氏が若狭から大和に進出したルートか）を取って琵琶湖経由で大和（纒向）に向かうのが水上交通が一般的であった当時としては一番蓋然性がある。このルートの中継地が野洲川河口の下長遺跡であろう。

8．卑弥呼は後漢を継ぐ魏とも外交関係を維持し、親魏倭王に任じられ銅鏡百枚などを賜ったが、3世紀半ばに死去し、箸墓に葬られた。邪馬台国は乱れ、卑弥呼の宗族の台与を擁立して、邪馬台国の内乱を治めた。台与は魏に使い（掖邪狗ら：掖邪狗：和邇日子押人命？）を送るが、これも魏が倭国（邪馬台国）の名代は卑弥呼の宗族の台与であると認識していたからであろう。卑弥呼と台与は大国主の流れを継ぐ近江の三上祝一族の出身であり、台与は卑弥呼の姪であると考える識者もいる。

9．和邇氏は崇神東征では任那・伊都国勢力に加担し、さらに応神東征でも神功皇后軍の中心勢力の一つであった。このように和邇氏はヤマト王権の確立にも大きな役割を演じている。神功皇后紀にみえる韓地への出発港たる「対馬の和珥津」が、対馬上県部の鰐浦にあたる。ここでも「和珥＝鰐」である。

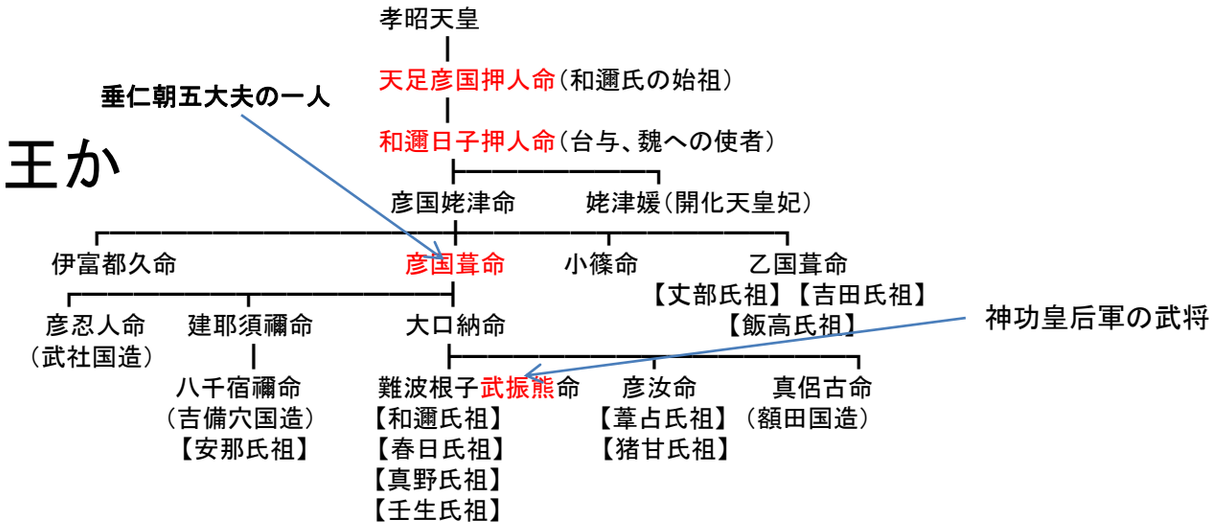
10．応神朝には、百済より和邇吉師（王仁）が渡来し、『論語』と『千字文』をもたらす。このことが示唆するように、和邇氏は5世紀までも南朝鮮との繋がりを保っていたと思われる。

（古代氏族の研究①、和珥氏、宝賀寿男　＋　藤田）

卑弥呼は、三上祝一族で和邇氏の巫女か

卑弥呼（日御子？）は海神族の代々の女王か

和邇氏系図



卑弥呼は近江出身の鉄神の巫女

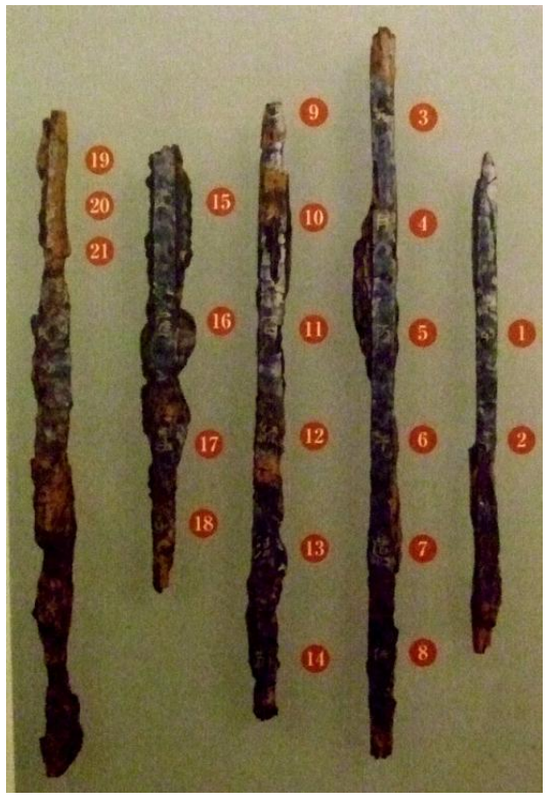
卑弥呼の履歴、すなわちその出自について物語る最も注目すべき資料は、奈良県天理市櫟井の東大寺山古墳出土の「中平□年5月丙午」銘の大刀であろう。中平とは後漢の年号であり、184年～188年をさすが、まさしく卑弥呼共立の時に当たっている。すなわち、「後漢書倭伝」には霊帝の光和年中（168~183)と記載された、倭国大乱の終結の年である。おそらく中平元年（184）、後漢王朝が詔書や黄幢をもたらし、「檄を以てこれを告諭」した際、卑弥呼側の部族に対してこの中平大刀が下賜されたものに相違あるまい。とすれば卑弥呼を擁した部族こそ、この大刀を200年近くも伝世し、本拠地の古墳に埋納したワニ（丸、和邇、和珥）族であったといえる。ワニ族はもともと近江の製鉄集団にルーツをもち、大春日氏、布瑠、粟田、柿本、真野、小野、大宅、櫟井、羽柴、物部などに分岐分散した。この製鉄集団の勢力の及んだ、近江の湖西、湖北は、伊勢国の南半から志摩国にかけての伊勢神宮周辺や、元伊勢の所在する丹波地域とともに弥生時代の祭祀遺物とされる銅鐸の非出土地域となっている。このことは、ワニ氏が早くから地霊を祭る祭祀＝銅鐸祭祀ではなく、天を祭る祭祀をとりおこなっていたことをうかがわせるものといえよう。

その後和邇氏がヤマトに進出し、本拠を移したことは、和邇の地名や和邇下神社の存在からもうかがえるが、その故地が近江の湖西にあったことは、平安時代に至ってもなお、彼らが大春日氏や布瑠氏以下同族が近江の国志賀郡の氏神へ、春秋二祠時には休暇ねがいもだすことなく帰還している事実によっても知られる。

したがって、卑弥呼は近江出身のシャーマン（製鉄神）であり、共立とともに部族の中枢もまた、三輪山北方に本拠を移したと考えられる。

（卑弥呼の墓は箸墓か、丸山竜平、臨時増刊歴史読本　特集・古代天皇と巨大古墳の謎、86年3月号）

（後漢書等の史書には中平太刀の賜下に関する事績は不記載である。（藤田）



（数字鉄刀の銘文の文字位置）

東大寺山古墳出土の後漢「中平」と紀年銘の鉄剣

春日山古墳群（かすがやまこふんぐん）は、滋賀県大津市真野谷口町にある古墳群。1974年（昭和49年）12月23日、国の史跡に指定された。和邇氏の旧地であった奈良の春日山を想起する。

琵琶湖の西岸、著名な堅田の町の背後の丘陵（春日山（コロッケ山）、筆者の少年時代の遊び場））には、約220基からなる湖西地方最大の古墳群、春日山古墳群がある。この古墳群は5世紀代にはじまり、6世紀後半に集中的に形成され、7世紀初葉に終焉する。

本古墳群の所在する地域は、和珥部臣、小野臣、真野臣など和邇氏につながる諸氏族の居住地であり、かれらとの関連がつよく示唆される重要な古墳群である。

（Wikipedia抜粋　＋　藤田）

「AD57年、奴国王は後漢・光武帝に使いを送り、金印を賜る」とのことからわかるように、筑前の奴国は、倭の中核の国と見なされていた。この奴国がスサノオが建てたと思われる伊都国に圧迫され、奴国の嫡流の和邇氏は筑前より若狭さらに近江湖西に遷った。しかし、歴代の中国王朝は、和邇氏を倭国の王と見なしていた兆候がある。というのは、後漢王朝が倭国大乱の際、和邇氏に詔書や黄幢をもたらし、「檄を以てこれを告諭」した際、和邇氏に対してこの中平大刀が下賜されたと考えられる。（藤田）

和珥氏とは「近しく矜持する」氏族と言う意で大王氏の近衛軍としての体質を和邇や和爾、また和珥としています。和珥の珥は「耳飾り」=ピアスやイヤリングの事で、王の耳、今で言う情報官という役回りを示しています
(FB 情報、石岡 茂）

和邇氏の没落と常陸の香香背男

和邇氏と香香背男と茨城県(常陸の国)

常陸の国（茨城県）が成立する以前の北部地方には、意富系と思われる「多賀国」、出雲系（大国主やスクナヒコナ）の「久慈国」と次に述べる「那珂国」の三か国があり、「那珂国」が最も南側に位置していた。

筑前の奴国の嫡流で近江湖西に遷り常陸の至ったと思われる和邇氏の名残は、鹿嶋市内にある鰐川（鹿島地方も古くは那珂国内）や、いわき市に流れる鮫川からも察せられる。現在の日立市の土地の古い言い伝えには、「昔の古老が、香香背男のことを『甲羅鮫』と呼んでいた」とある。ここから、『記紀』の因幡の白兎の逸話に出てくる鰐鮫を、「まつろわぬ悪」という意味で理解できる。「甕星の香香背男」は、日立市大甕町の大甕神社の列神で、主神は「静神社」の「シオリ」の「葉槌神」です。天孫族が地上を平定するにあたって鹿島と香取の神を成敗のために遣わしたが埒があかず、最後に葉槌神の協力で、ついに香香背男を射止めた、と『日本書紀』に記されている。この葉槌神は阿波系だと思われ、那珂川の中流域にはことさらに阿波系の伝承地が多い。

常陸の那珂国への所為倭人の最初の入植者は徳島藩の淡路付近からと考えられる。それが淡（阿波）族でした。彼らが綿津見族であり出雲族であった可能性も大いにあり得ると思われる。次は筑前の奴国から移住して近江に移った和邇族ではないか。那珂国は、名前のように、福岡の那珂川と名前が共通している。徳島県にも「那賀川」があるが「賀」という表記です。那珂川と呼ばれる以前は「粟川」と呼ばれていて、中流域に「粟」という地名が残っている。またいわゆる水戸は、隣のひたちなか市枝川にある鳴門川（現在は早戸川）から推測するに、鳴門の水門から転じたものと考えることができる。この徳島県の方は、特に「中臣氏」と関連しているという学者もいる。この「那賀」の字は茨城県の常陸大宮市にもその地名があり、やはり中臣氏と関連がありそうである。

大和では武甕槌神が鹿島立ちして春日山に奉じられるが、その土地というのが中臣氏が占有する前は和邇氏の固有の領地であった。初期ヤマト王権に組み込まれた和邇氏だが、政権から遠ざけられ、かつ殲滅させられたという史実が『日本書紀』の香香背男退治という形で遺されたのではないかと思われる。常陸にはヤマト王権の直接介入もあった。天孫族が関東に進出したのは、崇神朝の大彦（あるいは、その子の武渟川別）が物部軍団を率いての関東への侵攻ですが、それに続くのは、景行朝の日本武尊が中臣氏や大伴氏を伴い関東へさらに北への東征であろう。そして、最終的に中臣氏が鹿島神宮を中心として、紀伊水軍の蝦夷征伐と合わせて領地経営に乗り出して行く。中臣氏は、磐井の乱の後の物部氏の領地、さらにそれを踏襲した蘇我氏の領地を合わせて多大な勢力基盤を東国に築くことになる。近江では先着の和邇氏や物部氏の領地が藤原（中臣）に簒奪され、近江南部の利権は藤原氏がほぼ独占するようになったとされている。

（FB投稿、Yi-Yin 2020-7、藤田加筆）

天津甕星（あまつみかぼし）は、日本神話に登場する星の神である。別名、天香香背男（あめのかがせお）。星神香香背男（ほしのかがせお）、香香背男（かがせお）。『古事記』には登場しない。『日本書紀』の葦原中国平定にのみ登場する。

一説によれば「二神（タケミカヅチとフツヌシ）は、ついに邪神や草木・石の類を誅伐し、皆すでに平定した。唯一従わぬ者は、星の神・カガセオのみとなった。そこで倭文神・タケハヅチを派遣し、服従させた。そして、二神は天に登っていかれた。倭文神、これをシトリガミと読む。」

（Wikipedia-天津甕星から抜粋）

大甕神社（日立市大みか町）、（伝）皇紀元年（紀元前660年）

主祭神 - 建葉槌命（たけはづちのみこと）、地主神 - 甕星香々背男（みかぼしかがせお）

『日本書紀』神代に、下総国一宮である香取神宮の祭神経津主神と常陸国一宮である鹿島神宮の祭神武甕槌神の二柱の神が邪神をことごとく平定したが、星の神の香香背男だけは従わなかった。そこで倭文神建葉槌命が使わされ、これを服従させたと記されている。

創建は社伝によれば皇紀元年（紀元前660年）。最初は大甕山山上に祀られたが、水戸藩主徳川光圀の命により甕星香々背男の磐座、宿魂石上の現在の地に遷座された。

（Wikipedia-抜粋）

拝殿

本殿

藤田

近江とその周辺

弥生の倭国王（大国主）の大己貴の国「玉牆の内つ国」は近江にあった

琵琶湖周辺の歴史的景観（産業面）

信楽（紫香楽）には窯業があり、甲賀には薬業がある。八日市の北東の永源寺付近には木工業があり、伊吹山山麓には製鉄業や製銅業がある。八日市の中心街は金屋町（金屋は製鉄所）といい、その北、甲良町にも金屋集落がある。また、

伊賀国の一宮敢国（あえくに）神社、および安土町の沙沙貴神社は、硫黄の神転じて医王＝薬の神）ろなった少彦名を祭る。このことは湖南から甲賀、伊賀にかけての相当広い地域が薬業で栄えたことを物語っている。

（邪馬台国と「鉄の道」、小路田泰直）

製鉄とマンガン鉱

製鉄の原料となる鉄鉱や砂鉄には、酸化物や硫黄といった不純物を含むのが普通ですから、刃物になるような鋼を作るには、不純物を除くため脱酸素・脱硫黄が必須となります。そのため、製鉄の時鉄鉱・砂鉄・石炭・木炭のほかにマンガン鉱・石灰岩を投入することが不可避であり、古来の製法でもありました。石灰岩は各地でみられますが、マンガン鉱の分布数は滋賀県が群を抜いて多く、京都府、岐阜県、栃木県も多いのですが、九州は少ないことがわかります。ただし、当時の三韓・倭国には大量生産の製鉄技術がないので、楽浪郡や帯方郡の商人に売却する交易品であったとみられます。

（近江にいた弥生の大倭王、千城 央）

西日本諸国の和名抄田積数（町歩）（平安時代）（農業面）
(近江にいた弥生の大倭王、千城)

九州：筑前18500、筑後12800、豊前13200、豊後7500、肥前13900、肥後23500、日向4500、大隅4500、薩摩4500、壱岐620、対馬428
中国：長門4603、周防7834、安芸7358、備後9301、備中10228、備前13186、美作11021、出雲9436、石見4884、隠岐585、伯耆8162、因幡7914
四国：讃岐18648、伊予13501、阿波3415、土佐6451
近畿：播磨21414、但馬7556、丹波10666、摂津12525、淡路2651、丹後4756、山城8962、近江33403、大和17907、河内11336、和泉4570、伊賀4051、伊勢18131、志摩124、紀伊7199

古来、近江は日本国の要だった

水田稲作は弥生時代前期に倭国全域に広がった。平安時代の和名抄田積数（町歩）や安土・桃山時代の太閤検地（石高）によると、近江の国は日本全国（陸奥を除く）の中で田積数や石高が最も広く高かった。また、近江は近畿地方最大の鉄の生産国であり、伊吹山山麓は製鉄業や製銅業が盛んであった。信楽（紫香楽）には窯業があり、甲賀には薬業があり、八日市の北東の永源寺付近には木工業がある。このように、弥生時代中期以来、近江は農産面と産業面で他国を凌駕し、人口もまた全国有数であった。

古くから「近江を制するものは天下を制する」と言われ権力者の争奪の的となってきた。近江は琵琶湖の水運を備えた東西・南北の交通の要衝であり、さらに弥生時代から古墳時代前期までは大陸や半島からの物的・人的往来が日本海経由で丹後・若狭・越前から近江へさらに倭国各国に先進の文物や有意の人材が移ってきた。かくて、紀元前後から2世紀にかけて、倭国の中心が北九州から近江を核とする近畿に移っていった。しかるに、『記紀』では、近江の古代史が殆ど語られない。これは、『記紀』の編纂に関与した天孫族の後裔にとって、4世紀までの近江は天孫族に敵対する出雲（大国主）勢力（大己貴の国「玉牆の内つ国」や狗奴国）の拠点であったためではないか。（藤田）

近江歴史回廊倶楽部　(Net)　　近江の古代製鉄について
(非鉄金属腐食センター代表)

古くから「近江を制するものは天下を制する。」と言われ、権力者の争奪の的となった近江は、地政学上の好条件を備えた国であるばかりでなく,古代における近畿地方最大の鉄生産国でもありました。

（左図）古墳後期～奈良時代の製鉄遺跡分布
（発掘調査済み、穴澤義功より）

琵琶湖の北西岸の山域は、砂鉄の大産地なのだ。鉄穴（かんな）と呼ばれて鉄の露天掘りが出来る地域である。この琵琶湖から京都にかけて逢坂山にも、大製鉄地帯がある。逢坂山製鉄遺跡と呼ばれる遺跡が遺跡が20数カ所も発見されている。その逢坂山や京都の北は丹波とよばれ、息長水依比売の夫の日子坐王は丹波に派遣された。鉄の生産を握り、かつ出雲より大和への侵入口を閉じた。（天皇家の祖先・息長水依比売を追って、松本昭）

藤田

近江の2～4世紀の鍛冶工房

熊野本遺跡

3世紀前後（倭国大乱～邪馬台国成立時）の熊野本遺跡（滋賀県新旭町）には大規模な鉄加工工房の跡がある。丹後に陸揚げされた半島の鉄が、この工房に持ち込まれ種々の鉄製品に加工されたと思われる。また、741個のガラス玉が出土し、これらのガラスは丹後の大風呂古墳から出土したガラス釧と同じ成分とのことである。（前ヤマトを創った大丹波王国、伴など）

稲部遺跡（3世紀半ばの狗奴国の都か）

滋賀県彦根市の弥生～古墳時代（2～5世紀）の大規模集落跡、稲部（いなべ）遺跡で、3世紀中頃では国内最大級の大型建物1棟の跡並びに付随する建物約80棟の跡が出土した。このうち大型建物跡は幅11・6メートル、奥行き16・2メートル。同時期では、纒向遺跡の大型建物跡（幅19・2メートル、奥行き12・4メートル）に次ぐ規模という。この建物は、邪馬台国の女王・卑弥呼の宮殿という説もある。

また、3世紀としては最大規模の鍛冶工房とみられる竪穴建物跡も確認。建物跡などから鉄片や鉄製の矢尻といった鉄関連遺物が計約6キロも出土した。大和、越前や尾張などで出土するのと同じ形状をした土器の破片が多数見つかった。各地から運ばれてきたとみられる。

伽耶より鉄素材の倭国への流入

2世紀末までは、伽耶の鉄素材は日本海経由で丹後に持ち込まれ、近江・高島の熊野本遺跡で鉄製品に加工され、琵琶湖経由で北近畿一帯に運ばれた。邪馬台国時代以降になると、『魏志倭人伝』に記されているように、大量の鉄素材が若狭に持ち込まれ、鉄素材が近江・湖南の出庭遺跡に持ち込まれ、鉄製品に加工され、畿内一円に運ばれた。一方、3世紀の邪馬台国時代には、伽耶の鉄は狗奴国の外港の敦賀に持ち込まれ、稲部遺跡で鉄製品に加工され、東海地方からさらに東国へともたらされた。（藤田）

古代の近江国は大製鉄地帯 ヤマト王権が関与か

（編集委員　上坂徹）

2022/4/29　産経ニュース　歴史シアター（抜粋）

出土した竪穴建物の遺構。内部に4基の鍛治炉が確認された（滋賀県提供）

古墳時代前期（4世紀ごろ）の鍛冶（かじ）工房とみられる遺構が見つかった滋賀県栗東市の集落跡「**出庭（でば）遺跡**」。弥生時代の鍛冶炉ではほとんど例のない、1000度前後の高温により鉄の加工が行われ、高度な鍛冶技術を持っていたことが分かった。工程ごとに工房を分けた作業が行われ、周辺に鉄製品を配給する生産センターだった可能性も指摘される。古代の近江国（滋賀県）は飛鳥時代後期（7世紀後半）以降、製鉄や鋳鉄をしていた施設の遺構が次々と見つかっており、一大鉄生産拠点だったことが分かっている。その前段の時代につくられた鍛冶工房は、鉄製品の製作技術の過渡期を示す貴重な遺構なのかもしれない。

鍛冶は金属を鍛錬して製品を作る技術で、弥生時代に伝わったとされる。鉄素材を高温の炉に入れて軟らかくし、ハンマー代わりの敲石で叩いたり、切断して鉄製品に加工。その後、水につけて冷却し、表面を研磨して完成させていたと推定される。出庭遺跡では、出土している鉄製品が小型だったことから、刀剣などの大型鉄製品ではなく、小型の道具の製作や、貴重な農工具の補修などが行われたとみられている。

発掘調査した重田勉副主幹は「これまで各地で弥生時代や古墳時代の鍛冶工房の跡が見つかっているが、遺物などが中心で鍛冶作業の実情が十分分からなかった。今回は、具体的な作業状況が分かったことが重要。燃焼温度は弥生時代の炉より、今回の炉の方が高く、鍛冶の技術的な変遷も分かりました。工房の建物跡の中で、2棟は少人数での作業用と思われ、それが並んでいる。鍛冶の工程の違いで建物を分けていたことも考えられます」と話す。

砂鉄や鉱石から鉄を生産する製鉄は古墳時代後期（6世紀ごろ）から始まったとされており、出庭遺跡周辺では、7世紀後半の源内峠遺跡（大津市）で4基の製鉄炉が確認されるなど、古代の近江は鉄製品の一大生産拠点だったことが明らかになっている。

若狭

2世紀始め頃の奴国の嫡流の和邇氏（海神族）が若狭に東遷の折、海幸彦と山幸彦の神話を持ち込んだか。また小浜は邪馬台国の外港として機能したのか。

若狭彦神社（わかさひこじんじゃ）は、福井県小浜市にある神社。若狭国一宮。
上社・下社の2社からなり、上社（小浜市龍前）を「若狭彦神社」、下社（小浜市遠敷）を「若狭姫神社（わかさひめじんじゃ）」という。別称として郡名から「遠敷明神」とも呼ばれる。

祭神

・若狭彦神社（上社）祭神
　彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）-「若狭彦神」（山幸彦）
・若狭姫神社（下社）祭神
　豊玉姫命（とよたまひめのみこと）-「若狭姫神」
（Wikipedia抜粋）

若狭姫神社 （若狭彦神社 下社）

火遠理命（ほおりのみこと、山幸彦）
『古事記』によると、日子番能邇邇藝命（ひこほのににぎのみこと）と木花之佐久夜毘売（このはなさくやひめ）との子で三男。日子番能邇邇藝命に「自分の子ではない」と疑われ、佐久夜毘売がその疑いを晴らすために産屋に火をかけて、その火の中で生んだ三人の子の末で、火が消えかけた時に生まれたので火遠理命（ほおりのみこと）と名付けたとする。兄に火照命（ほでりのみこと）（海幸彦）、火須勢理命（ほすせりのみこと）がいる。
大綿津見神の娘のトヨタマビメ（豊玉毘売）を妻とし、「日子波限建鵜葺草葺不合命（ひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと）（神倭伊波禮毘古命（かむやまといわれびこのみこと）の父）」をもうけた。高千穂宮で伍佰捌拾歳（580年）で亡くなったとある。
（Wikipedia抜粋）

トヨタマヒメ『古事記』では豊玉毘売・豊玉毘売命（トヨタマビメ）、『日本書紀』・『先代旧事本紀』では豊玉姫・豊玉姫命（トヨタマヒメ）と表記する。
海神・大綿津見神（おおわたつみのかみ）の娘。天孫・邇々芸命が大山津見神の娘木花佐久夜毘売との間にもうけた火遠理命（＝山幸彦）と結婚し、鵜茅不合葺命を生む。
出産の際に『古事記』や『日本書紀』一書では八尋和邇（やひろわに）の姿、『日本書紀』本文では龍の姿となったのを、火遠理命が約を違えて伺い見たため、綿津見神の国へ帰った。鵜茅不合葺命は、トヨタマヒメの妹・玉依姫神に養育され、後に玉依姫神との間に神倭伊波禮毘古命（＝神武天皇）をもうける。
（Wikipedia抜粋）

若狭彦神社 （若狭彦神社 上社）

（光一郎撮影）

海幸彦と山幸彦
海幸彦と山幸彦の神話（説話）は山幸彦と海幸彦は『記紀』に記された日本神話で天孫族と隼人族との闘争を神話化したものと思われている（Wikipedia）。 しかし、海幸彦・山幸彦譚の元が、海部：天火明命と山部：ニニギ両者の事であったとしたら、「彦火火出見」は、本来海幸彦の尊称であった可能性もあるように思えます。なお、この場合は、豊玉姫の実像は豊水富命（またの名は井比鹿）となりそうです。（FB議論、在野一生）

浦島伝説、海幸彦と山幸彦 （Wikipedia抜粋）
浦島太郎（水江浦島子、『丹波国風土記』）がいた蓬莱山（竜宮城）とは仙人が住むという伝説の山（蓬莱山）であろう。浦島太郎と似た説話に、海幸・山幸神話がある。その中、天皇の祖神、山幸彦が「塩土老翁」（しおつつのおじ）という神に「無目籠」（まなしかたま）という水の入らないかごに乗せられ、海神の宮（わだつみのみや）に行き、海神（わだつみ）の娘、豊玉姫（とよたまひめ）と結婚し3年間暮らし生まれ故郷に戻り禁（タブー）を破る話の大筋がそっくりであり、また『古事記』に著される山幸彦の孫の初代神武天皇がヤマトに向かう際、亀に乗り釣竿を持った男とされる珍彦（うずひこ）が水先案内人になる場合があり、この2人の人物は不思議と浦島太郎に似ている。浦島太郎のモデルとなったとされる人物として、『万葉集』に「墨吉」（すみのえ）の人の記述があり、これは住吉明神の事であり、別名、「塩土老翁」といい大変長命長生きであったとされ、そのモデルとされる武内宿禰も大変に長生きである。浦島太郎、塩土老翁、武内宿禰、この3者は長生きで繋がる。
住吉明神から塩土老翁、「老翁」の字が老人になった浦島太郎にそっくりであり、住吉明神、塩土老翁、浦島太郎の3者は長寿、老人のイメージで繋がり、また塩土老翁は大和朝廷の天孫降臨を導き、神武天皇の東征をうながした謎の神であるとされる。また武内宿禰は古代豪族、蘇我氏の祖とされ応神天皇の東征を導いたともされる。

近江・美濃：伊吹山周辺

大己貴の国「玉牆の内つ国」の後継国、狗奴国の中核である近江湖東・湖北と美濃は北国・東国への交通の要衝である。また、近江・美濃・伊賀・伊勢は鉄鉱石（渇鉄鉱・砂鉄・磁鉄鉱）の産地であり、金山彦、大国主やスクナビコナの足跡を感じる。（藤田）

南宮大社（なんぐうたいしゃ）（岐阜県垂井町）にある神社、美濃国一宮）南宮山の山麓に鎮座する。「国府の南に位置する宮」として「南宮」を名乗るようになったとされる。鉱山を司る神である金山彦命を祭神としており、全国の鉱山・金属業の総本宮として古くから信仰を集めている。

南宮大社は古く縄文中期からの弥生中期の渇鉄鉱からの製鉄に由来する可能性がある。また、興味深いのは社伝に創建に隼人が関わっていたとある。熊襲の国は硫黄を産し、舶来鉄を一番入手しやすい条件をもっていたのかもしれない。熊襲国から美濃への南のルートの存在を示すのかもしれない。（Net)

金山彦神（かなやまひこのかみ）は、鉱山の神として信仰されている。神産みにおいて、イザナミが火の神カグツチを産んで火傷をし病み苦しんでいるときに、その嘔吐物（たぐり）から化生した神である。南宮大社を始め、全国の金山神社で祀られている。横浜の金毘羅神社（大綱金刀比羅神社）などでは、大国主とともに祀られている。（Net）

伊吹山の神と息長氏

山津照神社のある米原市能登瀬の東北14キロほどには湖北随一の高山、伊吹山がある。この山の神は多多美彦というが、その実体はこれまでよくわからず、息長氏との関係についても不明であった。それが竜蛇体ということで、息長氏の遠祖神にあたるのが武国凝別命と推定される（凝は金属塊）。九州の豊後国直入郡で祀る健男霜凝日子神が同体で竜蛇体とされており、これが阿蘇祖神の健磐竜命にも当たるから、これら事象はよく符号する。『日本書記』では日本武尊が遭遇したという大蛇は、伊吹山の荒神が化体したものと伝えるから、「荒神」というのも伽耶の安羅からの渡来の神という意か。

イブキ神社は、美濃と近江に各々式内社が一社あり、美濃の方は不破郡の伊冨岐神社である。近江のほうは、坂田郡の伊夫伎神社で八岐大蛇の神霊を祀るといい、祭神の多多美彦命が霜速比古命の子で喪服の岳の神だと『帝王編年記』養老7年条に伝えるのも、上記の健男霜凝日子神に通じる。伊吹山神を祀る神紋は「三つ足の烏」だというのも、八咫烏すなわち鴨健角身命（少彦名）に通じる。ただ、日本武尊が遭遇したのは、『古事記』では巨大な牛のような猪が化体だというから、こちらが原型の場合は伊吹山山麓に専従の三野前国造や伊福部氏に関係するのかもしれない。（「猪神」の意味については、葛城の一言主神「少彦名」が猪の姿で雄略天皇に対峙した伝承や、和気清麻呂の危機を猪の大群が救った伝承からは、祖神少彦名神の化体ないし表象化か。葛城国造の祖・天羽雷命（少彦名の子）が葛城地方に降臨した伝承地が「猪石岡」という名であるのも、猪神と巨石祭祀につながる。関連して、神武敵対勢力で葛城山東麓の長柄に居た「猪祝」という土蜘蛛も一言主神の祭祀者だったか）。これが息長氏の坂田郡入部より伊吹山の神も変化したのかもしれない。ともあれ、伊吹弥三郎の鉄人伝説もあって、谷川健一氏がいうように、伊吹山の神は鍛冶神であった（青銅の神の足跡、谷川）。

以上を整理すると、息長一族は、坂田郡で水陸交通の要衝を押えるとともに、近江北部の鉄を採って巨万の富を蓄え、丸岡塚古墳などの古墳を領内に多く築造し、忍阪大中姫等の后妃を出して継体天皇登場の基盤を造った。鉄生産が盛んであった吉備の地の吉備一族と巨大古墳築造との関係にも似ているが、一族の女性が産んだ子が大王に昇った点で決定的に異なる。（吉備氏や和邇氏では、一族の女性の所生の男子が大王になった例がない。）（古代氏族の研究⑥　息長氏　大王を輩出した鍛冶氏族、宝賀寿男）

伊吹山の神は八岐大蛇たる大国命と考える。（藤田）

古代の伊勢と伊賀では鉄の製錬が盛ん

『古代の鉄と神々』真弓常忠によると、五十鈴川の名はイスズのスズとは渇鉄鉱のことで、イスズ川は渇鉄鉱の多く採れる川の意とする。渇鉄鉱（水辺の植物の根を地下水に溶解した鉄分が徐々に包んで、根は枯死し、周囲に水酸化鉄を主とした固い外殻）は鈴石、鳴石とも呼ばれ、製鉄の初期、砂鉄より前の鉄の原料であった。鈴鹿もスズもこの意味で、スズカとは渇鉄鉱のある場所の意である。

倭姫命の天照大神を鎮め坐させしむ処を求めての巡行をテーマとした『倭姫命世紀』では、宇陀から伊賀の名張に入り、上野を経て、東近江の坂田、美濃の伊久良賀宮、そして伊勢の桑名に至り、最後は五十鈴川の川上となる。真弓氏はこれら巡行の地はいずれも古代産鉄地であると考えている。この巡行は鉄を求めて穴師たちの巡行と軌を一にするものなのか。
（伊勢と出雲：韓神と鉄、岡谷公二）

古代伊勢と鉄のかかわりは神社からも伺える。

多度大社（たどたいしゃ）は、三重県桑名市多度町多度にある神社である。主祭神は天津彦根命（天照大神の第3子）である。天津彦根命は当地の豪族・桑名首（くわなのおびと）の祖神である。天津彦根命が天照大神の御子神であることや参詣のための街道沿いにあることから伊勢神宮との関係が深い。境内には天津彦根命の子である天目一箇命を祀る別宮・一目連神社があり、本宮とともに「多度両宮」と称される。
（Wikipedia抜粋）

天目一箇命や一目連の一つ目とは、谷川健一氏の『青銅の神の足跡』によれば、鉄の製錬に従事したたたら師たちが、火を見つめすぎて片目を失うことが多かった事実に由来し、「この片目のたたら師こそ天目一箇神であった」とのことである。

揖斐には金山彦を祀る南宮大社がある。大和氏の『神社と古代王権祭祀』によると多度大社の祭神は南宮大社から移したという説もあり、多度大社と南宮大社と同じ11月8日にふいご祭をおこなうことから両者には関係があることは確かである。
（伊勢と出雲：韓神と鉄、岡谷公二）

多度大社本社、Wikipedia

伊賀の敢国神社

敢國神社（あえくにじんじゃ）は、三重県伊賀市一之宮にある神社。主祭神：大彦命（おおひこのみこと）第8代孝元天皇第一皇子。『日本書紀』によると、四道将軍の1人として北陸道へ派遣されたという。配神：少彦名命（すくなひこなのみこと）- 右座。
金山比咩命（かなやまひめのみこと）- 左座。

社伝によると祭神の大彦命は四道将軍として北陸地方を平定し、その子孫は伊賀国阿拝郡一帯に居住して阿閇氏（敢氏/阿閉氏）を称し、大彦命を祖神として祀ったという。また、それとは別に少彦名命を祀る秦氏一族があり、これら2柱をもって創建されたとする。創建当初は、敢國神社南方の南宮山山頂付近に祀られたが、後に現在地（南宮山山麓）に遷されたという。その後、山頂附近の社殿跡には南宮大社より勧請された金山比咩命が祀られたため、その山が「南宮山」と呼ばれたともいう。そして貞元2年（977年）、金山比咩命の社殿前の神木に言葉が現れたことにより、金山比咩命を敢國神社に合祀したとしている。
（Wikipedia抜粋）

南宮とはたたら製鉄の場合、周囲に立てた柱のうち、南の柱に金屋子神を祀るところから、鉄神を祀る社の謂いである。（伊勢と出雲：韓神と鉄、岡谷公二） 金屋子神（かなやごかみ、かなやこかみ、等）とは、中国地方を中心に、鍛冶屋に信仰される神。金山彦・金山媛や天目一箇神と同一、もしくは何らかの関係がある神とされるが、全く別神とする説もある。 金屋子神社には神仏習合した火の神として三宝荒神の姿で描かれた掛け軸も残されている。（Wikipedia抜粋） 伊賀は鉄や金工そして渡来人の痕跡がとりわけ色濃く残っているところである。（伊勢と出雲：韓神と鉄、岡谷公二）

神社人ー敢國神社（敢国神社、Net）

藤田

吉備が東進・拡大し邪馬台（ヤマト）国になった

卑弥呼（日御子）は孝霊天皇の皇女の倭途途日百襲姫

1

吉備が拡大・東征して纒向を都とする邪馬台（ヤマト）国になった。饒速日は山陽道の中心の高天原とも考えられる吉備より東征し河内の日下に至った。

天武天皇の時代に定められた五畿七道は、畿内（山城、大和、河内、和泉、摂津）と東海道、東山道、西海道、南海道、北陸道、山陽道、山陰道の七道からなる。これを東西南北に分ければ、東海道と東山道が「東国」、西海道が「西国」、南海道が「南国」、北陸道が「北国」という分類になる。七道のうち、「東西南北」の文字が含まれていない「山陽道と山陰道」は、中心の国を意味する「中国」と呼ぶ。中国の山陽道の「陽」は、「日＝太陽＝天道」にほかならない。これに対して、山陰は同じ中国でも、まったく正反対の陽のあたらない日陰の山の意味が与えられている。したがって、山陽道の名付け方が高天原に近いというなら山陰道のイメージは黄泉の国に近いといえる。そして、古代の山陽道を代表する国はのちに備前、備中、備後、美作に分割された大国の吉備である。孝霊天皇の御代、吉備は拡大し加古川までを勢力下におき、大吉備と呼ばれた。孝霊天皇、もしくはその皇子を主人公とした一群の伝承（孝霊伝承）で、吉備国から南北に延ばした線上、すなわち、吉備三カ国（備前・備中・備後）から、美作、因幡、阿波、讃岐、伊予や播磨に広がっている。また、孝霊天皇のとき、大和平野のほぼ全域を平定したのか、宮を大和平野の中央に移した。

『日本書紀』などの記述によれば、饒速日（ニギハヤヒ）は、神武東征に先立ち、天磐船に乗って河内国（大阪府交野市）の河上の地に天降り、その後大和国に移ったとされている（ニギハヤヒの東征）。神武東征とは、5回に亘る南朝鮮系倭人による大和進出を集合した倭国平定譚であり、3世紀後半の崇神東征が1世紀半ばの神武東征譚の主要部分であると考える。神武東征と崇神東征の間の皇統（2代綏靖から9代開化）が、所謂欠史8代と言われ、崇神天皇に始まる崇神王朝（ヤマト王権）以前の前ヤマト政権（葛城多氏王権、葛城王朝、邪馬台国）に当たる。崇神東征が神武東征譚の主要部分を構成するのであるから、ニギハヤヒは崇神東征の前に東征したと考えられ、ニギハヤヒの東征が倭国大乱を引き起こし、ニギハヤヒ、大国主、和邇氏のより卑弥呼が共立され、倭国大乱が鎮められ邪馬台国の建国に至ったと考える。従って、ニギハヤヒが孝霊天皇に当たるとするとこのような邪馬台国成立の過程が妥当性をもって理解でき、かくて卑弥呼は孝霊天皇の皇女の倭途途日百襲姫で天皇の養女とされたと考える。宮内庁の治定によれば、倭途途日百襲姫は卑弥呼の陵墓かとされる最初の巨大な前方後円墳である箸墓古墳に葬られたとされている。

物部氏の祖神のニギハヤヒの素性は判然としないが、素戔嗚（スサノオ）の直系の天津彦根の子孫ではないかと推察されている（宝賀寿男）。スサノオは紀元前後に伽耶から筑紫に侵攻し、さらにニギハヤヒことイソタケルと共に出雲に向かい、十握剣で八岐大蛇（大国主か）を殺し古出雲を崩壊させた。この十握剣は布都御魂剣と呼ばれ、備前の石上布都魂神社に納められていた。ニギハヤヒ（世襲名）は吉備を中心とした瀬戸内海一帯で力を蓄え、布都御魂剣を掲げて大和へと東征し、布都御魂剣を物部氏の総氏神である石上神宮に納めた。

ニギハヤヒの率いる吉備を中心とする物部軍団が、河内から大和に入ったことを示唆する考古学的証拠は吉備にあった布都御魂剣が石上神宮に納められていること以外に次のようなものがある。

❶吉備の弥生墳丘墓の特殊基台や弧帯文が纒向遺跡に見られる。

●特殊器台――2世紀後半の倭国大乱後、瀬戸内海沿岸地方に、古墳に墳丘墓の造営の動きが見られ、纒向周辺で前方後円墳の築造が始まる前の墳墓形態をもつ弥生時代最大の楯築墳丘墓が造られた。この墳丘墓の出現と共に、大型化し、複雑な文様で飾られる墳墓専用の器台―特殊器台が現れる。この特殊器台は、やがて古墳に並べられる埴輪に繋がっていったと考えられている。このような大きな墳丘墓が、古墳時代より先に吉備で築造されていたのは、吉備に墳丘墓での葬送儀礼に特殊器台を用いる大きな政治勢力があったことを窺わせる。

特殊基台が発見された地域は吉備・出雲・纒向だが、それ以外に物部の本拠地とされる河内（八尾）で発見されている。この特殊器台は、河内平野には特殊器台を用いた古墳が無いため、大和への水運の際に破損したものが河内に残されたものと理解されている。つまり吉備の物部氏が特殊器台を携えて吉備⇒河内⇒纒向と移動してきた証左だと思う。

岡山県総社市秦の北隣りに秦系一族の集落があり、その定住起源は遅くても2世紀とされが、この集団が楯築遺跡を造営したとされている（FB情報、大浜明文）。この秦系一族の氏神神社（姫社神社）は祭神かアメノヒボコの妃（阿加流比売）であり、この秦系一族がアメノヒボコを奉斎していて、この一族とアメノヒボコの接点があったことが想起される。かくて、楯築遺跡を造成した秦系の土木技術集団が吉備より纒向に移住して、箸墓古墳のような巨大な墳丘墓の造営に当たったと推察できる。

『古事記』の記述では、孝霊朝に吉備津彦を派遣し吉備の反乱を制圧したとある。吉備三国（備前、備中、備後）には各々大吉備津彦（吉備津彦）を主祭神とする一宮（吉備津神社、吉備津彦神社）がある。これらの一宮の相殿神として父の孝霊天皇と姉の倭迹迹日百襲姫が祀られる。備前と備中の一宮の間には中山があり、その中山の頂きには吉備津彦を葬った中山茶臼山古墳がある。この古墳は前方後円墳のプロトタイプとされ、倭迹迹日百襲姫を葬ったとされる纒向の箸墓古墳は最初の巨大な前方後円墳である。中山茶臼山古墳は箸墓古墳に先行して築造されたと思われる。これらのことは、吉備と纒向が政治的に密接に結びつき、古墳築造技術でも相互交流があったと思われる。

●弧帯文石（弧帯石）――楯築墳丘墓上に大正時代の初め頃まであった楯築神社に、代々伝世し、ご神体として神石（亀石）と呼ばれる全表面に毛糸の束をねじったような弧帯文様が刻まれた石が安置されていたが、今はこの遺跡のそばの収蔵庫に祀られている。こちらは「伝世弧帯文石」と呼ばれるが、この弧帯文は纒向遺跡の弧文円板と葬送儀礼と共通する。

❷吉備型甕と庄内式土器――3世紀の甕である吉備型甕は吉備で最初に出土したから吉備型と名づけられているが、出土数が最も多い地域は、博多、纒向、河内の三ヶ所である。この甕の重要性は纒向と博多をつなぐ土器であることである。吉備型甕が発展した庄内型土器が卑弥呼の時代に纒向で使用される。庄内型土器は生活用具で調理に使用されたが、その特徴は「へらけずり」による薄作りで当時のハイテクであり、その技術が吉備→河内→纒向と伝搬しさらに西日本一帯にひろがった。

3世紀半ば過ぎまでに纒向遺跡に各地から運び込まれた、外来系土器の出土数は全体の15～30%に達し、地域別では東海が半数を占め、山陰、北陸、河内、吉備と続く。しかし、3世紀末の崇神東征以前に九州から持ち込まれた土器は極めて少なく、九州からの民の移動はごく限られていたと思われる。

吉備が東進・拡大し邪馬台（ヤマト）国になった

卑弥呼（日御子）は孝霊天皇の皇女の倭途途日百襲姫　3

❸卑弥呼（倭迹迹日百襲姫）と吉備津彦（桃太郎）とは姉弟――吉備と纒向は桃核の出土でもつながる。道教に繋がる卑弥呼の鬼道では桃核が祭祀に使われる。纒向遺跡では平成22年、大型建物跡の南側の穴から2千個以上の桃の種が出土した。こ桃核を放射性炭素年代測定法で調べたところ、西暦135年から230年のものであることが判明した。一方、吉備では弥生後期の遺跡から合計1万3千個余りの桃核が出土しており、特 に倉敷市の弥生後期最大の墳丘墓である楯築遺跡の南の上東遺跡から1万個弱の桃核が出土している。

孝霊朝に吉備津彦が派遣され吉備の反乱を制圧した。吉備の物部が倭国大乱制圧や邪馬台国樹立に武力を割き、吉備の防備が手薄となったところに、出雲勢力が南下し鉄資源を奪った。吉備津彦がこの出雲勢力を制圧し、鉄資源を奪い返したのが「桃太郎伝説」のもとになったのではないか。

吉備に関する以上の論考から邪馬台国の成立を次のように概説する。吉備は山陽道の中心の大国で高天原とも例えられる。2世紀半ば倭国大乱のきっかけとなったのは、スサノオの子孫である太陽神たる饒速日（ニギハヤヒ）は、吉備を中心とする瀬戸内海一帯からの軍勢に但馬からのアメノヒボコの加勢を得て東征し、太陽神との関連を匂わせる河内の日下に向かった。鳥見の里を見渡す哮ヶ峯（たけるがみね『生駒山』）に着くと、饒速日尊は辺りを見渡し「虚空(そら)みつ日本(ヤマト)の国」と賛じた。この国見の際の美称が邪馬台（ヤマト）国という国号の始まりとなった。ニギハヤヒの軍団は、大和に侵攻し、ホアカリの3世孫の倭宿禰が建てた玉牆の内つ国の支国（葛城王朝）を崩壊させ、さらに北上して大国主の玉牆の内つ国の都の近江湖南の伊勢遺跡を侵し、玉牆の内つ国を瓦解させた。ニギハヤヒは、和邇氏の巫女で大国主の血統の卑弥呼を共立し倭国大乱を鎮め、纒向遺跡を都とする邪馬台国（ヤマト国）を建てた。邪馬台国（若狭、近江湖西・湖南、大和、紀伊を東端）の東側に玉牆の内つ国の後継国の狗奴国（越前、近江湖北・湖西、美濃、伊賀、伊勢を西端）が建てられた。邪馬台国時代の皇統は、孝霊天皇から開化天皇の御代にあたり、饒速日は孝霊天皇と同人格と推察される。158年の伽耶と吉備を通る皆既日食は、卑弥呼（日巫女とも、倭迹迹日百襲姫に当たる）を共立して倭国大乱を鎮め、邪馬台国を建てたことを象徴するのではないか。

吉備は、2世紀後半に東に拡大し邪馬台国を建てるに至ったのみならず、次に述べるように吉備は筑紫や近江とともに縄文時代から倭国の先進地域であり、古墳時代中期の雄略朝のヤマト王権の中央集権化で没落まで吉備は倭国の中核であり続けた。

1. 吉備から日本最古（縄文時代前期（7千年前～5.5千年前））の稲のプラントオパールが見つかっていることである。これは長江下流域から渡来した熱帯ジャポニカのプラントオパールであり、縄文時代からの吉備と江南との文化交流が存在したことを示唆する。
2.『日本書紀』には、イザナギ渡来の時代（紀元前1世紀）、「磯輪上の秀真国（しわかみのほつまくに）」、「細戈の千足る国（くわしほこのちだるくに）」と「浦安（うらやす）の国」の三つの国があったと記されている。これらの国は特定の地域に対応した固有の意味をもち適当な創作とは考えられない。磯輪上の秀真国は中国地方でその中心は吉備、細戈の千足る国は北九州でその中心は筑紫、そして浦安の国は大型銅鐸（近畿式、三遠式）の国でその中心は近江と思われる。浦安の国を引き継ぐのが玉牆の内つ国（大己貴の国）でニギハヤヒの東征で瓦解した。
3. 吉備が拡大・東征して邪馬台国となった。崇神東征により邪馬台国を瓦解させて成立した、崇神王朝（三輪王朝、ヤマト王権の最初の王朝）は、物部氏や和邇氏など有力氏族を取り込み、邪馬台国の祭祀形式を引き継いだ。
4. 崇神王朝を継ぐ応神王朝（河内王朝、ヤマト王権第2王朝）になると、巨大な前方後円墳が古市・百舌鳥古墳群が造成された。その当時の地方の有力豪族（吉備、日向や毛野など）も巨大な前方後円墳を築造した。吉備氏は、誉田御廟山（応神陵）、大仙（仁徳陵）や上石津ミンザイ（履中陵）に次ぐ全国第4位の規模の造山古墳などの巨大な前方後円墳を造成した。

5. 雄略朝になると、ヤマト王権の中央集権化が図られ、吉備氏などの地方の有力豪族が没落する。雄略7年の吉備下道臣前津屋一族の誅殺、吉備上道臣田狭の謀反、雄略27年星川皇子と推媛が共謀して大蔵を占拠したが鎮圧され、砂鉄の産地の山部を没収される。これを境に吉備氏は急速に没落する。
（FB藤田泰太郎タイムライン投稿20/9/6）
参照：　古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）ー天孫族（伽耶族）の系譜　③　031

ニギハヤヒ＝孝霊天皇＝大物主

ニギハヤヒと伝わる肖像（秋田県唐松神社）

第7代孝霊天皇

スサノオ（第2代新羅王）の後のニギハヤヒ、アメノヒボコ（第8代の子）は新羅王系譜で繋がり、また秦氏は秦人で新羅北部の秦（辰）韓の出自である。彼らはお互いに協働して列島に進出したと思われる。吉備に進出するには、筑前ー（日本海）ー石見ー(江の川）ー三次ー（芦田川）ー吉備のスサノオルートを取ったと思われる。

吉　備

大吉備

『古事記』中巻、孝霊天皇の段などに兵庫県の加古川以西が吉備であると捉えられる説話があり、加古川を国境としていた時期があると考えられている。吉備勢力（ニギハヤヒら）は出雲征服を試みるも完遂寸前に出雲東部の意宇王の前に失敗した。その後、東征し邪馬台国を建てた。崇神東征により邪馬台国は乗っ取られ崇神王朝（ヤマト王権）が成立したが、吉備はヤマト王権でも影響力を維持した。応神王朝時代には、ヤマト政権中央部に対抗するほどの勢力を誇ったが、これがヤマト政権の警戒を呼んだのか、雄略朝のヤマト政権の謀略で勢力が削減され衰退していった。
（Wikipedia抜粋　＋　藤田）

孝霊天皇考

吉備で勢力を蓄えたニギハヤヒが、アメノヒボコと共に東征し倭国大乱を引き起こし、大国主の大己貴の国「玉牆の内つ国」を解体させ邪馬台国を建てた。ニギハヤヒは次のような事由で孝霊天皇に当たると考えている。

①孝霊天皇の御代、吉備は拡大し加古川までを勢力下におき、大吉備と呼ばれた。ニギハヤヒとアメノヒボコは共同して但馬や播磨に勢力を伸ばし、淡路島への鉄の供給網を確保したと思われる。

②孝霊伝承と云われる一群の伝承群がある。孝霊天皇、もしくはその皇子を主人公とした伝承で、吉備国から南北に延ばした線上、すなわち、吉備三カ国（備前・備中・備後）から、美作、因幡、讃岐、阿波や伊予に広がっている。さらに、孝霊天皇のとき、大和平野のほぼ全域を平定したのか、宮を大和平野の中央に移した。

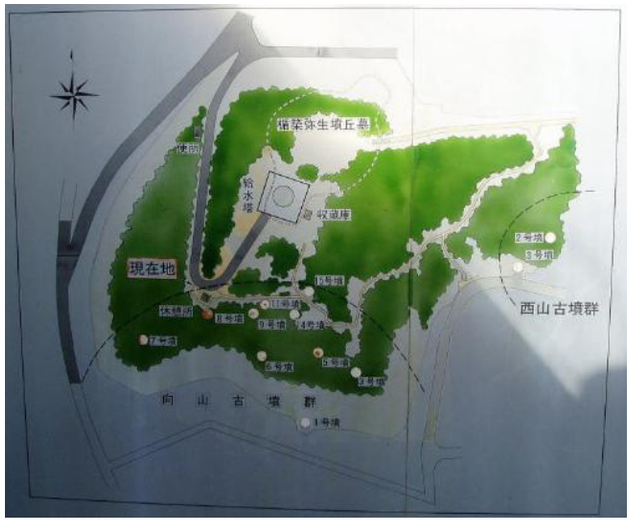
③倭国大乱は大和から近江湖南および美濃南部に及んだ。近江湖南では玉牆の内つ国の都の伊勢遺跡を解体させて、都を纏向遺跡に移し、邪馬台国を建てた。伊勢遺跡の近くの御上神社は孝霊天皇の時代の創建とされる。また、アメノワカヒコ（スクナビコナか）が殺された美濃南部の喪山天神社の近くの大矢田神社もまた孝霊天皇時代の創紀とされる。

④卑弥呼（日御子？）は孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫と考える。ニギハヤヒ（孝霊天皇）は、和邇氏の巫女、卑弥呼を邪馬台国の女王することで倭国大乱を鎮め、卑弥呼を養女としたのか。また、倭迹迹日百襲姫は大物主の妻で、大物主もニギハヤヒに当たると考える。
（藤田）

大型墳丘墓

弥生墳丘墓より規模の大きい墳丘墓が営まれ始める。特に吉備地方（岡山県～広島県東半）では、全長数十メートルに及ぶ墳丘墓も現れ、埴輪の祖型である大型の壺や器台を伴うようになる（特殊器台・特殊壺）。なかでも岡山県倉敷市の楯築墳丘墓は直径約45メートル、高さ約5メートルの円丘の両側に方形の張り出しを持ち、全長約80メートルもある双方中円墳の形をしている。この地域の代表的な首長の墓と考えられ、その築造年代は、2世紀後半に比定されている。なお、兵庫県たつの市揖保川町養久山（やくやま）5号墳も突出部を二つ持っている。これらの突出部は、祭壇などではなく、棺を担いだ埋葬の葬列が通る「道」だったと考えられる。前方後円墳の成立時には、前方部に変化していった。一方では山陰にも墳丘墓の大型化が起こるが形態は四隅突出型墳丘墓と呼ばれる方墳の角が突き出したような形態となっている。墳丘墓全体に貼り石を敷き詰めたような高度な土木技術が用いられ、弥生後期、近畿地方や瀬戸内海沿岸で、それに類似したものがある。この形態は北陸地方にも伝播していることから、環日本海的な勢力に発展しており日本神話の述べる古代出雲の存在感と通ずる発見がなされている。

これらの墳丘墓は、弥生中期以前の墳丘墓と規模的に一線を画している。そのため、墳丘墓の呼称を弥生後期の大規模なものに限るべきとする意見が、多数となりつつある。このような墳丘墓は、3世紀中葉過ぎに出現する前方後円墳などの古墳へと発展することになる。墳丘墓にはまだ地域性が見られたが、古墳は全国斉一的であり、大きな差異は見られなくなっている。このことは、3世紀中盤を画期として、九州から東日本にわたる統一的な政権が確立したことを示唆するという説が主流である。
（ Wikipedia抜粋)
楯築墳丘墓などの大型墳丘墓は、箸墓古墳に始まる前方後円墳の原型か。（藤田）



藤田

特殊器台は、古墳に並べられる埴輪に繋がっていく

特殊器台 （2013年10月岡山市埋蔵文化財センター特別展「特殊器台の世界」）

吉備では、弥生時代の墳墓に使用される土器として、壺とそれを捧げる台（器台）が非常に発達する。弥生時代最大の楯築墳丘墓の出現と共に、非常に大型化し、複雑な文様で飾られる墳墓専用の器台ー特殊器台が現れます。この特殊器台は、やがて古墳に並べられる埴輪に繋がっていくと考えられてる。つまり、ヤマト王権成立に吉備の首長たちが大きく関わったことを表している。

特殊器台になる前の「器台」（右上図） は、弥生時代中頃に現れた祭り用の器台である。おそらくこの頃に「農耕用に関わる祭りの形や道具立てが整えられ、確立したのだろう。これは集落で出土した、「日常のさまざまな祭りや祈りの場で使われた土器」のようである。意外にも、壺とセットではない場合が多い。壺だけではなく、さまざまなものを捧げものにした可能性がある。弥生時代後期後半以降、限られた人のために墳丘墓が築かれるようになってからは、集落内で出土する器台は小型化し、出土数も激減」する。そして、楯築弥生墳丘墓と特殊器台が出現する。倉敷市庄パークという住宅地の中央辺りにある小山の頂きにこの特異なお墓がある。墳長70m以上、巨石を立て並べたその姿は他に例を見ない。今はないが、周りには1番最初の特殊器台がずらっと立て並べられていた。最初の特殊器台には、後の特殊器台にある組帯文と呼ばれる渦のような文様はなく、綾杉文や鋸歯文を組み合わせた文様だった。組帯文は亀石というもう一つの重要なアイテムに施されていたのである。一方で、文様帯四段、間帯五段という構成やプロポーション、その大きさや形は元の器台からは飛躍して作られた。まさに楯築の王の（祭の）ために作られた器台だったのである。しかもその形が後の墳丘墓の祭を決定つけたという意味でも、楯築の王、或いはその王の祭りを主催した人間の突出した「大きさ」を想像せざるを得ない。まだ謎はある。この巨石はいったいなんのために立てられたのか。そして、その形があとあと継承されなかったのは何故なのか。特殊器台がなぜあの形でなければならなかったのか、ということと含めて、まだ誰も納得のゆく説明をしたことがないのである。

楯築の王のあと、吉備王国は飛躍的に大きくなる。吉備王国はすなわち特殊器台王国と言ってもいい。それは備前、備中、備後、美作、（播磨）に広がり、連合国だとは思うが山陰へ、やがては纒向の箸墓の王も、特殊器台を使用するようになり、さらには特殊器台は埴輪となって、全国に広がってゆくのである。

特殊器台の胎土は、角閃石という鉱物を含む特別な粘土を使用していて、きっちりとした決まりがあったようです。あんな大きな土器を焦げ目をつけずに割らずに焼き上げるのは、我々の知恵を凌駕する何かがあったと見ないといけない。文様だけは次第と変化してゆきます。楯築型→立坂型→向木見型→宮山型。総社市の宮山弥生墳丘墓から出土した宮山型特殊器台（右下左図）は、文様も非常に特徴的になっており、形も文様帯三段、間帯三段と変わっている。これと同じ形が纒向からも出ている。また、特殊基台とは異なる特殊器台型埴輪（右下右図）が同時に出土することがある。特殊器台型埴輪は「都月型」埴輪ともいい、特殊器台から埴輪への変遷のミッシングリンクとされる。特殊器台形埴輪は、奈良の箸墓をはじめ、吉備と近畿の最古の古墳から見つかっているが、まだ17例しかない。この埴輪に、文様がなくなってやっと埴輪は、全国各地の古墳に受け入れられるようになった。

（ヤマト王権成立のカギを握る特殊器台の世界、Net）

縄文・弥生時代には、円筒埴輪の中で渇鉄鉱を熱して焼結をおこない 鉄を造った。円筒埴輪は、吉備の特殊器台に似ている。吉備の特殊器台も製鉄に使用されたのか？また妄想かと云われそうです、（藤田）

特殊器台になる前の「器台」

宮山型特殊器台

特殊器台型埴輪

楯築遺跡：吉備の秦氏（次スライド）により作られたか．アメノヒボコも関与したと思われる．また、巨大前方後円墳の原型か

楯築遺跡

・概要

王墓山丘陵の北側に弥生時代後期(2世紀後半～3世紀前半)に造営された首長の墳丘墓である。墳丘の各所から出土した土器片の多くが壺形土器、特殊器台・特殊壺の破片である。直径約43メートル、高さ4、5メートルの不整円形の主丘に北東・南西側にそれぞれ方形の突出部を持ち、現在確認されている突出部両端の全長は72メートルで同時期の弥生墳丘墓としては日本最大級である。

・二つの突出部

主墳の頂上には木棺を取り囲むように5個の巨石が立てられ、また、斜面にも2列に地表の露出分だけでも高さ・幅とも1メートルあまりで20個ほどの列石がめぐらされ、北東側の突出部は団地造営工事のため破壊されている。今ではその名残を一部にとどめているに過ぎないが、前方部状の突出で、およそ十数メートルほど伸びている。その上面は幅約3、4メートルで、わずかに前面に向かって下降気味であるが、平坦に近い。突出部の前面はかなり急な傾斜で2～3メートルほど下がり、東西に走る小道に達しており、小道をわたると突出部の続きと思われる高まりがつづく。盛り土しているのが分かる。また円礫が二重三重に置かれている。円丘につけられた遺構であることが分かる。南西側の突出部は約20数メートルにわたって細長い幅数メートル高さ2メートルほどの尾根状のものが伸びている。先端部の両側が丸く整形されていてその先端には大きな列石が貼られている。西部分には現在、給水塔が建っていて、今は見ることができない。

香川県高松市の猫塚古墳や奈良県天理市の櫛山古墳などと同じ双方中円墳であるが、先行的な形態をしている。2世紀半ばに起こった倭国大乱が終わった後、瀬戸内海沿岸地方では、古墳造営の新しい兆しが見え、この地域で墳丘の造営の動きが見られるようになった。 このような大きな墳丘墓が、古墳時代より先に築造されていたのは、この地に葬送儀礼に特殊器台・特殊壺を用いる大きな政治勢力があったことを窺わせる。その勢力の代表的な首長の墓であると推測されている。後の古墳時代中期には造山（350メートル）、作山古墳（270メートル）の大前方後円墳が造られる。

・弧帯文石（弧帯石）

墳丘上には大正時代の初め頃まであった楯築神社に、代々伝世し、ご神体として神石（亀石）と呼ばれる全表面に毛糸の束をねじったような弧帯文様が刻まれた石が安置されていたが、現在はこの遺跡のそばの収蔵庫に祀られている。こちらは「伝世弧帯文石」と呼ばれる。この弧帯文は、纏向遺跡の弧文円板と葬送儀礼で共通するといわれている。ここにも吉備津神社や鬼ノ城などのように温羅伝説が残っており、吉備津彦命が温羅との戦いに備えて石楯を築き、防戦準備をしたと伝わっている。

（Wikipedia抜粋）

遺跡遠景　丘陵の右側頂上部に墳丘墓がある。

旋帯文石（複製品）東京国立博物館展示

吉備の秦氏とアメノヒボコ

姫社（ひめこそ）**神社**（総社市福谷1423）

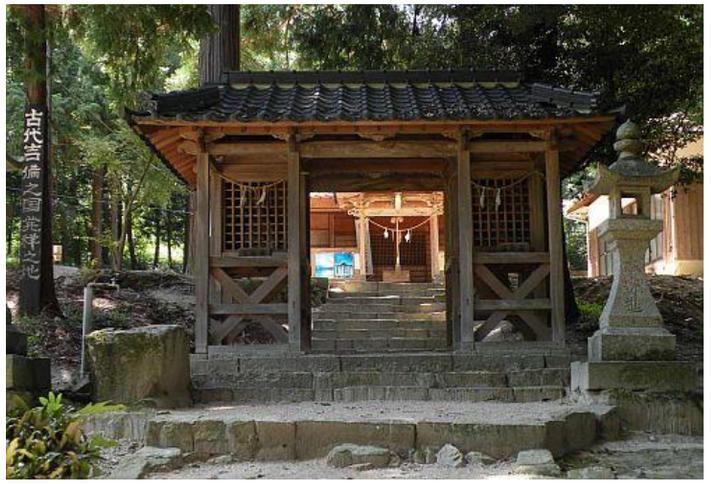
姫社神社は高梁川右岸、278号線の豪渓秦橋西約1.5kmに鎮座しています。神社入口前には大きな溜池があり、石段の参道を上がると鳥居が建立されています。鳥居後ろの参道脇には「鉄作神姫社神社」と「祭神比賣語曽神」の石柱が立ち、木々の中の緩やかな石段参道を行くと随神門と随神門脇に「古代吉備之国発祥之地」碑があります。境内中央には唐破風付きの開放的な拝殿が建ち、幣殿、流造りの本殿と続いて建立されています。

御祭神：比賣許曾神（阿加流比売）

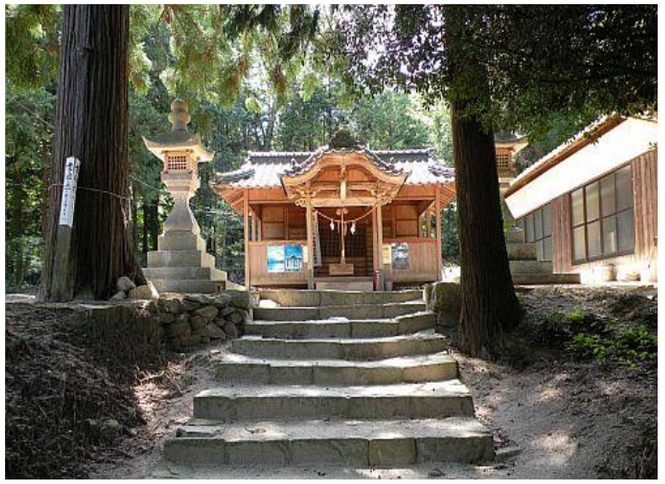
由緒：創建は不詳ですが、通称名を鉄造の神様といわれ、新羅の国から渡来してきたという新羅の王子・天日矛（アメノヒホコ・天日槍とも）の妻・阿加流比売（アカルヒメ）を御祭神として祀っています。阿加流比売は比売許曽神（ヒメコソノカミ）ともよばれる製鉄の神です。また天日矛（アメノヒホコ）は朝鮮半島から製鉄技術を伝承したといわれています。

古代吉備国は鉄の文化で栄えていました。高梁川西岸・新本川流域は製鉄関連の遺跡が点在し、神官寺古墳からは三角縁神獣鏡も出土しており、古代吉備の国発祥の地と考えられます。また、この辺りは渡来系の秦氏が治めた地で、秦氏は天日矛や阿加流比売を崇拝していたといいます。

（姫社神社、Net)

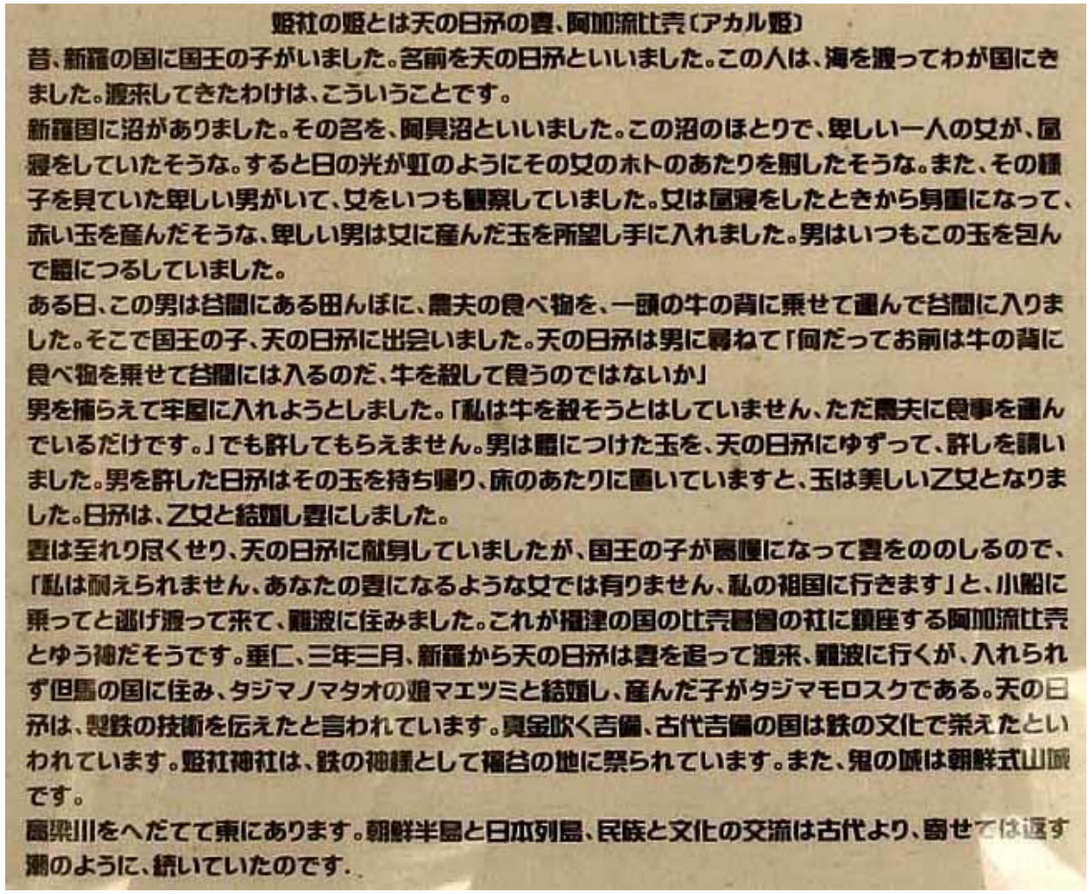


境内の様子



拝殿

姫社神社由来



姫社の姫とは天の日矛の妻、阿加流比売（アカル姫）

昔、新羅の国に国王の子がいました。名前を天の日矛といいました。この人は、海を渡ってわが国にきました。渡来してきたわけは、こういうことです。

新羅国に沼がありました。その名を、阿具沼といいました。この沼のほとりで、卑しい一人の女が、昼寝をしていたそうな。すると日の光が虹のようにその女のホトのあたりを照したそうな。また、その様子を見ていた卑しい男がいて、女をいつも観察していました。女は昼寝をしたときから身重になって、赤い玉を産んだそうな、卑しい男は女に産んだ玉を所望し手に入れました。男はいつもこの玉を包んで腰につるしていました。

ある日、この男は谷間にある田んぼに、農夫の食べ物を、一頭の牛の背に乗せて運んで谷間に入りました。そこで国王の子、天の日矛に出会いました。天の日矛は男に尋ねて「何だってお前は牛の背に食べ物を乗せて谷間には入るのだ、牛を殺して食うのではないか」

男を捕らえて牢屋に入れようとしました。「私は牛を殺そうとはしていません、ただ農夫に食事を運んでいるだけです。」でも許してもらえません。男は腰につけた玉を、天の日矛にゆずって、許しを請いました。男を許した日矛はその玉を持ち帰り、床のあたりに置いていますと、玉は美しい乙女となりました。日矛は、乙女と結婚し妻にしました。

妻は至れり尽くせり、天の日矛に献身していましたが、国王の子が高慢になって妻をののしるので、「私は耐えられません、あなたの妻になるような女では有りません、私の祖国に行きます」と、小船に乗ってと逃げ渡って来て、難波に住みました。これが播津の国の比売語曽の社に鎮座する阿加流比売とゆう神だそうです。垂仁、三年三月、新羅から天の日矛は妻を追って渡来、難波に行くが、入れられず但馬の国に住み、タジマノマタオの娘マエツミと結婚し、産んだ子がタジマモロスクである。天の日矛は、製鉄の技術を伝えたと言われています。真金吹く吉備、古代吉備の国は鉄の文化で栄えたといわれています。姫社神社は、鉄の神様として福谷の地に祭られています。また、鬼の城は朝鮮式山城です。

高梁川をへだてて東にあります。朝鮮半島と日本列島、民族と文化の交流は古代より、寄せては返す潮のように、続いていたのです。

岡山県赤磐市の備前一の宮・石上布都魂神社には、『日本書紀』の伝承にある、素戔嗚命が八岐大蛇を斬ったとされる十握剣が上古の時代にあったとされます。奈良天理の物部氏の本拠地・石上神宮の元宮とされていますが、5年前の秋、当時の宮司の許可を得て、山頂の元宮で、三段の八足台に献饌をして、祭りを開催しました。この時の趣旨は、剣に斬られた出雲原始族＝八岐大蛇の慰霊と説明され、祭りを執行しました。趣旨の説明は、歴史的考証とは関係なく、失礼かもしれませんが、知人の無学の卓越した霊能透視の力を持つ者に審神者をさせたところ、『アメノヒボコ』と聞こえる、と教えられ、「ん？どう言うことなんだ？スサノオ とは関係なくアメノヒボコとは？」と感じ驚きました。この度の藤田さんの考察で布都御魂剣、物部氏、アメノヒボコの関係が少しわかりました。

岡山県総社市に秦と言う集落があります。厳密には、今の地図区間では、秦の北隣の部落になります。渡来系秦一族の集落があったところで、定住起源はおそくとも2世紀と言われています。ここの集団が当時最大の弥生式墳墓の岡山市と総社市と倉敷市の市境にある、楯築遺跡を建設したと言われています。総社市秦の氏神神社は、祭神かアメノヒボコの妃でした。この神社の創建は古く、秦氏が天日槍を奉斎していたのは間違いなく、また最初の定住もかなり古いです。秦氏と言うよりも、厳密にはこの総社市秦の地域に、一番古く定住した秦系集団と解釈すべきと思います。（FB情報、大浜 明文.　文責、藤田）

私は秦氏は5世紀初めの渡来のみと思い込んでいました。この秦一族と見なされる集団が楯築遺跡を建設したとのこと、纒向の箸墓古墳も造営にも参画したと思われますね。総社市秦の氏神神社の祭神はアメノヒボコ妃とのことアメノヒボコとこの秦氏は関連があるのですね。伽耶でもアメノヒボコと秦氏は密接な関係をもっていたのでしょうね。

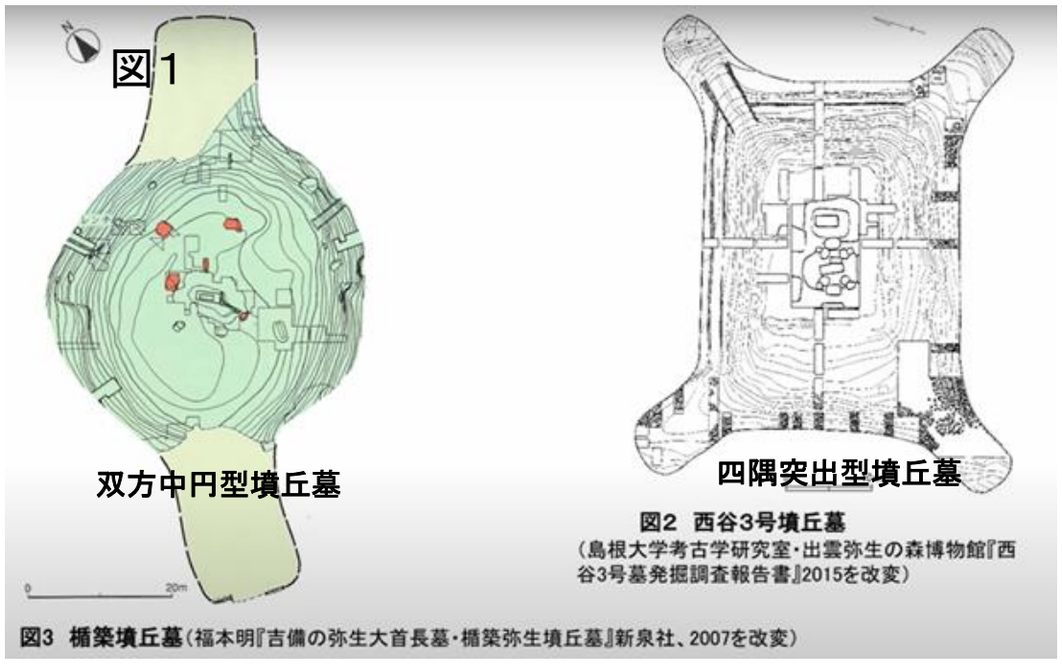
（追記）このアメノヒボコの一隊は、石見から三次経由で備後・新市（素戔嗚神社）に入り、吉備・総社に到達した、所謂スサノオルート（江の川から芦田川経由）を取ったものと考えている。

（藤田）

楯築古墳と西谷3号墳丘墓の比定

古代出雲文化シンポジウム「出雲と大和」基調講演「吉備から見た古墳出現期の出雲と大和」松木武彦
（https://youtu.be/9wrF9GaaRD8?t=367　）

広島県北部から山陰地方、および北陸地方では、大型弥生墳丘墓である四隅突出型弥生墳丘墓が盛んに造られた。四隅突出部の起源は、弥生時代中期後葉まで遡る。なかでも出雲市西谷3号墳弥生墳丘墓は、東西の辺約40メートル、南北の辺約30メートル、高さ約4.5メートルという大きなものもある。吉備の代表的な弥生墳丘墓は、倉敷市の大型の楯築弥生墳丘墓で墳丘の長さが80メートル・円丘の高さは約4.5メートルもあり、突出部には列石が2列に巡らされている。これらの大型弥生墳丘墓の誕生の地は広島県の三次と考えられ、出雲と吉備に拡がった。
出雲と吉備の大型墳丘墓（楯築古墳と西谷3号墳丘墓）は形状は大きく異なるが（図1）、埋葬施設は2重の木棺で底に水銀朱を敷くこと（図2）、副葬のあり方や特殊器台を供える（図3）等、著しい類似性が見られる。このことは、出雲の王と吉備の王は互いに密接な政治的連携をもっていたと考えられる。
（文責：藤田泰太郎）



吉備型甕と庄内式土器(1)　吉備型甕が庄内式土器になった！

吉備型甕　吉備で最初に出たから吉備型と名づけられているが、出土数が最も多い地域はこの西新町と纒向、大阪府西岩田の三ヶ所である。
この甕の重要性はまず3世紀の甕であること、纒向と博多をつなぐ土器であることである。
　つまり瀬戸内航路による3世紀の人の往来を語り、真ん中に吉備という重要な瀬戸内の拠点、中継地をはさむことが、邪馬台国連合が瀬戸内航路によって東西横並びの共栄圏だったことを示す遺物なのである。
　纒向で前方後円墳が始まるその直前の墳墓形態を持つ遺跡は吉備楯築であろうが、その直前となるとそれは福岡の平原(ひらばる)王墓遺跡だということになる。この流れは1．5～3世紀の流れであり、覆らない事実である。

孤文は吉備で様式化し、纒向へ移動する。しかしその源流は北西部甕棺氏族が大量に買い占めていたゴホウラガイの渦巻と巴型であろう。するとこれはちゃんと瀬戸内航路の物流でつなぐことができた。

方形周溝墓

　平原遺跡の王墓は方形周溝墓である。 日本最大の内行花文鏡を出した王都の方形周溝墓が畿内学者が言うように畿内発の墳墓様式だとするならば、それまでの西から東へと移動してきた文化がこのときはじめて東から西へと大きく動いたことになる。時代は2後半から3後半までのわずか100年間の出来事だ。方形周溝墓にはそれほどの重大な意味が含まれているのである。
（図説・西新町遺跡と吉備型甕と山陰・畿内式土器 邪馬台国論争、Net）

『史跡で読む日本の歴史２　古墳の時代』から

吉備型甕
三世紀の飯ごう

吉備型甕と庄内式土器(薄型)

吉備型甕が大和川河口周辺に多く、纒向に少ないことは吉備勢力が大挙して纒向に進出したことを示していませんし、吉備型甕と庄内式土器の間に、東播磨か淡路島の工人が八尾市に移住して吉備型甕と庄内式土器を製作した可能性もありえます。
（広畠輝治の邪馬台国吉備・狗奴国大和説、Net）

庄内式土器

昭和9年(1934)年頃、豊中市立庄内小学校の校舎を建設しているとき、建設現場から多くの土器が見つかった。良く見ると、これらの土器は、弥生時代の土器(弥生土器)にも古墳時代の土器(土師器)にも、少しずつ似た特徴を有している。そこで、専門家が長年にわたって研究した結果、弥生時代から古墳時代に移り変わる丁度中間期(弥生時代の終わり頃)の土器であることが判明し、昭和40年(1965)に発見場所にちなんで、田中琢が「庄内式土器」と命名した。
　橿考研の関川尚功(せきかわひさよし)氏によれば、庄内式土器は、それ以前の弥生土器と違って、甕の壁が薄く、煮沸したときの熱の通りが良い。弥生後期タイプの甕は大体4ミリから5ミリぐらいの厚さだが、庄内式あるいはそれに続く布留式の甕になると、1．5ミリから2ミリぐらいの非常に薄い器壁になるという。また、庄内甕の特徴の一つに内面を削って薄くするという手法がある。これは、もともと畿内の弥生後期の甕にはみられなかったが、瀬戸内、日本海側の地域ではそれ以前から用いられていた手法だそうだ。
　庄内式土器は北九州ではかなり広い地域に分布しているのに対し、近畿地方では大阪府八尾市近辺と奈良県の天理市から櫻井市にかけての限られた地域にしか分布しないのが特長である。そのため、近畿の土器に吉備の土器が影響して出来たとする説や、逆に、庄内式土器が九州から近畿地方にもたらされたとする考える方もある。
（橿原日記、Net）

庄内式土器（東博平成館考古展示室展示品）

吉備型甕と庄内式土器（2）

薄作りの庄内式土器は、吉備⇒河内⇒天理と伝搬していき、さらに全国各地に拡がった。庄内式土器は邪馬台国の卑弥呼の時代の標識土器.

特殊器台と庄内式土器

吉備特殊器台が発見された場所（エリア）といえば「吉備・出雲・纒向」だが、それ以外にとても重要な場所で発見されている、それは河内（八尾）である。この八尾の地も物部の本拠地とされている。その八尾市域から特殊器台が東郷遺跡（向木見型）、萱振遺跡〔かやふり〕・小阪合〔こざかあい〕遺跡から（宮山型）と出土している。河内平野（特に八尾市域）は当時、北に河内湖、 それに注ぐ「小阪合分流路」「久宝寺分流路」と呼ばれる大河川があり、この河川の上流域は大和盆地南東部の巻向遺跡に繋がっており、河内平野では、これまでに特殊器台形埴輪を用いた古墳が無いため、これらの遺物は大和に運ぶ際に破損したため河内に残されたものと理解されている。

つまり物部氏が特殊器台を携えて吉備⇒河内⇒纒向と移動してきたと見えるがいかがだろうか？歴史著作家の関裕二氏がその著作『物部氏の正体』で物部＝吉備であると結論づけているが、それもこれも論拠の最大要点はこの部分だ。

さて右の写真は卑弥呼の時代の土器である。左から「吉備型甕」「庄内式土器」「布留式土器」で主な生産地は特殊器台と同じ”吉備⇒河内⇒天理”と考えてよい。これらは生活用具で調理に使用されたと思われるがその特徴が薄さで当時のハイテクであり、その技術が吉備⇒河内⇒天理と伝搬していった。さらにそれらは全国にひろがっていき各地で発見されることとなる。もちろん土器はどこでもつくられていたのだろうからそんな単純な関係ではないというご意見もあろうかとは思うが「へらけずり」による薄作りという点では技術が伝わったと考える。

（吉備　邪馬台国説、Net）

卑弥呼の時代の相対年代は庄内式期に相当する。（邪馬台国から大和政権へ、福永伸哉）

時代	弥生時代				古墳時代			
年代	AD1		190	260	400		500	600
時期	前期	中期 前葉 / 中葉 / 後葉	後期	終末期	前期	中期	後期	終末期
土器	第Ⅰ様式	第Ⅱ様式 / 第Ⅲ様式 / 第Ⅳ様式	第Ⅴ様式	庄内式	布留0式 / 布留1式 / 布留2式 / 布留3式	高蔵73型式 / 高蔵216型式 / 高蔵208型式 / 高蔵23型式 / 高蔵47型式	高蔵10型式 / 陶器山15型式 / 陶器山85型式	高蔵43型式 / 高蔵209型式 / 飛鳥様式

弥生時代・古墳時代の時期区分と暦年代

BC400

孝霊から開化（邪馬台国）

・**物部氏**の祖、ニギハヤヒはスサノオの嫡流で、その子孫は吉備で勢力を蓄える。
・ニギハヤヒはアメノヒボコと倭国大乱を引き起こした。
・ニギハヤヒと大国主は、卑弥呼を共立して倭国大乱を鎮め、邪馬台国（虚空見つ日本（倭）の国）を建てる。
・ニギハヤヒは孝霊天皇か？　吉備およびその南北に孝霊伝承。
・卑弥呼は、孝霊天皇皇女、倭迹迹日百襲姫命で、孝霊天皇の養女になったか。
・大国主との国造りに関わったスクナビコナの倭国大乱での死後、ニギハヤヒが現れる。ニギハヤヒと大物主（卑弥呼の夫？）は同一人物か。
・吉備型甕が発展した庄内型土器が卑弥呼の時代に纏向で使用される。吉備の弥生墳丘墓の特殊基台や弧帯文が纏向遺跡に見られる。
・卑弥呼（倭迹迹日百襲姫）と吉備津彦（桃太郎）とは姉弟！吉備と纏向は桃核の出土でもつながる。道教に繋がる卑弥呼の鬼道では桃核が祭祀に使われる。
・神武東征譚の主要部分は崇神東征と思われる。イワレビコは、ニギハヤヒを奉じるナガスネヒコを倒し、ヤマト王権を建てる。
・スサノオが大国主（八岐大蛇）を殺した布都御魂剣は出雲から吉備（石上布都魂神社）に移され、ニギハヤヒの東征で大和に持ち込まれ石上神宮に納められた。
（藤田、走り書き）

ニギハヤヒーWikipedia抜粋

ニギハヤヒノミコトは、日本神話に登場する神。『日本書紀』では饒速日命、『古事記』では邇藝速日命と表記する。別名、櫛玉命（くしたまのみこと）。天照国照彦火明櫛玉饒速日命ともされる。物部氏、穂積氏、熊野国造らの祖神と伝わる。

『古事記』では、神武天皇の神武東征において大和地方の豪族であるナガスネヒコが奉じる神として登場する。ナガスネヒコの妹のトミヤスビメ（登美夜須毘売、『日本書紀』では三炊屋媛という）を妻とし、トミヤスビメとの間にウマシマジノミコト（宇摩志麻遅命）をもうけた。ウマシマジノミコトは、物部連、穂積臣、采女臣の祖とされている。イワレビコ（後の神武天皇）が東征し、それに抵抗したナガスネヒコが敗れた後、イワレビコがアマテラスの子孫であることを知り、イワレビコのもとに下った。

『日本書紀』などの記述によれば、神武東征に先立ち、アマテラスから十種の神宝を授かり天磐船に乗って河内国（大阪府交野市）の河上の地に天降り、その後大和国（奈良県）に移ったとされている。これらは、ニニギの天孫降臨説話とは別系統の説話と考えられる。また、有力な氏族、特に祭祀を司る物部氏の祖神とされていること、神武天皇より先に大和に鎮座していることが神話に明記されていることなど、ニギハヤヒの存在には多くの重要な問題が含まれている。大和地方に神武天皇の前に出雲系の王権が存在したことを示すとする説や、大和地方に存在した何らかの勢力と物部氏に結びつきがあったとする説などもある。

『先代旧事本紀』では、「天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊」（あまてる くにてるひこ あまのほあかり くしたま にぎはやひ の みこと）といいアメノオシホミミの子でニニギの兄である天火明命（アメノホアカリ）と同一の神であるとしている。

『新撰姓氏録』ではニギハヤヒは、天神（高天原出身、皇統ではない）、天火明命（アメノホアカリ）は天孫（天照大神の系）とし両者を別とする。

神武東征譚の主要部分は、崇神東征譚と考える。従って、邪馬台国の終焉時に崇神が東征したときニギハヤヒは既に邪馬台国の統治者であった。（藤田）

孝霊天皇＝ニギハヤヒ

ニギハヤヒと伝わる肖像（秋田県唐松神社）

第7代孝霊天皇

ニギハヤヒは天神で天孫ではない

『新撰姓氏録』ではニギハヤヒは、天神（高天原出身、皇統ではない）、天火明命（アメノホアカリ）は天孫（天照大神の系）とし両者を別とする。『先代旧事本紀』には、ニギハヤヒは「天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊」（あまてるくにてるひこあまのほあかりくしたまにぎはやひのみこと）と称し、天之忍穂耳命（アメノオシホミミ）の子で瓊瓊杵（ニニギ）の兄である天火明命（アメノホアカリ）と同一の神であるとしている。また、『先代旧事本紀』では、ニギハヤヒ（天火明）の二代目は天香語山で、三代目は天村雲となっているが、『記紀』では、初代が神武（ニニギやアメノホアカリと同世代と考える）で2代と3代が綏靖と安寧となり葛城の古族の多氏の系譜となっている。天孫の天火明は丹後に降臨したので、ニギハヤヒとは活動域が一致せず不可解である。『先代旧事本紀』が、ニギハヤヒと天火明の系譜を一致させるために詐称したと考えると納得できる。ちなみに、ニギハヤヒは天津彦根命の後裔との説がある（古代氏族の研究⑧、宝賀）。

ニギハヤヒは大山祇神（三嶋大神）の娘、神大市比売と素戔嗚（スサノオ）との御子の大歳と考える説がある。紀元前後、スサノオとニギハヤヒ（イソタケルあるいは大歳）は、布都御魂剣（十握剣）で八岐大蛇（大国主）を退治した。この布都御魂剣は吉備に渡り、石上布都魂神社に納められた。ニギハヤヒも出雲から吉備に遷り、吉備と筑前で力を蓄えた。ニギハヤヒには息子の天香語山（母は天道日女）がいた。2世紀半ばニギハヤヒとその子天香語山は布都御魂剣を掲げ、瀬戸内海の大山祇神勢力とアメノヒボコの軍団を伴い吉備より東征し、大和に邪馬台国（虚空見つ日本の国)を建てた。その後、布都御魂剣は崇神天皇の御代に物部氏の総氏神である大和国石上神宮へ移された。尚、ニギハヤヒとは世襲名か。
（藤田泰太郎）

ニギハヤヒの東征と倭国大乱

弥生時代後期、日本海から関門海峡を通り瀬戸内海に入るルートは、政治的あるいは航行上の問題の故に閉ざされていたように思える。従って、朝鮮半島から邪馬台国に行くルートも日本海経由となっていた。また、筑前を根拠地とするスサノオやニギハヤヒ（アメノヒボコも）が吉備に出るには、石見の江の川を遡り三次に行き、さらに芦田川上流から備後・新市に至り、古山陽道を辿り備中・備前達する、所謂スサノオルートをとった可能性がある。

倭国大乱（主としてWikipedia）
『後漢書』東夷伝に、107年、倭国王帥升が後漢へ使者を出したとあるが、帥升以前に倭国王の存在が史書に見えないことから、中国王朝が公認した初の倭国王は帥升だった。（帥升はスサノオあるいはその後継ではないかとの説がある）。
『後漢書』は、桓帝・霊帝の間（146年 – 189年）に大乱が起こったとしている。大乱の原因としてまず想定されるのは、倭国王位の承継をめぐる争いである。弥生時代の倭国は、多くの政治勢力（国）に分かれており、倭国王は政治勢力間の利害を調整するために置かれていたと推定される。しかし、利害調整を担いうる人物の不在あるいは調整不可能な程の利害対立の発生などにより、倭国王位をめぐる大乱が生じたのではないかと考えられている。『後漢書』の「何年も王がいない状態が続いた」とする記述は、上記の議論を裏付けている。大乱の原因としては、2世紀後半より始まった地球規模の寒冷化の影響を受けた土地収奪争いにあったとする説がある。（後漢の滅亡と気候の寒冷化が高句麗の南下を引き起こし、アメノヒボコなどの南朝鮮の倭人の一部が来倭したか）『新羅本記』に、193年、「六月倭人大饑。来求食者千余人」と記されており、日本から朝鮮半島へ1千余人が渡ったとされる。いずれにせよ、2世紀後半から3世紀にかけて、近畿から瀬戸内一帯までの広域に出現した高地性集落が「倭国大乱」とどう関連するかが、大乱の性格を知る上では重要となると見られる。また、弥生系渡来集団が九州から畿内への拡大過程で各地に先住していた縄文系在来集団との間で摩擦、すなわち倭国大乱が起き、渡来系集団は在来集団の居る各地で防御のための環濠集落や高地性集落を作ったとの説（卑弥呼の国：冨川光雄など）もある。この説によれば、弥生系渡来集団が近畿地方にまで到達した際に両集団が協定して倭国連合政権を作り、卑弥呼邪馬台国女王をその連合政権の王に推戴して倭国大乱は治まったとする。

関連性
・西日本で2世紀前半から中頃に高地性集落が激増
・『播磨の国風土記』神前郡の条、大汝命（オオナムチ）と小比古尼命（スクナビコナ）との諍い。
『伊予国風土記』両者の激しい争い。
・『播磨国風土記』飾磨郡の条、オオクニヌシとホアカリとの抗争
・『播磨の国風土記』別条、オオクニヌシとアメノヒボコの壮絶な戦い
・『播磨の国風土記』神前郡の条、伊和大王（オオクニヌシか）とアメノヒボコとの戦い

饒速日尊が賛じた「虚空(そら)にみつ日本(やまと)の国『日本書紀』）」が邪馬台国に当たる。

ニギハヤヒ東征

『先代旧事本紀』では、神武東征の前に、ニギハヤヒは天照大神から詔と十種の瑞宝を授けられ、天磐船に乗って、三十二人の防衛、五部人、五部造、天物部等二十五部人、船長という多数の随伴者を従えて、河内国河上哮（いかるが）峰に天降った。その後大倭国の鳥見白庭山に遷ったという。

「石切劔箭神社」の社史によれば、天照大神から大和建国の神勅を拝し『十種の瑞宝』を授かった饒速日尊が船団を組み、自らも『布都御魂劔』と日の御子の証である『天羽々矢』を携え天磐船に乗り込み、物部八十の大船団を率いて高天原を出航した。途中、豊前国の宇佐に寄港すると船団を二つに分け、息子の天香具山命に『布都御魂劔』を授け船団の一方を預けた。宇佐から瀬戸内海を渡ると饒速日尊は河内・大和に、一方の天香具山命は紀伊に向かった。天磐船が鳥見の里を見渡す哮ヶ峯（たけるがみね『生駒山』）に着くと、饒速日尊は辺りを見渡し「虚空(そら)にみつ日本(やまと)国）」【訳「 空から見た日本の国」または「空に光り輝く日本の国」】と賛じた。これが日本の国号の始まりとなった『日本書紀』。
（Wikipedia 抜粋）
饒速日尊が賛じた「虚空(そら)にみつ日本(やまと)国）」『日本書紀』が邪馬台国に当たる。

ニギハヤヒは吉備を本拠地とし、宗像や豊国を含む瀬戸内海一帯に勢力を及ぼしていた。東征では吉備を中心とする瀬戸内海一帯からの軍勢に但馬からのアメノヒボコの加勢を得て、河内に向かったと思われる。これが、倭国大乱の引き金になったか。
ニギハヤヒが東征で携えた、『布都御魂劔』は、スサノオがヤマタノオロチ（大国主）を退治した時の十握剣であり、『天羽々矢』は天稚彦（あめわかひこ）を葦原中国に下す際に、天鹿児弓（あめのかごゆみ）と共に天稚彦に与えた矢である。また、『十種の瑞宝』は、アメノヒボコが来倭したときに持ち込んだ新羅からの将来物で、饒速日に預けたと考える（藤田）

ニギハヤヒ東征と邪馬台国の建国

ニギハヤヒ（その子孫）は瀬戸内海の中核の吉備からアメノヒボコを伴い邪馬台国（虚空見つ日本（倭）国）の始祖として大和に入った。このニギハヤヒの東征は倭国大乱の2世紀後半のことと考えており、孝霊天皇と同じ時代である。ニギハヤヒ、和邇氏と大国主が卑弥呼を共立して邪馬台国を建てた。卑弥呼と孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命は同一人格であろう。ニギハヤヒたる孝霊天皇が卑弥呼を養女にして、倭迹迹日百襲姫命と称させたのではないか。尚、孝霊天皇は、大吉備国、吉備平定、孝霊伝承など、吉備との結びつきが極めて強い天皇である。

孝霊天皇と吉備との深い繋がり

孝霊伝承－中山神社－楽楽森彦 、Net

【孝霊伝承】

孝霊伝承と云われる一群の伝承群がある。『記紀』が記す第七代孝霊天皇、もしくはその皇子を主人公とした伝承たちで、吉備国から南北に延ばした線上に沿って分布している。吉備三カ国（備前・備中・備後）の一の宮、およびそれにまつわる伝説は除き、その他のものを北から南へと拾ってゆく。

（1）鳥取県大山町：孝霊山、高杉神社

孝霊山の名の由来は、孝霊天皇が行幸したからと云われているが、別に高麗山(右下)とも表され、所在する村の旧名は高麗村である。その山麓の高杉神社は孝霊天皇を祀る。

（2）鳥取県溝口町：楽楽福神社（ささふくじんじゃ）

隣の日南町にも、東楽楽福神社、西楽楽福神社があり、いずれも孝霊天皇を祀る。孝霊天皇が（もしくは、その皇子の鶯王と共に）鬼を退治したと云う伝説を伝えている。鬼住山（きずみやま）と云う山に鬼が住み人々を苦しめたので、天皇は、その山よりも高い笹苞山（ささつとさん）で笹の葉を刈って積み上げると、風が吹いて来て笹の葉を吹き飛ばし、鬼住山の鬼たちの所へ飛んで行き、鬼にまとわりついたので、その隙に鬼を斬ったと云う。誠にお伽噺よりも他愛ない話である。

（3）広島県府中市：南宮神社

孝霊天皇と吉備津彦を祀る。備後一の宮の吉備津神社は隣の新市町にある。

（4）香川県高松市鬼無町：桃太郎神社（旧名は熊野神社）

孝霊天皇の皇子の稚武彦が本津川で洗濯をしていた娘に一目惚れして、その婿となり、女木島に住んでいた鬼を退治したと云う伝説を伝えている。

（5）香川県高松市一宮町：一宮寺、田村神社

四国八十八か所第八十三番一宮寺（いちのみやじ）は、隣接する田村神社の別当寺である。本堂の脇にある三基の宝塔は孝霊天皇・倭迹々日百襲姫、吉備津彦の供養塔と伝えられ、一宮御陵と呼ばれている。田村神社は讃岐国の一の宮で、祭神は初めは猿田彦命であったが、いつの頃からか、倭迹々日百襲姫命、五十狭芹彦命（吉備津彦命）、天五十田根（あめのいたね）命、天隠山（あめのかくりやま）命を加えて五柱としている。

この他にも、愛媛県越智郡の河野氏（越智氏）が物部系と伝えられる一方で、孝霊天皇の第三皇子伊予皇子（『記紀』にはなし）の末裔であると云う伝えを持っていることなども、孝霊伝説の一端に数えられる。

【美作国中山神社】

このように、吉備国を中心として、その南北に分布している孝霊伝承のうち、南の四国の方のものは、単なる文化の伝播のようにも見られるが、北の方に分布しているものについては、一概にそう云い切ることが出来ないように思われる。そこで、美作国の一の宮、岡山県津山市一宮の中山神社のことを少し考えておく。美作国は和銅六年備前国の六郡割いて置かれたものであるが、その国の一の宮中山神社の祭神は、吉備三カ国の場合とは異なり、鏡作神・石凝姥神・天糠戸神であり、鍛冶、採鉱の守護神とされている。（ただし、『大日本史』は備中の吉備津神社と同神と述べている）。中世には中山大明神、または南宮とも称せられた。地主神の大己貴命が中山神（鏡作神）にこの地を譲って、自らは祝木（いぼき）神社に退いたと云う伝承を持ち、また、神社の奥の長良嶽の磐座にある猿神社には、『今昔物語』（巻26第7）が伝える猿神伝説がある。これは、毎年美しい娘を生け贄に要求する老猿を猟師が退治する話で、伝説の豪傑岩見重太郎の狒狒（ひひ）退治の話とよく似たものである。

（つづき）

美作国は備前国の六郡を割いたものであるから、本来ならば、備前国と同じ神を祀るべきであるのに、そうしなかったのは何故か。美作分国は吉備の国の勢力を削減するための措置であるから、分立した美作からは吉備の影を少しでも薄めたかったためであることは想像に難くない。しかし、それにしても何故、鏡作神や石凝姥神なのか。それは、云うまでもなく、美作地域における製鉄を意識して、金属冶金に関わる神を持ってきたのである。この社が南宮と呼ばれたこともあると云うことは、製鉄神金山彦を祀る美濃の南宮神社との関連も思わせる。しかも、本来の地主神である大己貴神（大国主神）が、その地を譲ったと伝えることは、換言すれば、この地方における製鉄はもともと出雲の勢力下で行われていたが、新しく侵出してきた勢力、すなわち吉備の勢力によって、それを奪われたと云うことである。

そしてそこに猿が関わる。桃太郎の三人の家来、イヌ・サル・キジのうち、サルは楽楽森彦（ささもりひこ）をモデルにしたものと云われる。このことと結び付けると、この地方の製鉄を出雲から奪い取った吉備の勢力とは楽楽森彦に代表される勢力だったとも考えられる。

【楽楽福神社】

楽楽福神社なるものは、鳥取県西部を南北に流れる日野川に沿って分布している。日野川は砂鉄の採れる川である。製鉄民と農耕民との紛争の話であるとされる八俣大蛇伝説を伝える記の「肥の川」、紀の「簸の川」は、島根県の斐伊川ではなく、鳥取県のこの日野川である可能性もある。

楽楽福神社にまつわる「鬼」なるものも製鉄民のことで、この伝承も同様に製鉄民と農耕民との紛争であるとの説をなす人もいる。その説によると、「ささ」は砂鉄のことであり、「ふく」は製鉄炉への送風の意味であると云う。私もこの説に概ねは賛同してもよいように思うが、ただ、「ささ」を砂鉄のこととするのは如何かと思う。砂を「いさご」、細かい砂を「まさご」（真砂）と云うから、「ささ」は砂鉄ではなく、単なる「砂」の意味であろう。しかし、砂鉄には「真砂（まさ）」と「赤目（あかめ）」の二種類があり、山陽側で採れる砂鉄が赤鉄鉱、褐鉄鉱を含んで「赤目」と呼ばれるのに対して、山陰側は磁鉄鉱のみからなる良質なもので「真砂」と呼ばれていたので、「ささ」にも副次的に「砂鉄」の意味があると見てもよいのかも知れない。

いずれにもせよ、「楽楽福」の意味を、このように製鉄に関するものと解釈すると、次に考えられるのが楽楽森彦との関係である。「楽楽福」と「楽楽森」の類似は単なる偶然だろうか。先の中山神社の場合と同様に、この日野川の製鉄も楽楽森彦に代表される吉備の勢力によって、出雲から奪われたのであろう。そう考えると、楽楽福神社にまつわる鬼退治の話は、製鉄民と農耕民との紛争ではなく、砂鉄資源を奪い合う出雲と吉備の紛争であると考えることが出来るのである.

孝霊伝承

神崎神社（鳥取県北栄町、倉吉市となり）

神社の主催神はイザナキノミコトとイザナミノミコト。孝霊天皇の皇子がこの地に祭った。

ヤマトタケルの舟は嵐に襲われたが、神の加護で神社の北西の方に引き寄せられるように着いた。

1. 孝霊伝承と関係か
2. 出雲神宝事件との関わりは

吉備三国（備前、備中、備後）の一宮（祭神：孝霊天皇の皇子と皇女）

吉備津彦神社は、岡山県岡山市北区一宮にある神社。備前国一宮。

主祭神

大吉備津彦命、第7代孝霊天皇の皇子。
崇神天皇10年、四道将軍の一人として山陽道に派遣され、若日子建吉備津彦命と協力して吉備を平定した。

相殿神

吉備津彦命（若日子建吉備津彦命）
孝霊天皇 - 大吉備津彦命の父
孝元天皇 - 第8代天皇、大吉備津彦命の兄弟
開化天皇、崇神天皇
彦刺肩別命- 大吉備津彦命の兄
天足彦国押人命- 第5代孝昭天皇の子
大倭迹々日百襲比売命- 大吉備津彦命の姉
大倭迹々日稚屋比売命- 大吉備津彦命の妹
金山彦大神
大山咋大神

吉備の中山

境内後方に立つ吉備の中山には多くの古墳や古代祭祀遺跡が残り、古くより神体山としての信仰がなされていたと考えられている。最高峰の北峰・竜王山（標高175m）山頂には吉備津彦神社の元宮磐座や摂末社の龍神社が鎮座し、中央の茶臼山（160m）山頂には大吉備津彦命の墓とされる古墳が残っている。
（Wikipedia抜粋）

神体山とする吉備の中山西方向より
左が竜王山、右が茶臼山

境　内

吉備津神社は、岡山県岡山市北区吉備津にある神社。備中国一宮。

主祭神

大吉備津彦命、第7代孝霊天皇の第三皇子

相殿神

御友別命- 大吉備津彦命の子孫
千々速比売命- 大吉備津彦命の姉
倭迹迹日百襲姫命 - 大吉備津彦命の姉
日子刺肩別命 - 大吉備津彦命の兄
倭迹迹日稚屋媛命- 大吉備津彦命の妹、
彦寤間命- 大吉備津彦命の弟、
若日子建吉備津日子命- 大吉備津彦命の弟。

概要

岡山市西部、備前国と備中国の境の吉備の中山（標高175m）の北西麓に北面して鎮座する。吉備の中山は古来神体山とされ、北東麓には備前国一宮・吉備津彦神社が鎮座する。当社と吉備津彦神社とも、主祭神に、当地を治めたとされる大吉備津彦命を祀り、命の一族を配祀する。
本来は吉備国の総鎮守であったが、吉備国の三国への分割により備中国の一宮とされ、分霊が備前国・備後国の一宮（備前：吉備津彦神社、備後：吉備津神社）となったとされる。この事から備中の吉備津神社は「吉備総鎮守」「三備一宮」を名乗る。
（Wikipedia抜粋）

本殿と拝殿（国宝）

吉備津神社は、広島県福山市新市町宮内にある神社。備後国一宮。地元では「一宮さん（いっきゅうさん）」と通称される。備後国一宮は素盞嗚神社(福山市新市町戸手) ともされる。

主祭神

大吉備津彦命、第7代孝霊天皇の第三皇子

相殿神

大日本根子彦太瓊命- 第7代孝霊天皇
細比売命- 孝霊天皇皇后
（大吉備津彦命の生母ではない）
稚武吉備津彦命- 大吉備津彦命の弟
祭神は、吉備分国に関連して備中国一宮の吉備津神社から分祀されたことに由来する。

概要

福山市北西部、府中市との境に鎮座し備後国の総鎮守とされている。近くの府中市は備後国の国府のあった地とされるように、周辺は備後国の中心地であった。
備後国分立以前の吉備国を治めたとされる大吉備津彦命を主祭神に祀り、命の関係一族を配祀する。
（Wikipedia抜粋）

本殿（国の重要文化財）

『古事記』の記述では、孝霊朝に吉備津彦を派遣し吉備の反乱を制圧したとある。吉備の物部が倭国大乱制圧や邪馬台国樹立に武力を割き、吉備の防備が手薄となったところに、出雲勢力が南下し鉄資源を奪った。吉備津彦がこの出雲勢力を制圧し、鉄資源を奪い返したのが「桃太郎伝説」のもとになったのではないか。出雲勢力放逐後、吉備津彦（大吉備津彦）が吉備国を治めた。806年（大同元年）、吉備国が三国（備前、備中、備後）に分割されたが、これら三国の一宮（吉備津彦神社、吉備津神社、吉備津神社）の主祭神は大吉備津彦（吉備津彦）で、相殿神に吉備津彦の父の孝霊天皇（饒速日か）と姉の倭迹迹日百襲姫命（卑弥呼か）の御名がある。これらの吉備三国の一宮の祭神からも、邪馬台国は吉備が拡大・東遷したものと納得できる。（藤田）

讃岐の国一宮の田村神社の祭神は、倭迹迹日百襲姫命と吉備津彦

（讃岐と吉備さらに孝霊天皇との繋がりを示唆する）

田村神社（讃岐国一宮、式内社（名神大社）、高松市一宮町）

社殿創建前は井戸の上に神が祀られていたという社伝から、元々は当地の水神（龍神）であったとする説もある。朝廷の当社に対する信仰は篤く、平安時代には度々神階の授与が行われている。

祭神は以下の5柱、「田村大神」と総称

倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）
五十狭芹彦命（いさせりひこのみこと）（＝吉備津彦命）
猿田彦大神（さるたひこのおおかみ）
天隠山命（あめのかぐやまのみこと）（＝高倉下命）
天五田根命（あめのいたねのみこと）（＝ -天村雲命）

・倭迹迹日百襲姫命は孝霊天皇の皇女である。孝霊天皇御代、五十狭芹彦命と西海鎮定の命を奉じて讃岐國に下り農業殖産の開祖神となった。御陵(昼は人が造り夜は大和国城上郡大市村（奈良県桜井市箸中）にある。

・五十狭芹彦命は倭迹迹日百襲姫命の弟に当たり、四道将軍の一人で西海を鎮定し吉備国の祖神となった。

・猿田彦大神は皇孫瓊瓊杵尊降臨のとき天の八衢に出迎えて先導を申し出、道途の安全を守護した神でこの神の向かうところはいかなる禍神も恐れて避け奉ったといわれ方除神として神威まことに偉大である。

・天隠山命は皇祖神武天皇の御東征の際、窮地を救った神で後に御子天五田根命と共に紀伊国より当国に渡り山河をもって国郡の境界を分つなど開拓水利の基を定めた。

（Wikipedia抜粋）

卑弥呼（倭迹迹日百襲姫命）は琵琶湖や奈良湖に縁があるので、水神として祀られたのか。また、祭神の天隠山命と天五田根命 はそれぞれ饒速日の御子と御孫 であり、饒速日（＝孝霊天皇）は2人を連れ東征し、邪馬台国を建てた。（藤田）

（田村神社本社拝殿、Wikipedia抜粋）

『古事記』によると、孝霊朝に吉備津彦は西海道を抑えたとある。吉備津彦は姉の卑弥呼と共に大和から讃岐に向かい、田村神社に至った。その後、吉備に向かい温羅 を征伐した。

大和から讃岐の田村神社への予想ルート

奈良県磯城郡田原本町黒田　庵戸神社（廬戸神社、孝霊神社）➡大和川を下って堺の港から船を出し、明石海峡を越えて、途中、淡路島に立ち寄り、東かがわ市引田の安戸池➡香川県かがわ市引田 安戸池 ➡安堵の浦 安戸池から海上を香川県東かがわ市の馬篠まで行き、艚掛神社で一休み、艚を松に立てかけた ➡艚掛神社辺りから陸路を歩く。途中、小磯の袖掛神社で暑くてたまらず袖を切り離した ➡袖掛神社から豊かな水源を求めて水主神社へ向かった。百襲姫は奈良から東かがわ市の安戸池 に辿り着き、水主神社で水路を開き、弥生米を与え米作りに尽力した。その後、高松市の香川町の船岡山から田村神社へと移り、弟の 吉備津彦 を助け 吉備の温羅 を征伐した。その際の話しが、桃太郎伝説として残っているのかもしれない。

（卑弥呼説のある奈良の箸墓古墳に眠る倭迹迹日百襲姫(やまとととひももそひめ) は幼少期、香川県東かがわ市に住んでいた！ 奈良県から東かがわ市までの予想ルートは？ | BIZCONSUL OFFICE）

阿波はニギハヤヒの東征を支援し、邪馬台国の建国に寄与した。また、大和・葛城・紀伊・阿波は、吉備・播磨・摂津・河内・大和とならび邪馬台国の中軸であろう。

阿波（芝原八幡神社と天佐自能和氣神社）

芝原八幡神社徳島市国府町芝原宮の本15-2
国府町芝原（黒田）の地は第6代孝安天皇暦102年（紀元前291年）に、第7代孝霊天皇により遷都されたと伝わる黒田庵戸の宮の推定地。
芝原（黒田）八幡神社は「大倭根子日子賦斗邇命（おおやまとねこひこふとにのすめらみこと）」こと、「孝霊天皇」がもともと祭祀されておりました。後に八幡神社に置き換えられたので、現在ではほとんど知る人は少なくなってしまった。

（awa-otoko’s blog）

天佐自能和氣神社（式内社、徳島市不動東町４宮西569-1）
御祭神：神皇産霊尊、 高皇産霊尊、**日子刺肩別尊**、
意冨夜麻登玖邇阿禮比賣命（倭国香媛）
意冨夜麻登玖邇阿禮比賣命は、孝霊天皇の第三夫人であり、日子刺肩別尊（『古事記』のみ）は、その第二子。高志之利波臣・豊前之国前臣・五百原君・角鹿海直の祖とされている。ちなみに、第一子は、大物主命の妻となった夜麻登々母々曾毘売命（倭迹迹日百襲姫命）。第三子は、四道将軍の一人・大吉備津彦命（彦五十狭芹彦命）。もとは、日子刺肩別尊一柱であったが、その母にあたる意冨夜麻登玖邇阿禮比賣命（紀）または倭国香媛（記）も合せ祀り、さらに、二柱を後世に加えたと考えられている。
神紋は、『式内社調査報告』には、菊紋とあり、境内の石碑にも菊紋が付いていたが、拝殿には鷹羽紋があった。

（玄松子、Net）

萩原墳墓群（はぎわらふんぼぐん）は、徳島県鳴門市大麻町萩原にある弥生時代終末期にあたる3世紀前葉の遺跡である。鳴門市の大麻山南麓に位置し、1～4号の4基からなる墳丘墓群で、かつては最初期の古墳の可能性から「-号墳」の呼称が用いられたこともあったが、その後の調査によって弥生時代終末期の3世紀前葉に築造されたと推定されているため、「-号墓」の呼称に修正されている。
石囲いの木槨とされる主体部（埋葬施設）構造の類似などから、現在では定型化以前の前方後円形墳墓（纒向型前方後円墳）とされるホケノ山古墳（奈良県桜井市）の原型との説がある。
（Wikipedia抜粋）

孝霊天皇の宮は黒田廬戸宮（くろだのいおどのみや）されており、孝霊天皇以前の天皇の宮が山裾にあったのと異なり大和盆地の中央部（磯城郡田原本町黒田）に位置するようになる。邪馬台国阿波説の方は、徳島市国府町芝原黒田の地が、孝霊天皇が遷都されたと伝わる黒田廬戸の宮と考えているとのことである。私見では、孝霊天皇の時代に、吉備（備前、備中、備後）が拡大して美作、因幡、但馬、播磨、讃岐、阿波を含む大吉備になった。この大吉備がニギハヤヒ（孝霊天皇、物部氏の祖）の東征でさらに膨張して、近畿一円（近江の東北部を除く）を勢力下に置き、大和の纏向を国都とする邪馬台国が成立したと考えている。尚、阿波は吉備とともにニギハヤヒの東征の中核となったと思う。（阿波はニギハヤヒの東征と倭国大乱の際のニギハヤヒの物部軍団への鉄製武器の一大供給地（矢野遺跡など）となった。）このように、阿波は吉備と共に孝霊天皇との結びつきが強く、その皇子の日子刺肩別命の活躍の舞台の一つとなったと考える。かくて、吉備、阿波、讃岐には、吉備津彦や日子刺肩別命および彼らの姉の卑弥呼こと倭迹迹日百襲姫を祭神とする大社が多くみられるのだと思う。

吉野川など、阿波（徳島県）に大和（奈良県）の地理名が多いのは、大和⇒紀伊⇒阿波へと移住した者が多く、大和の地名を阿波にコピーされたためと思う。（藤田）

1号墓出土品　画文帯神獣鏡

藤田

饒速日（ニギハヤヒ）の東征で掲げられた、八岐大蛇を退治した布都御魂剣の変遷

石上神社（いしかみじんじゃ、島根県出雲市塩津町）の旧社名は『出雲国風土記』に記載されている宇美社（うみのやしろ、楯縫郡沼田郷）であると伝えられている。現在「宇美社」は、式内・宇美（うみ）神社として、当社（石上神社）から南に約６㎞離れた出雲市平田町に鎮座している。祭神は当社と同じ布都御魂命で、由緒には「社号「宇美」の起因は、祭神布都御魂神が出雲国にご来臨の際、海上より御上陸になったところからこの社号あり」と記されている。

スサノオを新羅（しらぎ）からの渡来神とする説は、水野祐氏（『古代の出雲』）をはじめとして多くの論者が指摘するところである。その論拠の一つとされているのが『日本書紀』神代第八段の一書第四の記載で、高天原で乱暴狼藉をはたらき追放されたスサノオは、息子の五十猛神（いそたける）とともに、新羅国の曽尸茂梨（そしもり）という所に舞い降りた。 ところがスサノオは、何を思ったのか「私はこのような地には住みたくない」と揚言して、埴土（赤土）で舟を造り、その舟に乗って東に向かい、出雲の斐伊川の川上の鳥上峰（とりかみのたけ）へ到ったというのだ。このとき、日本海を渡りやっとの思いで辿り着いた上陸地が、石上神社のある塩津浦付近であったのであろう。（古代日本正史、原田常治）　また、石見国の五十猛海岸（島根県大田市）にも、「スサノオが息子の五十猛命を連れて、朝鮮半島からの帰途、この地に上陸した」とする伝承が残されている。スサノオと五十猛神が塩津浦に上陸した後に住みやすい内陸部の宇美神社に移動したと考えられ、石上、宇美の両神社が、布都御魂命を祭神として祀っているのも不思議ではない。布都御魂命はご神体の布都御魂剣（ふつのみたまのつるぎ）が神格化した神とされ、一説には、スサノオが八岐大蛇を斬ったときの十握剣が、この布都御魂剣とも伝えられている。また、布都御魂を祀る大和の石上神宮は、スサノオの後（あと）のニギハヤヒを祖とする物部氏に関係の深い神社である。さらに、『出雲国風土記』には、塩津浦のある楯縫郡の郡司、主帳として物部臣氏の名を記されている。郡司は郡を治める地方官で、そのほとんどはそこに住んでいた地方豪族から選ばれていた。石上神社のある塩津浦、宇美神社のある平田町付近は、古代において物部氏の支配下にあったみてまちがいないだろう。
（III　石上神社－－－巨石巡礼III、Net）

石上神社

石上布都魂神社、拝殿

布都御魂（剣）の変遷・移動

石上神社（島根県出雲市）

↓

石上布都魂神社（岡山県赤磐市）

↓

石上神宮（奈良県天理市）

スサノオが新羅から出雲に渡来したとき、布都御魂剣をもたらした。このため、布都御魂命が出雲市の石上神社の祭神となった。**スサノオが八岐大蛇（大国主か）を布都御魂剣（十握剣）で殺した。この布都御魂剣は吉備に渡り、石上布都魂神社に納められた。その後、崇神天皇の御代に、布都御魂剣は、大和国石上神宮へ移された。**

石上神宮のみならず石上神社と石上布都魂神社にも、物部氏との関連がみられる。物部氏の祖はスサノオの後のニギハヤヒとされている。ニギハヤヒは出雲の出自で、吉備（筑前も）で力を蓄え、大和への東征に向かったのではないか。（藤田）

石上布都魂神社（いそかみふるのみたまじんじゃ、岡山県赤磐市石上、備前國一宮、旧郷社）祭神は、現在素盞嗚尊となっているが、明治までは、素盞嗚尊が八岐大蛇を斬った「布都御魂剣」に宿る「布都御魂命」であった。この剣は、『古事記』では、「十拳剣」、『日本書紀』には、「十握剣」「蛇の麁正」「韓鋤の剣」「天蠅斫」。「布都御魂」は、物を切断する「フツ」という音。「十拳剣」「十握剣」は、その長さ表わし、長剣であったことがわかる。「麁正」「韓鋤」は、半島からもたらされた剣。「天蠅斫」は、蛇を斬った剣の意味とされている。その剣で八岐大蛇を斬った時、その尾から叢雲剣が現われ、三種の神器となった。その後、布都御魂剣は、崇神天皇の御代に大和国石上神宮へ移されたことになっている。神主は物部の姓を名乗っている。（石上布都魂神社、Net、Wikipedia抜粋）

アメノヒボコと倭国大乱との軌跡

邪馬台国（ヤマト国）建国前夜

『後漢書』「東夷伝」によれば、「桓帝・霊帝の治世の間（146 - 189年）、倭国は大いに乱れ、互いに攻め合い、何年も主がいなかった。卑弥呼という名の一人の女子が有り、鬼神道を用いてよく衆を妖しく惑わした。ここに於いて共に王に立てた。」とある。『魏志倭人伝』には、「女王国ではもともと男子を王としていたが70～80年を経て倭国が相争う状況となった。争乱は長く続いたが、邪馬台国の一人の女子を王とすることで国中が服した。名を卑弥呼という。」とある。（男子を王とし70～80年間続いた国とは、『日本書紀』にある大己貴命（大国主）の建てた大己貴の国「玉牆の内つ国」であろう。）この争乱、所謂、倭国大乱は、地球規模で気候が寒冷化したことによる高句麗（扶余）の南下に起因する饒速日（ニギハヤヒ）の東征と天日槍（天日鉾、アメノヒボコ）の渡来により引き起こされた。この倭国大乱は、大和を中心とする本州中央部（中国・四国地方東部、近畿地方と中部地方西部）に広がった。

『古事記』ではアメノヒボコの話は応神天皇の段にあり、応神天皇の治積を述べるくだりで出現する。『日本書紀』の垂仁紀にアメノヒボコの渡来の記述がある。また、神功皇后はアメノヒボコの6世孫とする系図が掲載されている。このように『記紀』でのアメノヒボコの渡来の時期の記載には矛盾がある。（アメノヒボコとは複数の人格をさす世襲名で、倭国大乱時に渡来してきたアメノヒボコが主役と考える。）『但馬風土記』には次のように書かれている。アメノヒボコは、第4代新羅王の脱解王（尼師今）（昔脱解）の4世孫（8代王の阿達羅王）の王子で、天太耳命(第5代孝昭天皇御代)の娘、麻多烏（またお）と婚姻したとある（FB情報、西賀真紀）。さらに、高祖神社宮司家の『上原・殿上家系図』（新羅王家の系図）（FB情報、川岡保）によると、8代日桙（天日桙、アメノヒボコ）は、垂仁朝の清日古（清彦、但馬国）の4世祖で、仲哀朝の五十跡手（伊都国）の6世祖とある。さらに、『三国遺事』には、阿達羅王（在位154-184年）四年（157年）の延烏郎と細烏女の説話に現れる。それによれば、日月の精である延烏郎・細烏女夫婦が日本へ渡ったため日月が光を失い、王が使いを寄越したが、延烏郎は日本で王（但馬の国王か）として迎えられているのを天命として帰国を拒み、代わりに細烏女の織った綃（絹の織物）を与え、それで天を祭ったところ日月が元に戻った事から、天を祭った所を迎日県または都祈野と呼んだのだという。ちなみにこの説話は158年の皆既日食のことを記述していると思われる。この時の日食帯は伽耶・新羅・出雲・吉備を横切った。『古事記』の岩屋戸隠れの伝説はこの皆既日食を反映しており、高天原は伽耶あるいは出雲・吉備と考えられたのではないか。

天孫族(伽耶族)の系譜(FB藤田泰太郎タイムラインの2/17の投稿）に示すように、天孫である瓊瓊杵尊や彦火明命の降臨の時期は紀元1世紀半ばである。神武～安寧(1-3)は、葛城多氏王権で浦安の国（近江）の支国、懿徳～孝安(4-6)は葛城王朝で近江の伊勢遺跡を都とする大国主（大己貴）の玉牆の内つ国の支国で、孝霊～開化(7-9)が大和の纏向遺跡を都とする邪馬台国に当たる。これらの国々は崇神王朝に始まるヤマト王権以前の前ヤマト王権の国々である。ニニギの降臨（神武即位）は1世紀半ばと考えられ、宝賀・貝田推論に基づくと崇神即位は315年となる。従って、懿徳即位は2世紀初めで、孝霊即位は2世紀末と類推される。アメノヒボコ（延烏郎）の渡来は157年（倭国大乱初期）とされ、また『但馬風土記』によるとアメノヒボコは天太耳命（孝昭天皇御代）の娘麻多烏（またお）と婚姻したとあるので、孝昭朝あるいは孝安朝に渡来したことになる。このアメノヒボコの渡来の時期の2世紀半ば過ぎ(157年)は、『日本書紀』の「神功皇后はアメノヒボコの6世孫」、『上原・殿上家系図』の「アメノヒボコは垂仁朝の清日古（清彦、但馬国）の4世祖で、仲哀朝の五十跡手（伊都国）の6世祖」との記載とほぼ合致する。次に倭国大乱初期のアメノヒボコの渡来経路を考えてみる。アメノヒボコの渡来経路は、吉備・讃岐以西の瀬戸内海沿岸にアメノヒボコの渡来の痕跡がみられないことから、伽耶―但馬―播磨―淡路―大和―近江―若狭―但馬ではないかと思われる。

❶ 2世紀半ば吉備と出雲は砂鉄などの鉄資源をめぐる抗争していた。当時の出雲は意宇王のもとでの強固な政権のため吉備は出雲を制圧できず東（播磨）にその勢力を伸ばした。出雲の「富氏伝承」によれば、「アメノヒボコはまず出雲を攻めたが、追い立てられ、但馬に上陸した」とある。但馬に上陸したアメノヒボコは東進する吉備勢力と協働して播磨を南下したと思われる。尚、『播磨国風土記』には、アメノヒボコは伊和大神（大国主の別名）と土地を奪い合った神として描かれている。また、伽耶の鉄を但馬から播磨(姫路)に運ぶ鉄のルート（現在の播但道）を開き、その鉄を淡路島の五斗長垣内遺跡や舟木遺跡で倭国大乱の折の鉄製武器に鋳造して、吉備勢力の核である饒速日尊（ニギハヤヒ）の東征に協力したのではないか。孝霊天皇（ニギハヤヒと同人格と思われる）の御代には、吉備勢力は播磨を制圧し加古川まで達し大吉備と称されるようになり、因幡や但馬も大吉備に属していたと思われる。

❷「石切劔箭神社」の社史によるニギハヤヒの東征とは、「天照大神から大和建国の神勅を拝し「十種の瑞宝」を授かった饒速日尊が船団を組み、自らも「布都御魂劔」と日の御子の証である「天羽々矢」を携え天磐船に乗り込み、物部八十の大船団を率いて高天原を出航した。途中、豊前国の宇佐に寄港すると船団を二つに分け、息子の天香具山命に「布都御魂劔」を授け船団の一方を預けた。宇佐から瀬戸内海を渡ると饒速日尊は河内・大和に、一方の天香具山命は紀伊に向かった。天磐船が鳥見の里を見渡す哮ヶ峯（たけるがみね『生駒山』）に着くと、饒速日尊は辺りを見渡し「虚空(そら)みつ日本(ヤマト)の国）」と賛じた。」とある。この国見の際の美称が邪馬台（ヤマト）国という国号の始まりとなった。

ニギハヤヒは吉備を本拠地とし、宗像や豊国を含む瀬戸内海一帯に勢力を及ぼしていた。東征では吉備を中心とする瀬戸内海一帯からの軍勢（三島神の軍勢を含む）に但馬からのアメノヒボコの加勢を得て、河内に向かったと思われる。ニギハヤヒが東征で携えた、「布都御魂劔」は、スサノオがヤマタノオロチ（大国主か）を退治した時の十握剣であり、「天羽々矢」は天稚彦（あめのわかひこ）を葦原中国に下す際に、天鹿児弓（あめのかごゆみ）と共に天稚彦に与えた矢である。また、「十種の瑞宝」は、奥津鏡、辺津鏡、八握剣、生玉、死返玉、足玉、道返玉、蛇比礼、蜂比礼、品物比礼である。一方、アメノヒボコの伽耶からの将来物（神宝）は、奥津鏡、辺津鏡、珠2つ、浪振比礼（ひれ）、浪切比礼、風振比礼、風切比礼の八種である『古事記』。「十種の瑞宝」とアメノヒボコの将来物は、相似通っており、アメノヒボコの将来物をニギハヤヒに渡し、二人でヤマト侵攻を果たし、「十種の瑞宝」を石上神宮に納めたのではないか。

❸アメノヒボコを伴ったニギハヤヒの物部軍団は、河内から大和に侵攻し、ホアカリの3世孫の倭宿禰が建てた玉牆の内つ国（大己貴の国）の支国（葛城王朝）を崩壊させ、さらに北上して大己貴の国の都の近江・湖南の伊勢遺跡を侵し、大己貴の国を崩壊させた。この折、物部軍団は美濃にも侵入し、少彦名（天稚彦か）を戦死させたと考える。『古事記』（葦原中国の平定）には「天羽々矢」で天稚彦を殺したとある。この殺害は喪山（岐阜県美濃市）近辺で起こったと考えられ、喪山には、天稚彦を祭神とする喪山天神社（大矢田神社境外摂社）がある。

ニギハヤヒは、和邇氏の巫女で大国主の血統の卑弥呼を共立し倭国大乱を鎮め、纏向遺跡を都とする邪馬台国（ヤマト国）を建てた。その邪馬台国の東側に大己貴の国（玉牆のつ内国）の後継国の狗奴国が建てられた。尚、物部軍団が湖南を侵攻した証と思われる勝部神社（守山市）が伊勢遺跡の北側にあり、草津市にはアメノヒボコを祀る安羅（阿羅）神社がある。『日本書紀』に「天皇（孝霊か）は、アメノヒボコに対して播磨と淡路島とに土地を与えた。しかしヒボコはできるならば自分が国巡りして、気に入ったところに住みたいと願い出た。天皇はこれを許し、アメノヒボコは大和、近江、若狭、但馬と国巡りして、ついに但馬に定住した。」とある。アメノヒボコは但馬国を得た後、豊岡周辺を中心とした円山川流域を開拓した。そして亡くなった後は、出石神社の祭神として祭られることになった。

（FB藤田泰太郎タイムライン投稿20/08/15）

参照： 古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）－天孫族（伽耶族）の系譜 ③ 031

アメノヒボコ

アメノヒボコ（天日槍、天日鉾）は新羅王室の王または王子で幾度となく倭国に渡来してきた人格の世襲名

アメノヒボコ（天之日矛、天日槍）『古事記』ではアメノヒボコの話は応神天皇の段にあり、応神天皇の治政を述べるくだりで出現する。『日本書紀』では応神天皇は神功皇后の子であり、神功皇后の母はアメノヒボコの末裔の葛城高額媛（かずらきのたかぬかひめ）である。それ故、『記紀』では系譜（アメノヒボコが出てくる話の時系列）が逆転している。

『古事記』応神紀によると、昔、新羅のアグヌマ（阿具奴摩、阿具沼）という沼で女が昼寝をしていると、その陰部に日の光が虹のようになって当たった。すると女はたちまち娠んで、赤い玉を産んだ。その様子を見ていた男は乞い願ってその玉を貰い受け、肌身離さず持ち歩いていた。ある日、男が牛で食べ物を山に運んでいる途中、アメノヒボコと出会った。ヒボコは、男が牛を殺して食べるつもりだと勘違いして捕えて牢獄に入れようとした。男が釈明をしてもヒボコは許さなかったので、男はいつも持ち歩いていた赤い玉を差し出して、ようやく許してもらえた。ヒボコがその玉を持ち帰って床に置くと、玉は美しい娘になった。ヒボコは娘を正妻とし、娘は毎日美味しい料理を出していた。しかし、ある日奢り高ぶったヒボコが妻を罵ったので、親の国に帰ると言って小舟に乗って難波の津の比売碁曾神社に逃げた。ヒボコは反省して、妻を追って日本へ来た。この妻の名は阿加流比売神（アカルヒメ）である。しかし、難波の海峡を支配する神が遮って妻の元へ行くことができなかったので、但馬国に上陸し、そこで現地の娘・前津見と結婚したとしている。また、『古事記』によれば、アメノヒボコの将来物は、珠が2つ、浪振比礼（ひれ）、浪切比礼、風振比礼、風切比礼、奥津鏡、辺津鏡の八種である。これらは現在、兵庫県豊岡市出石町の出石神社にアメノヒボコとともに祀られている。いずれも海上の波風を鎮める呪具であり、海人族が信仰していた海の神の信仰とアメノヒボコの信仰が結びついたものと考えられる。

『日本書紀』垂仁紀では、垂仁天皇3年春3月に昔に新羅王子・アメノヒボコが神宝、羽太の玉、足高の玉、赤石、刀、矛、鏡、熊の神籬の7種を持参した事への言及があり、その渡来の記述がある。また、播磨国、近江国、若狭国を経て但馬国の出石に至り、そこに定住して現地の娘・麻多烏（またお）と結婚したとしている。

『播磨国風土記』では神代の渡来神・天日槍命として登場し、葦原志挙乎命（葦原志許乎命）・伊和大神（どちらも大国主と同一視される）と土地を奪い合った神として描かれている。『記紀』とは年代や争いがあったかどうかなどが異なる。揖保郡、宍禾郡、神前郡の地名説話として争いが描かれ、争いの結末は双方が三本の黒葛を投げる占いの結果、葦原志挙乎命の葛は播磨に一本・但馬に二本、天日槍命の葛は全て但馬に落ち、天日槍命が但馬出石に退くことになったとしている。

『筑前国風土記』逸文にも断片的な言及があり、怡土（いと）の縣主の祖先の伊都国の五十跡手（いとで）が仲哀天皇に自らを高麗の意呂（おろ）山に天孫ったヒボコの子孫であると名乗っている。
(Wikipedia抜粋)

アメノヒボコとツヌガアラヒトは、同一人格とされることが多い。『日本書記』でも両者を混同している。しかし、アメノヒボコ（新羅の王子）は2世紀後半の倭国大乱の折に、来倭しており、一方ツヌガアラヒト（加羅の王子）は垂仁朝に来倭したと考えられ、両者は別人格であろう。

ツヌガアラヒトは、はじめ穴門（山口県）に船でやってきたが、イツツヒコ（伊都国王か）に道を妨げられたため、日本海を迂回して、出雲を経て、越国・笥飯浦（今の敦賀）に到着した。ツヌガアラヒトは、敦賀・阿(安)羅人、すなわち敦賀についた加羅の阿羅人、という意であろう。また、ツヌガアラヒトは、額に角があったという。これは弁韓人の偏頭習慣(木や石で頭骨を圧迫して扁平にする)によるものとの説がある。（古代日本異族伝説の謎、田中　＋　藤田）

越前の一宮の気比神宮の伊奢沙別命（いざさわけのみこと）「気比大神」または「御食津大神」とも称されるが、この伊奢沙別命は、『日本書紀』の新羅王子の天日槍の神宝として見える「胆狭浅大刀（いささのたち）」との関連性の指摘があり、イザサワケを天日槍とする説がある。気比神宮境内摂社、角鹿神社の祭神がツヌガアラヒトであり、両者は別人格でないかとの説を支持する。（アメノヒボコとツヌガアラシトは同一人物なのか？ Net　＋　藤田）

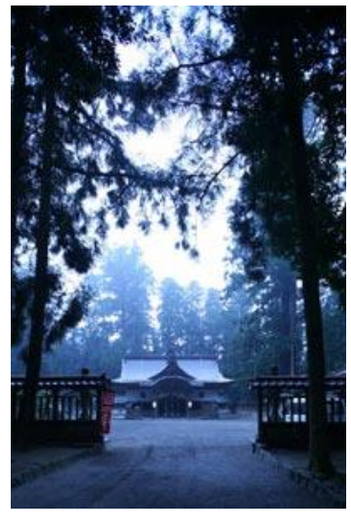
アメノヒボコ（ツノガアラヒト）の像（敦賀駅前）

アメノヒボコ（天之日矛、天日槍）

『古事記』におけるアメノヒボコと阿加流比売神（前津見）の子孫・曾孫が、菓子の祖神とされる多遅摩毛理（たぢまもり・田道間守）である。次の代の多遅摩比多詞の娘が息長帯比売命（神功皇后）の母、葛城高額比売命であるとされている『日本書紀』。しかし『日本書紀』において麻多烏と結婚したのはアメノヒボコでなく意富加羅国王の子の都怒我阿羅斯等（つぬがあらしと）とされている点で異なる。

なお、アメノヒボコは新羅の王家、朴氏、昔氏、瓠公との関連の可能性があるとする説もある（新羅王族であった昔氏は、倭の但馬地域から新羅に渡り王となったとされており、新羅王族であるアメノヒボコは但馬・出石に定着した。ただし、昔氏のもともといた場所についてはこの他に日本の東北、丹波等が上げられている）。
(Net　＋　藤田)

アカル姫は三島湟咋耳神の娘と云われる。三島湟咋耳神は息長氏の祖たる天津彦根神の子神であり、かつ大山祇神の子神でもある。(FB情報＋　藤田)



伊和神社（拝殿）

山の岑（みね）に在す神は、伊和の大神（大国主）のみ子、伊勢都比古命（イセツヒコ）・伊勢都比売命なり
『播磨の国風土記』（揖保郡伊勢野の条）

アメノヒボコ：神功皇后の6世祖

2世紀半ばの倭国大乱の折に渡来したアメノヒボコが神宮皇后の6世祖に当たると思われる。

『日本書紀』によると、神功皇后はアメノヒボコの6世孫で、その系図（右図）を辿るとアメノヒボコは倭国大乱の頃に倭国に渡来したと思われる。アメノヒボコは新羅の王子（？）で延烏郎と思われ、彼が倭国に渡ったのは157年で、ちょうど倭国大乱の直中になり時代的に一致する。

ニギハヤヒが河内に天降ったのは倭国大乱の時と思われる。孝霊天皇はニギハヤヒと思われ、孝霊伝承にあるように、讃岐から因幡、さらには播磨西部まで吉備国を拡大させた。アメノヒボコはニギハヤヒと共にこの拡大に参画し、さらにヤマトに侵攻していったものと思われる。その後、近江から若狭を経て最終的に吉備の勢力が及び始めた但馬に落ち着いたものと考える。尚、アメノヒボコは平和裏に但馬に落ち着いたのではなく、『播磨風土記』や「冨氏伝承」にあるように武力をもって侵攻したものと思う。
（藤田）

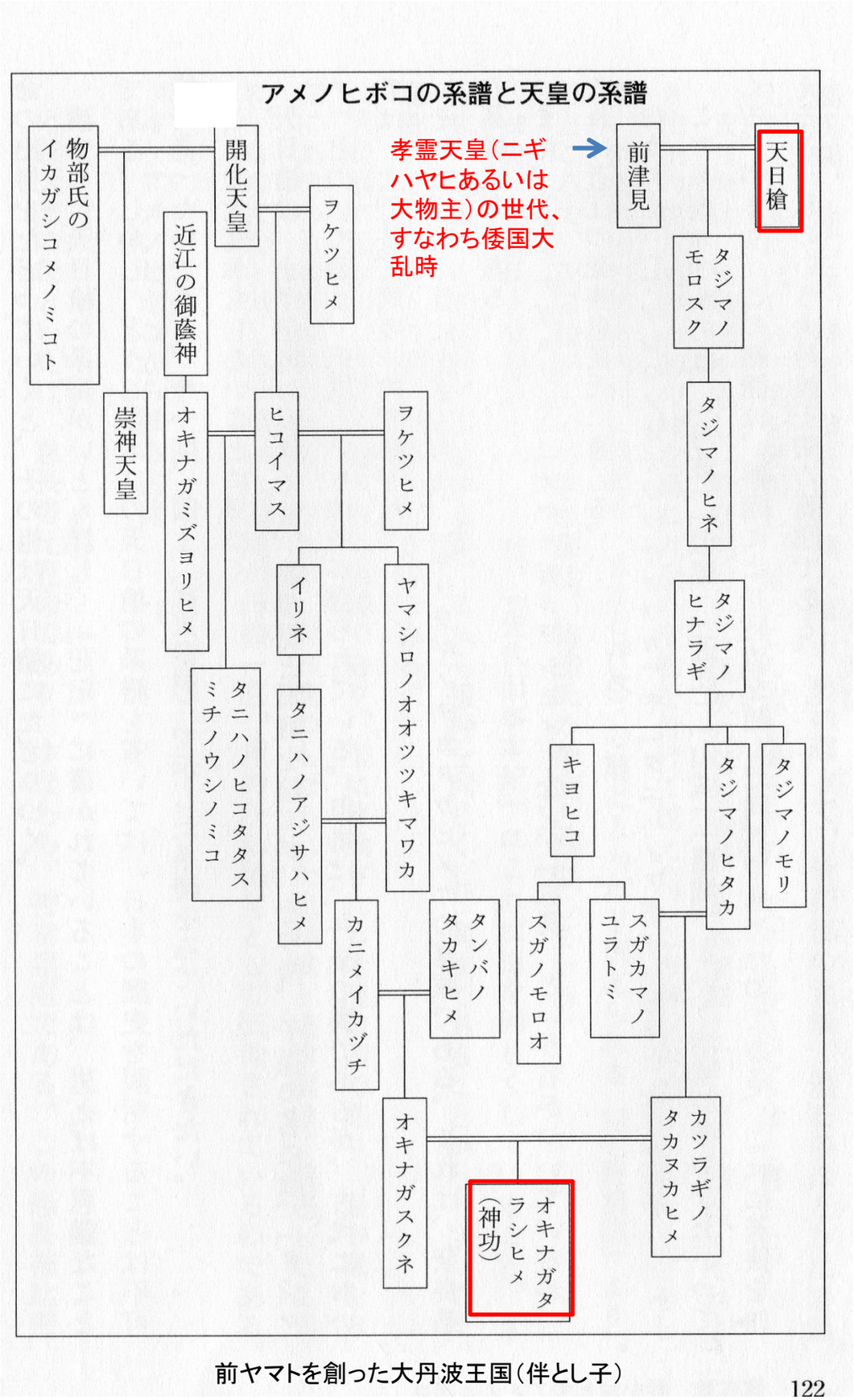
『但馬風土記』には次のようにに書かれている。

御出石櫛甕玉命は、天孫降臨のニニギの兄ニギハヤヒこと天火明命その娘、天香山刀売命を娶り天国知彦命を生む。神武天皇は天国知彦命を出石縣主とする。代々の出石縣主、天国知彦命の子、天多他知命(第2代綏靖天皇の御代)その子、天波賀麻命(第4代懿徳天皇)その子、天太耳命(第5代孝昭天皇)そしてその娘、麻多烏またおが天日槍と婚姻する。

天日槍は、脱解の4世孫といわれている。脱解は多婆那国(但馬、丹波ではないか)から韓国に渡って王となる。その脱解は神武天皇の兄弟、稲飯命。
（Facebook(FB)コメント、西賀真紀）

ニギハヤヒと天火明命が同一人格とは思えない（前述）。天日槍（アメノヒボコ）が、天太耳命（第5代孝昭天皇の御代)の娘、麻多烏と婚姻したとのことは、第6代孝安天皇の御代（倭国大乱折）に渡来したことを示す。また、神武東征は脱解時代（一世紀の半ば）の出来事であると示唆している。（藤田）

天太耳命の娘、麻多烏(あるいは前津見)だと思います。天太耳命は、大国主の直系だと考えます。（FB情報、西賀真紀）



前ヤマトを創った大丹波王国（伴とし子）

122

藤田

アメノヒボコ（天日槍、天日鉾）の系譜

高祖神社宮司家の上原・殿上家系図（新羅王家の系図（右図）、福岡藩の藩学者青柳種信の末裔の青柳隆氏から、FB投稿　川岡保」）ですが、『三国史記』「新羅本記」の新羅王室の系図とはかなり違っている。、「新羅本記」によると、新羅王室2代は南解次次雄で大伽耶（伊西国）出自のスサノオ、4代は大伽耶の昔脱解で丹後の天火明（ホアカリ）と見なしている。本家系図では初代が次次雄で2代が神乎多で、神乎多に昔氏祖とあり昔脱解と思われる。

新羅王室8代阿達羅の王子（延烏郎）を倭国大乱の折に来倭したアメノヒボコと考えている。本系図の3代が迎鳥で意呂山に降臨したアメノヒボコとし、また5代阿加流日古と8代日桙をもアメノヒボコとしている。（前2者は『記紀』や『風土記』にあるアメノヒボコの来倭時期とは一致しない。）**8代日桙は、垂仁朝の清日古（清彦、但馬）4世祖で、仲哀朝の五十跡手（伊都）の6世祖であり、孝安/孝霊朝の倭国大乱折に来倭したアメノヒボコに当たる**と考える。

本系図は、伽耶（大伽耶と阿羅を含む）、但馬・丹後、筑前（伊都）が、政治的・経済的に一体であり、相互の王家の交流があったことを示す。

（藤田）

天日鉾は伊都国に砦を築く

伊都国（明治になって糸島郡）。糸島郡教育会編纂『糸島郡誌』に「而して日槍はまず新羅往来の要津たる伊覩を領有し此に住して五十迹手の祖となり、更に但馬に移りて但馬家の祖となりしなるべし。（久米邦武『日本古代史』に拠る）／案ずるに、久米邦武氏曰く「筑前雷山に存する神籠石は其〈天日槍を指す〉築きし古墳なるべし。其南の肥前山中に墓家の石窟夥しく存す。これ古き植民地なるを証するものなり」と。このように天日鉾は伊都国で砦を築きました。また、宇美八幡宮祭神六座の内気比大神（天日鉾の別名）あり。越前国官幣大社気比神宮の祭神と同一の神にして、天日槍を祀れるなり。また、天日鉾は田川で赤留比売と結ばれ娘を授かりました。その祖先は三毛入命（神武の兄）と記載されています。

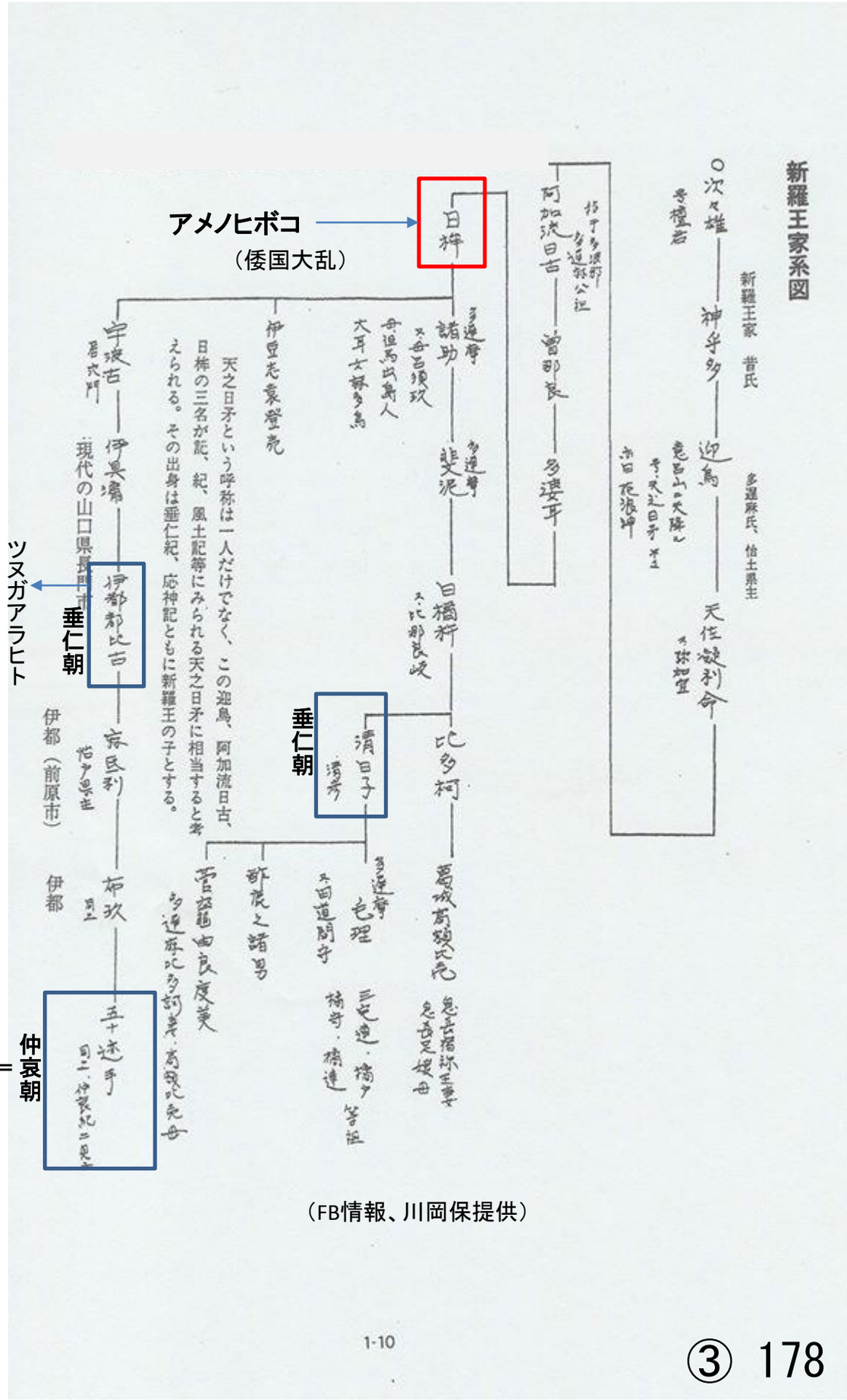
（FB情報、大須賀あきら）

スサノオ、アメノヒボコ、秦氏との相関

スサノオ（新羅王室2代南解次次雄に当たる）は紀元前後に筑前に侵攻して伊都国を建てた。この折アメノヒボコを伴っていたとも思われる。（ひょっとしたらスサノオそのものがアメノヒボコか）　右図のようにスサノオの孫が迎鳥で4世孫が阿加流日古で両者ともにアメノヒボコと呼ばれたという。

スサノオ（その子のニギハヤヒ）はアメノヒボコと密接な関係があり、またアメノヒボコは秦氏と結びついている。スサノオが出雲に侵攻した当時も、石見の日本海沿岸から江の川を遡り、三次に至りさらに芦田川上流から備後・新市に達し、そこから古山陽道を辿り備中・総社に至る、ルート（スサノオルートとも云える）があった。事実、新市には古社の素戔嗚神社があり、ニギハヤヒは備中・備前で力を養い、また2世紀にはアメノヒボコが総社に達していた証左がある。さらに、アメノヒボコは秦氏との関連が強い。秦氏は出雲の四隅突出型墳丘墓や吉備の大型弥生墳丘墓の造営と関係しているとも云われる。ちなみに、三次は四隅突出型墳丘墓の発祥の地と云われ、その造営と秦氏との関連が注目される。

（藤田）



（FB情報、川岡保提供）

倭国大乱時に来倭したアメノヒボコは延烏郎か

「迎日」という地名は高麗時代の延日県に由来し、『三国遺事』阿達羅王（在位154-184年）四年（157年）の延烏郎と細烏女の説話に現れる。それによれば、日月の精である延烏郎細烏女夫婦が日本へ渡ったため日月が光を失い、王が使いを寄越したが、延烏郎は日本で王（新羅人が王になったという記録がないことから大王のことではなく地方を治める小王であるとみられる）として迎えられているのを天命として帰国を拒み、代わりに細烏女の織った絹（絹の織物）を与え、それで天を祭ったところ日月が元に戻った事から、天を祭った所を迎日県または都祈野と呼んだのだという。
(迎日湾-Wikipedia抜粋)

日蝕の伝説　http://www.kotenmon.com/ecl/densetsu.htm

延烏朗・細烏女の神話

『三国遺事』より

阿達羅王四年（西暦157年）、新羅の東海岸に延烏朗・細烏女という夫婦が住んでいた。ある日延烏朗が海岸で海藻を採っていると大きな岩があって延烏朗を日本まで運んでいってしまった。日本の国の人はただの人ではないと言って延烏朗を国王にしてしまった。細烏女が延烏朗を捜しに海岸へ行くとまた岩がありその上に夫の履き物が置いてあった。その岩の上にのると細烏女を日本へつれていった。細烏女は延烏朗に再会し王妃となった。

この時新羅に日月の光が無くなった。日官が国王に「この原因は日月の精が日本に行った為です」と奏上した為、王は二人を捜しにやったが二人は日本へ帰らなかった。その代わり二人の娘の織った生絹を使いに渡し、天に祭るように言った。使者が新羅に帰ってから言葉通り天に祈ると、太陽と月がもとに戻った。この時祈った場所を迎日県又は都祈野という。

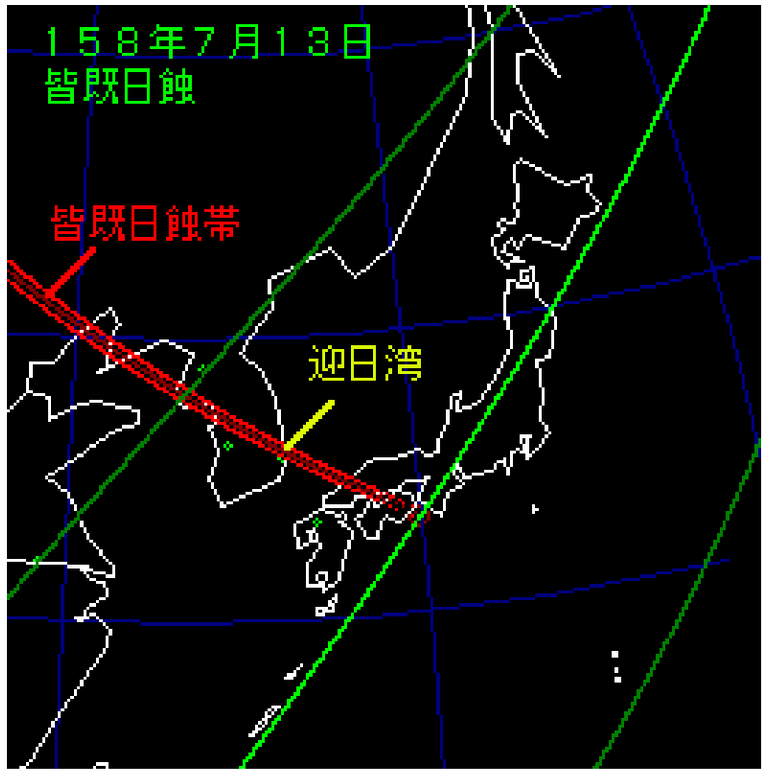
日蝕経路　大谷光男著「古代の暦日」では157年7月にあった日蝕の検証記事があり、157年の日蝕は慶州あたりでは浅い食で「延烏朗・細烏女の神話が157年の日蝕をさしているものではない。」と結んでいる。

問題は、翌年158年7月13日の皆既日蝕が迎日湾（東経129．3度北緯36．0度）のほとんど真上を通っており、EMAPの計算では17時44分に日蝕が始まり、食甚18時41分、皆既継続時間約30秒、19時15分食分0．36で日没となる。計算上若干ずれたとしても相当の深食で、この神話が史実にもとずいているのであればこの時の日蝕がもとになった可能性が高い。

『三国遺事』は十二、三世紀にまとめられたものなので、二世紀ごろの記事にどれだけの信憑性があるのかの問題もあるが、ただ1年違いのこの日蝕がいままであまり関連づけられてない様なのには疑問が残る。

参考文献岩戸隠れの伝説
・大谷光男著『古代の暦日』雄山閣出版
・水谷慶一著『謎の北緯34度32分をゆく知られざる古代』 日本放送出版協会
・一　然著／金訳『完訳　三国遺事』明石書店

注：このページは1996年当時のEMAP/DeltaTで計算した結果で記述しており、最新版のEmapwin/DeltaTの結果では皆既ではなく、食分0.96程度の深蝕となります。(2015/03/16追記)

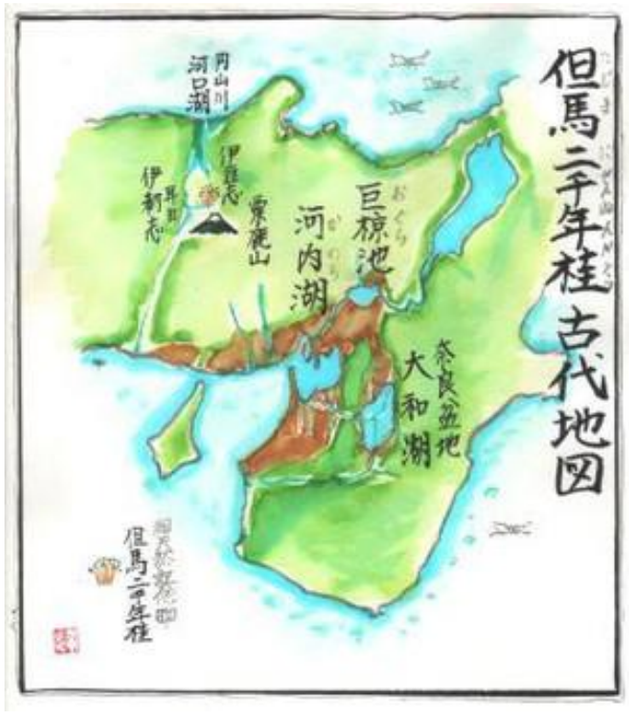


EMAPで描いた日蝕経路

「天照大御神が天の石屋戸に籠ると高天原が暗闇に包まれた。そこで思金神の発案で、石屋戸の前で、賑やかな神楽を奉納したところ、天照大御神が驚いて戸を少し開けると天手力男神がいっきに戸を開けた。すると太陽が戻り、暗闇が晴れた。」 この『古事記』の岩屋戸隠れの伝説は158年の皆既日食を反映しているのではないか。この時の日食帯は任那（伽耶）・新羅・出雲、・吉備を横切った。高天原は伽耶あるいは出雲・吉備と考えられたか。（藤田）

藤田

アメノヒボコ（倭国大乱時）；但馬から播磨へ



但馬古代地図、播但道（但馬2千年柱 2013年1月28日Net）

但馬から播磨への鉄の道

『播磨国風土記』には、天日槍の物語がある。渡来神として崇められている新羅の王子が突然播磨に来て、淡路島を占拠した。王子は勢いをまし、拠点を広げ、地元の勢力と争って但馬の円山川流域を支配、豊岡の出石にも拠点を置いたという説話である。これは円山川河口から姫路の方に権益を確保したということを示している。

それを裏付けるように、2世紀末頃淡路島に製鉄遺跡五斗長垣内遺跡ができ、近畿最大の鍛造製鉄所として操業していた事実が、遺跡の調査からわかっている。かくて、円山川から市川まで抜ける「鉄の路」（現在の播但道）ができたことが判る。新たな畿内への「鉄の路」である。

但馬地区でも、円山川に沿って弥生後期後半紀元200年から300年頃の東山墳墓群・立石墳墓群があり、豊富な鉄製品、ガラス玉が出土している。何れも他にはない豊富な鉄製品が小さな墳墓から出土している。弥生後期には九州を上回る量の鉄器が出土する場所が続出、古墳時代に繋がる。

（古代史の謎は「鉄」で解ける．長野正孝）

『播磨風土記』

新羅の王子が播磨に来て、淡路島を占拠、王子は次々に拠点を広げ、豊岡の出石にも拠点を置き丸山川河口から姫路の方に交易ルートを確保した。

倭国大乱の時のアメノヒボコの渡来経路

１．新羅（当時は辰韓）―但馬―播磨―淡路―大和―近江―若狭―但馬で、倭国大乱の折に渡来したのであろう。

２．出雲の富氏伝承によれば、アメノヒボコはまず出雲を攻めたが、追い立てられ、但馬に上陸したとのことである。（但馬に上陸前に因幡を侵し、青谷上寺地の虐殺に関った可能性がある。）

３．孝霊天皇の御代、吉備勢力は加古川まで達し、大吉備と称された。日本海側の因幡や但馬は大吉備の一部ではなかったか。従って、但馬に上陸したアメノヒボコは吉備勢力と協働して播磨を南下し、但馬から播磨に至る鉄のルートを確立し、その鉄を五斗長垣内遺跡や舟木遺跡で倭国大乱の折の鉄製武器に鋳造して、ニギハヤヒの東征に協力したのではないか。

（「孝霊伝承」や『播磨の国風土記』など）

４．ニギハヤヒは大和に進出して、孝霊天皇になったと思われ、アメノヒボコもこの大和進出に同行したのではないか。

５．ニギハヤヒと卑弥呼により邪馬台国が建てられ、一方アメノヒボコは近江・若狭を経由して最終的に但馬に落ち着いた。

（藤田）

『古事記』によれば、アメノヒボコが持参した神宝は、珠が2つ、浪振比礼（ひれ）、浪切比礼、風振比礼、風切比礼、奥津鏡、辺津鏡の八種であり、ニギハヤヒが河内に天降った時に持っていた十種の神宝は、奥津鏡、辺津鏡、八握剣、生玉、死返玉、足玉、道返玉、蛇比礼、蜂比礼、品物比礼である。これらの神宝は似通っており、アメノヒボコの持参した神宝をニギハヤヒに渡し、二人でヤマト侵攻をはたしたのではないか。丹後の籠神社には、2000年間にわたり伝世されてきた息津鏡（おきつかがみ）、辺津鏡（へつかがみ）と呼ばれる秘蔵の鏡も2面あるが、これらはアメノヒボコが持参した鏡である可能性がある。(藤田）

『日本書紀』によれば、ニギハヤヒの十種の瑞宝と同じく天乃日矛の「将来物」もまた、石上神宮の「神府（神の庫、兵庫のこと）」に蔵された。」とある。
（私の日本古代史、上田）

『日本書』紀垂仁天皇八十八年の条

天日槍命が将来した宝ものは、羽太の玉一個、足高の玉一個、鵜鹿鹿の赤石の玉一個、出石の小刀一口、出石の鉾一枝、日鏡一面、熊の神籬一具の七物。これを但馬国に収めて神の物とした。

垂仁天皇は天日槍の曾孫の清彦に献上させたが（ヒボコ族の天皇への服属儀礼か）、出石の小刀一口はなくなって淡路島へ行った。祠を建てて祀っている。淡路津名（洲本市由良生石崎）出石神社「天日槍命」生石神社とも言う。

『日本書紀』

ヒボコははじめ播磨の国についた。はじめ天皇は、ヒボコに対して播磨と淡路島とに土地を与えた。しかしヒボコはできるならば自分が国巡りして、気に入ったところに住みたいと願い出た。天皇はこれを許し、ヒボコは大和、近江、若狭、但馬と国巡りして、ついに但馬に定住した。

『記紀』や『播磨国風土記』の記述を基に、アメノヒボコが辿ったルートは、「新羅－日本海沿岸（出雲、越、若狭、丹後）－但馬－播磨－大和－近江－若狭－丹後－但馬」と考えられる。ニギハヤヒ（孝霊天皇、物部の祖）はアメノヒボコの辿ったコースの過半に同行していると思う。（前ヤマトを創った大丹波王国、伴とし子　＋　藤田）

因幡の倭国大乱時代の遺跡！アメノヒボコの軍団が青谷上寺地の虐殺に関った可能性がある

青谷上寺地遺跡（あおやかみじちいせき）――倭国大乱の傷跡か

青谷上寺地遺跡は、青谷町の西側を流れる勝部川と東側を流れる日置川の合流点南側にあたり、日本海にほど近い平野部に位置します。青谷平野は本来大きな入り江でしたが、弥生時代以降徐々に陸地化が進み、今から約2,200年前の弥生時代前期から人々が生活するようになりました。そして、約1,700年前の古墳時代の始めごろ、人々は生活の場を他の地に移していきました。青谷上寺地の弥生人は、弥生時代の約500年間、この地を生活の場としていました。

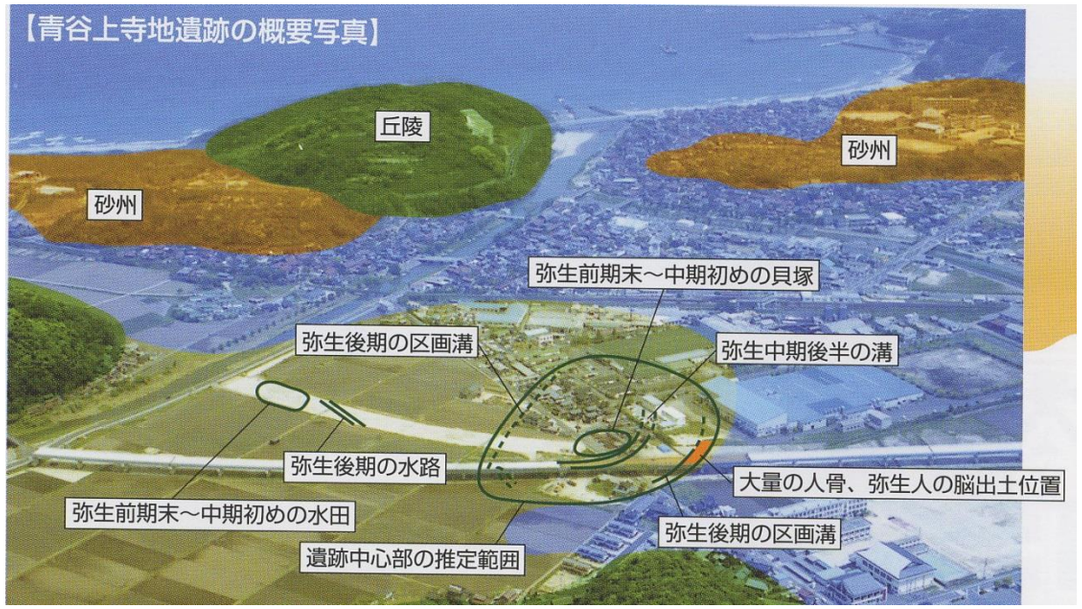
湿地帯から陸地化が進むと、遺構の周囲を大きな溝で囲み、徐々に東側に拡張していきます。この溝は大きな板や多数の矢板を打ち込む、大規模な護岸工事が行われています。西側の溝では、お祭りの場が見つかり、そこは集落の出入り口であることがわかりました。溝の内側には、土壙（どこう）と呼ばれる用途不明の穴や、建物の柱跡となる穴が多数見つかっています。さらに集落の西側では、水田の跡も見つかりました。海に近い青谷上寺地遺跡では、稲作だけではなく、漁撈や狩猟を盛んに行っていたことがわかります。それは多くの農具や漁撈具、獣骨などが物語ってくれます。

さらに、青谷上寺地遺跡の弥生人は、他の地域の人々と盛んに交流していました。九州系や北近畿系、吉備地方の土器も出土しています。石材においても、この近辺の石材だけではなく、ヒスイやサヌカイトなどが使われています。このことは、日本海を舞台とした交易や山を越えた交流が行われたことを示しています。さらに、360点を越える鉄製品や古代中国の貨泉（かせん）が出土したことによって、海を渡り北九州や遠くは朝鮮半島、中国大陸との交流も行われていたことが想像できます。そして、物の交流だけではなく、精巧な木製容器類に見られるように、技術の交流も盛んに行われていました。このことは、青谷上寺地遺跡が単なる村ではなく、海上交通の重要拠点であったことを裏付けています。

遺跡の東側の溝では弥生時代後期の100人分を超える約5,300点の人骨が見つかり、110点の人骨に殺傷痕が見られました。このことから、何らかの争いがあったことが考えられます。また、驚いたことに日本で初めて弥生人の脳が3人分発見されました。

（ようこそ青谷上寺地遺跡展示館へ、Net)

倭国大乱と関連か。（藤田）



（とりネット）

青谷上寺地遺跡で発掘された銅鏃の刺さった腰骨（日本人は、どこから来たのか？　Net）

刃物傷を持った人骨（矢印部）
青谷上寺地遺跡出土（縄文と古代文明を探求しよう　Net）

青谷上寺地遺跡出土の人骨（朝鮮半島から渡来した弥生人と思われる）から得られた核ゲノムDNA解析データ（５個体）の主成分解析の結果は、現代日本人の核ゲノム解析の結果と区別・識別できない。すなわち、青谷上寺地の弥生人ゲノムは、現代韓国人のゲノムより縄文人に近い。即ち、弥生時代の南朝鮮の主体は西日本縄文人と考えられる。

アメノヒボコ　近江より但馬へ

アメノヒボコと近江

アメノヒボコは宇治河を遡って、近江の国の吾名邑に入って暫く住んだ。近江の国の鏡邑（蒲生郡）の谷の陶人はアメノヒボコに従っていた者であるとあり、そこから信楽に移ったと思われる。

麻井氏の『古代近江物語』では、近江の吾名邑の候補地を3つ挙げている。

①坂田郡阿那郷（坂田郡近江町付近）、②鏡邑は蒲生郡であり吾名もその付近（蒲生郡竜王寺綾戸）、③草津市の穴村を挙げている。

③の穴村は守山市伊勢町のすぐ近くにあり、伊勢町には卑弥呼の里と考えられる伊勢遺跡があり、興味惹かれる。穴村には安羅神社があり、祭神は天日槍命である。安羅は加羅国の安羅に因むものと考えられる。

（邪馬台国近江説ー古代の近江の点と線ー、澤井良介）

鏡神社②

鏡神社（滋賀県竜王町）の祭神は天日槍（あまのひぼこ）です。　『日本書紀』には、近江国鏡邑の谷の陶人（すえびと）が天日槍の従者になった事が書いています。このことから天日槍が、この地に製陶技術を伝えた上、鏡を納めたと言われています。
（TOYOSEIKI,Net）

安羅神社③

拝殿の右手に「天日槍命暫住の聖蹟」の石碑
安羅の社名は新羅国の地名「安羅（阿羅）」に由来する鎮座地の地名「穴」もおそらく同じ。現在は「やすら」と読むが、当初は「あら」と読んでいたのであろう。
（滋賀JINじゃ！ Net)

出石神社（いずしじんじゃ）但馬国一宮

兵庫県豊岡市出石町宮内にある神社。

兵庫県北部、出石盆地東縁の山裾に鎮座し、かつては出石神社付近が周辺一帯の中心地であった。この出石神社は、『古事記』や『日本書紀』に記される渡来新羅王子の天日槍伝説の中心となる神社で、現在の祭神には天日槍が将来したという八種神宝の神霊および天日槍自身の神霊を奉斎し、地元では出石の開拓神としても信仰される。

祭神は伊豆志八前大神（いづしやまえのおおかみ、出石八前大神）天日槍命（あめのひぼこのみこと）。天日槍が将来したという八種神宝の神霊を「伊豆志八前大神」として奉斎し、これに天日槍の神霊を併祀する形を取っている。

出石神社の祭祀は、『古事記』や『日本書紀』などの記す天日槍（あめのひぼこ、天之日矛/天日桙）伝説との深い関わりで知られる。そのうち『古事記』応神天皇記では、天之日矛は新羅王子であり、その昔（応神天皇以前）に日本に渡来したとする。そしてその渡来の経緯として、天之日矛は妻を追って日本に渡来し難波に着こうとしたが着けなかったため、新羅に帰ろうと但馬国に停泊していたが、そのまま但馬国に留まり多遅摩之俣尾（たじまのまたお）の娘の前津見（さきつみ）を娶って子孫を儲けたという。また天之日矛は「玉津宝（たまつたから）」と称される神宝8種を将来し、それらは「伊豆志之八前大神（いづしのやまえのおおかみ）」と称されるとする。対して『日本書紀』垂仁天皇3年条では、天日槍を同じく新羅王子とした上で、垂仁天皇（第11代）の時に渡来したとし、天日槍は将来した7物を但馬国に納めて永く神宝としたとする。また同条の別伝では、日本に渡来した天日槍は初め神宝8種を天皇に献上したとし、さらに天皇から居住地として提示された播磨国宍粟邑と淡路島出浅邑は固辞したうえで、近江国・若狭国を経て但馬国に至り、そこで但馬国出島（出石に同じ）の太耳の娘の麻多烏（またお）を娶り、子孫を儲けたとする。

（Wikipedia抜粋）

出石神社
手前に拝殿、右奥に本殿。

拝殿

アメノヒボコは但馬国を得た後、豊岡（とよおか）周辺を中心とした円山川（まるやまがわ）流域を開拓したらしい。
そして亡くなった後は、出石神社（いずしじんじゃ）の祭神として祭られることになった。（Net)

弥生時代後期の鉄器製造遺跡（倭国大乱との関連）

五斗長垣内遺跡 ← アメノヒボコ

ごっさかいと

遺跡は淡路島の西側海岸線から三キロの丘陵地にあり、東西五百メートル、南北百メートル。弥生時代後期・1世紀ごろのおよそ100年間にわたり存在したと考えられる。遺跡には竪穴式住居や鍛冶工房などが復元されている。

弥生時代後期の鉄器製造施設跡が23棟から成っており、うち12棟から鉄を加工した炉跡の遺構が確認された。遺物の鉄器は、矢尻、鉄片、鏨（たがね）、切断された鉄細片など75点が出土した。また石槌や鉄床石（かなとこいし）、砥石など、鉄を加工するための石製工具も数多く出土した。1棟の中に10基の鍛冶炉がある建物も発見され、これまで発見された弥生時代の鉄器製造遺跡としては、最大規模であった。住居は少なく、鉄器製作に特化した特異な遺跡である事が分かった。

淡路島のような人口の少ない小規模の島で、生活のためにこれほど大量の鉄器は必要ない。『魏志』に記された倭国大乱・邪馬台国の時期に重なり、ヤマト王権成立にいたる戦乱期の中でこの施設が軍事利用されていた可能性もある。『古事記・日本書紀』にも国生み神話は淡路島から始まっており、今上天皇にいたるヤマト王権成立との関係が窺える。

（Wikipedia抜粋）

復元された遺跡内最大円形工房、「ごっさ鉄器工房」（神戸・兵庫の郷土史Web研究館、Net）

（弥生後期から卑弥呼の時代へ、Net）

淡路・舟木遺跡 新たな大型の鉄器工房跡　国内最大級か

毎日新聞2017年1月25日

弥生時代後期　鉄製品57点と工房含む竪穴建物跡4棟発見

兵庫県淡路市教委は25日、弥生時代後期の舟木遺跡（同市舟木）から大型の鉄　器工房跡を確認したと発表した。遺跡中心部の状況を把握するため狭い範囲で溝（トレンチ）を掘って調査した結果、鉄製品57点と工房を含む竪穴建物跡4棟が見つかった。同遺跡全体の鉄器工房の規模が、南西約6キロにある国内最大級の鉄器生産集落で、国史跡の五斗長垣内（ごっさかいと）遺跡（同市黒谷）をしのぐ可能性があるとしている。

藤田

ニギハヤヒとアメノヒボコの東征軍は、淡路の五斗長垣内遺跡や舟木遺跡および阿波の矢野遺跡で製造された鉄製武器で軍備を備え、倭国大乱に勝利し、邪馬台国を建てるに至った。

阿波　矢野遺跡

日本で製鉄が始まる前の弥生中期末頃に北部九州と時をほぼ同時期に鉄器生産をはじめた徳島吉野川下流域南岸の矢野遺跡・名東遺跡や庄・蔵元遺跡。古代の海岸線に近い山裾　鮎喰川沿いの鍛冶工房群である。古代になるとこの鮎喰川流域には阿波国府が置かれ、阿波国の中心として引き続き発展してゆく。また矢野遺跡の古墳時代初頭の鍛冶工房跡から瓶に収められて出土した砂鉄は何を意味するのか・・・・

日本で砂鉄が製鉄原料としてたたら製鉄が始まるのは5世紀半ばで、づっと後である。昨年淡路島で発見された弥生時代後半の国内最大級の鍛冶工房「垣内遺跡」とこれらの鍛冶工房遺跡群との関係はどうなのか

卑弥呼の時代を経て初期ヤマト王権の成立に大きな役割を演じたといわれる「阿波」。その力の源泉は阿波の鉄器生産ではなかったのではないか・・・・

矢野遺跡で砂鉄が発見される同じ頃　日本各地の製鉄関連地で墓に砂鉄が副葬される例も見つかっていて、3世紀頃　砂鉄は「砂鉄」として認識され、鍛冶の副原料ないしは初期的な製鉄がトライされていた可能性などを秘めているのではないか・・・・・。まだ、日本で製鉄が始まらぬ時代　朝鮮半島の鉄素材の供給を受けて、拠点地域での鉄器生産が始まり、日本の国づくりが進む時代。「砂鉄の謎」である。

朝鮮半島・北九州から　四国・瀬戸内そして大和へと続く「鉄の道」の中間拠点にあり、当時の先端技術を有して、日本の初期ヤマト王権成立に役割を果たした阿波。そんな時代に鍛冶工房で瓶に入れられた砂鉄が出土した。この砂鉄は何を意味するのか???　頭にある「砂鉄の謎」

（阿波　砂鉄を出土した弥生の鍛冶工房　矢野遺跡、Net）

弥生時代中期の出雲では砂鉄からの初歩的なタタラ製鉄（野ダタラ）が行われていたと思われる。また、矢野遺跡は淡路島の五斗長垣内遺跡ような邪馬台国や崇神王朝への鉄製武器の供給基地であったのか。（藤田）

アメノヒボコは、阿達羅王（在位154-184年）4年（157年）来倭の延烏郎に当たる『三国遺事』。天火明命（ホアカリ）の5世孫の天太耳命（第5代孝昭天皇に当たる）の皇女麻多烏と婚姻（『但馬の国風土記』。また、神功皇后の7世祖である『日本書紀』。

アメノヒボコは倭国大乱の真最中に来倭した。関門海峡から瀬戸内海に入ろうとしたが、何からの障害でかなわず、日本海を東行し、当時吉備勢力の影響下にあったと思われる、因幡を侵し、但馬に上陸した。その後、但馬から播磨へ南下し、播但を縦断する鉄の道を構築した。このルートで運ばれた鉄は淡路の五斗長垣内遺跡や舟木遺跡で鉄製武器に加工された。ニギハヤヒが吉備より東征し、アメノヒボコと合流し、河内から大和に侵攻し、葛城王朝を解体、大己貴の国「玉牆の内つ国」を瓦解させて、邪馬台国を建てた。その後、アメノヒボコは近江に暫く留まったのち、若狭から丹後を経て、但馬に落ち着いた。
（藤田）

日本の製鉄の歴史

第1期　渇鉄鉱からの製鉄、縄文中期から弥生中期　（多氏が中心か）
第2期　砂鉄等の磁鉄鉱からの製鉄（野ダタラ、弥生中期から後期　（大国主ら国津神が中心）
アイアンロードにより伝わった匈奴の製鉄技術が日本海を横断してあるいは樺太経由で倭国に伝わったか。
第3期　楽浪郡の製鉄所からの鉄艇の移入および高度なツクシ型送風管を用いたタタラ製鉄、弥生時代後期～　（南朝鮮よりの渡来者、所謂、天津神が持ち込む)
（藤田）

日本最古の製鉄工房遺跡

「近年の製鉄開始についての一般的理解は、弥生時代後期後半（1 - 3世紀）に溯るといわれる備後の「小丸遺跡（三原市八幡町）」や九州地方北部（博多遺跡群）であり、それから時代が下り出雲地方や吉備の製鉄が行われる、ということである。

纏向遺跡では勝山古墳を含めて5ヶ所で鍛冶関連の遺物とツクシ型送風管（蒲鉾型羽口）が出ている（橋本輝彦2010年3月）。北部九州の羽口は断面が半円形で、朝鮮半島に由来する。この九州式羽口は「ツクシ型送風管（石野博信）」と呼ばれる半円形（かまぼこ型）のパイプで、これが3世紀纏向遺跡の勝山地域で出土しており、羽口だけとは言いながら弥生時代後半からの製鉄存在の可能性を、小丸遺跡とともに指し示している。

総社市の「千引かなくろ谷遺跡」は6世紀後半の製鉄炉跡4基、製鉄窯跡3基が見つかっている。鞴（ふいご）を使い、原料は鉄鉱石である。
（弥生時代に製鉄はあった／最古の製鉄遺跡分布図2013年版、Net）

葦原中国の平定：アメノワカヒコの死と国譲り
アメノワカヒコはスクナビコナか？

『古事記』

葦原中国の平定

＜第一章＞アメノホヒの派遣

オオクニヌシ神の国作り完成させた頃、高天原のアマテラス大神は、稲穂の美しい葦原中国は、わたしの子が治める国である。」とおっしゃって、葦原中国の支配をアメノホシホミミ神に任せました。

アメノオシホミミ神は、スサノオ神とのうけいで一番目に生まれた神です。アメノオシホミミ神が、天の浮橋に立つと「葦原中国は、まだ騒がしいようだ。」と言って引き返し、アマテラス大神に申し上げました。そこで、タカギムスヒ神とアマテラス大神の命令で八百万の神々が、天の安の河に集まって相談し、アメノホヒ神を遣わすことにしました。ところがアメノホヒ神は、オオクニヌシ神に従ってしまい、三年が経っても、命令を果たしませんでした。

＜第二章＞アメノワカヒコの死

三年が経ってもアメノホヒ神は帰ってこないので、再び、タカギムスヒ神とアマテラス大神は高天原の神々と相談して、アメノワカヒコを派遣することにしました。アメノワカヒコは、葦原中国に降りてゆきましたが、オオクニヌシ神の娘のシタテルヒメと結婚してしまいました。アメノワカヒコは、葦原中国を自分の国にしようと考え、八年が経っても、命令を果たしませんでした。そこで、アマテラス大神とタカギムスヒ神は、「アメノワカヒコが帰ってこない。どの神を遣わして、長い間帰ってこない理由を聞いたらよいだろう。」と、高天原の神々に問いました。神々は相談して、オモイカネ神が「ナキメがよいでしょう。」と答えました。そこで、ナキメに「『おまえを葦原中国に遣わしたのは、その国の荒ぶる神々を説得して、従わせるためである。どうして八年経っても帰ってこないのだ』と聞いてきなさい。」と命令しました。

ナキメは天より降って、アメノワカヒコの住まいの入り口にある神聖な桂の木にとまり、アマテラス大神とタカギムスヒ神の言葉を伝えました。ナキメは雉の姿をしています。すると、それを聞いたアメノクサメが「この鳥は、ひどく鳴き声が悪いので射殺すべきです。」とアメノワカヒコに進言しました。アメノワカヒコはただちに、天つ神より与えられた弓と矢をもち、ナキメを射殺しました。その矢は雉の胸を突き抜けて、天の安の河にいたアマテラス大神とタカギムスヒ神のところに届きました。タカギムスヒ神はその矢を手に取ってみると血が矢の羽についています。「この矢は、アメノワカヒコに与えた矢ではないか。」タカギムスヒ神は、矢を高天原の神々に示し見せながら「もし、アメノワカヒコが命令どおりに悪い神を射た矢なら、アメノワカヒコには当たらない。もし、命令に背いて放った矢なら、アメノワカヒコは、この矢の禍を受けよ。』といって、矢を突き返しました。矢は、朝方になってもまだ寝ているアメノワカヒコの胸に突き刺さり、アメノワカヒコは、死んでいました。結局、天より遣わした雉は帰って来ませんでした。そこで、行ったままで、帰ってこない使いのことを「雉の頓使い（ひたつかい）」というようになりました。

一方、夫の死を悲しんで泣くシタテルヒメの声は、風に乗って高天原まで届きました。高天原にいつアメノワカヒコの父は、アメノワカヒコの妻子とともに天より葦原中国に降りて嘆き悲しみました。アメノワカヒコを喪屋（もや）に安置していると、アヂスキタカヒコ神がやって来て、アメノワカヒコを弔いました。それを見たアメノワカヒコの父は「わが子は死んでいなかった。」といい、高天原に住む妻も「わたしの夫は死んでいななかった。」といって、アヂスキタカヒコ神の手や足にすがりついて泣きました。それを聞いたアヂスキタカヒコ神は、「仲の良い友だちだったからこそ、弔いに来たのにわたしを死者と間違えるなんて。」と大変怒って、その喪屋を切り倒し蹴り飛ばしてしまいました。その喪屋は、美濃国（みののくに）の喪山になってしまいました。アヂスキタカヒコ神が怒って飛び去ってしまうと、妹のタカヒメ神が、その名を明かそうと、「アヂスキタカヒコ神は私の兄です。」 と歌いました。

＜第三章＞国譲り

アマテラス大神は、再び「どの神を遣わしたらよいだろう」と言いました。オモイカネ神と高天原の神々は相談して、タケミカヅチ神にアメノトリフネ神とともに遣わすことにしました。二柱の神は、出雲国のイザサの小浜に天より降りてくると、 剣を逆さまに刺し立てて その上にあぐらをかいてすわり、オオクニヌシ神にたずねました。「わたしは、アマテラス大神とタカギムスヒ神に遣わされて、命令を伝えるためにやって来ました。『あなたの支配する葦原中国は、わが御子が支配する国である』と、天つ御子に統治をお任せになりました。あなたの気持ちを聞かせてください。」 オオクニヌシ神は答えました。「わたしは申し上げられません。わたしの子のコトシロヌシが申し上げるでしょう。」 しかしながら、コトシロヌシ神は、漁をするため、御大（みほ）の岬に行き、また帰ってきていません。そこで、アメノトリフネ神を遣わして、コトシロヌシ神を呼び出すことにしました。やって来たコトシロヌシ神は、父のオオクニヌシ神に「おそれおおいことです。この国は、天つ神の御子に差し上げましょう。」と言って、乗ってきた船を踏みかたむけて、 天の逆手を打って、船を青柴垣（あおふしがき）にして、 隠れてしまいました。そこでタカミカヅチ神は、たずねました。「コトシロヌシ神は、同意しました。ほかに、この命令を申し伝えておくべき神はいますか。」 と。オオクニヌシ神が「わたしの子にタケミナカタという神がおります。この子を除いてほかにはおりません。」と答えていると、そのタケミナカタ神が、千人がかかってやっと引くような大きな石を指先に持ち上げながらやって来て、「誰だ。わたしの国にやってきてひそひそと話をしているのは。まずは力競べをしようではないか。まずは、わたしがあなたの手を取ろう。」といい、タカミカヅチ神の手を取りました。するとタケミカヅチ神の手は、たちまちに氷柱（つらら）に変わり、また、たちまちに剣の刃となりました。それを見たタケミナカタ神が恐れおののいて、 引き下がると、今度は、タケミカヅチ神がタケミカヅチ神の手を取ろうと、その手を引き寄せると、若い葦（あし）の芽を握りつぶすように、手を握りつぶして、投げ飛ばしたので、タケミナカタ神は、ただちに逃げ去ってゆきました。タケミカヅチ神は、それを追って科野国（しなののくに）の州羽海まで追いかけて、ついに殺そうとしたところ、タケミナカタ神は、「恐れ多いことです。わたしを殺さないでください。わたしは、この場所にいて、ほかの場所へは行きません。また、父のご命令にも、兄のコトシロヌシ神の言葉にも背きません。この葦原中国は、天つ御子の命令のままに差し上げましょう。」と言いました。タケミカヅチ神は、再び帰り来て、オオクニヌシ神に言いました。「あなたの子どもの、コトシロヌシ神もタケミナカタ神も天つ神の御子のご命令に従い、背くことはない、と言っていますが、あなたの気持ちはどうですか。」オオクニヌシ神は答えました。「わたしの子である二柱の神が同意したのなら、わたしもご命令に従い、背きません。 この葦原中国は、命令どおりに差し上げましょう。ただし、私の住まいは、天つ神の御子が日継（ひつぎ）を受け継ぐ時に住む御殿のように、 宮柱を太く建て、高天原まで千木が届くように高くしてお祭りくだされば、私は曲がりくねった角の先に隠れておりましょう。また、わたしの子である百八十神（ももやそがみ）は、コトシロヌシ神が、諸神の先頭、あるいは後尾に立ってお仕えするならば、背いたりはしないでしょう。」と答えました。こうして、出雲の多芸志（たぎし）の小浜に天の御舎が造られました。水戸神の孫であるクシヤダマ神は料理人となって天つ神のためにご馳走を作ろうと、火を起こすため燧臼（ひきりうす）と燧杵（ひきりぎね）をつくって火を起こして、こう言いました。「わたしが起こした火を、高天原のカミムスビ神が新しく住む住まいにまで煙が届くように、底に深くの石まで焼き固まるまで、燃やしましょう。丈夫に作った縄を打ち投げて釣りをする漁師が釣った大きなスズキを、さわさわと引き寄せて、料理を乗せる台がたわんでしまうほど大量の魚料理をお供えしましょう。」こうしてタケミカヅチ神は、 高天原に還り昇って、葦原中国の平定を アマテラス大神とタカギムスヒ神に申し上げました。

播磨の国一宮の伊和神社（いわ）の主祭神は伊和大神（大己貴神）であるが、配神は少彦名神と下照姫神になっており二人は夫婦と思われる。従って、アメノワカヒコは少彦名神と同一人物となる。（藤田）

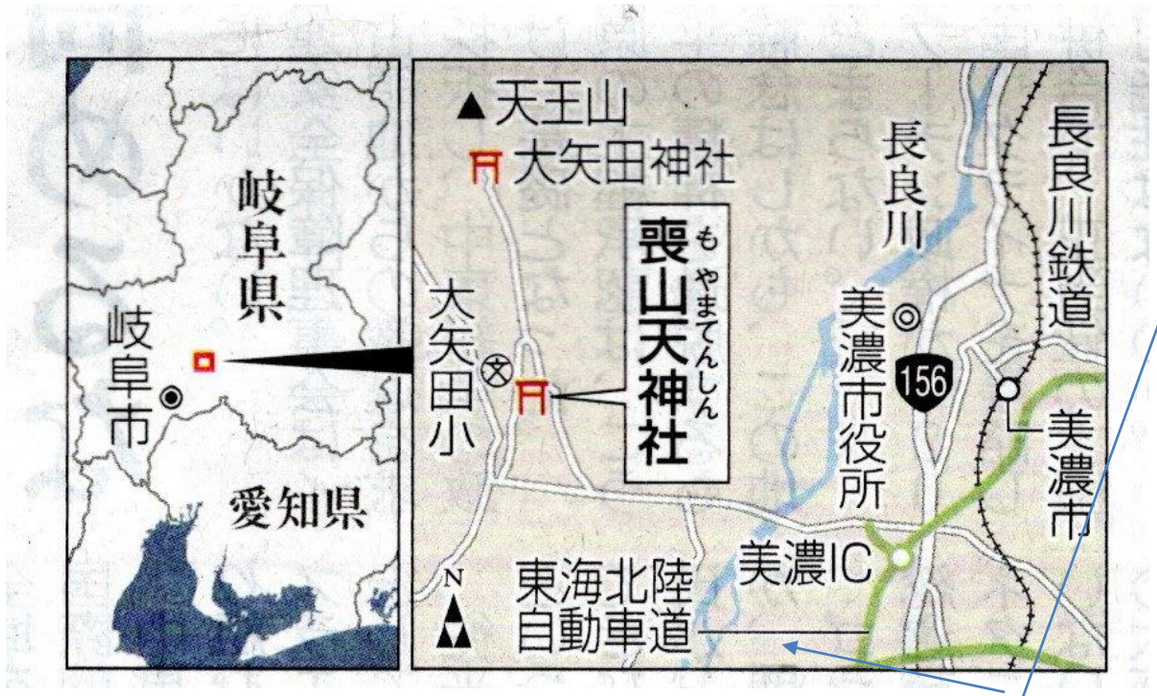
喪　山

アメノワカヒコは美濃・喪山でタカキムスビ神に殺されるとみる。
アメノワカヒコは倭国大乱の終わりにニギハヤヒに殺された少彦名か？

『勘注系図』によると、大国主とタキリ姫の子、シタテルヒメはホアカリと婚姻関係にあるとする。『古事記』によるとアメノワカヒコと結婚したのはシタテルヒメであり、アメノワカヒコはタカキムスビ神に殺されるとある。筆者（藤田）は、**アメノワカヒコは少彦名であり、倭国大乱の折ニギハヤヒとの抗争で殺されたとみる。**この抗争は喪山（岐阜県美濃市）近辺で起こったと考えられ、喪山には、アメノワカヒコを祭神とする喪山天神社（大矢田神社境外摂社）がある。また、彦根市の近辺に豊郷町があり、そこの安食（あんじき）にはアジスキタカヒコネを祀る阿自岐神社があり、高野瀬にはアメノワカヒコを祀る天稚彦神社がある。また、豊郷は台与の母方の里と考える。

崇神東征により邪馬台国は崩壊し、大和から大国主勢力は駆逐された（国譲り）。しかし、大国主の狗奴国は近江北部と美濃を核として残存した。

（大国主対物部氏、藤井　＋　藤田）



産経新聞　平成31年3月23日
記紀が描く国の始まり、天皇の肖像

飛んできた喪屋が落ちてできたとされる「喪山」。山上に喪山天神社がある＝岐阜県美濃市（沢野貴信撮影）

大矢田神社

7代孝霊天皇の時代の創祀とされる。伝承では、悪龍が山に住んで人々が困っていたところ、須佐之男命を祭るようにというご神託があり、お迎えしたとされる。

神社のひんここ祭は約500年前に始まり、須佐之男命が、農耕の邪魔をする大蛇を退治し、御殿にいる妻、櫛稲田姫を食べようとする龍も退治する様子を人形で表現する。祭神を御旅所まで運ぶ神輿には明治ごろまで、沿道から小さな矢の飾り物を投げつける風習があった。天若日子の故事にちなむもので、大正からは参拝者にまく形に改められたという。

大矢田神社は、7代孝霊天皇時代の創紀とされ、意味深である。私見では倭国大乱を鎮め邪馬台国を建てたニギハヤヒが孝霊天皇に当たると考えている。ひんここ祭の、スサノオが大蛇を退治し、櫛稲田姫を助けるという構図は、出雲の八岐大蛇退治と酷似している。伊吹山麓の伊富岐神社は伊吹山を神奈備とし大国主（八岐大蛇）を祭神とする。（藤田）

ニギハヤヒ（孝霊天皇）は、大物主と同一人物か

大物主はニギハヤヒか

原田常治氏は、大物主神は饒速日尊であったと、その著『古代日本正史』（1976年刊）で書いている。しかし、日本家系学の重鎮、宝賀寿男氏は、「古代氏族の研究⑧　物部氏」で、原田氏の「三輪大物主神＝饒速日尊」という同神説を祭祀・種族系統からあり得ないと一蹴している。とはいえ、次の通り、原田氏の同神説を支持したい。

①神武東征は時代的に崇神東征と考えるのが妥当である。従って、ニギハヤヒは崇神東征の折、すでに大和に天降っていたのだから、ニギハヤヒが大和に居たのは欠史八代の頃と思われる。

②崇神天皇7年春2月、国内にしばしば災害が起こり、それを憂いた天皇の前に、倭迹迹日百襲姫命に神憑って現れたのが大物主神である。そして、大物主神の言う通り、その子大田田根子を祭主とし大物主神を祭ったところ、疫病は止み、五穀は実り、民はにぎわった『日本書紀』。大田田根子は大物主の4世孫でタケミカズチの子で、この系譜からも大物主は孝霊天皇のころの人格ととらえることができる。タケミカヅチは藤原氏（中臣氏）の守護神であるが、出雲の国譲り（崇神東征の頃）で活躍する仮想の神と考える。

③倭迹迹日百襲姫命は大物主神の妻となり、「日は人作り、夜は神作る」という、あの箸墓伝承につながる最古の前方後円墳の箸墓古墳に葬られたという。倭迹迹日百襲姫命は孝霊天皇の娘とされ、卑弥呼の有力候補者である。卑弥呼＝倭迹迹日百襲姫命の同一説は、海部氏勘注系図にも示されている。

④倭国大乱はニギハヤヒのアメノヒボコを伴った東征によって引き起こされたと考える。神功皇后はアメノヒボコの子孫（7世孫）だがその系図を辿るとアメノヒボコが渡来したのは孝霊天皇の御代と考えられる。また、アメノヒボコは157年渡来した延烏郎と思われる『三国遺事』。倭国大乱は和邇氏の巫女と思われる卑弥呼を共立することでおさまり、ニギハヤヒは虚空見つ倭国、すなわち邪馬台国を立てた。邪馬台国は崇神東征により終焉したと考えられる。

⑤大国主は少彦名と協力して国つくりを進めてきたが、倭国大乱の折、少彦名が亡くなる。これから一緒に天下をおさめる者はいるのだろうかと嘆く大己貴命の前に、大己貴命の「幸魂奇魂」だという大三輪の神、すなわち大物主神（ニギハヤヒ）が現れる。すなわち、大国主は三輪山をニギハヤヒに乗っ取られたとみるのが正しいと思う。

⑥アメノヒボコの将来物の可能性の高い天璽瑞寶は饒速日（ニギハヤヒ）が天降るときに授かったとされているので、天璽瑞寶は饒速日そのものである。「天璽瑞寶を藏し以て天皇の爲に鎭祭る」「大神を殿内に奉齊る」から、「大神」とは天璽瑞寶、すなわち饒速日のことであることがわかる。このことからすると、大神神社は饒速日を祀った神社ということになる。大神神社には本殿はなく、三輪山そのものが神殿となっている。つまり「大神」を「オオミワ」と読むのは、三輪山に「大神」が祀られていることによるのではないか。三輪山に住む神は大物主神であることからすれば、「大神＝饒速日＝三輪山に住む神＝大物主」ということになる。（大物主と饒速日、Net）

（藤田）

大国主、スクナビコナとニギハヤヒに関する『古事記』の記述

大国主之命が出雲の今の美保である御大（みほ）の岬にいた時のこと、波がしらの白く立ち騒ぐ沖の方から、ががいもの実の二つに割れたのを 船として、ミソサザイの羽の着物姿で、波の上をこちらの方に近寄ってくる小人のような神がいました。そこで、名前を尋ねたのですが返事がなく、お伴の方々に聞いても誰一人知っている者がいませんでした。そこへヒキガエルが現れて「これはきっと、案山子（かかし）の久延毘古くえびこが知っているでしょう。」そこで案山子を呼んで聞いてみると「これは神産巣日神（かむむすひのかみ）の御子で、少名毘古那神すくなびこなのかみでございます」と答えました。

そこで高天原にこの神を連れてって、神産巣日神に聞いてみました。「たしかにこれは私の子供です。たくさんいる子供の中で指の股からこぼれ落ちた子供です。大国主之命と兄弟になってこの国を作り固めなさい。」そうおっしゃいました。

こう言われて、それから大国主之命と少名毘古那神はお互いに力を合わせてこの国を経営しました。ところが、国がちゃんと出来ないうちに少名毘古那神は、海の彼方の 常世国に渡って行ってしまいました。ところで、この少名毘古那神の名前を告げました久延毘古は歩くことは出来ませんが、天下のことは何でも知っている偉い神様です。

さて少名毘古那神に先立たれて大国主之命は「私ひとりでどうしてこの国を作ることができよう。いかなる神と力を合わせてこの国を作ったらよいのだろうか。」と言って嘆き悲しんでいました。この時、遠い沖合いから海原を照らして光輝きながら、次第に近寄ってくる神さま（大物主、ニギハヤヒ）がいました。そして、「もし私をよく祭りあがめるようならば、お前を一緒になってこの国の経営にあたってもよい。そうでなければ、この国がうまく治まることは難しいだろう。」「それでは、どのようにお祭りしたら宜しいのでしょうか。」「大和の国を青垣のように取り囲む山々の、その東の山の頂きに、身を清めて私を祭るが良い。」と言いました。これは御諸（みもろ）の山（三輪山）の上にいる神です。

（ 御諸の神、Net）

倭国大乱の際、スクナビコナは、ニギハヤヒとアメノヒボコとの抗争に敗れ死んだか　ニギハヤヒは大神神社を大国主から乗っ取ったか（藤田）

大神神社（おおみわじんじゃ）

大物主（ニギハヤヒ）が主祭神、その前の祭神は大国主と少彦名神

大神神社（三輪明神大神神社、大和国一之宮、桜井市） 旧来は美和乃御諸宮、大神大物主神社と呼ばれた。中世以降は三輪明神と呼ばれる。明治時代になり「大神神社」と改名された。
主祭神：大物主大神（おおものぬしのおおかみ、倭大物主櫛甕玉命、大三輪之神（おおみわのかみ）。
配祀神：大己貴神（おおなむちのかみ）、少彦名神（すくなひこなのかみ）
　大物主神は蛇神であると考えられ、水神または雷神としての性格を合わせ持ち、稲作豊穣、疫病除け、醸造などの神として特段篤い信仰を集めている。また日本の守護神、氏族神（三輪氏の祖神）である一方で祟りなす強力な神ともされている。
　遠い神代の昔、大己貴神（おおなむちのかみ）（大国主神に同じ）が、自らの和魂（にぎたま）（幸魂（さきみたま）・奇魂（くしみたま））を三輪山にお鎮めになり、大物主神の御名をもってお祀りされたのが当神社のはじまりである。それ故に、本殿 は設けず拝殿の奥にある三ツ鳥居を通し、三輪山を拝するという、原初の神祀りの様が伝えられて おり、我が国最古の神社である。大三輪之神（おおみわのかみ）として世に知られ、大神をおおみわと申し上げ、神様の中の大神様 として尊崇され、各時代を通じ、朝野の崇敬殊に篤く、延喜式内社・二十二社・官幣大社として最 高の待遇に預かり、無比のご神格がうかがわれます。
三輪山伝説：倭迹迹日百襲媛命は聡明で未来を予言することができた。崇神天皇の命により北陸道を平定しようと出発した将軍の大彦命が道中で不思議な童歌を詠う少女に出会った。大彦命はただちに引き返して天皇に報告した。これを聞いた倭迹迹日百襲媛命は武埴安彦命と吾田媛の反逆を予言した。武埴安彦命らによる反乱は大彦命・彦国葺命らによって討伐された。
その後月日は流れ、倭迹迹日百襲媛命は大物主神の妻になった。しかしこの神はいつも夜にしか姫のところへやって来ず姿を見ることができなかった。百襲姫は夫にお姿を見たいので朝までいてほしいと頼んだ。翌朝明るくなって見たものは夫の美しい蛇の姿であった。百襲姫が驚き叫んだため大物主神は恥じて三輪山に帰ってしまった。百襲姫はこれを後悔して泣き崩れた拍子に、箸が陰部を突き絶命してしまった（もしくは、箸で陰部を突き命を絶った）。百襲姫は大市に葬られた。時の人はこの墓を箸墓と呼んだという。
（三輪神社、Net、Wikipedia抜粋）
　邪馬台国が成立して、大物主（ニギハヤヒ）が大神神社の主祭神になる前は大国主と少彦名神（倭国大乱の折敗死か）が主祭神であったと思う。邪馬台国を建てたニギハヤヒは、大神神社の祭神におさまった。（藤田）

（光一郎撮影）

三輪神社、大己貴神社、大神神社　大全国各地に三輪神社ないしは美和神社があるが、これらの神社は桜井市の大神神社から勧請されたものと思われる。その中で近江の古社の三輪神社（滋賀県栗東市大橋、祭神：大国主）は注目される神社である。近江の三輪神社は三上山と大己貴の国「玉牆の内つ国」の都と思われる伊勢遺跡の間にあり、神社からは秀麗な三上山が仰ぎ見られる。この三輪神社と大和の大神神社との関係が注目され、どちらが古社であるかは議論の分かれるところである。さらに、伊勢遺跡に隣接して大宝神社（祭神：素盞嗚尊と稲田姫命）があるが、この神社は後年追来（オフき）神社の境内に鎮座させたものである。追来神社の祭神は伊吹山に座す多々美彦命（別名八岐大蛇、大国主のことか）であり、追来神社は地主神でありながら大宝神社本殿が主祭神となっているため、無理に境内社としての位置付けにされ、社名変更を余儀なくされたと推測される。一方、筑前・筑前町（旧三輪町、筑後に近い）には大己貴神社がある（大己貴命は大国主の別名）。この神社は最も古いといわれている神社のひとつであり、大己貴神社付近と大神神社付近の地名や地形も偶然とは思えないほど酷似していて、この二社の関連が注目される。以上のように、大和の大神神社、近江の三輪神社と筑前の大己貴神社のお互いの関連性が注目される。私見では、紀元前後のスサノオの筑前（大己貴神社）さらに出雲への侵攻により大国主は東遷し近江（三輪神社）や大和（大神神社）に移ったのではないかと考える。（藤田）

大神神社(大和国一宮)と粟鹿神社(但馬国一宮)

大物主神を祀る大神神社の初代祭主の大田田根子(おおたたねこ)(崇神朝)は大物主神の4世孫であり、一方日子坐王を祀る粟鹿神社の祭主の神部直根麻呂(みわのあたひねまろ)(＝三輪君根麻呂(みわのきみねまろ))(天武朝)は大田田根子の子孫である。従って、**大神神社と粟鹿神社の祭主はともに大物主神の直系**と言える。

(粟鹿神社、拝殿　Wikipedia)

【粟鹿大明神元記】(あわがだいみょうじんげんき・もとつふみ)
粟鹿神社(兵庫県朝来市山東町)に伝わる古文書『粟鹿大明神元記』は、祭神の粟鹿大明神の神代からの由来を原初的な竪系図(たてけいず)で記されており、鎌倉時代の写しと見なされている。和銅元年(708年)、粟鹿神社祭主の神部直根麻呂(みわのあたひねまろ)が朝廷に上申され歴代の皇室に伝わってきた。現在、この記は古文書類を所蔵してある宮内庁書陵部の書陵部所蔵資料目録・画像公開システムにアップロードされている。
(https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Viewer/1000671700000/a8252393f50b475999ec19b057c29268/)
粟鹿大明神は、『古事記』の崇神天皇の項に大和の三輪山に大物主大神を鎮め祀り始めた大田々祢古命(おおたたねこのみこと)を祖先とすると記載され、『日本書紀』の天智天皇の項に神部直根麻呂は三輪君根麻呂(みわのきみねまろ)であると記されている等で、この『粟鹿大明神元記』は驚異に価する古文書と言われている。その驚愕すべき内容とは、粟鹿大明神に至る素戔嗚命(須佐之男命)(すさのお)の系統、さらに大国主命(おおくにぬし)の直系が連綿と書かれていることである。つまり、大物主神は、須佐之男命を祖神とする大国主命の血統を持つ一族の荒魂だということになる。(文責藤田)
(FB情報、西賀真紀。粟鹿大明神元記①(あわがだいみょうじんもとつふみ)｜タニハ但馬　時空を超えて旅に出よう、Net)

大国主(和魂)と大物主(幸魂・奇魂＝荒魂)

『古事記』には、アメノワカヒコと結婚したのはシタテルヒメであり、アメノワカヒコは裏切りによりタカキムスビ神に殺されるとある。筆者はアメノワカヒコは少彦名であり、倭国大乱の折ニギハヤヒとの抗争で殺されたとみる。この抗争は喪山(岐阜県美濃市)近辺で起こったと考えられ、喪山には、アメノワカヒコを祭神とする喪山天神社(大矢田神社境外摂社)がある。尚、物部氏の祖神は素戔嗚の後であるニギハヤヒとされる。

大国主は少彦名と協力して国つくりを進めてきたが、倭国大乱の折、少彦名が亡くなる。これから一緒に天下をおさめる者はいるのだろうかと嘆く大国主(大己貴命)の前に、大国主の「幸魂奇魂」だという大三輪の神、すなわち大物主神(ニギハヤヒと同人格か)が現れる。すなわち、大国主は三輪山をニギハヤヒに乗っ取られたとみるのが正しいと思う。ちなみに、大神神社の祭神は大国主と少彦名であったと思われるが、倭国大乱後は大物主(ニギハヤヒ)に代わったと思われる。

ちなみに、播磨の国一宮の伊和神社(いわ)の主祭神は伊和大神(大己貴神)であるが、配神は少彦名神と下照姫神になっており二人は夫婦かと思われる。従って、アメノワカヒコは少彦名神と同一人物となる。

左欄に記したように、『粟鹿大明神元記』には、素戔嗚命(すさのお)の系統、さらに大国主命(おおくにぬし)の直系が連綿と書かれている。つまり、大物主神は素戔嗚命を祖神とする物部一族が抱く大国主の荒魂だということになるが、大神神社では大国主の幸魂・奇魂されている。

(藤田)

邪馬台国と狗奴国の誕生

［倭国大乱により大己貴の国「玉牆の内つ国」が解体され、西日本に広がる邪馬台国と東日本に広がる狗奴国が成立した］

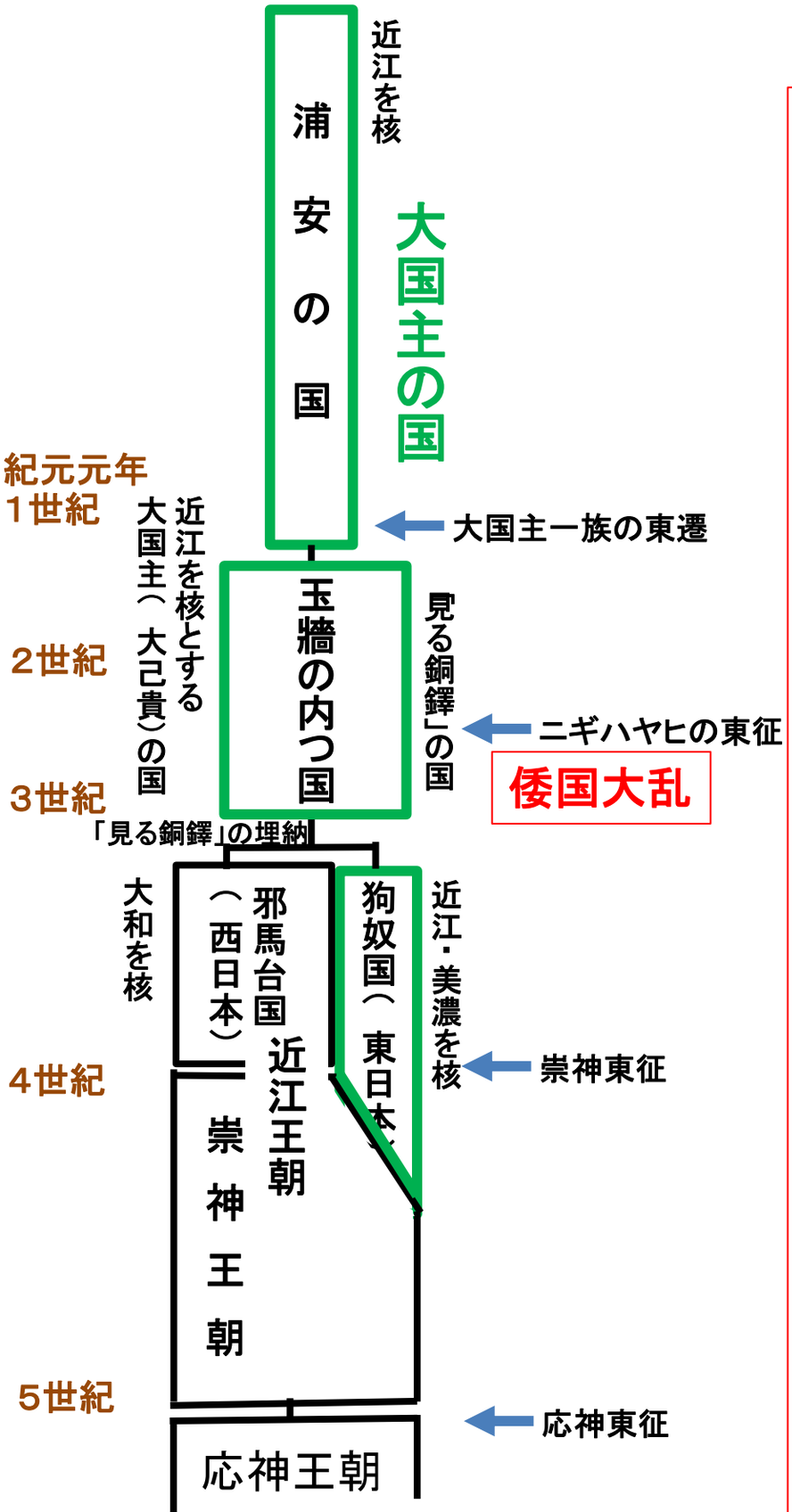
藤田

イザナギ・イザナミの時代、近江・野洲を核とする浦安の国があった。紀元前後、スサノオによる出雲侵攻により出雲古国が壊滅、八岐大蛇たる大国主が殺された。この敗戦の折、「聞く銅鐸」が加茂岩倉・荒神谷遺跡に埋納された。大国主一族のアジスキタカヒコネらが東遷し、大国主のネットワークの中心が出雲から近江へと移った。アジスキタカヒコネは、大己貴（近畿・中部地方での大国主の別称）と合流して浦安の国を大国主のネットワークの中心にした。

1世紀末に大国主命（大己貴命）と少彦名命は農産業・商工業産業が盛んな近江・湖南の伊勢遺跡（守山市）を国都とし伊吹山を神奈備とする大己貴の国「玉牆の内つ国」を建てた。この国は近畿・中部地方に広がり、「見る銅鐸」を祭器にした。伊勢遺跡は琵琶湖の水運を利用でき、後の北陸道・東山道・東海道と畿内を結ぶ交通の要衝に位置していた。2世紀半ばに饒速日尊（ニギハヤヒ）がアメノヒボコを伴い大和に侵攻した（ニギハヤヒの東征）。この物部を主力とする軍団は、玉牆の内つ国の支国（葛城王朝）を崩壊させた。さらに、北上して玉牆の内つ国の国都の伊勢遺跡を解体させ、和邇氏の巫女で大国主の血脈の卑弥呼を共立し、大和の纒向遺跡（桜井市）を国都とする邪馬台国を建てた。尚、大国主は湖東・湖北に逃れ、玉牆の内つ国の後継国と考えられる狗奴国を建てた。かくて、近江湖南・湖西と湖東・湖北を境に邪馬台国と狗奴国が倭国を西日本と東日本とに二分することになる。

伊勢遺跡が倭国の東西・南北の交通の要衝に位置したように纒向遺跡もまた紀伊・伊勢・近江・山城・河内に通じる交通の要に位置した農・工・商業センターである。また、水運も奈良湖・大和川を経由し、河内から瀬戸内海に通じ、また北上すれば木津川から淀川水系に至り琵琶湖に達する。伊勢遺跡と纒向遺跡は地勢的に極めて類似している。伊勢・纒向遺跡からはそれぞれ秀麗な山容の三上山と三輪山を仰ぎ見ることが出来る。これら二つの山は、どちらも山間部と扇状地の境界にある「神の坐す山」とされてきた。三輪山の麓には大神神社があり、三上山の麓には三輪神社がある。三輪山の奈良湖側には纒向遺跡があり、三上山の琵琶湖側に伊勢遺跡がある。さらに、纒向遺跡の北側に物部の総氏神の石上神宮があり、伊勢遺跡の北側には物部郷の総社である勝部神社が鎮座する。石上神社の存在は倭国大乱を引き起こしたニギハヤヒ軍団の大和制圧の証であり、物部郷の存在は倭国大乱の末期に近江湖南に攻め込み伊勢遺跡を解体させた証であろう。

（藤田　＋　大宝神社　大宝神社紹介、Net）



邪馬台国と魏志倭人伝

邪馬台（ヤマト）国時代（3世紀）、魏、蜀、呉の三国は中国の覇権を巡り、苛烈な争いを展開していた。魏は遠交近攻策を取り、呉を牽制するためにヤマト国の卑弥呼の求めに応じ「親魏倭王」の金印綬を授けた。このように魏は3世紀のヤマト国（倭国）を東アジアの大国と見なしていた。事実、ヤマト国は九州を含む西日本と南朝鮮の南部（任那）を抱合する大国である。また、狗奴国はヤマト国の東（東日本）に存在した。3世紀の邪馬台（ヤマト）国の纒向遺跡は倭国の政治的・経済的中心と考えられるほどの広大で、後世の藤原京に匹敵する広がりを持っていた。纒向遺跡の出土物を勘案してもこの遺跡はヤマト国の国都に違いない。また、纒向遺跡にある箸墓はヤマト国の女王卑弥呼の墓に相応しいはじめての巨大な前方後円墳で、魏で話題にのぼるほどの規模である。（尚、前方後円墳はヤマト国に続くヤマト王権のシンボルとなる） このような文献的・考古学的知見は、纒向遺跡がヤマト国（倭国）の国都であることを強く示唆し、ヤマト国が『魏志倭人伝』では邪馬台（ヤマト）国と称されたに違いない。

『魏志倭人伝』での邪馬台国への道程・里程・方角等の記述が今日の東アジアの科学的地理観に基づいておらずかつ不正確で、解釈次第で邪馬台国を日本列島のどこにでもあるいは沖縄、台湾、フィリピンにでも位置付けることが可能です。この道筋・里程・方角の記述の不適格さが九州説と畿内説の確執をもたらし、もはやお互い修復不可能なレベルにまで達している。九州説の方々は帯方郡から邪馬台国の里程を万2千里と固執し、邪馬台国を九州内に収めようとする。私を含め畿内説の方々は、西晋の陳寿らの知識人の倭国の位置付けの不適格さの故に、倭人伝に記載の方角を90度左に回転させ、南を東、西を北と読む。そうすることによって、邪馬台国を畿内の大和に正確に位置付けることができる。（邪馬台国に至る途中の投馬国は出雲王朝であり、日本海経路で邪馬台国に到達する。）私見では、『魏志倭人伝』の編纂者の陳寿あるいは彼の部下は北九州には視察に行ったが、本州には足を踏み入れていない。そのような状況でどうして帯方郡から邪馬台国への総里程を知ることができたのだろうか。今日の邪馬台国論争の混迷はすべて『魏志倭人伝』の記述の曖昧さ・不適格さによるものである。

（FBコメント、藤田）

邪馬台国を巡る三国時代の東アジア情勢
――邪馬台国は畿内のヤマト国である。

邪馬台国時代（3世紀）、魏、蜀、呉の三国は中国の覇権を巡り、苛烈な争いを展開していた。魏は遠交近攻策を取り、蜀を牽制するために大月氏（クシャーナ朝）に親魏王の金印綬「親魏大月氏王」を与え、一方、呉を牽制するために邪馬台（ヤマト）国の卑弥呼の求めに応じ「親魏倭王」の金印綬を授けた。大月氏国は当時人口50万を擁する中央アジアの大国であり、ヤマト国は大国の大月氏国は匹敵する好待遇を受けたことになる。実際、ヤマト国は四国・本州西部の国々のみならず北九州と南朝鮮に亘る任那・伊都国連合を含む大国であった。また、当時の魏の知識人の地理感では、倭国は、南朝鮮、九州、本州と北から南に延びる列島で、呉の東方海上に至り、呉を牽制するには絶好の位置にあると考えていた節がある。以上のように、ヤマト国は北九州の小国などではなく、大和を中核とする、南朝鮮、北九州、四国、本州西部を占める大国であり、本州東部には大国主の狗奴国連合があった。

『記紀』には邪馬台国はおろか卑弥呼も一切記載されていない。だた、ニギハヤヒが興したヤマト国と思われる「虚空見つ日本（倭）の国」の国名だけが記載されている。この国が邪馬台国に当たると思われ、崇神王朝（三輪王朝）の前の孝霊天皇から開化天皇までの国であろう。卑弥呼はニギハヤヒと大国主により倭国大乱を鎮めるために邪馬台国の女王に共立された。崇神王朝にとってニギハヤヒはアメノホシオミミからの嫡流ではなく、スサノオからの傍流と考える。従って、ニギハヤヒの建てた邪馬台国（虚空見つ倭の国）は『記紀』から無視される運命であったのであろう。

魏を継ぐ西晋の陳寿は『魏志倭人伝』の編者である。陳寿ら西晋の知識人もまた魏の知識人と同じく、倭国は朝鮮から南に延び、呉の東方に位置すると考えていたと思われる。陳寿らが本州は九州の南にあると思い違いをしていたのなら、『魏志倭人伝』の南方を東方と読めば、邪馬台国の中核の大和に至る方位をきちんと正すことができる。さらに、『魏志倭人伝』では狗奴国は邪馬台国の南方にあるとされているが、正しくは東方である。また、陳寿は北九州には行ったが大和には行かず、北九州の風俗・風習や埋葬方法を、若干の相違があるのにも拘わらず、畿内の大和の風習・風俗や埋葬方法としたのではないか。特に、北九州特有の甕棺は3世紀当時既に北九州でも廃れていたが、『魏志倭人伝』の「有棺無槨」が甕棺とされ邪馬台国九州説の論拠の一つにされた。また、3種の神器の原型が伊都国から出土したと言っても、崇神天皇の任那・伊都国連合が東遷して邪馬台国を引き継いだのであるから、3種の神器は東遷後のヤマト王権で確立したと考えると邪馬台国畿内説でなんら問題はない。

邪馬台国の中枢は畿内の大和にあり、その中心は纒向遺跡であるとの推察の方が、『魏志倭人伝』を含む文献や当時の大型銅鏡の出土分布などの考古学的証拠に合致する。さらに、九州説の論拠として鉄製武器の出土が北九州地方に偏在することも挙がるが、倭国大乱に伴った淡路や阿波さらに丹後に大型鋳造遺構が見つかること、物部氏の祖、ニギハヤヒの東征のための武器や戦利品（武器等）は物部氏の総氏神の石上神宮におさめられた考えられること、さらに大和、近江、伊勢などでは渇鉄鉱からの製鉄が盛んであったが、渇鉄鉱からの鉄は腐食しやすく古墳や遺跡からは出土しないこともその反論として挙げられる。

不弥国から邪馬台国への行程は、投馬（出雲）国経由の日本海海路で若狭に行き、琵琶湖・宇治川・木津川経由で邪馬台国に至ったと思う。当時は水上交通が一般的であったので、この行程が最も蓋然性があると考える。

かくて、卑弥呼は、ニギハヤヒと同一人格と思われる孝霊天皇の皇女倭迹迹日百襲姫と思われ、宮内庁の陵墓の治定によると倭迹迹日百襲姫が箸墓に葬られたとするように、卑弥呼は3世紀の半ば死去し箸墓に葬られたのであろう。

（FB藤田泰太郎タイムライン投稿抜粋20/1/16）

邪馬台国・魏と狗奴国・呉

大国主の建てた**大己貴の国**「玉牆の内つ国」は倭国大乱によりニギハヤヒの邪馬台国と玉牆の内つ国の後継国の狗奴国とに2分された。上田説によれば、呉と狗奴国が連合して、魏・邪馬台国連合と対立したため、琉球から薩摩等は狗奴国域になる（北野正一、FB コメント）。狗奴国は最近の比定では東海地方としている（幻の王国・狗奴国を旅する、赤塚）。この説に、持論を加味し、狗奴の西端の国々を、越前―近江湖北・湖東―美濃―伊勢・尾張とする。そうすると、狗奴国は伊勢・尾張から四国南部、九州南部、琉球と黒潮を通じて、呉と結びつくことになる。岐阜県の荒尾南遺跡から大型船が描かれた線刻絵画土器が出土している。この大型船の線刻は、狗奴国と呉との交流を示唆するものではないか。さらに、狗奴国は、日本海に面する越前から新羅への航路も確保することになる。
（藤田）

邪馬台国が九州か大和かという不毛の論争をここで繰り返している時間はないが、一つ確かな証左として言えるのは、九州に初期耶麻壹国が筑前（宗像か）にあり、次に並立して第二の邪馬壹国が纒向から始まっていると言える。（FB情報、下岡 茂）

以下、私見。秦の始皇帝の労役から逃亡してきた秦人あるいは秦の滅亡によって亡民となった秦人に、馬韓はその東の地を割いて与え住まわせ、辰（秦）韓と名づけたという。秦人は漢人以外の民族を総称することがあり、秦人にはユダヤ人が含まれており、彼らが、中央アジア経由で、倭（ヤマト）や新羅の語源（シラキ）等をもってきたと思われる。ヤマトはヤハウェ（エホバ）の民（ヤー・ウマト）を意味するヘブライ語に由来するともいう。このヤマトが、ユダヤ人の血脈を引くスサノオあるいはその子孫により筑前に持ち込まれ、宗像近辺にヤマト（邪馬台）国が建てられた。宗像近辺や遠賀川下流域は、スサノオを太祖とする物部氏の一大拠点であり、スサノオの子孫のニギハヤヒにより、このヤマトが石見、三次、吉備を経由して大和に持ち込まれ、纒向遺跡を国都とするヤマト（邪馬台）国が建てられたと推察される。尚、代々の卑弥呼（日御子）は宗像三女神～神功皇后の系譜上に存在する。（FBコメント、藤田泰太郎）

邪馬台国誕生（1）

近江（伊勢遺跡）から大和（纒向遺跡）へ

邪馬台国の纒向、六合中心（天・地・東・西・南・北）

水上交通
日本海ルート「九州北部（博多湾）-庄内・津軽（十三湊）」
太平洋ルート「九州南東岸-仙台」
瀬戸内海ルート「九州北部（宇佐）-大阪湾」

縦断・横断ライン
由良川-加古川ライン
紀ノ川-吉野川-高見峠ー櫛田川ライン
小浜あるいは敦賀ー琵琶湖ー淀川（あるいは関ヶ原-揖斐川）ライン

交点
淡路島周辺
沼島

- **国産みの中心**
- **淡路国一宮（伊邪那岐神社）**
- **高天原（葛城・金剛山高天台説）**

ニギハヤヒが大和に入った時（すなわち卑弥呼が大和に移った時）、高天原が近江から葛城に移転したと考える。（藤田）

近江高天原

・イザナギが近江の多賀（多賀大社）に行ったことは『古事記』に書かれている。『日本書紀』には、イザナギは淡路島の（多賀伊弉諾神宮）に行ったと書いてある。
・「天の安河」を野洲川であるとして 、三上山周辺を高天原だとする。
・彦根は味鋤高彦根神（ｱｼﾞｽｷﾀｶﾋｺﾈﾉｶﾐ）と関係。
・猿田彦（海神族あるいは秦人？）を祭神とする白髭神社。猿田彦の本拠は伊勢か？
・国之常立神（神世一代）、息長氏祖？
・白髭は新羅に通じ、小松は高麗津に通じる。
・三井寺の三尾神社（祭神、伊弉諾）はかっては高島に？
・三井寺の新羅神社（祭神、素戔嗚、またはその子、五十猛命）
・志賀郡の古名は新羅郡？
・イザナギミコト・イザナミミコトは、新羅の伊西（イサ）からやってきて、豊秋津州を生んだことになってる。その子がスサノオだ。（『任那国と対馬より』李 炳銑）
・297年、新羅は伊西国に攻められ首都金城（慶州市）を包囲されるが、竹葉軍の助力で防衛に成功した。この頃、伊西国滅びる『三国史記』。
・伊西はイセに通じる。伊勢神宮（伊勢）ー伊勢遺跡（守山）ー元伊勢（籠神社）。
・彦根近辺の神社の祭神
多賀大社（イザナギノオオカミ、イザナミノオオカミ）、坂田神明宮（天照大御神、倭姫命）（米原市）、彦根城【彦根神社】（活津彦根命（イクツヒコネノミコト）、活津彦根神社（滋賀県近江八幡市安土町、アマテラスとスサノヲの誓約で誕生した第四皇子神）、千代神社（彦根市京町）（天宇受売命（アメノウズメノミコト）、高宮神社（彦根市高宮町）（瓊瓊杵尊（ニニギノミコト））、阿自岐神社（豊郷町）（アジスキタカヒコネ）、天稚彦神社（豊郷町）（アメノワカヒコ）、
・その他
太郎坊宮（東近江市小脇町）（天之忍穂耳命（アメノオシホミミノミコト）、アマテラスとスサノオの誓約（ウケイ）の際に誕生した第一皇子神）、沙沙貴神社（近江八幡市安土町）（少彦名）、大宝神社（栗東市綣）（素盞嗚尊、櫛名田比売）＝追来（おふき）神社（多々美彦）、日吉神社（大山咋神、大巳貴命）、三輪神社（栗東市大橋、大巳貴命）、高野神社（栗東市高野）（大名草彦命、紀伊の国の祖＝少彦名？）、大國主神社（高島市）（大己貴神、古宮　社波爾布神社（波爾山比賣命、彌都波能賣神）、合祀社　白雲神社（健雷命））。

御所市高天

葛城・金剛山高天台 - 奈良県御所市高天奈良県南部の御所市高天。金剛山の麓に広がる台地上に位置する。古くは葛城といわれた地域で、そこにそびえ立つ金剛山は、古くは高天原山といわれていた。付近は天上の神々が住んだ高天原の伝承地で、ここに所在する高天彦神社は延喜式では最高の社格とされた名神（みょうじん）大社で、祭神は葛城氏の祖神高皇産霊（たかみむすび）神。社殿後方の白雲峯（694m）を御神体とする。参道の両側には杉の古木が立ち並び、神さびた雰囲気を漂わせている。江戸時代初頭までは、この地が高天原史跡だというふうに考えられていた。なお、高天原の石碑はこの地区にある寺の駐車場のところにある。
(bodhisvaha.seesaa.net)

御上神社　琵琶湖東南岸・野洲に鎮座する御上神社は、アマテラスの三男・**天津彦根命**を主祭神として祀る社だけに、アマテラスの子（天津彦根命）と孫（天之御影命）の後裔・息長水依比売は、同じく天孫を自負する神武帝の子孫・開化帝の息子・彦坐王と結ばれ丹波道主王と水穂真若王を儲けます。丹波道主王は「四道将軍」の一人とされた人物で垂仁帝の皇后となって景行帝、五十瓊敷入彦命などを生んだ日葉酢媛命の父親で、後者が近淡海国造として近江南部で活躍した安直（やす・あたい）の祖となった人物です。（銅鐸と甲山古墳そして三上山ムカデ伝説、Net)

邪馬台国誕生（2）

魏志倭人伝

ニギハヤヒとアメノヒボコが大和に侵攻して、葛城勢力を圧倒した。そこで、和邇氏の巫女、卑弥呼を近江より大和に遷らせ、邪馬台国（**虚空見つ倭（日本）の国**）を建てた。『日本書記』の「箸墓伝承」、宮内庁の箸墓の被葬者の比定、『魏志倭人伝』の卑弥呼の墓の記述、並びに埋納土器の年代測定等により、卑弥呼は孝霊天皇の皇女の倭迹迹日百襲姫命と推察される。従って、ニギハヤヒは孝霊天皇に当たり、卑弥呼は孝霊天皇の養女となり、倭迹迹日百襲姫と称したと思われる。（藤田）

虚空見つ日本（倭）国

『日本書紀』の記述 【昔、伊弉諾尊目此国曰「日本者浦安国、細戈千足国、磯輪上秀眞国。（秀眞国、此云袍圖莽句爾。）」復、大己貴大神目之曰「玉牆內国。」及至饒速日命乘天磐船而翔行太虛也、睨是鄉而降之、故因目之曰「虛空見日本国矣。」】にあるように、大己貴大神（大国主命）の建てた「玉牆內国」に続くのが饒速日命（ニギハヤヒ）の建てた「虛空見日本（倭）国」で邪馬台国に当たる。尚、このが『記紀』において国名としてのヤマトの初出である。（藤田）

（図説　古代史、成美堂出版）

任那・伊都国連合
・任那とは、対馬に興り、伽耶諸国と九州北中部諸国（伊都国が核）とを併せて成立していた国と思える。崇神とは九州の分国（伊都国か）の王であり、大和に侵入して新王権を立てた人格と考えられる。「桓檀古記、旧唐書」
・「日本」は音韻上「任那」につながる。
・任那は邪馬台国の勢力範囲。
（古代日本異族伝説の謎、田中　＋　藤田）

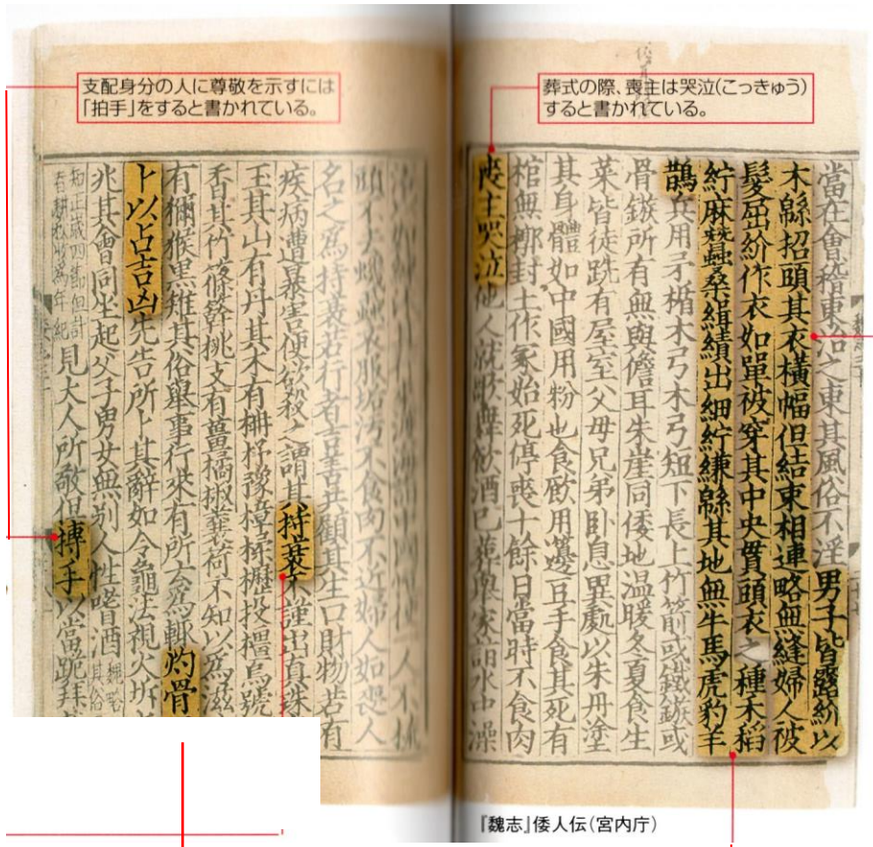
伊都国（博多湾一帯、任那の北九州分国か？）
・伊都國の長官を爾支（にし、じき、にぎ）。邪馬台国は、一大率を常駐させ、北部九州を行政的・軍事的にも統括する任務や女王の行う外交の実務を厳格に監督し実行する任務を持たせていた。
・伊都国は穴門を支配下に置き、瀬戸内海への出入りを監視していた。
(藤田)

「にし」といえば、新羅王号、尼師今（ニシキン）を、
「にぎ」といえばニニギやニギハヤヒを想起する。

狗奴国：玉牆の内つ国（大己貴の国）の後継国
　大国主は弥生時代中期後葉には、山陰・北陸の玉、出雲の砂鉄、磁鉄鉱を基盤とする鉄器と出雲の銅鉱を基盤とする青銅器（銅鐸に代表される）のネットワークを西日本を一体に張り巡らせた（出雲古国）。ところが、紀元前後に新羅のスサノオが出雲が侵攻し出雲古国は滅んだ。大国主（八岐大蛇（ヤマタノオロチ）か）は敗死、アジスキタカヒコネら残存の大国主一族は日本海側を東に勢力圏を遷した。そして、近江の伊吹山を中心とする地域（伊富岐神社の祭神にヤマタノオロチも挙げられている）に本拠を置き、浦安の国、さらには伊勢遺跡を都にする玉牆の内つ国（大己貴の国）を建てた。二世紀末、ニギハヤヒにより大己貴の国が亡ばされ、邪馬台国が建てられた。玉牆の内つ国（大己貴の国）の直接の後継国が狗奴国であると考える。
(藤田)

邪馬台国建国後、邪馬台国は任那・伊都国連合を勢力下置いた。

魏 志 倭 人 伝



『魏志』倭人伝(宮内庁)

（図説　古代史、成美堂出版）

見る銅鐸の大量埋納

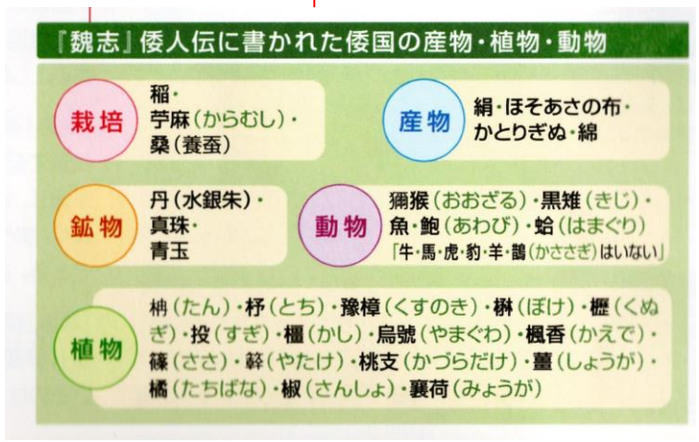
滋賀県野洲市は我が国有数の銅鐸出土地として知られている。大岩山古墳群がある滋賀県野洲町小篠原の大岩山の中腹から、明治14年(1881)に14個の銅鐸が発見された。昭和37年（1962)には、東海道新幹線建設のための土取り工事がその出土地付近で行われ、工事現場から新たに10個の銅鐸が出土した。3個ずつ3組入れ子になっていたものが一括して出土し、さらに後日、少し離れた場所からもう一個出土した。こうして大岩山中腹は、細かく見れば3地点に合計24個の銅鐸が埋納されていたことが明らかになり、全国有数の銅鐸出土地となった。

これらの銅鐸出土を記念して、野洲市は出土地の近くに市立歴史民族資料館を建設した。この博物館の目玉は、この地で出土した高さ134.7㎝を誇る日本最大の銅鐸である。

銅鐸の大量埋納は、弥生時代後期から古墳時代にかけて政治的な動きの中で、ムラ同士の統合が進み、それぞれのムラでそれまで保有していた銅鐸が、統合の際に集められ埋められたものと解釈されている。したがって、大岩山で大量の銅鐸が集積されていたことは、この地域にこれまでとは違った大きな政治集団が誕生したことを裏付けるものである。

（大岩山古墳群、Net）

邪馬台国の建国に伴って祭器が「見る銅鐸」から大型銅鏡に移行。（藤田）



（図説　古代史、成美堂出版）

（方形周溝墓）

邪馬台国の有力候補地「纒向遺跡」に墓域か　方形周溝墓3基　奈良・桜井市
（産経WEST　2017.11.6 20:40）

邪馬台国の有力候補地とされる奈良県桜井市の纒向（まきむく）遺跡で、方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）3基（3世紀代前半から中ごろ）が新たに見つかり、同市纒向学研究センターが6日、発表した。場所は平成21年に見つかった同遺跡の中心的な建物とみられる大型建物跡の南約220メートルで、埋葬者は同遺跡に存在したクニを支えた人物の墓とみられる。現場近くに過去に前方後方墳「メクリ1号墳」も確認されている。

見つかった3基のうち最大の墓は一辺が約9メートルで、周囲は幅約1・3メートルの溝で囲われている。残る2基はそれより小さく、いずれも埋葬施設は残っていなかった。

現場の西側では、昭和54～62年の発掘調査で、同遺跡唯一の前方後方墳であるメクリ1号墳（全長28メートル）や3基の方形周溝墓、土器棺墓などを発見。今回、方形周溝墓が新たに見つかった場所は、メクリ1号墳を中心とした墓域と考えられるという。

同遺跡では、王墓とみられる前方後円墳の纒向石塚古墳（全長94メートル）周辺でも方形周溝墓が出土。同センターは今回の墓域の被葬者について、纒向石塚古墳のグループより格下に当たる「中堅クラスの人たち」とみている。

石野博信・元兵庫県立考古博物館長は「被葬者は王権を支えた人たちで、出土遺構は邪馬台国時代の階層構造の形成過程を示す資料」としている。

卑弥呼は近江の伊勢遺跡から纒向遺跡に遷ったと考えており、方形周溝墓や前方後方墳と聞けば近江の気配を感じる。（藤田）

神奈備は三輪山か

纒向遺跡

弥生時代の拠点集落跡としては奈良県で最大とされる唐古・鍵遺跡の約10倍の規模を持ち、藤原宮に匹敵する巨大な遺跡である。また、都市計画がなされていた痕跡と考えられる遺構が随所で確認されている。

纒向遺跡の出現から廃絶にいたるプロセスを考えると、庄内式初頭に突如として現れ、布留1式期に廃絶を迎えている。暦年で言うと、石野博信氏は西暦180年頃、寺澤薫氏は200年頃に出現したとされ、両者の間で若干意見が異なる。遺跡は4世紀初め頃には消滅するが、両氏とも布留0式期に大きな画期があったとされる。この時期には墳墓の規模だけでなく、集落の規模も飛躍的に拡大している。庄内式期には1km²程度であった範囲が、布留0式期には3km²にも膨れあがり、遺構の密度もより濃いものになっている。

纒向地域は、弥生時代には過疎地だったようで、発掘調査でも弥生時代の遺構や遺物はほとんど見つかっていない。そのような場所に2世紀末から3世紀の初め頃、突如として大集落が形成された。しかも、農業を営む一般的な弥生集落とは異なった様相を呈しており、「都市型」の集落だったようだ。そのことが、この遺跡の大きな特徴である。

纒向遺跡「都市型」集落と判断される根拠はいくつかある。

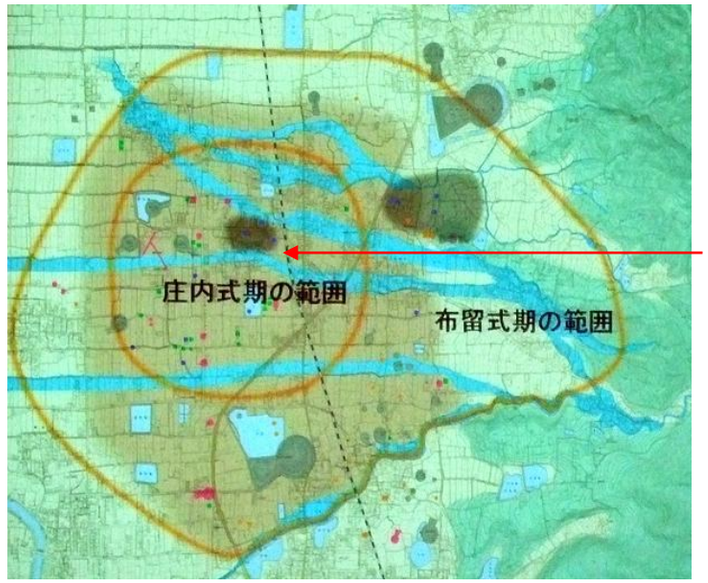
遺跡出土の鋤と鍬

(1) 農具である鍬(くわ)の出土量がきわめて少なく、土木工事用の鋤(すき)が多く出土している。寺澤薫氏の研究によれば、纒向遺跡出土の鍬と鋤の比率は5:95で圧倒的に鋤が多い。他の弥生遺跡に比べると鍬は極端に少なく、鋤は溝や運河の掘削専用に用いられたものと思われる。遺跡内の調査では、まだ水田や畑跡が確認されておらず、農業はほとんど営まれていなかったようだ。

(2) 遺跡の最盛期には、この時代の一般集落に見られる竪穴式住居が築かれていない。その代わりに、高床式住居や平地式住居で居住地域が構成されていた可能性があり、無数の掘立柱跡が見つかっている。

(3) 複数の地点で鞴(ふいご)の羽口や、バジル・漢式三角鏃を真似た木製鏃などが出土しており、鍛冶工房や木製品加工工場が存在したことが明らかになっている。また、第61次調査では、庄内3式期(3世紀中頃)のV字溝の埋土から**ベニバナ**の花粉が検出され、国内最古の事例となった。出土した花粉量の多さから、溝に流された染織用の染料の廃液に含まれていたものと考えられている。ベニバナは本来我が国には自生しない植物で、染織など当時の最新技術を持った渡来人とともに伝来したとみられる。こうした出土品から、纒向遺跡では庄内式期の段階からすでに大陸系の高度な技術者集団が移り住んでいたことが窺える。

(続き)



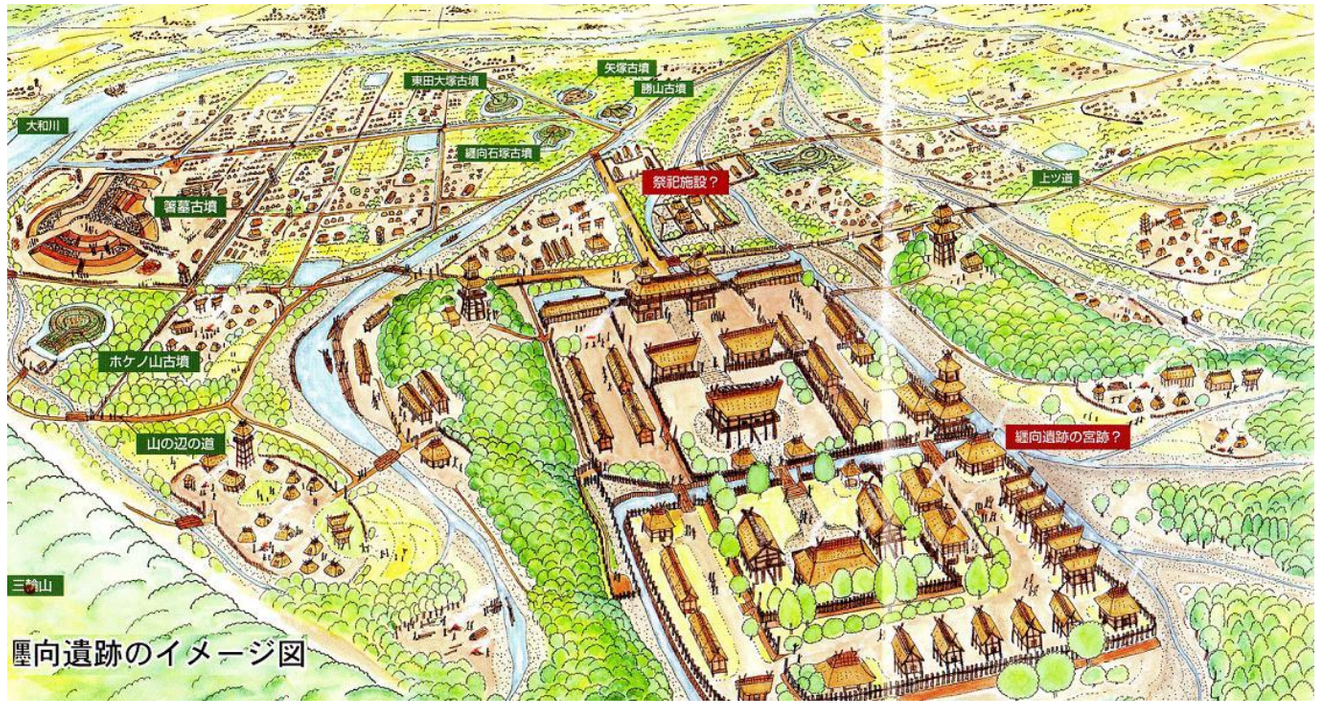
卑弥呼の時代

纒向遺跡は藤原京と同程度の広がりをもつ。

暦年代と纒向編年の対応

暦年代	纒向編年	土器出土遺構	対応する土器型式
180年-210年	纒向1式	北溝北部下、層灰粘土層	弥生V様式末
210年-250年	纒向2式	辻地区土坑2	庄内I式（庄内古式）
250年-270年	纒向3式	南溝南部、黒粘土(1)下層	庄内II式（庄内新式）
270年-290年	纒向4式	辻地区土坑4下層	庄内III式（庄内新新式），布留0式
290年-350年	纒向5式	辻地区土坑4上層	辻地区土坑7 布留Ⅰ式

卑弥呼の時代



纒向遺跡のイメージ図

纒向遺跡(つづき)

(4) 纒向遺跡は奈良盆地の東南部という各地域への交通の要所に位置し、東西の物資の交流拠点としての性格を持っていた。纒向大溝は大和川に連なっており、瀬戸内や九州との交易も可能だ。その証しは、各地から運び込まれた外来系土器の量の多さに示される。外来系土器の出土数は全体の15～30%に達し、地域別では東海が半数を占め、山陰、北陸、河内、吉備と続く。したがって、九州から関東にいたる広範囲な地域から持ち込まれていることが分かる。器種別では甕と壺でほぼ80%を占め、甕は全体の約60%に達する。おそらくこれらの土器で各地から様々な物資が運び込まれ、当時としては異例の大きな市が開かれていたのだろう。箸墓古墳が築かれた付近に、「大市」という地名がかって存在したことが知られている。

「平成25年度　弥生フェスティバル連続講演会「纒向と箸墓」講演会資料（大阪府立弥生文化博物館作成）」

通貨について、当時の通貨は塩を使った証拠が出ています。それと魏銭が流通していたようです。塩は海水を独特の形の土器に入れて下から火を焚べながら継ぎ足して塩を作ります。拳ほどの塩の塊を1かと呼びこれが物を数える時に1個、2個、3個と呼ぶ元になったようです。また、塩に替わる物として貨幣(かへい)といいます。
天草・通詞島「古代製塩所跡資料館」（FB情報、渡邉竜也）

長野 剛 氏のイメージした卑弥呼像 (2013)

纒向遺跡の出土品（抜き書き）
1. ベニバナの花粉、ベニバナ染め
2. 木製輪鐙
3. 絹製品（匂い袋）
4. 木製仮面
5. 大型祭祀跡抗から桃核、ガラス製粟玉

（図説　古代史、成美堂出版）

纒向遺跡 刀剣の柄・鞘が出土　近くに武器工房存在か　桜井／奈良

毎日新聞2019年5月30日地方版

邪馬台国の最有力候補地とされる版井市の纒向（まきむく）遺跡の発掘調査で、３世紀前半～４世紀前半とみられる遺構から刀剣に関連する木製品などが見つかった。刀剣の持ち手の柄（つか）１点や鞘（さや）２点で、専門家は「近くに武器の工房があった可能性がある」と指摘する。【藤原弘】

纒向遺跡で見つかり、展示されている鹿角製の刀剣の柄＝奈良県桜井市芝の市立埋蔵文化財センターで、藤原弘撮影

水に浸けられている木製のさや＝奈良県桜井市芝の市立埋蔵文化財センターで、藤原弘撮影

桃核の出土　纒向と吉備は桃核でも繋がる

産経新聞　2018.5.15

纒向出土の種 卑弥呼時代

科学的分析で判明

邪馬台国の有力候補地とされる奈良県桜井市の纒向遺跡で見つかった桃の種について、放射性炭素（C14）年代測定法で調査したところ、おおむね西暦135～230年に収まることが分かり、市纒向学研究センターが最新の研究紀要で報告した。女王・卑弥呼（生年不明～248年ごろ）が邪馬台国をおさめたとされる年代と重なり、「畿内説」を補強する研究成果といえそうだ。

同遺跡では平成21年、複数の建物跡が見つかり、このうち大型建物跡の南側の穴から22年に2千個以上の桃の種が土器とともに出土。うち15個の種を名古屋大の中村俊夫名誉教授が放射性炭素年代測定法で調査したところ、測定できなかった3個をのぞき西暦135～230年のものであることが分かった。徳島県埋蔵文化財センターの近藤玲研究員による測定でも、ほぼ同じ結果が出たという。

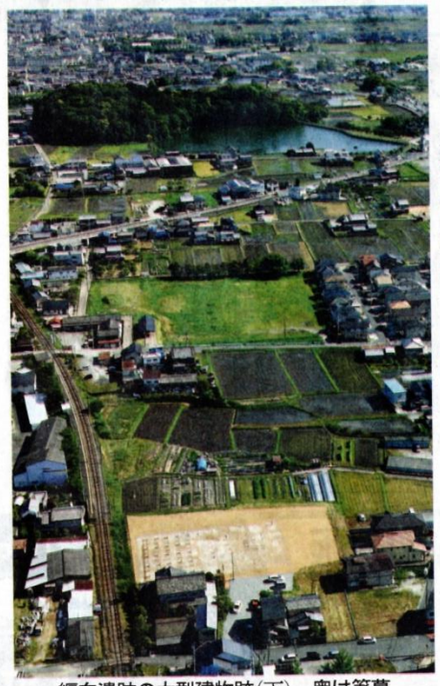
纒向遺跡は初期ヤマト政権の首都で、魏志倭人伝に登場する邪馬台国の有力候補地。桜井市北部にあり、広さは東西約2キロ、南北約1・5キロに及ぶ。昭和40年代からの発掘調査で、卑弥呼の宮殿跡とも考えられる3世紀前半の大型建物跡や最古級の古墳、運河跡のほか、東海地方や吉備（岡山県）、出雲（島根県）など全国各地の土器が確認され、当時の中心地だったことが明らかになっている。

また、遺跡内の古墳から出土した土器付着物についても、放射性炭素年代測定法による調査で西暦100～200年との分析結果が出ているという。

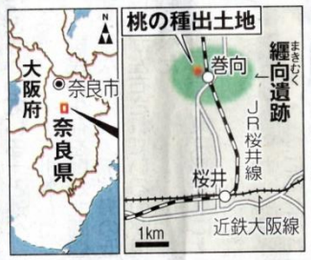
同市纒向学研究センターの寺沢薫所長（考古学）は「複数の機関による調査で同様の結果が出たことは重要な成果だ。魏志倭人伝に書かれた卑弥呼の時代と一致しており、これまでの調査成果とも合致する」と話す。

一方、「九州説」を唱える高島忠平・佐賀女子短期大学名誉教授（考古学）は「遺跡の年代を示す複数の資料がないと確実性が高いとはいえず、桃の種だけでは参考にしかならない。もし年代が正しいと仮定しても、卑弥呼とのつながりを示す根拠にはならず、邪馬台国論争とは別の話」と反論している。

産経WESTに動画



纒向遺跡の大型建物跡（下）。奥は箸墓古墳＝14日午後、奈良県桜井市（本社ヘリから、安元雄太撮影）



纒向遺跡から出土した桃の種＝平成22年9月、奈良県桜井市

邪馬台国「畿内説」を後押し

纒向遺跡　桜井市の三輪山西部に広がる東西約2キロ、南北約1・5キロの巨大集落跡。弥生時代末期に出現し、古墳時代前期に姿を消した。邪馬台国の有力候補地で、大和王権発祥の地とされる。卑弥呼の墓との説がある箸墓（はしはか）古墳など最古級の前方後円墳6基が集中。3世紀前半の大型建物跡、物資輸送用の運河が見つかっており、インフラが整備された都市だったと考えられている。また、関東から九州で作られた土器も出土。全国から人が集まってきたことを裏付けている。

放射性炭素(C-14）年代測定法では、桃の種は西暦135~230年に採取されたものであることが分かり、纒向遺跡は3世紀前後から存在した。即ち、纒向遺跡は邪馬台国の都と結論付けられる。

桃太郎伝説、孝霊天皇の皇子彦五十狭芹彦命（ひこいさせりひこのみこと、吉備津彦命）、稚武彦命（わかたけひこのみこと）の兄弟は、ヤマト王権の将帥（四道将軍）として温羅（うら）と呼ばれる製鉄に優れた吉備国の武装勢力（地方豪族やそれに与する渡来人の集団と考えられている）を制圧するために吉備国に遠征しこれを平定したといわれている。さらに、両皇子の軍勢は讃岐国、出雲国にまで侵攻し、ヤマト王権の支配を拡大させたと考えられている。ちなみに、このとき両皇子が連れて行った犬飼部、猿飼部、鳥飼部とよばれる役職の家臣の一人が、元首相犬養毅の祖先ともいわれる犬養健命（いぬかいたけるのみこと）であったといわれている。

産経新聞　2022.8.16
奈良・纒向遺跡から中型犬の骨が出土。弥生時代までは小型犬が主流でこの中型犬は大陸から渡来したと思われる。

纒向遺跡出土の桃

卑弥呼（倭迹迹日百襲姫）と吉備津彦（桃太郎）とは姉弟！

吉備では弥生後期の各遺跡から1万3000個余りの桃核が出土しており、特 に倉敷市の弥生後期最大の墳丘墓である楯築遺跡の南の上東遺跡では9606個もの桃核が出土していた。しかも壱 岐の遺跡についで国内二例目の波止場 状遺跡からの出土であり、大量の土器や 貨泉、卜骨なども同時に出土していた。（桃核祭祀は吉備邪馬台国の卑弥呼の鬼道か、岡將男、Net）

↔

卑弥呼の信奉する鬼道（幻術。妖術）とは当時中国の魏の国で盛んだった宗教で、道教の走りでありそれが日本に直輸入されたらしい。卑弥呼はこの新興宗教（明治維新で言えば西欧文化）で国を治めようとしたが、幸いにも異常気象（倭国大乱をひきおこしたか）が去ったことで鬼道の有用性が証明され、連合国家の長になれたのだそうだ。ところでなぜ鬼道と道教が同じかと言うと、纒向遺跡から大量の桃の種が出土したからだという。

道教では桃は仙花と呼ばれ不老長寿の象徴で、祭祀では必ず使用されるものだという。（スペシャル　邪馬台国を掘る　古代の宗教戦争、NHK (23.1.25) Net）

漢鏡の編年と分布

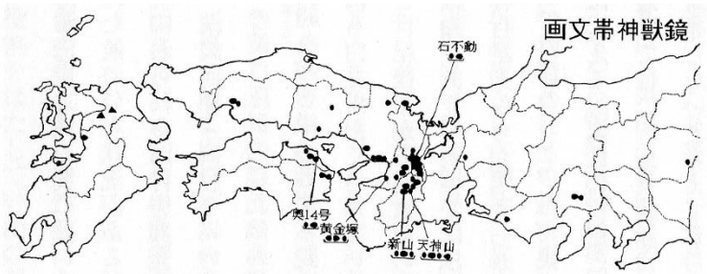
2世紀前半まで、漢鏡の出土が九州で圧倒的に多いが、2世紀後半のニギハヤヒの東征の頃から九州以東での漢鏡の出土数と分布域が急速に拡大する。

岡村秀典氏の分類で6期（2世紀前半）までの漢鏡が、九州に圧倒的に多かったのに対し、最後の7期の漢鏡（2世紀後半から3世紀）は九州で衰退し、九州以東で出土数と分布域が急速に拡大することから、倭国乱の終息による各地の交流の活発化と邪馬台国の根拠を示し、邪馬台国の位置の特定にも大きな根拠を与えました。

また、卑弥呼は魏と交流する前の三世紀初め、遼東半島の公孫氏から独占的に入手した画文帯神獣鏡を各地の首長に分配しましたが、その分布は畿内に集中していました。北部九州の玄界灘沿岸や、狗奴国と想定される濃尾平野にはほとんど分布していません。ところがヤマト政権が安定するにつれ、三角縁神獣鏡の分布範囲は飛躍的に拡大するとして、鏡の動きを通して倭政権の拠点と成長の過程を、岡村氏は裏付けました。
（古代国家はいつ成立したか、都出比呂志）

三角縁神獣鏡の謎

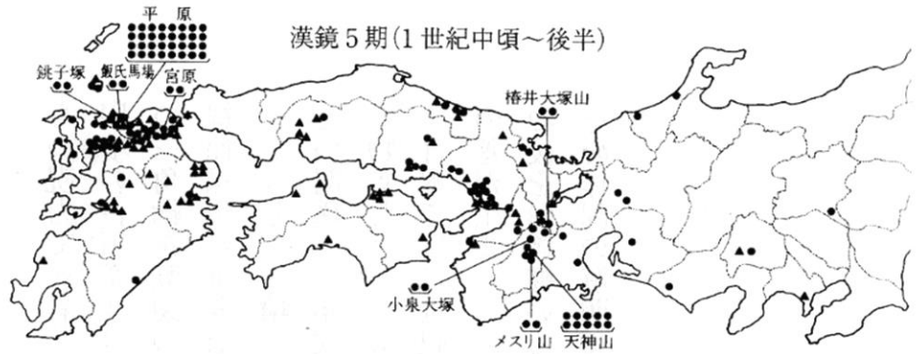
三角縁神獣鏡は魏と晋の王朝が邪馬台国に与えた特鋳鏡と西晋の滅亡により鏡が入手できなくなったために、日本で造り始めた模倣鏡がある。特鋳鏡の制作年代を卑弥呼が中国の魏に初めて使いを送った西暦239年から280年台までとし、また模倣鏡の制作年代を4世紀第1四半期（300～325年）から70～80年間に限定されると結論付けた。
（邪馬台国から大和政権へ、福永）

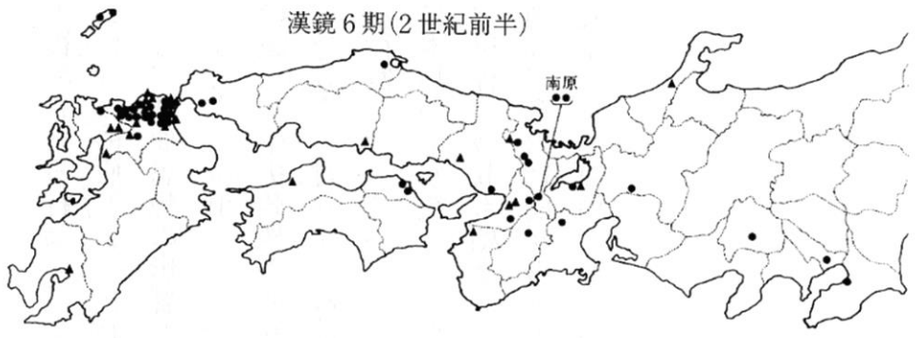


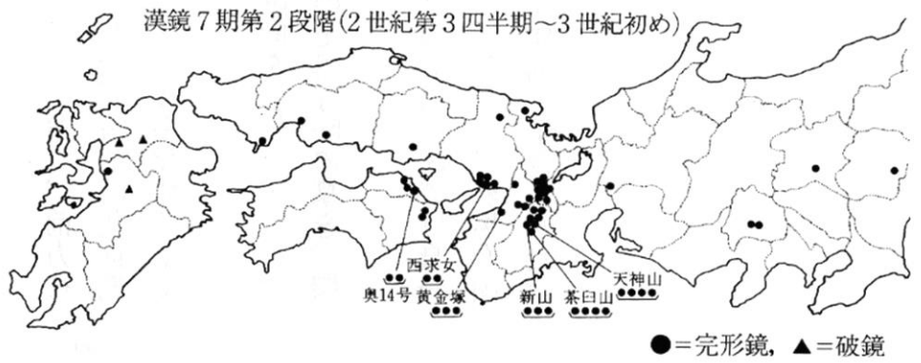
中国鏡の分布の変化（岡村秀典「卑弥呼の鏡」による）
漢鏡４～６期の●は弥生遺跡出土鏡、○は古墳出土鏡、
▲は破鏡。画文帯神獣鏡の●は完鏡、▲は破鏡

初期三角縁神獣鏡の領域

輸入品の三角縁神獣鏡を「前期」と名づけ（国産品は「後期」とします）、その出土地域は図のようになります。（三角縁神獣鏡の初期分布からみたヤマトの国々 、Net）







漢鏡分布の変遷（岡村秀典氏による）

三角縁神獣鏡は魔鏡か

「卑弥呼の鏡」は「魔鏡」　３Ｄプリンターで復元

日本経済新聞2014/1/29

３次元（３Ｄ）プリンターを使って「卑弥呼の鏡」との説がある古代の青銅鏡「三角縁神獣鏡」の精巧な金属製レプリカを製作したところ、壁に投影した反射光の中に鏡の背面に刻んだ文様が浮かび上がる「魔鏡」と呼ばれる現象が起きることが分かり、調査した京都国立博物館の村上隆学芸部長が29日発表した。

「卑弥呼の鏡」は「魔鏡」だった。３Ｄプリンターで作ったレプリカで初めて確認

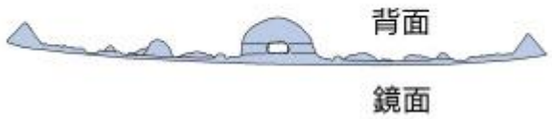
（29日、京都市）

鏡は古代の祭祀（さいし）で用いたと考えられているが、具体的役割は不明だった。この現象は太陽光線など平行光で特に顕著で、人心を掌握するのに用いた可能性や、太陽信仰との関連を指摘する意見もあり、古代鏡の研究に新局面をもたらしそうだ。

こうした現象を起こす鏡は古代中国の漢代に登場。日本では江戸時代に隠れキリシタンが用いたものなどが知られるが、国内の古代鏡で確認されたのは初めてという。

レプリカは、愛知県犬山市の東之宮古墳から完全な形で出土した鏡２面（直径はそれぞれ約24センチ、約21センチ）を復元したもの。三角縁神獣鏡の平均的な組成と同じ比率の銅、スズ、鉛の金属粉を材料にレーザー積層造形法で製作した。

復元模造した三角縁神獣鏡の断面図



この現象は背面に凹凸があり、厚みが不均一な鏡を研磨する際、鏡本体にひずみが生じて厚い部分がかすかに凹面に、薄い部分が凸面になって反射光にムラが出ることが原因。全体が薄く、背面に彫りが深い突出した文様があるなど厚みに幅がある鏡だと現れるという。

復元した三角縁神獣鏡は背面の中央や三角形の縁部、神獣像などが厚く、中央の最厚部は約２センチあるのに対し最も薄い部分は１ミリ以下。

村上部長は「他の古代鏡でも同じ現象が起きる可能性はあるが、この三角縁神獣鏡は特に条件がそろっている。なぜこんなに薄く仕上げたのか謎だったが、現象が起きるまで研磨した可能性もある」と指摘。「古代鏡の役割を考え直す手掛かりになれば」と話している。

三角縁波文帯四神二獣鏡（レプリカ。岐阜県各務原市、埋蔵文化財調査センター。一輪山古墳出土）

邪馬台国時代の国産大型青銅器の不在

弥生中期から弥生終末期にかけて、倭人は大陸起源の銅鐸、青銅武器、銅鏡などをみずからの創意でつぎつぎと大型化し、集団の結束を保つ祭器として、また、権威のシンボルとして重い役割をになわせてきた。こうした倭人社会にあって、弥生終末期から古墳時代初頭にかけての一時期だけが国産の大型青銅器を欠いている、すなわち突線紐式銅鐸や広形銅矛が消えて、古墳時代の倣製鏡生産が本格化するまでの約100年間である。この間にも青銅器生産が継続していることは、いやむしろ青銅器生産の普及がより進んでいることは、小型鏡や銅鏃などとともにふいごの羽口や銅滓などの鋳造関連遺物を出土する遺跡が増えることをみても疑いない。

首長層の地位が視覚的にも強く顕示される古墳時代へ向かうなかで、その威信財である大型銅鏡などの必要性がます一方であったことを考えるなら、国産大型青銅器の不在といううらはらの現象は、政治的主導権を握った邪馬台国勢力による青銅器製作規制のあらわれではないのか。

（邪馬台国から大和政権へ、福永）

邪馬台国の所在地　邪馬台国の都は大和･纏向

『三国志』には、『魏書』という巻がありその中の「東夷伝」のまたその中の「倭人の条」に、邪馬台国までの道筋が記載されています。この「倭人の条」のことを『魏志倭人伝』と呼び、邪馬台国の所在地論争の元となっています。その道筋を略すると次のとおりです。

①倭国は朝鮮帯方郡（朝鮮半島中西部）から見ての東南の海に浮かぶ島国であり、山が多い国である。昔は百余国が並立し、漢の時代に朝見する者もあった。現在では、わが国と交流がある国は三十国ほどである。帯方郡より倭国に行くには、海上を海岸線に沿って南下し、その後東に向かい 朝鮮半島の南岸に至る。7000里程の航海である。

②朝鮮の海岸線を離れて1000里程海を渡ると対馬国に至る。その国は孤島で400里四方の大きさであり、土地は険しく深林が多く、道路はけものみちの様相を呈している。1,000戸あまりの民家がある。良い農地はなく、海産物を主食とし自活し、船にて朝鮮や倭国と交易を行っている。

③南に向かって1000里程進むと一大国（壱岐）に至る。300里四方の大きさで、竹林や雑木林が多く、3,000戸あまりの民家がある。多少の農地はあるが農作物で自活できるほどではなく、船にて朝鮮や倭国と交易を行っている。

④また南に向かって1000里程海を渡ると末盧国（唐津）に至る。山際の海岸沿いに4,000余戸あまりの民家があり。前を行く人が見えないほどに草木が茂る。住民は海の深い所、浅い所関係なく潜って魚貝類を捕獲する。

⑤東南へ500里程、陸路で進むと伊都国（糸島）に至る。1,000戸あまりの民家がある。王は存在するが邪馬台国に統属し、帯方郡の役人が往来し公使館もある。

⑥東南に100里進むと奴国（那国）に至る。20,000戸あまりの民家がある。

⑦東に向かって100里進むと不彌国に至る。1,000戸あまりの民家がある。

⑧南方に向かうと投馬国に至る。海路で二十日間程の行程である。50,000戸程の民家がある。

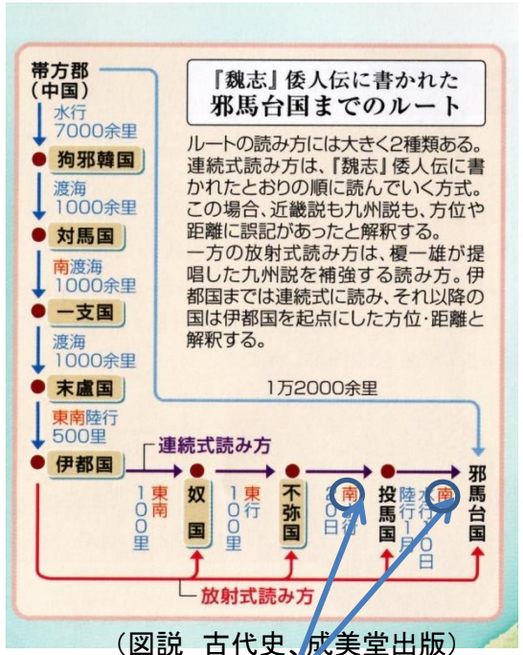
⑨南方に向かうと邪馬台国に至る。女王が所在する都である。海路で十日間、陸路でひと月程の行程。70,000戸あまりの民家がある。

注）『魏略』では、伊都国は「万余戸」とある。

魏志倭人伝の記載の様相から、編者の陳寿あるいはその部下の魏使は北九州は実際に視察したが、その先の女王国の邪馬台国には行っていないと考える。

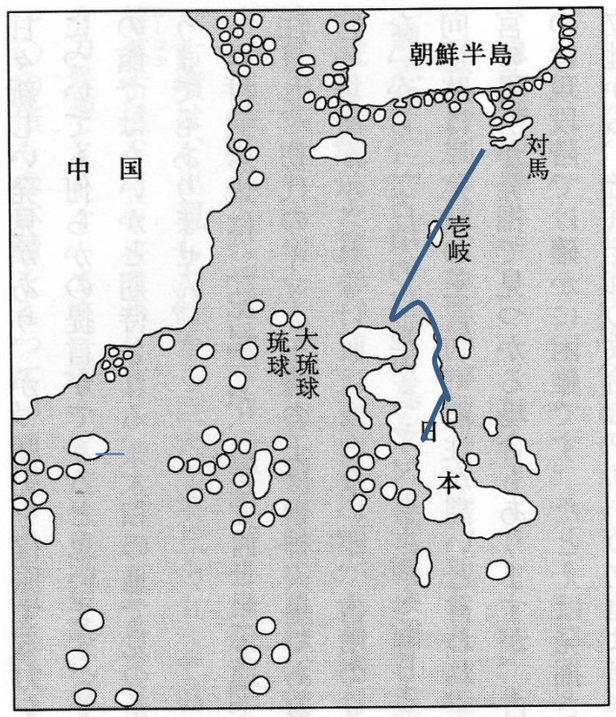
魏の地理認識を考えるうえで参考になるのが、1402年に朝鮮で作成された「混一疆理歴代国都之図」（右図）である。中国の元代の地図をもとにしているといわれるが、日本列島を、九州を北とし、そこから南方に延びる列島として描いている。この地図が古くからの中国の地理認識が継承されているとすれば、邪馬台国は朝鮮半島の南に位置するとの認識であったのであろう。従って、**南**水行20日投馬国に至ると**南**水行20日陸行一月邪馬台国に至るにはの**南**を実際の**東**にと読み替えた方が理屈に適っている。従って、邪馬台国は九州ではなく近畿地方に存在したと考える方が矛盾しない。（ヤマト王権、吉村　＋　藤田）

『魏志倭人伝』の「當在會稽東治之東」は、「会稽は今の揚子江河口の南にある。東治はさらにその南の台湾島の向側にあたる。これらの地域の東方に邪馬台国がある。」と読めます。邪馬台国畿内説をとる方々は『魏志倭人伝』の邪馬台国の方角が間違っており反時計回りに90度回転しているとみます。即ち、南は東に当たります。この当時の中国人の間違った方角感覚によると、邪馬台国は朝鮮半島の遥か南方の沖縄の北の中之島から台湾の東側に南北延びていると方角違えをしたと思います。（明石 洋一、FB情報　＋　藤田）



（図説　古代史、成美堂出版）

南を東とする
（下図参照）



「混一疆理歴代国都之図」に見る日本列島の位置　（ヤマト王権、吉村武彦）

『隋書俀（倭）国伝』

倭国は百済、新羅の東南、水陸三千里の大海の中に在る。山の多い島に居住している。魏の時、通訳を介して中国と交流したのは三十余国で、みな自ら王を称していた。夷人（倭人）は里数を知らない。ただ日を以って計算している。その国境は東西は五ヶ月行、南北は三ヶ月行でそれぞれ海に至る。地勢は東が高く西が低い。邪靡堆（ヤビタイ）を都にする。すなわち、魏志の言うところの邪馬臺（ヤバタイ）である。古には、楽浪郡境（後漢書、この頃帯方郡は存在しない）及び帯方郡（魏志）から一万二千里離れていて、會稽（郡）の東にあり、儋耳に近いと言われてた。

『隋書倭国伝』では、倭国は邪靡堆（ヤビタイ）を都にする。すなわち、魏志の言うところの邪馬臺（台）（ヤバタイ）である。また、隋書倭国伝で「古云去樂浪郡境及帶方郡並一萬二千里在會稽之東與儋耳相近」と云うように、魏志では邪馬台国は「當在會稽東治之東」とする。この記載から明らかなように。古代中国人（魏から隋）は、倭（ヤマト）国は台湾の東側にあると誤解していたことが分かる。

『魏志倭人伝』では、狗奴国は邪馬台国の南に位置するとしているが、これも方角違えで実際は東である。（藤田）

邪馬台国への道程

投馬国は出雲国（出雲王朝）

『魏志倭人伝』で注目される国には、不弥国と邪馬台国の間に登場する投馬国がある。投馬国が注目されるわけは、戸数が5万余戸という大国であり、これは邪馬台国の7万余戸に次ぐ第二の規模であることと、また、その道程の記載のされ方から、『魏志倭人伝』に出てくる国々は、距離的に見て、二つの大きな集団（対馬国～不弥国と、邪馬台国～狗奴国）に分けられが、投馬国はその両者にも属していない、孤立した離れた地域に所在しているのではという感じなのである。投馬とはどこか。

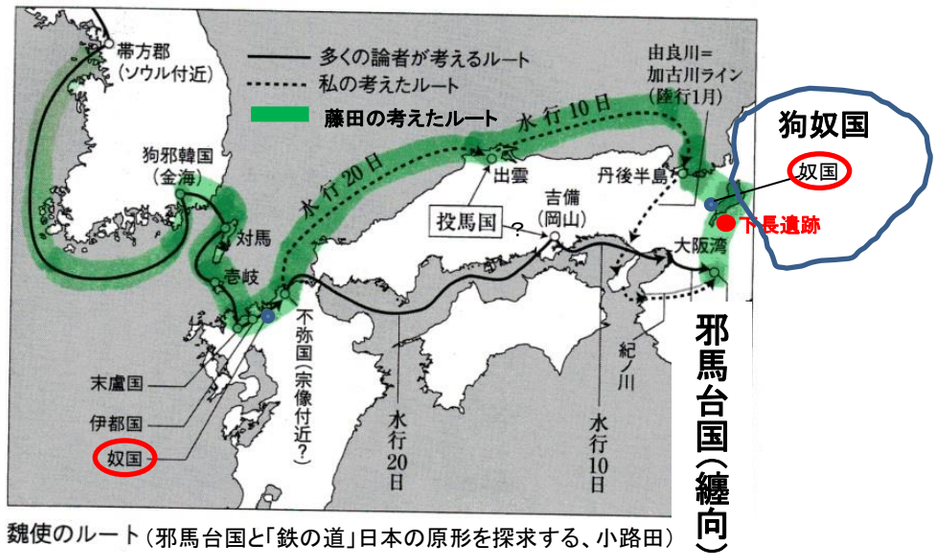
	上古音	中古音	推定音
投馬	dug-mag	dðu-ma (mba)	ツマ

このサイトでは、上古音により近い発音から推測して、「投馬」国のことを「ツマ」国と解釈して、投馬国＝出雲国説を提唱したい。イツモの「イ」は母音の発語、音が軽いから自然に省かれる。「マ」と「モ」は同類音で相通ずるから、出雲と投馬両国名は全く一敦する可能性が高い。この場合、『魏志倭人伝』に出てくる投馬国、邪馬台国までの水行を日本海沿岸航路と解釈していくことになる。

宋版『大平御覧』の「倭人伝」では、投馬が於投馬(エツモ)と書かれている。今日、出雲の人は出雲を「エヅモ」となまって言うから、この時代もそうで、中国人はそれを聞き取ったのかもしれない。また、投馬国の官名が異彩をはなっているのも注目だ。彌彌（ミミ）と彌彌那利（ミミナリ）である。実は、この「ミミ」がつく名称は、『記紀』では、出雲系や神代系に多く登場する名前である。これらの理由から、投馬国＝出雲国だと思われる。
（邪馬台国総論、Net）

投馬国と考えられる古代出雲は、島根県安来市から妻木晩田遺跡（吉野ヶ里遺跡の5倍の面積）に及ぶ大国で、邪馬台国時代を含む弥生後期から古墳時代前期に栄えた。また、吉備が投馬国であるとの説があるが、吉備から河内あるいは紀伊へ水行10日は妥当であるが、そこから邪馬台国へ陸行1月かかるとはとても思えない。尚、邪馬台国時代の東行海路には日本海航路が瀬戸内海航路を優先していたと思われる。（藤田）

『魏志倭人伝』に記されているように、奴国は筑前と近江・湖西の2箇所にあった。



魏使のルート（邪馬台国と「鉄の道」日本の原形を探求する、小路田）

帯方郡から邪馬台国へのルート（緑太線）
帯方郡から不弥国（宗像周辺か）までのルートは確定している。不弥国から投馬国（左欄の説明のように、出雲国（出雲東部）と思われる）までを、『魏志倭人伝』の南方に向かうを東方に向かうと読むと矛盾なく水行20日で出雲に着く。次の水行10日で小浜湾（小浜市）に着く。その後、お水送りのルート（次スライド）を取って琵琶湖経由で宇治川・木津川を辿り大和（纏向）に向かうのが水上交通が一般的であった当時としては一番蓋然性がある。このルートの中継地が野洲川河口の下長遺跡であろう。また、奴国を筑前と近江の2箇所に表示した。筑前の奴国が伊都国に圧倒され、奴国の嫡流の和邇氏が近江湖西に遷ったため、『魏志倭人伝』には2箇所の奴国の記載があると考えている。(藤田)

『魏志倭人伝』には、奴国が二度登場する。最初は筑前の奴国で、もう一つの奴国は、「女王の境界尽きる所」、即ち狗奴国（近江北部と美濃を中核とする）に入る前の女王国の東端に位置する。後者の奴国は、筑前の奴国の嫡流の和邇氏が遷った近江湖西の国で、筑前の奴国に因んで奴国と称したのではないか。（藤田）

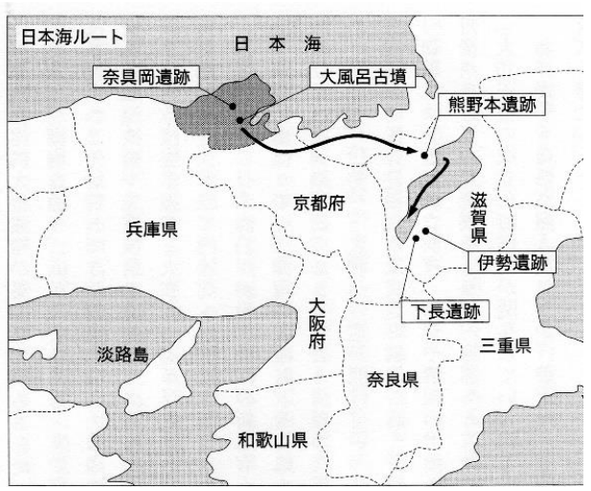
『魏志倭人伝』と『太平御覧』倭人伝の比較

●『魏志倭人伝』は南宋の書写本が底本。投馬国について
「南至投馬國　水行二十日　官曰彌彌　副曰彌彌那利　可五萬餘戸」とあり、
邪馬台国（邪馬壹（やまと）國）については
「南至邪馬壹國　女王之所都　水行十日陸行一月　官有伊支馬　次曰彌馬升　次曰彌馬獲支　次曰奴佳鞮　可七萬餘戸」とあります。

●『太平御覧』「四夷部」（成立。「魏志曰く」として倭人伝の引用。北宋時代（AD980頃）の通行本「魏志倭人伝」が底本）
投馬国について
「又南水行二十日至於投馬国、戸五万、置官曰彌彌、副曰彌彌那利」とあり、
邪馬台国については、
「又南水行十日、陸行一月至耶馬臺国、戸七万、女王之所都、其置官曰伊支馬、次曰彌馬叔、次曰彌馬獲支、次曰奴佳鞮」とあります。
『太平御覧』倭人伝の注目するべき点は、旅程記事にて、里程から日程に切り替わる投馬国と邪馬台国(邪馬壱国)への道程が、行為の反復を意味する「又」にて接続されている点である。つまりこれは、旅程記事を直線的に読むべきことを明確に示している。更に、『魏志倭人伝』の「投馬国」であったところが、「於投馬国」となっている。「於投馬国」という表記で、それが九州北部から水路で二十日であるなら、それが「イヅモ国」であることは、明白である。
注）宋版『太平御覧』「倭人伝」では、投馬が於投馬(エツモ)と書かれている。今日、出雲の人は出雲を「エヅモ」となまって言うから、この時代もそうで、中国人はそれを聞き取ったのかもしれない。
（『魏書倭人伝』の探求、岡上祐、藤田）

「お水送り」と「お水取り」
若狭彦神社（若狭国一宮）は、上社・下社の2社からなり、上社を若狭彦神社（祭神：若狭彦大神（彦火火出見尊））、下社を若狭姫神社（祭神：若狭姫大神（豊玉姫命））という。別称として遠敷明神とも呼ばれる。昔、実忠和尚が十一面悔過法要中に、全国の神の名前を唱えて勧請した時、若狭の国の遠敷明神（おにうみょうじん）だけが、遠敷川で魚をとっていたために勧請に遅れたので、その責任をとって明神が、「遠敷川から水を送る」と言った。すると、若狭井戸のところから二羽の黒白の鵜が飛び立ち、そこから霊水、閼伽井水が湧き出たという。奈良東大寺二月堂で行われる「お水取り」に先がけて行われる小浜市神宮寺の「お水送り」は、奈良と若狭が昔から深い関係にあったことを物語る歴史的な行事です。

「お水送り」のルートは和邇氏が大和に進出したルートか。（藤田）



日本海ルートの熊野本遺跡（滋賀県新旭町）には大規模な鉄加工工房の跡がある。丹後に陸揚げされた半島の鉄が、この工房に持ち込まれ種々の鉄製品に加工されたと思われる。また、741個のガラス玉が出土し、これらのガラスは丹後の大風呂古墳から出土したガラス釧と同じ成分とのことである。また、副葬品に蛤があり、これも日本海沿岸との交流が深かったことを示す。（前ヤマトを創った大丹波王国、伴など）

下長遺跡：邪馬台国時代の日本海からヤマトへの中継地か

下長遺跡（弥生時代後期から古墳時代前期＝邪馬台国の時代）

古高町の工業団地一帯に3世紀に発達した集落跡があります。ここは、境川と呼ばれる守山市と栗東市との境にある川に近く、発掘すると大きな川跡がいくつも見 つかりました。この川を利用した村が形成され、両岸にはたくさんの住居跡も見つかっています。 また、一角にはこの周辺を治めていた有力な豪族の館が発見されています。

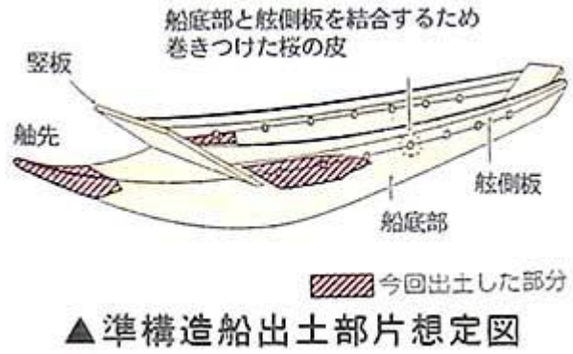
この下長遺跡は伊勢遺跡が衰退する時期に隆盛期を迎えており、栄えた時期には時間差がみられます。あたかも伊勢遺跡の跡を継承するように見えます。伊勢遺跡の終焉とともにヤマト王権がスタートし、そこへの物資供給の拠点として重要性が増し、運用管理のための支配者が現れ、隆盛を極めたと思われます。
（守山弥生遺跡研究会）

下長遺跡の威儀具と準構造船出土部片

下長遺跡からは儀杖（ぎじょう）、柄頭（つかがしら）、団扇（うちわ）形木製品などの威儀具が出土しています。儀杖には「組帯文（くみおびもん）」が、柄頭には「直弧文（ちょっこもん）」がそれぞれ施されています。これらの文様はヤマト政権と密接な関係のある地域でしか出土していないといわれ、この地域の豪族の権力の大きさが想像されます。

また、準構造船は舳先（へさき）と、丸木を刳（く）り込んだ船底に舷側板（げんそくばん）を桜の皮で結合した部分が出土しました。船全体からみれば僅（わず）かな部分にすぎませんが、古墳時代の造船技術をはっきりさせた発見です。

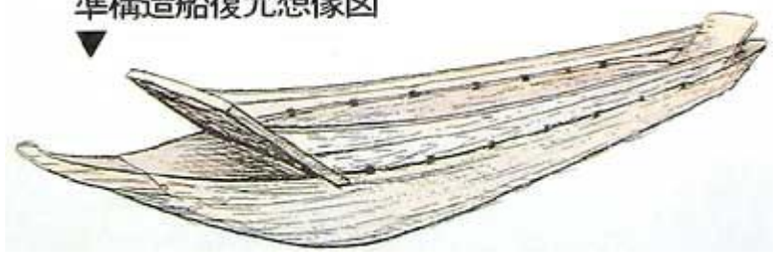
琵琶湖を北上して山越えすると日本海、北陸へ、南下して淀川水系を下れば大阪湾、近畿へ、野洲川を遡上（そじょう）すると伊勢湾、東海へと通じることが可能です。陸路が未発達であった古墳時代には、水上交通が輸送に大きな役割を果たしていたと想像されます。守山はこれらの地域を結ぶ交通の要衝（ようしょう）にあって、豪族は水上交通により権力を増大していったと考えられます。
（下長遺跡、Net）

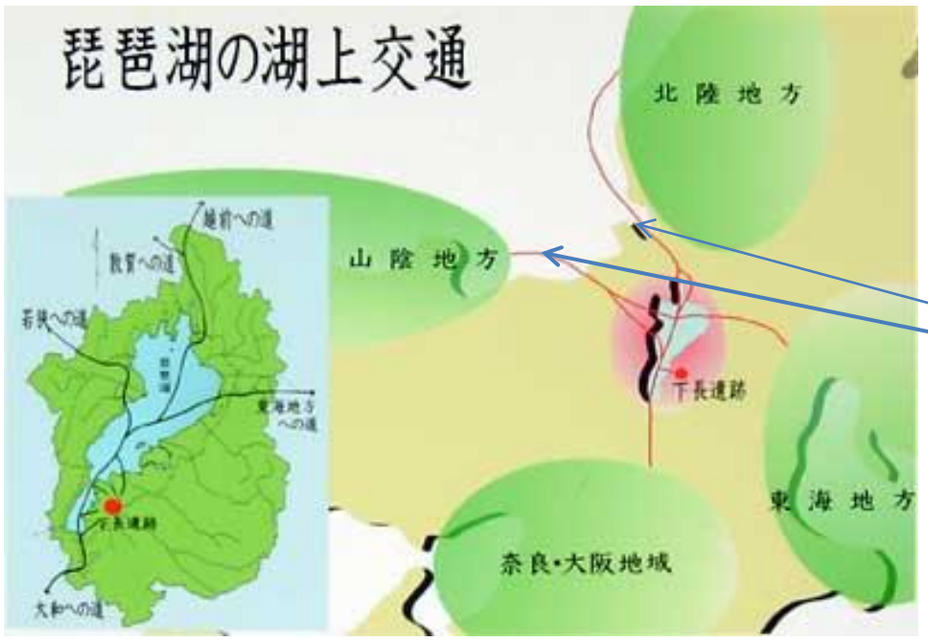


▲準構造船出土部片想定図

下長遺跡出土品

準構造船復元想像図





小浜 → 敦賀

日本海交易

邪馬台国の統治機構

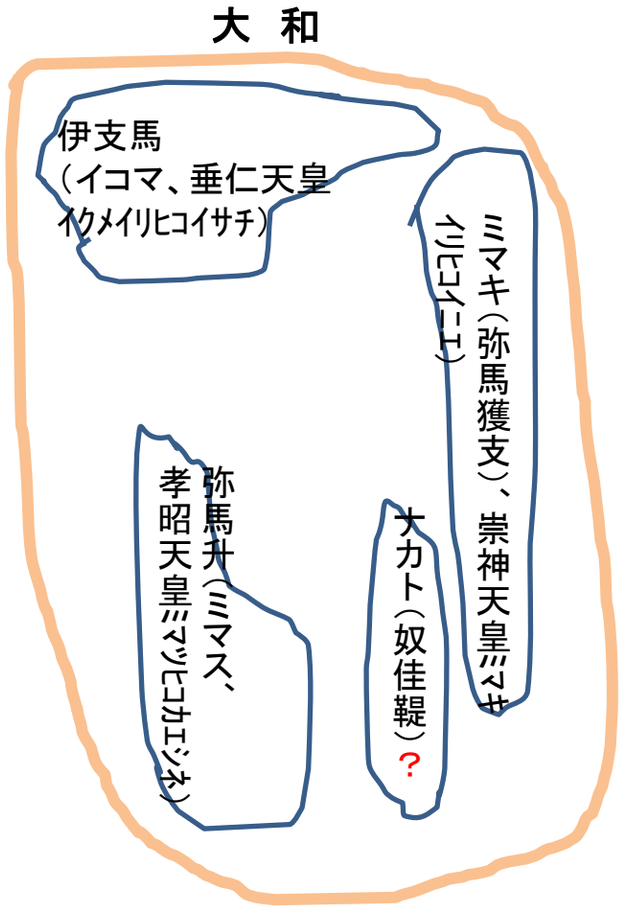
『魏志倭人伝』に邪馬台国の統治機構が紹介されている。それによれば、王を支える、四官が存在した。それは、「伊支馬」、「弥馬升」、「弥馬獲支」、「奴佳鞮」の四官である。天皇の名前を探せば垂仁天皇は伊支米（いくめ）、孝昭天皇は御真津（みまつ）、崇神天皇は御真木（みまき）という。四官のうち 3つはそれぞれ天皇の名前だとすれば、そのそれぞれの御陵は垂仁天皇は奈良市、孝昭天皇は御所市、崇神天皇は天理市にある。四官の名前が天皇の名前に繋がり、それが御陵のある地域の名前に繋がっているとすれば、「伊支馬」は 垂仁天皇の伊支米（いくめ） であり、いまでいう生駒市周辺の生駒（いこま） ではないか。同様に御所市周辺をミマス「弥馬升」＝ 葛城、天理市周辺をミマキ「弥馬獲支」＝ 三輪 と言ったのではないか。そして四官の残りの「奴佳鞮」は、ナカト であり、それらの真ん中と言う事ではないか。奈良盆地をぐるっと囲み 真ん中にも王を支える豪族がいた、と読める。
（最後の2文には疑問符が付く。奴佳鞮は奈良県内か？）
（出雲と大和、村井）

邪馬台国の読み

古い時代には、上代特殊仮名遣いといい、「き・け・こ・そ・と・の・ひ・へ・み・め・よ・ろ」とその濁音の母音には甲類の音節「i・e・o」と乙類の音節「ï・」ë・ö」があった。「台」は「と」読むが、「と」の音には甲類と乙類があり、「台」は乙類である。つまり、邪馬台国の「台」の字は乙類であり、「やまと（あるいは、やまど）」と読む。現代語では「やまと国」が本来の読み方であろう。
「やまと」は特定の地名を指すと思われるが、「やまと」の地名は全国各地にある。近畿地方の「大和」は乙類の「と」である。邪馬台国九州説の「やまと」と考えられる、九州の旧筑後国の山門郡や旧肥後国の菊池郡山門郷は甲類の「と」となる。したがって、音節でも、畿内説が有利である。
（ヤマト王権、吉村）

『古事記』によると孝霊朝に吉備津彦が西道に派遣されたという。吉備津彦は吉備の反乱を制圧した後、さらに西行し、任那・伊都国連合を邪馬台国の支配下に置いたと考える。この西行に伴って庄内式土器や方形周溝墓が筑紫に伝搬したと思われる。
（藤田）

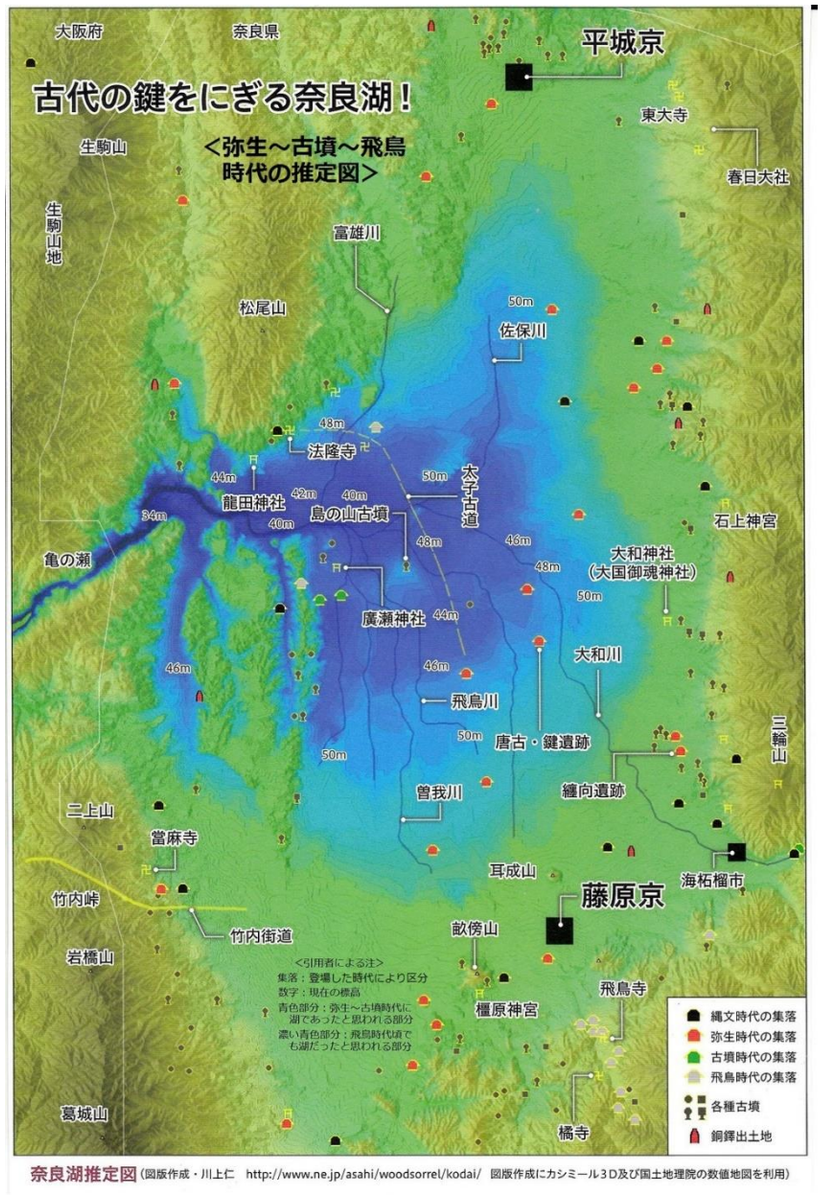
邪馬台国の四官



大和湖（奈良湖）の情景

大和湖は、弥生時代、邪馬台国時代、古墳時代と徐々に狭まり農地と居住地が拡がった。

奈良湖推定図。下図によれば、縄文遺跡は水辺、湿地帯をさけて山麓の微高地に分布しているが、弥生時代の農耕集落（唐古鍵遺跡など）は湿地帯に分布している。面白いのは古墳時代から飛鳥時代の古墳や宮殿・宮都跡は稲作生産の拠点である水辺・湿地ではなく三輪山の山辺に分布している。やがては湿地の無い盆地南の飛鳥の地に遷っている。



（大和湖（奈良湖）：生駒の神話、Net）

狗奴国（大己貴の国「玉牆の内つ国」の後継国）

藤田

狗奴国の位置付け

先述のように『魏志倭人伝』に記載の方角を南を東へと90度左に回転させると邪馬台国を大和にきちんと位置図けることが出来る。この方角の修正は倭人伝に記載のすべての方角に当てはめることができる。従って、邪馬台国は奴国（筑前）の東側にありその東側に狗奴国があることになる。こうすると邪馬台国を西日本に狗奴国を東日本と隣り合わせに位置付けることができる。（狗奴国の西端は、越前ー近江湖北・湖東ー美濃ー伊賀ー伊勢となる。）邪馬台国と狗奴国をそれぞれ西日本と東日本に位置付けることにより、邪馬台国と狗奴国の積年にわたる抗争を地理的観点から妥当化できる。この狗奴国の位置付けは、S字甕や前方後方墳が東日本に分布しているとう考古学的証拠（幻の王国・狗奴国を旅する、卑弥呼に抗った謎の国へ、赤塚）とも合致する。
（藤田）

狗奴国は大国主の国

大国主の国は銅鐸の国であり、弥生時代後期では浦安の国さらに大己貴の国「玉牆の内つ国」（近江伊勢遺跡が都か）と呼ばれたと思われる。2世紀後半、ニギハヤヒはアメノヒボコと協働して東征し大国主勢力と戦う「倭国大乱」が起こった。ニギハヤヒ側が優勢となったが戦いは膠着状態となった。そこで、ニギハヤヒは大国主と和邇氏の巫女、卑弥呼を盟主に共立して邪馬台国（虚空見つ日本の国)を建てた。この建国に伴い都が近江の伊勢遺跡から大和の纒向遺跡に遷った。一方、大国主は伊吹山を神奈備とし北近江と美濃を核とする玉牆の内つ国の後継国、狗奴国を立て、邪馬台国との共存の道を選んだ。狗奴国の都は、近江の稲部遺跡と思われる。両国はしばらく平和裏に共存し、それぞれ東と西に拡大した。狗奴国は東海地方から東日本一帯に勢力を伸ばし、邪馬台国は南朝鮮と九州北部の任那・伊都国連合を勢力下に置いた。

邪馬台国の卑弥呼が老齢になり統治能力が弱まると邪馬台国と狗奴国は再び抗争をするようになり、卑弥呼の死後倭国は再び乱れた。物部（ニギハヤヒ）一派は、任那・伊都国連合から崇神天皇招き入れ（崇神東征）、大和の大国主勢力を一掃し、ヤマト王権（崇神王朝）を立てた。崇神天皇の御代、狗奴国側の戦況が不利になり、ニギハヤヒの子、天香久山（尾張氏の祖）の尾張侵攻を許した。

卑弥呼の後継者、狗奴国出身の台与（オキナガミズヨリ姫か）は、日子坐王の妻になり狗奴国の存続を図った。垂仁天皇の御代、日子坐王の権勢は弱体化し、ヤマト王権は東国に勢力を伸ばした。その後景行天皇の御世、ヤマトタケルがさらに東征し、東海道や北陸道の国々を支配下においた。しかし、東征の帰り狗奴国の神奈備の伊吹山（狗奴国の最後の砦か）での戦いに敗れ、敗死した。景行天皇自身も美濃に遠征している。次の成務天皇の御世に狗奴国が亡び、ヤマト王権による倭国統一が完了した。

ちなみに、スサノオが退治したのが八岐大蛇（ヤマタノオロチ）でヤマト王権が退治した伊吹山のヤマタノオロチとどちらもヤマタノオロチたる大国主勢力が敗北したことを暗示していると思う。（藤田）

稲部遺跡は狗奴国の都か

狗奴国のS字甕、多孔銅鏃や前方後方墳（近江が発祥の地か）の分布をみると彦根市は狗奴国の領域にはいる。彦根市の稲部遺跡から邪馬台国時代の大型建物跡が出土した。この建物は邪馬台国の纒向遺跡の大型建物に匹敵する。稲部遺跡は狗奴国の都ではないのか？近くの豊郷は邪馬台国の台与（オキナガミズヨリ姫か）の出身地と考える識者もいる。

狗奴国は、北東近江を抑えて越前・角鹿からの日本海航路を確保し、美濃など東国への物資の供給を絶やさないことが狗奴国の存続にとって必須なことであった。また、伊吹山麓は鉄鉱石が豊富で製鉄業が盛んで、伊吹山麓を抑えることが狗奴国の繁栄に不可欠である。従って、狗奴国の核は近江北部や美濃にあると考えることは理にかなっており、稲部遺跡が狗奴国の都であり、美濃の荒尾南遺跡もまた極めて重要な拠点であった思われる。

狗奴国出身の台与は日子坐王の妻になり、二人は崇神朝および狗奴国との共存をはかり、但馬、丹後、若狭、近江と美濃を勢力下においた。垂仁朝になると日子坐王派は崇神勢力との政争に敗れ、狗奴国もまた没落していった。（藤田）

角鹿（敦賀）は狗奴国の外港か？

狗奴国は大己貴の国「玉牆の内つ国」の後継国と見なされる。この『日本書紀』記載の「玉牆の内つ国」は、当時の実際の国名としては修辞に満ちている。私見では、「玉牆の内つ国」の実際の国名は狗奴国ではないかと考えている。

「玉牆の内つ国」も狗奴国も大国主の国と考えられる。大国主は越から渡来したと思われる銅鐸を祭器にしていた。海神族と考えられる大国主もまた越から渡来したと推察する。狗奴国は奴国（海神族の国）に狗（いぬ）が付加した国名で、百越（越族）のうち犬祖伝説を有する一族（大国主一族）が渡来し出雲古国さらに玉牆の内つ国（狗奴国の一部も含む）を建てたのであろうか。（藤田）

藤田

稲部遺跡（彦根市）ー狗奴国の都か

滋賀に邪馬台国時代の大型建物跡、鉄や土器出土

YOMIURI ONLINE, 2016年10月17日 21時52分

滋賀県彦根市の弥生～古墳時代（2～5世紀）の大規模集落跡、稲部いなべ遺跡で、3世紀中頃では国内最大級の大型建物1棟の跡が出土し、市教育委員会が17日、発表した。

昨年6月からの調査で、建物約80棟の跡が出土した。このうち大型建物跡は幅11・6メートル、奥行き16・2メートル。同時期では、奈良県桜井市の纒向まきむく遺跡の大型建物跡（幅19・2メートル、奥行き12・4メートル）に次ぐ規模という。纒向遺跡の建物は、古代中国の史書『魏志倭人伝』に登場する邪馬台国の女王・卑弥呼の宮殿という説もある。

3世紀としては最大規模の鍛冶工房とみられる竪穴建物23棟以上の跡も確認。建物跡などから鉄片や鉄製の矢尻といった鉄関連遺物が計約6キロ出土した。大和（奈良県）、越前（福井県）、尾張（愛知県）などで出土するのと同じ形状をした土器の破片も多数見つかった。各地から運ばれてきたとみられる。

「国」を治めた首長の居館の可能性もある大型建物跡（彦根市で）＝菊政哲也撮影

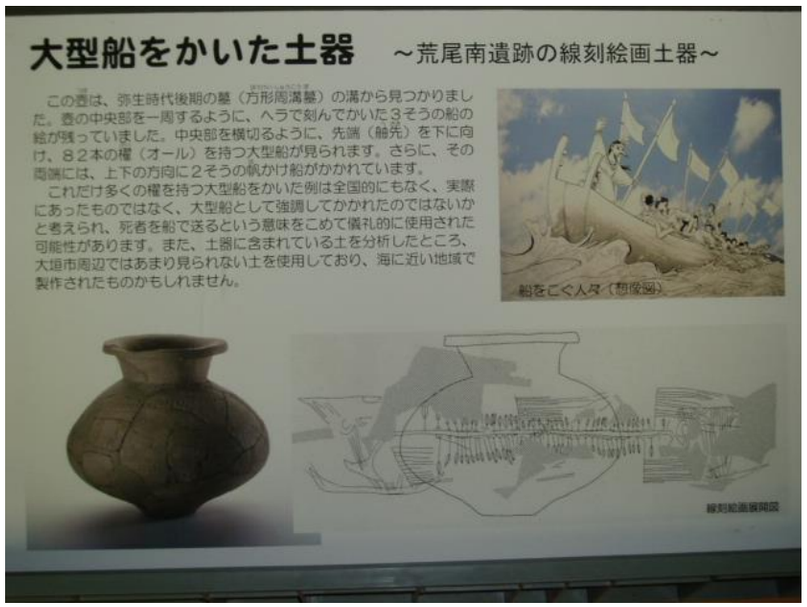
稲部遺跡出土した鉄製の矢尻（左2つ）など鉄関連の遺物＝菊政哲也撮影

狗奴国と関連すると思われる遺跡群

林・藤島遺跡ー近江北部と美濃を核とする狗奴国と関連かー

越前は、邪馬台国の卑弥呼時代（三世紀）に、鉄器の出土数が日本一多い地域である。翡翠の最先端工場である林・藤島遺跡（福井市泉田町）だけで、二千点もの鉄器が出土した。当時は貴重品だった鉄の工具も1100点と全国最多の出土数で、鉄を加工する鍛冶（かじ）の跡も見つかっている。九州や出雲の鉄器は、剣や鏃のような戦闘用や権力誇示用が多いのに対して、越前での鉄器は、実用的な道具が多いのが特徴です。すなわち、鉄器利用の先駆者的な地域でした。鉄器の流入は、北部九州を介さずに、北部朝鮮から直接したとも考えられる。四隅突出型墳丘墓、鉄鉱石の産地、そして、高句麗南下による流民との関係が考えられる。福井県内には玉造りの遺跡もあり、鉄と玉を中心とした交易の拠点で、大きな経済力を有したことを示すものです。「越前三国を拠点とする継体の通称『ヲホド王』のホドは火処で炉のことであり、『製鉄王』の意味があった」とする学説がある。（[mixi]福井で鉄の大量出土、Net　＋YouTube八俣遠呂智）

荒尾南遺跡（大垣市）は、弥生時代の遺跡としては東海でも最大級の規模を誇ります。この遺跡からは、多くの土器や石器、木製品などが出土しています。大型船が描かれた土器や、土笛などの楽器類、様々なまつり道具などが見つかっており、当時の人びとの暮らしぶりや精神世界を垣間見ることができます。2000年の時を経て遺跡が語る、時空を超えた歴史のロマンを感じていただきたいと思います。（岐阜県博物館ウェブサイト、Net）



荒尾南遺跡発掘調査その三

井ノ向遺跡

1868年、坂井市春江町井向の農民が大小2個の銅鐸を発見。銅鐸には、2世紀の準構造船の線刻画があった。舳先がすり上がっており、マストの構造物がある。10人以上の乗員がみられる。当時の外航船か。（八岐遠呂智、YouTube）

狗奴国（大己貴の国「玉牆の内つ国」の後継国）　神奈備は伊吹山か

狗奴国の拡がり

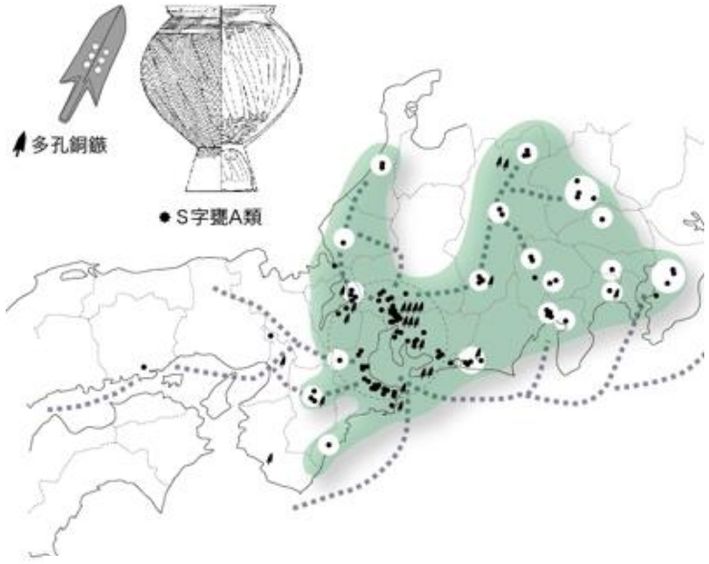
3世紀代の卑弥呼の時代の話だ。当時ヤマトの纒向遺跡には女王・卑弥呼が30ヶ国を統治し、畿内～瀬戸内～北九州（任那を含む）までの西日本エリアを治めていた、図でいう青い世界が邪馬台国連合である。一方、赤い領域は狗奴国の世界である。近江北部、美濃、伊勢湾・濃尾を基点とし東海～太平洋沿岸～中部山岳～北関東平野までの広い領域が狗奴国連合である。まさしく天下分け目の関ヶ原の戦いのように、青と赤の2極化の世界が対峙していたのである。

　邪馬台国連合は前方後円墳と庄内甕、狗奴国連合は前方後方墳とS字甕の世界である。右の写真がS字甕で、非常に薄くて軽い土器である。当時日常の煮炊きする必需品は甕である。この甕は製作された土地の生活空間や風土を反映しているという。甕は独り歩きしない、必ず人とともに移動する。私が居住している宇都宮市南部でもS字甕が検出されている。そこは下野国でも最古の前方後方墳が築かれた茂原古墳群が所在する。また、上毛野氏の先祖は前方後方墳に葬られている。そこまで東海の人が進出してきたことが分かる。それほど当時は人の動きが激しかったのである。

（趣味悠遊・古代を訪ねて、門田康洋、Net）

S字甕の分布　S字甕は狗奴国製のハイテク土器で東国一円に広がる

第1次拡散期（東日本へ）
廻間I式末葉からII式前葉にかけて，東海系土器が，主に東日本に広く拡散する現象がある。第1次拡散期と呼んでいる。おおむね西暦200年前後と推定し，S字甕B類の登場が象徴的である。供伴するS字甕A類の分布をトレースすると，その分布経路と場所が推定できる。因に東海系銅の代表的な存在である「多孔銅鏃（たこうどうぞく）」の分布も重ねると面白い。（S字甕研究室、Net）



第2次拡散期（近畿へ）
廻間II式後葉からIII式前葉にかけて，再び東海系土器（S字甕C類）が広がる現象が見られる。それは，第1次拡散期とまったく異なり，西へ，近畿へ動き始める。ベクトルを異にした現象と考えられる。おおむね西暦250年前後と推定。（S字甕研究室、Net）

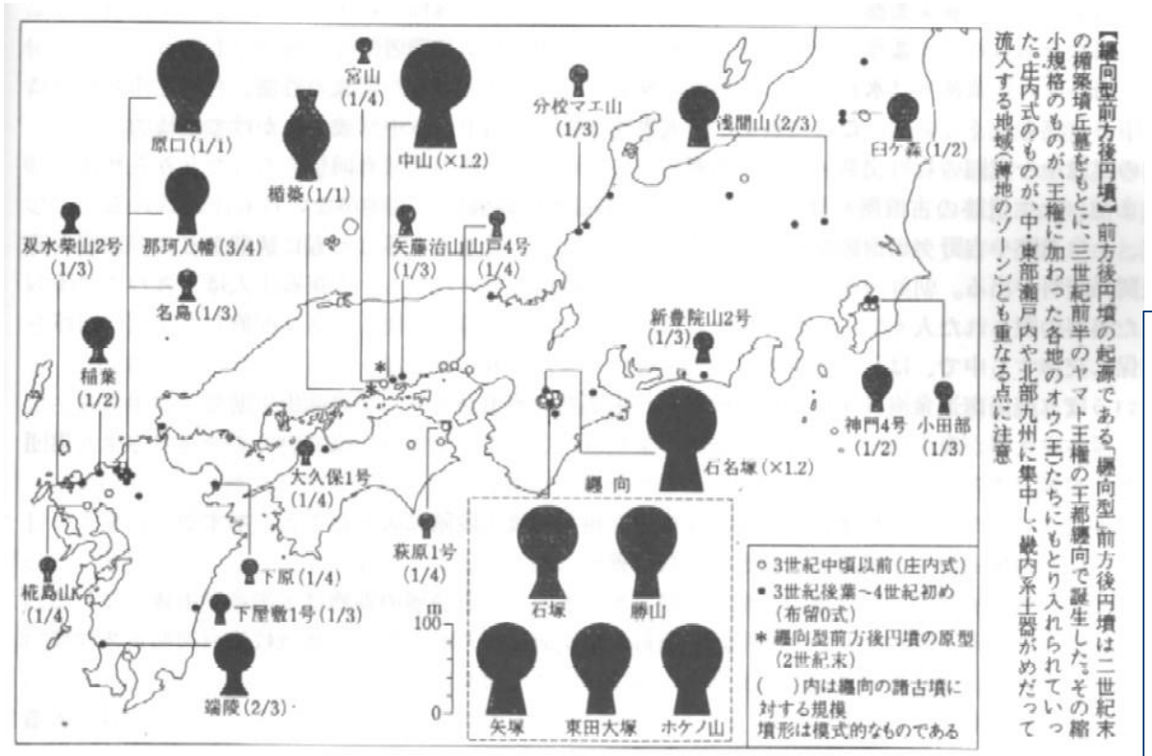
廻間様式の代表がS字甕
三世紀の東海地域を考古学的な土器様式のまとまりでいうと、廻間様式によって代表される地域と考えている。ここでいう廻間様式とは以下の内容を含んでいる。濃尾平野低地部（尾張低地）に起源を持つ土器様式であり、S字甕（がめ）・パレス壺・ヒサゴ壺といったような、古くから固有名詞をもって語られている、独自の形を有する土器文化でもある。おおむね2世紀後葉に成立し、4世紀前半ごろまで継続する。分布範囲は、尾張低地部を中心として、その影響は伊勢湾沿岸部に広く見られ、こうした廻間様式の代表選手がS字状口縁台付甕（S字甕）であり、パレス壺・ヒサゴ壺でもある。

　そのなかでとくにS字甕は、廻間様式とともに誕生する「軽量薄甕」と呼称してよい特殊な土器。さらに重要な点は、S字甕には不思議な規律が認められるという点で、S字甕を製作する場合には必ず特殊な混和（こんわ）材を含めなければいけないという約束事が認められる。その特殊な混和材とは三重県一志郡を流れる雲出（くもず）川の砂礫であることが次第に明らかとなってきた。つまりS字甕を製作するには、必ず雲出川の砂礫を混和材として用いるという厳格な規定が存在したことにほかならない。それはおそらくS字甕誕生にまつわる出来事から継承され、伝統化したものと推測しているが、とにかく廻間様式を代表するS字甕にはこうした宗教性に近い製作法が見られる。伊勢湾沿岸部に広く分布する3世紀前半期のS字甕は、すべてこうした約束事を厳格に守ってつくられていた。単なる炊飯用の道具だけではないと思われる。そこにはある種の習慣を共有するといった精神的な内容が加味されていたと考えておきたい。

（プログ　古代からの暗号、Net）

前方後円墳と前方後方墳

前方後円墳は邪馬台国纏向起源、前方後方墳は狗奴国近江北部起源



【纒向型前方後円墳】前方後円墳の起源である「纒向型」前方後円墳は二世紀末の楯築墳丘墓をもとに、三世紀前半のヤマト王権の王都纒向で誕生した。その縮小規格のものが、王権に加わった各地のオウ(王)たちにもとり入れられていった。庄内式のものが、中・東部瀬戸内や北部九州に集中し、畿内系土器がめだって流入する地域(搬地のゾーン)とも重なる点に注意

前方後円墳(邪馬台国型)の分布
(古墳はなぜつくられたか、Net)

前方後方墳(狗奴国型)の分布(寺沢薫、2000)

滋賀の**神郷亀塚古墳**—最古級の前方後方墳(3世紀前半)狗奴国と関係か？

滋賀県能登川町神郷亀塚古墳が、3世紀前半の最古級の前方後方墳と分かり、同町教委が1日発表した。3世紀前半は弥生時代から古墳時代への移行期とされ、亀塚古墳も弥生の周溝墓と同様、平地に築かれているが、古墳のような高い墳丘を持つ過渡的な形。前方後方墳の発生過程や、前方後円墳を造った大和の勢力に対抗した狗奴国(くなこく)との関係を考える上で貴重な資料。

同町教委によると、埋葬部付近から弥生時代後期の土器が見つかり、3世紀前半と判断した。古墳の全長は約35.5メートル、周溝は最大幅が12メートル、深さ1.2メートル。後方部は奥がやや広がり、高さは約3.6メートルで、当時の墳丘の1.2メートルより高い。周辺には幾つかの集落があり、地域の有力者の墓とみられる。

前方後方墳は東日本に多く、濃尾平野付近が発祥地とみられているが、亀塚古墳が過渡的な性格を示しているほか、滋賀県内では高月町でも3世紀半ばの小松古墳が見つかるなど古い前方後方墳が多く、近江が発祥地の可能性も出てきた。

前方後方墳は、前方後円墳を象徴的な墳形とした大和の勢力と対立していた、東海地方の狗奴国の墳形とする見方もあり、同町教委は「近江が狗奴国連合の一つか、またはその有力地としての可能性が高まった」としている。

(最古級の前方後方墳、Net)

卑弥呼と対立の男王国は岐阜にあった　狗奴国東海説に迫る

産経ニュース　2021/4/26

【歴史シアター】

古墳出現期の3世紀初頭(西暦200年前後)に築造されたとみられることが明らかになった岐阜県大野町の前方後方墳「笹山古墳」。全長は50～60メートルと同時期では最大級の規模を誇ることが判明し、近江地方(滋賀県)の影響を受けた土器も出土した。被葬者はかなり広範囲の地域を支配した首長クラスとみられるが、愛知、岐阜、三重の3県にまたがる濃尾平野は、「魏志倭人伝」(三国志魏志東夷伝倭人条)に、「邪馬台国」と敵対したと描かれている「狗奴国(くなこく)」の拠点で、その墓形を前方後方墳とする説がある。最初期の前方後方墳の判明は、そうした議論にも影響を与えることになりそうだ。

(編集委員　上坂徹)

笹山古墳で検出された周濠の跡。最古級の前方後方墳と確認された＝岐阜県大野町上磯(大野町教委提供)

箸墓　卑弥呼の死（3世紀半ば、247年）

箸墓古墳（卑弥呼の墓）

箸墓古墳（はしはかこふん、箸中山古墳）は、奈良県桜井市にある前方後円墳。宮内庁により「大市墓（おおいちのはか）」として第7代孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命の墓に治定されている。

概要

纒向遺跡の箸中に所在する箸中古墳群の盟主的古墳であり、出現期古墳の中でも最古級と考えられている3世紀半ばすぎの大型の前方後円墳。この古墳を、『魏志倭人伝』が伝える倭国の女王、「卑弥呼」の墓とする（一部の邪馬台国畿内説）説もある。以前は築造年代が3世紀末から4世紀初頭とされ、卑弥呼が死亡したされる3世紀前半との時期にずれがあるため、その可能性は少ないといわれてきた。しかし1980年代以降に考古学的年代決定論が精度を増し、箸墓古墳の築造年代も卑弥呼の没年（248年から遠くない頃）に近い3世紀の中頃から後半とする説が主流となった。

（岡上裕氏の文献考察（YouTube)によると、卑弥呼の死は247年となる。）

外表施設・遺物

前方部先端の北側の墳丘の斜面には、川原石を用いた葺石が存在していることが確認されている。この時期には埴輪列はまだ存在していないが、宮内庁職員によって宮山型特殊器台・特殊壺、最古の埴輪である都月型円筒埴輪などが採集されており、これらが墳丘上に置かれていたことは間違いない。また岡山市付近から運ばれたと推測できる特殊器台・特殊壺が後円部上でのみ認められるのに対して、底部に孔を開けた二重口縁の壺形土師器は前方部上で採集されており、器種によって置く位置が区別されていた可能性が高い。特殊器台や特殊壺などの出土から古墳時代初頭に築造された古墳であると考えられている。

埋葬施設は不明であるが、墳丘の裾から玄武岩の板石が見つかっていることから竪穴式石室が作られていた可能性があるという。この石材は、大阪府柏原市の芝山の石であることが判明している。従って、崇神紀に記す大坂山（二上山）の石ではない。

築造時期

墳丘形態や出土遺物の内容から白石太一郎らによって最古級の前方後円墳であると指摘されていたが、陵墓指定範囲の外側の周辺部での発掘調査によって、墳丘の裾の幅10メートルの周濠の底から布留0式（ふるぜろしき）土器が出土し、古墳時代前期初頭の築造であることが確定した。研究者の年代観によって造営年代は若干の異同がある。広瀬和雄はその時期を3世紀中ごろ、白石太一郎は3世紀中葉過ぎ、寺沢薫は260～280年頃、石野博信は3世紀後半の第4四半紀、西暦280年から290年にかけてとしている。

また箸墓古墳よりも古いと考えられている纒向石塚墳丘墓などの突出部と箸墓古墳の前方部との形状が類似していること、渡り土手を備えていること、周濠が墳丘の規模に比べ狭いことなど分かってきた。それらのことから箸墓古墳は弥生時代の墳丘墓が飛躍的に巨大化したものであり、弥生墳丘墓の諸要素を継承したものであると考えられている。

意義

墳丘の全長約280メートル、後円部の高さ約30メートルで自然にできた小山と錯覚するほどの規模、全国各地に墳丘の設計図を共有していると考えられる古墳が点在している点、出土遺物に埴輪の祖形である吉備系の土器が認められる点などそれまでの墳墓とは明らかに一線を画している。また規模、埴輪などは以後の古墳のモデルとなったと考えられ当古墳の築造をもって古墳時代の開始と評価する研究者も多い。

被葬者

宮内庁によって第7代孝霊天皇の皇女、倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと）の墓として管理されているが、この古墳を卑弥呼の墓とする研究者もいる。その根拠としては、この古墳の後円部の直径が『魏志倭人伝』にある卑弥呼の円墳の直径「百余歩」にほぼ一致すること、後円部にある段構造が前方部で消失することから、前方部が後世に付け加えられた可能性があること、大規模な古墳の中では、全国でももっとも早い時期に築造されたものであることなどが挙げられているが現時点では正確なことは分からない。ちなみに魏・晋時代の一里は300歩で魏・晋時代の1里は435.6メートル、1歩はほぼ145センチメートルとなり100余歩は約145メートル強となる。

（箸墓古墳－Wikipedia抜粋)

宮内庁の治定によれば、箸墓古墳の被葬者は第7代孝霊天皇の皇女の倭迹迹日百襲姫とされる。この姫は、ニギハヤヒと同一人格とされる大物主の妻でもある。ニギハヤヒ（孝霊天皇、大物主）は卑弥呼（＝倭迹迹日百襲姫）を共立して邪馬台国を建てるにあたり、彼女を養女（皇女ではない）としたのではないか。

国土交通省国土画像情報（カラー空中写真）を基に作成（（箸墓古墳－Wikipedia抜粋)

奈良）宮内庁所蔵の埴輪や土器展示　箸墓古墳を再検証
www.asahi.com

箸墓伝説

『日本書記』には百襲姫による三輪山伝説・箸墓伝説が記される。これによると、百襲姫は大物主神（三輪山の神）の妻となったが、大物主神は夜にしかやって来ず昼に姿は見せなかった。百襲姫が明朝に姿を見たいと願うと、翌朝大物主神は櫛笥の中に小蛇の姿で現れたが、百襲姫が驚き叫んだため大物主神は恥じて御諸山（三輪山）に登ってしまった。百襲姫がこれを後悔して腰を落とした際、箸が陰部を突いたため百襲姫は死んでしまい、大市に葬られた。時の人はこの墓を「箸墓」と呼び、昼は人が墓を作り、夜は神が作ったと伝え、また墓には大坂山（現・奈良県香芝市西部の丘陵）の石が築造のため運ばれたという。

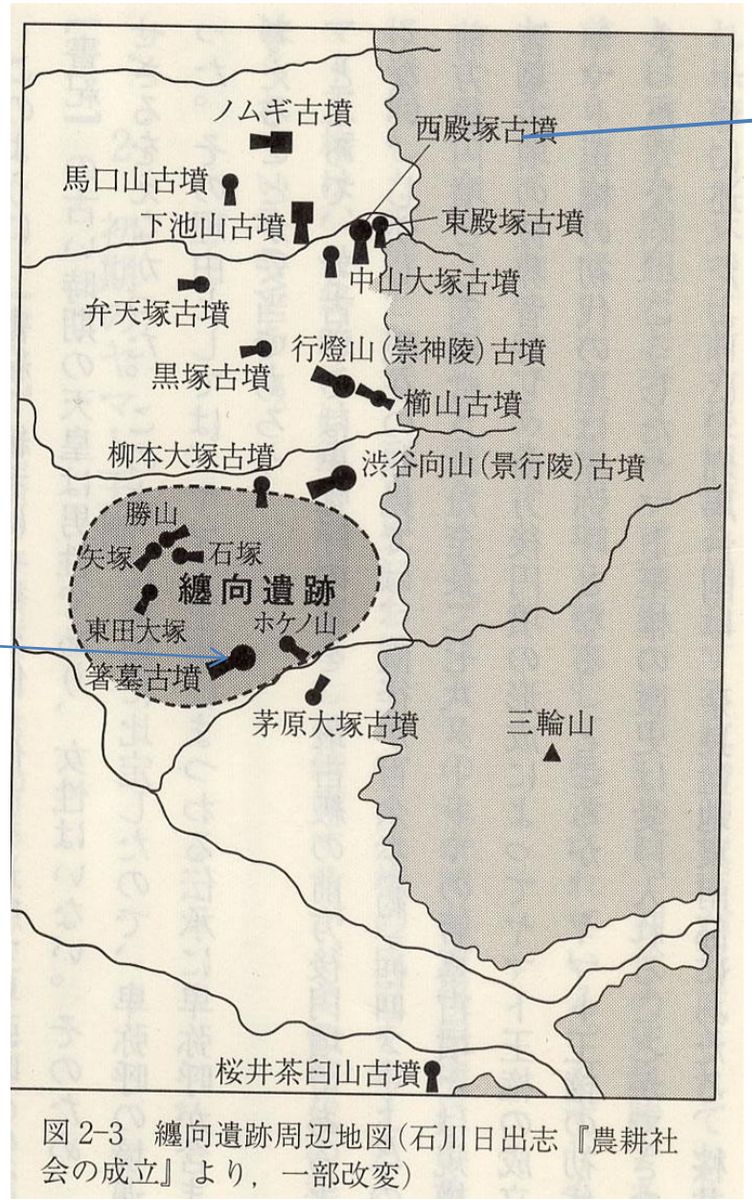


図 2-3　纒向遺跡周辺地図（石川日出志『農耕社会の成立』より，一部改変）

『魏志倭人伝』に見える「径百余歩」という卑弥呼の冢に比定される。

（ヤマト王権、吉村）

西殿塚古墳（奈良県天理市）は全長約230メートルの前方後円墳であり、邪馬台国の女王・卑弥呼の墓と考えられている奈良県桜井市の箸墓（はしはか）古墳と同様の吉備様式の特殊器台が後円部に並び、埴輪や墳丘の形態等からも箸墓古墳に続く時期の大王墓であるとして、卑弥呼の後継者、台与（とよ）の墓なのでは、という説がある。

初期ヤマト王権（3世紀中葉～4世紀中葉、魏と西晋が後ろ盾）の前方後円墳の葬送儀礼

1. 被葬者の北頭位
2. 水銀朱の多量使用
3. 三角縁神獣鏡を中心とする直径9寸（魏晋尺で約22cm）以上の大型鏡の多量副葬

（邪馬台国から大和政権へ、福永伸哉）

『日本書紀』の「箸墓伝説」や宮内庁の治定によると、箸墓には第7代孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命が葬られていると思われる。箸墓の築造年代は、近年の炭素14年代測定法によると、卑弥呼が亡くなった3世紀中頃と推測されうる。従って、箸墓には倭迹迹日百襲姫命たる卑弥呼が埋葬されていると推察される。本著ではこの推察をもとに邪馬台国は孝霊天皇から開化天皇の御代に当たるとし、倭国大乱から崇神東征までの歴史を再構築している。（藤田）

孝霊天皇の御子（倭迹迹日百襲姫（卑弥呼）の弟）の吉備津彦は前方後円墳のプロトタイプとされる吉備の中山茶臼山古墳に葬られている。

中山茶臼山古墳（なかやまちゃうすやまこふん）は、岡山県岡山市北区吉備津にある古墳。形状は前方後円墳（墳丘長：105メートル）。実際の被葬者は明らかでないが、宮内庁により「大吉備津彦命墓（おおきびつひこのみことのはか）」として第7代孝霊天皇皇子の大吉備津彦命（吉備津彦命）の墓に治定されている。墳形は前方部が開く「バチ形」（前方後円墳出現期に特有な形）の前方後円形で、前方後円墳のプロトタイプとみなされる。

この中山茶臼山古墳は、古墳時代前期頃の築造と推定されるが、資料に欠け具体的な築造時期は明らかでない。立地としては、吉備津を望む臨海性と背後の平野を望む内陸性の両面が指摘される。なお、吉備の中山は後世の備前国・備中国の境界になるが、山上に位置する本古墳の古墳域はその境界線上にあたる。

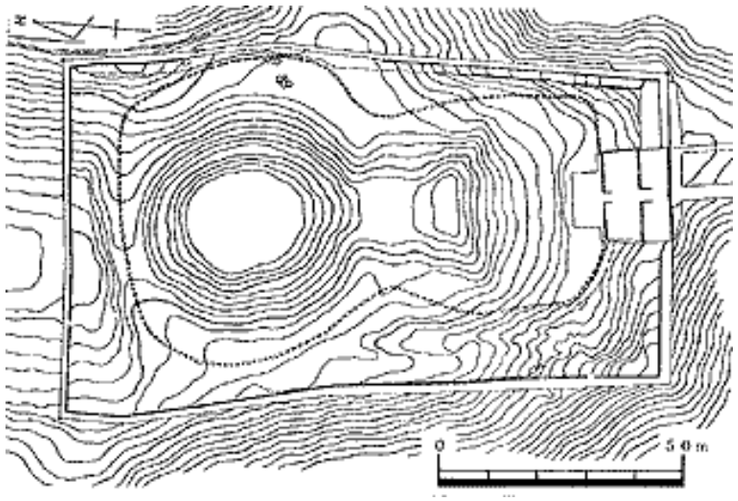
大吉備津彦命について、『古事記』では本の名を「比古伊佐勢理毘古命（ひこいさせりひこのみこと）」、亦の名を「大吉備津日子命」とし、弟の若日子建吉備津彦命とともに吉備国を平定したとする。また『日本書紀』では、本の名を「彦五十狭芹彦命（ひこいさせりひこのみこと）」、亦の名を「吉備津彦命」とし、四道将軍の1人として西道に派遣されて平定したとする。両書には大吉備津彦命の墓についての記述はないが、1874年（明治7年）に本古墳がその墓に治定され、それが現在まで踏襲されている。

吉備の中山の山麓では、大吉備津彦命を祭神とする吉備津神社（岡山市北区吉備津、備中国一宮）、吉備津彦神社（岡山市北区一宮、備前国一宮）の鎮座が知られる。特に前者の吉備津神社は国史にも「吉備津彦命神」として見える霊廟になり、その社伝で大吉備津彦命は吉備の中山の麓に茅葺宮を建てて住み、281歳で亡くなって山頂に葬られたと伝えている。

（Wikipedia抜粋）

箸墓古墳は箸中山古墳とも呼ばれ、吉備の中山茶臼山古墳とは中山で通じる。これら二つの古墳に葬られているのはそれぞれ倭迹迹日百襲姫と吉備津彦とされ、二人が姉弟であることと関連か？（藤田）

大吉備津彦命墓 拝所(Wikipedia)



近藤義郎「中山茶臼山古墳」

宮内庁は吉備の中山茶臼山古墳を第7代孝霊天皇皇子の大吉備津彦命（吉備津彦命）の陵墓に治定しており、この茶臼山古墳は前方後円墳のプロトタイプとされている。また、宮内庁は、纒向の最初の巨大な前方後円墳である箸墓古墳を卑弥呼ともされる倭迹迹日百襲姫の陵墓に治定している。倭迹迹日百襲姫は吉備津彦の姉である。吉備津彦は倭迹迹日百襲より若干早く（おそらく3世紀半ば少し前）死去）し、バチ型の前方後円墳の吉備の中山茶臼山墳に葬られ、その後倭迹迹日百襲姫が3世紀半ばに死去し、同じバチ型の前方後円墳とされる纒向箸墓古墳に葬られたと考える。邪馬台国は母体の吉備を抱合しており、纒向と吉備は邪馬台国建国後も深い絆で結ばれており、活発な相互の人的および土木技術的な交流があったと思われる。吉備の秦系の一族が楯築遺跡を築造したとされているが、この土木技術集団が中山茶臼山古墳を造営し、さらに箸墓古墳の造営に当たったのではないか。

吉備における最古の前方後円墳の候補としては、宮山古墳と吉備の中山の一尾根上にある矢藤治山古墳の二者が挙げられる。両者を発掘調査された近藤義郎氏は、宮山古墳・矢藤治山古墳の築造時期は極めて古いとされながらも、大和の箸墓古墳の築造時期よりも古いとは言い切れないと考えておられるようである。どちらが古いかは非常に微妙と言えるが、総社・秦のH古墳も、そうした候補の仲間入りができる古墳ではないかと考えられる。私は、H古墳が調査されることを待望しているわけである。

前方後円墳の発祥の地は大和か吉備かの論争があるが、筆者（藤田）は中山茶臼山古墳も最古の前方後円墳ではないかと思う。

（古代備中国の中枢部と秦氏『東アジアの古代文化』（第95号'98年春）大和書房、付記）（FB情報　河西月光）

藤田

邪馬台国時代（2世紀末～3世紀）の人物群像

葛城王朝

4. 懿徳天皇

5. 孝昭天皇

6. 孝安天皇

7. 孝霊天皇

孝霊即位2世紀末

邪馬台国

8. 孝元天皇

倭迹迹日百襲姫の異母弟

9. 開化天皇

兄弟

10. 崇神天皇

崇神即位AD315

崇神王朝

11. 垂仁天皇

天日鷲命

八咫烏
ヤタガラス
賀茂建角身命

陶津耳命（
スエツミミノミコト

＝三島湟咋耳命？）
ミシマミゾクイミミ

大彦

日子坐王
ヒコイマス

御間城姫

活玉依媛 （玉依姫）
イクタマヨリヒメ

天道日女命
アメノミチヒメ
高照姫

櫛御方命
クシミカタノミコト

飯肩巣見命
イイカタスミノミコト

武甕槌
タケミカヅチ
架空の神か

大田田根子

ニギハヤヒ東征

アメノヒボコ合流、天香語山同伴

饒速日命
ニギハヤヒ

（神武、
大物主、
孝霊天皇）

天香語山命 （高倉下）
アメノカゴヤマ(タカクラジ)

宇摩志麻遅命
ウマシマジ

物部氏

（少彦名）
スクナビコナ

大国主

和邇氏

三上祝

卑弥呼

媛蹈鞴五十鈴姫（神武妃）
ヒメタタライスズヒメ

倭迹迹日百襲姫
ヤマトトヒモモソヒメ
孝霊天皇皇女

三炊屋媛
ミカシキヤヒメ
（登美夜毘売）

兄妹

事代主（大物主？）
コトシロヌシ

天日方奇日方命
アメノヒカタクシヒカタ

イセツ彦
タケミナカタ

長髄彦
ナガスネヒコ

アメノヒボコ

崇神東征

中臣氏、大伴氏、忌部氏を同伴
久米人と隼人が先鋒

台与（息長水依姫？）
オキナガミズヨリヒメ

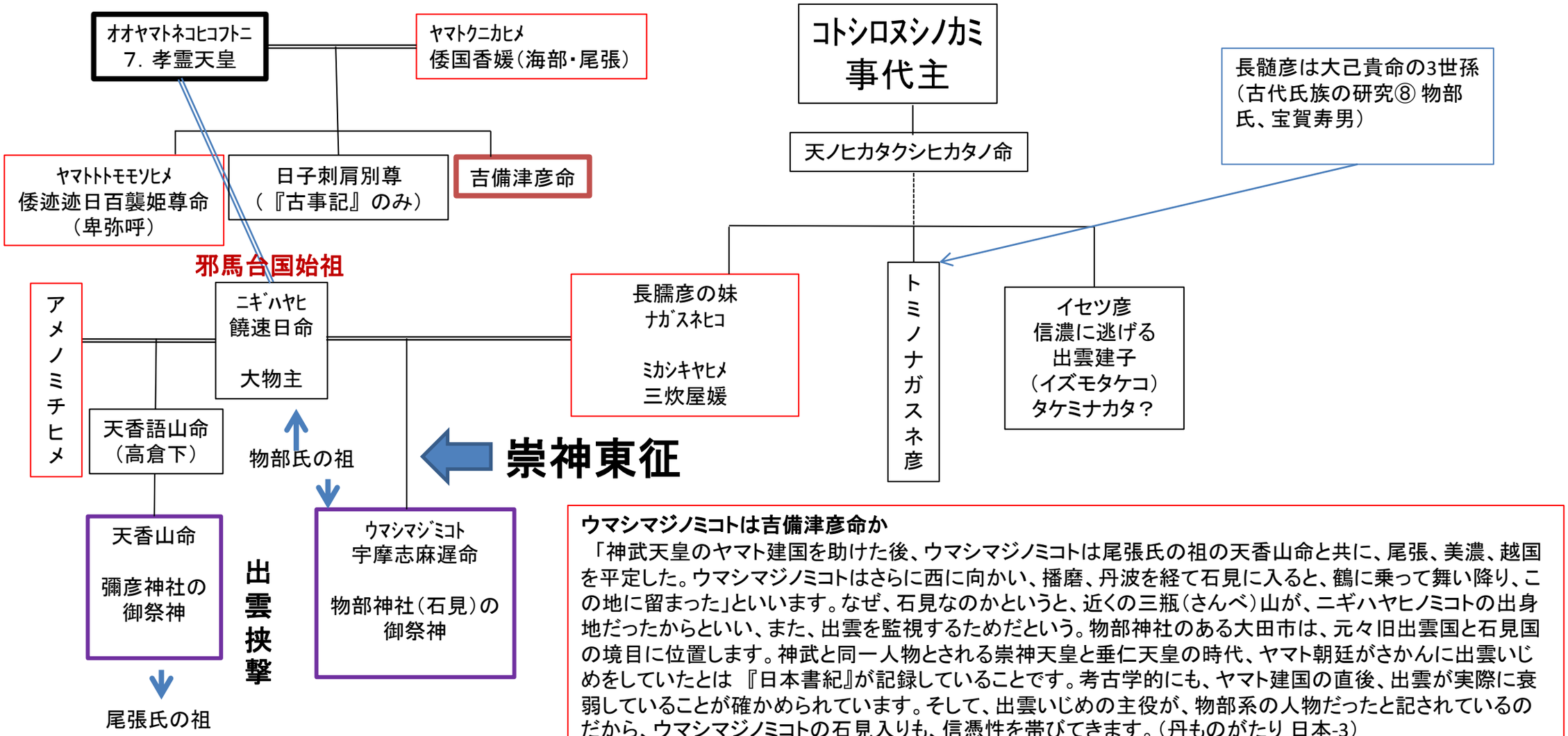
日子坐王

神功皇后

文献
・長髄彦の系図（富氏伝承 『謎の出雲帝国』 吉田大洋）
・大田田根子の系図『古事記』によると、武甕槌は崇神東征の時代に位置づけられる。これは時代的に合致するが、藤原氏の作為・詐称を感じる。

藤田

邪馬台国を建てたニギハヤヒを廻る群像



ニギハヤヒ（オオモノヌシ、孝霊天皇と同一人物か）はナガスネヒコの妹を妻にしていたので実質の王（実際、邪馬台国の始祖）である。また、神武（崇神）天皇は、南朝鮮（任那）と九州（伊都国連合）を支配していた王の一族であったと考えられる。『古事記』によれば、神武天皇の后はオオモノヌシの娘なので、神武天皇は東征して婿入りしたことになる。
（藤田）

ウマシマジノミコトは吉備津彦命か
「神武天皇のヤマト建国を助けた後、ウマシマジノミコトは尾張氏の祖の天香山命と共に、尾張、美濃、越国を平定した。ウマシマジノミコトはさらに西に向かい、播磨、丹波を経て石見に入ると、鶴に乗って舞い降り、この地に留まった」といいます。なぜ、石見なのかというと、近くの三瓶（さんべ）山が、ニギハヤヒノミコトの出身地だったからといい、また、出雲を監視するためだという。物部神社のある大田市は、元々旧出雲国と石見国の境目に位置します。神武と同一人物とされる崇神天皇と垂仁天皇の時代、ヤマト朝廷がさかんに出雲いじめをしていたとは 『日本書紀』が記録していることです。考古学的にも、ヤマト建国の直後、出雲が実際に衰弱していることが確かめられています。そして、出雲いじめの主役が、物部系の人物だったと記されているのだから、ウマシマジノミコトの石見入りも、信憑性を帯びてきます。（丹ものがたり 日本-3）
吉備出身の孝霊天皇はニギハヤヒ命と同一人物で、孝霊天皇の子に吉備津彦命がいる。また、吉備津彦による出雲いじめもまた有名である。というわけで、ニギハヤヒ命の子のウマシマジは吉備津彦にあたるのではないかとも思われる。しかし、ウマシマジの母は三炊屋媛、吉備津彦の母は倭国香媛とされており、この説は疑問視されるが、三炊屋媛と倭国香媛は共に大国主系とも考えられ一概には否定できない。（藤田）

桃太郎伝説　孝霊天皇の皇子・彦五十狭芹彦命（ひこいさせりひこのみこと、吉備津彦命）、稚武彦命の兄弟は、ヤマト政権の将帥（四道将軍）として温羅と呼ばれる製鉄に優れた吉備国の武装勢力（地方豪族やそれに与する渡来人の集団と考えられている）を制圧するために吉備国に遠征しこれを平定したといわれている。さらに、両皇子の軍勢は讃岐国、出雲国にまで侵攻し、ヤマト政権の支配を拡大させたと考えられている。ちなみに、このとき両皇子が連れて行った犬飼部、猿飼部、鳥飼部とよばれる役職の家臣の一人が、元首相犬養毅の祖先ともいわれる犬養健命（いぬかいたけるのみこと）であったといわれている。（Wikiband抜粋）
孝霊朝に吉備津彦が派遣され吉備の反乱を制圧した。吉備の物部が倭国大乱制圧や邪馬台国樹立に武力を割き、吉備の防備が手薄となったところに、出雲勢力が南下し鉄資源を奪った。吉備津彦がこの出雲勢力を制圧し、鉄資源を奪い返したのが「桃太郎伝説」のもとになったのではないか。（藤田）

温羅（うら）は由良が「湯の浦＝鉄の湊」からきた地名であり、鬼は製鉄民の頭を意味するのであろう。

神武東征譚は、天津神（三島神、ホアカリ、ニギハヤヒ、崇神）の東征を集合した倭国平定譚か

神武東征譚の主要部分は3世紀末の崇神東征譚

神武東征

神武天皇（カムヤマトイワレビコ）は、兄の五瀬命（イツセ）とともに、日向の高千穂で、葦原中国を治めるにはどこへ行くのが適当か相談し、東へ行くことにした。舟軍を率いて日向を出発して筑紫へ向かい、豊国の宇沙（現 宇佐市）に着くと、宇沙都比古（ウサツヒコ）・宇沙都比売（ウサツヒメ）の二人が仮宮を作って食事を差し上げた。そこから移動して、岡田宮で1年過ごした。さらに安芸国の多祁理宮（たけりのみや）で7年、吉備国の高島宮で8年過ごした。

浪速国の白肩津に停泊すると、登美毘古（ナガスネヒコ）の軍勢が待ち構えていた。その軍勢との戦いの中で、イツセはナガスネヒコが放った矢に当たってしまった。イツセは、「我々は日の神の御子だから、日に向かって（東を向いて）戦うのは良くない。廻り込んで日を背にして（西を向いて）戦おう」と言った。それで南の方へ回り込んだが、イツセは紀国の男之水門に着いた所で亡くなった。

カムヤマトイワレビコが熊野まで来た時、大熊が現われてすぐに消えた。するとカムヤマトイワレビコを始め兵士たちは皆気を失ってしまった。この時、熊野の高倉下（タカクラジ）が、一振りの太刀を持って来ると、カムヤマトイワレビコはすぐに目が覚めた。カムヤマトイワレビコがその太刀を受け取ると、熊野の荒ぶる神は自然に切り倒されてしまい、兵士たちも意識を回復した。カムヤマトイワレビコはタカクラジに太刀を手に入れた経緯を尋ねた。タカクラジによれば、タカクラジの夢にアマテラスと高木神が現れた。二神はタケミカヅチを呼んで、「葦原中国は騒然としており、私の御子たちは悩んでいる。お前は葦原中国を平定させたのだから、再び天降りなさい」と命じたが、タケミカヅチは「平定に使った太刀を降ろしましょう」と答えた。そしてタカクラジに、「倉の屋根に穴を空けてそこから太刀を落とすから、天津神の御子の元に運びなさい」と言った。目が覚めて自分の倉を見ると本当に太刀があったので、こうして運んだという。その太刀はミカフツ神、またはフツノミタマと言い、現在は石上神宮に鎮座している。

また、高木神の命令で遣わされた八咫烏の案内で、熊野から大和の宇陀に至った。宇陀には兄宇迦斯（エウカシ）・弟宇迦斯（オトウカシ）の兄弟がいた。まず八咫烏を遣わして、カムヤマトイワレビコに仕えるか尋ねさせたが、兄のエウカシは鳴鏑を射て追い返してしまった。エウカシはカムヤマトイワレビコを迎え撃とうとしたが、軍勢を集められなかった。そこで、カムヤマトイワレビコに仕えると偽って、御殿を作ってその中に押機(踏むと挟まれて圧死する罠)を仕掛けた。弟のオトウカシはカムヤマトイワレビコにこのことを報告した。そこでカムヤマトイワレビコは、大伴連らの祖の道臣命（ミチノオミ）と久米直らの祖の大久米命（オオクメ）をエウカシに遣わした。二神は矢をつがえて「仕えるというなら、まずお前が御殿に入って仕える様子を見せろ」とエウカシに迫り、エウカシは自分が仕掛けた罠にかかって死んだ。

忍坂の地では、土雲の八十建が待ち構えていた。そこでカムヤマトイワレビコは八十建に御馳走を与え、それぞれに刀を隠し持った調理人をつけた。そして合図とともに一斉に打ち殺した。その後、目的地である磐余の弟師木（オトシキ）を帰順させて兄師木（エシキ）と戦った。最後に、（ナガスネヒコ）と戦い、そこに邇芸速日命（ニギハヤヒ）が参上し、天津神の御子としての印の品物を差し上げて仕えた。そして、邇芸速日命はナガスネヒコを殺害する。こうしてカムヤマトイワレビコは荒ぶる神たちを服従させ、畝火の白檮原宮で即位した。

（以上『古事記』の記述、Wikipedia抜粋）

天羽々矢（あめのはばや）は、『記紀』神話に現れる矢。「羽々」の意味は不詳だが、「羽のように大きい」もしくは「大蛇」と解する説がある。高皇産霊神（たかみむすひのかみ）が、天稚彦（あめわかひこ、天若日子）を葦原中国（あしはらのなかつくに）に下す際に、天鹿児弓（あめのかごゆみ）（天之麻迦古弓（あめのまかこゆみ）とも謂われる）と共に天稚彦に与えた。天羽々矢は、天之波波矢（あめのははや）、天之加久矢（あめのかくや）、天真鹿児矢（あめのまかごや）、とも謂われる。

東征に臨む神武天皇に対し、長髄彦（ナガスネヒコ）は饒速日命が所持する天羽々矢を示し、自分が天津神に仕えていることを証明するが、饒速日命の手によって殺害される。
(Wikipedia抜粋)

『日本書紀』に記載の神武東征の最終局面（Wikipedia抜粋）

長髄彦と遂に決戦となった。連戦するが勝てず、天が曇り、雨氷（ひさめ）が降ってきた。そこへ金色の霊鵄があらわれ、磐余彦尊の弓の先にとまった。するといなびかりのようなかがやきが発し、長髄彦の軍は混乱した。このため、長髄彦の名の由来となった邑の名（長髄）を鵄の邑と改めた。今は鳥見という。長髄彦は磐余彦尊のもとに使いを送り、自分が主君としてつかえる櫛玉饒速日命（物部氏の遠祖）は天神の子で、昔天磐船に乗って天降ったのであり、天神の子が二人もいるのはおかしいから、あなたは偽物だと言った。長髄彦は饒速日命のもっている天神の子のしるしを磐余彦尊に示したが、磐余彦尊もまた自らが天神の子であるしるしを示し、どちらも本物とわかった。しかし、長髄彦はそれでも戦いを止めなかったので、饒速日命は長髄彦を殺し、衆をひきいて帰順した。

異説：生駒山麓でナガスメヒコに敗れた神武軍勢は、再起を期そうと奈良盆地を東に迂回するため、紀ノ川から吉野川をへて宇陀野に出たか。（邪馬台国と「鉄の道」、小路田泰直）

崇神東征 3世紀末の出来事　神武東征の主要部分：邪馬台国の終焉（ヤマト王権の始まり）

崇神東征とは、崇神（伊都国の王か）が、任那・伊都国連合勢力（主力は中臣氏と大伴氏）が久米人と隼人を伴い邪馬台国に侵攻したものである。邪馬台国の物部氏と和邇氏はこの侵攻に加担したと思われる。この東征により、大和と葛城の大国主勢力（ナガスネヒコら）は壊滅し、残存勢力は狗奴国（東山道の近江、美濃など）へ逃れた。
（藤田）

外山茶臼山古墳は神武（崇神）稜との考えもある（ちなみに近くに宗像神社あり）。またニギハヤヒの陵との説もある。
（葬られた王朝　、梅原 ）

台与（壱与）と中国王朝との外交
張政らは、檄をもって壱与を告諭した。台与（壱与）は、魏に帰任する張政に掖邪狗ら20人を同行させ、男女の生口30人と白珠5,000孔、青大句珠2枚、異文の雑錦20匹を貢いだ。また、『日本書紀』の「神功紀」に引用される『晋書』起居註に、泰始2年（266年）に倭の女王の使者が朝貢したとの記述がある。『魏志』（魏書三少帝紀によれば、同じ年に東夷が朝貢して禅譲革命の準備がなされたという記事があるので、この女王は壹與で、魏に代って成立した晋の皇帝（武帝）に朝貢したと考えられている。

『旧唐書』には、日本は倭国の別種であると記載され、もともと小国であった日本が倭国を併合（崇神東征か）したとも記述されている。
『新唐書』でも、日本は、古くから交流のあった倭国とは別と捉えられており、日本の王の姓は阿毎氏であり、筑紫城にいた神武が大和を征服し天皇となり、600年頃に初めて中国と通じたと記述されている。

中臣氏
中臣氏は、天孫降臨の際、瓊瓊杵尊に同伴した天児屋命（製鉄神：天児屋はタタラ炉（児）とそれを覆う金屋（天屋）を意味する）を祖とする。また、天岩戸にアマテラスが籠ったときに祝詞を読んだのが天児屋命である。任那出自の氏族であるとの説がある。子孫に垂仁(すいにん)天皇に神祇祭祀を命じられた5人の大夫(まえつきみ)のひとり、大鹿嶋がいる。
仏教受容問題で物部氏さらに蘇我氏とも対立した。中臣鎌足は645年の大化の改新で活躍し、669年の死に臨んで、藤原姓を賜った。以後鎌足の子孫は藤原氏を名乗ったが、本系は依然として中臣を称し、代々神祇官・伊勢神官など神事・祭祀職を世襲した。（Wikipedia抜粋)

大伴氏
「大伴」は「大きな伴造」という意味で、名称は朝廷に直属する多数の伴部を率いていたことに因む。また、祖先伝承によると来目部や靫負部等の軍事的部民を率いていたことが想定されることから、物部氏と共に朝廷の軍事を管掌していたと考えられている。なお、両氏族には親衛隊的な大伴氏と、国軍的な物部氏という違いがあり、大伴氏は宮廷を警護する皇宮警察や近衛兵のような役割を負っていた。
5世紀後半に現れた大伴氏の最初の実在人物とされる大伴室屋が雄略朝で大連となり、それまでヤマト王権に参画して勢力を誇っていた葛城氏に替わって大伴氏が急速に台頭する。
武烈朝で大連となった大伴金村の時代が全盛期で、その後継体・安閑・宣化・欽明まで5代にわたって大連を務める。この間、金村は越前国から継体天皇を皇嗣に迎え入れるなどの功績により、ヤマト王権内に確固たる地位を築いた。しかし、任那の運営を任されていたところ、欽明朝における任那4県の百済への割譲策について、同じ大連の物部氏から失政として咎められて失脚し、摂津国住吉郡（現大阪市住吉区帝塚山）の邸宅に引退した。以後、蘇我氏と物部氏の対立の時代に入る。
（Wikipedia抜粋)

新羅の昔氏と大伴氏
新羅の王族には三氏があった。朴、昔、金である。朴氏は新羅の伝説的始祖であり、次いで昔氏、さらに金氏が継ぎその後の王権を独占した。
昔氏の始祖を脱解といい、「三国史記」によれば、倭国の多婆那から海を越えて到来し新羅王になった。しかし、不思議というか、昔氏については、その姓が韓国史から失われている。それは何故か。まず、考えられるのは、日本列島側と朝鮮半島側とに、またをかけて成立していた任那がなくなり、倭と韓とは、その後、異なった言語、文化をもつ異なった国として、それぞれ発展し、しかも後にはお互いに相争う事態となった。そのため、南朝鮮の倭人を出自とする昔氏は、倭の勢力につながる存在として抹殺されたのではないか。
ところで、倭王権を支えた一大氏族に大伴氏というのがある。伝説的始祖は神武東征の元帥であるが、この氏族には出自地の明示はない。しかし、神武東征伝説が任那の東遷に史的背景をもつとみるならば、大伴もまた九州しかも任那領域にいた大族であつた可能性が高く、大和への征服戦争の主力軍をなしたのではないか。要するに昔氏とは大伴氏のことではないか。ちなみに伴と昔は韓音で相通じる。
（古代日本　異族伝説の謎、田中勝也）

崇神東征；邪馬台国の終焉

『古事記』「葦原中国の平定」＜第1章＞「アメノホヒの派遣」、＜第2章＞「アメノワカヒコの死」および＜第3章＞「国譲り」は、いつの時代のどの出来事を反映しているのであろうか。「アメノホヒの派遣」は、紀元前後にスサノオが出雲を侵攻し、八岐大蛇（大国主か）を退治した後、アメノホヒとともに出雲王朝を建てたことを指し、「アメノワカヒコの死」は、ニギハヤヒの東征により引き起こされた倭国大乱の終結期にスクナビコナが殺害されたことを指すと思われる。＜第3章＞「国譲り」は如何なる事象をさしているのであろうか。私見では、この「国譲り」は、邪馬台国終焉時の崇神東征により、邪馬台国の出雲（大国主）勢力が掃討されたことを指していると考える。即ち、ナガスネヒコが殺害され、加茂氏は葛城から山城に逃れ、タケミナカタやイセツヒコを信濃に追われたことを指すと考える。

葦原中国平定

『古事記』「出雲の国譲り」の段において、建御雷（タケミカヅチ）は伊都之尾羽張（イツノオハバリ）の子と記述されるが、伊都之尾羽張は天之尾羽張の別名である。アマテラスは、タケミカヅチかその父イツノオハバリを下界の平定に派遣したいと所望したが、建御雷が天鳥船（アメノトリフネ）とともに降臨する運びとなる。出雲の伊耶佐小浜（いざさのおはま）に降り立ったタケミカヅチは、十掬の剣（とつかのつるぎ）を波の上に逆さに突き立てて、なんとその切っ先の上に胡坐をかいて、大国主（オオクニヌシノカミ）に対して国譲りの談判をおこなった。大国主は、国を朝廷に譲るか否かを子らに託した。子のひとり事代主は、すんなり服従した。もう一人、建御名方神（タケミナカタ）（諏訪の諏訪神社上社の祭神）は、建御雷に力比べをもちかけ、手づかみの試合で一捻りにされて恐懼して遁走し、国譲りがなった。このときの建御名方神との戦いは相撲の起源とされている。

『日本書紀』では葦原中国平定の段で下界に降される二柱は、武甕槌とフツヌシである。（ちなみに、この武甕槌は鹿島神社の主神、フツヌシは香取神社の主神となっている。上代において、関東・東北の平定は、この二大軍神の加護に祈祷して行われたので、この地方にはこれらの神の分社が多く建立する]。）『日本書紀』によれば、この二柱がやはり出雲の五十田狭小汀（いたさのおはま）に降り立って、十握の剣（とつかのつるぎ）を砂に突き立て、大己貴命（おおあなむち、オオクニヌシのこと）に国譲りをせまる。タケミナカタとの力比べの説話は欠落するが、結局、大己貴命は自分の征服に役立てた広矛を献上して恭順の意を示す。ところが、二神の前で大己貴命がふたたび懐疑心を示した（翻意した？）ため、天つ神は、国を皇孫に任せる見返りに、立派な宮を住まいとして建てるとして大己貴命を説得した。

（Wikipedia抜粋）

『記紀』の「国譲り」は、邪馬台国の出雲（大国主）勢力が崇神東征により掃討されたことを指している？

建御雷（武甕槌命、タケミカヅチ）

・神産みにおいて伊弉諾尊（伊邪那岐・いざなぎ）が火神軻遇突智（カグツチ）の首を切り落とした際、十束剣「天之尾羽張（アメノオハバリ）」の根元についた血が岩に飛び散って生まれた三神の一柱である。

・「出雲の国譲り（葦原中国平定）」の段においては伊都之尾羽張（イツノオハバリ）の子と記述されるが、伊都之尾羽張は天之尾羽張の別名である。下界に降される二柱は、武甕槌とフツヌシである。（ちなみに、この武甕槌は鹿島神社の主神、フツヌシは香取神社の主神となっている。この二柱が出雲の五十田狭小汀（いたさのおはま）に降り立って、十握の剣（とつかのつるぎ）を砂に突き立て、大己貴命（おおあなむち、オオクニヌシのこと）に国譲りをせまる。『日本書記』・三輪の神を祀らせるために崇神天皇が探させたというオオタタネコは『日本書紀』神代巻上には大物主の子の「大田田根子」、『古事記』には大物主の4世の孫でタケミカヅチの子の「意富多多泥古」と記されています。（タケミカズチは大物主の子孫？）

・カムヤマトイワレビコはタカクラジに熊野の荒ぶる神切り倒した太刀を手に入れた経緯を尋ねた。タカクラジによれば、アマテラスと高木神が夢に現れた。二神はタケミカヅチを呼んで、「葦原中国は騒然としており、私の御子たちは悩んでいる。お前は葦原中国を平定させたのだから、再び天降りなさい」と命じたが、タケミカヅチは「平定に使った太刀を降ろしましょう」と答えた。この太刀はミカフツ神、またはフツノミタマと言い、現在は石上神宮に鎮座している。

崇神東征後の豪族・土豪の抵抗

『日本書記』では、長髄彦との戦いに続けて、大和盆地内の4か所帰順しない賊（①～④を退治する話をのせる。

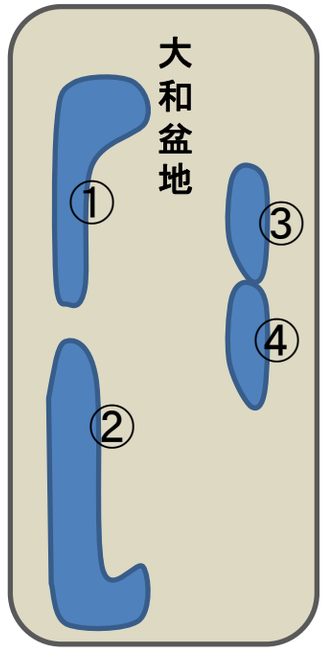
①層富県（ソホノアガタ）のハタの丘岬の新城戸畔
大和国添県。現奈良市から大和郡山市の新木町にかけての地域。富雄川流域の全域

②高尾張邑の土蜘蛛
葛城地方　現御所市西南部であろう。

③和邇の坂下の居勢祝
天理市和爾地域である。

④臍見の長柄の猪祝
天理市長柄であろう。

（出雲と大和、村井康彦）



邪馬台国の四官のうちの中央部を除く三官を支えていた豪族・土豪たちが神武の大和侵攻に激しく抵抗したことを物語っている。

藤田

長髄彦（ナガスネヒコ）；大国主の子孫

『古事記』では那賀須泥毘古と表記され、また登美能那賀須泥毘古（トミノナガスネヒコ）、登美毘古（トミビコ）とも呼ばれる。神武東征の場面で、大和地方で東征に抵抗した豪族の長として描かれている人物。安日彦（あびひこ）という兄弟がいるとされる。

登美夜毘売（トミヤヒメ）、あるいは三炊屋媛（ミカシキヤヒメ）ともいう自らの妹を、天の磐舟で、斑鳩の峰白庭山に降臨した饒速日命（ニギハヤヒノミコト）の妻とし、仕えるようになる。中世、戦国の武将山形の織田家（後に織田信長を輩出）や仙台の伊達家が長髄彦の子孫であると言われている。神武天皇が浪速国青雲の白肩津に到着したのち、孔舎衛坂（くさえのさか）で迎え撃ち、このときの戦いで天皇の兄の五瀬命は矢に当たって負傷し、後に死亡している。その後、八十梟帥や兄磯城を討った皇軍と再び戦うことになる。このとき、金色の鳶が飛んできて、神武天　皇の弓弭に止まり、長髄彦の軍は眼が眩み、戦うことができなくなった。長髄彦は神武天皇に「昔、天つ神の子が天の磐船に乗って降臨した。名を櫛玉饒速日命という。私の妹の三炊屋媛を娶わせて、可美真手という子も生まれた。ゆえに私は饒速日命を君として仕えている。天つ神の子がどうして二人いようか。どうして天つ神の子であると称して人の土地を奪おうとしているのか」とその疑いを述べた。天皇は天つ神の子である証拠として、天の羽々矢と歩靭を見せ、長髄彦は恐れ畏まったが、改心することはなかった。そのため、間を取り持つことが無理だと知った饒速日命（ニギハヤヒノミコト）に殺された。（Wikipedia抜粋）

磐船神社ーWikipedia抜粋
交野市の南端、天野川の渓谷沿いにあり、「天の磐船」（あめのいわふね）とよばれる天野川を跨ぐように横たわる高さ約12メートル・長さ約12メートルの舟形巨岩を御神体としている。本殿はなく、巨岩の前に小さな拝殿があり、南側（上流）に社務所がある。神社の起源は不明であるが、天照国照彦天火明奇玉神饒速日尊（あまてるくにてるひこあめのほあかりくしたまにぎはやひのみこと＝饒速日命）が天の磐船に乗って河内国河上の哮ヶ峯（たけるがみね）に降臨されたとの伝承がある。交野に勢力を保っていた肩野物部氏という物部氏傍系一族の氏神であり、一族が深く関わっていたといわれている。

長髄彦の本拠地

河内と大和の一帯は鳥見（登美）とよばれ、長髄彦は鳥見の長であった。ニギハヤヒが河内にやってきて、長髄彦は妹の登美夜毘売を妻にした。その後、ニギハヤヒが桜井の外山に移動したのに伴い、長髄彦も桜井に移ったと思われる。（藤田）

長髄彦は大国主の子孫

1. 富氏の伝承による原出雲系の系譜　（出雲帝国、吉田大洋）
2. 長髄彦は大己貴命の3世孫　（古代氏族の研究⑧ 物部氏、宝賀寿男）

（藤田）

1の系図

卑弥呼

- 大国主
  - 事代主（大物主？）　コトシロヌシ
    - 媛蹈鞴五十鈴姫（神武妃）　ヒメタタライスズヒメ
    - 天日方奇日方命　アメノヒカタクシヒカタ
      - 長髄彦　ナガスネヒコ
    - 倭迹迹日百襲姫　ヤマトトヒモモソヒメ

2の系図

- 大己貴命（海神族）　在葦原中国
  - 味鉏高彦根命
    - 大穴持命　出雲
      - 長髄彦命
  - 下照姫

（古代氏族の研究⑧ 物部氏、宝賀寿男）

石切剣箭神社ーWikipedia抜粋
石切劔箭神社（いしきりつるぎやじんじゃ）は、大阪府東大阪市にある神道石切教の神社。「石切さん」「でんぼ（腫れ物）の神様」として親しまれ、本殿前と神社入り口にある百度石の間を行き来するお百度参りが全国的に有名。創建年代は、火災により社殿及び宝庫が悉く消失したため詳らかではないが、代々の社家「木積」家には、皇紀2年に生駒山中の宮山に可美真手命が饒速日尊を奉祀されたのを神社の起源とし、崇神天皇の御世に現本社に可美真手命が奉祀されたと伝わる。

上賀茂神社と下鴨神社

崇神東征による邪馬台国終焉の折、地祇系の賀茂氏の嫡流は葛城から山城に遷ったか（藤田）

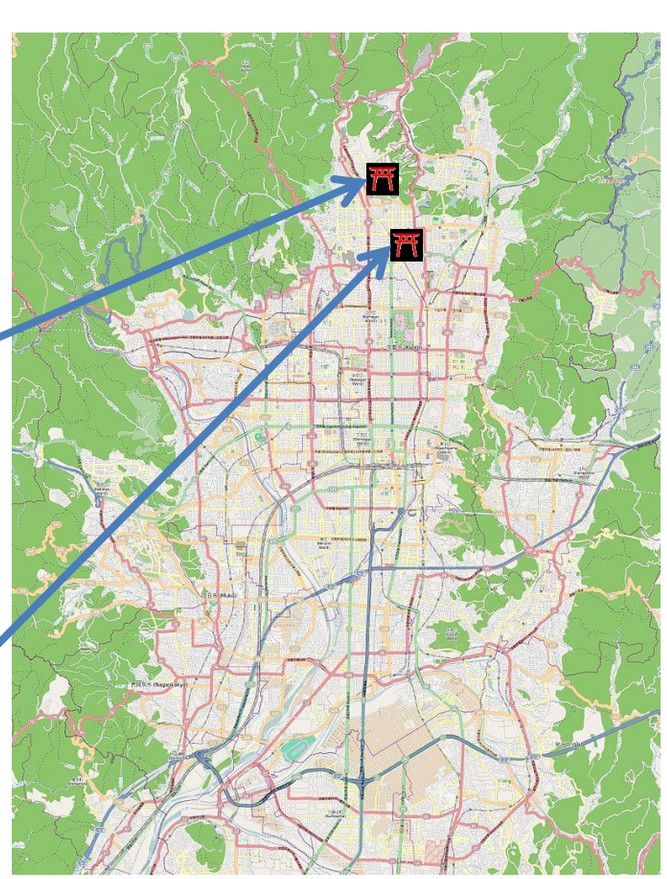
上賀茂神社の祭神は賀茂別雷命で、大国主の子神の阿遅鉏高日子根神（アジスキタカヒコネ）と同一視されている。

賀茂氏

賀茂氏には、天津系と地祇系との2系がある。神武天皇東征の途中、熊野から大和への道に迷った時に天上より派遣され、道案内をした**八咫烏**は、神皇産霊尊（カミムスビノミコト）の孫である鴨建角身命（カモタケツノミノミコト）の化身と伝えられる。奈良の八咫烏神社にまつられるのが天津系である。（ことばんく、Net）地祇系の賀茂氏は、高鴨神社の祭神である事代主や味鋤高彦根神（賀茂大御神）を祀っていた。（Wikipedia抜粋）

賀茂別雷神社（上賀茂神社）（光一郎撮影）
祭神は賀茂別雷命（かもわけいかづちのみこと）であり、各地の加茂神社（賀茂神社・鴨神社）で祀られる。『記紀』神話には登場しない。神名の「ワケ」は「分ける」の意であり、「雷を別けるほどの力を持つ神」という意味であり、「雷神」ではない。『賀茂之本地』では阿遅鉏高日子根神と同一視されている。

賀茂御祖神社（下賀鴨神社）（光一郎撮影）
賀茂別雷神社（上賀茂神社）とともに賀茂氏の氏神を祀る神社であり、両社は賀茂神社（賀茂社）と総称される。両社で催す賀茂祭（通称 葵祭）で有名。
本殿には、右に賀茂別雷命（上賀茂神社祭神）の母の玉依姫命、左に玉依姫命の父の賀茂建角身命を祀るため「賀茂御祖神社」と呼ばれる。金鵄および八咫烏は賀茂建角身命の化身である。
境内に糺の森（ただすのもり）、御手洗川、みたらし池がある。



賀茂氏

賀茂氏とは

紀元前後のスサノオの出雲侵攻により、大国主と阿遅志貴高日子根神（アジスキタカヒコネ、多紀理毘売命との子、迦毛大御神、賀茂別雷命）は日本海沿岸を東に逃れた。ちなみに、アジスキタカヒコネは、出雲市の阿須伎神社、安来市の安来賀茂神社や邑南町の賀茂神社の祭神であり、出雲の出自であることが伺える。二人が丹後に至った頃、天孫の彦火明命（スクナビコナか）の降臨があり、大国主とアジスキタカヒコネは、彦火明命と力を合わせて国造りを行った。

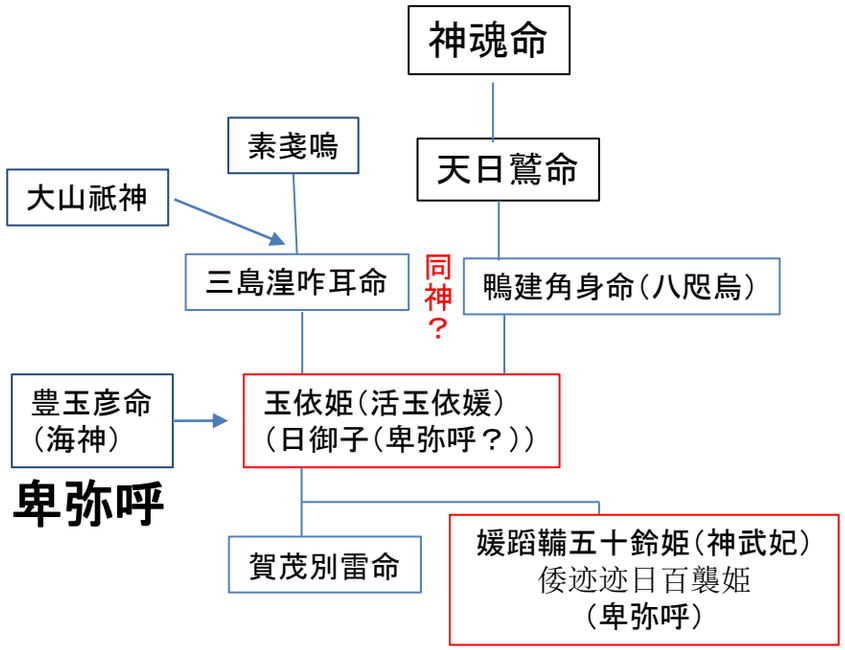
彦火明の3世孫の倭宿禰が大和（葛城）に進出した折、アジスキタカヒコネが率いる鴨族も大和に同伴した。懿徳天皇（葛城王朝の始祖）はアジスキタカヒコネではないかとも考える。その頃、少彦名（神皇産霊の子）の後裔者も葛城に進出した。ちなみに、アジスキタカヒコネは、賀茂神社（上賀茂神社・下鴨神社）を始めとする全国のカモ（鴨・賀茂・加茂）神社の総本社と称している高鴨神社の祭神である。2世紀末、ニギハヤヒが大和に侵攻して、邪馬台国を建てた。しかし、葛城の出雲勢力はなお大きな力を保持していた。3世紀末には、崇神勢力の東征があり葛城の出雲勢力は敗退した。このため、鴨族の多くは北上し出雲勢力を後背地とする山城に上賀茂神社・下鴨神社を建てた。

賀茂氏には、天津系と地祇系との2系がある。神武天皇東征の途中、熊野から大和への道に迷った時に天上より派遣され、道案内をした八咫烏は、神皇産霊の孫である賀茂建角身命の化身と伝えられる。尚、少彦名は神皇産霊の子であり、天津系ということになる。奈良の八咫烏神社が天津系である。地祇系の賀茂氏は、葛城の高鴨神社の祭神であるアジスキタカヒコネ（賀茂大御神）を祀っていた。京都の賀茂神社は天津系と言われるが、古くはアジスキタカヒコネ（迦毛大御神）を祀る地祇系であったと思われる。

また、丹後の倭宿禰が大和（葛城）に進出した際、丹後の藤祭りを大和に持ち込んだと思われる。その後、崇神東征の折、鴨族が圧迫され山城に居を移した。それが山城での藤祭でのちにお葵祭と変わり、丹後の藤祭も葵祭と変わったと推測される。

（藤田）

八咫烏の系譜（仮）



三島湟咋耳命もまた八咫烏で、三島湟咋耳命は鴨建角身命（八咫烏）と同神である。（少女神　ヤタガラスの娘、みシまる湟咋耳）

八咫烏

賀茂建角身命（かもたけつぬみのみこと）

山城の賀茂氏（賀茂県主）の始祖であり、賀茂御祖神社（下鴨神社）の祭神として知られる。『新撰姓氏録』によれば、賀茂建角身命は神魂命（かみむすびのみこと）の孫である。神武東征の際、高木神・天照大神の命を受けて日向の曾の峰に天降り、大和の葛木山に至り、八咫烏に化身して神武天皇を先導し、金鵄として勝利に貢献した。（Wikipedia抜粋）

天孫降臨時代の神武東征の発端（三島神の東征）時、導きの神（鴨建角身命（八咫烏））に大和侵攻の導きの役を演じさせたか。

八咫烏（やたがらす）は、日本神話において神武東征（じんむとうせい）の際、高皇産霊尊（タカミムスビ）によって神武天皇のもとに遣わされ、熊野国から大和国への道案内をしたとされるカラス（烏）。一般的に三本足のカラスとして知られ古くよりその姿絵が伝わっている。（Wikipedia抜粋）

八咫烏は天日鷲神の後裔

八咫烏（ヤタガラス）は、『古事記』では神武東征の際、タカミムスビによって神武天皇のもとに遣わされ、熊野国から大和国への道案内をしたとされるカラス（烏）である。『日本書紀』では、同じ神武東征の場面で、金鵄（金色のトビ）が長髄彦との戦いで神武天皇を助けたとされており、天日鷲神の別名である天加奈止美命（あめのかなとみ）の名称が金鵄（かなとび）に通じることから、天日鷲神と同一視されることがある。また、八咫烏は、熊野三山においてカラスはミサキ神（死霊が鎮められたもの、神使）とされ、熊野大神（素戔嗚尊）に仕える存在として信仰されている。

一方、賀茂建角身命（カモタケツヌミ）は、山城の賀茂氏（賀茂県主）の始祖であり、賀茂御祖神社（下鴨神社）の祭神として知られる。尚、上賀茂神社の祭神は大国主の御子で下照姫の兄にとされる、アジスキタカヒコネである。『新撰姓氏録』によれば、賀茂建角身命はカミムスビの孫である。（尚、スクナビコナはカミムスビの御子とされ、天日鷲命にあたる。）神武東征の際、高木神（タカミムスビ）・天照大神の命を受けて日向の曾の峰に天降り、大和の葛木山に至り、八咫烏に化身して神武天皇を先導し、金鵄として勝利に貢献したとある。（八咫烏は大和の八咫烏神社にまつられている。）以上のように、神魂命➡天日鷲神（少彦名・天稚彦）➡賀茂建角身命（八咫烏）の系譜が、概ね妥当と考えられる。

物部神社（祭神：宇摩志麻遅命）と弥彦神社（祭神：天香山命＝天香語山命）
宇摩志麻遅命と天香山命はニギハヤヒを父とする異母兄弟．崇神東征後の出雲挟撃を目論んだか！

ウマシマジノミコトは、神武（崇神）天皇のヤマト建国を助けた後、尾張氏の祖天香山（天香後山）命と共に、尾張、美濃、越国を平定した。ウマシマジノミコトはさらに西に向かい、播磨、吉備を経て石見に入ると、この地に留まった。

物部神社　石見国一宮

物部神社拝殿

御祭神宇摩志麻遅命は、物部氏の御祖神として知られております。御祭神の父神である饒速日命は十種神宝を奉じ、天磐舟に乗って大和国哮峯に天降り、御炊屋姫命を娶られ御祭神を生まれました。御祭神は父神の遺業を継いで国土開拓に尽くされました。

神武天皇御東遷のとき、忠誠を尽くされましたので天皇より神剣韴霊剣を賜りました。また、神武天皇御即位のとき、御祭神は五十串を樹て、韴霊剣・十種神宝を奉斎して天皇のために鎮魂宝寿を祈願されました。(鎮魂祭の起源)

その後、御祭神は天香山命と共に物部の兵を卒いて尾張・美濃・越国を平定され、天香具山命は新潟県の弥彦神社に鎮座されました。御祭神はさらに播磨・丹波を経て石見国に入り、都留夫・忍原・於爾・曽保里の兇賊を平定し、厳瓮を据え、天神を奉斎され(一瓶社の起源)、安の国(安濃郡名の起源)とされました。次いで、御祭神は鶴に乗り鶴降山に降りられ国見をして、八百山が大和の天香具山に似ていることから、この八百山の麓に宮居を築かれました。(折居田の起源)

（御由緒　石見国一宮　物部神社、Net）

彌（弥）彦神社（いやひこ（やひこ）じんじゃ）　越後国一宮

彌彦神社拝殿（光一郎撮影）

祭神の天香山命は、『古事記』に「高倉下」として登場する。社伝によれば、命は越後国開拓の詔により越後国の野積の浜（現 長岡市）に上陸し、地元民に漁撈や製塩、稲作、養蚕などの産業を教えたとされる。このため、越後国を造った神として弥彦山に祀られ「伊夜比古神」として崇敬された。このほか、彌彦の大神は、神武天皇即位の大典の際に自ら神歌楽（かがらく）を奉奏したとされる。また、『先代旧事本紀』によれば、天照太神の孫神である饒速日尊（天火明命）と、天道日女命（あめのみちひめ-）との間に生まれた神（天照太神の曾孫神）で、尾張氏等の祖神とされ、物部氏等の祖神である宇摩志摩治命（うましまぢ-）とは母神を異にする兄弟神となっている。神武天皇の大和国平定後、勅命を受け越国を平定、開拓に従事したと伝える。

（Wikipedia抜粋）

ウマシマジ命は、饒速日命が長髄彦の妹である三炊屋媛（みかしきやひめ）を娶って生まれた子で、天香山命（尾張氏の祖）が異母兄であるとする伝えがある（『旧事本紀』）。
『古事記』によれば、始め長髄彦に従っていたが、神武天皇の東征に際して長髄彦を殺し天皇に帰服し、以後自らの部族である物部（もののべ）を率いて皇城守護の任に当たったという。また『旧事本紀』によれば、神武（崇神）天皇即位の後、饒速日命の遺した10種の天璽瑞宝（あまつしるしのみづたから）を献上し、それを使って天皇と皇后の魂を鎮める呪術を行ったとされ、これを後世の鎮魂祭の初めとしている。
宮中でも行われる鎮魂祭が、石上神宮、物部神社や彌彦神社でも取り行われている。この鎮魂祭は、長髄彦らの大国主命一族の国譲りの鎮魂のためであろうと考えている。（藤田）

尾張氏の祖：高倉下（タカクラジ）（＝天香語山）

神話の記述
『記紀』
『古事記』、『日本書紀』によれば、神武天皇とその軍は東征中、熊野で悪神の毒気により倒れた。しかし、高倉下が剣をもたらすと覚醒したという。高倉下がこの剣を入手した経緯は次のようなものである。高倉下の夢の中で、天照大神と高木神が、葦原中国が騒がしいので建御雷神を遣わそうとしたところ、建御雷神は「自分がいかなくとも、国を平定した剣があるのでそれを降せばよい」と述べ、高倉下に「この剣を高倉下の倉に落とし入れることにしよう。お前は朝目覚めたら、天つ神の御子に献上しろ」と言った。そこで高倉下が目覚めて倉を調べたところ、はたして本当に倉の中に剣が置いてあったため、それを献上したのである。この剣は佐士布都神といい、甕布都神とも布都御魂ともいい、石上神宮に祀られている。
『先代旧事本紀』
『先代旧事本紀』巻5天孫本紀では、物部氏の祖神である饒速日命の子で尾張連らの祖天香語山命（彌彦神社の御祭神）の割註に「天降り以後の名は手栗彦命または高倉下命である」としている。その後『日本書紀』と同様の内容が記述される。
『海部氏勘注系図』
『海部氏系図』の勘注系図においては、始祖彦火明命の児天香語山命の註に、大屋津比賣命を娶り高倉下を生んだと記述されている。始祖の孫（天香語山命の子にあたる）天村雲命の弟として、“弟熊野高倉下　母大屋津比賣命”と表記されている。
（Wikipedia抜粋）

真清田神社（ますみだじんじゃ）は、愛知県一宮市にある神社。式内社（名神大社）、尾張国一宮。
祭神天火明命（あめのほあかりのみこと）
天火明命は、神武天皇33年にこの地を「尾張」と名づけ開拓した天香山命の父神である。天香山命の子孫が尾張氏とされ、天火明命は尾張氏の祖神とされる。なお、祭神については古くから諸説ある。
（天火明命が天香山命の父神であるとのことにはに疑念をもっている。藤田）
歴史
尾張氏の一部が尾張国中嶋郡に移住した時に、祖神である天火明命を祀ったのが起源と考えられる。尾張氏は当社を中心に開拓を進め、後に一族の名が国名になり、日本武尊の妃として宮簀媛を出すなど繁栄した。平安時代のころより、尾張国一宮と称された。当社について、阿仏尼の『十六夜日記』に「一の宮といふ社を過ぐる」と記述がある。同市内の大神神社も尾張国一宮を称する。
（Wikipedia抜粋）

『海部氏勘注系図』や真清田神社の社伝によれば、尾張氏は天火明命（ホアカリ）の子孫とされている。『先代旧事本記』などでは、ホアカリとニギハヤヒが同一人物とされるが、ニニギと兄弟と考えられるホアカリと倭国大乱を引き起こしたニギハヤヒとは1世紀半ほどの世代差がありとても同一視できない。ニギハヤヒの子のウマシマジと同世代である尾張氏始祖の天香語山（しばしば高倉下と見なされる）もまた、ニギハヤヒの子（母は天道日女命）と考える。崇神東征の折、天香語山は葛城の高尾張邑を出て尾張に移住したのであろう。
（藤田）

崇神東征後尾張に遷る

高倉下　高倉神社【たかくら】（三重県伊賀市西高倉）
『先代旧事本紀』巻5天孫本紀では、物部氏の祖神である饒速日命の子で尾張連らの祖天香語山命（彌彦神社の御祭神）の割註に「天降り以後の名は手栗彦命または高倉下命である」としている。なお、高倉下命はしばしば天香語山命と同一神であると解釈される。高倉神社(三重県伊賀市)は高倉下命の七代の後の子孫である倭得玉彦命がこの地に移り住んで高倉下命を祖神として祭祀した事を起源とする社である。（高倉下 - 高倉下の概要 - Weblio辞書）

尾張氏
御所市は現代の感覚では大和盆地のはずれにありますが、当時は瀬戸内海側に出る主要街道の基点でした。金と同じ価値があった水銀朱は、宇陀野から磯城（桜井市）を経由して御所市に運ばれ、風の森峠を下って五條市から吉野川（下流は紀ノ川）を下っていきます。このルートは大坂峠（穴虫峠）や竹内街道の峠越えよりも楽で、大和川はまだ難所が多く危険でした。
アメノホアカリ（天火明）を祀る尾張氏は愛知県が本拠地のイメージが強くありますが、元々の根源地は御所市高尾張で、「葛城の道」の入り口に位置する笛吹（笛吹神社）辺りです。真清田神社がある尾張一宮市の周辺には、猫島遺跡、八王子遺跡、元屋敷遺跡などの弥生遺跡があり、近くに大規模な朝日遺跡があります。尾張氏は土着勢力を破った後、木曽川の伏流水が湧き出る真清田神社周辺を開拓をしながら、尾張国に定着していったのでしょう。（Net）

鎮魂祭　崇神東征で敗北した大国主を中心とする出雲勢力の鎮魂

鎮魂祭（ちんこんさい、みたましずめのまつり）とは、宮中で新嘗祭の前日に天皇の鎮魂を行う儀式である。宮中三殿に近い綾綺殿にて行われる。一般的ではないものの、宮中と同日に行われている石上神宮や、彌彦神社や物部神社など、各地の神社でも行われる例もある（うち彌彦神社は年二回）。天皇に対して行う場合には「みたましずめ」「みたまふり」と言う。鎮魂祭はかつては旧暦11月の2度目の寅の日に行われていた（太陽暦導入後は11月22日）。この日は太陽の活力が最も弱くなる冬至の時期であり、太陽神アマテラスの子孫であるとされる天皇の魂の活力を高めるために行われた儀式と考えられる。また、新嘗祭（または大嘗祭）という重大な祭事に臨む天皇の霊を強化する祭でもある。第二次世界大戦以後は皇后や皇太子夫妻に対しても行われている。

宇気槽の儀

鎮魂の儀では、宇気槽（うきふね）と呼ばれる箱を伏せ、その上に女官が乗って桙で宇気槽の底を10回突く「宇気槽の儀」が行われる。これは日本神話の岩戸隠れの場面において天鈿女命が槽に乗って踊ったという伝承に基づくとされている。『古語拾遺』に「凡（およ）そ鎮魂の儀は、天鈿女命の遺跡（あと）なり」とある。かつてこの儀は、天鈿女命の後裔である猿女君の女性が行っており、「猿女の鎮魂」とも呼ばれていた。

魂振の儀

鎮魂の儀の後、天皇の衣を左右に10回振る魂振の儀が行われる。これは饒速日命が天津神より下された十種の神宝を用いた呪法に由来するとされる。『先代旧事本紀』には、饒速日命の子の宇摩志麻治命が十種の神宝を使って神武天皇の心身の安鎮を祈ったとの記述があり、「所謂（いはゆる）御鎮魂祭は此よりして始（おこ）れり」としている。

（Wikipedia抜粋）

石上神宮の祭神にまつわる神話は有名だ。主祭神は、韴霊(ふつのみたま)（平国之剣(くにむけのつるぎ)）という神劔に鎮まられる霊威がご正体の布都御魂大神(ふつみたまのおほかみ)。布都のフツとは、剣が勢いよくフツッと光って物を断ち切るさまを顕し、刀剣の威力を象徴するという神なのである。この神宿る剣は、かつて神代の時代に出雲の國譲りの交渉に赴いた建御雷神が携さえ、国土平定を成就させて大功を挙げた。

時が過ぎ、神武天皇が東征の折、熊野で荒ぶる神が化身した大きな熊が現れた。その毒気で正気を失い、皇軍の兵士もにわかに病み疲れ倒れてしまった。そのとき熊野に住む高倉下(たかくらじ)の許に霊夢とともに出現したのが、建御雷神が高天原から落雷のごとく倉を突き破って下し降ろした一振りの太刀。霊威の籠った韴霊が再び現れ、これを高倉下が献上すると、神武天皇も兵士もたちまち回復して正気を取り戻した。佐士布都神(さじふつのかみ)とも甕布都神(みかふつのかみ)(『記』)ともいわれるこの神剣は、荒ぶる神をまたたく間に斬り仆してしまう。こうして熊野を平定した神武天皇は、その後も戦いを続け各地の国津神を従わせ、最後に物部氏の祖神となる饒速日命(『記』・邇芸速日命)をも帰順させて東征の大業を終結させる。

そして神武天皇は、宇麻志麻遅命に韴霊・布都御魂大神の功績を称えて宮中での奉祀を命ずる。そのとき、父神・饒速日命が高天原の天津神から授かり、宇麻志麻遅命が継承していた天璽(あまつしるし)十種瑞宝(とくさのみづのたから)を献り、これを神剣ともに奉斎する。即位の年の十一月、宇麻志麻遅命は宮殿において天皇と皇后のための長寿を祈り、この十種瑞宝をもって神業を執り行った。これがいまに伝えられる物部の鎮魂祭の起源とされる。のちに石上神宮の祭神の一柱となる布留御魂大神(ふるのみたまのおほかみ)は、この鎮魂に用いる天璽十種瑞宝に鎮まり、その起死回生の霊威という。

（奈良泰秀　H18年12月、抜粋）【62】神社の伝承（中）　ー鎮魂祭の起源ー、Net

踊る　天鈿女命

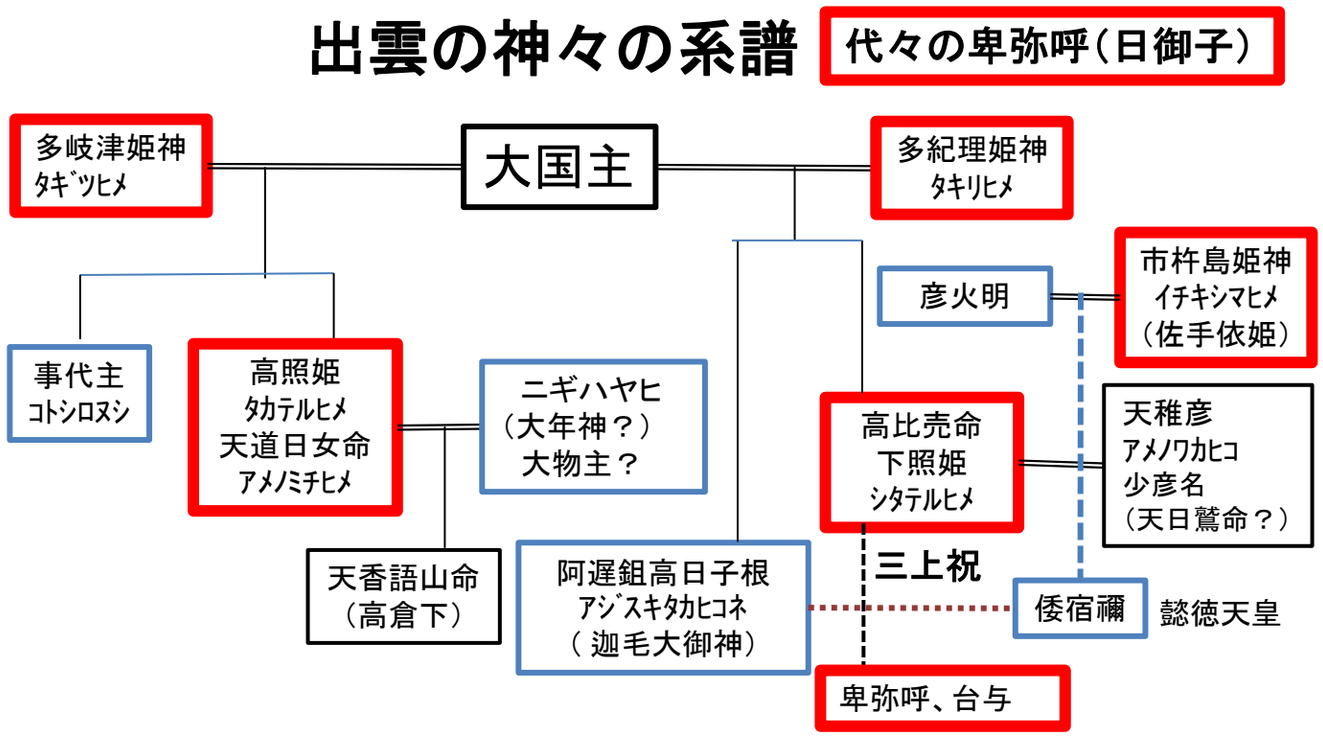
崇神（神武）の東征は、大彦とウマシマジが仕掛け、任那・伊都国連合の崇神天皇による、邪馬台国を終焉させるクーデターであったとみる。ナガスネヒコ（大国主系、出雲系、日本海系）はこのクーデターに抵抗したが、敢え無く敗死した。残存する出雲勢力を追い詰めたのが、ウマシマジと天香山命（ニギハヤヒを父とする異母兄弟）であり、石見に物部神社、越後に弥彦神社を創建し、出雲勢力を挟撃する体制を作り上げた。鎮魂祭は、皇居のほか、物部氏ゆかりの石上神宮、物部神社、弥彦神社で執り行われるが、この鎮魂祭は崇神東征で敗北した大国主を中心とする出雲勢力の鎮魂をもくろんだものであろう。

（藤田）

出雲国造神賀詞は、「国譲り」に起因する出雲の神々の皇室への服属儀礼か
―謎の女神、賀夜奈流美命とは―

出雲国造神賀詞（いずものくにのみやつこのかんよごと）は、新任の出雲国造が天皇に対して奏上する寿詞。
出雲国造は都の太政官の庁舎で任命が行われる。任命者は直ちに出雲国に戻って1年間の潔斎に入司・出雲大社祝部とともに改めて都に入り、吉日を選んで天皇の前で奏上したのが神賀詞である。その性格としては出雲の神々の皇室への服属儀礼とみる見方が一般的である。『延喜式』にその文章が記述され、『貞観儀式』に儀式の内容が記されている。内容は天穂日命以来の祖先神の活躍と歴代国造の天皇への忠誠の歴史とともに、明つ御神と表現される天皇への献上物の差出と長寿を祈願する言葉が述べられている。
神賀詞で皇室を守護する出雲の神々として描かれているのは、謎の女神・賀夜奈流美命、大物主櫛長瓦玉命（おそらくニギハヤヒ））、阿遅須伎高孫根乃命（阿遅鉏高日子根神、アジスキタカヒコネ）、事代主（コトシロヌシ）である。（出雲の神々の系譜（下図）参照） アジスキタカヒコネとコトシロヌシは、大国主命の御子神である。ニギハヤヒはスサノオの後で天津神であり、国津神である出雲の神々に属するとは思えない。しかし、出雲や吉備で力を得て東征し、倭国大乱に勝利し邪馬台国を建て、大神神社の祭神の座を大国主から奪った。大物主は自ら大国主の和魂と称したことにより出雲系の神と見なされたものと考える。問題は出雲の神の賀夜奈流美命とは如何なる女神かということである。『出雲國造神賀詞』に「賀夜奈流美命ノ御魂ヲ飛鳥ノ神奈備ニ坐テ皇孫命ノ近守神ト貢置」とあることから、大国主神が皇室の近き守護神として、賀夜奈流美命の神霊を飛鳥の神奈備に奉斎した。この飛鳥坐（あすかにいます）神社の祭神の飛鳥神奈備三日女神〔あすかのかんなびみひめのかみ〕が賀夜奈流美命とされる。社伝では、飛鳥神奈備三日女神が大国主の娘、高比売神〔たかひめのかみ〕・下照姫神〔したてるひめのかみ〕・高照光姫神〔たかてるみつひめのかみ〕であるとされている。大国主は、宗像三女神の沖津宮・多紀理媛神を妻とし阿遅鉏高日子根神と下照姫神（高比売神）をもうけ、また辺津宮・多岐津姫との間に事代主神と高照（光）姫神（天道日女、あめのみちひめ）をもうけた。下照姫は高天原から派遣された天稚彦（あめのわかひこ）と結ばれ、また高照姫の天道日女はニギハヤヒ（大年神？）と結ばれ天香語山命（高倉下）をもうけた。
賀夜奈流美命は、下照姫と高照姫（天道日女）合わせた女神の香用姫（かぐよひめ）で、加具夜姫（かぐやひめ）とも呼ばれたと考える。高照姫（天道日女）はニギハヤヒと結ばれ、天香語山命を産んだので、高照姫の方が加具夜姫と呼ばれるのに相応しい。実際、『大神分身類社鈔』によると、加夜奈留美命は高照姫の別名であるとされている。天香語山は別名高倉下で神武東遷の際に大活躍した、尾張連の祖である。
（飛鳥坐神社とは｜飛鳥坐神社、Net. 出雲國造神賀詞、出雲国造、系図－古代史俯瞰 by tokyoblog. 天の王朝　天道日女・香用姫の正体、Net　＋　藤田）

出雲の神々の系譜　代々の卑弥呼（日御子）



飛鳥坐神社（奈良県高市郡明日香村）拝殿
祭神：八重事代主神、大物主神、飛鳥神奈備三日女神（加夜奈留美神）、高皇産霊神

―謎の女神、賀夜奈流美命とは―

賀夜奈流美命とは、海神族の代々の女王の総称か？
卑弥呼を日巫女（or日御子）とし、海神族の代々の女王の世襲名とすると、宗像三女神―下照姫－卑弥呼－台与－倭姫－神功皇后と世襲されてきたのであろうか。卑弥呼は海神族の国（奴国）の嫡流とされる和邇氏との関連が見られる。

（賀夜奈流美命の系譜）

宗像三女神（海神族の女王）

↓

下照姫　大国主と宗像女神の一柱、多紀理姫神との息女神

↓

卑弥呼　邪馬台国の女王。下照姫の後裔の三上祝の一族で、和邇氏の巫女か。

↓

台与　卑弥呼の後継の台与は、卑弥呼の姪か。台与は息長水依姫と思われ、和邇氏一族と見なされる日子坐王の妻。

↓

倭姫　垂仁天皇の皇女で、母は皇后の日葉酢媛命。日葉酢媛命は、息長水依姫と日子坐王の息子（丹波道主）の息女。

↓

神功皇后　日子坐王の4世孫。三韓征伐には和邇氏武将の武振熊命を伴い、対馬の和珥津から新羅に侵攻。

藤田

石上神宮は、布都御魂剣に宿る神霊を主祭神とする。この剣は本来素戔嗚の剣であったが、不思議にも武甕槌神の剣となっており、詐称されたか。

石上神宮（いそのかみじんぐう）－Wikipedia抜粋
（物部氏の総氏神）

石上神宮は、奈良県天理市にある神社。『日本書紀』に記された「神宮」は伊勢神宮と石上神宮だけであり、その記述によれば日本最古設立の神宮となる。

主祭神
布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ） - 神体の布都御魂剣（ふつのみたまのつるぎ、武甕槌神（タケミカズチ）の剣）に宿る神霊
配神
布留御魂大神（ふるのみたま-） - 十種神宝に宿る神霊
布都斯魂大神（ふつしみたま-） - 天羽々斬剣（あめのはばきりのつるぎ）に宿る神霊
宇摩志麻治命（うましまじのみこと）

古代の山辺郡石上郷に属する布留山の西北麓に鎮座する。非常に歴史の古い神社で、『古事記』・『日本書紀』に既に、石上神宮・石上振神宮との記述がある。古代軍事氏族である物部氏が祭祀し、ヤマト政権の武器庫としての役割も果たしてきたと考えられている。神宮号を記録上では伊勢神宮と同じく一番古く称しており、伊勢神宮の古名とされる「磯宮（いそのみや）」と「いそのかみ」とに何らかの関係があるのかが興味深い。
社伝によれば、布都御魂剣は武甕槌・経津主二神による葦原中国平定の際に使われた剣で、神武東征で熊野において神武天皇が危機に陥った時に、高倉下（夢に天照大神、高木神、建御雷神が現れ手に入れた）を通して天皇の元に渡った。その後物部氏の祖宇摩志麻治命により宮中で祀られていたが、崇神天皇7年、勅命により物部氏の伊香色雄命が現在地に遷し、「石上大神」として祀ったのが当社の創建である。
社伝ではまた一方で、素盞嗚尊が八岐大蛇を斬ったときの十握剣が、石上布都魂神社（現・岡山県赤磐市）から当社へ遷されたとも伝えている。この剣は石上布都魂神社では明治以前には布都御魂剣と伝えていたとしている。
天武天皇3年（674年）には忍壁皇子（刑部親王）を派遣して神宝を磨かせ、諸家の宝物は皆その子孫に返還したはずだが、日本後紀　巻十二　桓武天皇　延暦二十三年（804年）二月庚戌 条に、代々の天皇が武器を納めてきた神宮の兵仗を山城国 葛野郡に移動したとき、人員延べ十五万七千余人を要し、移動後、倉がひとりでに倒れ、次に兵庫寮に納めたが、桓武天皇も病気になり、怪異が次々と起こり、使者を石上神宮に派遣して、女巫に命じて、何故か布都御魂ではなく、布留御魂を鎮魂するために呼び出したところ、女巫が一晩中怒り狂ったため、天皇の歳と同じ数の69人の僧侶を集めて読経させ、神宝を元に戻したとある。当時それほどまで多量の神宝があったと推測される。

https://www.isonokami.jp/about/index.html

拝殿（国宝）（光一郎撮影）

大鳥居

明治維新の後、大宮司になった国学者の菅政友が教部省の許可を得て禁足地を発掘しました。その際の出土品の中に鉄剣が一振り有りました。その形状から「素環頭内反太刀」と呼ばれるものです。これが霊剣に相違ないということで丸木を刳り貫いた容器に入れ、埋め戻したそうです。他の出土品から四世紀頃、埋められたと思われます。（FB情報、箕岡義憲）

藤田

石上神宮摂社　出雲建雄神社（いずもたけおじんじゃ）

延喜式内社で、草薙剣（くさなぎのつるぎ）の荒魂（あらみたま）である 出雲建雄神（いずもたけおのかみ）をお祀りしている。 江戸時代中期に成立した縁起には、天武天皇（てんむてんのう）の御代に御鎮座になった由がみえます。それによると、布留邑智（ふるのおち）という神主が、ある夜、布留川の上に八重雲が立ちわき、その雲の中で神剣が光り輝いている、という夢を見ました。明朝その地に行ってみると、8つの霊石があって、神が「吾は尾張氏の女が祭る神である。今この地に天降（あまくだ）って、皇孫を保（やすん）じ諸民を守ろう」と託宣されたので、神宮の前の岡の上に社殿を建ててお祀りしたということです。

江戸時代には、出雲建雄神は当神宮の御祭神 布都斯魂大神（ふつしみたまのおおかみ）の御子神と考えられ、そのため「若宮（わかみや）」と呼ばれていた。

本来、布都御魂剣（ふつのみたまのつるぎ）は、紀元前後にスサノオ（物部の太祖）が出雲に侵攻した折、八岐大蛇（大国主のことか）を斬殺した剣を意味した。しかし、物部氏の総氏神の石上神宮では主祭神を布都御魂大神 とし布都御魂剣に宿る武甕槌神の霊とされている。さらに、スサノオが八岐大蛇を切った剣を布都斯魂剣とし、天羽々斬剣（あめのはばきりのつるぎ）と同義としている。

石上神宮摂社の出雲建雄神社は、草薙剣の荒魂である出雲武雄を布都斯魂剣に宿る神霊としてお祀りしている。しかし、 江戸時代には、出雲建雄神は石上神宮の御祭神 布都斯魂大神の御子神と考えられて、摂社は「若宮」と呼ばれていた。出雲武雄が布都斯魂大神（スサノオ）の御子神とは、出雲武雄とはニギハヤヒ（物部の祖）のことではないのか。（藤田泰太郎）

フツノミタマ

明治7年、石上神宮の境内から発掘された鉄製の内反（そ）りの環頭太刀（フツノミタマ）は、約2000年前（紀元前後）のものと推定されている。
（謎の出雲王国、吉田）

天羽々斬剣（十握剣）

アマテラスとスサノオの誓約の場面では、『古事記』ではスサノオが持っていた十拳剣からアマテラスが3柱の女神を産んでいる。最も有名なのはヤマタノオロチ退治の時にスサノオが使った十拳剣（別名「天羽々斬（あめのはばきり）」。“羽々”とは“大蛇”の意味）で、ヤマタノオロチの尾の中にあった草薙剣に当たって刃が欠けたとしている。

この剣は石上布都魂神社（岡山県赤磐市にある神社、備前国一宮）に祭られ崇神天皇の代に石上神宮に遷された。石上神宮ではこの剣を布都斯魂剣と呼び、本殿内陣に奉安され祭られている。

岡山県赤磐市　石上布都神社所蔵　布都斯御魂模造刀、東大寺山古墳から同等の素環頭大刀が出土している。（石上神宮のフツノミタマと高倉下、Net）

藤原氏の総氏神

春日大社と建御雷（武甕槌命）

建御雷は藤原氏の権勢に阿るために素戔嗚を模して創作された架空の神か

春日大社（かすがたいしゃ）は、奈良県奈良市春日野町にある神社。式内社（名神大社）、二十二社（上七社）の一社。
全国に約1,000社ある春日神社の総本社である。ユネスコの世界遺産に「古都奈良の文化財」の1つとして登録されている。
奈良時代の神護景雲2年（768年）に平城京の守護と国民の繁栄を祈願するために創建され、中臣氏・藤原氏の氏神を祀る。主祭神の武甕槌命が白鹿に乗ってきたとされることから、鹿を神使とする。
（Wikipedia抜粋）

主祭神は以下の4柱。総称して春日神と呼ばれ、藤原氏の氏神である。
武甕槌命 - 藤原氏守護神（常陸国鹿島の神）
経津主命 - 同上（下総国香取の神）
天児屋根命 - 藤原氏の祖神（河内国平岡の神）
比売神 - 天児屋根命の妻（同上）
　奈良・平城京に遷都された710年（和銅3年）、藤原不比等が藤原氏の氏神である鹿島神（武甕槌命）を春日の御蓋山（みかさやま）に遷して祀り、春日神と称したのに始まりとする。
（Wikipedia抜粋)

春日大社　中門・御廊
（光一郎撮影）

中臣一門は全国各地にかなりの数の領地をもっていたそうで、その一派が東国の常総地方に領地をもっており、その関係で中臣（藤原）鎌足の父の御食子が常総に派遣された。従って、鎌足は常総の生まれの可能性が高い。御食子と鎌足は地元の雷神のタケミカヅチを鹿島神宮の祭神にして領民との融和を図り、東国経営を軌道に乗せた功績で、中央に戻った。
　鎌足の乙巳の変での活躍を契機に中臣（藤原）一門が絶大な権力をもつようになった。そのため地方神に過ぎなかったタケミカヅチを守護神とする中臣氏（藤原氏）に対する配慮として、『記紀』でタケミカズチに国譲りでの圧倒的パワーと、神武東征での渋いサポートが割り振られたと思う。
そして、藤原一門は総氏神の春日大社を創建し、そこの筆頭祭神に中臣氏（藤原氏）の守護神のタケミカズチを春日大社に遷した。
（藤田）

藤田

鹿島神宮と香取神宮

ヤマト政権の東国経営と蝦夷侵攻の拠点、

鹿島・香取両神宮とも、古くより朝廷からの崇敬の深い神社である。その神威の背景には、大和朝廷により両神宮が軍神として信仰されたことにある。古代の関東東部には、現在の霞ヶ浦（西浦・北浦）・印旛沼・手賀沼を含む一帯に「香取海（かとりのうみ）」という内海が広がっており、両神宮はその入り口を扼する地勢学的重要地に鎮座する。この香取海はヤマト政権による蝦夷進出の輸送基地として機能したと見られており、両神宮はその拠点とされ、両神宮の分霊は朝廷の威を示す神として東北沿岸部の各地で祀られた（Wikipedia抜粋）。

鹿島神宮（かしまじんぐう）は、茨城県鹿嶋市ある神社。常陸国一宮。全国にある鹿島神社の総本社。千葉県香取市の香取神宮、茨城県神栖市の息栖神社とともに東国三社の一社。また、宮中の四方拝で遥拝される一社である。

茨城県南東部、北浦と鹿島灘に挟まれた鹿島台地上に鎮座する。古くは『常陸国風土記』に鎮座が確認される東国随一の古社であり、日本神話で大国主の国譲りの際に活躍する武甕槌神（建御雷神、タケミカヅチ）を祭神とすることで知られる。古代には朝廷から蝦夷の平定神として、また藤原氏から氏神として崇敬された。

文化財のうちでは、「韴霊剣（ふつのみたまのつるぎ）」と称される長大な直刀が国宝に指定されている。鹿を神使とすることでも知られる。

祭神

武甕槌大神（建御雷神、たけみかつちのおおかみ）。

祭神について

天孫降臨に先立つ葦原中国平定においては、経津主神とともに活躍したという。その後、神武東征に際してタケミカヅチは伊波礼毘古（神武天皇）に神剣（布都御魂）を授けた。一方、『常陸国風土記』では鹿島神宮の祭神を「香島の天の大神（かしまのあめのおおかみ）」と記し、この神は天孫の統治以前に天から下ったとし、記紀の説話に似た伝承を記す。しかしながら、風土記にもこの神がタケミカヅチであるとの言及はない。8世紀からの蝦夷平定が進むにつれて地方神であった「香島神」に中央神話の軍神であるタケミカヅチの神格が加えられたとする説があるほか中央の国譲り神話自体も常陸に下った「香島神」が中臣氏によって割り込まれて作られたという説がある。

（Wikipedia抜粋）

（鹿島神宮拝殿、Wikipedia）

香取神宮（かとりじんぐう）は、千葉県香取市にある神社。下総国一宮。

関東地方を中心として全国にある香取神社の総本社。宮中の四方拝で遥拝される一社である。

祭神

経津主大神（ふつぬしのおおかみ）

祭神について

経津主の出自について、『日本書紀』には異伝として、イザナギ（伊弉諾尊）がカグツチ（軻遇突智）を斬った際、剣から滴る血が固まってできた岩群がフツヌシの祖であるとしている。その後『日本書紀』正伝では、天孫降臨に先立つ葦原中国平定においてタケミカヅチ（鹿島神宮祭神）とともに出雲へ派遣され、大己貴命と国譲りの交渉を行なったという。

経津主神は武甕槌神と関係が深いとされ、両神は対で扱われることが多い。例としては、経津主神を祀る香取神宮と、武甕槌神を祀る鹿島神宮とが、利根川を挟んで相対するように位置することがあげられる。また、春日大社では経津主神が建御雷神らとともに祀られている。これは香取神宮・鹿島神宮のある常総地方が中臣氏（藤原氏）の本拠地だったため、両社の祭神を勧請したものである。

経津主神の正体や神話の中で果たした役割については諸説がある。神名の「フツ」は刀剣で物が断ち切られる様を表し、刀剣の威力を神格化した神とする説がある。神武東征で武甕槌神が神武天皇に与えた布都御魂（ふつのみたま）の剣を神格化したとする説、物部氏の祭神であり、同族他氏の系図にも「フツ」が頻出することから物部氏の祖神である天目一箇神の別名とする説などがある。なお、『先代旧事本紀』では経津主神の神魂の刀が布都御魂であるとしている。布都御魂を祀る石上神宮が物部氏の奉斎社であり、かつ武器庫であったとされることから、経津主神も本来は物部氏の祭神で祖神であったが、後に擡頭する中臣氏の祭神である建御雷神にその神格が奪われたとする説がある。

（Wikipedia抜粋）

（香取神宮拝殿、Wikipedia）

鹿島神宮の祭神は武甕槌神は常総地方の雷神であるが、中臣氏（藤原氏）の権勢により、『記紀』の「国譲り」や「神武東征」での武神に格上げされたものと思う。一方、香取神宮祭神の経津主神は、物部氏の祖神と考える。布都御魂は、スサノオが八岐大蛇（大国主）殺した十握剣（天羽々斬剣）である布都御魂剣に宿る神霊である。布都御魂剣は、スサノオの子孫であるニギハヤヒによって吉備より、石上神宮に持ち込まれた。（藤田）

建御雷（武甕槌命、タケミカヅチ）は架空の神か

鹿島神社の主神　　香取神社の主神
（関東・東北の平定は、この二大軍神の加護に祈祷）

葦原中国平定

建御雷　　経津主神

中臣氏の祭神　　物部氏の祭神

異　説

タケミカヅチは元々は常総の土着の神でした。最初は単なる雷神だったハズです。雷は水を呼びます。イカヅチはイナヅマでありカミナリ。イナヅマを漢字で書くと「稲妻」。カミナリは「神鳴り」。雷が鳴ると神によって稲穂が稔る、つまりタケミカヅチは雷神であり、穀物神のはずです。それがタケミカヅチを氏神とする中臣氏（後の藤原氏）の出世によって武神（剣神）へと昇華したと思われます。

鹿島神宮はヤマトタケル東征の際に中継地点として利用されます。古代、この常総は大和朝廷から見ると辺境も辺境、僻地の土地です。ここから先は何があるか分からない未知の世界、魑魅魍魎跋扈する危険な世界だったわけです。この土地に武神が配置されることが、大和朝廷にとっても安心だったのでしょう。

もともと渡来系の製鉄神を祭る中臣氏の東国の一派である、タケミカヅチ神を祖神とするのが中臣氏（鎌足など）は、後に藤原氏となる有力氏族です。この中臣氏に対する配慮として、国譲りでの圧倒的パワーと、神武東征での渋いサポートが割り振られたと言われています。その証拠に大活躍する国譲りですが、別の伝ではタケミカヅチは登場せずフツヌシ神だけで国譲りを成します。ちなみにフツヌシは香取神宮の祭神、タケミカヅチは鹿島神宮の祭神。もともとはフツヌシだけで国譲りをしたところを藤原氏への配慮からタケミカヅチが割り込んだと思われます。

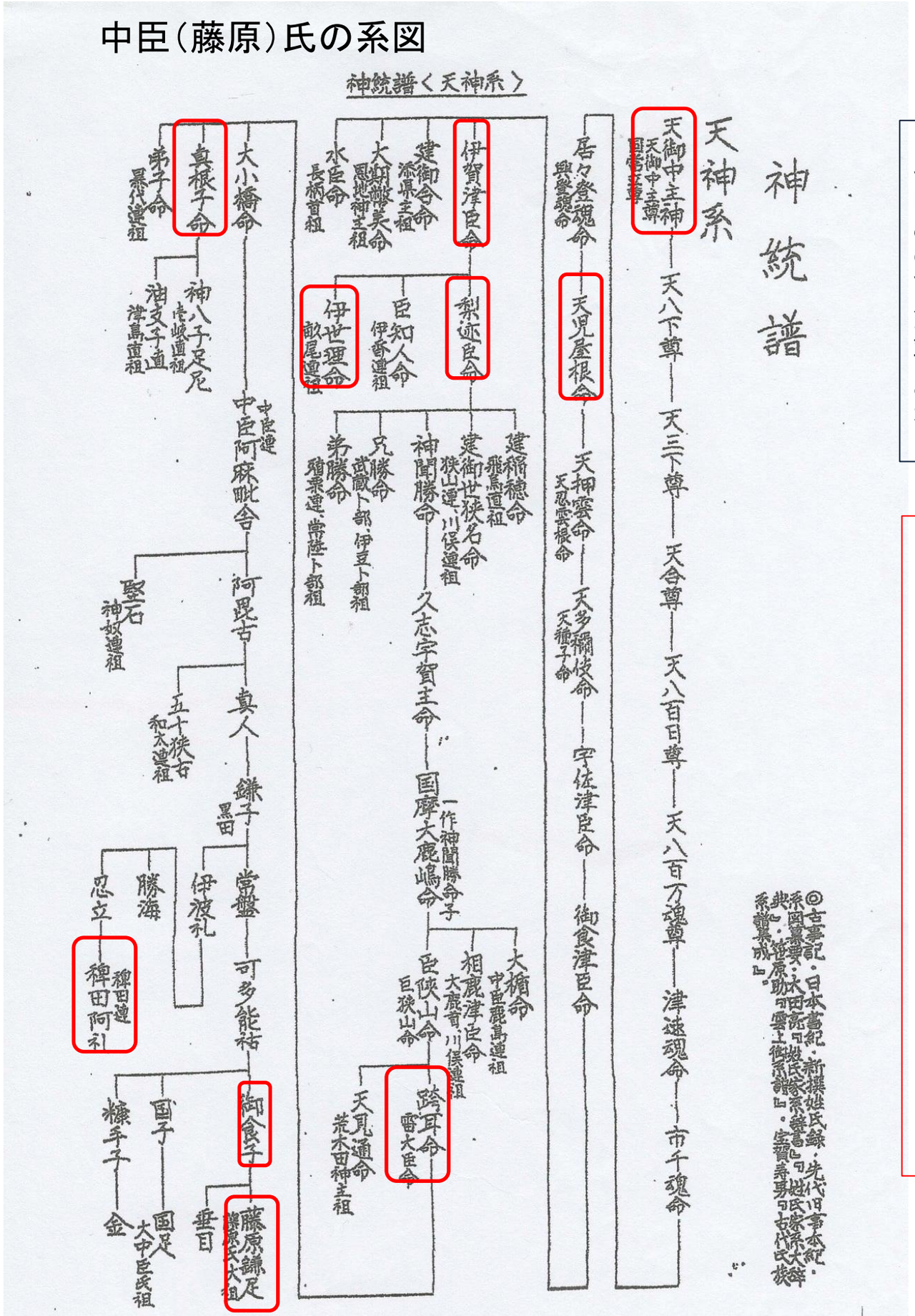
この二柱はスサノオがヤマタノオロチを退治した際に使用した剣（＝フツノミタマ剣）を神格化したもの。同一神だった可能性もあります。
（タケミカヅチ、Net）

神武東征は、ニギハヤヒとカムヤマトイワレヒコが仕組んだ、大国主の流れを汲む一派（ナガスネヒコやイセツヒコなど）の掃討戦であったのではないか。（藤田）

物部氏の総氏神である石上神宮の主祭神は、布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ、神体の布都御魂剣（武甕槌神（タケミカズチ）の剣）に宿る神霊）で、配神は布留御魂大神（十種神宝に宿る神霊）、布都斯魂大神（天羽々斬剣に宿る神霊）、宇摩志麻治命（ウマシマジ）他3神となっている。物部氏の氏神である石上神宮の祭神で疑問に思うのは、武甕槌神のもっていた剣に宿る布都御魂大神が主祭神となっていて、八岐大蛇（大国主と考える）を殺した天羽々斬剣（十握剣、布都御魂剣ともいう）に宿る神霊の布都斯魂大神が配神となっていることである。八岐大蛇を殺したスサノオやその子の物部氏の祖神の饒速日命（ニギハヤヒ）が主祭神でも配神でもなく、ニギハヤヒの子のウマシマジが配神になっていることが不可解である。一方、藤原氏（中臣氏）の総氏神の春日大社の主祭神は、武甕槌命（藤原氏守護神（常陸国鹿島の神））、経津主命（ふつぬしのみこと）（経津主大神、下総国香取の神）、天児屋根命（藤原氏の祖神）と比売神（天児屋根命の妻）の4柱である。藤原不比等が藤原氏の氏神である鹿島神（武甕槌命）を春日の御蓋山（みかさやま）に遷して祀り、春日神と称したのを始まりとする。しかし、「武甕槌神はこの春日山遷移のときはまだ登場せず、東国の「阿須波神」（雷神か）であった」とする（FB情報、Yi-Yin）。東国の武甕槌神（阿須波神）を祖神とする中臣氏は、後に藤原氏となる有力氏族である。この中臣氏に対する配慮として、出雲の国譲りで武甕槌神に圧倒的パワーと、神武東征での渋いサポートが割り振られたと思われる。その証拠に武甕槌神が大活躍する国譲りだが、別の伝では登場せず香取神宮の祭神の経津主命だけで国譲りを成す。すなわち、武甕槌神は『記紀』の編纂者が創案した架空の神と思われる。この架空の武甕槌神が春日大社の主祭神に祭り上げられと共に、石上神宮の主祭神もまた武甕槌神のもっていた剣に宿る布都御魂大神とされたのであろう。実際の所、経津主命は布都御魂大神（布都御魂命ともいう）と同神で、スサノオが出雲で八岐大蛇（大国主か）を退治した際に使用した剣（布都御魂剣、天羽々斬剣）を神格化したもの考えられる。かくて、布都御魂命はスサノオと同神と考えられる。布都御魂剣は、スサノオの子孫であるニギハヤヒによって吉備より石上神宮に持ち込まれた。
（FB藤田泰太郎タイムライン投稿抜粋21/3/7）

藤田

中臣(藤原)氏の系図



FB投稿　川岡保

神統譜(天神系)の系図です。天御中主神から藤原鎌足迄続いています。私が気になるのは「跨耳命」(雷大臣命)から真根子命、これは「壱岐真根子」だと思います。、神功皇后の時代、外敵から、倭国を護るため、雷大臣を対島に、壱岐真根子を壱岐に置いたと伝えられています。この雷大臣や壱岐真根子は神功皇后の時代に福岡市西区や糸島市に住んで居たのでは？　壱岐真根子が武内宿禰の身代わりで切腹したと言われる場所が「真根子神社」として福岡市西区姪浜にあるからです。又、壱岐真根子を祀る神社として、「壱岐神社」も近くにあります。又、この系図には古事記に載せる資料を暗読したと言われる「稗田阿礼」も入っていますが、この「稗田」姓の方々が糸島市には沢山住んでおられると聞いていますが？　更に「壱岐氏」の墓が福岡市中央区六本松にあります。
(FB投稿　川岡 保、2019/12/29)

中臣氏と藤原氏

国常立尊から神代7代が続いているのでしょうが、天児屋根(瓊瓊杵の時代に当たる)の前に伊弉諾、素戔嗚や天之忍穂耳命は出てこないのですね。系図に、瓊瓊杵尊の降臨の時に同伴したという天児屋根命を見つけ、さらに邪馬台国の卑弥呼が魏に使い(難升米や伊聲耆)を送ったが、彼らは中臣氏の梨迹臣と伊世理で彼らの父は伊香津臣命で、これら3名もまた系図にあり悦にいっています。これら中臣氏の先祖は、任那・伊都国連合の任那(伽耶)にいたと考えています。その他、系図で知っているものといえば、鹿島神宮の神官として東国に赴任していた中臣御食子とその子の中臣(藤原)鎌足です。

邪馬台国時代の梨迹臣と伊世理や神功皇后御代の雷大臣と真根子は年代的にうまく合致していますね。中臣一門は全国各地にかなりの数の領地をもっていたそうで、その一派が東国の常総に領地をもっており、その関係で中臣(藤原)鎌足の父の御食子が東国の常総に派遣された。従って、鎌足は常総の生まれの可能性が高いですね。なぜ鎌足は百済人といわれるのでしょうか。御食子と鎌足は地元の雷神のタケミカズチを鹿島神宮の祭神にして領民との融和を図り、東国経営を軌道に乗せた功績で、中央に戻ってこられたらしいですね。鎌足の乙巳の変での活躍を契機に藤原一門が巨大な権力をもつようになり、その影響で地方神に過ぎなかったタケミカズチを祖神とする中臣氏に対する配慮として、『記紀』でタケミカズチに国譲りでの圧倒的パワーと、神武東征での渋いサポートが割り振られたと思います。そして、藤原一門は総氏神の春日大社を創建し、そこの筆頭祭神に藤原氏の守護神のタケミカズチを春日大社に遷した。
(川岡氏 投稿のディスカッションでの藤田のコメント)

『記紀』皇統系譜考

瓊瓊杵から神武までの日向3代は皇統譜に百越の始祖伝説を模して意図的に差し込まれた架空の3代である。従って、瓊瓊杵は神武と同世代人となる。

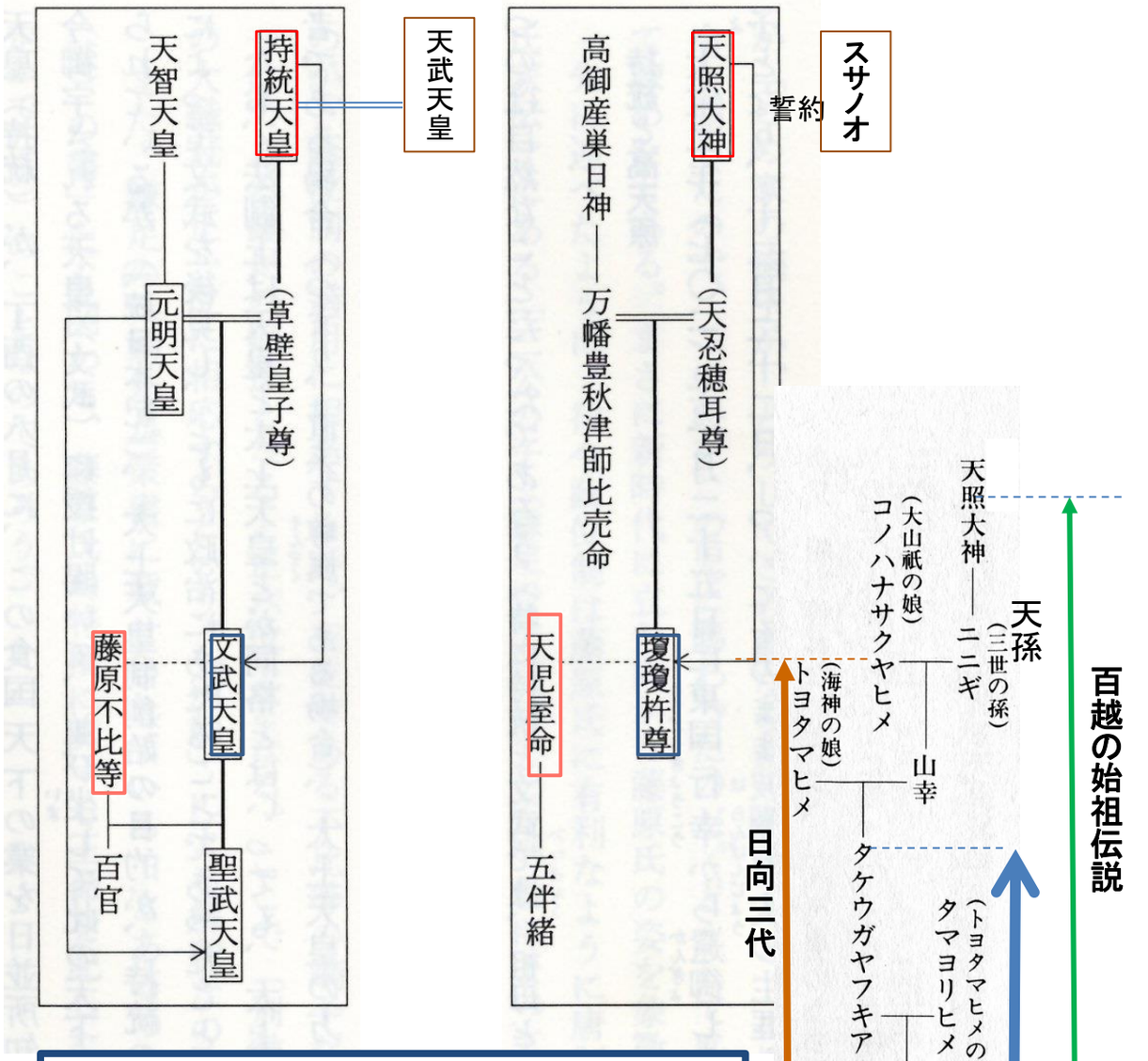
瓊瓊杵尊を祖とする皇統すなわち天孫族（任那・伊都国連合）の嫡流は、伊都国の中枢に受け継がれた。この嫡流は瓊瓊杵の兄の天火明の3世孫の倭宿禰の系統を正式の皇統とは認めない。天津神の系統は天忍穂耳命から瓊瓊杵ー崇神に至る系列と天津彦根命から応神ー継体に通じる饒速日と息長氏の系列があったと思われる。大和にはまず天火明の三世孫の倭宿禰が遷り、饒速日が続き、邪馬台国を建て倭国の大半を支配した。その後嫡流の崇神が邪馬台国を乗っ取りヤマト王権を建てた。さらに応神東征で息長氏が政権を掌握する。

瓊瓊杵の嫡流が支配するヤマト王権（飛鳥時代）を支える氏族にとって、各氏の素性は大きな関心事であり、その祖を皇統系譜の何処に位置づけるかあるいはヤマト王権の樹立に如何に貢献したかは、その氏族の政治力や盛衰に大きく影響する。

『記紀』が成立時には、有力氏族は自らの系図を持っていたはずである。『記紀』に記載された皇統系譜は、これら氏族の系図に基本的に合うものではならなく、慎重に検討されたはずである。このような熟慮を重ねた『記紀』の皇統系譜、少なくてもその世代数は充分に信頼できるものと考える。系譜の一代は四半世紀程度であろうと推量する。

しかしながら、応神朝以前の個々の記述や事績は、互いに矛盾していることが多々あり、かつ全体的な統一性に欠け極めて難解である。個々の記述は、それなりの史実を反映していると思うが、ヤマト王権や有力氏族に都合のいいように改竄されていると思われる所が多々ある。この主原因は、崇神東征以前の前ヤマト王権は、天孫族とは直接関係しない大国主や饒速日が支配する前ヤマト政権（玉牆の内つ国支国（葛城王朝）や邪馬台国）であったためである。崇神東征は卑弥呼の死により衰退しはじめた邪馬台国の乗っ取りを諮ったものであり、崇神朝に始まるヤマト王権は、邪馬台国の政治基盤と物部氏や和爾氏らの支配層を引き継ぎ畿内で成立した。

天武天皇ら『記紀』の編纂者は、崇神東征のヤマト王権を10代遡らせ、神武東征がヤマト王権始まりであるかのように装い、神武以前の神代を神話として極めて曖昧にして、天孫族の歴史が「倭の歴史」であると強弁した。それ故に綏靖天皇から開化天皇の8代を欠史8代とされたことも十分理解できる。
（藤田）



『記紀』の神代皇統系譜には、飛鳥時代の天武天皇、持統天皇と藤原不比等の政略・思惑が色濃く表れている。また、新羅本記の新羅王家の系図（その原典？）を参考にしたと思われる節がある。というのは、イザナギは初代赫居世居西干、スサノオは第2代南解次次雄、ホアカリは脱解王（第4代脱解尼師今）、さらにアメノヒボコは第8代阿達羅尼師今の皇子（？）の延烏郎に当たると推察され、イザナギ、スサノオ、ホアカリとアメノヒボコの渡来した年代を推定できる。さらに、天照大神から神武に至る系譜は百越の始祖伝説に基づき作成されたと思われ、この神代の天皇系譜に海神族が深く関係していることを示唆する。神武の父、タケウガヤフキアエズは九州のウガヤフキアエズ王朝の初代で、この王朝は崇神天皇に至るまで１０代続いたと考える。崇神は東征し、大和にヤマト王権（三輪王朝）を建てた。

この天照大神から崇神天皇に至る系譜は任那・伊都国連合の王権の系譜であると類推する。一方、大和・葛城の天火明の3世孫の倭宿禰（第4代懿徳天皇）から第9代開化天皇に至る系譜は、ヤマト王権以前に畿内に存在した大国主の国（浦安国と玉牆の内の国（大己貴の国）の支国さらにニギハヤヒの邪馬台国の王権の系譜であると推察する。
（藤田）

天照大神は持統天皇を模したのか

持統天皇の和風諡号は、大倭根子天之広野日女尊から高天原広野姫に改変された（文武天皇即位前紀）。従って、この時期に高天原神話が成立したとされる。

天照大神が、子の天忍穂耳尊を地上に降臨させようとしたものの、その拒否によって果たせず、天忍穂耳尊と万幡豊秋津師比売命との間に生まれた天孫の瓊瓊杵尊を降臨させた。それを天児屋命が五伴緒を率いて随伴するという構造は、持統が子の草壁皇子を即位させようとしたものの、その夭折によって果たせず、草壁皇子と安陪皇女との間に生まれた孫の文武を即位させ、それを藤原不比等が百官を率い輔弼するという構造と同じものである。
（古代の皇位継承、遠山）（藤原氏、倉本）

『古事記』と『日本書紀』(『記紀』)の考察

藤田

『古事記』・『日本書紀』の天孫族と藤原氏を利する作為

『古事記』と『日本書紀』の編纂は天智天皇の弟である天武天皇の命により行われ、8世紀以降の律令制国家の樹立のための歴史の理論的根拠と基盤となった。『古事記』は、712年、太朝臣安萬侶によって献上された。また、『日本書紀』は、720年、舎人親王らの撰で完成した。708年、右大臣正二位石上朝臣麻呂は長く空席であった左大臣に、藤原不比等が後継の右大臣に任ぜられた。この頃実際に政治を主導したのは、不比等だったと考えられている。藤原不比等と石上朝臣麻呂が『古事記』と『日本書紀』の編纂を牽引したと考えられる。藤原氏は中臣氏の出自とされ、石上麻呂は物部氏の出自である。したがって、葦原中国平定で藤原氏の祭神である武甕槌神と物部氏の祭神の経津主神が主たる役割を果たしたように物語れていることがよく理解できる。物部氏は吉備より河内を経由して大和に進出したと思われ、南朝鮮の出自と思われる中臣氏は崇神東征に同伴したと思われ、物部氏と中臣氏は共に河内を本拠とした。そのため、国生み神話が淡路島から始まり、また河内が畿内の中心になったことも理解できる。さらに、伊都国の勢力が南九州におよび、崇神東征に久米人や隼人が同伴した。そのため、日向が天孫降臨の舞台にされたと思う。

一方、藤原氏は物部氏の権勢を巧妙に抑えるため、神祇官神である中臣氏が奏上した大祓詞では、天津罪を犯したスサノオは悪神とされた。さらに、武甕槌神は『記紀』の編纂者が創案した架空の神と思われ、この架空の武甕槌神が春日大社の主祭神に祭り上げられと共に、石上神宮の主祭神もまた武甕槌神のもっていた剣に宿る布都御魂大神とされた。実際の所、経津主命は布都御魂大神(布都御魂命ともいう)と同神で、スサノオが出雲で八岐大蛇(大国主か)を退治した際に使用した剣(布都御魂剣、天羽々斬剣)を神格化したもの考えられる。かくて、布都御魂命はスサノオと同神と考えられる。布都御魂剣は、スサノオの子孫であるニギハヤヒによって吉備より石上神宮に持ち込まれた。このように、『記紀』の出雲の国譲りの主役はスサノオではなく武甕槌神とされた。スサノオは石上神宮の祭神から外され、祭神は布都御魂大神やウマシマジとされたと思う。換言すれば、天照大御神の嫡流の天之忍穂耳命の御子で天孫のニニギの子孫が支配した飛鳥時代に、スサノオの直系と思われる天津彦根神の子孫のニギハヤヒを祖とする物部氏は、『記紀』での出雲の国譲りでの主役の地位から外されることにより、飛鳥時代のヤマト王権の中枢から除外されたと推察する。

尚、天武天皇の崩御後、即位した持統天皇は、天武天皇の政策を引き継ぎ、完成させた。当然、『古事記』や『日本書紀』の編纂にも持統天皇の意向が影響していると思われる。最高神、天照大神は、女帝の持統天皇の反映とも考えることができる。

(藤田)

『記紀』の謎ーヤマト王権(崇神王朝)は、邪馬台国を引き継いだ!

『記紀』の神代と崇神東征により成立した崇神王朝以前の人代(神武～開化)の記述は、謎に満ちている。この謎は次に述べる事象を反映していると考える。

瓊瓊杵尊(ニニギ)を祖とする皇統(天孫族(任那・伊都国連合))の嫡流は、伊都国の中枢に受け継がれた。一方、大和にはまず三島神が遷り、ホアカリの3世孫の倭宿禰が遷り、ニギハヤヒが続き邪馬台国を建て倭国の過半(西日本)を支配した。その後嫡流の崇神が邪馬台国を引き継ぎ、ヤマト王権を建てた。ニニギの嫡流が支配するヤマト王権(飛鳥時代)を支える氏族にとって、各氏の素性は大きな関心事であり、その祖を皇統系譜の何處に位置づけるかあるいはヤマト王権の樹立に如何に貢献したかは、その氏族の政治力や盛衰に大きく影響する。

『記紀』の成立時には、有力氏族は自らの系図を持っていたはずである。『記紀』に記載された皇統系譜は、これら氏族の系図に基本的に合うものではならなく、慎重に検討されたはずである。このような熟慮を重ねた『記紀』の皇統系譜(瓊瓊杵から神武天皇を除き)、少なくてもその世代数は充分に信頼できるものと考える。

しかしながら、神代および崇神朝以前の人代の記述は、互いに矛盾していることが多々あり、かつ全体的な統一性に欠け極めて難解である。個々の記述は、それなりの史実を反映していると思うが、ヤマト王権や有力氏族に都合のいいように改竄されていると思われる所が多々ある。この主原因は、崇神東征以前の前ヤマト政権は、天孫族とは直接関係しない大国主や天孫族傍流のニギハヤヒが支配する前ヤマト政権(大己貴の国「玉牆の内つ国」の支国(葛城王朝)や邪馬台国)であったためである。崇神東征により、卑弥呼の死により衰退しはじめた邪馬台国を引き継いだものであり、崇神朝に始まるヤマト王権は、邪馬台国の政治基盤と物部氏や和邇氏らの支配層を引き継ぎ畿内で成立した。

藤原不比等ら『記紀』の編纂者は、崇神東征で成立したヤマト王権を10代遡らせ、神武東征がヤマト王権の始まりであるかのように装い、神武(崇神)以前の神代を神話として極めて曖昧にして、天孫族の歴史が「倭の歴史」であると強弁した。それ故に綏靖天皇から開化天皇の8代を欠史8代とされたことも十分理解できる。

(藤田)

神武天皇は、崇神天皇(第10代)と同一人物とされる。しかし、ニギハヤヒを神武天皇とした方が、その称号「始馭天下之天皇」に相応しい。

神武東征は三島神の東征と見なされ、葛城多氏王権(神武から安寧天皇に当たる)が建てられた。海部氏勘注系図にある倭宿禰が、第4代懿徳天皇に当たる。井光伝承は倭宿祢命が大和進出の際の出来事を神武東征伝承に取り込んだと思われる。この大和進出が葛城王朝を樹立に繋がった。次に、瀬戸内勢力の代表たるニギハヤヒ(9代孝霊天皇?)がアメノヒボコとともに河内から大和への進出し、大国主と彦火明命(スクナビコナ)に代表される日本海勢力(大国主ら)との抗争(倭国大乱)が始まった。瀬戸内海勢力が優勢となり、奴国の流れを汲む和邇氏の巫女の卑弥呼を日本海勢力と共立して倭国大乱がおさまった。ここに、纏向を中心とする邪馬台国(虚空大和の国)が成立した。邪馬台国は、任那を含む西日本全域を勢力下に置いた、倭国の最初の大国である。かくて、ニギハヤヒを神武天皇「始馭天下之天皇」とした方が、その称号」に相応しい。

「御肇國天皇」の称号をもつ崇神天皇(第10代)と神武天皇は同一人物とされることがあるが、崇神天皇はニギハヤヒの建てた倭国の初めての大国の邪馬台国をただ引き継いで崇神王朝を建てたに過ぎない。

(藤田)

『記紀』に近江の古代史が殆ど記述されないわけ

弥生時代中期・後期さらに古墳時代を通じて、近江は、西国、東国と北国を結ぶ琵琶湖の水運を備えた交通の要衝であり、また倭国のなかで最も米の収穫量が多かったと思われ、鉄器・青銅器の製造も盛んで、木工業・窯業・薬業なども発展していた一大産業国であった。しかしながら、『記紀』には、近江の古代史が殆ど記述されず、また、畿内からも外されている。

『記紀』の編纂に関与した天孫族の後裔にとって、4世紀までの近江は天孫族に敵対する出雲(大国主)勢力(玉牆の内つ国や狗奴国)の拠点であった。ニギハヤヒの東征により、玉牆の内つ国が解体され邪馬台国(ニギハヤヒの虚空見つ倭国)と狗奴国(大己貴の国「玉牆の内つ国」の後継国)に分裂した。崇神王朝(ヤマト王権)は、崇神東征により邪馬台国を乗っ取ることにより成立した。邪馬台国の痕跡はなんとか『記紀』で辿れる。しかし、狗奴国(近江湖東・湖北と美濃をはじめとする東国から成る)となると『記紀』にその存在を暗示する記述すら全くない。このことは、景行朝で日本武尊が東征の最後に伊吹山を最期の砦とする狗奴国の残存勢力との戦いで敗死したことと深く関連していると思う。即ち、邪馬台国を継いだ崇神王朝(ヤマト王権)にとって崇神王朝の倭国平定の大将軍が狗奴国勢力によって敗死させられたことはヤマト王権にとって受け入れられない恥辱であった。次の成務朝で日本武尊の息子により狗奴国は滅亡させられるが、近江勢力が再びヤマト王権に反抗することがないようにと近江・湖南に近江一宮の建部大社(日本武尊が祭神)が設けられた。また、不思議なことに『記紀』には富士山の記載が全くない。伊吹山とともに富士山もまた狗奴国の神奈備であったがため富士山もヤマト王権にとっては忌避すべき存在であったと思われる。

壬申の乱で大海人皇子(後の天武天皇)に敵対した近江朝廷軍の主力は近江勢力であった。『日本書紀』の編纂を命じた天武天皇にとって近江は許されざる勢力と映ったので、近江の古代史が『記紀』で殆ど語られないようにし、近江を畿内から外したのではないかと推察している。尚、吉野、伊賀、伊勢より美濃から近江に侵攻した壬申の乱が、熊野・吉野から大和に侵攻した神武天皇軍の大和制圧の過程に反映されているとの見方もある。

(藤田)

藤原氏の守護神の武甕槌神（タケミカズチ）は架空の神か！
大祓（中臣の祓）、素戔嗚命の天津罪と瀬織津姫による浄化；藤原氏による専制の確立

大祓（おおはらえ）は天下万民の罪穢を祓うという儀式で、宮中と伊勢神宮で執り行われる。毎年6月と12月の晦日、すなわち、6月30日と12月31日に行われるものを恒例とするが、天皇即位後の最初の新嘗祭である大嘗祭の前後や、未曾有の疫病の流行、斎宮斎院の卜定、災害の襲来などでも臨時に執り行われる。大祓は中臣の祓とも言われる。中臣氏は物部氏とともに仏教受容問題で蘇我氏と対立した。中臣鎌足は645年の大化の改新で活躍し、669年の死に臨んで、藤原姓を賜った。以後鎌足の子孫は藤原氏を名乗ったが、本系は依然として中臣を称し、代々神祇官・伊勢神官など神事・祭祀職を世襲した。

大祓では長文の大祓詞を奏上、あるいは宣り下して浄化する。大祓詞には地上で国の人間が犯す罪が主体の「国津罪」よりも農耕に関する慣行を破ることが主体の「天津罪」のほうを先に列挙しており、古代ではこちらのほうが共同体秩序を乱す大罪と考えていたことが伺える。高天原の秩序を乱したスサノオが，八十万神の合議により千座置戸（ちくらおきど）を科せられたうえで，神逐（かんやらい）すなわち追放刑に処せられたのは，共同体秩序の侵害者に対する内部的刑罰としての財産没収刑と追放刑(平和喪失)の神話的表現であったとみられる。天津罪として知られる畔放（あはなち）·溝埋（みぞうめ）·樋放（ひはなち）などの農業用水施設の破壊や，頻蒔（しきまき）(他人が播種した水田に重ねて種をまき，自分の耕作地であると主張する行為)·串刺（くしざし）(収穫期に他人の耕作した田にクシを刺し，自分の耕作地であると主張する行為)などの農業慣行違反等により共同体秩序が犯された場合に行われる大祓には，本来は八十万神のごとく共同体成員全員が参加しなければならなかったと推定される。

大祓詞の内容をかいつまんで、現代語訳にする。「高天原という天津神がいる神の国から、天孫降臨された瓊瓊杵尊（ニニギ）が治められる大和の国は平和に治められている。その中で、天津罪、国津罪様々な罪が生まれる。その罪を消してしまう大祓という儀式をする準備をし、天津祝詞という天上から伝わった神聖な祝詞を唱えると、このような罪は、まるで朝の風や夕の風が吹きとばすように、鎌でばっさりと切り払われるように、消えていくだろう。こうして消えた罪や穢れは、瀬織津姫、速開津姫、気吹戸主、速佐須良比咩が消し去ってくれるだろう。そして罪という罪が消え、この大祓の儀式で員人々に罪を祓い清めてくださることを参集した人に良く拝聴せよと宣り聞かせる。」

天津罪とはスサノオの行為そのものである。「大祓祝詞」とは、実名こそ伏せられているが、暗にスサノオだけを集中的に攻撃しているともとれる。普通に考えると、「天津罪を犯したスサノオは、悪神の象徴であり、本来は“あってはならない神様”だ」ということになるが、逆に、「神々の行った罪を一身に背負って高天之原から消えていったスサノオこそ、神界のメシア(救世主)である」という解釈も成り立つ。そして、このスサノオの犯した罪を、贖罪(許して帳消しに)してくれるのが、瀬織津姫ら“祓戸四神”だった。彼女らは水神や祓神、瀧神、川神である。瀬織津姫は九州以南では海の神ともされる。人の穢れを早川の瀬で浄めるとあり、これは治水神としての特性である。大祓詞には「高山の末短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に坐す瀬織津姫という神、大海原に持ち出でなむ」とある。勢いよく流れ下る川の力によって人々や社会の罪穢れを大海原に押し流してしまう、川に宿る大自然神であることがわかる。瀬織津姫と同一神ともみられる白山主神の菊理媛神は、『記紀』にわずかに見えるのみで、冥界という異境訪問をしたイザナギとその妻神イザナミの仲を取り持つ役割を果たすが、その実体は明確ではない。白山神が広く分布する北東日本海沿岸地域には、なぜか海神系の石部（磯部）神社が古社として多く分布する。これらの諸問題の検討から「瀬織律姫＝菊理姫」との所見が得られ、同時に彼女はまた豊受大神にもあたるのではないかとの推論にいたった（越と出雲の夜明け、宝賀寿男）。東北地方に見られる「おシラさま」も瀬織律姫に通じる。瀬織律姫、菊理姫あるいは豊受大神らは紀元前後のイザナギ·イザナミさらにスサノオが倭国に渡来する以前の原始神道の時代（縄文時代からか）の神であると思われる。

（つづく）

（つづき）

物部氏の総氏神である石上神宮の主祭神は、布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ、神体の布都御魂剣（武甕槌神（タケミカズチ）の剣）に宿る神霊）で、配神は布留御魂大神（十種神宝に宿る神霊）、布都斯魂大神（天羽々斬剣に宿る神霊）、宇摩志麻治命（ウマシマジ）他3神となっている。物部氏の氏神である石上神宮の祭神で疑問に思うのは、武甕槌神のもっていた剣に宿る布都御魂大神が主祭神となっていて、八岐大蛇（大国主と考える）を殺した天羽々斬剣（十握剣、布都御魂剣ともいう）に宿る神霊の布都斯魂大神が配神となっていることである。八岐大蛇を殺したスサノオやその子の物部氏の祖神の饒速日命（ニギハヤヒ）が主祭神でも配神でもなく、ニギハヤヒの子のウマシマジが配神になっていることが不可解である。一方、藤原氏（中臣氏）の総氏神の春日大社の主祭神は、武甕槌命（藤原氏守護神（常陸国鹿島の神））、経津主命（ふつぬしのみこと）（経津主大神、下総国香取の神）、天児屋根命（藤原氏の祖神）と比売神（天児屋根命の妻）の4柱である。藤原不比等が藤原氏の氏神である鹿島神（武甕槌命）を春日の御蓋山（みかさやま）に遷して祀り、春日神と称したのを始まりとする。しかし、「武甕槌神はこの春日山遷移のときはまだ登場せず、東国の「阿須波神」（雷神か）であった」とする（FB情報、Yi-Yin）。東国の武甕槌神（阿須波神）を祖神とする中臣氏は、後に藤原氏となる有力氏族である。この中臣氏に対する配慮として、出雲の国譲りで武甕槌神に圧倒的パワーと、神武東征での渋いサポートが割り振られたと思われる。その証拠に武甕槌神が大活躍する国譲りだが、別の伝では登場せず香取神宮の祭神の経津主命だけで国譲りを成す。すなわち、武甕槌神は『記紀』の編纂者が創案した架空の神と思われる。この架空の武甕槌神が春日大社の主祭神に祭り上げられと共に、石上神宮の主祭神もまた武甕槌神のもっていた剣に宿る布都御魂大神とされたのであろう。実際の所、経津主命は布都御魂大神（布都御魂命ともいう）と同神で、スサノオが出雲で八岐大蛇（大国主か）を退治した際に使用した剣（布都御魂剣、天羽々斬剣）を神格化したもの考えられる。かくて、布都御魂命はスサノオと同神と考えられる。布都御魂剣は、スサノオの子孫であるニギハヤヒによって、吉備の石上布都魂神社より石上神宮に持ち込まれた。

代々の神祇官神である中臣氏が奏上した大祓詞では、天津罪を犯したスサノオは悪神とされた。藤原氏は物部氏の権勢を抑えるため、『記紀』の出雲の国譲りの主役をスサノオではなく武甕槌神とした。スサノオは石上神宮の祭神から外され、祭神は布都御魂大神やウマシマジとされたと思う。また、天照大御神の嫡流の天之忍穂耳命の御子で天孫のニニギの子孫が支配した飛鳥時代に、スサノオの直系と思われる天津彦根神の子孫のニギハヤヒを祖とする物部氏は、『記紀』での出雲の国譲りでの主役の地位から外されることにより、飛鳥時代のヤマト王権の中枢から除外されたと推察する。

（Wikipedia、コトバンク、神道の知識・作法/大祓詞-おおはらえことば/（Net）、瀬織津姫が封印された理由/（Net）、佐久奈度神社由緒記（Net）、越と出雲の夜明け、宝賀寿男 + FB藤田泰太郎タイムライン投稿20/7/30抜粋）

『日本書紀』の素戔嗚尊の頭文字、「素」は稲羽の素兎と同様に、まだ色の付かない状態を視覚的に表している。素戔嗚尊の名で鍵となるのは「戔」。戔には「上下」の字義と「上」の意味があり、まず見ての通り、戈が上下に二つ重なる。戈が上下に二つあるのを中国では「ふた心」といい、二心（弐心）つまり裏切りを意味している。「戈を倒（さかしま）にす」と言えば、敵に向けていた戈先を味方に向ける裏切り行為を意味する。戔は、叛乱や反逆を示唆しており、『日本書紀』では素戔嗚尊を裏切り者呼ばりしており、これこそその編纂の意図でもある。（FB情報、下岡 茂）

卑弥呼（倭迹迹日百襲姫）は神武天皇妃の媛蹈鞴五十鈴姫である！
神武天皇はニギハヤヒを模して創出されたのか？

新羅王家第4代脱解王の時代（1世紀半ば）に瓊瓊杵尊（ニニギ）と天火明命（ホアカリ）のそれぞれ筑前と丹後への天孫降臨があったと思われる。また、日向3代はニニギと神武の間に詐称的に挿入された。前述のように、天孫降臨から大和に崇神王朝（三輪王朝）建てられるまでの近畿の前ヤマト政権（国）は、『海部氏勘注系図』、『但馬の国風土記』と『記紀』の該当系図を対応付けることで類推することができる。前ヤマト政権の国々の系譜を、周知されている『記紀』の系譜（神武から開化まで）を対応させると、初代神武天皇から第3代安寧天皇までは、近江の浦安の国の支国、4代懿徳から6代孝安までは、近江の大己貴の国「玉牆の内つ国」の支国（葛城王朝）、7代孝霊から9代開化までは、邪馬台国に当たる。『但馬の国風土記』によるとアメノヒボコは孝安朝のころに来倭したと思われる。

2世紀中ごろ、アメノヒボコを同伴したニギハヤヒの東征によって引き起こされた倭国大乱は、ニギハヤヒ、大国主と和邇氏により卑弥呼が共立され邪馬台国が建てられることにより鎮められた。ニギハヤヒは、孝霊天皇に当たり、また大物主にも当たる。卑弥呼は孝霊天皇皇女の皇女倭迹迹日百襲姫である。（このニギハヤヒは天孫降臨時代のニギハヤヒの子孫と考える。）邪馬台国は『日本書紀』にある、ニギハヤヒの建てた「虚空見つ倭国」に当たると思われるが、『記紀』に卑弥呼は記載されていない。しかしながら、『桓檀古記』（訳 鹿島 昇）、『北倭記』、『倭人興亡史』には、卑弥呼が掲載されており、卑弥呼は神武天皇妃の媛蹈鞴五十鈴姫（ひめたたらいすずひめ）とされる（FBコメント、川岡保）。卑弥呼は宮内庁の治定で倭迹迹日百襲姫の陵墓とされる箸墓に葬られたと考えられている。神武天皇の妃となれば、天孫降臨の時代（1世紀半ば）の人格と思われる媛蹈鞴五十鈴姫が3世紀の卑弥呼に当たる訳はないと考えられるが、神武天皇は孝霊天皇（ニギハヤヒ）に当たると考えると、孝霊天皇が3世紀前後の人格であるので、神武天皇もまた3世紀前後の人格となる。従って、神武天皇妃の媛蹈鞴五十鈴姫もまた3世紀前後の人格と考えられる。『記紀』の編者は、2世紀半ばから末のニギハヤの東征と邪馬台国の建国譚を、神武天皇即位と媛蹈鞴五十鈴姫を皇后にした逸話を一緒に、1世紀半ばの天孫降臨の時代にすっぽり押し込んで、倭（ヤマト、日本）国の始まりとした。そう考えると必然的に、卑弥呼＝倭迹迹日百襲姫命＝媛蹈鞴五十鈴姫ということになる。（邪馬台国を建てたニギハヤヒ（大物主、孝霊天皇）は倭国の最初の大王と考えられ、倭迹迹日百襲姫命はその妃と推察される。従って、神武天皇はニギハヤヒを模して創出されたと思われる？）

媛蹈鞴五十鈴媛とは、『古事記』によると、神武天皇の皇后候補を見つけてきた大久米命は、次のように述べた。「三嶋の湟咋（みぞくひ）の娘、名は勢夜陀多良比売（せやだたらひめ、玉櫛媛（玉依姫））を大物主神が見感（みめ）でて、朱塗りの矢に化けて川を下り、用便をするセヤダタラヒメのほと（女陰）を突いた。驚いたヒメが、その矢を床のそばに置くと、矢は麗しき壮夫となってヒメと結ばれた。生まれた子が比売多多伊須気余理比売（ひめたたらいすけよりひめ）である。」『日本書記』では、比売多多伊須気余理比売を「事代主神と三島溝橛（湟咋）耳神の娘とが結ばれ生める児、媛蹈鞴五十鈴媛」とする。この逸話から媛蹈鞴五十鈴媛は大物主（あるいは事代主）の娘ということになる。

卑弥呼は、海神族の和邇氏（製鉄氏族）の巫女とされ、大国主と繋がる近江の三上祝の出自とされる。媛蹈鞴五十鈴媛は、その名からわかるように、製鉄の際に送風に用いる蹈鞴と渇鉄鉱のこととされる五十鈴から成り立っている製鉄神の姫である。渇鉄鉱（五十鈴）からの製鉄は縄文時代に始まった製鉄であり、この製鉄に大国主も関係していたと思う。ちなみに、媛蹈鞴五十鈴媛は、大国主の子孫（事代主）あるいは大国主の和魂の大物主の娘である。このように、卑弥呼と媛蹈鞴五十鈴媛は似たような素性をもっている。

（つづく）

（つづき）

卑弥呼と同人格とされる孝霊天皇の皇女の倭迹迹日百襲姫は、孝霊天皇やニギハヤヒと同人格とする大物主の妻でもある。『日本書記』には倭迹迹日百襲姫による三輪山伝説・箸墓伝説が記される。これによると、百襲姫は大物主神の妻となったが、大物主神は夜にしかやって来ず昼に姿は見せなかった。百襲姫が明朝に姿を見たいと願うと、翌朝大物主神は櫛笥の中に小蛇の姿で現れたが、百襲姫が驚き叫んだため大物主神は恥じて御諸山（三輪山）に登ってしまった。百襲姫がこれを後悔して腰を落とした際、箸が陰部を突いたため百襲姫は死んでしまい、大市に葬られた。時の人はこの墓を「箸墓」と呼び、昼は人が墓を作り、夜は神が作ったと伝える。また、前述の『古事記』の伝承には、「大物主神が朱塗りの矢に化けて川を下り、用便をする玉依姫の女陰を突いた。驚いたヒメが、その矢を床のそばに置くと、矢は麗しき壮夫となってヒメと結ばれた。生まれた子が比売多多伊須気余理比売（媛蹈鞴五十鈴媛）である。」とある。これら二つの伝承には相通じるものがある。

以上のことは、『桓檀古記』、『北倭記』、『倭人興亡史』にある、卑弥呼は神武天皇妃の媛蹈鞴五十鈴姫であるとの記載を裏付ける。すなわち、卑弥呼と媛蹈鞴五十鈴姫は共に３世紀の同一人格である。

（ＦＢ藤田泰太郎タイムライン投稿20/4/10）

川岡氏のFB投稿(21/2/21、相良王国研究会)によると、「北倭記」に年表があり、そこには「西暦234年仇首（神武）死す、西暦247年には卑弥呼の死、壱与の即位」と掲載されているとのことです。「梁書」では、卑弥呼が死去したのは249年の若干前とされており、この「北倭記」の卑弥呼の死の247年は「梁書」の249年の若干前とぴったりと一致します。また、「234年に仇首（神武）死す」との記述の仇首（神武）とはどの人物に当たるのか？

上述の「卑弥呼は神武天皇妃の媛蹈鞴五十鈴姫である！」(20/4/10タイムライン参照)は、川岡氏の『桓檀古記』、『北倭記』、『倭人興亡史』に「卑弥呼は神武天皇妃の媛蹈鞴五十鈴姫である」との記載があるとの指摘に基づいたものでした。私の投稿では「ニギハヤヒの東征によって2世紀後半に引き起こされた近畿の倭国大乱は、ニギハヤヒ、大国主と和邇氏により卑弥呼を女王に共立して鎮められ、大和に邪馬台（やまと）国が建てられた。ニギハヤヒは、孝霊天皇や大物主と同一人物であり、卑弥呼（媛蹈鞴五十鈴姫）は孝霊天皇皇女の皇女倭迹迹日百襲姫に当たる。」としています。「北倭記」の仇首（神武）とは2世紀末に邪馬台国を建てたニギハヤヒ（孝霊天皇、大物主）と思われ、ニギハヤヒの死去の年、234年は極めて妥当であると考える。実際の所、卑弥呼（媛蹈鞴五十鈴姫）は孝霊天皇皇女の皇女倭迹迹日百襲姫に当たり、大物主の妻であった。卑弥呼は、夫の大物主（ニギハヤヒ、孝霊天皇）が234年に死去した後の247年に亡くなり、箸墓古墳に葬られたと推察する（2021・2・23、藤田泰太郎タイムライン投稿）。」事実、天津神であるニギハヤヒの建てた大和を中心とする邪馬台（やまと）国が、西日本全域を治める初めての大国で、ニギハヤヒ（孝霊天皇）が神武天皇の称号「始馭天下之天皇」を受けるのに相応しい。（藤田泰太郎）

『記紀』の真相（１）八岐大蛇伝説は、『記紀』神話の根幹をなすものであろう。八岐大蛇（大国主か）を退治したスサノオを模して、タケミカズチ（武甕槌）が創出された。

『記紀』の真相（１）

【古墳時代の物部氏と中臣氏は共に河内を本拠としたため、国生み神話が淡路島から始まり、また河内が畿内の中心になったと思われる。さらに、天孫ニニギらが南九州に進出して久米人や隼人を支配下においていため、邪馬台国を崩壊させヤマト王権（三輪王朝）を建てるに至った、崇神東征に久米人や隼人が同伴した。この崇神東征での久米人や隼人の活躍に報いるため、実際の天孫降臨地の筑前の伊都国に代わり宮崎の日向の高千穂峰が天孫降臨の舞台にされたと考える。ニニギから神武天皇までの系譜（日向三代、海神族と大山祇神の伝説）が作為的に挿入された。さらに、藤原氏の守護神タケミカズチ（武甕槌）は本来中臣氏の崇めた常総の土着の雷神であった。藤原氏は、物部氏の太祖のスサノオを、『記紀』での出雲の国譲りでの主役の地位から巧妙に外し、藤原氏の守護神のタケミカヅチに主役を演じさせることにより、物部氏を飛鳥時代のヤマト王権の中枢から排除したと推察する。】

●飛鳥時代の6世紀半ば、仏教を受け入れるかどうかを巡り、排仏派の物部尾輿と、崇仏派の蘇我稲目が争った（崇仏論争）。587年、稲目の息子の馬子が尾輿の息子の守屋を討ち滅ぼした（丁未の役）。これ以後、邪馬台国以来権力を振るった、さしもの物部氏も権勢に陰りがみられるようになり、蘇我氏の全盛が始まった。645年、中大兄皇子・中臣鎌足ら、蘇我馬子の息子の入鹿を宮中で暗殺した（乙巳の変）。入鹿の父の蝦夷は自殺し、蘇我本家が滅亡。翌646年、皇子は難波の宮で改新の詔を宣する（大化の改新）。671年、中大兄皇子（後の天智天皇）は近江令を施行後没する。672年、古代日本最大の内乱である壬申の乱が起る。天智天皇の太子・大友皇子に対し、皇弟・大海人皇子（後の天武天皇）が地方豪族を味方に付けて反旗をひるがえした。反乱者である大海人皇子が朝廷軍に勝利し大友皇子が自殺という、類稀な内乱であった。翌673年、天武は飛鳥浄御原宮で即位し、唐に対抗できる国家体制の確立を図る。中臣鎌足改め藤原鎌足の息子の不比等が、天武天皇を補佐するようになる。

7世紀の第4四半世紀、天武天皇の命により『古事記』と『日本書紀』の編纂が行われ、8世紀以降の律令制国家の樹立のための日本の歴史の理論的根拠と基盤にしようとした。『古事記』は、712年、太朝臣安萬侶によって献上された。また、『日本書紀』は、720年、舎人親王らの撰で完成した。708年、右大臣正二位石上朝臣麻呂は長く空席であった左大臣に、藤原不比等が後継の右大臣に任ぜられた。その当時の政治を主導したのは、不比等だったと云われる。藤原不比等と石上朝臣麻呂が『古事記』と『日本書紀』の編纂を牽引したと考えられる。藤原氏は中臣氏の出自とされ、石上麻呂は物部氏の出自である。したがって、葦原中国平定で藤原氏の祭神である武甕槌神と物部氏の祭神の経津主神（スサノオと同一か）が主たる役割を果たしたように物語られている。

●『記紀』の八岐大蛇伝説は、『記紀』神話の根幹をなすものと考えている。この伝説はスサノオ（素戔嗚、第2代新羅王 南解次次雄？S2-S3参照）とクシイナダヒメが、民を苦しめる八岐大蛇（大国主を指すか）を退治するというストーリーであるが、私は、物部の太祖神たるスサノオがクシイナダヒメの父方の大山祇神（三島神）の協力を得て、大国主などの出雲系神々を成敗するというのが八岐大蛇伝説の基本構造だと推察する。スサノオは大山祇神の娘（神大市姫）や孫娘（櫛名田姫）を妻とすることにより、大山祇神との協力関係を築いた。因みに、スサノオと神大市姫の間の御子が大年神で、大年神がニギハヤヒ（饒速日）であるとの説がある。4世紀初めに崇神王朝（ヤマト王権）が成立する前に、スサノオ（物部の太祖）やニギハヤヒ（物部の祖）が侵攻した出雲系の地域には、スサノオとクシイナダヒメを祭神とする神社が数多く存在する。

（つづく）

（つづき）

●紀元前後に物部氏の太祖のスサノオが出雲で八岐大蛇（大国主か）を退治した後、スサノオの後のニギハヤヒが2世紀半ばに吉備より河内を経由して大和に進出して邪馬台国を建てた。また、1世紀半ばに瓊瓊杵（ニニギ）の天孫降臨に随伴したという天児屋命を祖とする中臣氏は3世紀末の崇神天皇の東征に同伴した。古墳時代の物部氏と中臣氏は共に河内を本拠としたため、国生み神話が淡路島から始まり、また河内が畿内の中心になったと思われる。さらに、天孫ニニギらが南九州に進出して久米人や隼人を制圧していたため、邪馬台国を崩壊させヤマト王権（三輪王朝）を建てるに至った、崇神東征に久米人や隼人が同伴した。この崇神東征での久米人や隼人の活躍に報いるため、実際の天孫降臨地の筑前の伊都国に代わり宮崎の日向の高千穂峰が天孫降臨の舞台にされ、また神武東征に出発地が日向となったと考える。さらに、ニニギから神武への系譜は、倭国の成立に貢献した海神族のために「海彦・山彦伝説」などの海神族と大山祇神の説話を「日向三代」として入れ込んだ。

●藤原氏は丁未の役以来権勢の陰りが見られた物部氏を巧妙に抑えるため、神祇官である中臣氏（藤原氏の元の氏、神祇官は依然として中臣氏が務める）が奏上した大祓詞で、天津罪を犯したスサノオ（物部の太祖）を悪神とした。そして、中臣氏の勢力下の常総の土着の雷神であった武甕槌神を藤原氏の総氏神の春日大社の主祭神に祭り上げると共に、石上神宮の主祭神もまた武甕槌神のもっていた剣に宿る布都御魂大神とされた。実際の所、経津主命は布都御魂大神（布都御魂命ともいう）と同神で、スサノオが出雲で八岐大蛇（大国主か）を退治した際に使用した剣（布都御魂剣、天羽々斬剣）を神格化したもの考えられる。かくて、布都御魂命はスサノオと同神と考えられる。布都御魂剣は、スサノオの後のニギハヤヒによって出雲から吉備そして石上神宮に持ち込まれた(S17-S18)。このように、『記紀』の出雲の八岐大蛇退治や出雲の国譲りの主役はスサノオではなく武甕槌神とされた。

さらに、武甕槌神には神武東征での渋いサポートをも割り振られた。アマテラスと高木神が武甕槌（タケミカヅチ）に、「葦原中国は騒然としており、私の御子たちは悩んでいる。お前が葦原中国を平定させたのだから、再び天降りなさい」と命じたが、タケミカヅチは「平定に使った太刀（布都御魂剣）をタカクラジ（高倉下）の元に降ろしましょう」と答えた。高倉下がこの太刀をカムヤマトイワレビコ（神武）に渡すと、神武は目覚めて、荒ぶる神は自然に切り倒されてしまい、兵士たちも意識を回復した。

かくて、スサノオやニギハヤヒは石上神宮の祭神から外され、主祭神は布都御魂大神で物部氏の祖ニギハヤヒの子のウマシマジが配神とされた。換言すれば、天照大御神の嫡流の天之忍穂耳命の御子で天孫のニニギやニニギの降臨の同伴者の子孫が支配した飛鳥時代に、スサノオを太祖とし、スサノオの後のニギハヤヒを祖とする物部氏は、『記紀』での出雲の国譲りや神武東征での主役の地位から巧妙に外され、主役を藤原氏の守護神のタケミカヅチに演じさせることにより、飛鳥時代のヤマト王権の中枢から除外されたと推察する。

（FB藤田泰太郎タイムライン投稿2022・12・23）

参照：　古の日本（倭）の歴史（前1世紀～4世紀）ー天孫族（伽耶族）の系譜　③　031

『記紀』の真相（2）（神武天皇はニギハヤヒか）

1

『記紀』の真相（2）

ニギハヤヒは、2世紀末に日本列島における最初の国と呼べる西日本の殆どを統べる大国の邪馬台国を建てた。『記紀』の編纂者は、このニギハヤヒを模して、神武天皇を創案した。神武東征とは、紀元1世紀半ばから3世紀末に亘る天孫族による倭国（西日本全域）の平定を意味し、三島神（三島湟咋耳）、ホアカリ（3世孫倭宿禰）、ニギハヤヒおよび崇神による東征を集合したものと解される。神武東征譚の主要部分は3世紀末の崇神東征譚であり、崇神東征により邪馬台国を継ぐ、ヤマト王権（崇神王朝）が成立した。

「古の日本（倭）の歴史」（天孫族（伽耶族）の系譜（前1世紀～4世紀）によると、瓊瓊杵尊（ニニギ）と彦火明（ホアカリ）の降臨は1世紀半ばの出来事と思われる。瓊瓊杵尊から神武天皇への3代の系譜（日向3代）は、百越の始祖伝説に酷似しており、大綿津見神（おほわたつみ）と大山津見神（おほやまつみ）の系譜を天孫族の系譜に作為的に挿入されたと思える。従って、神武はニニギその人ではないかと考えられるが、天孫のニニギが1世紀半ばの弥生時代後期の始めの天孫降臨の時期に長期に亘る（16年間『古事記』、7年間『日本書紀』）大規模な東征ができるとは文献学あるいは考古学的観点からあり得ないと思う。かくて、神武は架空の存在である可能性が極めて高い。

神武とニニギを同年代とし、神武から安寧天皇（1代から3代、葛城多氏王権）、懿徳から孝安天皇（4代から6代、葛城王朝）、孝霊から開化天皇（7代から9代、邪馬台国）と前ヤマト王権が続き、10代崇神天皇からヤマト王権（崇神王朝、西暦315年崇神即位）が始まる。（崇神天皇陵と治定されている行燈山古墳は4世紀半ばの築造ということも崇神元年は西暦315年であることを支持する。）かくて、神武東征譚とは、1世紀半ばから3世紀末までの葛城多氏王権、葛城王朝、邪馬台国の前ヤマト王権の各々で、最終的にヤマト王権（崇神王朝）を建てるに至った、伽耶出自の天津神々（三島神（実際は三島湟咋耳か）、ホアカリ（彦火明命3世孫の倭宿禰）、ニギハヤヒ（饒速日）、ミマキイリビコイリエ（崇神））による其々の東征を集合した倭国平定譚であると考えられる。この神武東征譚は、崇神東征譚を主要部にしていると思われる。尚、2世紀半ばの物部の祖ニギハヤヒ（大物主、孝霊天皇か）の東征により倭国大乱が引き起こされ、2世紀末に倭国大乱を制したニギハヤヒが、大国主と和邇氏と計らい卑弥呼（倭迹迹日百襲姫か）を女王に共立して、倭国を統べる最初の大国である纒向遺跡を核とする邪馬台国を建てた。さらに、崇神東征により、邪馬台国を引き継ぐヤマト王権（崇神王朝）を建てられた。以上のように推察することによって初めて、神武東征の異様なほどの長期間にわたる大規模な神武東征譚を文献的・考古学的に理解しえ、神武天皇は架空の存在であると推察しうる。

実際、神武東征には、倭宿禰、ニギハヤヒと崇神の東征の次のような痕跡が見られる。

1．初代神武天皇の東征は、弥生時代後期初頭（1世紀半ば）のことで、宮崎の日向を出立まず筑紫に向かった。この日向からの出立は、最後の東征の崇神東征に久米人や隼人を同行させたことに関係していると思う。実際の最初の神武東征は、三島神（三島湟咋耳命か）の東征と思われる。伽耶沖の巨文島（三島）出自の大山祇神（三島神、三島大明神）（実際はその子孫、三島湟咋耳命か）が摂津三島に進出したことではないか。後述するが三島湟咋耳命の孫娘（媛蹈鞴五十鈴姫）が神武天皇の皇后となり、その父は大物主あるいは事代主とされている。この年代は天孫降臨の時期で、摂津の河内潟の時代に当たる。『記紀』の神武天皇東征の物語に、皇軍が生駒山のふもとの日下の入江にあった「河内国草香邑青雲白肩之津」に上陸したことが書かれていて、大和への入口の地として初めて「日下」の地が登場する。（「日下」はニギハヤヒの東征の到着地でもある。）

2

2．第2回目の神武東征は、ホアカリの東征で、天火明命（ホアカリ）の3世孫の倭宿禰（神武東征の道案内をした珍彦（椎根津彦）か）の葛城進出に当たる。ちなみに神武天皇が吉野山で出会ったとされる井光は倭宿禰の母である。

3．第3回目の東征が、ニギハヤヒによる吉備（神武東征譚では吉備での滞在が最も長い）からの東征であり、倭国大乱を引き起こした。ニギハヤヒはアメノヒボコとともに「日下」に上陸した。ニギハヤヒはさらに大和川沿いに大和の三輪に至り、大和全域をほぼ掌握したと思われる。このニギハヤヒの東征が近江・湖南におよび、大己貴の国（玉牆の内つ国）を解体させた。そして、ニギハヤヒは、大国主と和邇氏の巫女である卑弥呼を共立し、卑弥呼を近江の伊勢遺跡から大和の纒向遺跡へと遷し、ここに「虚空見つ日本（倭）の国」とも呼ばれる邪馬台（やまと）国が成立した（2世紀末）。（ニギハヤヒは孝霊天皇および大物主に当たる。）また、近江北部から美濃を中心にする大己貴の国の後継国の狗奴国を建てられた。

4．第4回目の東征がいわゆる崇神天皇による中臣氏、大伴氏や忌部氏と久米人や隼人を伴う東征で、神武東征譚の主要部分である。(邪馬台国の終末期、狗奴国との抗争が起こっているところに、卑弥呼が死去し（3世紀半ば）、邪馬台国は弱体化した。このため、大国主の血を引く台与（息長水依姫＝日子坐王の妻か）を立て狗奴国との融和を図った。任那・伊都国連合からのニニギの嫡流と考えられる崇神（ミマキイリビコイリエ）の東征で、邪馬台国は崇神に乗っ取られ、ヤマト王権（崇神王朝）が建てられた。この崇神東征で長髄彦に代表される大和の大国主勢力は敗退した（出雲の国譲り）。また、崇神王朝の攻勢のため狗奴国は徐々に勢力を失っていき、成務朝に狗奴国は亡んだと思われる。

紀元前後から2世紀末に亘る三島神からニギハヤヒの各々の神々が建てた前ヤマト王権の国々（葛城多氏王権、葛城王朝、および邪馬台国）の中で実質的に大国と呼べるのは2世紀末にニギハヤヒが建てた邪馬台国のみである。邪馬台国は、任那を含む西日本のほぼ全域を統べる東アジアの大国となっていた。崇神天皇は崇神東征（一種のクーデター）により大国の邪馬台国を引き継ぎ、ヤマト王権（三輪（崇神）王朝）を建てた。尚、綏靖天皇から開化天皇までの8代は、これらの天皇の事績が極めて乏しい故をもって欠史八代といわれる。この乏しさは、神武東征譚に前ヤマト王権の国々の建国譚が含まれ、邪馬台国時代の天皇（孝霊～開化）の事績の一部が崇神と垂仁天皇の事績に組み込まれたためと思われる。

川岡保氏のFB投稿(21/2/21、早良王国研究会)には、「『北倭記』の年表に西暦234年仇首（神武）死す、西暦247年には卑弥呼の死、壱与の即位」との記述がある。(S29)『梁書』には、卑弥呼が死去したのは249年の若干前とされており、この『北倭記』の卑弥呼の死の247年は『梁書』の249年の若干前とぴったりと一致する。すると、「234年に仇首（神武）死す」との記述の仇首（神武）とはどの大王（天皇）に当たるのであろうか。私見では、この仇首（神武）とは、年代的・人物的に見て2世紀末に邪馬台国を建てたニギハヤヒ即ち孝霊天皇のことと指すと思う。

『記紀』の真相(2)(神武天皇はニギハヤヒか)

3

私の投稿「卑弥呼は神武天皇妃の媛蹈鞴五十鈴姫(ひめたたらいすずひめ)である!」(藤田泰太郎タイムライン20/4/10参照)は、『桓檀古記』(訳 鹿島 昇)、『北倭記』、『倭人興亡史』には、卑弥呼が掲載されており、卑弥呼は神武天皇妃の媛蹈鞴五十鈴姫であるとの記載があるとの指摘(FBコメント、川岡保氏)に基づいたものであった。実際の所、卑弥呼(媛蹈鞴五十鈴姫)は孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫に当たると思われ、また大物主の妻であった。(倭迹迹日百襲姫は孝霊天皇皇女ではなく養女だったか?)卑弥呼は、2世紀末に邪馬台国を建てた夫の大物主(ニギハヤヒ、孝霊天皇)が234年に死去した後の247年に亡くなり、箸墓古墳に葬られたと推察する。事実、天津神であるニギハヤヒの建てた大和の纏向を中心とする邪馬台(やまと)国は、西日本全域を統べる初めての大国であった。(邪馬台国の先行国の近江を中心とする大己貴の国(玉牆の内つ国)は、青銅器の「見る銅鐸」を祭器とする祭祀の国と思われ、統治機関として国と呼ばれうる段階ではなかったと考える。)かくて、邪馬台国を建てたニギハヤヒ(孝霊天皇)が神武天皇の称号「始馭天下之天皇」を受けるに相応しい。

6世紀半ばから7世紀初めの飛鳥時代の藤原不比等を筆頭とする『記紀』の編纂者は、物部の祖のニギハヤヒを模して神武天皇を創案し、神武東征を紀元1世紀半ばから3世紀末に至る、天津神による倭国平定とみなした。この創案の事実を隠蔽するためか『記紀』には邪馬台(やまと)国や卑弥呼の記述が一切みられず、邪馬台国を建てたニギハヤヒのことも殆ど語られない。かつて、弾正台 という、飛鳥~平安~明治時代まで藤原氏が「家系」を見張る機関があつた(FB情報、ヤタガラスの娘)。即ち、『記紀』に記した藤原氏の家系美化と皇室家系の神化にほころびが露見しないよう、古代他家の古文書や系図を略奪し焚書してしまう機関だった。これらの古文書や系図には、『記紀』の真相(1)と(2)に記したように、倭国の成立の立役者はスサノオとニギハヤヒ(物部氏の太祖と祖)と記載されていたに違いない。投稿者は3世紀前半~中葉、奈良県桜井市に築造されたホケノ山古墳(前方後円墳の原型)が、ひょっとしたらニギハヤヒ(孝霊天皇)の墳墓ではないかと夢想している。
(FB藤田泰太郎タイムライン投稿2023・1・11)
参照: 古の日本(倭)の歴史(前1世紀~4世紀)ー天孫族(伽耶族)の系譜 ③031

『神武天皇御尊像』1940年(昭和15年)北蓮蔵画(Wikipedia)

ニギハヤヒと伝わる肖像(秋田県唐松神社)

赤枠：大国主系

藤田

国名	一宮社名	所在地・社格	祭神
山城	賀茂別雷神社（かもわけいかづち）	京都市北区・一宮	賀茂別雷大神　（かもわけいかづち、賀茂氏の祖神）
	賀茂御祖神社（かもみおや）	京都市左京区　・一宮	東殿：玉依姫命　（たまよりひめ）　－ 賀茂別雷命の母 西殿：賀茂建角身命　（かもたけつぬみ）　－ 玉依姫命の父
大和	大神神社（おおみわ）	奈良県桜井市・一宮	主祭神：大物主大神　（おおものぬし、倭大物主櫛甕玉命） 配神：大己貴神　（おおなむち）、少彦名神　（すくなひこな）
河内	枚岡神社（ひらおか、元春日社）	東大阪市・一宮	第一殿：天児屋根大神 第二殿：比売大神 － 天児屋根大神の后神 第三殿：武甕槌大神 第四殿：斎主大神（経津主神）
河内	恩智神社（おんぢ）	大阪府八尾市	第一殿：大御食津彦命（おおみけつひこ、天児屋根命の五世孫）、大御食津姫（＝豊受姫大神命 第二殿：春日辺大明神（地主神、本来の祭神？） 第三殿：天児屋根命
和泉	大鳥大社	堺市西区・一宮	日本武尊　（やまとたける） 大鳥連祖神　（おおとりのむらじのおやがみ）（＝天児屋命）
	泉穴師神社（いずみあなし）	大阪府泉大津市・二宮	天忍穂耳尊（アメノオシホミミ）、栲幡千千姫命（たくはたちぢひめ）
	聖神社（ひじり）	大阪府和泉市・三宮	聖大神（ひじり、大年神の御子神） 配祀神：瓊々杵尊、天照大神、饒速日命、木花開耶姫命、磐長姫命
摂津	住吉大社	大阪市住吉区	第一本宮：底筒男命（そこつつのを） 第二本宮：中筒男命（なかつつのを） 第三本宮：表筒男命（うはつつのを） 以上、住吉三神 第四本宮：神功皇后（じんぐうこうごう）
伊賀	敢国神社（あえくに）	三重県伊賀市	・大彦命　（第8代孝元天皇第一皇子、四道将軍の1人、北陸道） 配神：少彦名命 － 右座、金山比咩命　（かなやまひこ）　－ 左座
	小宮神社（こみや）	三重県伊賀市・二宮	・園韓神（そのからかみ）（惣国風土記、「園神」は大物主命・「韓神」は大己貴神と少名毘古那神） ・　天御桙命（神社神名帳、服部連の祖、物部系） ・呉服比賣命（機織の神様） 配神：健御名方命、大山祇命、健速須佐之男命（タケハヤスサノ＝スサノオ） 摂社：小宮神社（こみやじんじゃ）「少彦名命」、狭伯神社（さはくじんじゃ）「天兒屋根命」、蛭子神社（ひるこじんじゃ）「蛭兒命」
	波多岐神社（はたき）	三重県伊賀市・三宮	・大鷦鷯尊（仁徳天皇） 境内社（宇都可神社、大物主命 大己貴命 罔象女命（水の神） 高皇産靈命 建御名方命）
伊勢	椿大神社（つばきおおかみやしろ）	三重県鈴鹿市・一宮	・猿田彦大神 相殿：瓊瓊杵尊、栲幡千千姫命　（瓊瓊杵尊の母神） 配祀：天之鈿女命（アメノウズメ、猿田彦大神の妻神）、木花咲耶姫命
	都波岐奈加等神社（つばき」なかと）	三重県鈴鹿市・一宮	都波岐神社：猿田彦大神　（さるたひこ） 奈加等神社：天椹野命　（あまのくののみこと）　－ 中跡直（なかとのあたい）の祖）、中筒之男命
	多度大社	三重県桑名市・二宮	・天津彦根命（天照大神の第3子） 境内社（一目連神社、天目一箇命（天津彦根命の子）
志摩	伊雑宮（いざわのみや、内宮皇大神宮別宮）	三重県志摩市・一宮	・天照坐皇大御神御魂　（あまてらしますすめおおみかみ） ・伊佐波登美命（磯部氏の祖）と玉柱屋姫命（天照大神分身在郷、瀬織津姫神天照大神分身在河）
志摩	伊射波神社　（いざわ）	三重県鳥羽市　・一宮	・稚日女尊　（わかひるめ、天照大神の妹神または幼名） ・伊佐波登美命　（いざわとみ）（皇女倭姫命が皇大神宮の朝夕の御贄を奉る地を探して志摩国を訪れたとき、出迎えた神、安楽島の二地（ふたぢ）の鳥羽贄遺跡がこの神の本宮跡） ・玉柱屋姫命　（たまはしらやひめ、伊佐波登美命の妃神、天日別命（神武天皇東征の際、伊勢津彦を追って伊勢国を平定） ・狭依姫命　（さよりひめ、宗像三女神の1柱市杵島姫命の別名）
尾張	真清田神社（ますみだ）	愛知県一宮市真清田・一宮	・天火明命（あめのほあかり、祭神異説：国常立尊祭神説や大己貴命）
	大縣神社（おおあがた）	愛知県犬山市・二宮	・大縣大神（おおあがたのおおかみ、尾張国開拓の祖神、国狭槌尊とする説、天津彦根命（大縣主の祖神）とする説、少彦名命とする説など）」
	熱田神宮（あつた）	名古屋市熱田区	・熱田大神　（あつたのおおかみ、草薙神剣（くさなぎのみつるぎ、草薙剣（天叢雲剣）]を神体とする天照大神、 相殿神、天照大神　、素盞嗚尊、日本武尊、宮簀媛命　（みやすひめ）、建稲種命　（たけいなだね、父は尾張国造乎止与命（オトヨ）、母は眞敷刀婢命（マシキトベ））
三河	砥鹿神社（とが）	愛知県豊川市	・大己貴命　（おおなむち）
遠江	小國神社（おくに）、	静岡県森町・一宮	大己貴命　（おおなむち）
	事任八幡宮（ことのままはちまんぐう）	静岡県掛川市・一宮	・己等乃麻知媛命　（ことのまちひめ、天児屋根神の実母） ・配神3柱（八幡大神と総称）：息長帯姫命　（おきながたらしひめ、神功皇后）、誉田別命　（ほんだわけ、応神天皇）、玉依比売命
	鹿苑神社（ろくおん）	静岡県磐田市・二宮	・高彦根命（阿遅鉏高日子根神（アジスタカヒコネ、大国主命と宗像三女神のタキリビメの間の子）
駿河	富士山本宮浅間大社（ふじさんほんぐうせんげん）	静岡県富士宮市・一宮	・木花之佐久夜毘売命　（このはなのさくやひめ、浅間大神、瓊瓊杵尊の妻、大山祇神の娘）
	豊積神社（とよづみじんじゃ）は、にある神社	静岡市清水区・二宮	・木之花佐久夜毘売命 境内社：白髭神社 － 祭神：猿田彦神、　山宮神社 － 祭神：大山祇神、日枝神社 － 祭神：大山咋命、速須佐之男命、須賀神社 － 祭神：建速須佐之男命、稲荷神社 － 祭神：倉稲魂命、磯前神社 － 祭神：大国主命、事代主命
	御穂神社（みほ）	静岡市清水区三保・三宮	・大己貴命　（おおあなむち、大国主）　－ 別名「三穂津彦命（みほつひこ」 ・三穂津姫（みほつひめ）、高皇産霊尊の娘、大国主神の后）
伊豆	三嶋大社	静岡県三島市大宮町・一宮	・大山祇命　（おおやまつみ） ・積羽八重事代主神　（つみはやえことしろぬし）
	若宮神社（大社摂社、若宮八幡宮）	静岡県三島市大宮町・二宮	祭神：物忌奈乃命（ものいみな、三嶋神の御子神、神津島の物忌奈命神社の祭神）、誉田別命（ほんだわけ、応神天皇）、神功皇后、妃大神
	浅間神社	三島市芝本町・三宮	・木花開耶姫命、波布比売命（島明神の后神の一柱） 相殿神：瓊々杵命、火明命、火蘭降命、彦火々出見命

甲斐	浅間神社（あさま）	山梨県笛吹市一宮町・一宮	・木花開耶姫命 山宮神社（境外摂社）　：鎮座地：笛吹市一宮町一ノ宮 祭神：大山祇神、瓊瓊杵命 － 木花開耶姫命の父神と夫神
	美和神社（みわ）	山梨県笛吹市・二宮	・祭神は大物主命（オオモノヌシ）、大和国の大神神社から勧請
	玉諸神社（たまもろ）、２社あり	１．甲府市・三宮 ２．甲州市・三宮	１．國魂大神命（大己貴命） ２．天明玉命（櫛明玉神、出雲玉作の祖）
相模	寒川神社（さむかわ）	神奈川県寒川町・一宮	寒川大明神（寒川比古命　（さむかわひこ）、寒川比女命　（さむかわひめ））、八方除の神とされるが、『記紀』に記載なく詳細不明
	川勾神社（かわわ）	神奈川県二宮町・二宮	大名貴命（おおなむじ）、大物忌命（おおものいみ、豊受大神か）、シナツヒコ（級長津彦命（しなつひこ）、級長津姫命、イザナギとイザナミの間に生まれた風の神）
	比々多神社（ひびた）	神奈川県伊勢原市・三宮	主祭神　：　豊国主尊（神代七代のうちの一柱）、天明玉命、雅日女尊、日本武尊 相殿神　：　大酒解神（大山祇神）、小酒解神（木花咲耶姫）
武蔵	小野神社	東京都多摩市・一宮	天下春命（饒速日命が天降った時随従）、瀬織津比咩命、伊弉諾尊、素盞嗚尊、大己貴大神、瓊々杵尊、彦火火出見尊、倉稲魂命（稲荷神（お稲荷さん））
	氷川神社（ひかわ）	埼玉県さいたま市・一宮	須佐之男、稲田姫命　、大己貴命
	二宮神社（にのみや）	東京都あきる野市・二宮	国常立尊　（くにとこたちのみこと、日本神話の根源神）
安房	安房神社（あわ）	千葉県館山市	主祭神：天太玉命　（あめのふとだま － 忌部氏祖神） 相殿神：天乃比理刀咩命　（あめのひりとめ、天太玉命の妃神）
上総	玉前神社（たまさき）	千葉県一宮町・一宮	玉依姫命　（たまよりひめ、鵜葺草葺不合命と結婚し初代神武天皇らを産んだ）
	橘樹神社（たちばなじんじゃ）	千葉県茂原市・二宮	主祭神：弟橘比売命　（おとたちばなひめ）（海に身を投じて日本武尊の難を救う） 相殿神：日本武尊　（やまとたける）　－ 弟橘比売命の夫 忍山宿禰　（おしやまのすくね）　－ 弟橘比売命の父
	三之宮神社	千葉県睦沢町・三宮	祭神：五瀬命（神武天皇の長兄）、稲飯命（第2子）、三毛入野命（第3子）
下総	香取神宮（かとりじんぐう）	千葉県香取市・一宮	祭神：経津主大神　（ふつぬしのおおかみ、武神・軍神、「フツ」はる神剣「フツノミタマ（布都御魂/師霊）」に通じる）、物部氏の氏神
	玉崎神社（たまさきじんじゃ）	千葉県旭市・二宮	主祭神：玉依姫尊、配祀神：日本武尊
	二宮神社（にのみやじんじゃ）	千葉県船橋市	建速須佐之男命　（たけはやすさのお）、櫛稲田比売命　（くしなだひめ）、大国主命　（おおくにぬし）
常陸	鹿島神宮（かしまじんぐう	茨城県鹿嶋市・一宮	武甕槌大神　（たけみかつちのおおかみ、武神・軍神、中臣氏の氏神）
	静神社（しずじんじゃ）	茨城県那珂市静・二宮	建葉槌命（たけはづち）（機織りの祖神、倭文（しどり）氏の遠祖
	吉田神社（よしだじんじゃ）	茨城県水戸市宮内町・三宮	日本武尊　（やまとたけるのみこと）

近江	建部大社（たけべたいしゃ）	滋賀県大津市・一宮	本殿：日本武尊　、　本殿相殿神：天照皇大神 権殿：大己貴命
	日吉大社（ひよしたいしゃ）	大津市坂本・二宮	西本宮：大己貴神 東本宮：大山咋神
	多賀大社（たがたいしゃ）	滋賀県多賀町多賀・三宮	伊邪那岐命（イザナギ）・伊邪那美命（イザナミ）の2柱 摂社：日向神社・瓊瓊杵尊、摂社：山田神社・猿田彦大神
	御上神社（みかみ）	滋賀県野洲市三上・三宮	天之御影命（あめのみかげ）　、天津彦根命の子（天照大神の孫）、鍛冶神の天目一箇神と同一神
美濃	南宮大社（なんぐうたいしゃ）	岐阜県垂井町・一宮	主祭神：金山彦命　（かなやまひこのみこと） 配神彦火火出見命、見野命（祖神か）
	伊富岐神社（いぶき）	岐阜県垂井町・二宮	多多美彦命（伊吹山の神、大己貴神か）、八岐大蛇、天火明命、草葦不合尊
	多岐神社（たぎ）は、	岐阜県養老郡養老町・三宮	倉稲魂神（うかのみたまのかみ、穀物神、多芸氏の祖神）、素盞嗚命
飛騨	飛騨一宮水無神社（みなし）	岐阜県高山市・一宮	主祭神：御歳大神 －「水無神」　配神：大己貴命、三穂津姫命など
信濃	諏訪大社（すわたいしゃ）	諏訪湖周辺4ヶ所・一宮	建御名方神　（たけみなかた）と八坂刀売神　（やさかとめの、建御名方神の妃）
	小野神社	塩尻市・二宮	建御名方神
	穂高神社（ほたかじんじゃ）は、にある	長野県安曇野市穂高・三宮	中殿：穂高見命　（ほたかみのみこと、綿津見命の子） 左殿：綿津見命　（わたつみのみこと）　－ 安曇氏の祖神 右殿：瓊々杵命
上野	一之宮貫前神社（ぬきさき）	群馬県富岡市・一宮	経津主神　（ふつぬしのかみ）、姫大神　（ひめおおかみ、養蚕機織の神）
	二宮赤城神社（にのみやあかぎじんじゃ）	群馬県前橋市二之宮町・二宮	豊城入彦命　（とよきいりひこのみこと） 大己貴尊　（おおなむちのみこと）
	三宮神社（さんのみや）	群馬県吉岡町・三宮	彦火火出見命、豊玉姫命、少彦名命
下野	宇都宮二荒山神社（ふたあらやま）	栃木県宇都宮市・一宮	・豊城入彦命　（とよきいりひこ、下野国・上野国の開祖） 相殿：大己貴命、事代主命、健御名方命
	日光二荒山神社（にっこうふたらさん）	栃木県日光市・一宮	二荒山大神（大己貴命、田心姫命（たごりひめ）　、味耜高彦根命（あじすきたかひこね）
陸奥	鹽竈神社（しおかま）	宮城県塩竈市・一宮	志波彦神社：志波彦神（しわひこ、農耕 守護の神） 鹽竈神社：塩土老翁神 － 主祭神、武甕槌神、経津主神
	都都古和氣神社（つつこわけ）	福島県東白川郡棚倉町・一宮	主祭神：味耜高彦根命　、相殿神：日本武尊
	伊佐須美神社（いさすみ）	福島県会津美里町・二宮	・伊弉諾尊　（いざなぎのみこと）、伊弉冉尊　（いざなみのみこと） ・大毘古命　（おおひこ、大彦命）、　建沼河別命　（たけぬなかわわけ、武渟川別）
出羽	鳥海山大物忌神社（ちょうかいさんおおものいみ）	山形県飽海郡遊佐町・一宮	・大物忌神（おおものいみのかみ、鳥海山に宿るとされる神、倉稲魂命（穀物の神）） ・豊受姫命
	城輪神社（きのわじんじゃ）	山形県酒田市・二宮	倉稲魂命
	小物忌神社（おものいみ）	山形県酒田市・三宮	級長津比古命（大物忌神の三男）、級長津比賣命、豊受比賣命

若狭	若狭彦神社（わかさひこじんじゃ）	福井県小浜市・一宮	若狭彦神社（上社）若狭彦大神　（彦火火出見尊） 若狭姫神社（下社）若狭姫大神　（豊玉姫命）・二宮
越前	氣比神宮（けひじんぐう）	福井県敦賀市曙町・一宮	本殿（本宮）：伊奢沙別命　（いざさわけのみこと 、気比大神」または「御食津大神」）、仲哀天皇 、神功皇后 四社の宮：日本武尊 、玉姫命　（たまひめのみこと、玉妃命、神功皇后の妹）、武内宿禰命
	劔神社（つるぎ）	福井県越前町・二宮	主祭神：素盞嗚尊、配祀神：悲気比大神・忍熊王
加賀	白山比咩神社（しらやまひめじんじゃ）	石川県白山市三宮町・一宮	白山が神体山 ・白山比咩大神 – 菊理媛神（くくりひめのかみ）と同一神、伊邪那岐尊、伊弉冉尊
	石部神社（いそべ）	石川県小松市・一宮	祭神：櫛日方別命または大物主神、近世には船見山王明神
	菅生石部神社（すごういそべじんじゃ）	石川県加賀市・二宮	祭神：菅生石部神（天津日高日子穂穂出見命、豐玉毘賣命、鵜葺草葺不合命の三柱） ・少彦名神を祭神とする説も
能登	気多大社（けたたいしゃ、北陸の大社）	石川県羽咋市・一宮	・大己貴命　出雲から300余神を率いて来降し、化鳥・大蛇を退治して海路を開いた
	伊須流岐比古神社（いするぎひこ）	石川県中能登町の石動山山頂・二宮	伊須流岐比古神（石動彦）・白山比咩神
越中	気多神社（けた）	富山県高岡市・一宮	主祭神：大己貴命 、奴奈加波比売命　（ぬなかわひめ） 配神：菊理姫命　（くくりひめ）、事代主命　（ことしろぬし）
	高瀬神社（たかせ）	富山県南砺市高瀬・一宮	主祭神：大己貴命（大国主命） 配神：天活玉命、五十猛命
	射水神社（いみず）	富山県高岡市・一宮	・瓊瓊杵尊　（ににぎのみこと）、以前は二上神（ふたがみ、伊弥頭国造（いみづの）の祖神） ・摂社祭神：大山咋神 、菊理媛神　（くくりひめのかみ）
	雄山神社（おやま） 立山権現・雄山権現	富山県立山町・一宮	伊邪那岐神　（いざなぎ）、天手力雄神　（あめのたぢからお）
越後	彌彦神社（いやひこ、やひこ）	新潟県弥彦村・一宮	天香山命　（あめのかごやま、天香語山命、伊夜日古大神） 神体山：弥彦山
	天津神社（あまつ、	新潟県糸魚川市・一宮	中央：天津彦々火瓊々杵尊　（ににぎ、左：天児屋根命　（あめのこやね）　右：太玉命　（ふとだま） 境内社、奴奈川神社：奴奈川姫命（主祭神）、八千矛命（合祀神）、両神の子の建御名方命、姫川を遡って信濃国に入り開拓
	物部神社（ものの）は、	新潟県柏崎市・二宮	二田天物部命　（ふたたのあめのもののべ、ニギハヤヒの天降りに供奉した「天物部等二十五部人」の筆頭）
佐渡	度津神社（わたつ）	新潟県佐渡市飯岡・一宮	主祭神：五十猛命　（いたける）　– 素戔嗚尊の子 配神：大屋津姫命　（おおやつひめ）　– 五十猛命の妹神、抓津姫命　（つまつひめ）　–五十猛命の妹神
	大目神社　（おおめ）	佐渡市吉岡・二宮	・大宮売神（おおみやのめ、太玉命の子）、大己貴命
	引田部神社（ひきたべ）	佐渡市金丸・三宮	大己貴命、猿田彦命

丹波	出雲大神宮（いずもだいじんぐう）	京都府亀岡市・一宮	主祭神：大国主命　（おおくにぬし）　大神宮の別名「三穂津彦大神」や「御蔭大神」、三穂津姫命　（みほつひめ）　高産霊尊の子配祀神：天津彦根命、天夷鳥命（アメノホヒの子）
丹後	籠神社（このじんじゃ）、「元伊勢籠神社」	京都府宮津市・一宮	・彦火明命　（ひこほあかりのみこと）、 天火明命、天照御魂神、天照国照彦火明命、饒速日命ともいう、社家・海部氏の祖神 相殿神：豊受大神（とようけのおおかみ）　– 御饌津神ともいう、 天照大神、海神（わたつみ）　– 海部氏の氏神 奥宮：真名井神社（まない）、祭神：豊受大神 摂社：蛭子神社、祭神：彦火火出見命、倭宿彌命
	大宮売神社（おおみやめじんじゃ）	京都府京丹後市大宮町・二宮	織物と酒造を司る大宮売神（おおみやめ）、食物・穀物を司る豊受大神の二神
但馬	出石神社（いずし）	兵庫県豊岡市・一宮	天日槍命、出石八前大神（八種神宝）
	粟鹿神社（あわが）	兵庫県朝来市・一宮	主祭神：彦火々出見命、日子坐王、阿米美佐利命（阿米美佐利命（あめのみさり ）　– 大国主の子
	養父神社（やぶじんじゃ）	兵庫県養父市・三宮	倉稲魂命（稲荷神）、大己貴命、少彦名命
因幡	宇倍神社（うべ）は、鳥取県	鳥取市国府町・一宮	武内宿禰命、武牟口（たけむくち）命（伊福部氏の祖神）
伯耆	倭文神社（しとり、しずり）	鳥取県湯梨浜町・一宮	・天羽槌雄神（あめのはづちのお、機織りの祖神、倭文（しどり）氏の遠祖） 配神：下照姫命、建御名方命、天稚彦命、事代主命、少彦名命、味耜高彦根命
	大神山神社（おおがみやま）	伯耆大山山麓と山腹・二宮	大穴牟遅神　（大国主）、大山を神体山
出雲	出雲大社（いづもおおやしろ、いづもたいしゃ）、杵築大社（きづきたいしゃ、きづきのおおやしろ）とも	島根県出雲市・一宮	大国主大神（おおくにぬしのおおかみ）
	佐太神社（さだじんじゃ）	島根県松江市鹿島町・二宮	佐太御子大神（＝佐太大神（神魂命の子の枳佐加比売命を母））、伊弉諾尊、伊弉冉尊、速玉男命、事解男命の五柱。
石見	物部神社（もののべじんじゃ）	島根県大田市・一宮	主祭神：宇摩志麻遅命 、 相殿神（右座）饒速日命 、布都霊神 – 所有していた剣の霊神 相殿神（左座）：天御中主大神、天照皇大神
	多鳩神社（たばと）	島根県江津市二宮町・二宮	積羽八重事代主大神
	大祭天石門彦神社（おおまつりあめのいわとひこ）	島根県浜田市・三宮	天石門別命（天太玉神の子）、配祀神：建御名方命
隠岐	水若酢神社（みずわかす）	島根県隠岐郡隠岐・一宮	主祭神：水若酢命　（みずわかす）、配神：中言神　（なかこと）、鈴御前　（すずごぜん）、祭神、配神の由緒不明
	由良比女神社（ゆらひめ）	島根県隠岐郡西ノ島町・一宮	・由良比女命（海童神あるいは須世理比売命）

播磨	伊和神社（いわ）	兵庫県宍粟市・一宮	主祭神：大己貴神（伊和大神） 配神：少彦名神、下照姫神（夫婦か？）
	荒田神社（あらた）	兵庫多可町・二宮	少彦名命、素盞嗚命、木花咲爺姫命
	住吉神社	兵庫県加西市・三宮	祭神：酒見神、底筒男命、中筒男命、表筒男命、神功皇后
美作	中山神社（なかやま）	岡山県津山市・一宮	主祭神：鏡作神　（かがみつくり）（大己貴神が祭神との説あり） 相殿神：天糠戸神　（あめのぬかど、邇芸速日命に随伴して天降った三十二人の防衛の一人、鏡作の遠祖）、石凝姥神　（いしこりどめ、天糠戸神の子）
	高野神社（たかの）	岡山県津山市・二宮	主祭神：彦波限建鵜葺草葺不合尊　（ひこなぎさたけうがやふきあえず） 相殿神：大己貴命 － 美作総社宮祭神、鏡作命　－ 中山神社祭神
備前	吉備津彦神社（きびつひこ）	岡山市北区・一宮	主祭神：大吉備津彦命　（おおきびつひこ、第7代孝霊天皇の皇子、比古伊佐勢理比古命） 相殿神：吉備津彦命　（若日子建吉備津彦命、稚武彦命）　－ 大吉備津彦命の弟または子、孝霊天皇　－ 第7代（大吉備津彦命の父）、孝元天皇　－ 第8代、大吉備津彦命の兄弟、開化天皇　－ 第9代、崇神天皇　－ 第10代、彦刺肩別命　（ひこさしかたわけ）　－ 大吉備津彦命の兄、天足彦国押人命　（あまたらしひこくにおしひと）　－ 第5代孝昭天皇の子、大倭迹々日百襲比売命　（おおやまとととひももそひめ）　－ 大吉備津彦命の姉、大倭迹々日稚屋比売命　（おおやまととひわかやひめ）　－ 大吉備津彦命の妹、金山彦大神、大山咋大神
	安仁神社（あに）	岡山市東区西大寺・二宮	主祭神：五瀬命、配神：稲氷命、御毛沼命（神武天皇の兄神々）
備中	吉備津神社（きびつ）	岡山市北区・一宮	主祭神：大吉備津彦命（彦五十狭芹彦（ひこいせさりひこ）命または五十狭芹彦命、四道将軍の一人として山陽道に派遣され、弟の若日子建吉備津彦命と吉備を平定） 相殿神：御友別（みともわけ）命　－ 大吉備津彦命の子孫、仲彦（なかつひこ）命　－ 大吉備津彦命の子孫、千々速比売（ちちはやひめ）命　－ 大吉備津彦命の姉、倭迹迹日百襲姫命　、日子刺肩別（ひこさすかたわけ）命　－ 大吉備津彦命の兄、倭迹迹日稚屋媛命、彦寤間（ひこさめま）命　－ 大吉備津彦命の弟 若日子建吉備津日子命　－ 大吉備津彦命の弟
	皷神社（つづみ）	岡山市北区・二宮	主祭神：高田姫命　－ 吉備津彦命の后 合祀神：吉備津彦命、吉備武彦命　－ 吉備津彦命の子、楽楽森彦命　－ 高田姫命の父、遣霊彦命　－ 吉備津彦命の臣
備後	吉備津神社（きびつ）	広島県福山市・一宮	主祭神：大吉備津彦命、相殿神：大日本根子彦太瓊（おおやまとねこひこふとに）命　－ 孝霊天皇、細比売（くわしひめ）命　－ 孝霊天皇皇后、稚武吉備津彦命　－ 大吉備津彦命の弟
	素盞嗚神社（すさのお）	広島県福山市・一宮	主祭神は素盞嗚尊．稲田姫命、子神の八王子を配祀 **京祇園社の元宮？一宮（吉備津神社）が挨拶に来る神事**
安芸	厳島神社（いつくしま）	広島県廿日市市・一宮	宗像三女神（市杵島姫命　（いちきしまひめ）、田心姫命　（たごりひめ）、湍津姫命　（たぎつひめ））
周防	玉祖神社（たまのおや）	防府市大崎・一宮	祭神：玉祖命、石凝姥命ともに岩戸隠れの段に初出し、天孫降臨の段では五伴緒
	出雲神社	山口市徳地堀・二宮	大己貴命　、事代主命
長門	住吉神社（すみよし） 忌宮神社（いみのみや）	下関市・一宮	第一殿：住吉三神（表筒男命・中筒男命・底筒男命）　－ 大阪の住吉大社が住吉三神の和魂を祀るのに対し、荒魂を祀る
		下関市・二宮	本殿 第一殿：仲哀天皇、第二殿：神功皇后、第三殿：応神天皇

紀伊	日前神宮・國懸神宮（ひのくま・くにかかす）、総称して日前宮（にちぜんぐう）あるいは名草宮	和歌山市・一宮（伊勢が大和の東の出口に対して、日前宮は西の出口）	主祭神（日前神宮）：日前大神（＝饒速日尊）、 御神体：日像鏡（八咫鏡に先立って造った鏡）、相殿神：思兼命（おもいかね、知恵の神）、石凝姥命（いしこりどめ、天孫降臨の五伴緒の一人）） 主祭神（國懸神宮）：国懸大神（＝天道根命）（紀氏の祖））、神体：日矛鏡（ひぼこのかがみ）、相殿神：玉祖命（たまのや）、 明立天御影命（あけたつあめのみかげ）（＝鍛冶神『天目一箇神(あめ)』の別名）、鈿女命（うづめ）
	丹生都比売神社（にふつひめ/にうつひめ、丹生都比賣神社）	和歌山県かつらぎ町上天野・一宮	第一殿：丹生都比売大神　（丹生明神）、第二殿：高野御子大神　（たかのみこ）　（狩場明神、高野山開創と関係する神）、 第三殿：大食津比売大神　（おおげつ）　（気比明神）、氣比神宮からの勧請、第四殿：市杵島比売大神　（いちきしまひめ）（厳島明神）、厳島神社（広島県廿日市市）からの勧請以上、「四所明神」
	伊太祁曽神社（いたきそじんじゃ）は、にある	和歌山県和歌山市・一宮	主祭神：4五十猛命　（いたけるのみこと）　（大屋毘古神） 配神左脇宮：大屋都比賣命　（おおやつひめのみこと）　－ 五十猛命の妹神、右脇宮：都麻津比賣命　（つまつひめのみこと）　－ 同じく五十猛命の妹神、以上の3柱はいずれもスサノオの子
淡路	伊弉諾神宮（いざなぎ）	兵庫県淡路市多賀・一宮	伊弉諾尊　（いざなぎのみこと）、伊弉冉尊　（いざなみのみこと）
阿波	一宮神社（いちのみや）	徳島市一宮町・一宮	祭神：大宜都比売神（オホゲツヒメ、五穀や養蚕の起源）（＝天石門別八倉比売命（あめのいわとわけやくらひめ）））
	上一宮大粟神社（かみいちのみやおおあわ）	徳島県神山町・一宮	大宜都比売命、　（＝天石門別八倉比売命あるいは大粟比売命（おおあわひめ））　社伝によれば、大宜都比売神が伊勢国丹生の郷から馬に乗って阿波国に来て、この地に粟を広めた
	大麻比古神社（おおあさひこ）	鳴門市大麻町・一宮	主祭神：大麻比古神 － 天太玉命（あめのふとだまのみこと）のこと　　配祀神：猿田彦
	八倉比売神社（やくらひめ）	徳島市国府町矢野・一宮	八倉比売命 － 天照大神の別名
讃岐	田村神社（たむら）	高松市一宮町・一宮	祭神は以下の5柱で、「田村大神」と総称 倭迹迹日百襲姫命 、五十狭芹彦命　（いさせりひこのみこと）　別名を吉備津彦命、猿田彦大神 、天隠山命　（あめのかぐやま）　別名を高倉下命（たかくらじ）、天五田根命（あめのいたね）　－ 別名を天村雲命（あめのむらくも）
伊予	大山祇神社（おおやまづみ）	愛媛県今治市大三島町宮浦・一宮	大山積神　（おおやまづみのかみ、おおやまつみ）、別名として「和多志（わたし）大神」とも「三島大明神」とも称す、伊弉諾尊と伊弉冉尊の間の子で、磐長姫命と木花開耶姫命（瓊瓊杵尊の妃）の父。元は山の神であるが、当社では海の神としての性格も強い
土佐	土佐神社	高知県南国市・一宮	・味鋤高彦根神　（＝「阿遅鉏高日子根神、味耜高彦根神）、大国主命と多紀理毘賣命の間の子、別称を「迦毛大御神（かものおおみかみ）」 ・一言主神　（ひとことぬし）（＝葛城之一言主大神、一事主神）、雄略天皇段に登場する神、悪事・善事も一言で言い放つ託宣の神、事代主命と同神説、素戔烏尊の子とする説

若狭	若狭彦神社（わかさひこじんじゃ）	福井県小浜市・一宮	若狭彦神社（上社）若狭彦大神　（彦火火出見尊） 若狭姫神社（下社）若狭姫大神　（豊玉姫命）・二宮
越前	氣比神宮（けひじんぐう）	福井県敦賀市曙町・一宮	本殿（本宮）：伊奢沙別命（いざさわけのみこと 、気比大神」または「御食津大神」）、仲哀天皇 、神功皇后 四社の宮：日本武尊 、玉姫命（たまひめのみこと、玉妃命、神功皇后の妹）、武内宿禰命
	劔神社（つるぎ）	福井県越前町・二宮	主祭神：素盞嗚尊、配祀神：悲気比大神・忍熊王
加賀	白山比咩神社（しらやまひめじんじゃ）	石川県白山市三宮町・一宮	白山が神体山 ・白山比咩大神 - 菊理媛神（くくりひめのかみ）と同一神、伊邪那岐尊、伊弉冉尊
	石部神社（いそべ）	石川県小松市・一宮	祭神：櫛日方別命または大物主神、近世には船見山王明神
	菅生石部神社（すごういそべじんじゃ）	石川県加賀市・二宮	祭神：菅生石部神（天津日高日子穂穂出見命、豊玉毘賣命、鵜葺草葺不合命の三柱） ・少彦名神を祭神とする説も
能登	気多大社（けたたいしゃ、北陸の大社）	石川県羽咋市・一宮	・大己貴命　出雲から300余神を率いて来降し、化鳥・大蛇を退治して海路を開いた
	伊須流岐比古神社（いするぎひこ）	石川県中能登町の石動山山頂・二宮	伊須流岐比古神（石動彦）・白山比咩神
越中	気多神社（けた）	富山県高岡市・一宮	主祭神：大己貴命 、奴奈加波比売命（ぬなかわひめ） 配神：菊理姫命（くくりひめ）、事代主命（ことしろぬし）
	高瀬神社（たかせ）	富山県南砺市高瀬・一宮	主祭神：大己貴命（大国主命） 配神：天活玉命、五十猛命
	射水神社（いみず）	富山県高岡市・一宮	・瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）、以前は二上神（ふたがみ、伊弥頭国造（いみづの）の祖神） ・摂社祭神：大山咋神 、菊理媛神（くくりひめのかみ）
	雄山神社（おやま）立山権現・雄山権現	富山県立山町・一宮	伊邪那岐神（いざなぎ）、天手力雄神（あめのたぢからお）
越後	彌彦神社（いやひこ、やひこ）	新潟県弥彦村・一宮	天香山命（あめのかごやま、天香語山命、伊夜日古大神） 神体山：弥彦山
	天津神社（あまつ）	新潟県糸魚川市・一宮	中央：天津彦々火瓊々杵尊（ににぎ、左：天児屋根命（あめのこやね）右：太玉命（ふとだま） 境内社、奴奈川神社：奴奈川姫命（主祭神）、八千矛命（合祀神）、両神の子の建御名方命、姫川を遡って信濃国に入り開拓
	物部神社（ものの）は、	新潟県柏崎市・二宮	二田天物部命（ふたたのあめのもののべ、ニギハヤヒの天降りに供奉した「天物部等二十五部人」の筆頭）
佐渡	度津神社（わたつ）	新潟県佐渡市飯岡・一宮	主祭神：五十猛命（いたける）- 素戔嗚尊の子 配神：大屋津姫命（おおやつひめ）- 五十猛命の妹神、抓津姫命（つまつひめ）-五十猛命の妹神
	大目神社（おおめ）	佐渡市吉岡・二宮	・大宮売神（おおみやのめ、太玉命の子）、大己貴命
	引田部神社（ひきたべ）	佐渡市金丸・三宮	大己貴命、猿田彦命

筑前	住吉神社（すみよし）	福岡県福岡市博多区住吉・一宮	祭神は次の5柱で、これら「住吉五所大神」とも総称す 主祭神：住吉三神（底筒男命（そこつつのお）、中筒男命（なかつつのお）、表筒男命（うわつつのお））　2配祀神：天照皇大神、神功皇后
	筥崎宮（はこざきぐう）	福岡県福岡市東区箱崎・一宮」	主祭神：応神天皇 配祀神：神功皇后、玉依姫命
築後	高良大社（こうらたいしゃ）	福岡県久留米市・一宮	正殿：高良玉垂命 - もともと高御産巣日神 左殿：八幡大神 、右殿：住吉大神
豊前	宇佐神宮（うさじんぐう）	大分県宇佐市・一宮	主祭神は以下の3柱。 一之御殿：八幡大神 - 誉田別尊（応神天皇）とする 二之御殿：比売大神 - 宗像三女神（多岐津姫命・市杵島姫命・多紀理姫命） 三之御殿：神功皇后 - 別名として息長足姫
豊後	柞原八幡宮（ゆすはらはちまんぐう）	大分市・一宮	仲哀天皇、応神天皇、神功皇后
	西寒多神社（ささむたじんじゃ）	大分市・一宮	主祭神（本殿）：西寒多大神（ささむた）天照皇大御神、月読尊、天忍穂耳命の総称 相殿神：応神天皇、神功皇后、武内宿禰 殿内所在諸神：伊弉諾大神、伊弉册大神、大直日大神、神直日大神、天思兼大神、大歳大神、倉稲魂大神、軻遇突、智大神、天児屋根命、経津主神
肥前	與止日女神社（よどひめ）	佐賀市・一宮	與止日女命（よどひめのみこと）神功皇后の妹という。また一説に、豊玉姫であるとも伝える
	千栗八幡宮（ちりくはちまんぐう）	佐賀県みやき町・一宮	主祭神：応神天皇、仲哀天皇、神功皇后
	天山神社（てんざん）	佐賀県小城市小城町・三宮	多紀都昆賣命、市寸島昆賣命、多紀理昆賣命
肥後	阿蘇神社（あそじんじゃ）	熊本県阿蘇市・一宮	阿蘇十二明神：一宮：健磐龍命（タケイワタツ）- 第1代神武天皇の孫、二宮：阿蘇都比咩命 - 一宮の妃、十一宮：國造速瓶玉神 - 一宮の子。阿蘇国造の祖
	甲佐神社（こうさじんじゃ）	熊本県甲佐町・二宮」	主祭神：八井耳玉命（ヤイミミタマノミコト、甲佐明神健磐龍命の子）　配祀：健磐龍命、蒲池比咩命（カマチヒメノミコト）、神倭磐余彦命（カムヤマトイワレヒコノミコト）、媛蹈鞴五十鈴媛命（ヒメタタライスズヒメノミコト）
	藤崎八旛宮（ふじさきはちまんぐう）	は、熊本県熊本市中央区・三宮	応神天皇を主祭神とし、神功皇后・住吉三神を相殿に祀る
日向	都農神社（つの）	宮崎県都農町・一宮	大己貴命　（おおなむちのみこと）
	都萬神社（つま）	宮崎県西都市・二宮	木花開耶姫命（このはなさくやひめ）「都万」は「妻」のことで、木花開耶姫命が瓊々杵尊の妻であることによる
大隅	鹿児島神宮（かごしまじんぐう）	鹿児島県霧島市・一宮	主祭神：天津日高彦穂々出見尊（山幸彦）、豊玉比売命 - 天津日高彦穂々出見尊の后神　　相殿神：仲哀天皇 、神功皇后、応神天皇）、中比売尊（仲姫命）- 応神天皇の皇后。同上、**太伯 - 呉の祖**
	蛭児神社（ひるこ）	鹿児島県霧島市・二宮	蛭児尊（ひるこのみこと）
薩摩	枚聞神社（ひらきき）	鹿児島県指宿市・一宮	主祭神大日孁貴命（天照大神）、配祀神：五男三女神
	新田神社（にった）	鹿児島県薩摩川内市	天津日高彦火邇邇杵尊、天照皇大御神、正哉吾勝々速日天忍穂耳尊

壱岐	興神社（こうじんじゃ）	壱岐市・一宮	足仲彦命 （仲哀天皇）、息長足姫命 （神功皇后）
	天手長男神社（あめのたながが）	壱岐市・一宮	天忍穂耳尊、天手力男命、天鈿女命
	聖母宮（しょうもぐう）	壱岐市勝本町・二宮	息長足姫尊（神功皇后）と足仲彦尊（たらしなかつひこ。仲哀天皇）と住吉三神
対馬	海神神社（かいじん）	対馬市・一宮	主祭神：豊玉姫命 配祀神：彦火火出見命、宗像神、道主貴神、鵜茅草葺不合命
	厳原八幡宮神社（いづはら）	対馬市・一宮	応神天皇、神功皇后、仲哀天皇、姫大神、武内宿禰

大和	社名	祭神	備考
桜井市	大神神社（おおみわじんじゃ）（別称：三輪明神、三輪神社）	主祭神： 大物主大神 （おおものぬしのおおかみ、倭大物主櫛甕玉命） 配神[編集] 大己貴神 （おおなむちのかみ） 少彦名神 （すくなひこなのかみ）	『記紀』には、次の記述がある。大国主神（大己貴神）は少彦名神とともに国造りをしていたが、大国主が、「お前は小さな神だな」と愚弄したために国造りなかばにして少彦名神は常世に帰ってしまった。大国主神が「この後どうやって一人で国造りをすれば良いのだ」と言うと、海原を照らして神が出現した。その神は大国主の幸魂奇魂（和魂）であり、大和国の東の山の上に祀れば国作りに協力すると言った。その神は御諸山（三輪山）に鎮座している大物主神である。
磯城郡田原本町	多坐弥志理都比古神社（おおにますみしりつひこ）（別称：多神社（おお））	第一社 神倭磐余彦尊（神武天皇：神八井耳命の父） **第二社 神八井耳命** 第三社 神沼河耳命（綏靖天皇：神八井耳命の弟） 第四社 姫御神（玉依姫命：神八井耳命の祖母）	多氏の拠点であり、多氏の祖神である神八井耳命を祀ったものとみられる。社名の通りであれば弥志理都比古（みしりつひこ）を祀る神社ということになるが、これは神八井耳命のこととされる。神武天皇の長子でありながら弟に皇位を譲ったので、「身を退いた」という意味で「ミシリツヒコ」とも呼ばれる。
生駒郡斑鳩町	龍田神社（たつたじんじゃ）	主祭神：天御柱命・國御柱命配祀：龍田比古神・龍田比女神	聖徳太子が法隆寺の建設地を探し求めていたときに、白髪の老人に化身した龍田大明神に逢い、「斑鳩の里こそが仏法興隆の地である。私はその守護神となろう」と言われたので、その地に法隆寺を建立し、鎮守社として龍田大明神を祀る神社を創建したという。
生駒郡三郷町	龍田大社（たつたたいしゃ）旧称は「龍田神社」	祭神：天御柱命（あめのみはしらのみこと）と国御柱命（くにのみはしらのみこと） （風の神（風神）として信仰を集める）	龍田の風神と総称され、広瀬の水神と並び称された。同社の祝詞などでは、天御柱命は級長津彦命（男神）、国御柱命は級長戸辺命（女神）のこととされている。崇神天皇の時代、数年に渡って凶作が続き疫病が流行したため、天皇自ら天神地祇を祀って祈願したところ、夢で天御柱命・国御柱命の二柱の神を龍田山に祀れとのお告げがあり、これにより創建されたという。
北葛城郡河合町川合	広瀬大社	若宇加能売命（わかうかのめのみこと） 「廣瀬大忌神（ひろせおおいみのかみ）」とも。社伝では伊勢神宮外宮の豊宇気比売大神、伏見稲荷大社の宇加之御魂神と同神とする。龍田大社の龍田風神とも関係があるとしている。	鎮座地は、高田川と一緒になった曽我川・大和川・飛鳥川など奈良盆地内を流れる河川のほとんどが合流する地点であり、このことから水神を祭る。社伝では、崇神天皇9年、広瀬の河合の里長の廣瀬臣藤時に託宣があり、水足池と呼ばれる沼地が一夜で陸地に変化しタチバナが数多く生えたことが天皇に伝わり、その地に大御膳神として社殿を建てて祀ったのに始まるとしている。龍田の風神・広瀬の水神として並び称された。
天理市	大和神社（おおやまと）	中殿：日本大国魂大神 左殿：八千戈大神 右殿：御年大神	大倭直の祖・市磯長尾市（いちしのながおち）を祭主として、神地が定められ鎮座・創建された。 この伝承から、ヤマトノオホクニタマを地祇とする性格をはっきりさせた。
宇陀市	八咫烏神社（やたがらすじんじゃ）	祭神：建角身命（八咫烏）	建角身命は、山城の賀茂氏（賀茂県主）の始祖であり、賀茂御祖神社（下鴨神社）の祭神。賀茂建角身命は神魂命（かみむすびのみこと）の孫である。神武東征の際、高木神・天照大神の命を受けて日向の曾の峰に天降り、大和の葛木山に至り、八咫烏に化身して神武天皇を先導した。 『山城国風土記』（逸文）によれば、大和の葛木山から山代の岡田の賀茂（岡田鴨神社がある）に至り、葛野河（高野川）と賀茂河（鴨川）が合流する地点（下鴨神社がある）に鎮まった。
奈良市	漢國神社（かんごうじんじゃ）	園神（そのかみ）として大物主命、韓神（からかみ）として大己貴命・少彦名命を祀る。園神社・韓神社は当社からの勧請。	推古天皇元年（593年）2月3日、勅命により大神君白堤（オオミワノキミ シラツツミ）が園神を祀ったのに始まると伝える。その後、養老元年（717年）11月28日、藤原不比等が韓神二座を相殿として合祀したという。かつては春日率川坂岡神社あるいは園韓神社と称していたが、韓神の韓が漢に、園神の園が國となり、「漢國神社」という社名になったと伝える。
大和高田市片塩町	石園座多久虫玉神社（いわそのにいますたくむしたま）。通称竜王宮として地元住民からは篤く信仰。	建玉依比古命・建玉依比賣命を主祭神とし、豊玉比古命・豊玉比賣命を配祀。建玉依比古命とは、賀茂別雷神社（上賀茂神社）摂社・土師尾社や日吉大社摂社・樹下若宮に祀られる鴨玉依比古命のこととされる。ただし、社名からは、本来の祭神は「多久虫玉神」ということになる。『大和の神祭祀』（田中昭三 編著）では、当社の本来の祭神は多久都玉命と下照姫命。	横大路に沿うように、大神神社を龍の頭、石園座多久虫玉神社を龍の胴、葛城市の長尾神社を龍の尾とする伝承。 創建年代は不明であるが、第三代安寧天皇の時代の都である片塩浮穴宮跡の伝承地に鎮座している。崇神天皇の時代に勅祭が行われたと伝えられる。延喜式神名帳では「大和国葛下郡 石園坐多久虫玉神社 二座」と記載され、大社に列し、月次・新嘗の幣帛に預ると記されている。 古くは「射園神：いそのかみ」と呼ばれたという。石上神宮がある石上（いそのかみ）と何らかの関係があるのか興味深い。また、宮中に祀られていた園神神社と関係があるとの説もある。
葛城市	長尾神社（ながおじんじゃ）（葛下郡の総社）。	主祭神は天照大神（あまてらすおおみかみ）、豊受大神（とようけのおおみかみ）。祭神は水光姫命（みひかひめのみこと）、白雲別命（しらくもわけのみこと）。	水光姫命は『日本書紀』で神武天皇東征に際し吉野川上（奈良県川上村井光）に巡幸の際、井戸の中から現れた国神（くにつかみ）として記される井氷鹿で、水神・井戸の神である。古事記や日本書紀によると、光って尾が生じていたと記されている。新撰姓氏録では「吉野氏の祖先で、天白雲別命の娘・豊御富登であり、水光姫の名は神武天皇が授けられたもの」としている。
御所市	高鴨神社	阿治須岐高日子根命（迦毛之大御神）を主祭神とし、下照比売命・天稚彦命を配祀	京都の賀茂神社（上賀茂神社・下鴨神社）を始めとする全国のカモ（鴨・賀茂・加茂）神社の総本社と称する。当地は鴨氏一族の発祥の地であり、その氏神として祀られたものである。鴨氏はこの丘陵から奈良盆地に出て、葛城川の岸辺に移った一族が鴨都波神社を、東持田に移った一族が葛木御歳神社を祀った。後に、高鴨神社を上鴨社、御歳神社を中鴨社、鴨都波神社を下鴨社と呼ぶようになった。
吉野郡天川村坪内	天河大弁財天社（てんかわだいべんざいてんしゃ、天河神社）	宗像三女神の一人、市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）を主祭神	元の祭神名は弁財天（サラスヴァティー）で、神仏分離により「市杵島姫命」と称するようになったものである。今日でも社名に「弁財天」とついている通り、「弁財天」としても信仰されている。「厳島、竹生島と並ぶ日本三大弁財天のひとつ」と称している。
御所市北窪	高天彦神社（たかまひこ）	高皇産霊神（たかみむすびのかみ）	社名・神名の「高天（たかま）」は一帯の地名でもあり、神話に見える高天原の伝承地とする説が古くからあるほか、高皇産霊神の神名の転訛が由来とする説、高皇産霊神の別名が「高天彦神」とする説、「高間」すなわち金剛山中腹の平地を意味するとする説がある。
宇陀市榛原萩原	墨坂神社	御祭神 墨坂大神 神武天皇御遷都の砌大合戦の墨坂 の地に祭祀せられていた大神	崇神天皇の御代、悪病流行し、人民死に絶えようとした時、大物主神が、天皇の夢に現れ墨坂の神に赤色の盾矛を、大阪の神に黒色の盾矛を以て祀れとの神託あり。教えに従ったところ、悪病が止んで民平穏となったとある。（大阪の神とは、大坂山口神社だと思う）